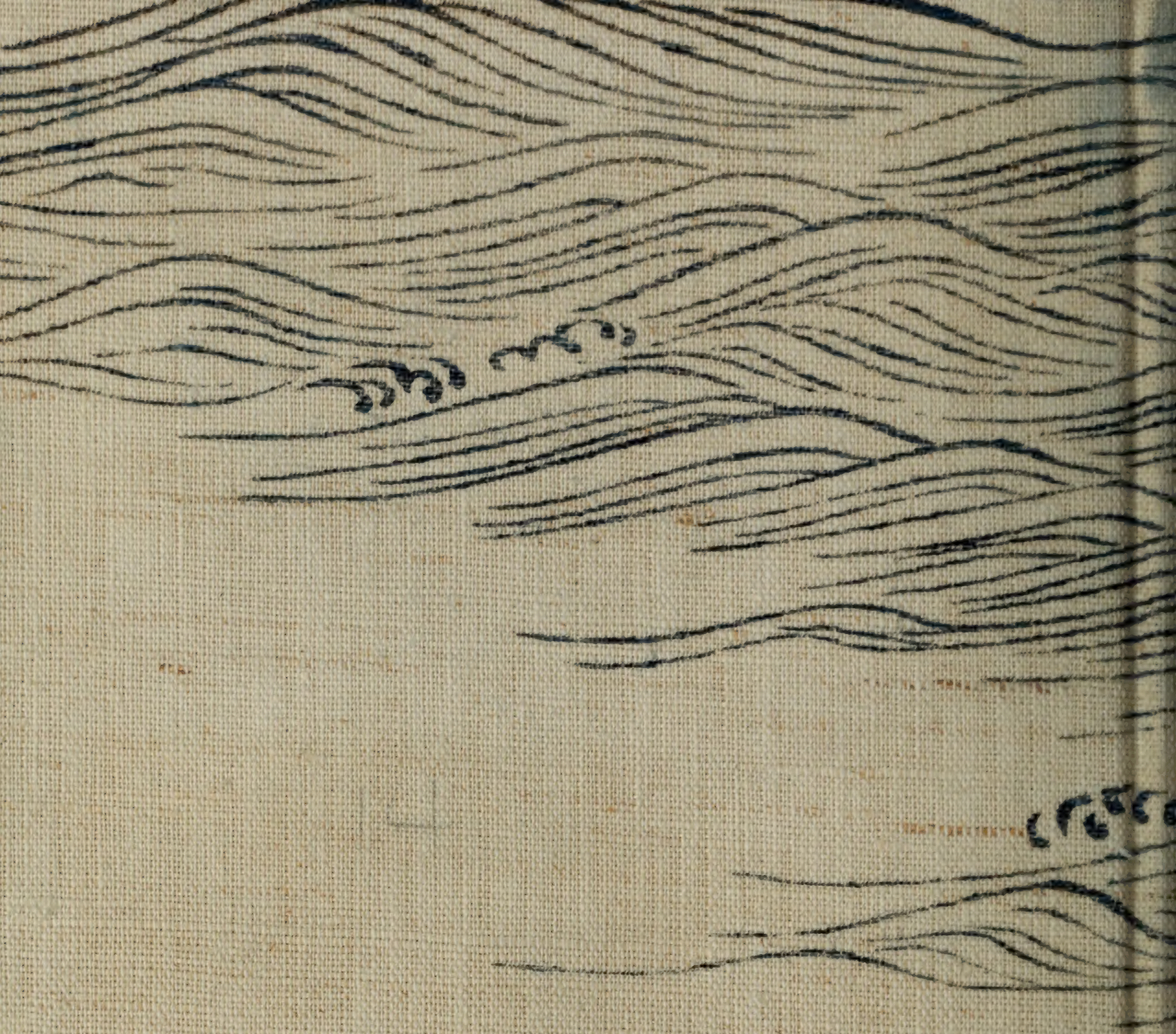


PL
810
A9
1924
v.14

Kawatake, Mokuami
Mokuami zenshū

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY



黙阿弥全集

第十四巻

解説

默阿彌五十歳頃（慶應頃）の尺牘の一である。

「花墨拜讀僉御安泰奉祝壽候　扨今日御招に預り難有新年之御祝儀旁〻參上致し舊年中之御禮申上度存候得共何分に茂書物上り兼每夜七ツ頃迄書物致し十日迄に是非々々との約束に而誠に困入候處故甚恐入候得共參上致し兼候間乍殘念御高免願上候・書物片附次第參上萬々御禮御詫可申上候　先は御報迄草々不備

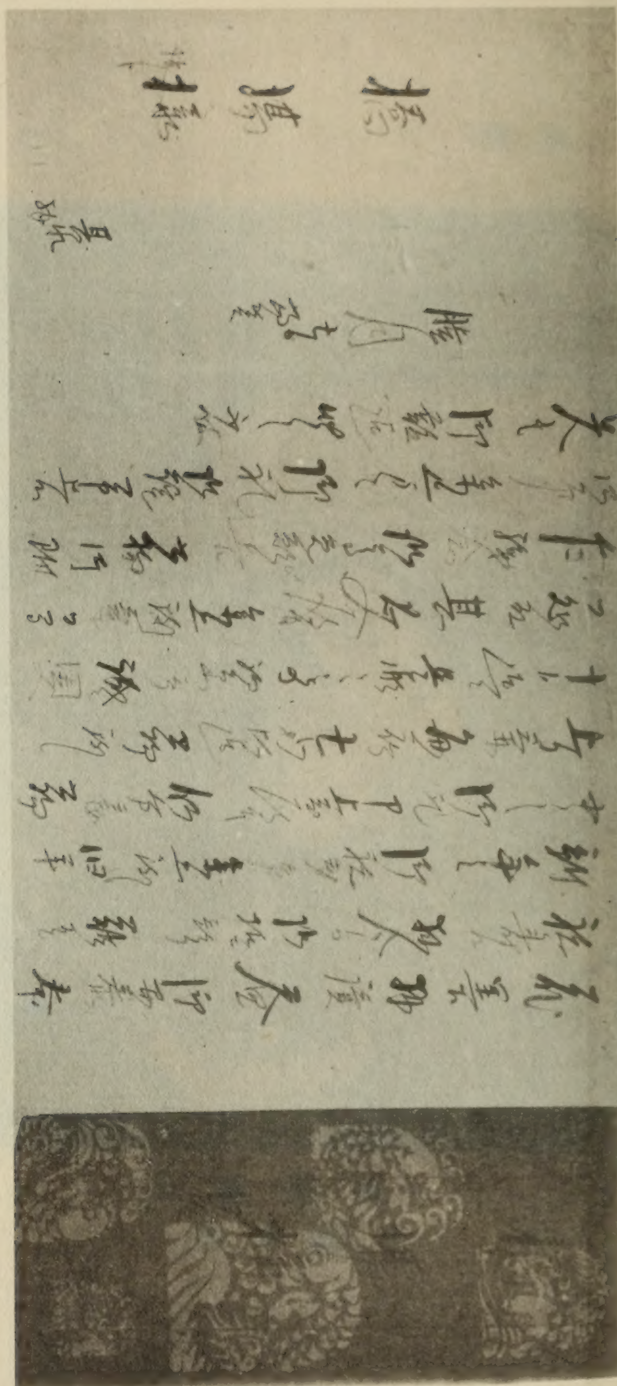
睦月七日　　　　　　　　　　　　　　其水拜

當賀

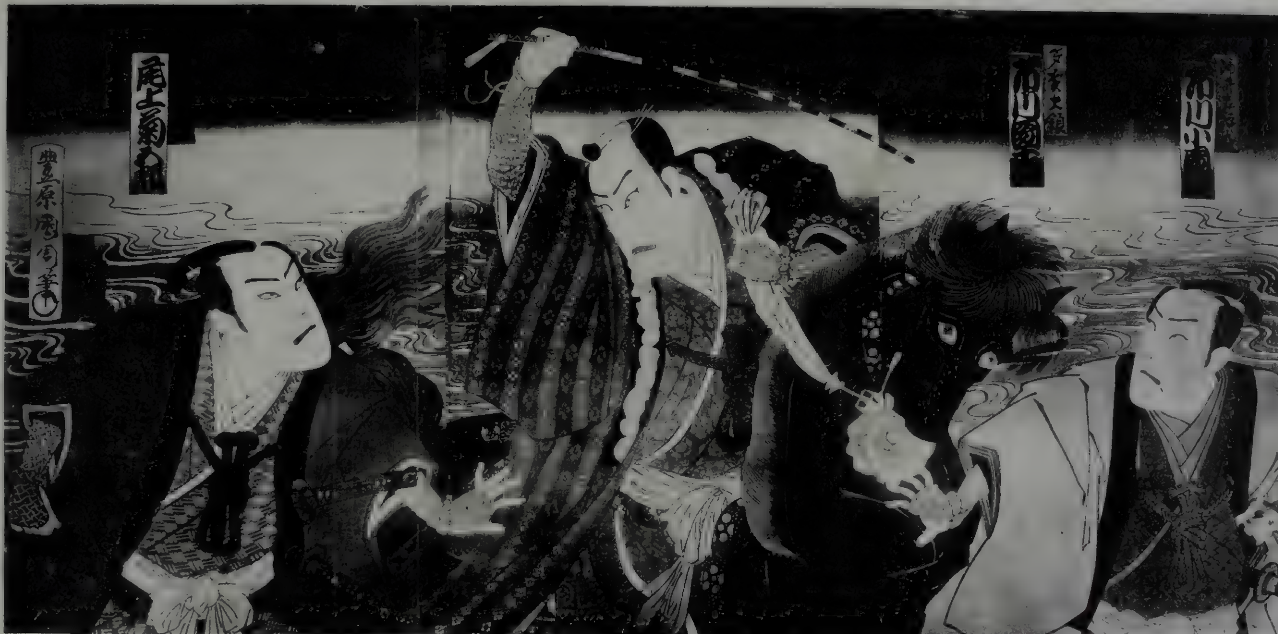
橋場様

悟下

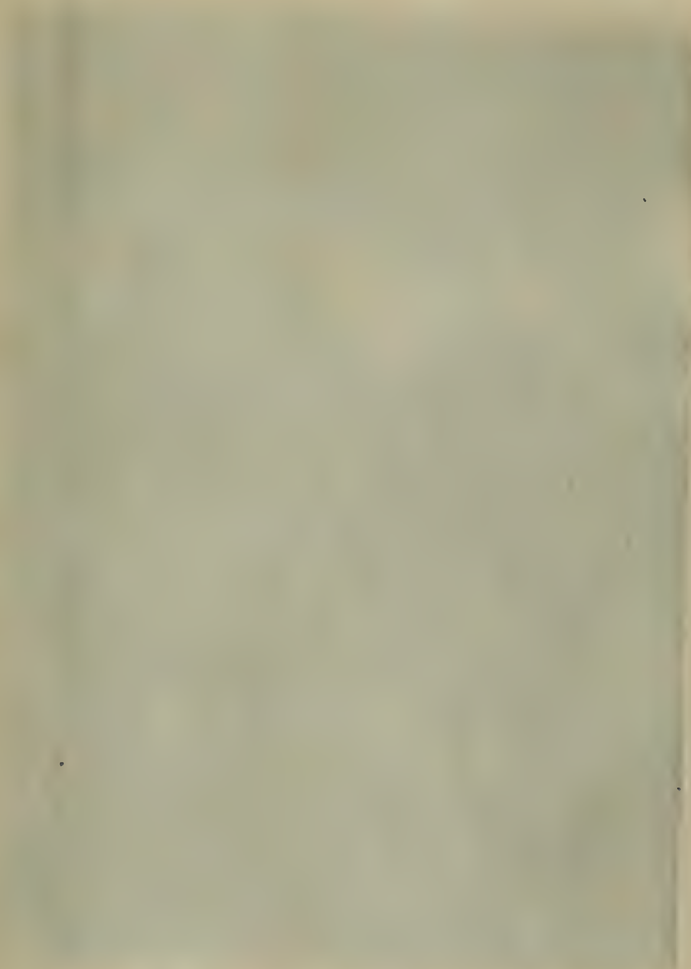
「橋場様」とあるのは、晝合せの會の保護者であつた、銀座役人辻氏のことで、橋場に別莊があつたから、橋場様と尊稱したわけ。從つて文句も少し改まつてゐる。其水は默阿彌の俳名である。右方に貼り添へてある狀袋は津藤香以山人の好みで作つたもの。



筑摩川の水馬　（國周筆）



浦井左源太（小團次）　加賀大領（團十郎）　大槻藏人（菊五郎）



河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集 第十四卷

東京 春陽堂刊行

LIBRARY
FEB 16 1968
UNIVERSITY OF TORONTO

PL
810
A9
1924
v.14

默阿彌全集　第十四卷目次

挿繪目次

日月星享和政談

其頃名譽三奉行

是は寛政文化の年間名に大阪の浪花屋へなさけ有馬の湯治場から馴染になりし内藏之進が千兩盗みし宵の口千太と共に更行空異見も聞かで附きまとふおころに是非も中津川思はぬ賊の捕物に六兵衛親子が非業な水死憂を宮川牛之助が菩提の爲の延命院秘密の加持も柳全が勸めに墮落の床の内濡れし袷を星右衛門が闇き其身に五十兩ゆすり取れし馬吉に二度の出合も谷中の裏道裏の裏行く竹川と兄笹川が智略の捌きに後の噂と鳴鐘も淺草田圃の七兵衛が娘お竹と常三郎の中へ持込む惡樽もしらの勢ひに曇りなき月見の文次が手切の金さらりと蒔いた小判の落葉にむかし分限の宗右衛門が娘と共に坂東順禮五年ぶりにて大阪屋モウこれ迄と喜八お咲が覺悟を死出の仕おき場に惡人ほろびて善人の榮

『延命院』は明治十一年十月、新富座に書卸された、六十三歳の時である。延命院の譚話は實錄にも作られてゐるし、久保田彦作が假名讀新聞紙上に連載したる「菊種延命袋」をも参酌して脚色せられたものであつた。新聞の續き物を劇化して上場したのは、この時を以て嚆矢とする由である。名題に日月星と冠したのは、延命院日當、月見の文次、曉星右衞門の各一字を取り、且つ一方團、菊、左の三頭領を日月星と見立てた意味も籠つてゐた。菊五郎の日當と仲藏の柳全は全篇を通じて出色の舞臺を見せた。

書卸し當時の役割は、市川團十郎(笹川幸十郎、野村內藏之進實は曉星右衞門)、尾上菊五郎(旅役者宮川牛之助後に延命院日當、非人小栗の馬吉)、市川左團次(鳶の者月見の文次)、中村宗十郎(秋坂淡路守)岩井半四郎(六兵衞娵おころ)、中村仲藏(浪花屋宗右衞門、岩淵柳藏後に柳全)、坂東家橘(近江屋息子常三郎)、市川小團次(若黨吾助實は宵の口の千太)、中村鶴藏(非人七兵衞、引手茶屋の後家おきせ)、岩井小紫(奧女中竹川實は笹川妹おむら)岩井しげ松(近江屋女房おみさ)、市川團右衞門(眞葛六太夫)、尾上梅五郎(非人九郞藏)、尾上菊之助(浪花屋娵おあい)等であつた。

挿繪にしたのは、大正五年九月市村座に於て、菊五郎、吉右衞門、松助等によつて上演された時の舞臺寫眞(菊五郎の牛之助と菊次郎のおころ)である。

大正十四年四月　　　　校訂者



日月星享和政談（延命院——七幕）

序幕

曾根崎緑屋の場
天滿浪花屋の場
梅田村小橋の場

〔役名——宮川牛之助、野村内藏之進實は盜賊曉星右衞門、浪花屋宗右衞門、若黨吾助實は曉手下宵の口千太、火打石賣り六兵衞實は直葛六太夫、浪花屋の番頭善六。六兵衞娘おころ、浪花屋の妾おみつ、同娘おあい、其他。〕

（曾根崎緑屋の場）——本舞臺四間常足の二重、本庇本椽附、眞中一間の暖簾口、上手の壁へ一面に聯を掛け、下手一間の落間、爰へ立派な銅壺、上に茶釜を掛け、後ろ茶道具棚、軒口に緑屋と記せし長暖簾、平舞臺に床几を並べ、下手板塀屋根付の門、柱に御立場緑屋としたる聯を掛け、上手松の大樹、日覆より同じく釣枝、總て大阪曾根崎立場茶屋の體。爰に浪花屋の手代與助太七、羽織着流し、鳶の者半七大工伊太郎、左官倉吉、家根屋福松等、何れも出入職人の拵へにて床几に掛け、着流し前掛の茶屋亭主松兵衞、下女おやま、おふさ茶を銘々へ出して居る。此の模樣大阪放れての唄へ、大拍子を冠せし鳴物にて幕明く。

松兵　今日は此先の八幡さまで、二十五座の御神樂がござりますよ。

太七　八幡さまの御祭禮は、もう先月濟んだ筈だが、外に臨時祭かね。

半七　番頭さん、お祭は濟みましたが、今日は朔日でござりますから、それで神樂が上るのでござります。

伊太　わしなども三日は、幾ら仕事が立込んでも前びろから操合して、一日樂をやりますが、

倉吉　その故かしてついに一度、帳場で書き違ひをした事もなし、怪我を一度しませぬが、

福松　わしの家業の家根屋ばかりは、喰物を氣を付けないと腹をやるので一番險難だ。

與助　成程家根屋さんの生業は腹鹽梅が悪い時は、仕事に出ても家根の上から上つたり下りたりして、第一仕事が捗が行くまい。

半七　假令あした仕事に出ずとも、三日なり、出入場の旦那が有馬の湯治場から、

伊太　お歸りになることだから、今朝はお神酒を上げずにゐられぬ。

松兵　お羨しいのは旦那の御身分、毎年土用の暑さを避けに、有馬へ湯治にいらつしやるが是れが何より御養生、その御養生といへば、當年もやはりお妾のおみつさまは、御一緒でござりますか。

與助　一緒とも〳〵、ちよつと住吉天滿の天神、祇園、清水、智恩院、どこへ行くにもお妾つき。

太七　まして湯治は泊りがけの、遊山半分出掛ける先ゆゑ、なか〳〵お妾のおみつさんは、内へ殘して行かれぬから、毎年きつと御一緒さ。

倉吉　江戸に居る時旦那さまの、お供で箱根へ湯治に行たが、いくら有馬が繁華でも箱根には叶ふまい。

松兵　いや、それはあなたが東の方ゆゑ、故鄕に近い箱根を褒めるが、又有馬の溫泉は箱根など〻は事替り、祇園あたりで立派に賣れる、舞子衆にも勝つたる湯女が澤山をるばかりも、先づ一つの御保養で、それがこつちの掛合次第でお寢間のお世話も致しまする。

やま　まだそればかりぢやござんせぬ。此大阪から夏になると、義太夫の太夫衆や又は話し家講釋師。

ふき　人形芝居や仕方話しの、藝人衆が入込めば、どんなよい所でござんせう。

福松　おれは此土地の生れだから、有馬へ一度湯治に行つたが、あんな所は江戸にもあるまい。

半七　福は生れが上方だから、自分の土地を褒めるけれど、おれも伊太も江戸ッ子だぞ、そんなに江戸を惡く言ふない。

福松　違えねえ、こいつあ一番降參だ。

松兵　さういふ内に旦那さまが、もう間もなくお着きになりませう。（ト下女に思入あつて）これ、そこらを片付けて置くがいゝ。

やま
ふさ　はい／＼。

ト兩人は四邊を片付ける。皆々は煙草を呑みゐる。やはり右の鳴物にて、花道より浪花屋宗右衛門少し更けたる町人、一本差し旅裝、跡より妾おみつ浴衣の上つ張り、やはり旅裝。荷持の友七草鞋がけの供にて、兩掛を擔ぎ出來り、花道に留り。

宗右　これおみつ、向ふの立場に大勢ゐるのは、出入の職人ぢやあねえか。

みつ　はい、職人衆も居りますが、見世の衆も見えますわいな。

友七　あれは大方旦那さまが、お着になるのでお迎ひでござりませう。

宗吉　迎ひに出ずともいゝことを、大仰になつて惡いの。

みつ　それでも吉例でござりますから、參りましたのでござりませう。

宗右　吉例なら大勢來ずとも、千助か太助で濟むものを、皆に氣の毒千萬だ。

トやはり右鳴物にて舞臺へ來る。此内皆々心付き、下手へ出迎ひ、捨ぜりふにて宗右衛門、おみつ二重へ上りよろしく住ふ。友七は兩掛を下し、皆々上下の床几へ掛け、茶屋の女中二人煙草盆、茶を出す。

與助　旦那さまには御別條なく、先はお着になりまして。

皆々　一統お目出度うござりまする。（ト皆々挨拶をする。）
宗右　皆の衆も相變らず、能く迎ひに來て下すつた。大きに御苦勞でござりました。
松兵　毎年相變りませず、お立寄りになりまして、誠に有難う存じます。當年も大分暑中は蒸しましたが、湯治場は定めしお凉しうござりましたらう。
宗右　暑さ忘れに毎年暑中は有馬へ湯治に出かけますが、日中などは市中と同じくやつぱり暑さは強いけれど、只取柄なのは夜になると、山添ひ故めつきりと陽氣が變つて凉しくなります。
みつ　その代りよい事には、暑いと言つては湯にはひり、凉しいと云つては湯にはひり、わたしなどは初めの日は十度程はひつたので、あくる日はだるうござりましたわいな。
友七　わたくしも毎日々々十五六度づゝ、風呂へはひつてをりましたが、同じ倦いでも、おなたのは兩方でござりますから、餘計にお倦うござりましたらう。
みつ　えゝも餘計に倦いもないものだ。お前も湯女のおはまさんへ厭らしい事をしたではないか。
友七　いや、是れは面目ない。あれは打たれぎりでござりました。
與助　友七どんは凝り性で何でも女を見さへすれば、直に熱くなりますので、内でも親御が案じてをります。

松兵　あつくなると申せば、此頃ではめつきりお涼しくなりましたので、もう袷でよろしうございます。

宗右　市中でさへもそれだから、湯治場などは涼しい筈だ。昨日今日になつては日中でも袷で涼しい位であつた。

松兵　丁度能い時分のお歸りになつて、定めし道中もお樂しみでございましたらう。

みつ　樂しいどころではございませぬ。僅か十三里の道程を、二日がゝりでお歸り故、少しも草臥れはしませねわいな。

太七　昨年は湯治場で旦那のお好な二字や車が大分流行だとおつしやいましたが。

半七　今年もやつぱり雜俳でございましたか、それとも音曲でございましたかな。

宗右　去年來た雜俳の點者が、今年は出て來ない故、一中節の義太夫のと種々おみつに勸められたが、音曲もぱつとせず、何んぞ外に遊びがあらうと思つたところへ、丁度いゝ相手が出來て思ひがけない樂しみをして遲くなつた。

與助　思ひがけない樂しみが旦那に出來たとおつしやるのは、太七どんなんであらうの。

太七　先づわたしの思ふところは、別品の湯女でもありましたかね。

半七　そりや大きに御目鏡違ひ、わしは大好きだから大方旦那は川柳でござりませう。
伊太　いや、おれは投扇興だらうと思ふ。
倉吉　なあに、おれは腕押しか臑押しと札を入れる。
太七　どうして〳〵大違ひだ、不斷私が大好きなものだ。
福松　あれ、それぢやあ大方家根やだらう。
半七　そりやあおめへの生業の事だ。は、、、、。
みつ　いえ〳〵、皆な違ふわいな。
與助　さうしてお樂しみと、おつしやいますのは。
皆々　どういふ事でござりましたな。
宗右　その樂しみといふのは、日頃好きな碁の相手が出來たので、毎日朝から戰ひさ。
太七　へえさやうでござりましたか、して其相手はどちらのお方でござりますな。
宗右　やつぱり大阪からお出でになつた、阿州さまの御藩中で、當時御藏屋敷の御役人野村内藏之進さまといふお方。
みつ　丁度旦那とお相碁でそのお方さまも御供きり故、毎日こちの座敷にて間がな隙がな碁ばかり打つ

て、どんなにお合口でありましたらう。

松兵　御役人方も土用中は、お勤めがお樂と見え、大分湯治にお出かけで私共へも上下共、お立寄りでござりますが、もう涼氣になりますので、定めし御一緒でござりませう。

宗右　されば、戻りは御一緒とお約束をしたところが、四五日跡に其お客がわしの座敷で相變らず碁を打つておいでの留守、御所持の金を賊に取られ、御心配が出來たので、急に先へお立ちになりました。

松兵　それは何にしろお氣の毒な事でござりますが、まあ旦那さまでござりませぬで何より仕合せでござりました。

與助　いや、現金な御亭主だ。はゝゝゝ。

　　ト、やはり大拍子、大阪はなれの唄にて、花道より若黨吾助旅裝にて出來り、

吾助　浪花屋の主人が毎年寄る曾根崎の綠屋へ行けば、慥に逢ふに違ひないと、有馬で聞いて一本鎗、跡を慕つて爰迄來たが、どうか立場にゐればよいが。（ト舞臺へ來り、宗右衛門を見て、）あゝ御主人、是れにおいでなさいましたか。

宗右　おゝ是れは吾助殿でござりますか。まあ〳〵こちらへお掛けなされませ。

吾助　眞平御免下さりませ。（ト吾助下手の二重に腰を掛け、）まだ湯治場においでと存じ、藏屋敷よりとつて返し、金子返上に參りしところ、最早御出立と承り、始終お立の跡へ〳〵と、やう〳〵是れにてお目に掛りました。

やま　お一つお上りなされませ。（ト茶を出す。）

宗右　して御歸宅の其後は、賊の手懸りはござりませぬかな。

吾助　只今以て一向に、その手懸りは知れませぬ。

松兵　さやうならばあなたさまも、やはり賊にお逢ひなさいましたか。

宗右　此お方の旦那さまが、今話した御藏屋敷の野村さまとおつしやるのだ。

松兵　へえ、さやうでござりましたか。

吾助　その砌はあなた樣の御厚情に預りまして、御蔭さまで歸宅いたし、主人に於ても大慶至極、厚く御禮を申しくれと、則ち借用金三十兩御返上致しまする。

ト懷中より金包を出し、宗右衞門の前へ置く。

宗右　態々御持參なされずとも、何時でもよろしい金子をば、却つて恐入ります。

吾助　大阪表へ戻りましたその翌日、金子をば直樣御返上致し參れと、申し付りて湯治場迄參りまして

ござりまする。
みつ　野村さまは物堅いお方さま故、湯治場迄わざ〳〵持たせてお遣はしとは、ほんにお氣の毒な事でござりまする。
與助　して賊にお逢ひなされましたは、お座敷内だと承りましたが、
太七　どう言ふ事でございましたな。（ト合方きつぱりとなり、）
吾助　さればでござりまする。主人は日々浪花屋の御主人のお座敷へ、圍碁の勝負に參られし跡、座敷の骨柵へ〆まりを附け、一寸入湯致す内何れよりか忍び込み、錠を捩切り金入を、盜み參りしその跡へ戻つて見れば其始末、彼處よ爰と尋ぬる内折惡しく大阪より、急御用の狀が參り、早速路用に差支へ無據不快屆と決定致して私は、大阪表へ金子を取りに出立致す其折に、御主人より御貸し下されし三十兩の金子にて、不快屆も致さずに、事なく歸宅いたしてござる。
與助　それはとんだ御災難、しかし我々風情と違ひ、あなた方は其場から直に金子を取りに行くお手當がござりますが外の者なら其場で乞食。あゝ危ない事でござりまする。
宗右　湯治などは諸方から人の入込む所故、少しの間も油斷は出來ぬが、今年は取分け賊が多く、醫者などに姿を變へ、藥を押賣致す奴がまゝあると申しますから、知らぬものゝ親切にうつかり乘る

と飛んだ目に逢ひまする。

松兵　かうして見世を張つてをつても、皆道中の客が相手、茶代の取損ひは折々の事でござりまする。

ト吾助思入あつて、

吾助　定めし主人も待兼ねて居ませうから、最早お暇仕る。

宗右　只今ちよつと請取を、認めて差上げます。

吾助　いゝえ決してそれには及びませぬ。あなたにお渡し申せし上は、是れが何より慥でござる。

宗右　さやうなら慥にお受取り申しました。

みつ　どうぞ旦那さまへ、よろしうお傳へ下さりませ。

吾助　お歸りのむきを申聞けなば、御禮旁々お悦びに、お宅へ出るでござりませう。

宗右　手前よりも是非近日、伺ひまするでござりまする。

吾助　さやうなればお二人さま。（ト立上る。）

宗右　どうぞよろしう願ひまする。

吾助　畏りましてござりまする。

ト矢はり右の鳴物にて吾助花道へはひる。宗右衛門思入あつて、

宗右　同じ大阪にゐるもの故、戻つてからでよいものを、態々有馬へ遣はすとは、扨々物堅いお人である。御藏屋敷の御役人でもあゝいふお方は珍らしい

みつ　今御家來がお話しにも、是非尋ねるとおつしやる故、きつとお出でゞござんせうわいな。

宗右　あゝさうとも〳〵、少しも早く内へ歸り、その支度でもしたがよい。

與助　それに昨年より一週り、湯治がお長うござりましたので、お孃さんもお待ち兼ね。

太七　もうお立ちがよろしうござりまする。

ト此内宗右衛門紙入より祝儀包みを出し、おみつに渡す。

みつ　是れはお茶代でござんす。（ト出す。亭主前へ出て、）

亭主　これは相變らず有難う存じまする。まあ御ゆつくりと遊ばしませ。

半七　今日は目出度く旦那を送つて、今夜は置屋で景氣をつけよう。

倉吉　又あした仕事が出來るかえ。

亭主　又きまりで㒂けたがるぜ。（ト此内宗右衛門先におみつ下へおりる。）

やま　皆さま、お靜かに、

やま
ふさ　いらつしやいまし。

亭主　毎度有難う存じまする。

宗右　御亭主、大きにお世話でござりました。

　　トやはり右の鳴物にて、宗右衞門先に皆々捨ぜりふにて、わや〳〵言つて上手へはひる。

亭主　同じ人に生れても、浪花屋の旦那はい、御身分、それに引きかへお可愛さうなは、三年跡にお亡りの御新造さまは詰らない。今の騒ぎのお樂しみも遊ばさずにしまつたは、あれが所謂死ぬもの貧乏、然し今のお妾が心立のよいお人ださう故、お孃さんを可愛がれば、先の御新造もお悅びだ。

やま　旦那さん、そのお噂のお客さまで。

ふさ　今日はお悅びでござんせうわいな。（ト亭主茶代の祝儀を持ち、）

松兵　いや悅びとも〳〵、一服一錢の道者では、此大見世は張りきれないが、かういふお客が天の助けだ。どれ祝ていゝを納めて來よう。

　　ト松兵衞先に三人奥へはひる。合方ばた〳〵になり、上手より火打石賣り六兵衞、そぼろなる裝にて目籠へ附木、火打石を入れしを抱へ、是れを家主の與九兵衞、米屋の八十八、兩人にて引立て出來り直に舞臺へ來て、

六兵　まことにお二人樣には濟みませぬが、今日の所は幾重にも、お待ちなされて下さりませ。

與九　いゝや待たれねえの、今日は丁度商い先き故、今迄の手では騙されぬ。よくも是れ迄家主を一日一日と引延ばしたな。月々の店賃が骨が折れて出來ぬといふから、それもさうかと勘辨して、わづかな日掛けにして遣つたを、今日は延び、あすは延び、一月二月と滯る内、半年餘りの日掛けが滯り、只の一度も掛けぬといふは、此家主を何と思ふ。おぬしも根からの町人でもなし、四角な本を讀みながら理非の分らぬ事はあるまい。今日雨露に打たれぬのは誰のお蔭だと思つてゐるのだ。みんな家主のお蔭ぢやあないか。

八十　雨露に打たれぬのは、それはお家主のお蔭だらうが、又今日露命を繋ぐは、是れは米屋のお蔭であらう。正直さうな人だと思ひ、うか／＼貸したその高も、丁度つばめて金五兩、とても取れぬと思つたから、一層の事に三兩に負けてやらうと言つたのに、三兩の事はさて置いて一兩の工面も出來ぬといふから、そんならそれは置据で、是れから先は現金に買ひなさいと親切に言つた後がまた滯り、明日一緒に明後日一緒と、重荷に小附二三貫、ありやアどうして返す氣だ。

ト兩人急き立てゝ言ふ。

六兵　そのお腹立は御尤もでござります。外にもお借のある中に、取りわけお家主と米屋さまは、どのやうな事を致しましてもお返し申さにやならぬ筈で、是まで御無沙汰になりましたと申す譯は、日

がな一日賣りましても一把の附木がござりますれば、一月づゝも遣へるもの故、さう澤山は賣れもせず幾ら躍蹴歩いても、儲けの薄い商ひに、親子二人で一日の稼ぎの出來ぬは何事と、先立つものは愚痴ばかり、是れと申すもその昔、物事餘り十分に致しました其報いと、心に思ひ足る事を知つてはをれど其日に困り、ついあなた方へ不義理を致し、申譯もござりませぬが、今日のところは何れとも才覺をつけませうから、爰は往來今晩迄、どうぞお待ち下さりませ。

與九　いや、その今晩は懲り／＼だ。あたり近所は言ふに及ばず、身寄の所まで借り盡し、催促をするものはあるとも、百でも出來やう筈がない。

八十　今日商ひの出先きへ來たのも、その賣溜を貸の内へ、是非とも取らうと言ふつもりで、

與九　言ひ合せをして、

兩人　待つてゐたのだ。

六兵　さあそれも無理とは思ひませぬが、此賣溜を差上げては、明日賣る物の元手がなくなり、どうする事も出來ませぬ。實の所は今もつて、朝の御飯も喰べぬ仕儀、とあつて僅かな賣溜で食事を致せば今申す、明日の賣物に困ります故、どうぞ不憫と思召し、少々のうち私を、お助けなされて下さりませ。

八十　いや、そりやならねえ。江戸と違つて大阪では二季の拂ひに暮しよく、是迄繩を弛めて置いても
やつぱり同じ事を言つちやあ、是非ともけふの賣溜は、請取つて行かねばならぬ。
與九　さあ四の五のなしにこなたの財布を、たつた今二人に渡せ。（ト兩人六兵衞の手を捉へる。）
六兵　只今爰であなた方へ、此財布を上げましては、明日から路頭に迷ひまする。
與九　なに、夜盜にはひられてたまるものか。
八十　又大家さんが聾の早耳。
六兵　もし米屋さま、どうぞあなたからお家主へ御勘辨を願ひまする。これ、此通りでござりまする。
ト手を合せて拜む。
八十　さあ勘辨しめえものでもねえが、丸でなくとも半金を、今二人に渡されるか。
六兵　どうしてまあ半金などゝ。
與九　さあ、財布ぐるみ渡さねえか。（ト無性に急立てる。）
八十　金が出來ずば、財布を渡すか。
六兵　どうも是れを渡しては。
八十　それぢやあ外に半金返すか。

與九　えゝ、財布を渡さねえか。
六兵　さあ、それはッ
兩人　さあ。
三人　さあ〳〵〳〵。
與九　えゝ、面倒だ。財布の錢を取つてしまへ。
八十　それがいゝ〳〵。
ト六兵衛の懐より財布を引出す。是れを遣ろまいと支へろを八十八、六兵衛を引付け、與九兵衛財布を引出し、中より錢を出して二つに割ろ。
與九　さあ米屋さん、二つ割だ。（ト八十八へ錢を渡す。）
六兵　あゝもし、それを取られては困ります。どうぞ御勘辨下さりませ。（ト縋ろを、）
八十　えゝもう、勘辨が、
兩人　出來るものかえ。
ト振拂つて六兵衛を突倒し、兩人錢を持つて足早に花道へはひろ。跡に六兵衛息をつきながら、やう〳〵立上り、附木の笊をかゝへ、向ふへ思入あつて、

六兵　もし／＼どうぞ待つて下さりませ、助けると思召して半分返して下さりませ、もし、お慈悲でございます。もし／＼、

ト　つか／＼と花道迄行き躓き、ばつたり轉び、笊をぶちまける。是れを拾ひながら、

あゝ情ない、こりや所詮追ひつかれぬわえ。

ト　合方にて涙を拂ひ、笊を抱へ、やう／＼に花道へはひる。是れを暖簾口より亭主伺ひゐて、

松兵　あゝ今の人は可愛さうに、せつぱつまつた事であらうが、奥で聞けばまだ今朝から朝飯を食はぬとて、涙ながらに哀れな話しを、耳にもかけぬ一人は聾、一人は見る／＼根性の曲つた、片目利かない搗米屋、大方あれも、（ト腕組をなし、）米の罰であらう。

ト　幕明きの鳴物へ返り、此道具廻る。

（天滿浪花屋の場）＝＝本舞臺一面の平舞臺、上手一間床の間、此下三尺の地袋戸棚、下手太皷張りの襖、上下腰張の茶壁、總て浪花屋廣座敷の體。上手に座蒲團を敷き以前の宗右衞門住ひ、次におみつ、娘おあい、下手に番頭の善六。以前の與助、太七、半七、伊太郎、倉吉、福松住ひ、前に酒肴を取散らし下女のおよし酌をなして居る。此模樣、上方唄の合方にて道具留る。

よし　さあ〳〵皆さん、御遠慮なくどうぞ重ねて下さんせいなあ。

ト　およし銘々に酌をする。番頭の善六思入あつて、

善六　思ひの外刻限がお早くお着きになりましたので、お肴も碌に揃ひませぬで、大きにごた〳〵致しましたが、先は恙なくお歸りになりまして、誠にお目出度う、

皆々　存じまする。（ト皆々辭儀をする。）

宗右　もつと早く歸るつもりが去年より長くなり、大きに留守中御苦勞であつた。

善六　お留守中は何事もなく、殊にお孃さんが大出來で手習ひをおとなしくなさいますのに、踊も夏の内は朝稽古で、大分精が出ましたから、どうぞしつかりお土産を願ひます。

みつ　お留守中は腕白さん故、定めし世話が燒けたらうと、旦那と言暮らして居りましたが、それでは大きに安心しましたわいな。

あい　お手習ひの御師匠さんが不斷と違つてお留守中は、おとなしくせいとおつしやいます故、夫を守つて居りましたわいな。

宗右　やあ、そりや感心々々、お土産をしつかり取つて來たから、今に出して遣りますぞ。

よし　それに又お孃さんが踊りがめつきり上りまして、此間お師匠さんから教はつてゐらつしつた江戸

唄の振事は、どんなに粋でござりませう。

與助　丁度御祝儀旁々、出入り衆にも愛で一つ。

太七　踊つてお見せ下さりませ。

與助
善六　江戸唄の意氣なものは、ちと不得手でござりますが、清元なら一昨年延壽太夫の參つた時、稽古をして貰ひましたから、わたくしに地が彈けまする。

半七　いや、とんだ御支配人だ。

伊太　これさ。（ト袖を引く。）

みつ　それぢやあ愛で出入の衆へ、御馳走に一つお踊り。

あい　あい〳〵。（ト是れより下座へとり、おあいちよつと端唄の意氣なものを踊る。）

半七　やんや〳〵、是れは孃さん。

よし　大きに有難うござりまする。

宗右　なか〳〵おあいは踊りが上つた。

よし　お師匠さんも此頃では、大層お悅びでござりますから、附いて參るわたくし迄、鼻が高うござりまする。

善六　わたくしは顔が低うござりまする。

半七　又番頭さんの常談ばかり、大分お神酒が廻りましたね。

倉吉　壁ぬりのすてゝこ踊りでも、拝見いたしたうござりまする。

善六　どうして〳〵あれはとつて置きで、恵比壽講でなければ見せられぬ、はゝゝゝ。

ト此内宗右衛門手文庫より祝儀包みを四つ出し、

宗右　善六どの、是れは職人達へ遣つてくりやれ。

善六　へい〳〵。（ト受取り）、頭を始め皆の衆へ、旦那さまから下すつたのぢや。

ト半七の前へ出す。

半七　是れは御馳走になりました上に、

伊太　御祝儀迄頂きまして、

倉吉　大きに有難う、

四人　存じまする。

宗右　今日は大きに御苦勞であつた。

みつ　まあ、ゆつくりと上つて下さんせ。

半七　有難うござりますが、是れから島の内の店迄ちよつと顔を出しに參りますから、もうお暇を致しまする。

伊太　それぢやあこつちも、

三人　一緒にお暇としよう。

善六　まだ日も暮れぬに、まあよいではないか。

太七　なあに、引きぬいたからでござりませう。

善六　え丶、默つてゐねえかえ。

半七　さやうなら、旦那さま、

四人　大きに有難うござりまする。

ト四人下手へはひる。是と一緒に奥の襖を明け、以前の荷持友七、着流しになり出來り、

友七　只今見世へ湯治場でお別れした野村さまが、ちよつと御禮に出ましたと、御自身にお出でござりまする。

宗右　何、野村さまがござつたと、そち達も見世へ行つて、御案内申すがよい。

善六
與助　畏りました。（ト善六、與助、太七、友七奥へはひる。）

宗右　よもや今日お出ではあるまいと思つたに、さて〳〵物堅いお方樣ぢや。酒肴は此儘に、片寄せて置くがいゝ。

みつ　はい〳〵。

ト娘おあいと共に邊りを片付ける。やはり右の合方にて、奥より友七先に案内して、跡より野村内藏之進羽織袴大小、以前の若黨吾助、着附、袴、大小にて風呂敷包みを持ち出來り、下手へ住ふ。

宗右　それでは御挨拶が出來兼ねまする。先づ〳〵あれへお通り下さりませ。

野村　それでは、御免下され。

ト野村内藏之進上手へ通る。宗右衞門皆々下手に住ひ、

宗右　先刻戻りまして、まだ斯樣に取散し甚だ失禮でござりますが、眞平お許し下さりませ。

野村　先刻彼より御歸宅と承り、取るものも取敢ず早速お禮に出ましたが、御混雜の中へ上り、却つてお氣の毒でござりまする。

宗右　どういたしまして、ようこそお出で下さりました。

みつ　又その節は湯治場で、失禮を致しました。

宗右　あなた樣にも滯りなく、御歸邸になりまして、

兩人　お目出度う存じまする。

野村　さて其砌は御主人に、殊の外なら御厚情に預り、何とも御禮の申さうやうなく歸邸の折も早速に金子返納致す所存で、吾助を湯治場へ遣はせしが、最早御出立の跡になり、測らず延引致しまして、申譯もござりませぬ。

宗右　先刻も吾助さまに、立場でお話し致しましたが、何も態々湯治場迄、お屆け下さらずとよいものを、却つてあれでは痛み入りまする。慥に金子は受取りましてござりまする。

野村　實にあの折御主人が、金子をお貸し下さらずば、大阪表へ取寄せに遣はす間、御用の間も缺け、既に此身にかゝはる所、是も何ぞの御緣かして碁のお相手が幸にて、思はぬ危難を遁れてござりまする。

宗右　いやも、私なども當年は存じ寄らぬ保養を致し、思はず長湯治を致しましたも、偏にあなたさまのお蔭でござりまする。

みつ　おまへも野村さまへ、よくお辭儀をしなさんせ。（トおあい兩手をつき、）

あい　今日は、よういらつしつて下さりました。（ト辭儀をする。）

野村　是れはおとなしい、よう御挨拶をなされたな。流石はお仕付けがら感心致してござる。

みつ　段々ませになりますので、おこしいやで困りきりまする。

野村　(思入あつて)その品それへ出してくりやれ。

吾助　はツ。(ト吾助持参の風呂敷包みの内より水引のかゝりし緋縮緬の反物を出し、)是れは甚だ麁品なれど、お土産の印までに御覽に入れまする。(ト宗右衛門の前へ出す。)

宗右　これは結構なる頂戴物、却つて恐入りまする。

野村　つまらぬ品ではござれど、お娘御にお上げ下され。

みつ　美しいあなたのお土産、よう御禮を申しなさんせ。

あい　何よりの品を、有難う存じまする。(ト辭儀をする。)

野村　是れは御叮嚀な事でござる。

ト爰へ奥より番頭善六出來り、下手へ手を突き、

善六　是れは野村さまには、ようこそおいで下さりました。私は當家の支配人善六と申す者、主人湯治中は何かとお世話に相成りまして、有難い仕合せにござりまする。ちよつとお近付きがてら、御禮を申上げまする。

野村　是れは御叮嚀なる御挨拶、手前こそ御主人には、種々御世話に預りましてござりまする。

ト禮を云ふ。宗右衞門思入あつて、

宗右　取散らしてはござりますれど、幸ひの酒肴、何はなくとも先づ一獻、召し上つて下さりませ。

ト此内おみつ、およし酒肴を前へ出す。

野村　計らず御混雜の中へ上り、却つて御迷惑をかけ、お手數で痛入りまする。

みつ　どうぞお一つ上つて下さりませ。（ト盃を差す。）

野村　折角の御饗應、然らば頂戴致すでござる。（ト思入あつて、およし酌をして野村内藏之進呑みほし、）先は御主人へ。（ト宗右衞門に差す、）

宗右　頂戴致しまする。（ト野村内藏之進思入あつて、）

野村　其節は賊騷ぎで、とんと打捨てましてござるが、あの砌り打掛けました碁の勝敗は、いかゞでござつたな。

宗右　さやうでござりまする。あの折は一目にて私が勝になります處を、右の騷ぎでそれなりになりましたが、いまだに殘念に存じまする。

善六　迚もの事に今日は、その勝敗を此所で、おつけなすつては如何でござりますか。

野村　御歸宅早々御混雜中、殘り惜しうはござれど又後刻に致すでござりまする。

宗右　いや、決して手前に御酬酢はござりませぬ。幸ひに御酒を召上りながら、一石戰ひませうか。
吾助　いや、是れは見遁す譯には參りますまい。
野村　さらばあの折打掛けました、勝負を是にて附けませうかな。
宗右　どうぞ左様願ひまする。
善六　さやうなら、碁盤を取寄せませう。（ト善六奥へはひる。）
野村　其方は是より直に、一度屋敷へ立歸り、後刻迎ひに參るがよい。
吾助　はツ、畏つてござりまする。
みつ　もし御用がござりませずば、見世で將棊でもなされませ。
吾助　いや、後刻又々伺ひまする。
宗右　眞平御免下さりませ。
　　　トやはり右の合方にて、吾助先におみつ、おあい付いて奥へはひる。宗右衛門燗徳利を取上げ、
よし　畏りました。（ト立懸るを。）
　　お燗のよいのを持つて來やれ。
宗右　こりや／＼、序に燭臺の支度をせいよ。

よし　畏りましてござりまする。

野村　何かと御厄介になりますが、どうぞお構ひ下さらぬがよい。

宗右　いえ、決してお構ひ申しませぬが、碁將棊を好むものは、實はお相手のお出になるを内々待つてをりまする。はゝゝゝゝ。

野村　成程是は地金でござる。

ト善六碁盤へ碁笥を載せて出來る。およし燭臺を持つて出て、能き所へ置きはひる。善六碁盤を直し

善六　此節は蚊がをりませぬから、戰ひにはお仕合せでござりまする。

ト此内内藏之進は白石、宗右衛門は黒石を持ち、

宗右　左樣なら御免下さりませ。

ト是より合方きつぱりとなり、兩人考へながら盤へ石を打つ事、爰へおよし燗徳利を持ち出來り、

よし　お銚子の、よろしいのが參りました。

善六　是れから戰ひになる所だから、兵糧はわしが預つて置かう。

ト徳利を受取る。およし奥へはひる。

ちよつとお燗の工合を見て、お酌を致しませう。（ト手酌にて一杯呑み）是れは上燗、一つ差上げま

せうかな。（ト內藏之進へ差せども一向構はず、石を並べてゐる。）いや是れは幸ひ、あゝよい圍みでございますな。（ト呑みほし）成程そこの所を、かう繼ぎますかな。

ト又手酌でついで呑む。此內兩人石を並べ、盤面を見渡す事あつて、

宗右　先づ斯樣でござりますな。

野村　是れから御主人のお手でござつた。

宗右　さやうでござりました。

ト宗右衞門石を打ちかけ、ぢつと考へてゐる。善六思入あつて、

善六　野村さま、お一つ召し上りませ。（ト言へども野村默つて居る故）もし、野村さま〳〵。

ト是にて內藏之進心付き、

野村　いや、只今お酒ではござらぬて。

善六　いや。是は幸ひ。（ト又手酌にて酒を呑む、宗右衞門考へ、一目打つて）

宗右　爰を切つた所でござりました。

野村　成程、是では惡うござるか。かう一つ延びませう。

善六　先づ、かう一つ呑んで見ませう。（ト又呑む）

宗右　はてな。

　　ト ちつと考へながら、煙管を取り、煙草盆の灰吹を火入と間違へゐる。善六心づき、

善六　もし〳〵旦那、それは灰吹でござりまする。

宗右　えゝ存じてをるわえ。

　　ト その儘、煙管を置いて碁を打つ。善六呆れしこなしにて灰吹を徳利と間違へ盃へ手酌でつがうとして心づき、

善六　どつこい、えゝ存じてゐるわえ。

　　ト 獨語を言ひつゝ、徳利を取直し、手酌にて呑む。野村内藏之進一目打ち、

野村　御主人、此手は如何でござるな。

宗右　かう延びまするて。

野村　それは構ひませぬて。（ト一目打込むを）

宗右　えゝ、（トはツと思入あつて、凝つと考へ煙草を吸はうとして間違へて雁首を頰へつけ、）あツゝゝゝゝ。

善六　これはお危なうござりまする。

宗右　えゝ存じてをると申すに。

善六　いやはや、呆れたものだわえ。（ト又兩人打つ事あつて、）

宗右　む、（ト一目打込む。野村内藏之進是な見て）

野村　南無三、是れは。（ト碁石で盤の横を打つた、道具替りの知せ。）負けとなつたか。

トほつと思入、宗右衞門は悦ぶこなし、善六感心せし思入。此模樣やはり謠への合方にて道具廻る。

（梅田村小橋の場）――本舞臺四間常足の二重、草土手の蹴込み、眞中に欄干の附きし平な小橋、此下より土手に波布を敷き、後ろ一面在體、夜の遠見、橋の袂に六地藏庚申塚、續いて塔婆垣の藪疊、此前柳の立木、日覆より同じく釣枝、總て梅田村小橋の體。雲のかゝりし半月をおろし、禪の勤の合方、水の音にて道具留る。と上手より以前の火打石賣り六兵衞、しほ〳〵と出來り、四邊へ思入あつて捨石へ腰をかけ、

六兵　惡因惡果善因善果と口には言へど、思ひ當るは丁度此身の今の成行き、以前は眞葛六之進とて武士の端なる家筋も、妻が不所存なりし故、終に密夫の胤を宿し、刀の手前に捨置き難く、我手に掛けて成敗なし、二人の子供は其場より不便ながらも鳥邊野の地藏堂へ捨兒となせしが、思ひ廻せば女房が草葉の蔭にて恨みをるか、後妻を貰ひ一子を儲け、やれ嬉しやと思ふうち、今年で最

早や十六年跡、然も女房を殺害せしその命日に後妻の病死、その折今の娘は三歳、貰ひ乳やら湯の粉にて、やう〳〵育てし男の手一つ、それから段々左前に、する事なす事、鶍となりとう〳〵金も遣ひなくし、今では附木や火打石賣つて歩けど其日に足りず、お家主は言ふに及ばず日々溜る米の代に、言譯言へど聞入れず、持つて行かれし賣溜は、天にも地にもあればかり此儘歸り娘に話さば、その身を賣りて借財の、かたを付けよと云ふは必定、それも本意にあらざる故、いつその事に此所でせめて昔の武士らしく、切腹なして死なうと思へど、第一刄物の當途はなし、やつぱり汚れた此心になつて身を投げ死んだなら、跡で娘は店受で、奉行にやるか嫁けるか、どうにか片を付けてくれよう。是も前世の皆業因（ト涙を拂ひ手を合せ、）これ未來の女房、現世の娘、どうぞ許してくれいやい。（トあたりへ思入あつて、）人通りのなき其内に、さうぢや〳〵。

ト誂への合方になり、手探りにて四邊の石を拾ひ、袂へ入れ死なうといふこなし。爰へ下手より宮川牛之助、半合羽脚絆、旅裝にて、菅笠を持ち出來り、向うをすかし見て、不審のこなしあつて是を伺ふ。此内六兵衛橋の上へ行き、

南無阿彌陀佛。（ト飛込まうとするを、後ろより牛之助抱き留める。）どなたかは存じませぬが、どうぞ放して下さりませ。

牛之　いや放されぬ、まあ、待ちなさい。
六兵　いえ〳〵どうぞ放して下さりませ。
牛之　わしが爰へ來たからは、どうしてこなたは殺されぬ。
六兵　それはさうでもござりませうが、どうも生きてはをられませぬから。
牛之　さあ、幾らおまへが死なうといつても、肝腎の此川が膝つきりしかありやしないが。
六兵　え、
牛之　さあ、それだによつて留めたのだ。死損つて恥をかくより、まあ思ひ止んなさいといふに。
六兵　そんなら死ぬにも、死なれませぬか。（トこちらへ連れて來り。）
牛之　さうしてこなさんが死なうといふのは、どういふ譯か其仔細を、爰で話して聞かせなさい。

ト合方になり

六兵　別に仔細と申す譯もござりませねど、長年の續く不幸に段々と、諸方へ借がたゝまつて言譯なさに此橋から、身を投げようと致しましたが、只不憫なのは一人娘、これが心殘りでござりまする。

ト涙ながらによろしくこなし。牛之助捨石へ腰を掛け、

牛之　深い樣子のある事と思ひの外に高が借金、そんな事で死なうといふは惡い料簡、失禮ながら見受けた處が、借りといつても高の知れた僅かな金で、追付くこと、察したからは及ばずながら片腕にならうから、死ぬのは思ひ止んなさい。

六兵　見ず知らずの私を、それ程迄におつしやつて下さりますのは忝いが、さういふ事に成り行きますも是も前世の約束と諦めました上からは、此身はたとへどうなりますとも、決して厭ひは致しませぬから、不便を掛けて下さりますなら、跡に殘つてをりまする、娘にお惠み下さりませ。

牛之　さあそれがこなたの惡い了簡、其娘御が賴りと思ふ親に死なれた其時は、女の狹い料簡から、何で生きてゐるものだ。さうなる時は親子二人、あの世の人にならねばならぬ。わづかな金でいきさつから、此結構な世を捨て、死なうといふは了簡違ひ。して、こなさんの娘御は、幾つ位になんなさる。

六兵　今年十九になりまするが、却つて大柄でござりまする。

牛之　それ見なさい。子供どころかもう年頃な立派な娘、是から樂をしようといふ矢先きに死んでは是れ迄の、丹精甲斐がないではないか。よく心を落着けて、まあ考へて見るがよい。

ト思入あつて言ふ。六兵衞こなしあつて、

六兵　段々あなたの御意見に、よく考へて見まするると、貧苦に迫り一途にはやり、年甲斐もなく死なうとしたは面目次第もござりませぬ。
牛之　さうこなたが言つてくれゝば、大きに止めた甲斐があつて、こんな嬉しい事はない。まあ何にしろ袂の石を、其處へ出してしまひなさい。
ト牛之助介抱して袂の石を出し捨てる。合方水の音にて花道より、おころ島田髷、やつし裝、前掛草履にて、小田原提灯を提げ出來り、花道に留り、
ころ　いつもは疾うに父さんが内へ戻つて來なさんすに、今宵に限り今以てお歸りのないは氣掛り、夫に宵から家根の上で、幸先の惡い烏啼き、どうぞ何事もなければよいがなあ。
ト舞臺へ來る。六兵衛提灯へこなしあつて、
六兵　そこへ來たは、娘ぢやないか。
ころ　おゝ、父さんでござんしたか。是でやうやう安心しましたわいな。
六兵　それぢやあわしの迎ひに來たのか。
ころ　いつもよりは遲い故、今か今かと待ちくらし、お案じ申して參りましたわいの。
ト此内牛之助上手にておころを見遣り、

牛之　そんならこなたの、娘御かね。
六兵　はい、左樣でござりまする。これ娘、ようお禮を申してくれ。（トおころ不審のこなし、）
ころ　父さん、お禮を言へとおつしやりますは。
六兵　おれが命の親ぢやわいの。
ころ　え。（ト思入あつて悄りなし、）そんなら何ぞ、おまへの體に。
六兵　さあ、今日商ひ先きでお家主と米屋に借りの催促され、言譯すれど聞入れず、とゞの詰りに賣溜の錢を二人に持つて行かれ、明日の元手の途方に暮れ、いつその事に小橋から、死なうとしたを助けられた、いはゞ命の親ぢやわいの。
ころ　道理でさつきの烏啼きが、心に掛つて參りましたが、あれが知せでござんしたか。
牛之　わしが折よく通り合せ、無理に引止め助けたが、洵に危ない事であつた。
ころ　さういふ所へあなたさまが、お通り合して下さるも、日頃信心してをりまする、能勢の妙見さまのお引合せ、ほんに神とも思はれまして、何とお禮を申さうやら有難う存じまするわいな。
おころ禮を云ふ。此内牛之助は紙入より金を出し、紙に包み、
牛之　こなたがさうして心配して親御の事を思ひなさるから、天道さまのお惠みにて無事に命も助か

つたのだ、譬にも言ふ惡い跡はいゝといふから、此先は必ずいゝ事が來ようから、心を丈夫に持ちなすつて、末を樂しみにしなさるがいゝ。（ト思入あつて、）是はまことに少しだが、金が五兩ありますから何生業だか知らぬけれど、是であしたの仕入をして、殘りは米でも買ひなさい。

ト六兵衞に金を渡すを、

六兵 どう致しまして、五兩といふその大金は受けられませぬ。仕入と申せど附木たわし、こんなに澤山買ひますと、一年ぶりもござります。是れはお返し申しまする。

牛之 その遠慮はせぬがよい、私も人の助かるからは、もつと金は上げたいが、何をいふにも旅の事故思ふやうには屆かぬから、まあ少くとも、取つて下され。

六兵 それでも、どうも大まいの。

牛之 はてまあ、遠慮せずと取りなさいと言ふに。（ト無理にやる故。）

六兵 娘、お氣の毒でならぬの。

ころ 命の御恩のその上に、お金迄下さるとは。

六兵 實に涙がこぼれる程、

兩人 えゝ、有難う存じまする。（ト金を頂き禮を云ふ。）

牛之　親御といひ娘御といひ、よい心立の樣子だが、こんな美しい子のあるのに、何んでこなたは死なうとしたのか、今考へると夢のやうだ。

六兵　それもあなたが事をわけ、理非を分けたるお話に、心にとつくり承知して、死ぬのは思ひ止まりました。失禮ながらまだお年も、お若くお出でなさるのに、何かの事を辨へておいで遊ばす御樣子は、中々なお方と見受けますが、お名は何とおつしやりまする。

牛之　さう聞かれては面目ないが、實はわたしは京都で子供の内から生ひ立つた宮川牛藏といふ宮地役者の忰にて、牛之助と言ひますが、既にこなたが死なうとした時、膝つ切りの川といつたのも深いか淺いか勝手は知らねど、ほんの早速の間に合詞、すまして異見はしたものゝ、實の所は脇の下へびつしより汗をかきました。

六兵　朝晩通る小橋の川は、深いと知つてをりながら、あなたの言つたお詞に、はて變だとは存じましたが、流石は氣轉の舞臺の功。

ころ　そんならあなたは京都の、役者衆でござりましたか。

六兵　して只今頃、どちの方へいらつしやるのでござりまする。

牛之　此節大阪へ足を止め、興行をして居りましたが、今度江戸へ志願があつて、下るに付いて池田の

知邊へ、暇乞ひに出掛けたところ、譬にもいふ秋の日の釣瓶落しにとつぷり暮れ、道のはかが行かぬけれど遲くも今夜池田迄行く積りで來ましたのさ。

六兵　それは惡うござりまする。此節池田街道は、殊の外物騷と噂さに聞いてをりますから、もし間違ひのあつた時は、とつて返しが出來ませぬ。

牛之　それは惡い噂だが、夜道の事故駕籠を雇ひ三人連れで行つたなら、よもや間違ひもありますまい。

六兵　いえ、その駕籠屋が惡漢にて毎度追剝がれるといふ噂、決してお止しなされませ。

牛之　はて、困つたものだが、してこなた衆のお内といふは、此近邊においでなさるか。

六兵　はい、此梅田村の出口に、かすかな暮しをしてをりますが、近所に宿屋の心當りも、のう娘。

ころ　わたしも考へてをりますが、何を申しても片田舍、お泊りなされる所もなし、とあつて是から宿のあるのは曾根崎迄戻らねばならず、せめて内なと綺麗なら。（ト間の惡いこなし。）

六兵　おれもさうは思ふて居れど、あまり無造作でお氣の毒さま。

牛之　道中へ出て、一足でも歸るといふは忌む事故、道には賊の難儀を思へば、假令仕居はむさくとも（ト思入あつて、おころへ思入あつて、氣を變へ。）いや〳〵、さういふ事なら曾根崎迄、是から戻ると

しませうか。
ト思ひ切つて身支度をする。此時月かくれ雨車になる。
ころ　父さん、ぽつ〳〵降つて來ましたわいな。
六兵　大分東を上げて來たから、今に一降やるかも知れぬ。
牛之　あゝ、これは困つたものだ。
六兵　曾根崎迄お戻りにしろ、一と先宅までお連れ申し、雨止みをなされた上、又お送り申しませう。
ころ　秋の空でござんす故、其内止むかも知れませぬわいな。
牛之　それではこなたの詞に甘へ、しばし雨止みするとしませう。
ト木魚入りの合方になり。下手より三郎兵衞、尻端折り、合長家にて弓張提灯を持ち出來り、六兵衞を見て、
三郎　おゝ、合長家の六兵衞殿ではござらぬか。
六兵　今時分どれへおいでなされますか。
三郎　けふ夕方に大家さまの婆あさんが、井戸へ落ちてとう〳〵死んでしまつたので、長家内は亂騷ぎで、行事がわたし故、親類内へ知せに行くに、知つての通り長家内が少ないから、無據わたし一と

人で出掛けて來たが、どうでこなたも掛り合、是から一緒に行つて下され。
六兵　すりや家主の御内儀は、あの變死を致しましたか。
ころ　つい夕方迄居たお方が、ても氣味の惡い。（ト六兵衞思入あつて、）
六兵　死なうと思つたわしは助かり。
三郎　え。
六兵　南無阿彌陀佛〳〵。
三郎　少しも早く知せねばならぬ。どうぞ早く行つて下され。（ト急き立てる。）
六兵　お長家の事なれば、こりや同道せずばなるまい。
ころ　そんならわたしは、あなたと一緒に。
六兵　一と足先へ。さうしてくりやれ。（ト思入あつて、）左樣ならばあなたさま。
牛之　歸つて來るを待つて居ります。
三郎　さあ〳〵、早く行つて下され。（ト六兵衞の袖を引くを、）
六兵　さう急いても、まだ腹に今朝からこたへがござりませぬ。
トやはり右の合方にて三郎兵衞急立てながら橋を渡り、上手へはひる。此内雨車止む。おころ嬉しき

こなしにて、

ころ　たんと降らぬ其中に、お供致して參りませう。

卜牛之助四邊へ思入あつて、間の惡きこなしにて、

牛之　親御が居ればよけれども、かう差向ひとなつて見ると、世間へ氣兼でならぬ故、幸ひ雨もきつくならねば、いつそこれにて別れませう。

ころ　それでも是から曾根崎迄、おいで遊ばす途中にて、大降りになりますと、嘸お困りでござりませう。

牛之　それはさうでも女中と二人、どうも是から行きにくい。

ころ　さうおつしやらずと、どうぞ一緒に。

牛之　いや、思切つて戻りませう。

ころ　そんならどうでも、あなたには。

牛之　役者故に濟みませぬ。

ころ　是非もない事ぢやなあ。

卜しんみりした合方になり、おころ本意なきこなしにて枝に掛りし提灯をとり、しほ〳〵と下手へ行

く。牛之助は上手へ、互ひに跡へ心の殘ろこなし。能き程に小田原提灯の灯消える。おころ恟りなし、
あれえ、助けて下さんせ。
ト此聲に牛之助つか〳〵と戻り、おころの側へ行き、

牛之　娘御、どうぞしなされたか。

ころ　いえ、どうもしは致しませぬが、急に灯の消えたので、恟り致しましたわいな。

牛之　あゝ、大方それは川風が、(ト思入あつて、提灯を探り)おゝ、是は蠟燭がなくなつたのだ。わしは又何事かと、恟りして來ましたわいの。

ころ　お別れ申して二足三足、歩けどどうも後ろが見られ、今の佛を思ひ出し、怖うて〳〵なりませぬが、どうぞあなた御一緒に、おいでなされて下さりませぬか。

牛之　さうお前が怖がるものを、見捨てゝも行かれもせず、そんなら送つて進ぜよう。

ころ　すりやお連れなされて下さりますか。えゝ有難う存じまする。(ト又雨車になる。)

牛之　おゝ、又降つて來たか。

ころ　どうぞたんと降ればようござりまする。

牛之　なに、たんと降ればよいとは。

ころ　たんと降れば、あなたが今夜お泊りなさらうと思ふ故。（ト恥かしきこなし。）

牛之　歸るとは言つたれど、餘程夜も更けたれば、事によつたらこなたの所へ。

ころ　えゝ、嬉しうござんすわいな。

ト兩人よろしくこなし、爰へ藪疊の蔭より、白犬出る。おころ是を見て、

あれえ。（ト飛退く。）

牛之　何を、恟りするのだ。

ころ　白いものが出ましたわいな。（ト牛之助すかし見て、）

牛之　なあに、ありやア、（トおころの手を取るを道具替りの知らせ、）白犬だ。

ト牛之助、おころの顏を見る。おころ恥かしき思入、雨車、禪の勤にて此道具廻る。

（浪花屋座敷の場）――本舞臺、元の浪花屋座敷の道具。やはり以前の野村內藏之進、宗右衞門、燭臺の下にて互に碁盤の目を埋めて居る。此模樣、誂への合方にて道具留る。と石を埋め仕舞ひ見渡す事あつて、

野村　先づかう作つた所では、又一目の負となりました。

宗右　お陰さまにて、有難う存じまする。（ト是にて兩人、石を分けながら、）如何でござる。今一石戰ひませうかな。

野村　さればでござる。夜長になるとは申しながら、餘り夜が更けませうが、最早今宵は何時でござるな。

宗右　さやうにござりまする。ちよつと承りませう。

ト宗右衞門有合ふ驛路を鳴らす。奥よりおみつ出來り。

みつ　何ぞ御用でござりまするか。

宗右　もう今夜は何時になるの。

みつ　今しがた八ツを打ちましてござりまする。

野村　まだ宵の内と存ぜしに、思ひの外深更に相成りて、家内の衆へ氣の毒千萬。

宗右　その御斟酌には及びませぬ。毎度碁のお客さまでは、夜明しを致しつけてをりますから、どうぞ御ゆるりとなされませ。

みつ　それには奉公人も皆臥せりましてござります故、決して迷惑ではござりませぬ。

野村　先刻家來を戻します折、迎ひに參れと申付けしが、まだお宅へは參りませぬかな。

みつ　いえ吾助殿の外に中間衆がお二人、九ツ頃にお出でござりますが、申上げるもお邪魔と存じ、其儘、供部屋にお待たせ申して置きました。
野村　すりや待つてをりますとか。それは大きにお世話でござつた。
宗右　嘸御退屈であらう。御酒でも上げたか。
みつ　はい、宵に上げて置きましたわいな。
野村　然らば御家内中もうお寢みでござるかな。
みつ　失禮ではござりまするが、お先へ臥らせましてござりまする。
野村　さすれば最早お目覺のお方は、御兩人きりでござりますな。
宗右　さやうにござります。

ト是にて野村内藏之進思入あつて、膝なすり寄せ。

野村　御家内中がお寢みとあれば、ちと密々に其許にお頼みの節がござるが、何とお聞き屆け下さらぬか。
宗右　改つたるその仰せ、して、お頼みとおつしやりますは。
野村　外の儀ではござらぬが、金子千兩借用致したい。

宗右 みつ　え、（ト兩人恟りなす。合方きつぱりとなり、）

野村　御昨今の其許へかやうな事を申し入れるは、甚だ恐れ入つてござれど、何を隱さう某は主君の金子を遊里で遣ひ、其金子をば償ふ爲め、諸々方々と才覺致せど、扨出來ぬのは金子故、途方に暮れて貴殿を見掛け、是非にお賴み申し度く、もし又此事不承知とあれば、無據次第を書置き、御迷惑でも此處を借用致して切腹なし、身の言譯を立つる所存、爰の所を御承知ありて否やの御返事お聞かせ下され。

ト宗右衞門氣味の惡きこなしにて、

宗右　外ならぬあなたさま故、身に應じました事ならば、御用達も致しまするが、當節諸方へ貸出し、手許の薄い所にて、どうも千兩出來兼ねます故、此儀はお斷り申しまする。

野村　貴殿が奢りに遣ひ過ぎ、手許の薄いはお察し申すが、まだ千兩位の有金に差支へのない事は、とうに拙者がさぐつてござる。

宗右　假令どのやう仰せあつても、只今手許にござりませぬ。

野村　それ程迄に斷るなら、達てとは申さぬが、其替り此場にて、身の言譯に切腹致せば、よしなに跡を願ひまする。（ト思入。）

宗右　えゝ滅相な、さやうな事がござりましては、
みつ　掛り合ひになりますわいな。
野村　然らば千兩お貸し下され。
宗右　それぢやと申して今手許に、
野村　貸されぬと仰せあるか。
宗右　では、ござりませねど。
野村　さやうでなくばお貸し下され。
宗右　さあ、それは。
野村　さあ、
宗右　さあ、
三人　さあ〳〵〳〵。
野村　えゝ、出せと言つたら出しやあがれ。（トきつと言ふ。兩人悄りなし）
宗右　先きに替りし詞の端々。
みつ　さてはこなたは、

宗右　盗賊ぢやな。
野村　如何にもおれは盗人だ。
宗右
みつ　え、、、、。

ト本釣鐘、凄味の合方になり、野村内藏之進有合ふ碁盤を蹴倒し、竪にして腰を掛け、刀をすらりと拔き放し、舞臺へ突立てる、兩人ぞつと下手に震へてゐる。此時奥より以前の若黨吾助、片手に拔身を提げ手燭を持ち出來り、

吾助　兄貴、すつかり仕事は行きましたね。(ト宗右衞門、若黨吾助を見て、)
宗右　そんならこなた衆二人は、有馬の湯場から企んだ仕事。
みつ　人は見掛けによらぬもの、ても大膽なお侍さま。
野村　その大膽な膽玉が、浮世を渡るおれの元手、まだ青二才の時分から御藏屋敷へ入込んで、大小差した遊び人、ちよつと見た目は紋付に袴の襞の折目高、度々喰はしたいゝかさまに、重なる惡事の風鈴付き、其黑白の凶狀も四つ目殺しの目を潛り、遁れて四國中國から西國筋を經廻りて、漸く漸さめたほとぼりも種が有馬の溫泉に、あると子分が注進に、あつたまる氣で飛込んだ、黄金水の金滿湯、光りに緣も有明の世界を居所と定めたる、その名も曉星右衞門といふ、盜人仲間の

頭分だ。

トきつと思入。

吾助　その相ずりの若黨吾助も、まだ駈出しの提灯持ち、しかも曉親分の子分となつて今日迄も、紺看板に茶の帶の中間裝でごまかしたは、宵の口の千太といふ九州無宿の食詰者だ。

星右　假令金がねえといつても、圖星と見込んだ其高は、外れつこのねえおれが眼だ、默つて千兩出しやあよし、

千太　四の五の言つて出さねえと、うぬら二人は當りめへ、

星右　かあいゝ餓鬼迄ぶつたぎらうか。（ト刀を引拔いて立上る。）

宗右　先づ〳〵お待ち下さりませ、死んだ家內が忘れ形見の、娘に怪我でもござりましては、世間へどうも濟みませぬ。

みつ　又わたくしも付いてゐながら、怪我をさせては亡き親御へ、申譯がござりませねば、

宗右　命ばかりはどうぞ、お慈悲に、

兩人　お助けなされて下さりませ。

ト宗右衞門は星右衞門、おみつは千太に縋り賴む。爰へ紺看板の中間、尻端折りにて、留守居提灯を

持ち、番頭の善六を小倉の帶にてしばり上げ、是を引立て、もう一人の中間千兩箱を擔ぎ出來り、星右衛門の前へ置き、

中一　見世の奴等は言ふに及ばず、

中二　おさんどん迄一人殘らず、

兩人　ふんじばつて參りました。（ト宗右衛門金箱を見て、）

宗右　やゝ、こりや是土藏の。

善六　さあ、隱せるだけはと存じましたが、何を申すも此二人が水の垂るやうな白刄を突きつけ、金の有所を案内しろと、ぞつと身の毛もよだつ程、足はわな〳〵體はぞく〳〵齒の根も合はず魂は天へも登る心地故、金は千兩取られた所が、旦那さま一人の損、爰で命をとられゝば、番頭一人の損になれば、金より命が大事故、土藏へ案内致しました。（トぶる〳〵震へる。）

千太　こいつあ手前の言ふ通り、金より命が大事だらうが、末始終が思ひやられる主人へ忠義な番頭だ。

宗右　今更言つても返らねど、御藏屋敷のお役人と聞いたばかりでお住居も、碌々知らぬお方をば、お留め申した我過り、

みつ　是と申すも日頃から、碁がお好き故起りし事、こりやどうしたらようござりませう。

善六　かゝゝねゝゝゝゝ遣るよりほゝゝゝゝかゝゝゝゝはござりませぬ。（ト震へながら言ふ。）

宗右　あなたさまへ宗右衛門がお見掛け申してお賴みは、實は當節手薄の所、此千兩を上げましては、あすから直に差支へますが、どうぞ半金五百兩は御勘辨下さりますやう、お聞濟みを願ひまする。

星右　いゝや、それはならねえ、よしんばそれが實にしろ、見るから千や二千の金に差支へるやうな屋體骨か、是が貴樣の言ふ通り、半分持つて行つた日には、仲間の奴等へ面が出せねえ。

千太　文句を言はずにそつくり出せ、何ぼ足貴が曉でも、夜の明けるのに間がねえから明るくなつちやあ不都合だ。

宗右　そりや御尤もでござりますが、どうぞ半金御勘辨を。

星右　えゝ喧しい。四の五の言やあ命をとるぞ。（ト立掛るを、おみつ割つてはひり。）

みつ　あゝもし危い、まあ〳〵待つて下さんせ。（ト思入あつて、）所詮譯を言ふたところが、もうあゝ言出しては聞き入れますまい。それをば達ておつしやつても、もしもお怪我のあつた時は、お體には替へられませぬ。是迄長年御恩を受け、頂きました頭の物や衣類手道具拂ひましても、金子はどうにかなりませうから、見込まれたのが旦那の不運、そつくりお渡しなされませいな。

宗右　それでもみす〳〵あの金を。

星右　渡さぬのは、命が入らぬか。
宗右　さあ、それは、
星右　さあ、
兩人　さあ、
皆々　さあ〳〵〳〵。
星右　いつその事に打つた切らうか。
みつ　あ、もし。（ト星右衛門を留める、宗右衛門思入あつて餘儀なく）
宗右　差上げますでござりまする。
　　トよろしく思入、鷄笛になる。星右衛門あたりへこなしあつて。
星右　ありや七ツか、
千太　夜明けぬ内に、
星右　むゝ、ふけようか。
千太　それ、
中間
二人　合點だ。

ト兩人、千兩箱を荷ひ、下手へ來る、星右衛門は白刃を鞘へ納め、悠々と立上り、下手へ行くを、善六縛られしまゝ、

善六 うぬ、盗人め。

星右 えゝ、喧しいやい。

ト思入あつて、十間の扇子にて善六の肩先を打つ、わつと言つて其儘尻餅を搗き、氣を失ふ。星右衛門是を見遣り。

まづい面だなあ。

ト花道へ行きかゝるを、宗右衛門無念のこなしにて、

宗右 思へば憎くき、(ト行かうとするを。)

ト是を双方見合つて木の頭。星右衛門は、につたり笑ふ。宗右衛門は口惜しき思入。是にておみつ宥める。善六は心付き斬られたと思ふこなし、時の鐘合方にて、

みつ あもし、

ひやうし 幕

ト幕引付けると、宵の口の千太、留守居提灯を持ち先に立ち、曉星右衛門袴の襞を直し思入あつて、

星右　大儀であつた。氣を付けて參れ。
千太
三人　はツ。
ト是を誂への合方へ七ツの拍子木を打ち、中間千兩箱を擔ぎ、皆々悠々と花道へはひる。跡シヤギリ

二幕目

小島新田渡の場
入山津小家の場

〔役名――宮川牛之助、非人小栗の馬吉、曉星右衞門、火打石賣り六兵衞、非人荒熊の九郎藏、同甘酒お捨、渡船場の船頭よたんぼ次郎、番太早ぶさ高藏、同木鼠利吉、同小猿の圓八、非人米藏、同さい六、同千八、同丹六、百姓金十、同太吾七、同畑六、非人鸚鵡の柳藏實は岩淵柳藏。六兵衞娘おころ。非人奴吉等。〕

（小島新田渡の場）――本舞臺向ふ一面高二重の草土手、左右柳の立木にて見切ろ、後ろ下手に渡し小屋の書割、後在體の遠見。平舞臺に波除の杭、渡し場。下り口の三段、上切芦原、平舞臺一面に波布を敷き、眞中に丸物の大きな渡し舟、日覆より柳の釣枝、總て中津川本庄渡し場の體。舟の中に百姓の金十、太吾七、畑六煙草を喫み居る。渡船場の船頭よたんぼ次郎、棹を立てもやひ居る。今船の着いた心宜しく、波の音、臼挽唄にて幕明く。

金十　今日は曇つてゐるせゐか、さつぱり時が分らねえが、もう何時であらうな。

太吾　今しがた打つた鐘は、西念寺の入相だが、足許がもう暗くなつた。
畑六　春と違つて秋の日は、暮れかゝると忽ちだ、途中で今日は暮れるだらう。
次郎　おまへ方が急いでも、六地藏で暮れませう。あれから先は道がいゝから、歸りなさるに譯はねえ。
金十　いつもなら、何時でも怖い事もねえけれど、此頃池田街道へ追剝が出るといふ噂。
太吾　身ぐるみそつくり取られたところが、高の知れたわしらだが、ならば剝がれたくねえものだ。
畑六　その追剝をする奴を、村中の者が言合して、早く狩つてしまひたいものだ。
次郎　どうぞさうして下さいまし、晝の内の渡し錢は持主の物だから、幾ら少なくつても構はねえが、日が暮れてからはわしの儲け、一人も餘計に渡さにやあ好きな酒も呑まれねえが、追剝の出る噂のせゐか、日が暮れるといつもより、往來の人が少ねえから、渡し場は上つたりだ。
金十　どういふ事で近頃は、かう泥棒が多い事だか、町と違つて在方は締りもせずに寢たものだが。
太吾　今では村へものそ〳〵と、夜晝となくやつて來るから、野良へ出るにも誰か一人、留守居を置かにやあ出られねえ。
畑六　是といふのも生業を怠ける奴が多いから、喰ふに困つて初めるので、かう泥坊が殖えるのだ。
次郎　さつきも爰へ、天滿から來た人の話しだつたが、天滿の浪花屋へえらい泥坊がはひつたさうだ。

金十　その浪花屋といふ家は、諸方へ金を貸し出して、隨分工面のいゝ家だ。
太吾　あの町内では指折りだが、今の主人が奢り好き故、以前のやうではないとやら。
畑六　どんなえらい身上でも、氣をゆるしてはたまらない、惡くなるのは瞬く間だ。
金十　してえらい泥坊とは、どんな泥坊が、
三人　はひつたのだ。
次郎　妾を連れて盆後から、有馬へ湯治に行つて居る中、同じ宿屋で馴染になつた侍だといふ事だが
　千兩盜んで行つたさうだ。
金十　そりや慥に四國から、西國筋で名の高い、曉星右衞門といふのだらう。
太吾　人品のいゝ男だから、よい侍に姿をかへて、仕事をするといふことだ。
畑六　なんにしろ浪花屋も、以前のやうではないといふから嘸弱つたことだらう。
次郎　今朝ッから此邊へも役人衆が出張つて來て、もし怪しい奴と見とめたら、名主殿迄知らせろと、
　嚴しいお觸れが廻つたから、他國へ逃げることはなるめえ。
金十　そりやあ天の網がかゝつては、遁れる事は出來やあしねえ。
太吾　なんにしろそんな奴は、早く捉つてしまへばよい。

畑六　兎角、世間が騷々しくて、田舍迄も響きます。（ト風の音になり、）

次郎　折角西で切上つたが、又東から上げて來るので、晩になつたら降るだらう。

金十　いや、降らない内に、ちつとも早く、

太吾　内へ歸つて湯へでもはひり、

畑六　晩に一杯やりませう。（ト三人舟より土手の上へ上る。）

次郎　わしも乘り人のねえ内に、飯でも食つて置きませう。

金十　そんなら次郎どん。

次郎　村の衆。

太吾　又あした、

三人　逢ひませう。（ト波の音、臼挽唄にて三人上手へはひる。次郎舟を繫ひ、土手へ上り、）

次郎　さつきから一杯呑みたく、喉がぐう／＼云つてならねえ。幸ひ人のとぎれだから、此間に行つて二合ばかり、蟲押へに呑んで來よう。

ト波の音にて次郎下手の土手下へはひる。時の鐘、唄浄瑠璃になる。

〽桐の葉の落つるももしや追手かと、跡へ心を置く露に、つい袖濡れてきのふより、色をま

す穗の芒原、〽風が招けど山の端へ、日影入江の川べりを、秋の胡蝶のおとや先、渡し場近く歩み來て、

ト此内時の鐘を冠せ、上手より前幕の牛之助先に、おころ出來り、兩人よろしく思入あつて、おころはあつ〳〵と泣伏す。誂への合方をすゝめて波の音を冠せ。

牛之　最前から言ふ通り、連れて行かれる事なれば、一緒に連れて行くけれど、修業の邪魔になる故にどうぞ内へ歸つてくりやれ。

ころ　いえ〳〵、わたしや歸りませぬわいな。

牛之　是までわしが譯を言ふのに、聞入れてはくれぬのか。

ころ　どうぞ後生でござりますから、江戸へおいでなされますなら、連れて行つて下さりませいなあ。

〽萩にまつはる葛の葉の離れ難なくうらみ顏、

ト おころ牛之助に縋り泣く。牛之助困りし思入。

牛之　昨日測らず梅田橋で、親御が死なうとする所を、通りかゝつて助けしが、竟にはそれが縁となり池田道は夜に入ると追剝が出て物騷故、内へ泊れとすゝめられ、詞について泊りし所、家主殿に不幸があつて、親御が通夜に行つたあと、話しも盡きて差向ひ、折から降り出す雨につれ、時な

らざりし雷に、紙帳を釣つて中へはひり、觀音經を上ぐるうち、次第に音も薄らぎて初めて互に見る顏も、灯りは遠き紙帳越し、つい其儘に寢てしまひ、(ト思入あつて、)思はぬ枕交せしは誠に若氣の我が誤り、よしない事を致したのぢや。今更云ふても返らぬ事、一人娘のそなた故能い聟とつて年寄つた親御に樂をさすのが孝行、不實な事を言ふやうだが、昨夜の事は夢にしてどうぞ思ひ切つてくりやれ。

ころ　そりやお情けない牛之助さま、田舍育ちのわたし故、お氣に入らぬは無理ならねど、なぜそれなればなまじひに情けをかけて下さりました。あの時すげなくおつしやらば、及ばぬ事と諦めまする、昨夜に替り今日となり、言交せしを夢となし、思ひ切れとおつしやりますは、一夜泊の旅籠屋の女子とおまへは思ふてか、そりやお情なうござりますわいな。

〽顏へかゝりし鬢の毛をかき上ぐれども亂れ萩、雨に散行く風情にて

トおころ牛之助をぢつと見上げ涙を拭ふ。

牛之　さういふ氣ではなけれども、是から江戸へ行つた所が當時彼の地で名の高い役者を賴んで弟子となり、暫らく修業をせねばならぬ。そなたを連れて行く時は跡に殘つた親御が難儀、わしも修業の邪魔になれば、どうぞ思ひ止まつて下され、其替り江戸へ行き、出世をなして人らしく、役者

の數に入つたらば、生涯二人を見捨てはせぬ。爰の所を聞きわけて、是から内へ歸つてくりやれ。

ころ　いえ〳〵なんとおつしやつても、お前は思ひ切られませぬわいなあ。

牛之　左程迄に此わしを思ふてくれる志し、惡うは思はぬ嬉しいが、それでは親御へ濟まぬ故、一緒に連れては行かれぬわい。

ころ　そんならこれほど申しましても、お連れなされては下さりませぬか。はあ――。

牛之　さあ、氣の毒ながら連れては行かれぬ。

ころ　はあ――。（ト泣く。）

〽緣も淺き澤野邊の、桔梗の花の一重咲き、身は苅萱の假初に結びし露に月影を、留めてとまらぬ女郎花。

ト牛之助ぢつと思入。此内おころよろしくこなしあつて、唄へ冠せて、

さらばでござります。

トつか〳〵と行つて、土手から川へ身を投げようとする。牛之助あわてゝ引き止め、

牛之　あゝこれ待つた、おころどの、血相變へて何處へ行くのぢや。

ころ　わたしや身を投げ死にまする。

牛之　すりやそなたをば共々に、江戸へ連れて行かぬ故。
ころ　それでわたしや死にまする。
牛之　すりやどうあつても是から江戸へ、連れて行かねば死ぬと言ふのか。
ころ　あい、わたしや覺悟を極めましたわいなあ。
牛之　はてさて、困つたことぢやなあ。
〽盛り短かき朝顏の、あすの浮名を厭ふ秋の夜、
ト牛之助、おころを留め、當惑の思入、唄の切れ合方になり。
連れて行かねば忽ちに、川へ身を投げ死ぬと言ひ、とあつて連れて行く時は、親に難儀を掛けねばならぬ。はてどうしたものであらうなあ。（ト思入あつて、）親御へ義理は立たねども、みす〳〵爰で殺すより、連れて逃げるがましであらう。
ころ　そんなら、連れて行つて下さいますか。
牛之　あゝ、死ぬといふ故是非がない。親御へ詫は後にてしよう。
ころ　お前の科にならぬやう、今宵の泊りでこま〴〵と仔細を書いて父さんへは、わたしがお詫を致しまする。

牛之　かうなる上は少しも早く、今宵池田の知邊迄。
ころ　是から道は直なれど、池田へ行くには此渡しを、渡らねばなりませぬ。
牛之　見れば渡しに誰もをらぬが。
ころ　大方小家に居りませう。

ト合方かすめて波の音になり、牛之助下手の小家へ向ひ、

牛之　おゝ船頭どの、船を出して貰ひたい。（ト下手にて、）
次郎　あい〳〵、今出します。（ト右の鳴物にて、下手よりよたんぼ次郎出て、）舟を出せと言ふのはおまへ方かえ。
牛之　たつた二人で氣の毒だが、五つ迄に池田まで急に行かねばならぬ者、どうぞ早く出して下され。
次郎　どんな急ぎか知らねえが、たつた二人ぢやあ出されねえ、四五人來るまで待ちなせへ。
牛之　さうでもあらうが跡から追手が、（ト思入あつて、）いやさ、跡から人が何時來るか、待つて居られぬ急ぎ故、二人前づゝ四人ぶり、渡し錢を出さうから、早く舟を出して下され。
次郎　かう見たところがお前方は、云はずと知れた駈落者。
牛之
ころ　えゝ。

次郎　いやさ、其處へ掛けて待つて居なせへ。今四五人と言つたのは、十四五人の間違ひだから、まあゆつくり掛けて待ちなせへ。

牛之　それでは急に出ませぬか。

次郎　明け六つから暮れ六つまでは、上へ願つた書上通り、そりやあ一人が二人でも直に出さにやならねえが、夜に入つてからはおれが儲け、いはゞ内證の渡しだから、出すも出さねえもおれが心さ。

牛之　それぢやあどうかおまへの心で、早く出して下さるまいか。

ころ　急いで行かねばならぬもの故、早う渡して下さんせいな。

次郎　此美しい姉さんが、渡してくれと云ひなさりやあ、渡して上げめえものでもねえが、渡し錢は四人前かえ。

牛之　四人前で不足なら五人前も上げようから、

ころ　早う出して下さんせいな。

牛之　さあおころ、早く舟へはひつてゐよう。

ころ　あゝもし、危うござんすぞえ。

次郎　どれ、わつちが抱いて上げようか。

ト牛之助先へ舟へ乘ろ。おころ乘らうとするを次郎抱くを振拂ひ、

ころ　いえ〳〵、それには及ばぬわいな。

　ト おころ舟へ乘ろ。次郎思入あつて、

次郎　いや、風が變つて寒くなつた。どれ、半纏を取つて來ようか。

　ト 波の音になり、土手より下手へはひる。

ころ　又内へ行きましたわいな。

牛之　人の心も知らないで、意地の惡いものぢやなあ。

　ト 波の音、誂への合方にて、上手より前幕の曉星右衛門、やつし裝、尻端折り一本差し、頬冠り草履にて出來り、跡を見返り思入あつて、

星右　おい、渡し場の若い衆、舟を出して貰ひたい。（ト下手にて、）

次郎　あい〳〵、今出します。

牛之　よい鹽梅にお連れが出來た。

ころ　是では早う出しませうわいな。

　ト 兩人悅ぶ思入。下手より次郎出來り。

次郎　舟を出せといふのはお前かえ。
星右　急ぎの用で向ふへ行くのだ、直に出してくんなせへ。
　ト曉星右衞門一分金を一つ出す、次郎取つて、
次郎　お氣の毒だが釣錢が、二朱ならあるが一分はねえ。
星右　誰が釣りを取るものか、そりやあ酒手にお前にやるのだ。
次郎　え、此一分をくんなさるのか。
星右　遣るから早く出してくんねえ。
次郎　是ぢやあ直に舟を出します。
　ト星右衞門次郎舟へ飛び乘り、牛之助へ向ひ、
星右　眞平、御免なせへ。（ト舟の眞中へしやがむ。）
牛之　あなたのお蔭で私共も。
ころ　早く向ふへ渡られます。
　ト波の音にて次郎、繫ひを解き、棹を拔き舟を出さうとする。ばた〳〵になり、上手より早ぶさ高藏
木鼠利吉、小猿の團八、脚絆草鞋、尻端折り、番太の拵へにて駈けて出來り、

高藏　おい、その舟へ。
三人　乘せてくんねえ。
　　ト三人舟へ飛込む。星右衛門南無三といふ思入。
次郎　誰かと思つたら會所の衆かえ。
利吉　もう一足で乘れねえところ。
圓八　危い所であつたな。
次郎　一偏後れると大違ひだ。
高藏　彼是一時待たにやならねえ。
利吉　いゝ都合に、
兩人　いつたぢやあねえか。
　　ト三人顏を見合せて思入。次郎棹をさし、舟眞中へ出る。此内星右衛門は三人へ顏を反けてゐる。三
　　人は星右衛門へ目を付けて、うなづき合ひ、よききつかけに、
二人　御上意。
　　ト左右から星右衛門の手をとり、組伏せようとする。星右衛門振拂つて、圓八を投げかけ、きつと見

得、牛之助おころは悸りして、うづくまりゐる。
星右　こりやおれをどうするのだ。
高藏　科は其身に覺えがあらう。昨夜天滿の浪花屋で、
利吉　千兩盜んだ曉星右衛門、
圓八　退れぬ所と覺悟して、
高藏　さあ尋常に、
三人　繩掛かれ。(ト星右衛門きつとなり、)
星右　さう知られた上からは、何を隱さう察しの通り、中國筋から四國九州、惡事を筑紫の果迄も、其名を知られた曉星右衛門。汝らが手にやあ乘らねえぞ。
三人　何を小癪な。(ト星右衛門に組付く。此立廻りのうち。)
次郎　これ、二人の衆逃げなせえ。
ト次郎土手へ飛上り、下手へ逃げてはひる。續いて牛之助、おころ飛うとして兩人川の中へ落ちる。水の音、水の花ぱつと立つ、星右衛門是れへ目を付けるを、圓八後ろから組付くを投げのけ、肩へ踏みかけ、きつと見得、高藏、利吉は上下に十手をかまへる。是より誂への鳴物になり、舟の立廻りよ

ろしくあつて、星右衞門川の中へ飛込む。水の音、水の花ぱつと立つ。

高藏 南無三川へ飛び込んだか、

利吉 水の動きは川下へ、

圓八 慥に潛つて行つた樣子。

高臟 跡追駈けて、

三人 おゝ、さうだ。

ト高藏先に皆々上手へ走りはひる。是より誂への合方になり、知せなしに此道具半廻しになる。

(川續きの場)——本舞臺同じく高足の草土手、以前の渡小屋上手に、後一面やはり在體の遠見、舞臺前一面の波板、よき所に川施餓鬼の塔婆を川の中に立て、日覆より柳の釣枝、總て前の川續きの模樣、右の合方にて道具留る。と本釣鐘を打込み、よき所へ以前の牛之助水入鬘にて流れ出で波除杭へ縋りきつと思入あつて、やう〳〵に土手より二重へ上り本水を吹き、ほつと思入あつて川の中を見込み、

牛之 此川上の枝川から爰へ落込む中津の渡し場、たゞさへ早い水勢に、此四五日の雨催ひ、土手に見馴れし柵もいつか隱れて增す水に、泳ぎも知らぬ此川故、所詮助かる筈のなきを、此川岸へ流れ

より思はぬ命を拾つたが、それに附けてもおころどのは、どうしてゐることぢややら、女子の身では此早瀨で所詮助からうとは思はぬが、どこぞに體は見えぬか知らぬ。あゝ案じられたことであるわい。

ト川を見込みてぢつと思入。ばた／＼になり、上手より前幕の六兵衞、小田原提灯を提げ出來り、牛之助をすかし見て、

六兵　そこにおいでなさるのは、牛之助さまぢやござりませぬか。

牛之　おゝ、さう言はれるは六兵衞殿か。

六兵　やれ、よい所でお目に掛りました。（ト思入。提灯で牛之助を見て、）見ればずつぷり濡れてぢやが、川へでもお落ちなされましたか。

牛之　今あやまつて落ちました。

六兵　して娘は、あなたと一緒ではござりませぬか。

牛之　いや、おころどのは一緒ぢやない。

六兵　え、一緒ではござりませぬか。（ト合點の行かぬ思入あつて、）さうしてあなたはどうして又、川へお落ちなされました。

牛之　池田へ行かうと暮れてから、渡し船に乗つた所、後から乗つた大盗人を追手の衆が捕へんと、組んづほぐれつする騒ぎに、逃げんとなして川へ落ちたが、不思議にさのみ水を飲まず、危い命を助かりました。
六兵　そりや、あんた許りでござりましたか。
牛之　おゝ、川へ落ちたはわし一人。（ト六兵衛思入あつて、）
六兵　家主殿の葬式から内へ帰れば娘は居ず、長家の者の話しでは、あなたと一緒に出たといふ故、さては池田へおいでなさるを、お送り申して行つたかと、初めは思つてをりましたが、夜に入つても帰らぬのは、水の出ばなの若い同士、言交しでも致しまして、あなたと一緒に逃げたかと、取越苦労で私は跡を追つて参りましたが、一緒ではござりませぬか。
牛之　おゝ、町はづれ迄送つてくれたが日暮れに近く途中を案じ、無理に帰して別れました。
六兵　それではいよ〳〵あなたとは。
牛之　なんで一緒でござらうぞ。
六兵　慥に一緒と思ふたに、それでは何れへ行きをつたか。親の心子知らずと、あゝ案じさせる事ぢやなあ。

ト六兵衞案じるこなし。ばた〳〵になり、下手より次郎出て、

次郎　や、こりやお前は助つたか。

牛之　危ない命を助かりました。

次郎　さうして連れの娘御は。

六兵　なに、娘とは。

牛之　あゝこれ、こなたは何を言ふのぢや、船へ乗つたはわし一人、誰も外には、な、誰も連れはありませぬぞ。

次郎　何をこなたは言はつしやる、十八九の娘を連れ、跡から追手が掛るから、早く渡してくれと言つたをこなたは忘れて仕舞つたか。

六兵　もしその娘といふは、縞の着物に黒と紫中形の帶をしめてはをりませなんだか。

次郎　如何にもおまへの言ふ通り、黒と紫中形の帶をしめてをりました。

六兵　それでは娘に違ひない。もし、牛之助さま、なぜ知らぬと言はつしやつたぞ。

牛之　さあ、それは。

六兵　娘はどこへやらつしつたぞ。

牛之　さあ、

六兵　さあ、

兩人　さあ〳〵。

六兵　娘を返して下さりませ。（トきつと言ふ。牛之助ちつと思入。）

次郎　いや父さん、幾ら返せと言はしつても、その娘御はかへらない。

六兵　なに、返らぬとは。

次郎　かへらぬと云ふはたつた今、泥坊騒ぎで二人とも、船から丘へ逃るはづみ、川へ落ちたがそれぎりに、爰らに姿が見えぬならば、慥に死んだに違ひない。

六兵　それでは娘は川へ落ち、はかない最期をしましたとか。

次郎　もう今頃は川下へ、流れてお土左となつてゐるだらう。

六兵　扨は長家の噂の通り、娘はこなたが誘ひ出し、連れて逃げたに相違ないな。

ト牛之助せつなき思入にて、

牛之　かうなる上は何をか包まん。昨夜測らずこなたの留守に、娘と契りを交せし故、江戸へともぐ〳〵行きたいといふを種々諭せしかど、一緒に行かれぬ事ならば川へ身を投げ死ぬといふ故、先づ池

田迄伴ふて、その上内へ歸さんと渡しの船へ乘りし時、今言ふ盜人騷ぎにて、逃げるはづみに川へ落ち、既にわしも死ぬ所、水は知らねど體が浮き、危ふい命を助かつたが、氣の毒ながらおころどのは慥に死んだであらうわいの。

六兵　えゝそんなら娘は死にましたか。かゝる非業な死をなすも、こなたが娘と通ぜし故、えゝ腹の立つ事なれど、手出しのならぬは昨日の日暮れ、死ぬる命を助けられし恩ある此方に手出しもならず。ちえゝ殘念な事ぢやなあ。（ト六兵衛悔しさを怺える思入）

次郎　それぢやおめへの娘をば、してへ三昧な事をして、擧句の果に殺したのか、こいつあ腹の立つ話しだ。

牛之　我身許りの科でもなけれど、今となつては娘は居ず、皆我科になつたれば、こなたの腹の癒るやうに、どうなと此身を勝手にして、恨みを晴らして下さりませ。

六兵　是れが外の人ならば、言はゞ娘の敵故、武者ぶりついて存分に、我身の恨みを晴らしたけれど、手出しのならぬ命の親、ちえゝ口惜しい事ぢやなあ〳〵。

ト六兵衛、牛之助に武者ぶり付かうとして拳を握り、無念の思入

次郎　こいつア腹が立つだらう。思入れ恨みを言ひなせえ。

六兵　さあ、その恨みが言ひたけれど、言ふに言はれぬ恩ある故。
次郎　えゝ意氣地のねえことだなあ。
　ト云ひながら次郎下手へはひろ。牛之助はぢつと俯向き居る。六兵衛よろしく思入あつて、
六兵　天にも地にもたつた一人の娘を殺す上からは、何樂しみのない六兵衛、是れを思へば梅田橋で昨日死んでしまつたら、此悲しみはせまいもの、なまじ命を助けられ、現在娘を連れ出された人に恨みが言はれぬとは、何たる因果な事なるか、生き甲斐のない我身の上、こりやもういつそ娘と一緒に。
牛之　え。
六兵　いや、せめて娘の菩提の爲め。(ト死ぬる覺悟をして、)南無阿彌陀佛。
　ト六兵衛覺悟をなし、川へ飛込む。どんと水の音、水の花ぱつと立つ。牛之助恟りなし、
牛之　やゝこりや六兵衛殿には娘を失ひ、取りのぼせて身を投げしか。やゝゝゝ(ト思入あつて、)助けたいにも、水は知らず、親子二人が非業な最期も、元の起りは若氣の誤り、昨夜娘が言ひ寄りしを、つれなく言ふて斷つたら我跡慕ふて參りもせず、親も尋ねて參るまじ、測らず親子二人とも非業な死をば致させしは、皆牛之助がなせし科、今更言ふて返らねど、愼むべきは色の道、今日

を限りに紅粉を粧ふ役者の念を斷ち、髮をおろして出家となり、二人が後世を弔はん。(ト脇差を拔き髷を切落し川へ打込み、)南無幽靈頓生菩提。

ト手を合せ拜む。うしろへ次郎出て、酒に醉ひたる思入にてひよろ〳〵と出て、

次郎　えゝ、まだまご〳〵してゐるか。

トひよろ〳〵と出て牛之助に行き當る。牛之助身を躱す。次郎ばつたり俯伏になる。牛之助川の中へ思入あつて、

牛之　思へば不便な、(ト次郎の脊中へ腰を掛けるを、道具替りの知らせ。)ことぢやなあ。

ト川の中を見込む。この模樣よろしく、波の音、早き合方にて、此道具廻る。

(入山津小家の場)――本舞臺三間の間常足の二重、藁葺家根、竹簀子の本緣付、向ふ上手一間の押入戸棚、續いて一間障子出はひり、跡穴のあきし鼠壁、上手跡へ下げて雪隱の心、此前に擂鉢の手水鉢四つ目垣、いつもの所門口、下の方眞中に川のある在體の遠見、此前玉椿の生垣、總て梅田三昧非人小屋の體。二重下手に白木の長持、衣裳小道具といふ札を張り、此上に菅笠、大小、鬘など載せあり眞中に非人千八、やつし裝、百日鬘一本差にて一卷を持ち立懸り居る。同じく非人米藏、佐伊六、丹六、同じくやつし裝にて銅鑼と木魚を控へゐる。上手に非人あら熊の九郎藏、やつし裝にて奴吉、小

しく宮神樂にて道具留る。と佐伊六銅鑼を叩く、奴にツケを敎へてゐる。甘酒お捨結び髮、女太夫の拵へ、三味線を持ち、道化狂言の稽古の模樣よろ

九郎　それ、ばた〳〵〳〵ばつたり。

　　ト奴吉、拍子木でツケを打つ、千八きつと見得をなし、

千八　まんまと首尾能く寶藏へ忍び込み、奪ひ取つたる此一卷、のゝゝゝりうり公へ差上げれば。

九郎　こう〳〵のりうりぢやあねえ、範賴公だ。

千八　それでもおらの書拔きにのりうり公と書いてあつた。

お捨　そりやあお前のおつかあが、糊賣をして歩いたから、洒落に書いたのだ。

米藏　狂言ぢやあするけれど範賴公といふ人に、

佐伊　まだ近づきにならねえが。

丹六　ぜんてえありやあ何所の人だな。

九郎　そんな事は新參の椰藏が能く知つてるが、範賴公は鎌倉の賴朝樣の御舍弟で、四海を握る謀叛人だ。

お捨　賴朝樣はすばらしい大天窓だといふ事だが、範賴さまも滅法界大きな手だと見えますね。

九郎　なに大きな手だとは。
お捨　それでも四海を握ると言ふから。
九郎　握ると言ふのは、ほんの譬だ。
米藏　そんな事は跡へ廻して、あした丹波へ行くのだから、早く稽古をしてしまはう。
佐伊　さあ〳〵、ぢやあもう一遍やらかさうか。（ト前へ出て、きつと見得をなし、）まんまと首尾能く、寶藏へ忍び込み、奪ひ取つたる此一卷、のりうり公へ差し上げれば。
九郎　これ、のりうり、のりうり公だといふに。
千八　のりうり公だと言ひましたよ。
九郎　え丶不器用な、のり、のりうり公と言ふのだ。
お捨　こう〳〵九郎藏さん、教へるお前が同じやうに、なぜのり、のりうり公と言ひなさるのだ。
九郎　それぢやあおれも釣込まれたか、範頼公へ差上げれば、褒美の金は望み次第、大願成就忝い。
千八　範頼公へさし上げれば、褒美の金は望み次第、
九郎　人目に掛らぬ其内に、ちつとも早く、お丶さうだ。大願成就忝い。
千八　人目に掛らぬ其内に、ちつとも早く、お丶さうだ。

九郎　それ、ばた〳〵〳〵〳〵ばつたり。

千八　そればた〳〵〳〵ばつたり。

九郎　そりやあ手前が言ふのじやあねえ。奴にツケを教へるのだ。

奴吉　ほんに、不器用な男だね。

千八　そんな事を言つたつて、手前に此役が出來るものか。

奴吉　出來なくつてどうするものだ。まんまと首尾能く寶藏へ忍び込み、奪ひ取つたる此一卷、範頼公へ差上げれば褒美の金は望み次第、大願成就忝い。人目に掛らぬ其内に、おゝさうだ。

ト此内よろしくこなしあつて、きつと見得。

お捨　ほんに奴の方が餘つ程うまいね。

奴吉　なあに、おいらのうめへのぢやあねえ。千さんがまづいのだ。

千八　えゝ同じ事だ。（ト奴吉の天窓を打つ。）

米藏　いゝ加減に無駄を言つて、跡を早くやつてくんねえ。さつきからおらあ待つて居る。

佐伊　おれも銅羅を入れるのだが、何處で入れていゝかさつぱり分らねえ。

丹六　こつちも木魚を入れるのに、困り切つて居るところだ。

九郎　そんな素人くせい事を言はずと、見計らつて打つがいゝ。
佐伊　お師匠番がさう言ふなら、
丹六　見計らつて入れてやらう。
お捨　さあ〳〵、跡を早くおやりよ。（ト千八前へ出て、）
千八　人目に掛らぬ其内に、おゝさうだ。
米藏　くせえもの待て。
九郎　こう〳〵、くせえものぢやあねえ、曲者だ。
米藏　外の者なら曲者だが、千公だからくせえものだ。
九郎　又株でわからねえ事を言ふか。
米藏　あいつは夜晝着たなり故、寢臭くつてたまらねえから、千公ばかりはくせえものだ。
九郎　そんな理屈を言ふならば、どうでも勝手にやるがいゝ。（ト千八前へ出て、）
千八　人目に掛らぬその内に、おゝさうだ。
米藏　くせえもの待て。
千八　くせえものとは、誰が事だ。

米藏　寢臭へ野郎の手前の事だ。

千八　何を小癪な。

奴吉　ばた〳〵〳〵ばつたり。

佐伊　爰らで銅羅だ、ぼん〳〵〳〵。

丹六　こつちも木魚を、ぽく〳〵〳〵。

お捨　あれは紀の國、やれこれ蜜柑船。

ト甘酒お捨、かつぽれを彈く思入。是れに合せて佐伊六、丹六、銅羅と木魚を叩く。千八、米藏、奴吉かつぽれを踊る。

九郎　えゝおれだと思つて馬鹿にしやあがつて、いゝ加減にしねえのか。

ト九郎藏、此内下手より非人鸚鵡の柳藏、やつし裝、着流しにて風呂敷包みを抱へ出來り、直に内へはひり、双方を留めて、

柳藏　こう〳〵靜かにしねえのか。何をそんなに騷ぐのだ。

九郎　おゝ柳藏か聞いてくんねえ。今度丹波へこいつらが、道化狂言で打つて行くから、おれが稽古をしてやるのに、一人として身にしみやあがらねえ。

柳藏　もういゝ加減にするがいゝ。どうで滿足な事は出來やあしねえ。
千米　ひどい事を言ふぢやあねえか。
お捨　何と云はれても仕方がねえ、柳藏さんの踊りなぞは、志賀山流で別ものだ。
九郎　ほんに身振り聲色は、京大阪に眞似てがねえ。
佐伊　嘸お前の若い時は、
丹六　女が惚れたことだらう。
柳藏　言はれて乘るぢやあねえけれど、女が惚れて困つたよ。
お捨　いつかお前が話しかけて、人が來てよしたつけが、何處かの武家の御新造に惚れられたといふ事だが、末迄話してお聞かせな。
柳藏　皆に話して聞せてえが、請賃は出さねえよ。
九郎　今日は頭の誕生日で、酒肴がしつかりあるから。
柳藏　それぢやあそれを請賃に、末まで話して聞かせようか。
九郎　早く話して、
皆々　聞して下せえ。（ト合方きつぱりとなり。）

柳藏　そも／＼おれが履歴といふは、生れは江戸の赤坂で、親仁は御城の賄方、御家人仲間で内福の所からおれが遣ひ出し、とう／＼すつかりだりむくり、江戸に居られず京へ來て、知るべを便つて半年ばかり居候をして居たが、隣は播州加古川の浪人、眞葛六之進といふ人だが、朝夕顔を見合すところから、度々遊びに行く内に、私用で亭主が江戸に行つた留守を附込み女房と、深い仲になつたところ、いつか女房の腹がふくれて、どうしたものと思ふ内、俄に亭主が歸つて來たから顯はれぬ内駈出して、行く當もなく宮島から金比羅迄は路用もあつたが、それから先は賣喰に爰に二年、かしこに三年、四國九州ごろつき歩き、とう／＼仕舞が梅田の小家者、長い間苦勞をしたが、こつちの頭が贔屓にして、よく目を掛けてくれる故、好きな酒も自由に呑め、三日すると忘れられねえ、味を此頃覺えたのだ。

九郎　今の話しの樣子ぢやあ、よつ程古い事の樣だが、何年程跡の事だえ。

柳藏　指を折つて算へて見ると、今年で二十三年だ。

お捨　二十三年跡といへば、こつちの頭の產れた年だ。

柳藏　ついに年を聞かなんだが、こつちの頭は二十三かえ。

九郎　まだ小二才だが禿性で、年より頭は更けて見える。

柳藏　三十位と思つたが、そいつァよつ程違ふね。

お捨　それといふのも料簡が、四十の人にも勝つてゐるから、年より更けて見えるのさ。

柳藏　四十と言やあ曾根崎で、人が噂をして居たが、昨夜天滿の浪花屋へ、藏屋敷の侍と姿を替へてはひつた泥坊、四十近い奴ださうだが、強請同樣四人連れで、千兩盗んで行つたと云ふが、大きな仕事をしたぢやあねえか。

五郎　その話しはおいらも聞いたが、たしか曉星右衞門といふ、大泥坊だといふことだ。

柳藏　何處へ逃げたか知らねえが、人相書で嚴しい詮議。

お捨　天の網が掛つては、長い正月はありやあしめえよ。

ト合方きつぱりとなり、奥より小栗の馬吉非人の拵へにて、伸をしながら出來り、

馬吉　一ぺいやつて眠氣がつき、肘を枕にとろ〳〵やつたが、もう今夜は何時だな。

お捨　もう五つ過ぎでござりますよ。

馬吉　そいつァよつ程寢過したな。

米藏　頭、今日は御誕生で、

四人　お目出たうござります。

馬吉 譬にも云ふ乞食も身祝ひ、なんにもねえがゆつくりと、今夜は皆呑んでくれ。
米藏 呑みますどころぢやあございませぬ。
佐伊 酒と聞いては目のない連中、
千八 晝から今夜を樂しみに、
丹六 喉を鳴らして居りまする。
馬吉 喉を鳴らして待つて居るなら、奥に肴が出來てゐるから、早く行つて呑むがいゝ。
四人 それは有難うござります。
米藏 お辭儀致すところなれど、
佐伊 呑めと許しが出た上は、
千八 もう一時も待たれませぬ。
丹六 直に頂戴致します。
お捨 わたしがお酌に行くのだが、爰でも今に初まるから、奴に酌をさせておくれ。
米藏 わつちの方は誰でもいゝ。
奴吉 よくなくつてどうするものだ、奴でもちと過ぎものだ。

佐伊　豆藏の子といひながら、
千八　こんな口のやつはねえ。
丹六　此口でぱくつかれるから、
奴吉　食はした事もねえくせに。
馬吉　えゝやかましい、早く行け。
佐伊　どれ御馳走に、
四人　なりませう。（ト右の合方にて四人、奴吉付いて奥へはひる。柳藏、風呂敷包みを出し、）
柳藏　あした能勢へ着て行きなさる袷をとつて來ましたよ。
馬吉　そりやあ大きに御苦勞だつた。（ト柳藏、風呂敷へ包んだまゝ出し、）
柳藏　まだ小屋へ來て間がねえから、曾根崎の呉服屋でも、わつちの顔を知らねえので、大そう世辭を言ひました。
馬吉　それ故、こなたを頼んだのだ。（ト明けて見て、）江戸ッ子だけに縞柄の見立てがおれの氣に入つた。
柳藏　どうか頭の氣に入るやうに、餘程心配しましたのさ。
九郎　それぢやあいよ／＼仲間の衆と、あした能勢へ立ちなさるのか。

馬吉　降りせへしにやあ明日立つが、笠や脚袢は内にあつたな。

お捨　此間沼津をした時の、笠や脚袢がありますから、さつき出して置きましたよ。

馬吉　そいつあ豪氣に氣が利いたなあ。

九郎　時にこつちもお目出度く、一杯頂戴したいものだ。

馬吉　お捨、燗をつけてくれ。

お捨　あい／＼。

馬吉　何ぞ肴をのけて置いたか。

お捨　八幡卷と鱧のうま煮を、二鉢のけておきました。（ト戸棚から鉢肴を出す。）

柳藏　鱧はこつちの名物だ。

九郎　こいつアうまく呑めるわえ。

お捨　はい、お燗が出來ました。（ト廣蓋へ鉢肴と燗徳利を載せて出す。馬吉猪口を取りて、）

馬吉　どれ、目出度く始めようか。

ト時の鐘、誂への合方になり、お捨酌をなし酒盛になる。花道より以前の曉星右衛門、水入の鬘、着物の水を絞りながら出來り、花道で跡先へ思入あつて、

星右　追手のやつらが川下へ下つて行つたを見すまして、一町許り川上へ、潛つて行つて浮上り、なんなく命は助かつたが天窓からづぶ濡れで、どこへ行くにも行かれねえ。向ふに離れた一軒家は、ありやあ梅田の非人小家、素人が來ねえ所だから、追手の氣の付く氣遣ひなし、あすこで着物の算段仕よう。

ト前後に氣を配り、本舞臺へ來り、門口から内を窺ふ。小栗の馬吉是を見て、

馬吉　誰か表へ來たぢやあねえか。

柳藏　酒の匂ひを嗅ぎ付けて、ぐづ虎でも來やしねえか。

九郎　おい、門に居るのは誰だえ。

星右　へい、往來の者でございますが、ちつと御無心がございます。

お捨　乞食小家へ無心とは、提灯の火をかりに來たのだらう。

九郎　さあ、提灯の灯なら點けて行きねえ。（ト傍にある火打箱を取つて出す。）

星右　いえ、提灯の灯ではございません。

九郎　さうして無心と言ひなさるのは、

ト門口を明け、星右衞門を見て恟りなし、

星右　や、お前は川へでも落ちたのかえ。ずつぷり濡れてゐなさるね。
九郎　はい、お察しの通り川の中へ、土手から辷つて落ちました。
星右　さうしてお前の無心といふのは。
九郎　御無心と申しますのは、どうか濡れた此着物を乾して行きたうござります。お禮は何程でも致しますが火を貸して下さりませぬか。
星右　お氣の毒だが貸されねえ、百姓家へ行つて賴みなせい。
九郎　その百姓家も見渡した爰らに一軒も見えませぬから、どうか貸して下さいましな。
星右　えゝしつこい、貸せねえといふに。（ト門口をぴつしやりしめる。）
九郎　あゝ、こんな困つた事はねえなあ。
ト星右衛門思入あつて、花道の方へ行きかける。柳藏思入あつて門口へ來り、戸を明け、
柳藏　おい、火を貸りに來た今の人、
星右　はい、お呼びなさいましたか。
柳藏　困りなさるとあるからは何をするのも人助け、貸して上げめえものでもねえが、非人小家といふ事を、お前は知つて居なさるか。

星右　はい、よく存じてをります。

柳藏　火灯箱の火でなけりやあ、煙草も呑めねえといふ人にやあ、貸したくつても貸せねえが、こつちの身分を知つてなら、隨分貸して上げようから、まあこつちへはひりなさい。

星右　それは有難うござります。皆さん、御免なさいまし。

ト星右衛門、後を見かへり內へはひり、門口をしめ、下手にしやがみ居る、馬吉見て、

馬吉　見りやあ天窓から足の先迄、ずつぷり濡れて居なさるは、どこへお前落ちなすつたのだ。

星右　さ、その落ちた所は。（ト言ひ兼ねる、）

馬吉　土手から落ちたと言ひなさりやあ、中津川の河縁だね。

柳藏　よく怪我をしなさらなかつたね。

お捨　なんにしろ、ぐす濡れで、嘸お前冷たからうね。

馬吉　濡れた着物は絞らせて、焚火で乾して上げようが、裸で居なすつたら、まだ居殘りの蚊が居るから、喰はれて待つちやあゐられねえ、とは言へ穢れたこちとらの、着物をお前に貸されもせず。

星右　なに、そんな詰らねえ、野暮な事を言ひますものか。貸して下さる心なら、どんな襤褸でも大事ねえから、どうぞ貸して下さいまし。

馬吉　それぢやあお前はこちとらの、着物を構はず着なさる氣か。

星右　着なくつてどうしませう、穢多や非人を汚れるのなんといふのは開けねえ、昔氣質の人の言ふ事、神のお末の人間にそんな差別がござりますものか、尊い位の上つ方でも、またお前方の仲間でも、五本の指はやつぱり五本、別に變りはござりませぬ。

柳藏　成程、お前の言ふ通り、五本の指はやつぱり五本、何處に一つ素人に變つたところはありやあしねえ。

九郎　字は知らねえが非人とは、人に非ずと言ふのださうだ。

お捨　なんでそんなにわたしらは、汚れたものだと言はれるだらうね。

星右　人は兎もあれわつちに限り、決して心に掛けねえから、なんぞ貸しておくんなせえ。

馬吉　お前がさういふ心なら、是を貸して上げませう。（ト柳藏の持つて來た袷を出す。）

お捨　こりやあ頭が今日拵へた、まだ手を通さぬ仕立て卸し。

馬吉　乞食の垢の付かねえ袷、是を代りに着てゐなせえ。

星右　思召しは有難いが、折角お前が拵へた袷、わつちが先へ着初めをしては。

馬吉　なに、構ふことがあるものか、今も言ふ同じ人間、遠慮をせずと着てくんなせえ。

星右　そりやあ有難うござります。

ト合方きつぱりとなり、星右衞門着替へる。此時柳藏腕の入墨を見て、

柳藏　や、おめへの腕の彫物は。

星右　こりやあちつと曰くものさ。

柳藏　なに、曰くものとは。

馬吉　あこれ、野暮なことを根問ひをするな。

九郎　まだ柳藏は知らねえか。

お捨　曰くといふのは入墨だよ。

馬吉　え丶餘計な口を利きやあがるな。（トきつと言ふ。）

お捨　餘計な事を言つた代り、着物はわたしが乾して上げよう。

九郎　乾すならおれが絞つて遣らうか。

星右　こりやあ憚りでござります。（トお捨、九郎濡れた着物を着せかへる。）

馬吉　きれいきたねえを言ひなさらにやあ、乾るうちいつぺい呑んぢやあどうだね。

星右　有難うござりますが、わつちやあ少しもいけませぬ。

柳藏　はて吞めさうな恰幅だが、吞めぬとあらば强ひるも野暮
馬吉　猪口だけ清く受けなせえ。

ト猪口を出す。星右衞門猪口を取つて吞む眞似をして馬吉へ返し、捨ぜりふよろしくあつて、

星右　見ず知らずのところへ來て、さりとは押の强い奴と思ひなさるでありませうが、頭お前へ折入つてお賴みがござりますが、何と聞いては下さるめえか。
馬吉　どんな賴みか知らねえが、人交はりの出來ねえおれに、素人のお前が賴みがあるといふからは、身に叶つたことならば。
星右　それぢやあ聞いてくんなさるか。
馬吉　むゝ、して、その賴みといひなさるは。
星右　外でもねえが今借りた、仕立卸しの此袷、わつちに賣つてくんなさらねえか。
馬吉　賴みといふはその事かえ。
星右　どうか聞いてくんなせえな。
柳藏　望む袷は曾根崎の松坂屋といふ吳服屋へおれが頭に賴まれて、見立てた結城の替り縞、裏は眞岡の千種染、五分もすかねえ袖口から、仕立代迄つツくるみ、直段は僅か一兩なにがし、その賣上

けも爰にあるが、望んで是れを買ひなさりやあ、利附はお前承知だらうね。

九郎　かう見たところが苦勞人、こつちで駄目を押さずとも。

お捨　一分のものを二分で買ふのは、そりやあ承知をしてゐなさるのさ。

星右　濡れた袷の乾上るまで、待つてゐられぬ忙しい體、それ故無理に賣つてくれと、お頼み申した上からは、幾らで拵らへなすつたか、今言ふ倍に買ひますから、どうぞ讓つて下さいまし。

馬吉　達てお前の頼みだから、讓つて上げめえものでもねえが、今おいらが言ふ通り、一分のものを二分ぢやあ賣れねえ。ちと足元を見るやうだが、直が高いが承知かえ。

星右　直は幾らでもようございます。

馬吉　きつといゝかえ。

星右　さうして幾らでその袷、わつちに讓つて下さいます。（ト馬吉思入あつて、）

馬吉　百兩とも言ふとこだが、五十兩で讓つて上げよう。

星右　えゝ。（ト悄り思入。）

馬吉　安い物だ、買ひなせえ。

星右　むゝ、（ト思入、誂への合方になる。）

ト此内柳藏感心せし思入にて、

柳藏　年は今年で二十三でも、四十にまさる頭の料簡、むゝ、四十といふに目が付いて、五十兩で賣らうとは、流石は目先の見えた頭、六十近い柳藏なぞは、遠く及ばぬ料簡だ。

星右　それぢやあ木綿の此袷を、五十兩で買へと言ふのか。

馬吉　先づ反物の定尺を二丈五尺とする時は、二反合せて即ち五丈、是れ人間の五十年、尺一兩では切割だ。表は心の變り縞、裏は千種の人情も地合も薄い花色染め、素人にあらぬ黑八丈、その袖口の口止めに、高くも買つて置きなせへ、惡事の穢れや垢のねえ仕立卸しのその袷、身幅も狹い落人の、稼業はおくみの鍵の手に、行き丈短かい命を添へ、袖にしつけの掛直なし、五十兩ぢや安い物、それも厭なら止しなせえだが、おれも針目の曲つた根性、縫ひ目の絲を結ばずば竟綻びてしまはうぜ。

星右　むゝ。（ト星右衛門ぢつと思入れ）

馬吉　それも言ひ直で買ひなさりやあ、さつき爰らへ吳服屋から、配つて歩いた引札を、付けてお前に賣つて上げよう。

ト懷から人相書を出し、星右衛門の前へ投げて遣る。星右衛門取上げ開き見て、

星右　や、これは、(ト悩りなす、柳藏覗き、)

柳藏　「曉星右衛門人相書。」

星右　むゝ。(ト手早く疊みて隱す。)

馬吉　爰ら近所に配つた引札。

柳藏　こいつア買はにやあならねえな。

ト上手に馬吉、下手に柳藏、上下より星右衛門を見込む、星右衛門片つ端から切つてしまはうといふ思入にて、脇差を取上げきつとなる。九郎藏お捨も手出しをしたらと、後ろへ立懸る。星右衛門氣を替へ、脇差を下へ置き、

星右　五十兩で買ひませう。

馬吉　それぢやあ言ひ直で買ひなさるか。

星右　折角おめへが拵へた袷、無理に所望をするからは、高いは承知で引札ぐるみ、五十兩で買ひませう。

柳藏　科の次第や反物の善し惡し記すその引札、こいつァ買ふのが上分別だ。

ト此内星右衛門胴卷から百兩包みを出し、封を切つて五十兩算へ、紙に載せ、

星右　さあ、數を改めて受取りなせえ。

ト合方きつぱりとなり、馬吉取上げ見て、五枚宛數を算へ、

馬吉　たしかに五十兩受取りました。

九郎　いや、おいら達の料簡ぢやあ、一分の物を二分に賣りやあ。

お捨　豪氣な事と思つてゐるに、五十兩とはい丶相場だ。

柳藏　成程頭は年よりか惡い事にや勝つた料簡、僅か一兩なにがしで拵へた袷を五十兩で、賣るのは勝れたい丶膽だが、それを言直で買ふのもい丶膽、賣り手も賣手買ひ手も買手、實においらあ感心した。

星右　言ひ直で買つても引札に、委しく記した仕入の品物、黒羽二重に茶苧の袴、折目正しき武家拵へ紬小紋の五所紋、行儀亂さぬ百姓好み、縞の羽織の商人から、紺半纏の職人風、種々に姿も替り縞、博多絞りに薩摩がすり、得意は四國九州に津々裏地迄名が賣れて、正札附になつたからは、たとへ五十が百兩でも、命の仕入はしにやあならねえ、高いものだが尺一兩の割で五丈の五十兩言ひ直でわつちが買つたのだ。

馬吉　それも思はぬ引札から、い丶商が出來た故、言はゞ今夜は見世開き、心ばかりの景物を、わつ

ちがお前に上げるから、貰つて行つてくんなせえ。

星右　なに、景物を呉れるとは。

馬吉　その行先は知らねども、世間へ廣く引札が廻つたからはうつかり出來ねえ、あした仲間と連立つて能勢へ立つ氣で出して置いた、人目を忍ぶ菅笠に、脚絆草鞋が今夜の景物、これをお前に上げませう。（ト二重にある笠と脚絆草鞋を揃へ、星右衞門の前へ出す。）

星右　途中で買はうと思つたところ、何よりこりやあ有難い。（ト笠をとつて頂き、）人相書で足元を見られて金を取られたは、實に悔しく思つて居たが、是れでさつぱり心が晴れた。今夜の恩は忘れねえ。

柳藏　今の話の樣子ぢやあ、晝はうつかり歩けぬ體、大方今夜山越しに更けなさる氣であらうから、飯を喰つて行きなせえ。

星右　馳走になつて行きてえが、うか〳〵足も留められねえ、是から直に行きませう。

柳藏　心がせくなら途中の用心、握飯を持つて行きなせえ。

星右　そりやあ貰つて行きてえから、どうぞ拵へてくんなせえ。

お捨　わたしが結んで來て上げよう。（トお捨奧へはひろ。）

星右　握飯の出來るその間、わつちやお旅の支度をしよう。
馬吉　おゝ、ゆつくりと支度をしなせえ。（ト捨ぜりふにて、星右衛門脚絆をはき、草鞋を拵へる。）
九郎　草鞋も直に履きなせえ。
星右　それぢやあ頭、御免なせえ。

ト星右衛門、草鞋を履く。奥よりお捨苞の中へ握飯を入れ、是れを持ち出來り、

お捨　奥に苞がありましたから、是れへ入れて來ましたよ。
馬吉　それぢやお持つて行くのにいゝ。
星右　何から何迄有難い、（ト小判を十兩紙に包み、）こりやあ少しばかりだが、お前方へ置土産だ。

ト柳藏に渡す。開き見て、

柳藏　や、こりや三人へ小判で十兩。
九郎　親分。
お捨　有難うございます。
星右　いや、その禮には及ばねえから、四五日經つ内わつちが噂を。
柳藏　そりやあ承知して居ります。

星右　それぢやお頭。

馬吉　もう行きなさるか。

星右　縁があつたら、またその内。

柳藏　今夜の事を昔話に。

馬吉　目出度く其内。

皆々　話しませう。（ト思入あつて、星右衞門門口へ出る途端、奥にて、米藏の聲にて）

米藏　曲者待つた。

星右　や。（ト星右衞門きつとなる。又奥にて、）

米藏　ばた〳〵〳〵、や、ぱつたり。（トツケを打つ）

星右　あの物音は。

柳藏　若い奴らが茶番の稽古さ。

星右　疵持つ足に恂りした。（ト星右衞門ほつと思入あつて又行きかけるを）

馬吉　あこれ、ちよつと待ちなせえ。

星右　え、（ト立返り）なんぞ用か。

馬吉　體を淨めて行きなせえ。

ト火打箱の鎌と石を取つて、星右衛門に切火を打つ。星右衛門辭儀をして花道へ行き、思入あつて、

星右　度胸の据つた小家頭。あいつを生かして置いたらば。

ト星右衛門振返る途端、馬吉顏を出し顏を見合せ、

馬吉　まだ行きなさらねえか。

星右　むゝ、まゝよ。

ト菅笠を冠る。是をきつかけに馬士唄になり、星右衛門氣を變へ、花道へはひる。馬吉跡を見送り、元の所へ住ふ。柳藏思入あつて、

柳藏　流石は頭、いゝ度胸だ、今四國九州で人も恐れる曉星右衛門、その强盜に出逢ひながら、びくともせずに木綿袷を、五十兩に賣つたのは、實に豪氣な腕前だ。隨分不斷己が氣ぢやあ、いゝ度胸だと思つて居たが、なか〱もつて及ばぬ事だ。

馬吉　なに、度胸もなにもありやあしねえが、假令四國九州で人の恐れる强盜でも、天の網が掛つたら人相書で捜される弱身へ附込み五十兩、袷で金を取つたのは、まとめた金が欲しい故。

柳藏　なに、纏めた金が欲しいとは。

馬吉　外でもねえ柳藏、手前もかうして、今ぢやあ非人となつてゐるが假令黑鍬御家人でも以前は天下の御直參、江戸を食ひつめ大阪迄、流れ〳〵て小家へ落ち、道化俄の役者となつたが、唄淨瑠璃は言ふに及ばず、身振聲色物眞似も、勝れた業に評判よく、手前のお蔭でおれ迄も大した金を儲けたが、知つての通り八宗兼學、何でもござれにすつて仕舞ひ、纏めた金があつたらばと思ふところへ五十兩、手に入つたのは丁度幸ひ、是を半分手前に遣るから、足を洗つて江戸へ歸り、元の素人になるがいゝ。

柳藏　食ふに困つて死ぬよりかましと思つて手下になり、覺えた藝が身を助け、道化俄の物眞似で、樂に今日迄暮したは皆頭お前のお蔭、大した爲にもならねえのに、足を洗つて素人になれとは涙の出る程有難へが、一旦小家へはひつたからは、生涯爰で果てる心、その心配には及びませぬ。

馬吉　生涯爰で果てる氣と言つてくれるは嬉しいが、腹から非人といふではなし、足を洗へる體だからちつとも早く足を洗ひ、生れ故鄕へ歸るがいゝ。

柳藏　それ程迄にわつちが身を、思つて下さる親切を、無にするのも本意でねえから、頭お前の詞に隨ひ、足を洗つて歸りませう。

馬吉　おれも疾うから江戸へ行つて、暮して見てえと思ふ故、いゝ潮時を見計らひ手前を賴みに乘出す

から、恩になつたと思ふなら、その時世話をしてくんねえ。」

柳藏　そりやあ江戸へ來なさりやあ、是迄お世話になりました御恩はきつと返します。

九郎　柳藏手前は仕合せだ。頭のお蔭で足を洗つて、產れ故鄕の江戸へ歸り、

お捨　元の素人になるといふのは、なんたる運のいゝ人だか、ほんにお前にあやかりてえよ。

馬吉　手前達もいつがいつ迄おれの所に居るでもねえ、なんの足しにもなるめえが、是を土臺に二人とも、三尺店でも持つがいゝ。（ト十五兩紙に包み、投げて遣る。九郎藏取つて見て、）

九郎　や、こりやあ二人へ十五兩、是ぢやあ世帶が持てまする。

お捨　折角取つた五十兩も、跡へ殘るはたつた十兩。

馬吉　その十兩は奧にゐる、若い奴等に遣るつもりだ。

九郎　それぢやあ頭の、

兩人　骨折り甲斐が。

馬吉　幾らあつても宵越しの、錢を持たねえ小栗の馬吉、一刎ねはねりやあ十や二十は何時でも取れるおれが體、遠慮をせずと取つて置け。

九郎　それぢやあお貰ひ申します。

お捨　頭、有難う、
兩人　ござります る。
馬吉　柳藏、手前も受けてくれ。
柳藏　然し是迄お世話になり、恩も返さず此金を、わつちがお貰ひ申しては。
馬吉　濟むも濟まぬもあるものか、眞人間に手前をするのが、天道さまへの御奉公だ。
柳藏　(金を取つて、)それぢやあ頭の詞に隨ひ、
馬吉　是から直に江戸へ行き、
柳藏　元の素人になりませう。
九郎　あゝ素人になるとは、
兩人　羨しいなあ。
馬吉　羨しくとも手前達は、生涯足は洗へねえ。
柳藏　頭は捨子とあるからは今に親御の身許が知れ、
九郎　足を洗つて、
お捨　元の素人に。(ト此時、奧にてツケを烈しく打つ。)

千八　大願成就忝い。

馬吉　おゝ。（トにつたり笑ふを木の頭）いゝ辻占だ。

ト皆々よろしく思入、銅鑼、木魚、太鼓ごつちやの鳴物にて、

ひやうし　幕

三幕目

延命院門前の場

同院内客間の場

秋坂侯廣間の場

【役名──笹川幸十郎、納所柳全實は鶍鵡の柳藏、秋坂淡路守、延命院別當、雪駄直し九郎藏、所化雲念、同西念、近習、中間、參詣人。粂村召使おころ實は六兵衞娘おころ、茶店のおしげ、奥女中其他。】

（延命院門前の場）──本舞臺一面の平舞臺、正面上手へ寄せて家根付きの寺の門、扉明けあり、此左右に家根のある提灯をかけ、是へ七面大菩薩と記せし赤提灯を掛け、門の内より奉納の幟大分に見せ舞臺上の方に埓を結廻し、建札あつて是へ「毎月十三日説法」と記しあり。下の方に葭簀張りの出茶屋、軒口に團子提灯、柱に納め手拭など竹の先へ釣し結び付けてあり。日覆より松の釣枝、總て谷中延命院門前の體、爰に茶屋床几を並べ、町人裝の仕出し、腰を掛けて居る。おしげ茶見世女にて茶を

運び居ろ。此模樣、流行唄、題目太鼓にて幕明く。

しげ　皆さんも七面樣へ、御參詣でござりまするか。

○　いや、おいら達は七面樣へ參詣はつけたりで、辨天さまを見に來たのだ。

しげ　それでは池の端の、お歸りでござりまするか。

△　何さ此寺へ參詣に來る御殿女中を見に來たが、まだ今日は見えない樣子だ。

□　七面さまも身延の山に、年古く住んでゐた、元は蛇體の女ださうだが、

◎　その七面さまのお加持だと云つて、かう又每日御殿女中や町の娘ッ子が參るといふは。

○　是がほんのお加持(かし)な話だが、まづ當時のはやり物は、谷中の七面樣に田端の太郎稻荷。

△　それに續いて淺草の隨神門の難波屋のおきた、三つよせた拳なぞが出來て錦繪に出るくらゐだ。

しげ　もう一足お早いと、美しい姉さん達が、御參詣でござりましたが、惜しい事をなさいました。

□　いや、どうでも女には緣遠いこちとら、內へ歸つて嚊左衞門のいやな顏でも見るとしよう。

△　それがい丶〳〵、そんなら茶代は爰へ置いたよ。

しげ　まあ、御ゆつくりとなされませ。

四人　さあ〳〵、歸らう〳〵。

ト右の鳴物にて、仕出し四人下手へはひろ。おしげ跡を片付けながら、

しげ　お參りの女中を見るので、男の衆迄が群集するとは、是も矢張り七面樣の御利益、ほんに有難い事ではある。

ト爰へ門の内より納所柳全、坊主鬘、着流し丸ぐけ駄下駄にて、直しの草履下駄を持ち出來り、

柳全　おいおしげさん、爰らに直し屋はなからうか。

しげ　どなたかと思ひましたら柳全さまでござりますか。直し屋さんは爰の前を毎日幾人も通りますから、見世へ預けてお置きなされば、直させておいて上げます。

柳全　それぢやあどうか預けておくから、前鼻緒を立てさせて下さい。

しげ　慥にお預り申しました。

柳全　ときに茶を一杯呑ませて下さい。

しげ　只今煮花を入れますから、まあお話しなさいまし。

柳全　どうか煮花の色のやうな、布施物にでもありつきたいものぢや。

トおしげは葭簀の蔭へはひろ。柳全煙草を喫み居る。流行唄、題目太皷になり、花道より御殿女中の粂村竝に附添ひの女中五人、何れも御殿女中の拵へにて、日傘を差し雪駄にて出る。跡より中間一人

供をして出來り、花道にて、

粂村　なんと皆さん、御覽遊ばせ、向ふに見えるあのお寺が、延命院でござりまする。

女一　成程噂に違ひませず、繁昌と見えまして、地内に立ちし多くの幟、

女二　願ひも叶ふ納め物、お提灯やら手拭やらで、ても賑はしい太鼓の音、

女三　早う參つて面々のお加持を頼み入れませう。

女四　粂村さまのお蔭にて、私共も一同に、

女五　よい氣晴らしを致しますが。

中間　まづ皆樣には、向ふの茶屋へ。

粂村　どれ、あれへ行つて休みませうわいなあ。（ト右の鳴物にて皆々舞臺へ來る。柳全此體を見、前へ出て、）

柳全　これは／＼あなた方には、當寺へ御參詣でござりまするか。

粂村　ちと願籠がござりまして、

女二　御代參の戻り道、

女三　こちらへ廻つて參りました。

女四　七面樣のお加持とやらを、

女五　なされますると評判の、
女六　お上人さまにたゞ一目、
粂村　お逢はせなされて、
六人　下さりませ。（ト是にて柳全思入あつて、）
柳全　それはよくこその御參詣、恰度只今說法の切目で、貫主日當には休息中故、直樣お逢はせ申しまする。
粂村　それはよい折でござりました。左樣なればお前樣がお取次の方でござりますか。
柳全　愚僧事は柳全と申して延命院の役僧故、お願ひの筋がござりまするなら、何なりと上人へ取次ぎ致すでござりませう。
女一　左樣なお方でござりますなら、夫のお願ひを、なあ、皆さん。
女二　ほんに此お方にお賴み申して、お上人さまへよいやうに、
女三　お取次を願ふのが、こりや近道と申すもの。
女四　それが宜しうござりまする、先づ何事もお女中頭の、
女五　粂村さまから御發言を、

五人　下さりませ。
粂村　さやうなら御一緒に、認め參りし願ひの筋、
女三　よろしうお賴み、
六人　申しまする。（ト銘々懷中より、文と目錄包みを出して柳全へ渡す。）
柳全　これは〳〵御銘々に御叮嚀なるお目錄、慥にお預り申しまする。
中間　その內下郞はいづれにて、お待ち申してをりませうか、粂村さまへ伺ひまする。
　ト粂村懷中より紙に包みし金を出し、
粂村　是は少しぢやが酒代故、どこぞで休息したがよい。
中間　これは有難うござりまする。
粂村　左樣なれば片時も早う、
女二　參りませうではござりませぬか。
女三　それがよろしう、
皆々　ござりまする。
中間　どれ、下郞めはその間、蕎麥でも手繰つて參りませう。（ト下手へはひる。）

粂村　何分よろしうお取次ぎを、

柳全　さあかうおいでなされませ。

ト右鳴物にて柳全先に立ち、みな〳〵打連れて門の内へはひる、おしげ跡を見送り、

しげ　ほんに柳全さんもお忙しいので、お茶を呑む間もない樣子、こりやお煮花の入れ損をしたか。

ト爰へ柳全小戻りをして門の内より出來り、懷より件の目錄包みと文を出して見て、

柳全　經料とばかりしてあれど安く見込んで一兩づゝ、是をかうしてこつちをかうして、先づ一割は儲かるわえ。（ト獨語を言つてゐる。）

しげ　もし柳全さま、お茶がはひりました。

柳全　おゝさうか、今直に來る。

ト目錄包みをやりくりながら門の内へはひる。此時件の文を一通落してはひることよろしく。おしげ是に心付かず、

しげ　柳全さんとしたことが、お女中方の御參詣で、どうやら心も落着かず、そわ〳〵としておいでぢやさうな。

ト葭簀の蔭へはひろ。跡やはり右の鳴物にて花道より笹川幸十郎、羽織袴大小にて出來り、花道にて

幸十　當今世上で噂ある、延命院はあれなるか、花の頃には賑はしき谷中の邊も菊見の外、常は淋しきものなるに、紅葉色ますいろは茶屋、ちりぬる秋の末知らぬ、繁華に負けぬ此賑はひ、實にも群集の參詣ぢやなあ。（ト舞臺へ來り、）幸ひ是に茶店がある、一服致して參らうか。

ト床几へ腰を掛ろ。おしげ茶をくんで出す。

しげ　是はいらつしやりませ。お茶をお上りなされませ。（ト出す、幸十郎茶を呑み、）

幸十　此程よりの天氣續きで、茶見世も繁昌致すであらうな。

しげ　七面樣はおはやり故、お蔭で繁昌致しまする。

幸十　それ故身共も參詣致すが、何か噂に承れば、當院の貫主とやらが、靈驗あらたな七面の告にて加持を施すと申すが、全くそれに相違ないか。

しげ　はい全くでござりまする、只今なぞも何れやらの御殿女中樣が大勢で、御參詣でござりました。

幸十　してその加持と申すのは、いかなる事を致すのぢや。

しげ　委しい譯は存じませぬが、願ひの譯を手紙に認め、封じた儘にて差出しまするると、それをお上人樣が七面樣へ傳へてお加持をなされまするると、奇體に願望成就致すと專ら噂を致します故、私なぞも、貧の病ひをのがれますやう手紙に認め、お加持をお願ひ申したら、その御利益にて此の

様に見世が繁昌いたしまして、貧の病をのがれました。
幸十　願ひの筋を手紙に認め、加持をなすとは不審の一つ、こりやとつくりと詮鑿を、
しげ　え、
幸十　いや、とつくり手前も疝癪の治する願ひを頼み入れん。
しげ　あなた、お茶は如何でござりまする。
幸十　いや〳〵、茶はもう欲しうない、今の内参詣致さう。
しげ　左様ならお歸りを、お待ち申してをりまする。
幸十　いづれ歸りに寄るであらう。（ト懐中より茶代を出して、）些少なれど、取つてくりやれ。
しげ　是は有難うござりまする。
幸十　どれ、參詣致さうか。（ト上手へ行きかけ、以前柳全が落せし文を拾ひ、上書を見て、）「延命院さま願用」はて、なまめかしき此の一封。（ト開封して中を讀むことあつて、）手蹟は見事、花松堂にて、正しく戀を結びし艶書、こりや猶もつて捨て置かれぬ。
ト此内おしげ葭簀の蔭へはひり居て、此時前へ出て、
しげ　あなた、お忘れ物でござりまするか。（トこれにて幸十郎氣を替へ文を懐へ匿し、）

幸十　いや思ひ違ひを致したのぢや。

ト右の鳴物にて門の内へはひる。爰へ花道より九郎藏、雪駄直しの拵へにて笠を冠り、籠を肩へ掛け呼びながら出來り、

九郎　でい／＼、でい／＼。

ト舞臺へ來り、上手へ行かうとする故、おしげ心付き、

しげ　もし／＼直し屋さん、ちよと待つておくれ。（ト是にて九郎藏立留り、）

九郎　お呼びなさつたかえ。（トおしげ、以前の草履下駄を出し、）

しげ　前ばかりでよいさうだが、是を直しておくれ。（ト出すを、九郎藏取つて見て、）

九郎　革つぼだから、五十かゝります。

しげ　頼まれ物だがよいだらう。なるたけ丈夫に直しておくれ。

九郎　はい／＼、畏まりました。

ト下手の葭簀の前へ籠を下し、草履下駄を直しゐる。爰へ以前の柳全出來り、あたりを捜す心にて九郎藏を見て、

柳全　おゝ直し屋が通つたか、是は大きにお世話でござつた。

しげ　もし柳全さま、五十かゝるさうでござります。
柳全　五十とはちと高いやうだが、頼んでしまつたら仕方がない。
しげ　その代りお煮花は、只お呑ませ申しまする。
柳全　それは毎度御馳走だ。
　　　トおしげ急須へ茶を入れしを持つて出で、柳全へ茶を出す。柳全床几へ掛け、お茶を呑みながら、
ときにおしげさん、爰らに文が一本落ちては居なんだか。
しげ　いいえ、そのやうなものは見えませなんだ。
柳全　なんでも五六本受取つた筈だが、何所へ一本落したか。
しげ　もし柳全さん、お浮かれなすつてはいけませんぞえ。
柳全　何も浮かれて居はせぬのに。
しげ　いえ今方爰へ御殿女中が、五六人お出なされると、急にあなたの様子が變り、そわ〳〵となりまするは、矢張り浮かれておいでなさいませう。
柳全　はて、師匠の所へ加持に來た故、なんぼ出家の身分でも、世辭位は言はねばならぬて。
　　　ト此内九郎藏鼻緒を直しながら、笠越しに柳全を見る事よろしくあつて、

九郎　はい、出來ました。（ト草履下駄を出す。）

柳全　お、もう出來たか、早かつた。（ト履物を見る事などあつて、）履き工合も是でよいが、五十では高からう、八文ばかり負けて置かねえか。

九郎　折角旦那がさうおつしやるから、二十に負けて置きませう。

柳全　いや二十とは大負だ。然し是から出入にしてやるから、緣つなぎに負けて置くがいゝ。

ト財布より錢を出して九郎藏に渡す、九郎藏手に取り見て、

九郎　もし、こりや錢の二十でござりますね。

柳全　あたりまへよ、錢でなくつて狐ぢやアあるめえし、誰が木の葉をやるものか。

九郎　いえ、その木の葉なら山吹色、小判で是だけ貰ひたい。

柳全　なんだと。

九郎　柳藏さん、爰にゐなすつたか。（ト笠を取る。柳全、九郎藏を見て悔りなし、）

柳全　や、わりやあ九郎藏。

しげ　そんなら知つたお人でござりますか。

柳全　いや、こりやあわしが實家に居た時分、窓下へ來た雪駄直し、どうして爰らを廻つてゐるね。

九郎 えゝ、いゝかげんにとぼけなせへ。
柳全 はて、とぼけるといふ譯ぢやねえが、久しく逢はぬので、見忘れたのだ。まあ何事も跡でわかるいやさ、跡では却て面倒だ。(ト懷中より二朱金を出し、)これおしげさん、こなたどうか御苦勞ながら、此二朱をくづして來て下さい。
しげ いえ百位ならお立替へ申しませう。
柳全 いや、百では足らぬ故、是をくづして來て下さい。
しげ それでは見世をお賴み申します。
柳全 それはわしが見張つてをります。
しげ どれ、兩替をして來ませう。
ト おしげ二朱金を受取り、下手へはひる。柳全あたりへ思入あつて、
柳全 これ九郎藏、どうして江戶へ出かけて來た。(ト合方になり、)
九郎 柳藏さん、聞きなせえ、こなたも知つて居る通り、あの時頭が配符の廻つた曉星右衞門を籠めた積りで五十兩で袷を賣り、皆に割ぷしてくれたが、甘酒お捨がお饒舌から、目が割出しお尋ね者を、逃した科で小家頭も大阪三鄕構ひをくひ、餘儀なくわしと二人連れで、江戶へ出て來て小

家仲間の、淺草田甫で雪駄直し、しがない暮しをして居るが、二十五兩といふ金を、あの時貰つたこんだから、今かういふ身分になりやあ、二十兩位はくれてもよからう。

柳全 そいつあ少しも知らなんだが、成程手めへの言ふ通りあの時の恩を思やあ、二十兩はやつてもいいが、何をいふにも今日此頃、爰の寺に住込んで、まだ金錢は自由にならぬ。然し斯うして仕合せと繁昌して來た延命院の味噌擂り坊主に住込んだは、非運のやうでも耳つたぶ、どこかに緣のある所だ。どうで一度にかうあゝと纒めた事は出來ねえが、布施や法事の經料を貰つた時は溜めて置き、なしくづしにして惠む氣だから月六齋に爰へ來やれ、二朱づゝやつて月に三分、年に積りやあ九兩だから、三年立てば二十七兩、細く長く取つてくれ。

九郎 さう又話が付いて見りやあ、まさかいやとも言はれぬ譯だ。なんと挨拶するかは知らぬが、歸つて頭に話して見よう。

柳全 いや頭には言はずにくれろ、なんぼおれでもあの時の恩を思やあ十と二十、纒めた金の入る仕事だ、工面の出來るそれ迄は、月に三分の口塞げで、手前の餘德にしてくれろ。

九郎 成程こりやあ御本尊を出さねえ方が割事だ。それぢやあ頭にやあ言はずに居るから、今日の所は一と月ぶり纒めて三分おくんなせえ。

柳全　入舟あれば出舟ありと、今日錄のぴんをいつたら、忽ち三分はき出しだ。（ト懐より三分出して、）
それぢやあ是は一と月ぶりだ。（ト九郎藏に渡す。）

九郎　今月丈はお仕切だから、門へ印の札でも張らうか。

柳全　日勸進ぢやァあるめえし。

九郎　こいつあい丶得意が出來た。（ト金を懐に入れる。）

柳全　そんなら人目にか丶らぬ内、

九郎　柳全さん、お喧しうござりました。

柳全　どうしておれの今の名を、

九郎　茶見世の女の詞で知つた。

柳全　いや、いつもながら素早い奴だ。（ト九郎藏笠を冠り、籠を肩にかけ、）

九郎　それぢやあ月に三分づ丶口塞げを出しなさるね。

柳全　はて、出さねえとは決して言はぬ。

九郎　そりや言はずと、

柳全　え丶。

九郎 でいく／＼。

　ト呼びながら上手へはひる。柳全跡を見送り、件の草履下駄を手に取上げ、

柳全 いや、出がけに鼻緒の切れた時は、氣を付けろといふ譬があるが、さつき出がけに草履下駄の、鼻緒が切れたは前兆か、とんだ野郎に見付かつた。

　ト爰へ下手より以前のおしげ二朱だけの錢を持つて出來り、

しげ おや、直し屋さんは歸りましたか。

柳全 馴染のやつ故五十ばかりは、こんど一緒とかりて置いた。

しげ そんならお金をくづさずと、濟みましたのでござりました。

柳全 折角堅めた此身持も、どうやら又もくづれさうだ。

しげ いえなに、くづして參りました。

柳全 とんだ施餓鬼の鬼めに出逢ひ、せしめた物を吐出すとは、一升袋は矢張り一升だ。

　ト此模樣、題目太鼓にてよろしく道具廻る。

（同院内客間の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面上の方九尺の大床の間、此次九尺の地袋、違ひ棚、

此下手白地中形の襖長押付の欄間、上下共折廻し杉戸、總て此道具修覆前の心にて古びたる誂へよろしく。爰に以前の笹川幸十郎上手に住ひ、下手に延命院日當、坊主鬘衣なりの上人にて控へゐる。
此見得、やはり題目太皷にて道具留る。と靜なる合方になり、

日當 貫主日當は愚僧にござりますが、何御用にござりますか。

幸十 いや別儀でもござらぬが、先達て使を以つて病氣平癒の御加持の儀を願ひし所、日あらずしてかくの如く全快致し、是ぞ全く上人の御丹精による所と御禮の爲に參詣せし故、貴僧に面談願ひしに、早速お逢ひ下されて手前に於ても大慶でござる。

日當 扨はそれ故御參詣とな、いやも拙き愚僧の加持などが、效くと申す次第はあらねど、是ぞ七面大菩薩の貴き利驗、二つには其許樣の御信心がよろしき故に、日あらずして御病氣平癒をなされしならん。して何方の御武家さまにて、御姓名は何と申されまするな。

幸十 いや〳〵先日使ひのもの、只口上にて申入れしのみ、手前の名なぞは申入れねば、御存じはござるまい拙者事は芝邊のさる藩中でござれども、仔細ござつて姓名の儀は御用捨に預りたい。

日當 御身分のある御方さまでは、左樣仰せも御尤も、幸ひ今日本堂に於て施餓鬼供養を行ひし上、組合の者打寄つて、説法執行を致しますれば、何卒御參詣下さりませ。

幸十　それは能き折參詣致した。是非聽聞を致すでござる。して貴殿には何方より、當寺へお直りなされしぞ。

日當　拙僧事は京地の生れ、幼き折に父母に別れ、纔しき親の養育受け、成長なせし身の薄命、是も過去の宿業ならんと未來を助くるその爲に、剃髮致してござりまする。

幸十　して幼き折に先立たれし、親御と申すは武家方なるや、又は平民でござるよな。

日當　さ、それは。(ト思入あつて)幼き折に別れし故、詳しき事は存じませねど、慥に武家出にござるよし、成長の後承りました。

幸十　すりや、しかとは知れませぬとな。

日當　左樣にござりまする。(ト笹川幸十郎思入あつて、)

幸十　何さまそれでは、上人の御薄命の程お察し申す。

ト此時下座にて開帳の太皷を打込む。

日當　最早說法執行の時刻、いざ本堂へ御案內致しませう。

幸十　いや貴僧は定めてお支度あらん、手前一人參るでござれば、必ずお構ひ下さるな。

日當　然らば只今所化共に御場所の差圖致しますれば、まづ本堂へおいで下さりませう。

幸十　左樣ござらば、日當上人、

日當　御信心の御武家さま、

幸十　どりや聽聞を致さうか。

ト笹川幸十郎思入あつて、上手杉戸の内へはひる。

日當　はて有難き高祖の利益、拙き我等が法力も丹精こめる蔭なるか、希代に難病平癒なすと日増しに參詣群集なすは、是も佛の皆利益、どりや說法に取掛らうか。

ト立ちかゝる。爰へ下手の杉戸を明け、以前の柳全出來り、

柳全　日當さま、暫らくお待ち下さりませ。

日當　誰かと思へば納所柳全、待てとは何ぞ用事あつてか。

柳全　へえ、別儀でもござりませぬが、先刻御參詣をなさいました奥女中の方々が是非あなたさまに御加持を願ひ度いと、斯樣に銘々願ひの筋を文に認め目錄を添へ、取次いでくれとのお賴み故、お忙しくもござりませうが、御說法の前方に、御加持をなされておやり下さりませ。

ト以前の目錄包みと文を出す、日當是を見て、

日當　見ればなまめく女性の文へ、目錄添へし願ひの筋、手に觸れるさへ出家の身では、心苦しきその

品々、殊更説法執行の半ば、加持は致してをられぬ故、よしなにそちより斷つてよからう。

柳全　そりや御尤もにござりまするが、斯樣に態々此谷中へ御殿女中が打揃ひ參詣に參られしは、並大抵の事ではござりませぬ。殊に銘々目錄を添へ、御加持を願ひに參りましたを、すげなく返して斷るは寶の山へ入りながら手を空しく逃すも同然、そこが所謂嘘も方便、なんとかかとか誤魔化して、色よい御加持をなされましたら、猶々御加持が流行致し、あなたもお樂になりませうし、此柳全もそれに順じて、御加持のお布施にあり付けまする、さうなる時には本堂や此のお座敷の御修覆も、檀家を頼まず忽ちに、立派に普請が出來ませうが、それもあなたの御料簡次第、爰はとつくり御思案を、なさるがよろしうござりまする。(ト是にて、日當きつとなり、)

日當　こりや柳全、然らばそちは日當に、戒を破れと勸むるのか。

柳全　いえ、お勸め申しは致しませぬが、かうして人氣の寄るといふも、美男にお生れなされたるあなたの御德があればこそ、此期を外さず妙法の祕密を以て金銀の、集まる工夫がござりますのを、見逃しまするは惜しい事故、それでお話し申しまする。

日當　こりや柳全、それへ出い。いやさ、そちや日當を壯年と侮り、墮落の僧に致す氣ちやな。

柳全　いえ、左樣では、

日當　いや／＼それに相違ないわえ。（ト合方きつぱりになり、）三惡道の其内でも、邪淫を犯すは一の誡め出家堅固になす者は女性の手より物さへ取らぬと、恐れ惱む邪淫戒、それに何ぞやこの程より、誰が言ひふらせしものなるか、願ひの筋を文に認め加持を願へば成就致すと言ひ觸らせしものあつて、艷書に等しき數通の文、そちが取次ぎ致すのは、正しく破戒に落さん企み、見るもなかなか穢らはしい、布施物諸共願ひの文、とつとゝ早く返してしまへ。

柳全　それではどうも取次ぎのものが、中へはひつて困りまする。

日當　困るはそちの心柄ぢや。

柳全　返せば三分持出さねば、いえなに、三分かと思ひましたら一兩づゝはひつて、六兩あるに勿體ない。

ト當惑の思入。爰へ下手の杉戸を明け、以前の粂村先きに女中五人出來り、

粂村　お役僧さま、して先刻のお願ひは。

女二　お聞屆けで、

五人　ござりまするか。

柳全　只今申入れましたれど、折惡しく說法の當日、御加持の所は折角ながら今日のお間に合ひませぬ。

日當　その品々をお返し申せ。
柳全　さ、是は。（トもじ〱してゐる。）
粂村　御說法の御當日故、御加持は今日はなされませぬとか。
女二　本意ないことではござりまするが。
女三　御繁多故とあるからは、
女四　是非ない事で、
五人　ござりまする。（ト是にて日當氣の毒なる思入にて、）
日當　お氣の毒にはござりますれど、說法執行の當日故、加持は致してをられませぬ。又お認めなされたる御願望の書き物も、拜見致す暇なければ、布施物諸共お返し申す、早々御殿へお歸りなされい。
柳全　そんならいよ〱布施物を、お返しになりますか。（トもじ〱して居る。）
粂村　いえ、假令御加持を受けませいでも、
女一　御本堂へ參りまして、
女二　御說法を聽聞致せば、

女三　願ひが叶ふも同じ事、
女四　その布施物はその儘に、
女五　お納めなされて、
五人　下さりませ。
柳全　それは近頃お氣の毒な事、折角の思召し故、受納致すでござりませう。
日當　こりやこりや柳全、何を申す、師匠の詞を用ひをらぬか。
柳全　いえ、折角のお志しを受けぬは出家の法にあらず、まづまづ御受納なされませ。
日當　いやいやそれでは濟まぬと申すに。（トきつと言ふ。）
柳全　へえい。（ト是非なく控へる。）
粂村　そりやもう尊きお上人さまへ、女子の身として些かの布施物を備へますは、失禮にはござりますれど、
女二　どうぞそれなる布施物は、
女三　お納めなされて、
五人　下さりませ。

日當　女性方がお頼みの加持もなさいで布施物を、受納致すは道ならずと、お斷り申せしが、左樣に迄言はるゝなら、忝く受納致しまする。
粂村　すりや、御受納を、
五人　下さりますとか、
柳全　やれ〳〵それで、安心した。
　ト日當懷中より御符を六つ出し、ぼんぼり扇へ載せ、
日當　加持を致さぬ代りには、祈念を籠めし身延の御符、是を各々に進ぜまする。
　ト出す、柳全取次ぎ、奥女中五人手に取上げ、
粂村　左樣なら此御符が、噂に聞きし七面樣の有難い御符なるか。
女二　たとへお加持は受けませいでも、かやうな御符を頂きますれば、
女三　守りへ入れて肌につけ、
女四　大事にいたすで、
女五　ござりまする。
　ト下手の杉戸を明け、雲念、西念、坊主鬘着流し、丸ぐけの所化にて、廣蓋へ酒肴の道具を載せ、持

つて出來り、
雲念 西念　はつ、お詫へが參りました。（トよろしく並べる。日當是を見て悔りして、）
日當　や、、此品は。
柳全　いえ、皆さんのお好み故精進物にて誂へました。
粂村　どう致しまして。
六人　私共が。
柳全　あもし、お好みだと申しませぬと、はて、お好みでございませうが。
トよろしく呑込ませて頼む事よろしく。
粂村　ほんに左樣で、
六人　ございました。
日當　お好みなれば是非もないが、以後はかやうな酒などを、寺院へ入れては相成らぬ。
柳全　委細承知致しました。
雲念　お客さまには御一獻、
西念　何卒おすぐしなされませう。

粂村　私共は不調法故。
女二　どうぞそちらでお盃を。
女三　お開きなされて、
六人　下さりませ。
日當　愚僧もいまだ勤めの前故、酒は一切呑まざれど、院主の役故盃のみ、必ず酒をついではならぬぞ。
（ト猪口を取上る。雲念酌をし日當呑む眞似をして、柳全の前へ出し、）よしなにそちらへ、上げるがよい。
柳全　まづお上席の粂村さまへ、お上人よりの思ひざしでござる。
粂村　てもお嬉しい、いえなに、有難く頂きまする。
　　　ト雲念酌をして、粂村盃を乾す。女中皆々是を見て。
女二　常に似合はず粂村さまには、
女三　お嬉しさうにお盃を、
女四　なみ〳〵お過し、
六人　なさいました。（ト日當、是を聞きにが〳〵しきこなしにて。）

日當　信者の衆にも待ち兼ねならん。どりや說法に取りかゝらん。

柳全　御酒のおあいは柳全が、引受けと致しますれば、其儀はお氣遣ひなされまするな。

日當　酒を過すはよろしからねば、身を愼んでおあいを致せ。

粂村　御說法が初まりますなら、御堂へ參つて御聽聞を、致しませうぢやござりませぬか。

女二　ほんにお上人さまの御說法は、とんと芝居の狂言のやうで面白いと申す事。

女三　佛の敎を面白いなぞと、申しましては濟みませぬが、深い所を諭しますには。

女四　淺い所から段々に、解いて行かねばならぬとやら。

女五　それ故こちらのお上人さまも、女子などにも解る樣に。

女六　堅いところを和らげて、お諭しなさるのでござりませう。

柳全　御說法を御聽聞なら、信者の込まぬ其内に、よい御場所へお連れ申しませう。

日當　事に紛れて忘れをつたが、信者の御武家が御一人で本堂においでの筈故、よい場所へ御案内致せ。

雲念
西念　はあッ。

粂村　左樣なれば、

六人　お上人さま。

柳全　どれ、御案内致しませう。

ト柳全先に、奥女中六人所化二人付いて上手杉戸の内へはひる。日當殘り件の文を見て、

日當　おゝ、此文は今の女中へ返して遣るのであつたに、置いて行かれて迷惑致す、かれと云ひこれと云ひ、はて、にが〳〵しき事共ぢや。（ト合方になり、）慾に迷ひて柳全めが勸める邪淫を愼しむも、過ぎし昔に大阪の中津川にて我故に、非業な死をせし六兵衞親子、年こそ替れ今日は同じ月日のかれらが命日、殊に肌身を放さゞる鴛鴦切の守袋親の形見と思ふ故、諸人群集の信者の衆へ見するも名乘る手掛りを、尋ねながらに心の追善、どりや本堂へ參らうか。

ト立上り上の方へ行かうとする。此時下手の杉戸を明け、粂村の召使おころ、嶋田鬘、部屋方の拵へにて出て、

ころ　牛之助さま、おなつかしう存じまする。

ト下に居る日當おころを見て、

日當　や、そちは。（ト恟りなす。）

ころ　はい、大阪にてお別れ申した、おころでござりますわいなあ。（ト是より合方替つて、）

日當　誠にそちはおころなるが、どうして達者でをつたるぞ。

ころ　さあ、あの折に川下へ流されて參りしを、柳屋治右衞門とおつしやりまする池田のお人に助けられ、危い難儀を逃れました。

日當　して〳〵親御の六兵衞殿は、如何なりしかそちは知らぬか。

ころ　父さん事もあの折に波除杭へ取縋り、死に兼ねてあるその所へ、土地のお人が通りかゝり、救ひ上げたるその上に、親子諸共柳屋樣の、御恩になりて此江戸へ、旦那のお供で參りました。

日當　むゝ、して柳屋治右衞門殿とは、如何なる御仁でありつるぞ。

ころ　それは池田の酒問屋にて、先頃江戸の新川へ、お出店が出來るに付き、お孃さまのお付きにて、此身も諸共父さんと一緒に江戸へ參りましたが、其お孃さまがお屋敷へ御奉公にお上り故、お召仕に付添ふて、部屋方奉公致してをります、今日もそのお孃さまのお供で是へ參りました。

日當　さては只今五人連れにて、是へ見えたる奧女中の、供にてそちは參りしか。

ころ　はい、お迎ひ旁々參りましたが、思ひがけなうおまへさまに、お目に掛るも盡きせぬ御緣、どういふ譯にてあなたには、其お姿におなりなされました。

日當　左樣な譯とも知らぬ故、あの時二人が非業な死をとげしと思ひ迫りし故、菩提の爲めに剃髮なし今も今とてそなた衆の、命日故に懷舊の涙催すその折から、そちに逢ひしも佛の導き。

ころ　その御眞實なお心故、假令御出家なされましても、今活佛と御評判のお上人さまにおなりなされ何御不自由はござりますまいが、菩提の爲めとおつしやりますれば、私親子が此樣に、無事でをります上からは、どうぞ不便と思召し、御還俗をなされまして、一旦誓ひし私と女夫になつて下さりませ。

日當　いや、折角の賴みなれども、もはや還俗致されぬ。

ころ　そりや何故でござりまする。（ト合方きつぱりとなり、）

日當　そりやはやそち達親子の者の、菩提の爲めを弔ふばかりで斯く剃髮を致せしなら、還俗せまいものでもないが、一人出家なす時は九族天に生ずると、佛の敎へをその儘に、幼き時に父母に捨てられ世に薄命なる身の上を、悔悟致せし剃髮故、假令そち達親子のものが、無事でをるとも此儘に墮落をなして還俗しては、是迄盡す難行も水の泡なる此日當、今更五戒は破られぬ。

ころ　すりや御剃髮なされしからは、もう御還俗は出來ませぬか。

日當　命全うしたこそ幸ひ、此日當はあの折に別れて世になき夫と諦め、緣を求めて夫を持ち、親に安心さするがよい。

ころ　ても情ない事ぢやなあ。（ト本意なきこなし、）

日當　何かの事にて役目の怠り、どりや說法に取りかゝらん。

ト上手へ行き懸る。此内おころ思入あつて、態と癪のさし込むこなしにて胸を押へ、

ころ　あいたゝゝゝ。

日當　これ〳〵おころ、如何致した。

ころ　はい、お嬉しいと悲しいとが、一つに胸へさし込みまして、持病のつかえが起りました。

日當　さりとては氣の弱い、只今誰ぞよこさう程に、藥用手當を致すがよい。

ト日當行き掛る。おころとりつめし思入にて、

ころ　むゝ——。（ト反りかへる。日當困りし思入にて、）

日當　こりや愚僧一人で困つたものぢや、こりや誰もをらぬか。誰ぞ參れ〳〵。おころどの、何所が痛みまするな。

ころ　はい、此胸先きでござりまする。

ト是にておころ、日當の顏をぢつと見る。日當ぞつとせしこなしにて、思はずおころの側へ行かうとする。此時上手の杉戶を明け、以前の笹川幸十郞窺ふ。おころ是を見て、

あれ、誰やらが。

ト日當後ろを見返り、恟りして飛びのき、しやんとなるを木の頭。

日當　南無妙法蓮華經。

ト眞面目に言ふ。笹川幸十郎は杉戸を締める。おころは嬉しきこなし。此模樣、題目太鼓開帳の太鼓を打ちおろし、よろしく

ひやうし　幕

と幕引付けると、道具蔭廻しにて直引返す。

(秋坂侯廣間の場)――本舞臺一面の平舞臺、正面上下三方共、紋散らし銀張りの襖、日覆より同じく紋散らしの大欄間をおろし、向ふ揚幕の所杉戸の出はひり、舞臺花道とも一面に高麗べりの薄縁を敷詰め、總て秋坂侯廣間の模樣、爰に○△□◎の袴裃の近習四人控へ居る。此見得調べにて幕明く、

○　いやなに各々、御前さまには殿中よりいまだお下り遊ばさぬが、案じる儀ではござるまいか。

△　されば、いつよりお下りのお刻限が遲刻せしは、何か大事な御評議でもある事と相見えます。

□　外のお役と事替り、寺社お掛りの御奉行は、なか〳〵御用も御繁多にて、

◎　御歸邸あつてもろく〳〵に、御酒宴さへも初まりませぬは、御心配な儀と存じまする。

○ われ〳〵共の身に取つては、斯樣なお役を御前さまが御勤役なさるより、
△ 平大名と呼ばれましても、お氣をお樂にお持ちなされて、御酒宴でもお開き遊ばし、
□ お奥へ召されて我々迄、お流れ頂戴致した上、
◎ 隱し藝でも現しますが、身の樂しみと申すもの。
○ 高木風に憎まるゝと、世の諺に申しますれば、
△ お役を致せば體を苦しめ、
□ 金は延びても壽命は縮まる。
◎ よい都合には參らぬもの。
○ 早くお下りが、
四人 あればよいが。（ト此時花道の揚幕にて）
呼ビ 御前さまのお下り。（ト呼ぶ。）
○ 最早御前の、
四人 お下りよな。

ト是より誂への鳴物になり、花道より秋坂淡路守、繼上下大小にて、近習一人附添ひ出來り、花道に

留る。舞臺の四人は宜しく出迎ひ、

○　はツ、お下りと承り、

△　是迄お出迎ひ、

四人　仕りまする。

淡路　おゝ、出迎ひ太儀。

ト舞臺へ通る。是にて近習皆々褥、脇息、烟草盆など上手よき所へ直し、秋坂淡路守、褥の上へ住ふ。皆々下手へ平伏なし、

○　御前さまのお下りが、いつもよりお遲い故。

△　御殿中の御樣子如何かと、一統心配致せし所、

□　いつに替らぬ我君さまの、

◎　御機嫌の體を拜しまして、

○　恐悅申し、

四人　上げまする。

淡路　いや、別に變りし事もないが、幸十郎は如何せしか。ちと談じたき事がある。此所へ呼んで參れ。

○　委細承知、

四人　仕りまする。（ト此時花道の揚幕にて、）

幸十　おいでに及ばぬ幸十郎、只今それへ罷り出ます。

○　あのお聲は、

四人　笹川氏。

ト序の舞になり、花道より前幕の笹川幸十郎、上下大小にて出で、直に舞臺下手へ來り平伏する。淡路守此體を見て、

淡路　只今そちに内談あつて、呼びに遣はさうと存じをりしに、折能く次へ參りをりしか。

幸十　はツ、お下りと承り、申上げたき事あつて、お召しも待たずお次迄、推參致してござりまする。

淡路　すりや、其方にも予へ對し、何か用事があると申すか。

幸十　はツ、恐れながら暫時の間、お人拂ひを願ひまする。

淡路　承知致した。皆の者は次ぎへ立て。

四人　はあ、。（ト辭儀をなし、上下へ別れてはひる。跡に兩人思入あつて、）

幸十　して御前さまが拙者めへ、御内談と仰せられまするは、如何なる儀にござりまする。

淡路 別儀でもないが、延命院日當といへる賣僧の調べぢや。

幸十 えゝ、何と仰せられまする。(ト思入。本調子の合方になり、)

淡路 今日殿中老中部屋にて、某へ御內意には、谷中延命院の住持たる日當といへる奴、出家に惜しき美僧にて、希代の加持を施すとあつて、當今世上の噂さ高く、信仰の者群集なすうち、館向きの侍女などが多く寺院へ立入りて、過分の布施を貫主に與へ、言寄るなぞとよからぬ風說、心得難き事ども故、窃に詮索致せとある老中よりの則ち內意、承つて歸邸せし故、そちに內談致すのぢや。

幸十 すりやそれ故の御內談とな。愚臣も君の仰せはなけれど、其儀豫てより承り及びし故、今日私用ござりまして、根岸あたり迄參りし歸るさ、延命院の門前にて茶店に立寄り、寺院の樣子餘所ながら探り聞きしに、心得難き事共ばかり、殊更手に入る一通の、艶書に扨はと存ぜし故、信者と僞り座敷へ入込み、猶も樣子を探りし所、眉目よき女と日當めが猥らな事を致す樣子を、とくと見屆け立歸り、此由君へ言上なさんとお下りを待つてお次より、推參致してござりまする。

淡路 おゝ、能くぞ詮索致して參つた。申す迄はあらざれど、身も永らく所勞に犯され引籠り居つたるところ、今般俄かに寺社奉行の勤役仰せつけられしは此の上もなき身の面目、勤役中に何んなり

と上へ對してお爲めになる、御奉公振りも致したければ、そちも共々心を盡し、此詮索を致して
くりやれ。

幸十　仰せの如くそれ故に愚臣も心を碎きまして、とくと詮索致す心得、さはさりながら御新役の我君
故に、召捕るにも不穿鑿の儀があつては、却つて君の御耻辱。

淡路　そりやその方の言ふ如く、平民なぞと事替り、三衣を纏ふ一箇寺の坊主を破戒と認むるは、容易
ならざる女犯の罪。

幸十　殊更以て生き佛と、信仰さるゝ貫主の日當。

淡路　萬一事を仕損じなば、疎忽の奉行と世の嘲り。

幸十　かれが墮落を取調ぶる、

淡路　はてよき工夫が、

兩人　ありさうなものぢや。

ト兩人ぢつと思入。下座の琴唄になり、

〽村雨やわれのみ濡るゝ袖ならじ、その移り香を忘れもやらで、二人ぬる夜は女子同士、

ト此内淡路守思入あつて、

淡路　こりや幸十郎、そちが妹は何歳になつたな。
幸十　はツ、お奥へ出てをりまするが、早や當年は十八歳になりまする。
淡路　予も一昨夜奥へ參り、そちが妹を見受けしが、年頃と申し、美しいものぢや。
幸十　不束なる妹めを、お褒めに預り恐れ入りまする。
淡路　取分けかれは發明なりと、わが奥の氣に入りぢやて。
幸十　御最屓に預りまして、有難い儀にござりまする。
淡路　それ故かれも奥向きの、代參なぞに出づるであらうな。
幸十　いえ、まだそれは承りませぬ。
淡路　はて、代參にはよい年頃ぢや。
〽比翼連理と契りしことも、仇し枕の浮き涙。（ト此内幸十郎思案の思入にて、）
幸十　ありや大奥にて姫君が、お調べ遊ばす琴のお稽古。
淡路　比翼連理と契りしことも、仇し枕の浮き涙。
幸十　その琴唄の袖の露。
淡路　濡れし汚名は受くるとも。

幸十　調べのゆるし狂ひなく。
淡路　合す調子に絲口を。
　　トよろしく思入。幸十郎會得せしこなしあつて、
幸十　はツ、君の御賢慮、（ト肩衣の衣紋をくつろげるを木の頭。）
　承知仕る。
〽殘る此身を如何にせん。（ト琴唄の上げ時計の音にて、兩人氣味合ひよろしく。）
ひやうし　幕

四幕目

谷中延命院の場
同座敷客間の場
同裏手塀外の場
同別間捕物の場
組合寺詮議の場

〔從川幸十郎、雪駄直し馬吉、延命院日當、曉星右衞門、役僧柳全。奥女中竹川、粂村召使おころ、其他。〕
（谷中延命院の場）――本舞臺一面の平舞臺、眞中二間の玄關瓦庇、式臺、左右なまこ緣の杉戸、

正面白地中形の襖、上下とも瓦燈形の窓のある白壁、瓦庇、腰通り板羽目、上手よき所に、振りよき松の木、この傍に碑など建てあり。下の方石の井戸、此脇に花手桶の置き場ある事、日覆より松の釣枝、總て院內芝關の體。爰に雲念、西念、鼠の着附、丸ぐけの所化にて立ちかゝり、參詣娘おいとおこま、町家の娘、女房、花嫁、おでこの長家の嚊、おしづ、何れも好みの拵へにて立掛り居る。此見得、題目太皷にて幕明く。

いと　私共は遠方から、わざ〳〵お加持を願ひませうと、連れ立つて參りましたもの。

こま　またあすと申しましても、遠方のことでござりますから、ならうことなら今日のうち、お加持をお願ひ申しまする。

しづ　おいとさんやおこまさんと違ひ、わたしは亭主のある體に、やかましい姑がある故、うちを出るのは誠に臆劫。

でこ　どうぞ、お二人さんのお取次で日當さまがわたしらの、お加持をなすつて下さるやう、よろしくお賴み申しまする。

雲念　いや折角のお賴みなれど、門に張出してある通り、夕七つ時限りなれば、幾度取次いでも無駄な事ぢや。

西念　遠方とあれば猶の事、日が暮るゝと道が物騒ぢや、今日は早く歸らしやつて、またあした出直してござらつしやい。

いと　いえ遠方と申しましても、つい池の端でござりますから、切通しさへ越しますと、道は賑かでござりまする。

こま　今方上野の七つの鐘が聞えたばかりでござりますから、日の暮れには間もあり、

しづ　お加持にお手間が取れますなら、御祈禱のところはどうでもよいから、日當さまのお顏を一目拜んで歸りたい。

でこ　實のところはお加持は付けたり。日當さまが見たい故、かうして皆で連れ立つてお加持に參つたのでござります。

こま
いと　あゝもし、おまへさん餘計な事を。

でこ　はて、言はねば譯がわからぬわいな。

雲念　いやさういふ譯なら上人さまの、顏でも見せてやりたいが、生憎今日は差合ひがあつて、七つ過ぎからは一間にお籠りだ。

西念　かう見たところが亭主持ちの、嫁や年增は一向ふめぬが、二人の娘は仲々ふめる。名代でよけれ

ばお加持をして進ぜよう。

いと　有難うはござりまするが、御名代では、のうおこまさん。

こま　お加持が利かぬとつまらぬ故、又出直して來ようわいなあ。

しづ　足長島や小人島の、お加持はこちらでお斷り。

でこ　さあ〱、早く歸りませう。

西念　えゝ口の惡い人達ぢや。

雲念　足長島とは誰がことぢや。

しづ　誰だか自分の影法師を、寫して見たら分りませう。

いと　あれ、その樣な憎まれ口は、

こま　言はぬものでござんすぞえ。

でこ　さあ〱、早く歸らう〱。

ト右鳴物にて四人は連立つて花道へはひる。所化二人跡を見送り。

雲念　いや、下町から張り半分で、出掛けて來る奴は相手にならぬ。

西念　四人の頭で祈禱料を、百疋も置けば關の山、斷わる方がましといふもの。

雲念　どうか椎茸と島田湯葉の、旨さうなものが來ればよい。

西念　御殿模樣の客でなければ、たんまり布施にはありつけませぬ。

トやはり右鳴物には花道より奥女中竹川片はづしの奥女中にて、中間一人付いて出來り、花道にて、

竹川　ほんに今方聞いたのは、七つと見えて門が締り、潜門ばかり明いてゐたわいなう。

中間　いづれ今晩あなた樣には、お堂へお籠りでござりませう。

竹川　樣子によつては歸らにやならぬが、多分お籠りであらうぞや。

中間　まあお玄關へいらつしやいまし。

竹川　さうしようわいの。（ト舞臺へ來る、雲念西念此體を見て下にゐて、）

雲念　どなた樣かと思ひましたら、竹川さまでござりますか。

西念　大分今日は御ゆるりと、お遲い御參詣でござりました。

竹川　寄り道を致しましたので思はず遲刻を致しましたが、お差合さへござりませずば、今宵はお籠りを致しませうと、遲いを承知で參りました。

雲念　いえ、あなた樣の事なれば、假令差合がござりませうとも、差繰りますでござりませう。

西念　お馴染深いあなたさま故、上人さまもゆつくりと、お加持をなさるでござりませう。

竹川　それは何よりお嬉しうござりまする。
中間　して下郎めは、如何致しませう。
竹川　其方は供部屋にて、今宵は休息したがよい。
雲念　西念どのにはお供の方を、いつもの部屋へ案内さつしやい。
西念　よろしうござる。さあお中間、一緒にござらつしやい。
竹川　左様ならわたくしも。
雲念　どれ、御案内いたしませう。
ト右鳴物にて雲念先きに竹川は奥へはひる。中間は竹川の履物を持ち、西念案内して下手へはひる。
爰へ花道より非人雪駄直しの馬吉を子分九郎藏案内して出來り、花道にて、
馬吉　それぢやあ手前御苦勞ながら、柳藏を呼び出してくれ。
九郎　あい、呼出して連れて來るから、ちつとの間、待つてゐなせへ。
ト馬吉は花道に噂み居る。九郎藏は舞臺へ來る。此時下手より以前の西念出て來る故、九郎藏見て
お所化さん、柳全さんにお目に掛りたいが、ちよつと爰へ呼んぢやあ下さいませんか。
西念　何ぢや、柳全さんに逢ひたい。(ト九郎藏の風體を見て、)何んだかをかしな。

九郎　えゝ。

西念　呼んでやるから、控へて居さつし。

ト玄關の奧へはひる。九郎藏あたりを見廻し、

九郎　お加持で錢を儲けやあがると見えて、大層立派な此普請、中へはいつて見たことなら、造作廻りも立派だらう。智慧のある奴にやあ叶はねえ。（ト馬吉舞臺へ來り、）

馬吉　こう九郎藏、まだゐては出て來ねえか。

九郎　今呼出しをかけたから、そこらの蔭に隱れて居なさい。

馬吉　おゝさうか。

ト下手の手桶置場の蔭へ隱れる。爰へ玄關の奧より柳全坊主鬘、納所の拵へにて出來り、

柳全　わしに逢ひたいとは、どなたぢやな。（ト式臺の所へ出る。九郎藏柳全を見て、）

九郎　柳全さん、わつちでごぜえます。（ト前へ出る。柳全九郎藏を見て、わるい奴が來たといふ思入にて、）

柳全　おゝ、雪駄直しの九郎藏か。（トあたりへこなしあつて、）

九郎　さあ度々來ちやあ迷惑するから、月に六齋と定めて置けと、言渡されちやあ居るけれど、以前は一つ鍋の物を朝夕喰つた非人仲間、云はゞ兄弟同然だから、六齋と定めても置かれねえのさ。

柳全　以前の誼があればこそ、來る度每に二朱づゝ遣り、月に三分の御得意さまだ。文句を云ふにやあ及ばねえ。

九郎　わつちやあそれで默つて居ても、外に默つて居ねえ人があります。

柳全　なんだ、默つて居ねえ人とは。（ト爰へ下手の小蔭より非人馬吉出て、）

馬吉　おい柳藏、久しく逢はねえな。（ト前へ出る。柳全馬吉を見て、）

柳全　や、おまへは頭。（ト悄りこなし。）

馬吉　いつ天窓を丸めたか、いゝ坊主振りになつたな。

柳全　誠に御無沙汰を致しましたが、それぢやあ九郎藏が饒舌つたのか。いえなに、いつ江戸へ出ておいでなさいました。

馬吉　こつちへ來たのは此夏だが、こなたの居所を捜したが、何處に居るかさつぱり知れず、此の九郎藏が逢つたので、居所が知れて逢ひに來たのだ。

柳全　して大阪からどういふ事で。

馬吉　人相書の廻つたを承知で曉星右衛門を、訴へもせず逃したと詮議を受けたその科で、大阪三鄕構ひをくひ、それから九郎藏お捨と共に、江戸へ流れて出て來たのだ。

九郎　お前もあれから一緒に居りやあ、その兇狀を受ける仲間だ。

馬吉　何にしろ賴みに思ふ柳藏、手前が出世をして延命院の役僧になつて居るのはおれの力、江戸へ來た時は世話をしてくれる約束、よもや見捨てくれやあしめえな。

柳全　お前のお世話になつた事は決して忘れはしませぬから、及ばずながらお世話をします。何を言ふにもあたりの人目、いづれ夜でも小屋へ行き、ゆつくり話をしますから、今日は歸つて下さいまし。

馬吉　歸つてくれと云ふなら歸つてもやらうが、どうで出て來る位だから、碌な事ぢやあ出て來ねえ。ちつとばかり貸して貰ひてえ。

柳全　それゝ承知はしてゐます。（ト懷より小判を十枚出して紙に包み、）もし頭、これではこなた不足だらうが、何をいふにも出家の身、たんと貯へてゐやう筈はなし、二朱一分づゝ貰ひ溜めた、布施や經料の金が十兩あるから、是を持つて歸つて下さい。

ト出す。馬吉是を取らず、

馬吉　いや十兩ばかりのはした金を貰はうと云つて來やあしねえ、そりやあ其方へしまつて置きねえ。

柳全　さうして、幾ら吳れと言ひなさるのだ。

馬吉　たんとも入らねえ、百兩貸してくれ。

柳全　何んだえ、百兩え。（ト合方になり、）

馬吉　はて恂りするにやあ及ばねえ、只貰はうとでも言やおしめえし、間がよけりやあ返す氣で、貸してくれろと頼むのだ、四百四病の病より一番難儀な貧の病ひ、その難病を治すといふ世間に噂の生佛、加持や祈禱でたんまりと、取込む金は腐る程、しまつてあると評判する延命院の納所坊主、百や二百の遣繰は出來ねえ事もあるめえと、そこを見込んで借りに來たのだ。

九郎　もし柳全さん、こなたの恥を言ふやうだが、一文なしで路頭に迷ひ死ぬといふのを頭が救ひ、居候に小屋へ置いたも、恰度足かけ二年とやら、其の恩返しと思つたら百兩位は貸してもよからう。

柳全　さあ、その恩は忘れはせぬが、何をいふにも此寺へ、昨今住込んだわしだから、まだ錢金は自由にならぬ。

馬吉　自由にならざあ尋常ッこに住持に借りてくれるがいゝ。御殿女中を引込んで、どんな祈禱をするかは知らぬが、いづれ洗やあ生臭へ油の浮き出すあぶく錢を、取込む坊主の身分に取りやあ、百兩位はなんでもなからう。

柳全　いやどうして〳〵金ばかりは、灰吹きと同じ事でたまる程きたなくなるから、二朱の金でも無駄には使はず、締り見世故番頭する役僧なぞはこつぱいだ。
九郎　ところが金のある奴は、どこがどこ迄も慾張るから、利息がたんと取れると云やあ、倒れと知らずに大きな金を、うか〳〵貸出す金持根性、うまく傍から勸め込んで金を引出し貸すがいゝ。
柳全　それも火急な事なれば、なか〳〵今の間にはあはぬ。
馬吉　そんならお前の素性を打ちまけ、住持に逢つて借りて行かうか。
柳全　えゝそれを言はれてたまるものか。
九郎　それぢやあ金を貸してくれるか。
柳全　それだといつて今と云つては。
馬吉　えゝ、急場だから出て來たのだ。（トきつと云ふ。是にて柳全是非なき思入にて、）
柳全　所詮百兩は出來にくいが、もう十兩か二十なら、今算段して持つて來るから、ちつとの間待つて下せへ。
九郎　それぢやあせいぐ〳〵算段して、五十兩にもして來なせえ。
柳全　いや、なか〳〵さうは纏まらない。（ト柳全奥へはひろ。馬吉跡を見送り思入あつて、）

馬吉　星右衛門から只取つた金とはいへど二十五兩、あいつにおれが遣つたのに、江戸へ歸るとそれつ切り、手紙一本寄越しやあせず、あんまり不實な野郎だから、逢つたら言はうと思つたところ、是から五月蠅くあいつをいびり、小遣錢をとらにやあならねえ。
九郎　是と云ふのも此間、わつちが爰の門前で見かけたとこから居所が分り、頭に話をした故だ。お前さんにだまつて居りやあ、月に三分の口塞げで、細く長く取れるものを取らずに案内したからは一割位はお定まりだ。
馬吉　坊主あたまになつて居ちやあ、道で逢つても氣が付くめへが、窪んだ目にしちやあよく見出した。
九郎　又目の事を言ひなさるか。そんなせりふは直し屋も、もう古がつて繕ひません。
馬吉　さうよ、新らしくでも買ひかへざあ、引込んだ目は直りやあしねえ。
九郎　えゝ、心細い事を言ひなさんな。
ト奚へ奥より柳全金包を持出て、
柳全　さあ頭、やう〳〵の事で算段して、三十兩に纒めて來たから、是を持つて歸つて下さい。
ト馬吉の前へ出す。
馬吉　それぢやあ是よりほか、出來ねえのか。

柳全　はて、今もわしが言ふ通り急場の事故出來にくい。又その內にどうかするから、三十兩で歸つて下さい。

九郎　然しこいつァ緣つなぎだから、又出直しとおしなせえ。

柳全　いや、是で當分出直して來ても、跡の所はお斷りだ。

馬吉　斷るなら斷つて見ろ、こつちにも料簡がある。

柳全　はて、さう角張つては物がない、日に一兩づゝ遣つても、三十兩なら一月あるから、二月ばかり待つて下さい。

馬吉　一兩ばかりの小遣えを每日大事に遣ふ程なら、いまだに乞食をしちやあ居ねえ。十兩あらうが百兩あらうが、呑むと打つとで宵越しの錢は持てねえ生れつきだ。

九郎　それぢやあ頭、山下あたりで歸りに一杯、御馳走にならう。

馬吉　團子坂に乙な家があるから、あすこへ行つて一ぺいやらう。

柳全　近所で酒を呑みなさるなら、どうぞわしの噂なぞは。

馬吉　此金のある內は言やあしねえ。

九郎　又無くなつたら言ふかもしれねえ。

柳全　いや、とんだ者に、

馬吉　えゝ。

柳全　いえとんだ用を忘れて居た。それぢやあ頭、御免なさい。（ト柳全奥へはひろ。）

九郎　さあ頭、出かけませう。

馬吉　然し金といふ奴は、いつ見ても惡くねえ奴だ。（ト件の金を取上げ算へて居ろ。）

九郎　丁度刻限もお誂へ、根津はどこの家へ上んなさる。

馬吉　誰も遊ばうと言やあしねえ。

九郎　はて團子坂でぱいいち極めりやあ、あれから歸りは定つて居やす。

馬吉　さう言はれると、遊びたくねえ。

九郎　おつと、それぢやあ默つて居ます。

馬吉　よく遊びたがる奴だなあ。

ト誂への合方になり、兩人連立つて花道へはひろ。跡時の鐘になり、玄關の奥より柳全出て是を見送り、

柳全　いや、とんだ奴に附け込まれた。（ト合方になり。）今更昔を考へれば、わるい事は出來ぬもので以

前京都に居た時分、隣りに住ふ浪人者眞葛六之進といふ奴の女房を、間男ツた事が顯はれ、四國の方へ逃げて行き、大阪へ歸つた其の時は、鐚一文の路用もなくいつその腐れ死なうとしたを、あの馬吉に助けられ、死ぬには増しと二年越し乞食の中へ居候、その上路用の金迄貰ひ、生れ故郷の江戸へ來て、まさか不義理をした土地にのづらでも居られぬ故、いゝいゝぼくよけがてら坊主となり爰へ納所に仕込んで、若い住持に惡事を勸め、やうやく溜つた三十兩、あの馬吉にいたぶられ、一文なしになるといふは、是がほんのもとの杢阿彌、どうでも法華は錢なしだわえ。

ト思入あつて奥へはひろ。やはり右の鳴物にて花道より眞葛六兵衞、町人羽織着流しの親仁にて出來り、花道にて、

六兵　成程噂に聞いたよりは、大層な立派な寺、どれ向ふへ行つて案内を乞ひませう。（ト舞臺へ來て、玄關に向ひ、）はい、お頼み申しますく。（ト奥にて、）

雲念　どうれ。（ト聲して出來り、）いづれからござらしやつたな。

六兵　私事はこちらのお住持が大阪においでの時分、お世話さまになりました六兵衞と申しますもの。先頃江戸へ下りました故、お禮かたぐ參りました、以前火打石を賣つた者だと、おつしやれば分りまする。どうぞお取次ぎをお願ひ申します。

雲念　はゝあ、左樣でござるか、暫らくそれにお控へ下され。

ト奥へ這入る。爰へ花道よりおきせ吉原の引手茶屋の後家の拵へにて出來り、花道にて、

きせ　ほんに女といふものは、よつ程割が損なもので、たつた一遍逢つたばかりで、こんな體になるといふは、ほんに因果なことだ。どれ早く行つて相談しませう。(ト舞臺へ來、六兵衛を見て、)お前さんも御參詣でござりますか。

六兵　いや〳〵、わしは用事があつて此夕暮に來たものぢや。

きせ　柳全さんも還俗したら、こんな白髮天窓になりはせぬか。

六兵　えゝ。

きせ　いえなにこつちのこと、どれお堂へ詣つて來ませう。

ト下手へはひる。六兵衛思入あつて。

六兵　氣違ひじみたばあさんだが、お加持にでも來たのか知らん。(ト爰へ奥より雲念出て、)

雲念　上人へ申聞けた所、奥へ通せと申されます故、御案内を致しませう。

六兵　それは有難い、左樣なら、御免下さい。

雲念　さあ、かうお通りなされい。(ト兩人奥へはひる。入替つて柳全出て來て四邊へ思入あつて、)

柳全　大阪ものと聞いた故、襖の蔭から覗いて見たら、ありやあ京都でその昔、密通をした女の亭主、浪人者の六之進、こつちの住持に大阪で世話になつたといつて見りやあ、どうやら縁もある樣子あれといひ是といひ、もうか〳〵と此寺に、長く足は留められぬわえ。

ト考へて居る。下手より以前のおきせ出來り、柳全を見て、

きせ　そこにおいでのは柳全さんか。

柳全　おゝ、こなたはおきせ、どうして來た。

きせ　逢ひたかつた〳〵わいなあ。（トいやらしきこなしにて縋るを突退け）

柳全　えゝ苦勞人のくせに、ふざけなさんな。

きせ　いえ素人でも苦勞人でも、此道ばかりは別なもの、戀にかはりはござんせぬ。おまへに逢つてしみ〴〵と話をせねばならぬ故、茶屋生業に忙しい日暮を待つて內を駈出し、淋しい根岸や芋坂の怖い所を女一人で、態々相談に來たものを、ふざけるなとはあんまりな。なぜその口でよく來たと優しく言つておくれでない。そりやあんまりぢや、あんまりでござんす。（トいやらしきこなし。）

柳全　そりやあこつちが俗の身なら、山坂越えて逢ひに來たのを情なくも出來ぬ譯だが、何を云ふにも出家の身は、女犯の罪が怖いから、人目を案じて情なくするのだ。氣に障つたら堪忍しなさい。

きせ　さういふ譯なら仕方がないが、その心配をしないやうに、今日相談に來ましたのは、お前に還俗して貰はねば、外聞の惡い事が出來た。
柳全　さうしてそりやあ、どんな譯だ。
きせ　さあわたしやお前の胤を宿し、たゞならぬ身になりました。
柳全　えゝ、それぢやアあの時たつた一度で、
きせ　あい、あのお籠りのお加持がきいて、かうした體になつたからは、父無し兒を生んだなぞと茶屋仲間で言はれては、わたし一人がうまらぬ故、どうぞお前も還俗して引手茶屋の亭主になつて下さんせいな。
柳全　どうでこつちも此寺に、ぐづ〳〵しては居られぬから、旨い口とはいひながら此の化べそぢやあ懲り〳〵だ。
きせ　なんだとえ。
柳全　こいつア餘程思案ものだ。
ト腕組みをする。此模樣題目太鼓にて道具廻る。

（同座敷客間の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面の上手九尺の大床の間、黒塗の框、此下手九尺地袋違ひ棚、此下手白地中形の襖、上下折廻し裾通りへ蓮を畫きし杉戸の出はひり、日覆より長押付の欄間をおろし、花道揚幕の所杉戸の出はひり、舞臺花道とも一面に薄縁を敷詰め、よき所へ雪洞付きの燭臺を灯し、總て延命院廣間の體。爰に以前の六兵衛上手に住ひ、雲念西念菓子を積みし高杯、茶煙草盆などを運び下手に住ひゐる。此見得音樂の入りし合方にて道具留る。

六兵　いや此樣に御叮嚀なる、お持成しでは恐入ります。必ずお構ひ下さりますな。

雲念　只今是れへ上人が、御挨拶に出られますから、暫らくお待ち下さりませ。

西念　粗末なれどもお茶御菓子、どうぞお上り下さりませ。

六兵　御遠慮なく頂きまする。（ト菓子を喰ひ、茶を呑み居る。爰へ上手の杉戸をあけ以前の竹川出て、）

竹川　お所化衆にはそれにお出でござりましたか。（ト前へ出る。所化二人竹川を見て、）

雲念　竹川さまには、何御用か。

西念　お呼びなさればよろしいに。

竹川　喉が渇いてなりませぬ故、お白湯を一つ頂きたうござりまする。

雲念　はッ、只今持參いたしますれば、

西念　まづお座敷へおいで下さりませ。
竹川　左樣なら、お願ひ申しまする。（ト六兵衞へこなしあつて、）あなた御免下さりませ。
　ト上手へはひる。六兵衞此體を見て、合點の行かぬ思入にて、
六兵　もしお所化さま、只今のお女中はな。
雲念　あれは參詣に參りまして、戻りが遲くなりし故、
西念　本堂に於てお通夜を致すと、お籠りの參詣人でござります。
六兵　扨は世間の噂さの通り、（ト思入あつて氣を替へ、）さて〳〵、御繁昌な事でござる。
雲念　只今上人が參りますれば、
西念　まづ御ゆるりとなされませ。
六兵　はて、お構ひなくおいで下さい。（ト所化二人は下手へはひる。六兵衞思入あつて、）此頃世間の噂を聞けば、延命院は美男故、女を引込み加持と唱へ猥らな事を致すなぞと、專ら世間でよからぬ風說今の女中の樣子といひ、こりや風說に違はぬわえ。
　ト思入、音樂きつばりとなり、正面下手の襖を明け、日當出來り、
日當　これは〳〵六兵衞殿、ようこそお訪ね下された。（トよろしく住ふ故。）

六兵　（日當さま、さあ是へ。ト立たうとする故、）
日當　あゝいや〳〵どうぞそれにおいで下さい。御遠慮では痛み入ります。
六兵　いやもう久々にてお目に掛りましたが、大層立派になられたので、わしも何となく悦ばしうござる。
日當　拙僧事も先達て御息女のおころどのより委細の譯を承り、お手前さまがお達者にて當地にお下りなされたと詳しく知れて悦ばしく、おいでを疾うからお待ち申した。さて〳〵以前に變りなき御巖丈の御容態、誠に以つて悦ばしうござる。
六兵　先日娘が此寺へ主人の供で參りし時、おまへ樣にお目に掛り、こちら親子の菩提の爲め、御剃髪をなされし事をお聞き申して屋敷へ歸り、今日主人の宿下りで新川へ參りまして私へ話せし故、早速にお訪ね申しましたが、是と申すもその以前貧苦にせまり此六兵衞、大阪梅田の小橋から身を投げ死なうといたしたをお前樣に助けられ、あすの元手の金迄も惠んでお貰ひ申したる親子の者の大恩人。
日當　まだその頃は拙僧も牛之助といふ旅役者、心願あつて此江戸へ下る途中の事なれば、こなたの内へその夜泊り、結ぶ仇夢夢覺めて、親御の前も面目なく出立なせし跡を追ひ、

六兵　娘おころがおまへ樣と二人で江戸へ下らうと、連立つ中津の渡し場にて、乘込む舟に盜賊の捕物あつて二人とも逃げるはずみに川へ落ち、此身は危く助かりしが。

日當　行方を尋ねおまへさまに出逢ひし甲斐も情ない。娘が水死をしたと聞き、わしもその儘身を投げて、

六兵　眼前親子二人迄、入水さすれど泳ぎさへ知らぬ此身に救はれず、菩提の爲に剃髮なし、

日當　東へお下りなされしと聞いたはその後、われ〳〵はあの折池田の酒問屋柳屋治右衞門と云ふお人に危い命を助けられ、

六兵　互ひに命があればこそ、又もかうして逢はれまするが、

日當　あの時川へ落ちたぎりで、死んだら親子は冥土の旅、

兩人　いや危い事で、

日當　ござりました。

六兵　して只今では新川においでなされるといふ事ぢやが、何生業をして居られるな。

さあお聞き下さい、只今申した柳屋の治右衞門どのが新川へ酒店を出すにつき、親子二人も旦那のお供で此江戸へ下りましたが、柳屋のお孃さまが御殿へお上りなされる時、娘も共にお附きで

上り、お屋敷勤めの部屋方もの、又わたくしは少しばかり劒術やわらを知つてをるので、賊の夜番を言付けられ、店に勤めてをりまする。

日當 梅田でお目に掛りし時は、長家に不幸の取込みあつて詳しくこなたの身の上もお聞き申さずに別れましたが、劒術やわらをお心得とは、さては以前は職祿でも汚せしお方でござりますか。

六兵 いやもう不思議な御縁で大阪にて、御恩になつたおまへさま、包まずお話申します、まあ一通りお聞き下さりませ。（ト合方になり、）元私は播州の加古川の浪人にて眞葛六之進と申すもの、京地へ出まして暮す内、隣家へ江戸より參つてをる岩淵柳藏といへる奴、私の先妻めと密通をなし懐胎させ、事顯はれて其奴は逐電、跡に殘りし女房めは心外なれど腹の子と共に殺すも不便と思ひ、身二つになるそれ迄はと、態と助けて月も滿ち、双生兒の男子を産みし故、七夜の過ぐるを待ちまして不義の罪科を言聞かせ、鳥邊野に於て女房を切捨て、殘る双生兒の小兒をばその鳥邊野の傍なる子育地藏の御堂の縁へ、鴛鴦切の守を添へ捨ては捨てしが不便故、暫し小蔭へ身を忍び様子を伺ふ程もなく、いづくの誰か通り掛り、その幼兒を一人づゝ、拾ふて行きしものありしが、今は二人の悴共も成長をして居る事か、又は死んだか行方知れず、假にも親子の事故に、何かに附けて思ひ出し、泣きますことがござりますわい。

ト愁ひのこなし、日當此内びつくりすることあつて、

日當　始めて聞きし因果話し、今お話しの守袋は、スリヤ鴛鴦切でござりましたか。

六兵　はい、双生兒へ同じ切の守を、證據に附けてやりました。

日當　すりや、あのいよ〳〵、

六兵　え、

日當　左樣でござりますか。(トよろしく思入。)

六兵　いや思はぬ事のお話から、肝腎の事も跡や先、申し後れてをりましたが、今日態々參りましたはあなたに内々お目に掛り、御異見をしに參りました。

日當　なに、異見に參られしとは。(ト合方きつぱりとなり。)

六兵　道德尊きお上人さまに斯樣な事を申しますは釋迦に經文を說くやうなれど、此頃世間で惡い噂を致しまする。さういふ事もござりますまいが、もし公邊のお耳に入り、御不審の廉でおまへ樣がお咎めにでもなる時は、とつて返しがなりませぬとお案じ申して參りました。此後女の參詣に通夜をおゆるしなされまするは、必ず止しになされませ、それでなうてもあのやうな御殿女中が今宵も通夜に、

日當　や、

六兵　いえ、今宵のお通夜は是非がないが、明晩からはなりませぬぞ。（ト是にて日當思入あつて）

日當　此身に犯せる罪なければ、假令世上でどのやうな惡説を立ませうとも別に仔細はあらざれど、折角の御異見故、お詞に付明日より、通夜は法度に致しますれば、必ず御心配下さりますな。

六兵　それで私も安心しました。用事が濟めば遠方故、更けぬその内お暇致します。

日當　いつに變らぬ實直なお方、それも道理か現在の。

六兵　や。

日當　いえ今宵はせめて當院に、御一泊なさればよいに。

六兵　いえ盜賊の夜番の役故、夜分が人の晝間でござる。

日當　そんなら是れにて六之進どの。

六兵　日當さまお暇しまする。

日當　それ所化共、お見送り申せ。（ト下手の杉戸を明け、以前の西念出來り）

西念　最早お歸りでござりまするか。

六兵　是れは御苦勞でござりまする。

ト唄になり、西念先に立ち、六兵衛花道へはひる。日當是を見送り、

トぢつと思入、誂への合方になり、上手の杉戸より以前の竹川、紫の袱紗包みを持ち出來り、よろしく住ひ、

日當　知らぬ事とて、はて是非もない。

竹川　日當さま、あなたはようも私を、お騙しなされましたなあ。

日當　是は又如何なる事、今宵に限りその樣な、なぜ恨みを言はるゝのぢや。

竹川　さあ出家の身にて戒を破り云ひかはしたはそなた一人、外にはないとおつしやりまするが、今私がお居間の内へ隱れてゐるうちお書棚の、御本箱を明けましたら、中に數通の此お文。

ト件の袱紗包より文を數通出す。日當悔りして、

日當　その文は。（ト寄るを隔て、）

竹川　皆言交したお方より、送りし文でござりまするが、幾人となく此樣に忍び女子を引入れながら、ようも是迄私を、あなたはお騙しなされましたなあ。（ト是にて日當思入あつて、）

日當　さあその疑ひは尤もぢやが、それは向ふで言寄るばかり、なか〳〵こちらで心を許し言交すやうな事はせぬ。まあ何にしろその文は、苦情の種故燒き捨てよう。こちらへ返して貰ひたい。

竹川　いえ〳〵お返し申されませぬ。一々これはかういふ女子と言開きの立たぬ中は、めつたにお渡し申されませぬ。

日當　是はしたり疑ひ深い。（ト竹川の懷へ手をさし入れる。是にて竹川日當の手を取つて、ぐつと捩ち上げる故、）あいたゝゝ、これ、どう致す。

竹川　性惡を遊ばす故、此位の事は致しまする。

トよろしく突放す。是れにて日當捩ちられた手を摩りながら、

日當　はて恐しい力ではある。

竹川　女子が一心になりまするると、隨分力の出るもの故、覺えておいでなされませ。

日當　はてその樣に怒らずと、愚僧が惡くば詫びる程に、機嫌を直して奥へ行きやれ。

ト手を取るを振拂ひ、

竹川　えゝもう、お構ひ下されまするな。あなたの御緣も今宵限り、是れから直に歸りまする。

ト立懸る故、

日當　さう怒られては甚だ困る。まあ奥へ行きやれといふに。

竹川　いえ〳〵、お構ひ下さりますな。

ト ずつと立つて花道の方へ行かうとする故、日當袂を控へ、

日當 そんなら、どうでも、此儘に。

ト 竹川懐中より件の袱紗包みを出し中の艶書を改め見て、元の如く懐中して、ほろりと思入あつて、

竹川 如何に役目といひながら。

日當 やあ。(トぎつくり思入、竹川氣をかへ、)

竹川 ようもお騙し、(ト袂を振切り、)なされましたなあ。

ト 唄になり、きつとなつてつか〳〵と花道へはひる。日當是を見送り、呆れしこなしよろしく、爰へ下手杉戸を明け、柳全出て、

柳全 日當さま、ありや只ものではござりますまい。

ト 是にて日當氣をかへ。

日當 そんなら今の樣子を聞きしか。(ト合方になり、柳全よろしく住ひ、)

柳全 杉戸の内でさつきからの、一部始終は聞きましたが、竹川どの、樣子より、まだもう一つ呆れた事が、あなたのお胸にござりませう。

日當 なに、もう一つ呆れた事とは。

柳全　さゝ親の形見と御不斷から肌身離さず大事になさる、鶯鴦切の守袋、丁度お年も二十九年、あなたは捨子でござりませうな。

日當　扨は是れにて六兵衞どの、、話もそちは聞きたるか。

柳全　まだそればかりぢやござりませぬ。その片割れの兄弟は、大阪梅川の非人頭馬右衞門といふものに拾はれ、名も馬吉と呼びまして今は此江戸へ下り、淺草田甫の非人小屋に、しかも達者でをりますゐ。

日當　どうしてそれを、知つて居るぞ。

柳全　さあ知つたも無理か現在の、いやさ、現世や過去の因果を思ひ、出家にならぬその以前、何を隱さう私も身持が惡さに居所に困り、その馬吉の非人小屋に二年忍んでをりましたが、親馬右衞門が拾つた話と鶯鴦切の守を見せ、昔し話をしました故、それで存じてをりまする。

日當　む、、扨は双生兒の兄弟は、非人に拾はれ此江戸に、存命にてゐる事迄、どうしてそちは知つてゐる。

柳全　然も日暮に玄關へ、

日當　え、、

柳全　いえ、日暮に玄關へござつたる、六兵衞殿のお話から、あなたの素性が知れまして、私迄が驚きました。

ト　ぢつとこなしあつて、何か言出し兼ねてゐる。日當思入あつて、

日當　聞かれた上は是非もないが、腹こそ替れおころとは胤は一つの兄弟同士、廻る因果の怖ろしさに、此の身を悔めど今は及ばず。

柳全　さ、その言解も今爰で、名乘り合ふさへ面目なく、

日當　親子と知れど六兵衞殿を、それと云はずに歸せしが、

柳全　心一つに身を悔み、口を塞いで遁れても、防ぎ兼ねるは女犯の罪。

日當　あの竹川から露顯となれば、證據の艶書も向うへ取られ、遁れ難なき破戒の科。

柳全　世間へ恥をさらしものと、橋の袂へ出されぬうち、

日當　どうか思案も付けたいが、是皆宗祖の佛罰ゆゑ、

柳全　遲かれ早かれあの文の、祟りがあるに違ひない。

日當　あゝとんだ艶書を捜し出された。

ト　合方になり、日當當惑の思入にて上手へはひる。柳全殘り思案の思入、この時下手よりおきせ出來

り、

きせ　これ柳全さん、何をぐづ〳〵して居なさるのだ。

柳全　あゝこれ、靜にしねえか。

きせ　あゝ柳全さん、さつきお前に言つた通り、わたしもこんな體になつては、仲間に對し父なし子を孕んだなぞと云はれては、内の看板にも拘はる譯、お前を内へ引取つて引手茶屋の亭主にするから、坊主天窓を還俗して、泥水の中へはひつて御覧。女を餌に儲ける家業、人を馬鹿にして面白いから、坊さんなぞは止めておしまひ。

柳全　いや、さつきは片時此寺に居られぬ事があつたので、一緒に行かうと約束はしたが、又行かれねえ譯が出來て、今夜は爰に居らねばならぬ、淋しからうが是から直に一人で先へ歸つてくれ。

きせ　あれ人ぢらしも大概におし、五つを打つと一緒に行くから、それ迄人目にかゝらぬやう、どこぞへ行て時刻を測り、出て來てくれとお云ひだから、團子坂の小料理屋で一杯やつて時刻を延し、駕迄雇つて迎ひに來たのに、今更になり出られぬとは、おまへわたしを困らせる氣か。

柳全　いや困らせる譯ぢやあねえが、急に出られぬ用が出來たから、今夜の所は歸つてくれ、いづれあしたにもおれの方から、こなたの内へ出掛けて行く。

きせ　いえ〳〵それは當にならぬ、どういふ譯で出られないか。その譯を聞かせておくれ。

柳全　そりやあ滅多に言はれねえ事だ。

ト是れにておきせむつとして、

きせ　なんで言はれないいえ。こりやをかしい言草だ。夫婦約束迄したわたしに言はれぬ譯はなんにもない筈。それとも外に女があつて、今夜その女がお籠りに來た故、出られないとお言ひのかえ。

柳全　馬鹿を云へ、そんな譯ではない。

きせ　それぢやあ譯を聞かせておくれ。（ト柳全思入あつて、）

柳全　その譯は實はかうだ、日當さんが樣子を感づいて今夜柳全が表へ出たら、直に知らせろと門番と二人の所化に言ひ付けてあるから、滅多に今夜は出られぬのだ。

きせ　さういふ譯なら日當さまに、お目に掛つて譯を話し、わたしが亭主に貰つて行かう。

柳全　えゝそれを言はれてたまるものか。

きせ　そんならやつぱり女があつて、わたしがいやになつたのだらう。

柳全　いや、さういふ譯ぢやあねえと言ふに。

きせ　いえ〳〵それに違ひない。さうとは知らず騙されて、こんな體になつたと思へば、わたしや悔し

いゝわいなあ。

ト大聲を上げて泣出す。是にて柳全あたりを氣遣ふ思入にて、

柳全 さういふ疑ひを受けたら是非がねえ。どうかおれも工夫をして手前と二人で逃げ出すから、用部屋へ行つて待つてゐやれ。

きせ それぢやあきつと待つてゐるから、成るたけ早く出て來ておくれ。

柳全 樣子次第で直きに行く。

きせ そんならきつと待つて居るぞえ。

ト唄になり、おきせ下手の杉戸の内へはひる。柳全あたりを見廻し思入あつて、

柳全 思ひ掛けなく六兵衛の話で分つた證據の守り、聞いて恟り日當どのと親子の名乘と思つたが、面目なくて言ひ出されず、猶豫してゐるその内に、邪魔がはひつて言はずにしまつた。(ト合方になり、)おれも滿更腹からのぶらんさんでもない身の上、產れは赤坂黒鍬谷で、親はお城の賄方、御家人仲間のその内でも以下席ながら内福故、つい小遣ひが立廻り、今日は品川あすは新宿、又は吉原深川と遊び歩いて借りを拵へ、とう／＼江戸を喰詰めて知るべを便り京都へ登り、人の内に居候、體が暇でゐる所から身振り聲色唄淨瑠璃、まづいながらも遊藝が仲立ちとなり隣りの内

へ遊びに行つたが縁のはし、女房と譯ある仲となり、亭主が江戸へ旅立の留守に懐胎された故、言譯なさにそこを逐電、まだその時はちつと許り路用の金がある所から、宮島かけて金比羅へ參つた歸りは一文なし、着て居た着物も賣盡し、仕舞の果は乞食と落ぶれ、梅田の小屋に忍んでゐたが、流れ〳〵て江戸へ來て、やうやく樂になつたと思やあ、世話になつた馬吉に臍繰り金を搖りとられ、守の切の證據から我子と知れた兄弟も、一人は馬吉一人は日當、そんな事とも知らねえ故、慾に迷つて我が悴に女犯を勸めて墮落をさせ、悴はおれを親とも知らず臍繰り金を搖りとる、此有樣を見通しの佛の目から見る時は、世に淺ましき因果の寄合ひ、心の鬼が、(ト胸をたゝくを道具替りの知らせ)身を責めるわえ。

トぢつと思入、此模樣時の鐘にて道具廻る。

(同裏手塀外の場)――本舞臺一面の平舞臺、向ふ一面屋根のある土塀、所々に捨石塀の内より見越しの松、上下植込みの張物にて見切り、日覆より松の釣枝、總て寺の裏手の體、爰に駕屋四人四ッ手駕が二挺おろし、立掛り居る。此見得時の鐘にて道具留る。

○こう棒組、あの嚊は何をして居るか、大ぶ出て來やうが長いぢやあねえか。

△ さつき吉原迄やつてくれと、駕を二挺仕立てさせて此寺へはひつたきり、いまだに出て來ねえのは合點が行かねえ。

□ 門へ行つて聞いてみりやあ、そんな女は來ねえと言つて、門番めが明けねえから、どこへ取つてもかゝられねえ。

◎ 今考へりやアあの嬶は、なんでも狸に違えねえ。

○ 幽靈といふ顏でもねえから、大方貉か狸だらう。

△ 忌々しい、とんだ無駄足をした。

□ ちつとも早く歸るとしよう。

ト駕屋四人、駕を擔ぎ花道へはひる。是れにて下手の植込の蔭より非人の馬吉先に、九郎藏ついて出來り、

九郎 おい頭、狸だといふ評判だぜ。

馬吉 馬鹿を言へ、團子坂の茶屋の二階でおれがとつくりと見て置いたのだ。なんでも柳全めが意地ぎたなで箸を取つた嬶アに違へねえ。

九郎 一人でぐび〱二ッ銚子ばかりやり、大分醉が廻つたと見え、あの柳全の噂さ話し、今夜の内に

連れて行つて還俗させると言つてゐた。

馬吉　あいつに寺を開かれちやあ、金の蔓を失ふのだから、跡からつけて爰へ來たが、駕屋が見切つて歸つちやあ、なんだかこつちも心細い。

ト此時雨車になり、

九郎　頭、ばらついて來ましたぜ。

馬吉　ばらついて來ちやあ、爰にもゐられぬ。なんにしろ眞暗だ、提灯をつけて來い。

九郎　それぢやあいろは茶屋迄行つて來るから、爰に待つて居なせえ。

馬吉　たんと降らねえ内、行つて來てくれ。

九郎　直に行つて來ます。

ト九郎藏は思入あつて上手にはひる。馬吉跡に思入あつて、

馬吉　塀から松が出てゐるやうだ。どれ、雨宿りとやらかさう。

ト後の捨石に腰を掛け、懐中よりかます煙草入を出し、中より摺火打を出さうとして、

はてな、石をどこへ落したか知らん。

ト煙草入の中を探り居る。是より凄き合方になり、眞中の見越しの松へ登り塀の上へ以前の曉星右

衛門頬冠りにて半身を出して外を窺ひ、松ヶ枝へつかまり塀の上より足を延ばす。此足馬吉の肩へ踏みかける。馬吉恟りして飛退く。星右衛門も恟りして足を引き、兩人上下にて躊躇ひ窺ふ、是より忍び三重模様の合方になり、馬吉は下手の塀際へ付いてゐる。星右衛門は肯いて頬冠りにせし手拭を取り、松ヶ枝へかけ、ひらりと下へ飛下り、向ふへ行かうとする故、馬吉窺ひ寄りて星右衛門の刀の鞘を取つて引戻す。星右衛門、扨はといふ思入あつて、ちよつと立廻り、双方きつとなり。

星右　えゝ、なんで邪魔をしやがるのだ。

馬吉　邪魔をしねえでどうするものか。人の肩へ足を踏み掛け、挨拶もせず行かうとは、無法な奴故留めたがどうした。

星右　それぢやあ今のは人間か、おらあ又犬かと思つた。

馬吉　おゝ、同じ人間のその中にも心の曲つたおれの目に、掛つたからは此儘に、手めへを只は見逃せねえ。

星右　どこのどいつか知らねえが、曲つた心と自分から名乗る奴なら大方それと、云はずと知れた荒稼ぎ、思ひ掛けなくおれの足を、頂いたのは名聞だ。道を開いて通しやあがれ。

馬吉　へゝ、そのけんのみの御託を恐れ、指を銜えて引込む様な、まだ耄碌はしねえつもり、塀を乗り越

え逃げるのは、云はずと知れた夜働き、その足代の踏臺に肩を貸したはそつちの多足、盜んだ金は二つ山、半分おれに渡してゆけ。

星右　えゝふざけた事を言やあがるな。（ト振切つて行かうとすると）

馬吉　うぬ、待やあがれ。

ト是より兩人ちよつと立廻りて、トゞ知らせに付日覆より灯入の月をおろす。兩人月明りにて顏を見合せ。

星右　さういふお前は。

馬吉　見忘れたか、馬吉だ。

星右　そんなら梅田の小屋頭か。

馬吉　いや、思ひ掛けねえ。

兩人　出合ひだなあ。（ト思入、合方きつぱりとなり。）

星右　それぢやあお前も、此江戸へ、流れ〳〵て來て居るか。

馬吉　大阪無宿の小屋者も、今ぢやお江戸の淺草田甫に雪駄直しをして居るが、そんならこんたも江戸

へ出て、いまだに盗みが止まねえか。

星右　さあおれもあの時運上して、もう止めようとは思つたが、持つた病ひに止められず、どうで始終は喰ひ込み切られるだらうと氣がついても、三尺高く木の空に此の素首を晒す迄は、此生業は止められねえ。

馬吉　さうしてこんたは江戸へ出て、今ぢやあ何所に住つてゐるのだ。

星右　その居所は今爰で、明らさまにも言ひ憎い。いづれその内名乘り合ふ、時節があつたら言つて聞かさう。

馬吉　成程こいつア聞くのは野暮だ。迂闊に居所は言はれめえが、然し今夜の働きは名におふ谷中の延命院、旨え仕事をしなすつたらう。

ト是れにて星右衞門思入あつて、

星右　澤山も取らねえ二百兩だが、手前にこゝで出逢つちやあ、滿更素手でも別れられめえ。（ト懷より百兩包みを出し二つに割り、）はしただらうが取つて置きやれ。

ト封じを切りし儘つかんでやる。馬吉是を受取り、

馬吉　そんなら是れをくんなさるとか。

星右　はて百兩包みを二つ割だ、五十兩位はあるだらう。
馬吉　いや流石は仕事の苦勞人、器用な仕方に驚きました。なんにも言はず貰つておきます。
星右　緣があつたら又その內、
馬吉　どこぞで逢ひませうよ。
星右　達者で居ねえよ。
馬吉　そんなら隨分御機嫌よう。
星右　どれ、更けぬうちに歸らうか。

ト誂への合方になり、星右衞門花道へかゝる。馬吉は舞臺にて是を見送る。知らせに付日覆の月隱れる。此內星右衞門花道の中程へ行つて立留る。双方思入あつて、

馬吉　犬も歩けば棒に當ると、爰へ歸つたばつかりに思ひがけねえ五十兩。
星右　つまらぬ奴に出合つたので、とんだ所でめりを出し、別れて爰へ來たものゝ。
馬吉　こいつを手蔓に內を突止め、又跡ねだりとやりてへが。
星右　もしやあいつの口よりばれ、後日の祟りにならねばいゝが。
馬吉　まだ一丁と行やあしめえ。

星右　跡へ歸つていつそのこと、

ト双方心々のせりふあつて星右衛門つか〱と舞臺へ歸る。此時上手より以前の九郎藏茶屋の貸提灯を灯し出來り、

九郎　頭、お待遠でござりました。

馬吉　又なんだかばれさうだ。

ト是れにて星右衛門・惡い奴が來たといふ思入にて、又花道の方へ行く、九郎藏是れを透し見て、

九郎　や、あすこへ行くのは。

ト提灯を出すを、馬吉態とその手を拂つて提灯を消すを道具替りの知せ、

馬吉　なあに往來の人だ。

ト是れにて星右衛門は一散に花道へはひる。馬吉は件の金を懷へ入れる。此模樣台方、時の鐘にて道具廻る。

(同別間捕物の場)――本舞臺一面の平舞臺、上下畫心に白地大形大間の襖、正面同じく白地大形の張壁、日覆より同じ欄間、總て本堂の次の間の心にて、丸柱を遣ひ、正面長押の上に檀家の寄進札など大分に掛けてある事。眞中よき所へ大長持、是に佛具入と記せし札を貼りあり。靜かなるどん〱に

て道具留る。とばた〳〵になり花道より長助門番の打扮にて走り出で、直に舞臺へ來り、
ト呼立てる。是にて上手より以前の所化二人出來り。

長助　これ〳〵西念さん、雲念さん、起きさつしやい〳〵。

西念　誰かと思へば、番助ちいさん。

雲念　慌しい、何だ〳〵。

長助　何だではない。わしの樣な年寄でさへあの太鼓が聞えるのに、こなた衆の耳にははひらぬか。

雲念　おゝ、さう言へばあの太鼓、朝題目の太鼓でもなく。

西念　どん〳〵どん〳〵打立てるは、何事が始まつたのだ。

長助　何だか今夜はいやな晩で、宵に竹川さまがお歸りになつたり、駕屋が門へ聞きに來たりして、間違ひでもなければいゝと案じてわしも寐入ばな、今方ふつと目が覺めると、門の外が騷々しいから、戸の隙間から覗いて見ると、捕手の人數が山の如く、寺の周りを取卷いて、今にも內へ込み入りさうだ、早く此事を貫主樣や、柳全樣へ知せて下さい。

雲念　それは何しろ大變だ。早速奥へ知らせようが、

西念　全くそれに違ひないか。

長助　何で嘘を言ひませうっ縛られでもするとつまらぬから、先づ門番は是きりと、暇を貰つて引込みませう。

雲念　かういふ時には本堂の、須彌壇の下が一番いゝ。

西念　あすこへ行つて隱れて居れば、めつたに氣のつく氣遣ひなし。

長助　わしも一緒に、連れて行つて下せえ。

雲念
西念　えゝ貴さまはどこへでも勝手に逃げろ。

長助　いや勝手に逃げろとは、情ないっ

ト三人はうろ〳〵しながら下手へはひる。爰へ上手の襖を明け以前の柳全おきせ出來り、

きせ　もし柳全さん、こりやまあどうせうどうせうぞいなあ。

柳全　是だから言はねえ事か、早く内へ歸れと云ふに、ぐづ〳〵するからおめへ迄、まさかの時は卷添へだ。

きせ　いえ〳〵お前が女犯の罪で日本橋へ晒されゝば、わたしも一緒に晒される心、お前故なら命でもわたしや少しも厭はぬぞえ。

柳全　えゝ一緒に竝ばれてたまるものか。ぐづ〳〵せずと捕手の來ぬ内、裏門からでも早く逃げろ。

きせ　さあ、迯げるはいゝが足が震へて、わたしや一足も歩けぬから、柳全さん負つておくれ。

柳全　いや、どこ迄も厄介な奴だ。おれは遁れぬ譯があつて、迯げる事のならぬ體だ。

きせ　迯げられずばわたしもやつぱり、迯げられないから爰に居る。

柳全　えゝ、どう言へばかう言ふと、さて〳〵困つた女だなあ。

ト當惑の思入。爰へ上下より一、二、三、四の捕手四人、十手を持ち伺ひ出で、

四人　御用だ、神妙にしろ。

ト柳全へ組付く。是にて柳全四人を相手に取組合ひの立廻りになり、おきせ此中へ邪魔にはひり、可笑味の立廻り宜しくあつて、トゞ捕手四人柳全を組伏せ、繩を掛ける。おきせ此體を見て、

きせ　こりやまあどうせう〳〵ぞいなあ。（ト泣伏す。）

柳全　えゝ、是れといふのも手前の樣な、女が傍にゐるからだ。

きせ　その代りにはわたしも一緒に、繩に掛つて引かれて行きます。

柳全　えゝ一緒に行くにやあ及ばねえ。

捕一　女犯の相手、

四人　神妙に致せ。（トおきせに繩を掛ける。）

捕一 こりや寶僧、住持の居間へ踏み込みしが、

二 いづれへ迯げしか行方知れず、

三 定めてわれが存じて居らう。

四 有所をそれにて申上げい。

柳全 もうかうなつては仕方がない。包まず有所を申しますが、住持の居間の床の間の、掛物を取りまするると、下へ下りる階子がござりまする。それから大方離れ座敷へ、迯げましたのでござりませう。

捕 して　下座敷はいづれなるか。

二 先へ立つて、

四人 案内致せ。（ト柳全、後の長持へ思入あつて、）

柳全 どうか此間に拔穴から、

四人 やあ、

柳全 いえ迯げませぬうちお教へ申しませう。

きせ 足が震へて歩けませんから、どなたぞおぶつておくんなさい。

一　ゑゝ厄介な婆アめだ。

四人　さあ、早く歩め。

柳全　かうおいでなされい。

ト柳全繩付きのまゝ先へ立ち、おきせわな〳〵するを捕手二人兩手を持つて引立てながら、皆々上手襖の内へはひる。跡本釣鐘、誂への合方になり、眞中長持の蓋を内より明け、日當出て、あたりを窺ひほつと思入あつて、

日當　師弟の誼に柳全が、此日當を迯す氣で、せり込み仕掛の下座敷へ、案内したはその暇に、何處へか迯げろと詞の謎。どうで命は捨てものと思つてゐたも長持へ、脫け出る仕掛けに命の長持、どうか首尾よく迯げたいものだ。

ト下の方へつか〳〵と行かうとする。爰へ下手より捕手大勢出て、

捕手大勢　御用だ。（ト打つてかゝる。日當是を突き退け、上の方へ逃げ行く。又上手より捕手大勢出來り）

捕手大勢　神妙にしろ。

ト打つて掛る。是にて日當眞中へ來て長持の中へはひらうとするを、捕手大勢かゝつて、日當を押へ付ける。日當是非なく大勢を相手にごつちやの立廻りよろしくあつて、トゞ大勢に押へつけられる。

日當 もうお手向ひは、(トしやんとなる道具替りのしらせ、)致しませぬ。

ト此模樣どん〳〵にて道具廻る。

(組合寺詮議の場)――本舞臺四間通し、高足の二重本緣付、眞中書院障子、二重正面上の方、九尺の床の間、此次地袋違ひ棚、下の方白地へ山水の襖、二重の上下土塀にて見切り、能き所に松の立木、日覆より同じく釣枝、總て谷中組合寺書院座敷庭前の體。二重の上下に燭臺を照し、上手に笹川幸十郞羽織着流し、大小にて住ひ、前に調べの書面を置いて見て居る。此左右に下役二人羽織着流し、大小にて控へ、能き所に書院火鉢ある事、下手に組合寺の住持日照衣裝にて、控へゐる。此見得きんの入りし靜かなる合方にて道具留る。

日照 延命院をお召捕りとござりまして、組合なれば拙者にて身元お調べのお問合せ、夜中と申し各〻樣には、御苦勞な儀にござりまする。

幸十 組子の者より知せを聞くに、延命院を始めとして役僧たる柳全をも召捕りしと申す事、首尾整ひし役目の面目。して日當といへる奴は、何れより參りしものにて、何時頃より延命院の住持には相成りしぞ。

日照 かれは先年大阪より當地へ賴り參りしとて、延命院の先住日丈寺小姓に抱へましたを、拙僧なぞ

も存じをりましたが、俗縁のもの、菩提の爲め、出家になりたき望みに任せ、剃髪を致せし由、その後先住日丈事も老病にて果てました故、かゝる邪淫を犯しまする賣僧とも見受けませぬ故、組合一統評議の上、當貫主に直しましたが、かゝる事共仕出かしまして、上のお手數をかけまする段、恐れ入りましてござります。

下一　して又加持や祈禱に事よせ、女を寺院へ引入れしは、

下二　いつ頃よりの事なるか、それにて逐一申上げられよ。

日照　それぞ先頃柳全と申す役僧が參りしより、何か希代の祕密の法にて粂村と申す奥女中の難病平癒致せしを初めと致し、それからそれへ活佛などと噂高く、既に門前に市をなす程參詣群集致しまして、女の病者が入込みまする。

幸十　して柳全といへる奴の、生國は何れなるや。

日照　かれは御當地出生の由にて、壯年よりして身持惡しく、中頃京都大阪などへ立廻りし事もござるよし、年配に及び不行跡を改心なして菩提の爲め、出家致して日當の弟子となりしと申す事、豫て拙僧聞及びまする。

ト是にて從川幸十郎、前なる書面を引合せる事なぞあつて、

幸十　それにて百事符合致す、早く引立て參ればよいが。

ト此時ばた〳〵になり、下手より手先鮨由羽織着流し番太の拵へにて出來り、下手に居て、

由藏　はッ、笹川さまへ申し上げます。

下役　何事だ。

由藏　御用の筋を承りまして、今日新川へ參りましたところ、幸ひ柳屋治右衞門方へ宿下りにて、娘粂村召仕のころ諸共に屋敷を下りをりました故、御用の筋を申し聞かせ、粂村の名代かた〴〵部屋方ころに家主差添ひ、召連れましてござりまする。

幸十　宿下りにて居りしとは、誠にもつてよい都合ぢや、早々是へ呼出すがよい。

由藏　はッ。（ト下手へ向ひ）新川の町役人、女を連れて是へ出なせへ。

ト是にて下手よりおころ嶋田髷、部屋方の拵へにて家主杢兵衞羽織着流しにて付添ひ出て、下手へ平伏する。由藏こちらへ向ひ、

はッ、町役人差添ひにて、罷出ましてござりまする。

ト笹川幸十郎、此體を見て、

幸十　こりや、ころとやら、それへ出い。

ころ　はツ。（ト前へ出ろ。）
幸七　そちを是へ呼出したは、餘の義でもないが、今般當所の延命院事、上御不審の廉あつて、お召捕りに相成りしぞ。
ころ　え丶丶丶丶。（ト恟り思入）
幸十　さ、その驚きは尤も至極。（ト合方になり）豫て上にてお手入れ相成り、最早や調べも屆きをれば必ず陳じ僞るとも遁れ難なきその身の罪。有體に申せし上、手數のかゝらぬ樣にせよ。ぢやが、その方主人衆村事は延命院と通じ合ひ、又その方も前々より、密通致してをつたであらうな。
ころ　どう致しまして、左樣な事を、一向覺えはござりませぬ。
下一　やあ覺えないとはのぶとい女。
下二　陳じる時は、爲になるまい。
下一　それにて誠を、
兩人　申上げい。
ころ　いえ、どのやうに仰せられましても、此身にとつて露些か、左樣な覺えはござりませぬ。
由藏　おい〳〵おころさん、幾らお前が僞つても旦那の方にはちやんとした、證據物迄お手に入つて、

すつかり調べが屆いて居るのだ。痛い目せぬ内有體に申上げてしまふがいゝ。

ト是にて家主の李兵衞前へ出て、

李兵　これ〳〵おころどん、此家主は藪から棒に役目でこなたに附いて來たから、詳しい事は知らないが、かうしてお上のお役人さまが、御出張をなされた上で、お調べをなさるのは、もう何もかも御詮鑿が屆いた上のお質しだ。女の事故何事も有體に申し上げ、跡でお慈悲を願はつしやれ。强情張つても無駄なことだ。

ト日照もこなしあつて、

日照　見受けたところがにこやかにて、なか〳〵上を僞る樣な女子共思はれぬが、今の答への樣子では手ごはさうなる此お調べ、外面如菩薩内心如夜叉、はて恐るべし〳〵。

幸十　こりや女、知らぬと陳じ僞るとも、退れぬ證據は先達て、そちと日當兩人が密談なすを見屆け置いたり、わが面體を見忘れしか。

トきつと言ふ。是にておころ恐る〳〵笹川幸十郎をよく〳〵見て、恟りなし、

ころ　や、あなたは。

幸十　なんと、見覺えあらうがな。

ころ　はあゝゝ。（ト泣伏す。）

由藏　こいつあ只ぢやあ言ひますめへ。（ト腰の革提より細繩を出し、）しめ上げてやるから待つてゐろ。

ト おころを縛り上げる故、

ころ　まあ〳〵お待ち下さりませ。かやうにお繩を受けますれば、どうで遁れぬ此の身の罪、申上げるでござりますが、何をお隱し申しませう、私ばかりは延命院さまと、お語らひ申しましたが、旦那さまは左樣な事は、夢にも御存じない事故、私の身はどうなつても粂村さまのお疑ひは、お晴らしなされて下さりませ。是がお願ひでござります。

李兵　そんなら柳屋治右衞門どのゝ、あの娘御には知らぬ事か、やれ〳〵それで落着いた。

由藏　いや、さううまくは拔けさせねえ。上にやあちやんと證據物を取上げておいての御詮議だ。言はせるやうにして言はせるから、町役人さん、見て居ねえ。

下一　それ、締め上げて、有體に。

下二　女に白狀させるがよい。

由藏　どれ、一と拷問してやらうか。

ト立上る。此時ばた〳〵になり、花道より○の捕手一人出來り、花道にて、

○　はッ申上げます。

幸十　おゝ、何事ぢや。

○　延命院日當初め、役僧柳全姦通の女、只今召捕り當院へ立歸りましてござりまする。

日照　すりや、姦通の女諸共。

ト是れにておころ向ふへこなしあつて、

ころ　どんな女子か知らねども、てもお情ない日當さま。

由藏　えゝ扣へて居ろ。（トきつと言ふ。）

ころ　はあッ。（ト泣伏す。）

幸十　それ、此所へ引立て參れ。

○　はッ。（ト引返して花道へはひる。）

杢兵　いや、出家の身として女を引入れ、さう幾人も抱寐をするとは、ても大膽な事ではある。

幸十　主人を庇ふ志し、證據の品があらざれば、（ト思入あつて氣を變へ、）はて、不屆きな者共ぢやわえ。（ト此時向ふ揚幕の内にて、）

捕手大勢　きり／＼歩め。

ト下座の説經模樣の合方、是へ時の太鼓を冠せ、花道より以前の日當先に、柳全おきせ何れも腰繩にて、捕手大勢附添ひ出來り、直に舞臺へ來て、日當、柳全思はずおころを見て、

兩人　や、そちは。（ト悄り思入）

捕手大勢　えゝ、下にをらう。

ト是れにて皆々下にゐる。おきせはおころを見て、扨はといふこなしあつて、

きせ　そんならやつぱり爰にゐる、此女中も柳全さんと、お籠りをしたお仲間か、ほんに〳〵忌々しい。

捕手大勢　えゝ、扣えぬか。

きせ　はあい。（ト差し俯向く。笹川幸十郎思入あつて、）

幸十　すりや、それなるが日當ぢやな。

日照　年若なるが延命院、次に扣へし年配が、役僧柳全にござります。

下一　して、後ろにをるあの女は。

下二　門番の花賣婆アか。

きせ　えゝ。（ト腹の立つこなしにて態と顔を上げてすましてゐる。）

由藏　花賣婆あにしちやあ身裝がいゝが、坊主が墮落をしようといふ婆さんでもねえ樣子。

杢兵　是れはやつぱり金を遣つて、いやがられに來る仲間だらう。

きせ　あれ、あんな事を。（トくやしき思入）

幸十　こりや日當、面を上げい。

ト是にて日當顏をあげ、笹川幸十郎を見て恟りして、

日當　や、御身は。

幸十　わが面體を存じてゐる筈、（ト是より合方になり、）先頃信者の體に見せかけ、豫て詮鑿致し置きしが、扨々われは不屆きな奴ぢや。出家の身として邪淫を犯し、遊女に等しき謀言を構へ、奧向きの女中などを祈禱に事よせ誑かし、通夜と號して夜泊りさせ、女犯の罪に及ぶなぞとは、言語に絕えし破戒の賣僧、重き罪科は遁れぬぞよ。

ト此內日當扨はと云ふ思入あつて氣を替へ、

日當　今夜不意のお召捕り故、何等の罪にて出家の身を、斯く無殘なるお手當かと、心得難く存じましたが、さては左樣なお疑ひにてお召捕りにござりまするか。拙僧身にとり邪淫戒を犯しましたるなんぞとは、一向覺えござりませぬ。

幸十　默れ。たとへ如何程陳じても、遁れぬ證據はそれにをるころが只今白狀致し、何もかも露顯な

したは。

ト是にて日當扨はといふ思入あつて氣を替へ、

日當　假令かれが何んと申さうとも、それは女子の淺はかにて、上の御威勢に恐れをなし、跡形もなき事にてもお調べの通り申上げたら、その身に汚名も遁れようかと、白狀らしく言ひしか知らねど愚僧に於ては眞以て、破戒の覺えはござりませぬ。

下一　やあ、飽迄づぶとき賣僧の日當。

下二　それ由藏、締めあげい。

由藏　はッ、どれ拷問をしてやらうか。

ト立懸らうとする。此時柳全さし俯き居て、此時前へ出て、

柳全　あゝもし〳〵お前樣、暫らくお待ち下さいまし。

由藏　やあ、入らぬ口出し控へて居ろ。

柳全　いえ控へちやあをられませぬ、次第と申すは此柳全が、日當どのに成替り、白狀を致しますからその拷問をなさるのは、まあ止めにして下さいまし。

日當　これ〳〵柳全、何を言ふ、こなた迄が同じ樣に師匠の罪を庇ふなぞと、身に覺えもなき破戒の罪

せめて妹は此儘に、いやさ、今の苦痛を怺へても、人の難儀にや替へられぬ。

ト ちつと思入、是にて柳全も餘儀なく控へる。笹川幸十郎思入あつて、

幸十 こりや日當、われは拷問押怺へ、命に替へても女犯の罪、遁れる心でをるであらうが、申譯立たざるは調べ置きたる普請の繪圖面、只今是にて讀み聞かせん。（ト前にある繪圖を開き）建家凡そ七十五坪、外に十坪の二階家造り、せり込む廊下の渡りありて、居間の戸棚の床下より離れへ通ふ拔け穴あれば、床の後ろは二重壁にて二階へ上る隱し梯子、まつた離れの袋戸を明くれば下へ拔道あつて庫裏のかたへの明長持へ、人知れず出る間道なんぞ、皆企みある普請の好み、なんらの爲めに出家の身にて、斯樣な好みを致せしか、是ぞ邪淫を行ふ證跡、言譯あらば申して見よ。

ト 此内日當悄りせし思入あつてわざと氣を替へ、

日當 その申譯は斯樣でござる。拙僧いまだ淺學故、八宗九宗を兼學なすに、客あつて學ばれませねば人に知れざる閑所をしつらへ、學問致すその爲めに左樣な好みを致しました。

幸十 やあ、富留那の辯にて言ひ解くとも、それにて言譯相立たうや、まだその上に數通の艶書、何故もつてしまひ置きしぞ。

日當 えゝ。（トぎつくり思入）

柳全　どうしてそれを。

ト此時正面下手の襖を明け、以前の竹川出で下手へ住ひ、

竹川　最前手に入るあの艶書は、殘らず上への上りもの。

トきつと云ふ。是にて日當柳全恟りして、

日當　扨こそ先刻推量の通り、

柳全　廻しものにてあつたるか。

幸十　さ、かゝる遁れぬ證據あつては、陳じ立てして叶はぬ事、それにて罪に伏してしまへ。

日當　さあ、それは。

幸十　但し是でも陳じをるか。

日當　さあ、

幸十　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

幸十　上を僞る憎き奴めが、（トきつと言ふ。是にて日當じつとなりて、）

日當　如何にも女犯の此の日當、誠に恐れ入りました。

幸十 然らば伏罪致したな。

日當 女犯に相違ござりませぬが、是なるころと通じました覺えは毛頭ござりませぬ。

是にておころ前へ出て、

ころ もし日當さま、わたしを庇ふお心にて、さうおつしやるは嬉しいやうでお情ないと申すもの、改め言ふには及びませねど、いつぞも浪花の中津川にて思はぬ難儀に河へ落ち、わたしら親子が死んだと思ひ、菩提の爲めに御剃髪も、その私が存命にてお目に掛りしそれ故に、お心を亂しましたは皆此身のなせる業、餘人はともあれ私は、たとへ如何なる責苦にあひ、罪を着るとも厭ひませぬたゞ此上のお慈悲には、死ぬる命を助かりし、柳屋さまのお孃さま、粂村さまのお名前はお庇ひなされて下さりませ。

日照 すりやその女性は日當が、いまだ俗にてありし折、馴染を重ねしものなりしか。

きせ 柳全さんの情婦ではないか、それでわたしも安心した。

杢兵 さういふ譯なら日當どの、粂村どの、引合は、肩ぬけにして貰ひませう。

ト是にて日當思入あつて、

日當 はて恐しきは宗祖の罰。

ころ　えゝ、何とおつしやりまする。

日當　何を隱さうそなたとわしは、腹こそ替れ父親の、胤は一つの兄弟ぢや。

ころ　え。（ト悄り、爰へ柳全前へ出て、）

柳全　その悄りよりもう一つ悄りさせねばならぬといふは、何を隱さう日當どの、親といふのは、この柳全。

日當　なに、日當の、

ころ　親御とは。（ト笙の入りし合方になり、）

柳全　さつき眞葛六兵衛殿が寺へ參つて話す迄は、日當殿を我子と知らず、年若なれど師匠故、惡事を勸めて邪淫を犯させ、その虛につけ入り役僧も旨い露でも吸はうと思ひ、年甲斐もなく女犯を犯したが、六兵衛殿の先妻と不義をしたのは此柳全、前名岩淵柳藏といふ御家人上りのならずものだ。

日當　扨はこなたが此年月、逢ひたく思つた實父でありしか。

柳全　名乘りあふのも面目ない。上役人の見る前で、此身の因果を懺悔話し。

ころ　さう聞く上はわたしの爲めにも、義理ある親の柳全さま。

日當　此の日當の身にとつては、六兵衛殿が義理ある親。

柳全　不義を働き双生兒を產んだ女房は、鳥邊野で切捨てられたと聞くからは、その後持つたる內儀さんの腹に出來たるおころどの。

ころ　その兄さんとも知らずして、言替したる恥かしさ。

日當　親の因果が子に報い、

柳全　我子に惡事を勸めるも、

ころ　知らぬ先とはいひながら、

日當　實に恐しき、

三人　天罰ぢやなあ。（ト三人愁ひの思入、おきせ是を聞き、）

きせ　柳全さんは若い時から、顏に似合はぬ色師と見える。

日照　廻る因果で此世から、

杢兵　斯樣な罪に落ちるとは、

由藏　はて、いゝざまの泣ツ面。

下一　おころといふ名は名詮自性、

ト二人の皮着た犬でござるて、

　ト皆々嘲笑ふ。此内幸十郎思入あつて、

幸十　いや兩人は畜生ならず、そりや骨肉が違ふてをる。

日當　そは、何故で、

三人　ござりまする。（ト合方きつぱりとなり、）

幸十　今柳全の懺悔話し餘所事に承りしが、不義をなしたるその中へ出生なせしが日當にて、母は夫に切捨てられ、その後迎へし後添に出來たる妹とあるからは、胤腹ともに違ふてをらう。すりや兄弟にて兄弟ならず、血筋の縁は切れてをるわえ。

　ト是にて皆々成程といふ思入にて、

柳全　いやもう、あんまり入組んだ縁合故、一途にそれと思ひましたが、

日當　只御一言のお諭しにて、廻る因果の罪も消え、

ころ　え丶有難うござりまする。

きせ　ついでにどうか女犯の罪も、消ゆるやうにしたいものだ。

日照　いや、自らなる三惡道。

李兵　女犯の罪はのがれまい。
役一　重き仕置は、
下役兩人　知れた事だわ。
日當　汚名をお晴らし下さる上は、伏罪なして御法通り、お仕置受けるでござりませう。
ころ　どうぞお上の御慈悲にて、粂村さまのお名前は、お庇ひなされて下さりませ。
柳全　命の恩があると聞けば、あの艶書さへないならば。

ト竹川の方をきつと見る。

竹川　えゝ。
柳全　いえ、僞筆も中には交つて居りませう。

ト此内竹川さし俯向いて居て、此時隱し持ちたる懐劍を出して髮を切拂ふ。皆々悔りして、

日照　やゝ、こりや何故に竹川どのには、
由藏　髮をお拂ひ、
下役兩人　なされしぞ。
竹川　さあ主命故とは申しながら、證據を取得んばつかりに、心にもない虚言を構へ、出家を騙せし其

上に、取得し艶書が證據となり、多くの人に難儀をかけ、よい氣になつてをられませうか。髮をおろして菩提の爲、尼になる氣でござりますれば兄上お許し下さりませ。

幸十　おゝ、妹出來した、よく致した。

日當　さてはそれなるお役人樣の、

ころ　お妹御でござりましたか。

柳全　誠に驚き入りました。

きせ　さうして今度の御裁許は、

杢兵　どういふ御所置になりまするか。

日照　只此上に願ふはお慈悲、

由藏　笹川さまの、

下役
兩人　御心次第ぢや。

ト此内笹川幸十郎、竹川の持ちし艶書を袱紗より出し、いろ〳〵と見て居る事よろしくあつて、

幸十　こりや日當、此条村より送りし艶書は、こりや自筆ではあるまいな。（ト思入にて言ふ。）

日當　いえ、全くそれは。（ト言ひ掛けるを柳全心付いて、）

柳全 あゝこれ、僞筆だ〳〵。（ト呑込ませる。日當思入あつて、）

日當 成程、僞筆にござりまする。

幸十 僞筆とあれば。

ト前の書院火鉢へ打込む、是にて掛け焰硝ぱつと立つ。おころ此體を見て、

ころ ても、お慈悲深い。

幸十 あいや、繩付き四人を、（ト立上る木の頭）引立てい。

ト大きく言ふ。皆々はツと平伏する。此模樣寺鐘の送り、太撥の時の太鼓にてよろしく、

ひやうし 幕

五幕目

淺草太郎稻荷の場

同田圃非人小屋の場

神田文治郎内の場

〔役名――蔦の者笹川文治、順禮宗右衛門、近江屋息子常三郎、非人小栗の馬吉、大阪屋の若い者千吉實は宵の口の千太、非人題目七兵衞、同あら熊九郎藏、同甘酒お捨、同猫寅兵太、同山猿赤助、雇女たき、やり手おつめ、蔦の者鶴太、同蔦藏、同蛸吉、喜八女房おさき、七兵衞娘おたけ、宗右衛門娘おあい、近江屋女房みを、茶屋娘おせん、同藝者勘吉、女太夫おこま、町人等。〕

（淺草太郎稻荷の場）＝本舞臺向ふ一面練塀の內を見たる張物、此前に奉納の長提灯、續いて奉燈上手に千本鳥居、此あたり同じく幟澤山にあり、下手葭簀張りの出茶屋、軒に團子提灯を釣し、能き所に床几二脚程並べあり、ずつと上下植込みにて見切り、所々に楓の立木、日覆より同じく釣枝、總て淺草太郎稻荷境內の模樣、爰に○△□◎の町人四人思ひ〳〵の拵へにて床几へ掛けて居る。おせん茶屋娘にて茶を運び居る。此見得、大拍子にて幕明く。

せん　皆さん先日は有難うござりました。今日はお揃ひで、ようお參りにゐらつしやいました。

○　太郎さまもお參りがあるが、爰の見世も滅法はやるぢやあないか。

△　さうさ。茶見世を出しても、此位はやつてくれゝばもう大丈夫だ。

□　爰の見世のはやるのは、おせんさんの世辭がいゝのに美しいので、

◎　愛嬌があると來てゐるのだから、お參りにさへ來れば、皆爰へ寄る人ばかりさ。

せん　いえ、さうではござりませぬ。太郎さまの御利益とお客樣のお蔭で、仕合せと見世がはやりますわいな。

○　はやるといへば谷中の七面樣が大層はやつたが、延命院がお仕置になつてから、ぱつたり廢れてしまつたではないか。

△それといふのが信心より、美男と噂の日當を當て込んで行く女連だから、その日當がなくなつては、誰も參りに行く人はないのさ。

□詳しい話は聞きませぬが、その延命院といふのは、どうなりましてござります。

せん　先づ日當と柳全が、女犯と惡事で死罪になり、相手のおころといふ女は、押籠となり濟んだ後、

◎その身のなした罪を恥ぢ、髮をおろして出家となり、菩提を弔ふといふ事だが、あの一件から七面樣も、さつぱりすたつてしまつたさうだ。

○當時はやるは太郎樣だ。初手は月々午の日ばかり、御門を明けて參詣させたが、

△此春から毎日々々、御門を明けて參詣させるので、大層なお參りだ。

□金比羅さまや水天宮さまは、月にたつた一度だが。

◎毎日かうして參詣のあるは、御利益があるからだ。

せん　ほんに、中には噂だと、おつしやるお方もござりますが、盲目が目が明き、膝行が歩き、富が當り、無盡が當り、實にあらたかでございますから、御參詣のある筈でござりまする。

○實はその無盡の願掛けで來ましたが、是非今夜はとらねばならぬ。

△いや、わしも同じ無盡の願掛けだ。

□　さう方々から願を掛けられたら、
◎　こいつは太郎さまもお困りだらう。
せん　そんならあなた方は、無盡のお願ひでござりますか。
○　先の會に銅壺の蓋を、まじなひに持つて行つたが取れなんだ。
△　わしも賣居の札をはがして持つて行きました。
□　そんな事のまじなひより、まづ信心が肝腎だ。
◎　それぢやあ早くお參りが肝腎だ。（ト立懸る。）
せん　又お歸りにお寄り下さいまし。
○　そんならおせんさん、茶代は歸りにしませうよ。
せん　御一緒でよろしうございます。
四人　どれ、參つて來よう。（ト四人鳥居の内へはひる。）
せん　日が詰つたせゐか、此頃は大層朝參りが多いから、あしたはもつと早く見世を出さうわいな。

トそこらを片付けて居る。大拍子にて、花道よりおさき小見世女郎屋の女房好みの拵へ、日傘をさし千吉着流し若い者の拵へにて風呂敷包みを持ち、内藝者の勘吉遣手のおつめ附いて出來り、花道にて

さき　太郎さまが日増しに御繁昌故、こゝら近所の方たちは仕合せなことであらうわいな。
千吉　油揚げとお供が賣れるので、娘子供や上さんたちが、よい商ひをしますさうだ。
勘吉　奥山の姐さん達も、大分こつちへ出てをりますさうですよ。
つめ　太郎樣へお參りに來る人を、化かさうと思つて巣を替へたのでござんせう。
千吉　ちげえねえ。
さき　さあ、行かうわいな。（卜皆々舞臺へ來る。おせん見て、）
せん　これはお上さん、御參詣でござりますか。
さき　おせんさん、大層賑かだねえ。
せん　お天氣がよいので、大層お參りがござりまする。
千吉　そのお參りのあるのは、おせんさんといふお前立があるからだ。
せん　御常談ばかり、まあ皆さん、お掛けなされませ。（卜皆々床几へ掛ける。おせん茶を出しながら、）今日はどちらへか、お出かけでござりますか。
さき　今日は納め手拭が出來た故、方々へ上げながら見世繁昌を太郎さまへお願ひ申して上げようと、寄り初めにこちらへ來ましたわいな。

せん　それはお樂しみでござりますね。

つめ　お上さんがお參り故、歸りは大方廣小路と、それを當て込んでお供をして來ましたのさ。

勘吉　お歸りには觀音樣へお參りして、地内を方々廻るつもりでございます。

ト此内千吉包みより納め手拭を大分出し、

千吉　おせんさん、こゝへも掛けておくんなせへ。

せん　それは有難うござります。（ト明けて見て、）大層よい上りでございます。大丸でござりますか。

さき　いえ、堀田原の紺屋ですが、染めもよいが思ひ付きのいゝせゐか、どこでも褒めて下さいます。

せん　是では嘸ぞ目に附く事でございませう。もし千吉さん、思ひ付きは旦那さまでございますか。

千吉　いえ、時々見世へ寄る竺仙といふ呉服屋さんの思ひつきさ。

せん　おや、さうでござりますか。あの呉服屋さんは、役者に得意が澤山にあるさうですね、

ト言ひながら千吉、おせんを見て納め手拭を能き所へ吊す。おつめ見て、

つめ　千どん、あんまり下だと髮へさはるよ。

千吉　もつと上げようかね。

勘吉　それより高いと、仙さんに手が屆きませんよ。

千吉　是は憚りだ。
勘吉　いえ竺仙さんの事さ。
せん　わたくしかと思ひました。
さき　何んだか紛らはしいねえ。

ト皆々捨ぜりふにて茶を呑み居る。右の鳴物にて花道よりおたけ島田髷、世話娘の拵へにて東下駄、甘酒お捨結び髪、木綿世話裝にて兩人並んで出來り、跡より九郎藏木綿やつし白足袋草履、置手拭をして出來り、花道にて、

九郎　おい〳〵、そこへ行くのは、お竹どんぢやあねえか。
たけ　おや、九郎さんかえ。
お捨　大層めかして何所へ行つたのだえ。
九郎　今日は頭の用で傳馬町迄行つたが、あんまり賑かだから、太郎さまへ廻つたのだ。
たけ　ほんに大層なお參りだねえ。
お捨　朝出てしまふから、滅多に參つた事はないのさ。
九郎　所の者はつい無信心になるのよ。さうして今日は流しを休んだのか。

お捨　今に本町の常さんがおいでなさる約束だから、それで今日は休んだのさ。
たけ　さつきからお待ち申すが、あんまりおいでが遲い故、太郎樣と思つてお迎ひに來ました。
九郎　大方こゝらの茶見世へでも、引つ掛つて居なさるだらう。
お捨　なんとも知れないよ。
たけ　早く搜して見ようわいな。（ト舞臺へ來り、あたりを見て）
九郎　なんでも、こゝいらが劍呑だぜ。
お捨　大層幟が上つたぢやないか。
たけ　四五日跡にお參りに來た時とは、大層な違ひだねえ。
ト言ひながら茶見世の内を見て間の惡きこなし、
九郎　今に鳥居も幟も立てる所がなくなるだらう。
たけ　後になると込合ふから、早くお參り申して來ようわいな。
九郎　それぢやあ爰で別れよう。
お捨　直ぐにうちへお歸りか。
九郎　歸ることは歸るが、後に話に行かうぜ。（ト上手へはひる。）

お捨　九郎さん、待つてゐるよ。

トおたけあたりを見ながら、お捨ついて鳥居の内へはひる。此内皆々おたけを見て、

さき　おつめどん、今の娘はいゝ器量ぢやないか。
つめ　年恰好から形の大きさ、恰度よい加減でござりますね。
勘吉　連れは下品でござりますが、娘は品がようござります。
さき　あゝいふ奉公人を、一人欲しいものだ。
千吉　何處の娘か知らないが、百兩が物はありますぜ。
せん　あれを御存じでござりませぬか。
さき　あゝ、何處の娘か知らないよ。
せん　あれは大和屋おたけと評判の、女太夫でござります。
つめ　それぢやあ小屋者かえ。
勘吉　さつぱりさうとは見えませんねえ。
さき　それでは仲へも來るだらうが、さつぱり顔を見なんだわいな。
せん　あんまり仲へは參りますまい。先づ春先は向島、傳馬町から本町あたりが一得意でござります。

千吉　松の內はやつて來るが、不斷あんまり女太夫は仲へ來たことがねえが、あの器量で大見世向きや丸の內の窓の下を步いた日には、幾らになるか知れやあしねえ。
勘吉　確か大和屋おたけといふ女太夫は、素人の息子が惚れてゐると此間お客が話してゐなさんした。
せん　なんでも本町あたりで、大見世の息子さんださうでございます。
さき　どんなに女がいゝといつて、小屋者に惚れるとは、いやな事だね。
つめ　なにも道樂ですが、物好きな人もあるものでございます。
千吉　おつめどん、さういひなさんな。本所の阿古木樣初め幾らもありますのさ。
つめ　ほんに男といふものは、女の好きなものさねえ。
さき　その氣があるので持つたもの、なければ見世は上つたりだ。
千吉　世界中の人達が、思入れ女好きになるやうに、滅法界な御利生を、太郎樣へお願ひ申さうではございませんか。
勘吉　わたしもお賽錢の言傳がありますから、
つめ　お上さん早くお參り申しませう。
さき　それでは今の內參つて來ようかね。

せん　又お歸りに、お願ひ申します。

千吉　さあ、行きませう。

ト大拍子へ幽めて双盤を冠せ、おさき先に皆々鳥居の内へはひる。此鳴物にて花道より近江屋息子常三郎、羽織着流し駒下駄、子役の丁稚三太風呂敷包みを脊負ひ付いて來り、花道にて、

三太　若旦那、太郎さまは向ふでござりますか。

常三　お宮迄は、まだ一丁半もあるだらう、さあ早く行かう。

ト舞臺へ來る。おせん見て、

せん　旦那、お休みなされませ。

常三　三太、一服やつて行かうか。（ト床几へ掛ける。）

せん　お天氣がよいと、まだ暑うござりまする。わるいのではござりますが、お遣ひなされませ。

ト有合ふ團扇を出す。

常三　これ三太、おれは少し廻り道があるから、手前は是から觀音樣へ參つて、二十軒の藤屋へ行つて待つて居ろ。

三太　はい、畏りました。

常三　お稲荷さまも參りたくば、ちよつと參つて行くがよい。

三太　それでは、ちよつと遣つて下さいまし。

常三　おゝ、行くなら是を持つて行け。（小遣錢をやる。）

せん　小僧さん、お樂しみだね。

三太　若旦那、有難うございまする。是から太郎樣へお參りをして、奧山へ行つて京之助の手品を見るのだ。

常三　いつ迄も遊んで居てはなりませぬぞ。

三太　はい。

せん　お茶を上つておいでなさいまし。

三太　お茶より早く行く方がいゝ。

ト悅ぶこなしにて上手へはひる。おせん茶を出す。常三郎思入あつて、

常三　姐さん、かう參詣で群集しては、お前の見世もお賽錢が上るだらうね。

せん　有難い事に御信心のお方は、大てい爰へお寄り下さいますので、一人では間に合はぬ位でございまする。

ト爰へ鳥居の内より、以前のおたけお捨出來り、常三郎を見て、

お捨　おや若旦那、爰においでなさいましたか。

たけ　どんなに方々捜しましたらう。

常三　わしは今爰へ來たばかりだ。

お捨　おや／＼さうでござりますか。私は又どこぞの穴ッ這入りと思ひましたから、お宮のうしろのお穴まで捜してをりました。

たけ　今迄どちらにおいでなさいました。

常三　さう立つて居ては話が出來ぬ。まあ爰へ掛けるがいゝ。

ト合方替つて兩人床几へ腰を掛ける、おせんは脇を向いてゐる。

お捨　もし姉さん、お茶を一つおくれな。

せん　あい、今上げるよ。

ト盆へ茶椀を二つ載せ、不精々々に出す。おたけこなしあつて、

たけ　あなたが好いた所なら、どちらへいらつしやるも仕方がござりませんが、あんまり久しくおいでなさいませんから、今朝お手紙が參りませぬとお見世へ參らうと思ひましたわいな。

常三　見世の者も氣のせへか、薄々知つて居る樣子だから、けして流しに、いやさ、けして尋ねて來てくれるな。

お捨　來るなとあなたがおつしやるから、お店ばかりぢやござりません。御町内へも參りません、ねえおたけさん。

たけ　こちらで御遠慮してゐるを、可愛さうともお思ひなさらず、さつぱりおいでがござりませんから毎日泣いてをりましたわいな。

常三　その恨みも尤もだが、親掛りの體故、さう自由にも出られもせず、見世のものの手前を兼ね、やう〳〵今日は出て來たのだ。そんなに腹を立てる事はない。

お捨　おたけさんだとて、腹も背も立てたくはありますまいが、肩身の狹い身分故、胸に疊んで何事も我慢をするので此頃は、鬱いでばつかりゐなさいますよ。

たけ　何をいつても若旦那は、所詮本當にはなさいますまい。どうしたらよからうね。

常三　久しく來なんだは惡かつたが、もういゝ加減に機嫌をなほしたがよい。

お捨　こゝはあんまり往來故、まあ兎も角もおたけさんの家へおいでなさいまし。

常三　どうで今日は行くつもりだから、ちつとも早く出掛けよう。

たけ　そんならおいやでも、おいでなされて下さいまし。

お捨　あれさ、そんな事は内へ行つてお云ひな。

ト　内常三郎二朱金を出し紙に包み、

常三　大きにお世話になりました。（ト出す。）

せん　これは有難うござります。また入らして下さいまし。

お捨　姉さん、おやかましうございました。

ト三人立懸る。おせん脇を向いて知らぬ顔をして居る。

たけ　あもし。（ト袖を引く。）

不人相な娘だね。

常三　先へ行くから早く來なさい。（ト花道へ行く。おたけお捨追かけ來て）

たけ　あれ、御一緒に行きますわいな。

ト大拍子になり、三人思入あつて花道へはひる。おせん跡を見送り、

せん　目と鼻の間に居ながら、人が知るまいと思つて、押しの強いものだね。

ト鹽花をふり、茶椀を捨てる。双盤のあしらひ、合方にて花道より宗右衞門胡麻鹽鬘、順禮裝、娘お

あい同じく順禮裝にて出來り、花道にて、

あい　父さま、少しは快いかいな。

宗右　此間からお天氣の惡いので、持病が起りかけて居たところ、昨夜の雨に濡れたせゐか、今日は朝から疝氣が起り、腰が痛むその上に、持病が胸に差し込んでならぬ。

ト杖にて胸を押へて居る。

あい　強く起きると困るから、早く宿へ歸りませう。

宗右　歸るもよいがまだ今日は、宿錢丈も貰はねば、もう少し歩かにやならぬ。（ト舞臺へ來り。）

あい　大層賑かでござりますから、立つてをりませうか。

宗右　まあお參りをしてから、（ト行きかけ、）あいたゝゝ。

ト強くさし込む思入にてへたる。おあい介抱しながら、

あい　父さま、爰でござりますか、（ト押す。宗右衛門苦しむ、）何か呑みたくば貰つて上げようかえ。

ト是をおせん見兼れて、

せん　可愛さうに、癪でも起つたのかえ、今お湯を上げるから、よく押しておいでよ。

ト宗右衛門苦しむを、おあい泣きながら押してゐる。おせん湯を汲んで來て、

さあ、お湯をお上り。
あい　有難うござります。
せん　わたしが呑まして上げよう。（ト兩人にて宗右衛門へ湯を呑ませる、）生憎何も藥がないが、何ぞ藥を遣りたいねえ。
　　ト氣を揉むこなし、宗右衛門酷く苦しみ反返る。おあい押して居て、
あい　これ父さま、お前が死ぬとわたし一人で困ります。どうぞしつかりして下さいまし。これ父さま父さま、あなた、何ぞお藥を頂かせて下さりませ。
　　トおろ／＼泣きながら困る思入。おせん氣の毒なるこなし、此時上手へ以前のおさき、千吉皆々出かかり、此體を見て、
さき　その藥はわたしが上げよう。
せん　おゝ、お內儀さん、どうぞ遣つて下さいまし。
千吉　可愛さうに、此子一人で困るだらう。
勘吉　それでも女の子だから、優しいではありませんか。
つめ　幾つか知らぬが、いゝなりに合しては利口さうだね。

と此内おさき懷中物より藥包みを出し、

さき　知つておいでか知らぬが、是は津輕の一粒金丹といふのだが、どんなさし込みでも直に納まるから、是を呑みなさんせ。（ト出す。おあい頂き、）

あい　有難うござりまする。（ト又宗右衞門反返る故、おあい押へて、）今御新造さまから結構なお藥をお貰ひ申したから、氣をしつかりと持つて、是を呑んで下さんせ。

つめ　どれ〳〵、わたしが呑ませて上げよう。

ト皆々捨ぜりふにて介抱する。おせん湯を汲んで來る。おつめ宗右衞門に藥を呑ませる。おあい始終押へて居て、

あい　父さま、まだ苦しうござりますかえ。

ト宗右衞門少し治りし思入にて胸を撫り、

宗右　あゝ苦しかつた〳〵。あんまり強く差込むから、今日は治るまいと思つた。（トおさきに向ひ、）是はく何れの御新造さまか存じませぬが、苦しんで居りました故、お禮も申さず、結構なお藥を頂きましたそのお蔭で、命拾ひを致しました。有難うござりまする。

ト辭儀をなす。おあい手を突き、

あい　御新造さまや皆さまのお蔭で、親仁が助かりました。有難うござりまする。

おさき初め皆々へ禮を言ふこなし。

せん　ほんに、形は見窄らしい順禮ではあるけれど。

勘吉　器量もよければ爪はづれも、大層尋常ではありませんか。

つめ　こんな可愛い子をば、かうしておくのは惜しいものですね。

さき　どうだえ、差込みは少しは治つたかえ。

宗右　有難うござりまする。お蔭さまで差込みが緩んで參りました。

さき　それはよかつたね。

宗右　只今津輕の一粒金丹とおつしやりましたが、是は結構なお藥でござりまするな。

さき　殘りはお前に上げるから、又差し込んだら呑みなさんせ。

宗右　今お藥を下さらずば取詰めて死にますところ、危急をお救ひ下さいまして、まだその上に此お藥を、皆頂かせて下さりますとか、お禮の申し上げやうもござりませぬ。えゝ有難うござりまする。

ト宗右衛門、おあい悦ぶこなし。千吉前へ出て、

千吉　さうしてお前達は、何所のものだえ。（ト宗右衛門を見て、）や。

ト悄りなし、上手へついとはひろ。皆々不思議な思入。

さき　千吉は、どうしたのだらう。可笑いね。

勘吉　半分ものを云ひかけて、何ですか駈出して行きましたよ。

つめ　なんぞ忘れ物でもしたのではありませぬか。

せん　お包みなら爰にござりますが、何んでござりませう。

ト此内宗右衛門蹲み居て心付かず、おあい目早く千吉を見留めし思入、おさきこなしあつて、

さき　お狐さまを買つたところへ、煙管でも置いて來たのぢやあないか。もし順禮さん、今内の若い者が聞きかけたが、おまへ方は何所のもので、かうして順禮に出て居なさんすえ。

宗右　御親切さまによくお尋ね下さりまする。申上ぐるも面目なうござりますが、わたしが身の不仕合を、皆さん、お聞きなされて下さりませ。（ト合方きつぱりとなり、）元私は大阪の天滿に可なりに暮してをりましたが、その日にとんと困りませぬ故、つい家業が疎かになり、春は花見、夏は凉みと、明けても暮れても遊びに實が入り、しかも五年跡でござりました。有馬へ湯治に行つた時、好きな碁から懇意になつた御藏屋敷のお侍で、野村内藏之進といふ人が、有馬で路用の金を盗ま

れ、困るを見兼ねて三十兩貸したが緣で歸つた後、直に金は家來に持たせ返した上で、自身に來て厚く禮をのべた折、有馬の湯場で打ち掛けた碁の勝負をつけませうと盤を出したがわしの誤り段々打つ碁の勝負がつかず、互ひに小首をかしげるので思はず長くなりましたが、しかもその夜の八つ頃に千兩金を貸せと言出し、恟りなせば迎へに來た供の者が家内中を、いつか縛つて白刃を突きつけ、いやと言はせぬ强談に、是非なく千兩取られましたが、御藏屋敷の侍で野村内藏之進と云つたは僞り、誠は四國九州で、噂の高い曉星右衞門といふ、大泥坊でござりました。

ト思入あつて言ふ。おさき恟りなし。

さき　え、そんならその夜の碁の相手は、泥坊でござんしたか。

勘吉　今の話の樣子では、湯治場で三十兩取られたといふのも、噓でありませう。

つめ　それはお前、泥坊だもの、碁の好きなのをつけ込んで、盤面のいゝつくり事さ。

せん　ほんに世の中には、太い奴もあるものでござりまする。

さき　何にしても氣の毒な事ではないかね。

つめ　とんだ目に、

四人　逢ひなさんしたな。

宗右　それといふのも碁が好き故、心柄で是非がござりませぬ。隱居の身なら知らぬ事、決して家業のあるものは、打つべき物ではござりませぬ。私がよい手本でござりまする。

さき　そりやもう碁ばかりではござんせぬ、歌俳諧から音曲類、總て遊びに實が入ると、その身の障りになりますから、慰めになさるとも、餘り凝るものではござんせぬわいな。

宗右　實に左樣でござりまする。

せん　それではお前は泥坊に、金を取られて内も潰れ、

勘吉　そんな姿に落ちぶれて、故鄕を跡に此江戶へ、

つめ　その子を連れて來なさんしたのかえ。

宗右　はい、惡い時には惡い事が重なりまして、貸した金は殘らず取られ、段々內證も左前に、取られた金を取返さうと、つい堂島の相場にかゝり、初手に負けて二度三度追ひ目になつて地面家作、衣類道具も賣盡し、終にこんな姿になり下り、三度の食もろく〳〵に食ふや食はずの旅歩き、木錢泊りに煎餅より薄い蒲團に夜を明かし、日々に難儀を致しまするが、わしは若い時からして、榮耀榮華をしました上、心得違ひで相場にかゝり、かやうな身になりましたも、自業自得でござりますから悔む所もござりませぬが、是れが不便でなりませぬ。七つの年の祝ひ迄は立派に致して

やりましたが、夫から跡は憂き艱難、嘸子心にも私を、そでない親と明暮に恨んでをるでござりませう。

ト愁ひのこなし、おあい宗右衛門の袖を引き、

あい　これ父さま、わたしがなんで恨みませう。今に大きくなりますと、お前を樂にして上げますからそんな事を云はずと、達者になつて下さいまし、また差込むといけませぬよ。

ト案じる思入。おさき皆々顔見合せ、

さき　大きくなると親に樂をさせますとは、まだ十一か十二でありませうが、利口な子ではないかね。お前はおつ母さんはないのかえ。

あい　はい、わたしの小さい時に死にました。

さき　おゝさうかえ、いけない事をしたねえ。

せん　男親の手一つで、女の子を是迄に、育てなんすも、大抵な事ではござんせん。

勘吉　ほんに、女の子は女親に早く別れると、可愛さうでござりますね。

つめ　わたしは涙もろいから、こんな子に哀れつぽい事を言はれると、可愛さうでたまりませんよ、わあゝゝ。（ト大聲を上げて泣く。おさき思入あつて懐中物より金を出し紙に包み、）

さき　段々お前の不仕合せの話を聞いて見ると、誠にお氣の毒な事でござんす。是はほんの途中の持合せ、少しばかりのお金だが、是であの子に何なりと、好きな物でも買つてやつて下さんせ。

ト出す。宗右衛門辭儀をなし、受取つて、

宗右　是は〳〵御親切さまに、有難うござります。（ト頂き、開けて見て恟りなし）こりやまあ五兩下さりましたか、滅相な、こんなに頂いては濟みませぬ。とても下さるなら、私の身分相應にお惠みなされて下さりませ。

さき　以前のお前の身分では、はした金のその五兩、辭退をするには及びませぬ。

宗右　それぢやと申して見ず知らずの、私へ五兩といふ金子をば、

勘吉　はて折角お内儀さんが、お出しなされたそのお金。

せん　御親切を無にせずと、頂いて置きなさんせ。

つめ　御辭退するも、失禮ではないかえ。

宗右　成程、さやうに迄おつしやつて下さりまするを強ひて御辭退致しては却て失禮、左樣ならお詞に甘へ、此金子は頂いて置きまする。

さき　どうぞ納めて下さんせ。

宗右　有難うござります。これ、娘見やれ、あなたが五兩下すつた。お禮を申せ〳〵。

あい　御新造さま、親子のものをお助け下され、

宗右　何んとお禮を申しませうか。

兩人　えゝ有難うござりまする。

さき　さう禮を云はれては、却つて氣の毒でござりますよ。

つめ　何所へ泊つてゐなさんすか、早く歸つて、湯にでもおはひり。

勘吉　今日はゆつくり休みなさんせ。

宗右　實は今朝から差込みます故、今日は出まいと存じましたが、貰ひに出ねば宿錢や米の錢に困りますから痛むを押して出ましたが、お慈悲深いお方さまにお惠みを受けまするも、札所を廻りし觀音樣の皆御利益でござりまする。是では今に千兩の金を取られた星右衛門に、出逢ふ事でござりませう。

つめ　そりやもう、今に御利益で出逢ふ事もあらうけれど、

勘吉　向うは泥坊、こつちは子供と年寄り故、

せん　貰ひなさんした五兩の金を、とられぬやうにしなさんせ。

宗右　へい、今のお金は此通り、お腹へしつかり附けてをります。
つめ　お腹といへばお内儀さん、もうお晝でございませうから。
勘吉　觀音樣へお參りに早く行かうではございませんか。
さき　それはさうと千吉は、何をして居ることか。
せん　わたしがちよつと見てさんじませうか。
さき　いえ今に爰へ來ませうから、先へ歸れといつて下さんせ。（と茶代を紙に包み、）おせんさん、少しばかりだが。（ト出す。）
せん　お内儀さん、毎度有難うございます。
ト是にておさき、勘吉、おつめ下手へ來る。宗右衛門こなしあつて、
宗右　左樣なら、もうお歸りでございますか。
さき　お前も體を大事にして、早う宿へ歸りなさんせ。
宗右　是非お禮に上りたうございますが、失禮ながら何れのお方さまでございまする。
さき　いえ、禮に來るには及びませんよ。
宗右　それではどうも濟みませぬ、せめてお名前だけなりと。

さき　はて、縁があればその内に、又逢ふ事もござんせう。
あい　御新造さま、有難うござりまする。
さき　ても可愛らしい。これ、お父さんを大事におしよ。
つめ　さあ、お内儀さん、早く行きませう。
さき　あれ、せわしない人だねえ。
ト大拍子になり、おさき先に勘吉おつめ附いて花道へはひる、宗右衛門おあい跡を見送り拜み居て、
宗右　あゝ、御器量といひお氣前といひ、お優しい御新造さま、お見上げ申したお方ぢやな。
せん　あのお内儀さんはお情深く、難儀な者を見掛けると、よく惠んでお遣りなさいます。そのせゐかお内が新見世ではあるけれども大層御繁昌でございます。ほんに出來る事なら施しは、したいものでござんすな。
宗右　今お名前をお聞き申しましたが又その内とおつしやる故、強ひてお聞き申しますのも、おうるさからうと存じまして、お聞き申さずにしまひましたが、どちらのお内儀樣でござりまする。
せん　わたしが云つては惡いかしれぬが、今のお内儀さんは吉原の、揚屋町で大阪屋といふ、女郎屋のお内儀さんでございます。

宗右　へえ、女郎屋のお内儀さんでござりましたか。
せん　爰にある納め手拭は、今お貰ひ申したのでござんす。（ト見せろ。）
宗右　へえ左樣でござりますか。（ト言兼ねし思入にて、）申し兼ねた事でござりますが、そのお手拭を私に、どうか一つ頂せては下さりませぬか。
せん　此の納め手拭を、お前何にしなさんす。
宗右　へい、今日思はず私の、病氣をお救ひ下すつて、又その上に厚いお惠み、その手拭のお名前を、あなたと思ふて朝夕に、お禮が申したうござりますれば、廿へたお願ひではござりますが、一つ頂かせて下さりませ。
せん　さういふ事なら内々で、お前に一つ上げようわいな。
宗右　左樣なら、あの、下さいますか。
せん　爰で貰つたと言はしやんすな。（ト納め手拭を一つ宗右衛門に遣る。）
宗右　決して申しは致しませぬ。有難うござりまする。（ト下にゐて辭儀をする。）
せん　さう叮嚀に禮を言はれては困りますよ。して、ちよつと水を一杯汲みに行きますが、少し見世を見て居ておくれな。

宗右　畏りました。しつかり番を致してをりまする。

あい　私が汲んで參りませうか。

せん　それには及ばないから、見世をお賴み申します。

ト手桶を提げて下手へはひる。おあいあたりを見廻し、

あい　もし父さま、人に聞かれると惡いから、今迄わたしや默つて居たが、今お金を下すつたお內儀さんのお供をして來た若い人は、いつか來た泥坊の若黨で居た、慥に吾助、お前の顏を見るとその儘、悄りして迯げて行つたは、吾助に違ひござんせぬ。

ト是を聞き宗右衞門悄りして、

宗右　おゝさうか、さつぱり氣がつかなんだが、よくお前見つけたぞ。今日のお禮に大阪屋さまへ尋ねて行つて、若い衆の樣子を聞いて見ようわいの、道理でわしの顏を見ると、一目散に迯げたと思つた。ても子供は目の早いものだな。

あい　あの吾助がお內儀さんの、供をして居ましたから、もしや尋ねる星右衞門の。

宗右　これ、（と押へ考へる思入あつて、）いかさま、家名が大阪屋、こりや手掛りになりさうぢやわいな。

ト下手よりおせん水を汲み出來り、

せん　井戸が遠いのに、道が悪いので、遲かつたらうね。大きに有難う。
宗右　どう致しまして、今日はいろ〳〵お世話さまになりましてござりまする。
せん　又こつちへ來たら、寄りなさんせ。
宗右　はい、有難うござりました。さあ、おあいお暇しようか。
あい　お手拭を有難うござりました。
せん　なにお前、まあお茶など呑んで行きなさんせ。
宗右　いえ、その内にお禮に上りまする。
ト合方双盤になり、兩人花道へはひる。
せん　もうお午と見えて、人が途切れたから、此間にお午飯を喰べて置かうわいな。
ト葭簀の蔭へはひる。上手より以前の千吉出來り、向ふへ思入あつて、
千吉　小蔭に隱れて樣子を聞いたが、思ひがけねえ浪花屋の宗右衞門が身の行末、頭が千兩盜んだので木賃泊りの順禮に迄なり下つたは氣の毒だ。天滿の町の川達で、指に折られる物持ちだから、千兩位盜んでも困りもしめえと思ひの外、相場に掛つてすつてしまひ食ふや食はずで娘を連れ、旅から旅を歩くのは、こいつア頭やおれが顏を、知つてるから尋ねるのだ。間を見て頭に話し

て置き、どうかしにやならねえわえ。
ト ちつと思入。爰へおせん出て、

せん 千さん、女一件かえ。（ト出し抜けに背中を叩く、千吉恟りして、）

千吉 えゝ、そんないきな事ぢやあねえ。

せん 慰みなら、決してお止しよ。

千吉 なぜだ。

せん 昨日も二人縛られたよ。

千吉 えゝ、（ト身震ひするを、道具替りの知せ、聞きたくもねえ。
ト 下手へ行掛けるを、おせん留めて床几に掛けさせ、煙草を吸ひつけて出す。千吉思案のこなし。大拍子にて此道具廻る。

（淺草田圃非人小家の場）――本舞臺四間平舞臺の屋體、上手一間障子屋體、明け放しにて淺草田圃な見たる片遠見、正面暖簾口、上手押入、此内に題目を掛けし佛檀花立などよろしく、續いて三尺の板塀、是へ三味線を掛けし書割、下手腰張りの鼠壁、褄折笠を釣しある書割、下手の褄竹格子の半窓、よき所に二升樽を置き、いつもの所竹簀の門口、此下手一面に杉の生垣、總て非人小家の體、爰に酒

肴を取散し、上手に以前の常三郎、おたけ草双紙を見てゐる。お捨かつぽれな唄ひ、非人の猫寅兵太山猿赤助、踊つてゐる。おこま島田髷、女太夫にて三味線を彈いて居る。此模樣かつぽれにて道具留る。

お捨　踊はもういゝ加減におしな。埃が立つて、肴も何もごみだらけになるわね。

こま　幾ら呑んでもかう踊つては、傍から醉が醒めてしまふよ。

兵太　長濕氣を喰つたので久しく流しに出ねえから、旨え酒も呑まなんだが。

赤助　今日は若旦那の奢りだから、こんな時にたらふく呑まにやあ、安心して醉はねえ。

お捨　呑むのは幾らでも勝手にお上りだが、いゝ加減に切り上げちやあどうだえ。

兵太　どうしてまだ〳〵こんな大きな體だから、容易に酒はしみ渡らねえ。

赤助　お前の體へ沁み渡り、仁王さまのやうに赤くなるにやあ、是から夜通し呑まにやあならねえ。

たけ　ほんに大きなお前の體、小さな猪口では遣取が面倒でござんせう。大きな物でお上りな。

常三　まあ、そんなに急がずと、ゆつくり呑んだがよい。

兵太　えゝ若旦那、うまくおつしやるぜ。心の内ちやァあの野郎、早くしまへばいゝと思つておいでなさるだらう。

赤助　さう推量をするならば、此茶碗でぐる／＼廻して、おつもりとしようではないか。

お捨　それがいゝ／＼。

ト皆々捨ぜりふにて酒をのむ事よろしく、おこま酌をしようとして、

こま　お捨さん。此樽は明けましたか。

お捨　おや、もう一升明けてしまつたかえ。

兵太　茲にまだ二升あるぢやないか。

赤助　そりやあ今しがた九郎藏が持つて來たのだ。

お捨　何でもいゝから、それをお上りな。

ト猫寅兵太、山猿赤助にて二升樽の酒を茶碗へ明け、冷でぐい／＼と呑む。

こま　今お燗をするから、お待ちなねえ。

常三　何でも二人の勝手にして、たんと呑むがいゝ。（トお捨こちらへ來て。）

お捨　旦那が呑めとおつしやるのだから、幾ら呑んでもいゝけれど、（トいゝ加減に幕を切れといふこなしあつて。）お竹さんがさつきから、いえ、お竹さんも下戸だからね。それ下戸だから、えゝ氣が利かないねえ。

ト兵太の肩をつく、兵太酒に醉ひし思入にてむつとなし、

兵太　なに、氣が利かねえ、大きにお世話だ。氣が利いて居りやあこんな所へ來て、振舞ひ酒を呑むものか、臍の穴め。

お捨　散蓮花だの足の裏のと言はれた事はあるけれど、臍の穴と言はれては引込んではゐられないよ。さあ、どうでもおしく。

こま　お捨さん、生醉ひだからうつちやつておゝきな。

赤助　全體此野郎は、自分の臍の穴を見た事がねえから、窪いものを見るとへそだくと云ふのだ。

兵太　汐入堤の窪い所から、此頃こつちへ來やあがつて、わるく捌立てをしやあがるから、不斷から氣に食はねえのだ。

お捨　お前がぐづだから、捌いてやるのだよ。

兵太　何がぐづだ。

ト三味線を振上げる。お捨箒を持つて立掛る。赤助おこま捨ぜりふにて双方を留める。常三郎、おたけ困る思入。奥より題目七兵衛更けたる非人、着流しにて出來り、此中へ割つて入り、

七兵　これさく大概にしないか。かうして若旦那に御馳走になつて、喧嘩をさせてはわしが濟まない

何が氣に障つたか知らぬが、わしに免じて今日の所は勘辨さつしやい。

お捨　お父さん聞いておくれ、此野郎め、芋俵のやうなしまりのない大きな體が、利かなくなる程呑んで置いて、ぶう〳〵言ふからしやくひ出してやらうと思つたのさ。

兵太　へこんだ面で出過ぎるから、もつと引込ましてやらうと思つたが、七兵衛さんに出られちやあ、おれの方で引込まにやあならねえ。

赤助　もう十分に醉つたから、くだを卷かずに歸るとしよう。

兵太　若旦那にやあ濟まねえが、お捨の面を見てゐると、蟲唾がはしるから歸らうよ。

お捨　蟲唾がはしるもないものだ、芋蟲め。

兵太　なに、芋蟲だ。

ト立たうとして轉げる。七兵衛おたけ立ちかゝり。

たけ　どうぞ靜にして下さんせ。

七兵　これ、二人で連れて行つて下さい。

赤助　これ、そんなにころ〳〵轉げるから、芋蟲だと云はれるのだ。

こま　二人で連れて行きませう。

兵太　いやだ〱。

ト轉げる兵太を、赤助、おこまにて兩手を取り、無理に下手へ連れてはひる。

七兵　やれ〱、大風の吹いた後のやうだ。
常三　あいつの酒も惡い癖だ。
たけ　いつでもあれには困りますよ。
お捨　今度來たら向ふ脛を拂つてやりませう。
七兵　これさ、お前も女の癖に、手荒い事はしなさんな。しかし又あいつが來ると、鬱陶しいから酒肴を奥へ遣つて下さい。
お捨　ほんにさうしませう。おや〱大層荒して行つたねえ。

ト お捨酒肴の道具を持ち奥へはひる。跡に七兵衛こなしあつて、

七兵　あのお捨も口がえらいから、嘸あなたもおやかましうござりましたらう。
たけ　ほんに、若旦那にお氣の毒でなりませぬ。
常三　何いわしは構ひませぬから、決して心配さつしやるな。
七兵　あなたはその喧しいを構はぬとおつしやいますが、戸の立てられぬ世間の口。

常三 え、

七兵 いえなに、それに付けて若旦那に、ちつと申し憎いお願ひがござりますが、お聞きなすつては下さりませぬか。

常三 なに、云ひ憎ひとは。（下合方きつはりとなる、）

七兵 外の事でもござりませぬが、不圖した事でお前さまと娘が疾うから忍び合ふ、斯ういふ仲になりましたが、案じられるは身の行末、何をいふにも表向き人附合ひの出來ぬ體、本町でれつきとしたあなたの方へ、娘を上げる譯にも行かねば、又私の方へお前さまを、聟に貰ふ譯にもいかず、所詮末が遂げられませねば、い丶加減にして二人とも、思ひ切つて下さりませ。

トこなしあつて言ふ。常三郎おたけ顏見合せ思入あつて、

常三 こなたの異見は尤もだが、濡れぬ先こそ露をもいとふが、なまじ深う言交し、人交りが出來ぬとて今更不實に別れては、齒と齒を合して約束した、わしも男が立たぬ故、どうも思ひきられませぬ。

たけ よく云ふて下さんした。賤しい非人の娘でも、女の操は同じ事、二人の男は持たぬ氣で、思ひ定めていつぞやから、わりなき仲となつた故、わたしは死んでも若旦那と切れる心はござんせぬわ

いな。

七兵　女はすべてその心がなければならぬ筈なれど、そちが情を立てる時は、若旦那のお宅へ濟まぬ。又あなたも初めから人交りが出來ぬのは、御得心でなされた事故、今更思ひ切れぬとおつしやるのも御尤もでござりまするが、わしの身にもなつて御覽じませ。御大家の御子息を慾得づくで、私が内へ引込んだやうに仲間の者に言はれますが、實に悔しうござりまする。

ト悔しき思入、奥よりお捨出て、

お捨　お父さん、何だね、そんな野暮を言つてさ。かうした仲を切れろと言つても、安い鼻緒ではあるまいし、さう早く切れてたまるものかね、何れわたしが双方の爲めになる話をするから、今日の所はわたしに任せて、機嫌を直しておくんなさい。

七兵　親切にさう言つて下さるが、どう考へても仲間の者に。

お捨　はて、言ふ奴には言はせてお置きな。さあ、常さんもおたけさんも、奥を綺麗にして置いたから、田圃越しの騷ぎを聞いて、奥でいつぱいおやりなさいよ。

常三　奥へ行くはいゝけれど、七兵衞どのに氣の毒故。

たけ　切れる心でござんすかえ。

常三　なに、さう云ふ譯ではないが。

お捨　はてそんな事は奥へ行つて、さし向ひでお言ひなさいよ。

常三　それだといつて。

お捨　いゝからおいでなさいといつたら、おいでなさいよ。

ト兩人の手を取り、無理に奥へ連れてはひる。跡に七兵衛思入あつて、

七兵　最初におれが聞いたらば、かういふ事にはせぬけれど、出來た後故仕方なく、ついその儘にして置いたは、強ひて言つたら一途に迫り、身でも投げはしまひかと子に引かされて言はなんだは、此七兵衛が身の誤り。（ト佛檀へ思入あつて、）今日は谷中の日當さまがお仕置きになつた御命日、あゝいふ最期をなされたも、元惡者の柳全が勸めた故とはいひながら、出家の身にてあるまじき女犯の科故自業自得　相手のおころといふ女も、おのれが墮落させし故と、先非を悔いて出家となり、改心すれど罪を憎み、よく言ふものは一人もない。こりや人の事ではない、常三郎樣が家出でもなされた時はお竹故と、必ず人に言はれうから、早う二人に思ひ切らせ、縁を切らしてしまひたい。何はともあれその以前、惠みを受けた日當さま、どれお題目でも唱へませう。

ト佛檀へ向ひ、題目を唱へ居る。奥よりお捨跡を見ながら出て、

お捨　おやく〳〵、お題目が初まつた。（ト七兵衞の傍へ住ひ、）これお父さん、今お前が異見をおしだが、惚れた同士の二人故、とても切れる氣遣ひないから、昔堅氣を言はないで、金ところんで樂をおしな、あんまり野暮を言ふと、一人の娘を玉なしにするよ。

七兵　え丶喧しい。

お捨　まあ、何にしろ相手がい丶から、どうころんでも損はなし、一の富が當つたやうなものだから、なんぞお奢りな。

七兵　え丶喧しい。（ト大きく言ひ、）お題目の邪魔になる。（ト言ひながら下手にある二升樽を見て、）お捨どんあの樽は内でさう云つたのか。

お捨　いいえ、あれはさつきお前に何かいつて、九郎藏さんが置いて行つたのだよ。

七兵　さうか、何を持つて來たか知らなんだが、此間喧嘩をした時、おれが留めてやつた故、なんだかぐづ〳〵わからぬ事を言つて、ほんの禮のしるしだ〳〵と言つて置いて行つたが、あの樽か。誰ぞあの酒をのんだかえ。

お捨　あい、五合買つた酒だから、直になくなつてしまつた故、お竹さんをはじめ、皆で是を呑みましたよ。

ト此内下手より以前の九郎藏門口に聞いて居て、

九郎　それぢやあしるしの其酒を、おたけさんも呑んだのかえ。そいつは何より有難い。

ト言ひながら内へはひる。

七兵　おゝ九郎藏、さつきの酒は、なんの禮に持つて來たのだ。

九郎　何のお禮ぢやあねえ、婚禮のしるしに持つて來たのだ。

七兵　なに、婚禮のしるしとは。

ト合方きつぱりとなり、

九郎　お前の娘のおたけさんを、嫁に貰ふその先きから、しるしにありやあ寄越したのだ。

お捨　えゝ、そんなら是は結納かえ。

九郎　知れたことよ。是が身分のある人なら、家内喜多留に昆布壽留女帶代添へて五品か七品持つて來る所だが、非人仲間の附合ひだから、何がなしに大みつで、二升酒を買つて來たのだ。

七兵　これ九郎藏、一人で手前承知して居るが、おれにはさつぱり分らねえ。

九郎　お前も餘程ゆるんだね。あれ程さつきわつちが來て、こりやあ婚禮のしるしだと、持つて來たのを受けたぢやあねえか。

七兵　いゝや、さうは言はなんだ。喧嘩をしたその時の、禮のしるしと言つたのだ。

九郎　そんな事を今更言つても、それをわつちが聞かれるものか。

お捨　さうしてお前が婚禮の、しるしに酒を持つて來て、おたけさんを貰はうといふ、先の相手は誰だえ。

九郎　誰でもねえ、小栗の馬吉だ。

七兵　えゝっ。（ト悄りする。）

九郎　何も驚くにやあ及ばねえ、贈つた印しを受けなさりやあ、娘のおたけは馬吉の、今日から女房と極つたのだ。怪しい事でもしなさりやあ、その分にやあしねえから、さう思つて居なせえよ。

七兵　いや〳〵、こつちは知らぬ事だ。此樽持つて歸りなせい。

九郎　印しに持つて來た酒を、誰が持つて歸るものか。

七兵　それでもわしは知らぬことだ。

九郎　いや、知らねえとは言はせねえ。

ト是にて七兵衞きつとなつて、

七兵　何と言つても結納の、印しに酒は受けられぬ、

九郎　おい七兵衞さん、それ程受けられねえ酒ならば、なぜ此酒を呑んだのだ。

七郎　えゝ。さあ、呑んだのもおれは知らぬ。

九郎　さう又お前がどこ迄も、いゝしらを切るならこつちも意地だ。今馬吉を連れて來て、話をつけるから待つてゐろ。

ト門口へ出る。お捨留めて、

お捨　行くなら樽を、持つておいでな。

九郎　えゝ、餘計な世話をやきやあがるな。

ト思入あつて、逸散に花道へはひる。七兵衞氣の揉めるこなしにて、

七兵　とんだ目に逢ふものだ。こりやうつちやつては置けねえ。頭へ此譯を話して、馬を叱らしてやらにやあならぬ。（ト門口へ出る。）

お捨　そんならお父さん、頭の所へ行くのかえ。

七兵　お捨どん、少し頼むよ。

お捨　あいあい早く行つておいで。

七兵　いめへましい奴だなあ。

ト合方早めになり、七兵衛口小言を言ひながら花道へはひる。跡へ奥より常三郎おたけ出て、

たけ　もし常さん、どうしたらようござりませう。

常三　どうと言つて急な事故、わしにも思案がつかぬ。

お捨　それでは今の話を、お聞きかえ。

たけ　殘らず奥で聞いたわいな。

常三　困つた事が出來ましたが、こりやどうしませう。

お捨　どうするより若旦那、おたけさんを連れてお逃げなさい。當人さへ居なければ、話が、仕宜うござります。

常三　連れて逃げては七兵衛殿へすまぬ。

お捨　それはお案じなされずと、わたしが跡で譯を言ひます。

たけ　どうぞ常さん、連れて逃げて下さいまし。

常三　それでも、逃げて行く先に、當惑します。

お捨　舟宿でも料理茶屋でも、お店へお出入がござりませう。

常三　おゝ、それではかうしませう。内へ出入りの鳶の者、文治の所へ連れて行かう。

たけ　どうぞ、さうして下さいまし。
お捨　行く先さへ知れてゐれば、跡はわたしが呑み込んでゐるから、裏口へ出て田圃傳ひに、少しも早くお逃げなさい。
たけ　丁度日暮れで人顔の、知れぬを幸ひ二人して。
常三　七曲りから和泉橋、神田へ逃げて行きませう。
お捨　さあ〳〵早くお出なさい。

ト　お捨門口にある二人の履物を持つて上手の屋體へ引張つて行き、爰から逃げろといふこなし、兩人は跡を頼むといふ思入。お捨障子を出して立てる。捨ぜりふにてこちらへ來り、

先づ、段取に行つたわいな。どれ、灯を點けよう。

ト　行燈を出して灯をつける。ばた〳〵にて花道より七兵衛歸り來て、直に内へはひり、

七兵　生憎今日は傳馬町へ、御用に行つて留守だつた。
お捨　おや、さうですか、もう今に歸りませう。
七兵　その内馬が來るだらうが、誰を頼んだものだらう。（ト思案のこなし）
お捨　仲間同士の事だから、案じるには及ばないわね。

七兵　さうして若旦那やおたけは、どうしました。
お捨　奥に居なさるだらう。
七兵　ちよつと爰へ呼んで下さい。
お捨　あいよ。

　ト舌を出し暖簾口へはひろ。直に出て上手の屋體を明け、態と不思議な體にて、

　おやく、二人は内に居なさらないよ。（ト七兵衛恟りして、）
七兵　なに、娘は内に居ませぬとか。
お捨　大方今の話を聞き、若旦那と迯げたのだらう。
七兵　えゝ、親不孝な奴だなあ。
お捨　不孝どころか金儲けだ。
七兵　そんな事は、（トお捨を突倒すを道具替りの知せ、）嫌ひだわえ。

　ト四つ竹節にて七兵衛悔しがる。よろしく此道具廻る。

（神田文治郎内の場）――本舞臺四間平舞臺、上手一間折廻し障子屋體、内に階子を取付け、此上二階

の中窓、正面大阪格子を二枚立切り、この上手三尺の床の間、是へ神田明神の掛物、前に三方、供物神酒徳利、續いて三尺の地袋、間平戸の押入、下手に手鳶、長かぎ、鞘へはひりし長提灯抔大分に書割り、板羽目小壁の正面、立派な神棚を釣る。いつもの所門口此向ふ腰障子の勝手口軒へ祭りの團子提灯を掛け、總て鳶の者住居の體、およし賄婆の拵へにて行燈の傍に眞鍮の燭臺を掛けてゐる。鶴太、鳶藏、蛸吉半纏裝子分、藥鑵の掛りし大火鉢を取卷き、木遣りの稽古をしてゐる。屋臺囃子にて道具留る。

鶴兄いは色氣づいたと見えて、妙に靜かになつたね。

鶴太　女に責められるので、こんなに靜かになつてしまつた。

鳶藏　自惚れた事をいふが、一昨日の團子の喰過ぎだ。

蛸吉　おまけに昨日今日のこわ飯で喰ひもたれに違えねえ。

よし　ほんにお祭りのおこわは、方々で出されるから、少しづゝでもつい過ぎるのさ。

鶴太　色氣のねえ事を云ふぜ。今年は神田も蔭祭りだから、山車も曳物も飾らず、ほんの氏子は提灯ばかりだ。

鳶藏　祭り〳〵と言つたのも、もう今日限りで明日から、みんな仕事に出にやあならねえ。

蛸吉　仕事と言やあ半纏を、をばさん洗つて置いてくれたか。

よし　いゝえ、洗やあしないよ。

蛸吉　なぜ洗つてくれねえのだ。

よし　洗濯屋へ持つて行けば、幾らか錢を出さにやあなるまい。なんぞきぼをするなら洗つて上げよう。

蛸吉　こう人聞きの惡い事を言ひなさんな。たゞ洗はした事はねえ。

鶴太　違えねえ／＼、頭のものは喰倒すが、お前達の骨はぬすまねえ。

鳶藏　見世開きや建前で、手拭でも貰つて來りやあ、いつでもおめへにやるぜ。

よし　そりやあたまにはくんなさるが、豆の漏るやうな景物手拭は、洗濯賃には御免だよ。

蛸吉　豆が漏らうが砂利がもろうが、貰ふ時には手を出して取るだらう。

鶴太　物を遣りやあにこ／＼するが、用を頼むと佛頂面をしやあがつて。

鳶藏　ぜんてえ不斷から氣に食はねえひよこすか婆あだ。

蛸吉　もう是から、手前に洗つちやあ貰はねえ。

よし　夜業に一人で洗ふ方が、錢が出なくつてよからう。いゝ若い者だが、しみッたれだねえ。

三人　何がしみッたれだ。

ト屋臺囃子にておよしを打ちに掛る。およし逃げて廻る、奥より笹川文治燕の者頭の拵へにて、煙草盆を提げて出來り、

文次　これ、みつともねえ。靜かにしろ。（ト大きく言ふ。是にて皆々下にゐる。文治上手に住ひ、）婆あもいい年をして、てへけへにしねえか。

よし　私は何にも言やあしませぬ。

鶴太　此婆あ、嘘ばかりつきやあがる。

鳶藏　何も言はねえことがあるものか。

蛸吉　頭、かうでごぜえます。（ト言ひ掛けるを、）

文治　えゝ喧しい、どうで大した事ぢやアあるめえ。ぜんてえ手前達が此婆あを、朝晩目の敵にするからだ。

よし　ほんとにさうでございます。

文治　えゝ、默つてゐろ。洗濯婆あも口が過ぎるから、皆に憎まれるのだ。おれが女房を持たねえから若い女を内へ置きやあ、人の口が鬱陶しいから、婆あを置きや口喧しく、寄ると觸ると喧嘩を初め、騷々しくつてなりやあしねえ。それでも色をされるより、増しだけれども年中持込む世間の

喧嘩、その裁判で澤山だ、若い奴らも婆さんも互ひに不承をするがいゝ。

ト是にて四人天窓を下げ、

よし　何と云つても此婆が年を取つて居りますだけ、一番割が惡うございますが、つまらぬ事を言ひ募り、

鶴太　頭の耳にはひつちやあ、わつちらが濟みません。

蔦藏　今度から婆さんを、相手に喧嘩はしませぬから、

蛸吉　今夜の所は聞き流しに、どうぞなすつて、

四人　下さいまし。（ト手を突き詫びる、）

文治　皆一つ鍋の物を、喰つてゐる仲だから、双方で勘辨をし合ふがいゝ。

四人　はい。（ト天窓を下げる、）

文治　はて、世話の燒ける奴等だなあ。

ト右の鳴物にて花道よりおみさ大店の女房の拵へ、以前の三太供をして出來り、直に舞臺門口へ來て

みさ　文治どのは、内に居なさるか。（ト鶴太こちらへ來て、）

鶴太　頭は内でございますが、（ト門口を明け、）これは御新造さま、いらつしやいまし。頭、本町の御新

造さまがおいでなされました。

文治　これはおめづらしうございます、まづこちらへお通りなされませ。

みさ　それでは御免なさいまし。

ト内へはひる。鳶藏上手へ座蒲團を敷く、

もうお構ひなさいますな。

ト上手へ住ふ。蛸吉煙草盆を出す。鶴太件の燭臺へ灯を點す、婆や茶を汲みて來るを見て、

文治　おい婆さん、それはいけねえ、あつちで入れて來なせえ。

婆　はい／＼。（ト奥へはひる。）

文治　なんぞ御用でございますなら、ちよつとお人を下さいますれば、宜しうございますに。

みさ　ちと内では話しにくい事があつて、態々參りましたわいな。

文治　へえ、さやうでございましたか、私は又明神樣へでも御參詣の、お戻りかと存じました。こりやあ三太どん、御苦勞でごぜへます。

三太　へい。（ト辭儀をする。）

文治　さうしてお店で、なさり憎いお話とは、どういふお話でございます。

みさ　外の事でもないが、悴常三郎の事に付いて、こなたを賴まねばならぬ故、それで今夜來ましたわいな。

文治　若旦那の事でお賴みとは、さしづめお嫁さんの事でございますか。これ、まだお茶は出來ねえか見て來い。

鶴太　婆あ何をして居るか。

鳶藏　極りで長いぜ。

蛸吉　どう行つて見よう。（ト三人奥へはひる。おみさ思入あつて、）

みさ　嫁の話ならよいけれど、心配が出來ましたわいな。

文治　御心配とは若旦那が、どうかなさいました。

みさ　文治どの、まあ聞いて下され。（ト合方きつぱりとなり、）こなたも知つて居なさる通り、悴はちつと内輪過ぎて、困つた故、ひよつと病でも出ようかと旦那どのもわたしも、いつそ案じて居ましたが、元服をさせた年からめつきりと達者になり、やれ嬉しやと思ふ内、此春から淺草のもよりへ行くとどうも歸りが遲い故、吉原へでも遊びに行くか、但しは藝者か、それとも奥山の茶屋に馴染の女でもあつての事かと、どうもわたしには分らぬが、今日も三太を供に連れさせ、下谷邊

へ遣りましたら、歸りに淺草へ廻つて行き、太郎さまの境内で、二十軒の藤屋へ行つて居ると言付けて、それきりに三太が幾ら待てど暮せど悴が藤屋へ來ぬ故に、内へ歸つて其話し、知つての通り物堅い親父どの故知れぬやう、蔭になり日向になり取成しては置くけれど、長い内には知れる故、どうしたものと考へて、こなたを頼みに來ましたが、わたしが心配する事を悴に話してとつくりと、どうぞ異見を云つて下され。是を頼みに來ましたわいな。

ト思入にて言ふ。文治こなしあつて、

文治　それは嘸御心配でござりませう。迚も私風情が申したとて、お聞入れもござりますまいが、しかしあなたさまの御心配は、よく私から申上げませう。御元服をなさつたも、此間のやうに思ひましたが、もうそんな事をなさるやうに、おなりなされましたか、早いものでござりまする。

ト爰へ奥より婆や盆へ急須と茶碗菓子鉢を載せ持つて出で、

婆　はい、おそなはりました。（ト出す、）

文治　半間な所へ出しやあがつて、困る婆あさんだ。

婆　はい／＼、御免なさい。

トおみきへ茶を汲みて出し、文治の傍へ湯吞を置き、こちらへ來る。此内子分三人も出て下手に控へ

居る。

文治　詰らねえものでごぜえますが、一つお取り下さいまし。

みさ　必ず構ふて下さいますな。

文治　只今のお頼みは若旦那にお目に掛り、なんどりと申上げますから、決してお案じなさいますな。

みさ　常三郎は小さい時から、こなたに深く馴染んで居れば、内證の事も打明けて話すまいものでもありませぬが、たつた一人の悴故、好いた女子があるならば、女郎であらうと藝者であらうと、どうか貰ふてやりたいから、もしこちらへでも來ましたなら、取扱ふてやつて下され。

文治　もしそんな事でもござりますれば、先の相手次第で私が、お店のお恥になりませぬやう、及ばずながら扱ひますから、必ず御心配なさいますな。

ト此内おみさ胴卷より金包みを出し、

みさ　是は内へ内證なれど、五十兩預けて置きます。もし入用の事があつたなら、此金を遣ふて下され。

文治　有難い思召しでござりまする。兎も角も此金子は、お預り申して置きませう。

ト金を受取り改める。

みさ　ひよつとそれで足りぬ時は、内證でわたしへ言ふて寄越して下さんせ、早速届けますわいな。

文治　畏まりましたが、さう大金の入る事も、よもやありは致しますまい。
みさ　文治殿に此事を、頼めば外に用もなし、宵の内に歸りませう。
文治　どうでお送り申しますから、まあよろしいではござりませぬか。
みさ　いえ遲うならぬ内、お暇致しませう。（ト立掛る。）
文治　是はどうも、折角おいでなさいましたに、何の御愛想もござりませんで。これ鶴や、御新造さまをお送り申せ。
鶴太　畏りました。（ト鶴太こちらへ來り、）
みさ　内へ知れると惡い故、決して送るには及びませぬ。
鶴太　左樣なら途中まで、お送り申しませう。
ト文治小僧に菓子を紙に包みやり、
文治　三太どん、お待ち遠。
三太　頭、有難うござります。
みさ　そんなら悴が來ましたら、必ず共によいやうに。
文治　きつと御異見申上げませう。

三太　それで安心しましたわいな。
文治　これ、提灯をつけねえか。
みさ　いえ、よい月夜故、ない方が勝手でござります。
文治　氣をつけてお送り申せ。
みさ　こりや、御苦勞でござんすな。
　　ト聖天になり、おみさ先に鶴太三太付いて花道へはひる。跡に文治戸棚へ金をしまひ思入あつて、
文治　同じ人間に生れるなら、よい所へ生れてへものだ。いかに、一人息子だとて、氣に入つた者があるなら女郎でも藝者でも貰つてやらうとおつしやつて、こちとらの所へ口をすぼめ、頼みにおいでなさるのは、親の慈悲とはいふものの、考へて見りやあ勿體ねえ、まだその上に内證で、何かに使へと五十兩、金を預けておいでなさるとは、實に親は有難いものだな。
蛸藏　御新造さまの樣な親なら有難いが、こちとらのお袋は、一分でもそんな金は出しやあしねえ。
蛸吉　此間も廓へ行つて、朝勘定が足りねえから、内へ取りによこしたら、文使ひにかすを食はして四百の錢もよこしやあしねえ。
文治　二人ともまだ親があるが、若旦那を見て羨しいと決して親を恨んぢやあ濟まねえ。貧乏人はい

い衆より、餘計に親を大事にするが、苦しい中で育てられた恩返しといふものだ。

鳶藏　おれのおつかあも苦しいから、是から大事にしてやらう。

蛸吉　おいらのおやんも貧乏だから、女郎買ひの尻はふかせめえ。

婆　何でも年寄は大事におしよ。

兩人　又口出しをしやあがる。

文治　これ、無駄口を利かねえで、今の内湯へでも行つて來い。

鳶藏　頭、それぢやア、

蛸吉　行つて來ます。（ト門口へ出て、）

鳶藏　祭でもまだあるか知らぬ。

蛸吉　ぬけたら一廻り廻つて來よう。

ト兩人下手へはひる、此內花道より火の番提灯を提げ、拍子木を打つて出來り、下手へ來る。婆あ門口を明けて、

婆　小父さん、今五つかえ。

火　へい、此頃は石町が風が惡くて聞えぬ故、上野の鐘で廻るから、ちつと早いかも知れませぬ。

卜打ちながら下手へはひる。

婆　早い所ぢやあない。大變に夜が長くなつた。

卜此内文治床の掛物を拜み、仕舞に掛る。三方を片付けなどする事よろしく、五つの本釣鐘端唄の合方になり、花道より常三郎腕組みをなし、おたけ跡を見ながら出來り、花道にて。

たけ　もし常三郎さん、文治さんとやらのお内は、此邊でござんすかえ。

常三　向ふに見える、荒い格子の内がそだ。

たけ　わたしや間が惡うござんすが、外に待つて居りませうか。

常三　なあに、内へ出入りの頭だから、遠慮する事はない。

たけ　それでもきまりが惡うございますもの。

卜兩人舞臺へ來り、門口から覗く。此内文治表へこなしあつて、

文治　表へ誰か來たぢやあねえか。

婆　おや、さうでございますか。（卜こちらへ來り、）そこへおいでのは、どなたでございます。

常三　わたしぢやわいの。（卜門口を明ける。）

婆　おゝ、本町の若旦那でございますか。

文治　おゝ若旦那、今もあなたのお噂をしてをりました。さあ〳〵こちらへおはひりなされませ。

常三　御免なさいまし。

ト常三郎、おたけに爰に待つて居ろといふこなしあつて、内へはひり、眞中へ住ふ。文治思入あつて上手へ住ひ。

文治　あなた、今時分お一人で、何所へおいでなさいました。

常三　こなたの所へ來ました。

文治　私に、なんぞ御用でござりますか。

常三　別に用といふ譯でもないが。

文治　それぢやあお遊びにおいでなさいましたか。

常三　そんな氣樂ではござりませぬ。

文治　それでは、何しにおいでなさいました。

常三　わしが今夜來たのは。（ト云ひにくき思入にて、）そなた、小言を言つて下さるな。

文治　どう致しまして、決して小言は申しませぬが、何の御用でござりまする。

ト常三郎言はうとして、

常三　どうも、小言を言ひさうだから。

ト言ひ兼れてゐる。婆門口を見て、

婆　もし頭、若旦那は表へ美しい娘御を、連れておいでなさいましたよ。

文治　なに、娘を連れて來なさいました。（トさうだらうといふこなしあつて、）なぜ、內へお入れなされませぬ。

常三　ちつと內へは、入れられぬから。（ト小聲に言ふ。）

文治　もしお前さん、遠慮はねえ。こつちへおはひりなさい。

たけ　はい。（トはひり兼れてゐる。）

婆　遠慮なさるには及びません。さあ〳〵、こちらへおはひりなさいまし。

トおたけの手をとり、無理に內へ入れる。

たけ　御免なすつて下さいまし。（ト下手へ住ふ。文治見て、）

文治　こりやあ美しい娘御だ。若旦那、此娘御はどうなすつたのでござへます。

たけ　さあ、此娘は。（ト云ひ兼れる。）

文治　連れて逃げなすつたのかえ。

常三　よくこなた當てたの。

婆　それぢやあ若旦那の、お馴染でございますか。

文治　成程、是ぢやあ淺草へ、

兩人　えゝ。（ト悄りなす。）

文治　度々おいでなさる筈だ。

常三　どうしてそれを知つて居る。

文治　知つて居るかとは若旦那、さあ、小言ではございませんから、決して惡くお聞きなさいますな。（ト合方きつぱりとなり、）實はさつきお袋さまが、內證で爰へおいでなされて、あなたのお話をなさいましたが、親御様位有難いものはございませぬ。お袋さまのおつしやるには、たつた一人の伜だから、好いたものがあるならば、女郎でも藝者でも貰つてやつてくれとおつしやいました。

常三　それではお袋が、さう言ひましたか。それで安堵したわいの。

文治　何と有難いではございませぬか、是からあなたが御嫁をお貰ひなさつたら御辛抱なさいまして、親御さまに御苦勞を掛けぬやうになさいまし。つい此間迄子供衆だと思つて居たに、もうこんな事をなされるやうにおなりなさいましたか。かう見た所が女郎とも、藝者とも見えないが、何所の

娘御でござりまする。
常三　さあ、此娘は。
文治　人柄のいゝ子だが、圍ひ者でゞもございますか。
常三　いゝえ。
文治　はてな、それぢやあ稽古所、むゝ、何かの師匠かね。
常三　さあ。
文治　さうでなけりやあ武家の娘か。
常三　さあ。
文治　但しは町人か。
常三　さあ。
文治　是はしたり、隱すには及びませぬ。早くわつちにおつしやりませ。
常三　それでは云ひますが、きつと叱つて下さるな。
文治　何であなたを叱りますものか。何所の娘でございます。
常三　さあ、此娘は淺草の。（ト云ひ掛るを、）

たけ　もし。（ト袖を引く。）
文治　違えねえ、奥山の茶見世の。
常三　もうちつと先きの。
文治　もうちつと先きは、田圃だ。
常三　さあ、その田圃。
文治　なに、田圃の、
常三　小屋の娘ぢやわいの。（ト思ひ切つて言ふ。）
文治　えゝ、それぢやあ乞、（ト言ひかけ。）此子は、小屋の娘かえ。（ト呆れし思入）
たけ　お恥しうござりまする。（ト俯向く。）
常三　どうかこなたがお袋へ、話して貰つてくれまいか。
文治　あれが好いたものなれば、何んでもよいとおつしやるが、まさか小屋の娘をばあなたの嫁には貰はれませぬ。
ト是を聞きおたけ思入あつて、
たけ　さうぢや。（ト駈け出ようとする。常三郎留めて、）

常三　これ、おたけどこへ行くのだ。

たけ　わたしや身を投げて死にますわいな。

常三　なぜ身を投げて、そなたは死ぬのぢや。

たけ　さあ、人交りのならぬ身に、あなたの女房になられぬからは、生きてゐる氣はござんせぬ。

常三　そりやわしも同じ事、とても添はれぬ事なれば、そなたばかり殺しはせぬ、おれも一緒に死ぬわいの。

たけ　いえ〳〵お前さんは死ぬには及びませぬ。わたしに勝つたよい嫁御さんを、お持ちなすつて下さいまし、生きながらへてお嫁さんの、來るのを聞くも悔しい故、わたしや死んでしまひますわいな。

ト泣伏す、婆驚き門口を押へ居て、

婆　もし頭、どうかしてお上げなさい。うつちやつて置くと、外へ駈け出しまする。

ト文治是非もなき思入あつて、

文治　添はれぬ時は死なうと迄、覺悟をしてお互ひに文治を賴つて來なすつたを、野暮を言つて見殺しにするのも本意でござりませぬから、死なずと事の濟むやうに、どうか話しを致しませう。まあ

二人とも二階へ行つて、氣を落付けておいでなさい。

常三　そんならこなたが話をして、

たけ　賤しいわたしを、若旦那の、

常三　嫁に貰つて下さるか。

文治　能く小本なぞにある筋だが、嫁に出來ずば妾とか、どの道いゝ話にしませうから、狹くともあの二階へ、婆さん、灯をつけて上げろ。

婆　はい〳〵。さあ、お二人共おいでなさい。

常三　とんだ厄介になりまする。

たけ　もうお構ひ下さいますな。

婆　さあ、こつちへおいでなさい。

ト端唄の合方にて、婆案内をして常三郎おたけ上手の障子屋體より二階へ出る心にて、跡を建て切る
文治困つたものだといふ思入あつて、

文治　宵にお話しを聞いた時、てつきり女一件と直に覺つて居たけれど、よもや大店の息子さんが三尺店でも緣組の出來ねえ非人の娘をば、連れて逃げようとは思はなんだ。出來た事は仕方がねえが

幾ら好いた女でも、ありやお嫁には貰はれめえ、とあつて無理に手を切れば、つまりは知れた無分別、もしもの事でもあつた日には、金を預けて頼みなすつたお袋さまへわしが濟まず、あゝこんな困つた事はねえ。

ト思案のこなし、祭文の合方に、屋臺囃子をあしらひ、花道より四幕目の小栗の馬吉に、以前の九郎藏ついて出來り、

馬吉　それぢやあ向ふが頭の內か。

九郎　あい、向ふが月見の文治といふ、神田で顏の賣れた頭さ。

馬吉　おたけは居るに違えねえな。

九郎　わつちがさつき突當て置いた。

馬吉　居せえすりやお話になるから、ちつとも早く掛り合はう。（ト舞臺へ來り、門口の外につくばひ、）へい、お願ひでございます。（ト明ける。文治見て、）

文治　何所から來たのだ。

馬吉　へい、淺草の田圃の小家から參りました。

文治　なに、田圃の小家から、（トぎつくりこなしあつて、鰭と氣を替へ、）日勸進の仕切なら、此間遣つて

しまつたぜ。

馬吉　いえ、日勸進ぢやあござりませぬ。

文治　日勸進でなくつて、小屋から何しに來たのだ。

馬吉　少し尋ねるものがあつて參りました。

文治　さうか、何を尋ねるのだ。

馬吉　田圃の小屋の仲間うち、法華七兵衛といふ非人の娘が、こちらのお内にをりますさうだから、どうぞ私にお返しなすつて下さいまし。

文治　そんな娘は居やあしねえ。

九郎　頭、背に二人連れでこちらへ來たのを、わつちが跡をつけて來たが、内に居ねえとおつしやいますか。

文治　訝にからんでものを言ふが、居ねえから居ねえといふのだ。（トきつと言ふ。）

馬吉　それぢやあきつと居ねえと言ひなさるか。

文治　なんでそんなに駄目を押すのだ。

馬吉　おたけは居るに違えねえが、それを居ねえと言ひなさりやあ、家搜しをしても連れて行きます。

文治　曇り霞のねえ所から、月見の文治と仲間でも、肩名に呼ばれるしらの勢ひが、人もあらうに小屋者に家捜しをされる覺えはねえ。
馬吉　さあ覺えがねえとおつしやりますが、こつちに慥な證據がござります。
文治　何、證據があるとは。（ト馬吉、おたけの下駄をとりて、）
馬吉　この下駄は、誰のだえ。
文治　や。
馬吉　小倉と合せの天鵞絨鼻緒は、自分細工の東下駄。これがおたけの居る證據だ。
文治　むゝ。（ト思入。）
馬吉　頭、御免なせえ。（トずつとはひつてよろしく住ふ。）
文治　これ、小屋者の身でづか〳〵と、何で内へはひるのだ。
馬吉　おたけを内へ匿ひなさりやあ、同じ非人の馬吉だ、なんで御遠慮しますものか。
九郎　わつちも一つ釜だから、臺所へ陣どらう。頭、御免なさい。
　ト内へはひり下手へ住ふ。爰へ下手より鶴太、鳶藏、蛸吉出て來て此體を見て
鶴太　や、こいつらは小屋者だ。

鳶藏　何の用か知らねえが紙幟を持つ身をもつて、

蛸吉　金箔つきの頭の敷居を、誰に斷つて、

三人　跨ぎやあがつた。

ト鉢卷をして立掛る。馬吉きつとなり、

馬吉　紙幟持ちと云ひなさるが、こりやあお上の御用で出るのだ。お前方が纏や階子を擔いで火事場へ出なさるも、又わつちらが仕置場へ紙幟や捨札を風を切つて持つて行くのも、御用となりやあ同じ事だ。道普請で鳶手合ひが砂利や土を擔ぐのも、溜へ下る病人を非人仲間で擔ぐも、もつこう擔ぎに替りはねえ。あんまり安くしてくんなさんな。

子分三人　ふてへ事を云やあがる。（ト立掛る。）

文治　これ。

ト子分へきつとこなし、馬吉、文治の顔を見上げ双方氣味合ひよろしく誂への合方になり、

馬吉　いゝしらの勢ひの頭だから、おめへを立てて門口に、しやがんでゐる内目に付いた、沓脱にあるおたけが下駄、素人衆は氣がつくめえが、いゝうぶと見せても桐臺は仕上げ直しの東下駄、しかも鼻緒はまがひ天鵞絨、知らぬと云つても上べから地性が透いて見えるから、隱さず言つておくんなせへ

九郎　それとも達て隱しなさりやあ、家搜しをして連れて行くが、敷居三寸跨げねえ、非人に内を手籠めにされ、指を啣へて默つて居ちやあ、小口の一つも利きなさる、頭の恥ぢでございませう。

馬吉　匿つたら匿つたと、有體に言ひなせえ。

ト文治もう是迄といふ思入あつて、

文治　もうかうなつたら隱しやあしねえ。如何にもおれが匿つた。

馬吉　それ見ねえ、匿つたら匿つたと先から早く言やあいゝのに。

九郎　なんで又小屋ものを、承知で頭が匿ひなすつた。

文治　御得意先のお店の息子に、貰つてくれと頼まれたから、それでおれが匿つたのだ、迎ひに來るなら今聞いた七兵衛とかいふ親が、來たならこつちも渡してやるが、種の知れねえ手前達に話をするも面倒だ、何所へも女はやらねえから、氣を揉まずと今夜一と晩、おれに預けて歸んなせえ。

馬吉　いゝや預けちやあ歸られねえ。ふんじばつてもあの女を、連れて歸るから出してくんねえ。

鶴太　やい、手前達は匿つた女の身寄か知らねえが、

蔦藏　頭が優しく歸れと言ふなら、頭に負けて早く歸れ。

蛸吉　わるく掛り合ひをつけやあがると、其儘ぢやあ、

三人 歸さねえぞ。

ト立ち懸る。此時二階の窓へ常三郎おたけ顔を出す文治見て、

文治 あゝこれ、出ちやあ惡い、いやさ、手前達は口を出すな、出ては惡い、いや、口を出さずと引込んで居ろ。

ト双方へ思入あつてきつと言ふ。馬吉是に心付かず、子分を見てせゝら笑ひ、痺の切れしこなしあつて、

馬吉 あゝ痛へ〳〵痺が切れて叶はねえ、頭、御免なせえ。（ト胡坐を搔くをきつかけに合方替つて文治に向ひ、）おい文治さん、お前のお店の近江屋に、不幸があつてわつちらが、百貫の仕切をくれと言ふのを五十貫にしてくれろと頭が仲へはひりなさりやあ、お顏に免じて負けますが、是ればかりは負けられねえのは、この九郎藏が媒人で今日婚禮の印しまで持たしてやつたおれが女房だ。

文治 印しを遣つたか遣らねえか、そりやあおれは知らねえが、是れが宿なしと言ふぢやあなし、淺草田圃に小屋のある法華七兵衞が娘のおたけ、七目題目叩きたつて連れて行かうと手前が云つてもおれも一旦賴まれて匿つたのが身の御難、龍の口から直き近い、町奉行所へ引出され、たとへ首の座へ直されても手前に女は渡されねえ、七里ケ濱に打つ波も岩に碎けて和らかく、切らうと思

つて拔いた太刀も、三つに折れて下から出りやあ、歸してやるめへものでもねえ。互ひの心が行合はにやあ、許したくても癇癪の蟲に障つて許されねえ。

馬吉　頭も法華が信心か、御難に准へた今の說法、爰らが一番振上げたわつちの太刀の折れ所だが、大難四ケ度小難は數の知れねえ祖師さまより、上手を越した小栗の馬吉、まだ佐渡迄は行かねえがお猿畑の猿つなぎ、度々土の牢へも行き、一つ二つを數取りの珠數の玉ほど叩かれて、背中へ龜裂の入つた體、どうで始終は念佛無間、律國賊の刑に逢ひ、疊の上ぢやあ死なれねえ、今日の御難は詞につき、棚から落ちた胡麻の牡丹餅、金と轉んで文治さん、お前に頰を叩かれてえ。

ト馬吉頰を叩いてづうづうしき思入。此內下手より七兵衛出て、門口に聞いてゐて、

七兵　金と轉ぶもないものだ。娘はやつた覺えはない。

ト門口を明けて蹲んで居る。

馬吉　おい、父さん、晝間二升婚禮の印しの酒を遣つたのを、幾久しくと受けて置いて、覺えがねえとは耄碌して、忘れてゞもしまつたのか。

七兵　いや耄碌もしにやあ忘れもしない。あの二升樽は九郎藏が、禮だと云つて持つて來たのだ。決してあれは婚禮の印しにわしは受け取らぬ。

九郎　おい七兵衛どん、兄イから頼まれておれが慥に渡した樽、不承知ならその酒を、何故おれに返さねえ。

七兵　それでも分らぬ事を云つて。（ト云ふを冠せ。）

馬吉　なに、分らぬ事があるものか、譯が分つてゐればこそ、あの酒を呑んだらう。

七兵　さあ、それは。

九郎　不承知なら、何故返さねえ。

七兵　さあ、それは。

馬吉　よもや知らねえとは言はれめえ。（ト七兵衛格子へ手を掛け、むゝと詰る。）

九郎　早く歸れ。

ト門口をひどく締める、七兵衛手を挾みし思入。文治始終聞いてゐて、扨はといふこなしあつて、

文治　やい、靜かに締めろ。

トきつと言ふ。馬吉九郎藏顔見合せ、せゝら笑ふ。文治外へこなし、

おい門へ來た父さん、お前が法華七兵衛といふのか。

七兵　へい、左樣でござりまする。（ト門口を明ける。）

文治　それぢやあおたけはお前の娘か。
七兵　へい、たけは私の一人娘でござります。
ト是にて文治子分に七兵衞を内へ入れろといふこなし、子分呑み込んで、
鶴太　おい、そこに居ちやあ邪魔だから。
蔦藏　土間へはひつて、
三人　待つて居なせえ。
七兵　左樣なら、御免下さいまし。（ト合方きつぱりとなり内へはひろ。）
文治　いや、金に轉ぶといふからは、物は當つて碎けろだが、印しに送つた送らねえと、水掛論の二升の酒へ手をつけたが父さんの誤りだ、及ばずながらおれが立入り二升の酒に肴代を添へておめへに返さうから、それで不承しなせえな。
馬吉　酒の二升は僅かな錢だが、肴代といやあ五兩でも十兩でも肴代だが、幾ら付けて返しなさる。
文治　身分に依つては三分か一兩、五百疋が關の山だが、文治が口を利く日には、見つともねえ事は出來ねえから、二十兩付けて返さう。それで不承するがいゝ。
七兵　えゝすりや、二十兩肴代に、こいつにお遣り下さいますか。

ト濟まぬといふこなし。

馬吉　思召しは有難いが、立派な頭に似合はねえ、さりとはけちな捌き方、わつちはそれぢやあ、不承出來ねえ。

七兵　何處まで太いか呆れた奴だ。

九郎　え丶、默つて引込んで居なせえ。

文治　それぢやあ二十兩でもまだ不足か。

馬吉　そりやあ云はねえでも知れたことだ。九尺二間の内に住むこれが土方か日傭取りなら、百の錢も入らねえが、本町二丁目で三間間口の藏造り、近江屋といふ御用達、手切の金なら百兩か少なくも五十兩なら、料簡しめえものでもねえが、けちにきざんだ二十兩、端金ぢやあ不承が出來ねえ。

文治　二十兩で不足なら、もう扱ひはしねえから、不承するともしねえとも、手前の勝手にするがい丶。

馬吉　お丶、勝手にしねえでどうするものだ。家捜しをしておたけをば、おれは連れて行かにやあならねえ。

文治　これ口幅つてへ事をいふやうだが、曇り霞のねえ體に、月見の文治と肩名に呼ばれ、神田で人に立てられる、おれが内を手めへ達に、家捜しをされるのを默つて見ちやあ居られねえ。するなら

覺悟をして掛れ。

トきつと言ふ。子分三人手燾杯を持ち、立掛る。七兵衛氣を揉む。文治煙草盆を持ち、

馬吉　おれよりそつちが覺悟しろ。

ト立掛るを九郎藏留めて、相手が悪いといふ思入して、

九郎　これ〳〵兄貴、腹も立たうが月見の頭が、折角扱ひなさるのに兎や角ッいふのはお前が悪い。二十兩でも取り徳だ。いや、取扱ひにはひのなすつた頭に免じて二十兩で、不承して歸りなせえ。

馬吉　いゝや歸られねえ。かうなるからはやる所迄、やらにやあ蟲が承知しねえ。

九郎　そりやあさうでもあらうけれど、出る所へ出りやあこつちが悪い。いやさ、悪い事は云はねえから頭に任して料簡しねえ。

ト馬吉に呑込ませ、こちらへ來り、

へゝゝゝ。（空笑ひをして天窓を掻き、）頭、まことに大きな聲をして濟みませぬが、實の所は柳原で、のこで一ぺいひつかけたのでお祭り場所へまゐりますと、神樂堂の馬鹿囃子で、つひうかうかと景氣づいて、とんだくだを巻きましたが、どうぞ御料簡なすつて下さいまし。

文治　こなたのやうにさう言やあ、なに腹を立つものか。元より抜けへにへひつたおれだ。決して事を

好みやおしねえ。

九郎　それぢやお怒つちやあおいでなさいませぬか、やれ〳〵こいつあ有難へ。おい兄イ、お前も何とか言ひねえな。

馬吉　少ねえながら五十兩か三十兩もくれるのなら、胡麻の一つもするけれど、二十兩ぢやあ有難くねえ。

九郎　これさ、馬鹿なことを言つたものだ、まあお前は默つてゐねえ。左樣ならよろしくお願ひ申します。

文治　それぢやあ二十兩でいゝといふのか。

九郎　いゝ所ぢやあござりませぬ、大よしでござります。

文治　二十兩でいゝといふなら、おれの方から五兩まし、二十五兩こなたに遣らう。

九郎　それぢやあ五兩増しておくんなさるか。

文治　大きな聲で嚇されちやあ、五兩はおろか一分でも、餘計な金は遣らねえが、さうそつちから誤つて下から出りやあおれも男だ、五兩こなたに増して遣らう。

九郎　是だから頭に任して料簡しろと言つたのだ。

ト文治戸棚より金を出し、紙に包み、

文治　さあ、數を見て受取りなせへ。(ト出す。)

九郎　大きに有難うごぜへます。(ト金を受取り、)なるほど勢ひは違つたものだ。おい兄イ、よく數を見て受取んなせへ。(ト馬吉の前へ出す。)

馬吉　手前もしみつたれな野郎ぢやあねえか、これッぱかりどうなるものかえ、返してしまへ〳〵。

九郎　そんなことを言つちやあいけねえ。まあ今夜の所はおれに任してくんねえといふに。

ト これにて馬吉思入あつて、

馬吉　折角手前がさういふから仕方がねえ、まあ預かつておいてやらう。(ト金を懷中する。)

九郎　それでやう〳〵落附いた、さう極つたらちつとも早く、出かけるとしようぢやあねえか。

馬吉　それぢやあ頭、お暇といたします。(ト九郎藏子分に向ひ、)

九郎　兄イ達、大きに失禮を云ひました。料簡をしておくんなせえ。

ト辭儀をする。子分二人誰か何んとか言へとつッつき合つてゐる。馬吉門口へ來て、

馬吉　とつさん一足先きへ行くよ。

七兵　どうとも勝手にしろ。

馬吉　大きにおやかましうござりました。

ト門口なぴつしやり締める。これを好みの合方になり、兩人並んで花道へはひる。

鶴太　どれ、若旦那へ、

三人　御挨拶をして來よう。（三人奥へはひる。文治思入あつて、）

文治　みす〳〵仕組んでした事と、讀めちやあ居るが二升の酒を、切餅一つと取りけへたは、相手が大家のお方故、何でも身分のある方は、詰らねえものに、いや、詰らねえ目に逢つたなあ。

ト奥より常三郎、おたけ出來り、下手へ行き、

常三　これ七兵衞どの、了簡して下され。こなたの留守におたけを連れ出し、

たけ　こちらの頭やお前にも、苦勞を掛けし今宵の始末。

七兵　あゝこれ〳〵、おれに詫をするよりは、頭に厚くお禮を言はねばなりませぬ。

ト三人へ文治思入あつて、

文治　その禮よりは三人に文治が頼む事があるが、外ぢやあねえ、どうか、二人の緣を切つて貰ひたい。

三人　えゝ。（ト恟りする。）

文治　かう言つたらば文治をば野暮なものだと思ふであらうが、おれの言ふ事氣を落ちつけ、どうか聞

いてくんなせへ。（ト替つた合方になり、互ひに若い心から跡先見ずに言交し、かういふ仲になんなすつたらうが、若旦那も一人息子、又娘も聞けば一人娘、是が似合ひ相應なら、直にお内へお話し申し、嫁に貰つて上げますが、なんぼ我子でも御親類やお見世の衆の手前もあれば、非人の娘は貰はれませぬ。それを強ひていふ日には、是非なくお内は御勘當、おまへさまの御料簡ではもしさうなれば小屋へ落ち、夫婦になるとおつしやりませうが、それでは生れて二十三年育てられた親御さまへ、此上もない不孝となり、剰へ本町の近江屋の息子は心がらで、非人になつたと世間の口聞く兩親のその恥は、どのやうでござりませう。又此子も添はれずば死なうと迄思つて居るから、定めし別れともなからうが、此譯故に是迄の縁と思つて別れなせへ。おめへ故に大家な内の息子を小屋へ落したと聞けば知らねえその人は、どんな悪婆かなんぞのやうに云はれるに違えねえ、父さんとても其の通り、見るから堅い人のやうだが、わりい噂をとらねえやうに、よく娘にも意見して別れさせてくんなせえ。その替り一生涯お前方親子の衆が困らねえやうにしようから、とさあ、大きな事をいふ様だが、そこはおれも大店を得意に持つた鳶の者、生れついての一克に慶庵口は言やあしねえ、すると言つたらどこ迄も、きつと樂にしてやるから、どうぞ別れてくんなせえ。

ト思入にて言ふ。此内常三郎は俯向きゐる。おたけは伏し、七兵衛はちつと思入あつて、

七兵　頭、有難うござりまする。今のあなたの御異見は一々胸に應へました。向ふは長者の若旦那、こちらは貧しい家の女太夫、雲泥萬里の身分違ひに、元より添はれぬ縁といふ事、わたしも存じてをります故、さつきも異見を申しました（ト是にて文治おたけに向ひ、）

文治　もし若旦那、晝間御異見を申したさうだが、それをお用ひなされずに、爰へ逃げておいでのは、よく／＼な事でござりませうが、お心得違ひをなさいますと、とつて返しが出來ませぬ。どうか文治の云ふ事をお用ひなすつて今日限り、此子と別れて下さいまし。

ト七兵衛おたけに向ひ、

七兵　これ娘、もう半年の餘もお馴染み申し、今夜俄に別れるのは、嘸やそなたもいやであらう、とさあおれも察してゐるけれど、御親切な頭のお詞、そちが背けば此親迄、惡い噂をとらねばならぬ。

文治　親御樣への孝行と、思召して此娘を、

七兵　思ひ切つて若旦那と、

文治　縁を切つて下さいまし。（ト言つても兩人は默つてゐる故、）是程迄に事を分け、

七兵　口を酸くして頼むのに、

文治　なぜ御返事をなされませぬ。

常三　さあ、折角こなたが言ふてくれる詞、用ひねばならぬけれど。

ト面目なき思入。

たけ　今迄隱して居りましたが、わたしや身重になつたわいな。（ト泣伏す、）

文治　えゝ。（ト恟りなす。）

七兵

常三　面目ないが五月の、帶の祝ひも三日に、亥の日が丁度當る故、

たけ　今日内々で締めましたが、子までなした仲故に、どうも思ひ、

常三

たけ　切られませぬ。（ト思ひ切つて言ふ。文治思入あつて、）

文治　そんならそなたは身重になつたか、むゝ。

ト ぢつと思案することなし七兵衛こなしあつて、

七兵　互ひに緣は切れるとも、あなたのお子さまは私が、きつとお守り申しまする。

常三　そんなら何分頼みまする。

文治　それをお頼みなさるのは、別れる心でござりまするか。

常三　おいのう。（ト思切つて云ふ。）

七兵　おたけはどうだ、得心か。
たけ　はい、得心でござんすわいな。(ト泣伏す。)
文治　おゝ。(ト七兵衛に顔を背け、)よく双方得心して下されたなア。(ト時の鐘になり、)
七兵　もう大分夜も更けたやうぢや、そんなら頭、娘は連れて歸りまする。
文治　遲いから泊つてと、言へねえ非人の親娘、いづれその内お袋樣に、お話し申して二人の衆の、樂になるやう計らはうが、先是は産の入用、何かの支度に遣ひなせへ。
ト以前の殘り二十五兩を出す。
七兵　や、こりや大枚の二十五兩、是をお貰ひ申しては。
文治　濟まぬといふもお袋さまが、いやさ、默つて受けてお置きなさい。
七兵　えゝ有難うござりまする。(ト手拭にくろみ、腹へ結ぶ。)
たけ　さやうなれば若旦那、どうぞ是からお身を大事に、御孝行をなされませ。
常三　おゝ、そなたも只の身でなければ、體を大事に七兵衛どのゝよく世話をしたがよい。
たけ　はおゝゝゝゝ。
ト泣伏す。皆々顔をそむけ愁ひのこなし。

文治　淋しい道故、ちつとも早く。
七兵　お暇をいたしませう。
たけ　そんならどうでも。
常三　もう、歸るか。（ト立つて來るを、）
文治　あゝこれ、氣をつけて、（ト常三郎を隔てるを木の頭。）歸らつしやい。
ト おたけ七兵衛ながきのけ、寄らうとする手を取り、無理に花道能き所迄行き、文治見て不便といふこなし、此後ろより常三郎見送る。双方引張りよろしく聖天囃子にて、
ひやうし　幕

ト 幕外愁ひ三重になり、おたけ泣く〳〵七兵衛にせり立てられ向ふへはひる。跡シヤギリ。

六　幕　目

淺草田圃茶店の場
揚屋町大阪屋の場

〔役名――非人小栗の馬吉、大阪屋喜八實は曉星右衛門、近江屋常三郎、宵の口千太、非人九郎藏、順禮宗右衛門、小間物屋吉兵衛、役人眞田才助、非人兵太、同赤助、若い者喜助。やり手おつめ。團子茶屋のお遠、喜八女房おさき、七兵衛娘おたけ、宗右衛門娘おあい、大阪屋抱浪花江、同住の江、同岸の江、内藝者勘吉、按摩米市等。〕

（淺草田圃茶店の場）――本舞臺眞中より少し上手寄りに九尺の出茶屋、三方葭簀通り葭にて圍ひ、御甜所の掛行燈、茶道具宜しく、臺の上に五文備、土の狐澤山三方に載せ、火打石つけあり。後ろ一面の青田、向ふ吉原を見たる遠見、よき所に「畔道通りぬけ無用」の建札、上下建仁寺垣の内へ竹藪を見たる張物にて見切る。出茶屋の前、床几二脚出し、日覆より柳の釣枝、總て淺草田圃掛茶屋の體、爰にお遠白髮鬘、襷掛け、茶見世の婆にて盆を拭きゐる。床几に相中の〇△□◎着流し三尺帶、素見の仕出しにて茶を呑み居る此見得双盤、流行唄にて幕明く。

〇 やう／＼風が南に替つて、念佛堂の双盤が聞えて來た。

□ 朝の内はそよ／＼と、冷つく北風に陰氣になつて、

◎ 是から先が思ひやられ、此位ふさぐ事はねえ。

△ もう單物では立ちきれないから、やう／＼あゝぼうと入替へたが。

〇 毎度七つ屋の御厄介で、行く度毎に談じ込むが。

□ 瓦町の三河屋位、すなほな質屋はありやあしない。

◎ 山の宿の松葉屋も、無理は隨分利く内だぜ。

△ おれは質屋よりやつの方が、よつ程無理は聞いてくれるぜ。

○奴もねえものだ。おぬしの事を向ふぢやあいやな奴だと云つてゐるぜ。
△それは皆へ盤めへをいふのだ。
○どこ迄自惚れてゐるか知れねえ。
□それだから源公は、瘡守さまへ團子を斷つてゐる。
◎道理で今日奥山で、半分喰ひかけて吐き出した。
△いやはや悪いお幇間だ、是では祝儀はやられない。
○祝儀所か遊びに行つて、勘定の釣もやりやあしねえ。
□茶代のあたまを張る玉だ。
○まあ、灯のつく迄五十間の、播磨屋でつなぐとしよう。
□田町の蛤なら安心だが、播磨屋はいゝかね。
◎先の鹽噌が心細いぜ。
○のろけ賃に、源公におごらせるのだ。
△ずつと承知、附いてゐるよ。
○大方それは瘡だらう。

△　こいつアよく當つた。

□　その稻荷樣に緣のある、播磨屋の油玉で。

◎　今夜は思ふ樣饒舌らうぜ。

△　此上饒舌られてたまるものか。

三人　違へねえ、さあ出かけよう。

ト四人捨ぜりふにて下手へはひる。お遠跡を片付けながらあたりを尋ねることあつて、

お遠　おや〱、まあ呆れたものだ、お茶代を置かずに行つてしまつた。（ト下手を見て、）もし〱、お茶代を下さいまし。ずん〱向ふへ行つてしまふ。え、忌々しい輩だ。

ト流行唄見世物の鳴物になり、花道より常三郎羽織着流し雪踏、小間物屋吉兵衛同じく羽織着流しにて附添ひ出來り、

吉兵　さし渡し一とまたぎの奥山が近いので、生人形の鳴物が手に取るやうでござります。

常三　久し振りで觀音樣から太郎樣へ參詣したが、大層奉納物が殖えましたね。

吉兵　相替らず稻荷樣は御繁昌でござりますが、丁度向ふの狐茶屋でちよつと休んで參じませう。

常三　狐茶屋といふ茶屋は、人を化しは致しませぬか。

吉兵　なあに、お狐さまを賣る水茶屋でござりまする。

ト矢張り右の鳴物にて、舞臺へ來り、床几へ腰を掛ける。お遠茶を持ち來り、

お遠　いらつしやいまし、お茶を一つお上りなさいまし。

吉兵　お婆さん、もう何時だね。

お遠　はい時々茶代を取り損なふので、中々油斷は出來ませぬ。

吉兵　何時だといふことよ。

お遠　はい、大恩寺前の方へ參りました。

吉兵　こいつァ大笑ひ、丸でとんちんかんの話しだ。

常三　此婆さんはかな聾だと見ゆる。

吉兵　まだわたしが前髪の時分から、此田圃で生業して居る古狸でござります。

お遠　いえ、狸はめつたに出ませぬが、太郎樣のお狐が出ます。

吉兵　是はどこ迄も聾話しだ、いや、聾を幸ひ若旦那、よい密談がござります。

常三　なに、わしに密談とは。

吉兵　密談はちと大仰過ぎるが、是からぶら〳〵土手へ出ると、丁度灯のつく時分、ちよつと何處ぞで

一とツ切り遊んでお内へ歸りませう。

常三　それは能い話しだが、知つての通り此間から、持病の疳に閉されて、少しも外へ出る氣もなく一と間の内へ閉ぢ籠り、本でも讀んでゐる方が、却つてわたしは樂しみ故、廣小路より坂本通りのなりたけ靜かな所をば、早く内へ歸りませう。（ト鬱ぎ居る。）

吉兵　さうあなたがおつしやるなら、打明けて申しますが、實は昨日商ひにお内へ上つたその時に、御兩親が私を奥の一間へお呼びなすつて時に吉兵衞どん、外でもないがたつた一人の悴が病氣、日增に體へ瘦が出て、たゞ鬱いでばかり居る様子が、どうも案じられてならぬから、親の口からこんな事を勸めるのは道ではないが、どうぞお前が誘ひ出し、吉原へ連れて行つて遊びでもさした事なら、少しは開きがつかうから、さうしてくれと天下晴れてお許しの出た女郎買ひ、それ故今日も觀音様から太郎様へ廻りますも、廓へ行く時刻を計り、お内を出たのでござりますから、是非是からいらつしやいまし。

常三　それ程迄に此わしを、御兩親が御案じなされ、言ふて下さるは有難いが、現在親が我悴に女郎買ひをさせるとは、吉兵衞さん、こりや受取りにくいぢやあござりませぬか。

吉兵　むゝさう一本突込まれると面目次第もござりませぬ。實の所は女郎買ひは只今私の出來心。御兩

親のお頼みは先づ兩國か淺草で遊山をさせてくれとのお詞、なれども只の遊山より一層是から遊びの方がさまと存じてお勸め申すは、是が此儘御病氣が重り、もし間違ひでもあつた時は取つて返しの出來ぬ御身分それ爰に一つ論が出來て、女郎買ひをなすつてもお命の無事な方が、まあ吉兵衞の考へでは、よからうやうに思はれまする。（ト宜しく勸める。）

常三　それはさうであるけれど、氣にすゝまぬ遊女屋へ、行つた所が浮きもせず、やつぱり内へ歸りませう。

吉兵　それはいけない、まあ私に任して置いて、一緒に行くとなさいまし。

常三　それぢやと、言ふて兩親へ。

吉兵　はて、それは大請合でござりまする。（トお遠茶を持つて來り。）

お遠　はい、お茶がはひりました。（ト大きく言ふ。）

吉兵　えゝ、卑調子で恂りした。（ト取つて呑みながら、）若旦那、ちよつと此内日除迄急いで行つて參りますから、あなたは田圃を見晴らして、お待ちなすつて下さいまし。

常三　どうぞ早く歸つて下され。

吉兵　へい、直でござります。

トやはり右の合方にて吉兵衞足早に下手へはひる。合方彈き流し、常三郎あたりへ思入あつて、

常三　今日小間物屋の吉兵衞殿に、觀音樣から太郎樣へ參詣に誘はれたも、外の所なら行きともないが觀音もよりの事故に、一緒に來たはもしひよつと、いつぞや別れた小屋のお竹、子まで宿せし仲なれば一目なりとも逢ひたいと、思へど義理ある文治殿や、あれが親の七兵衞が物堅い心立に、尋ねて行つても逢はせまい、いつそ手紙に認めて爰の見世に賴んで置き、もし門を通るなら其時屆けて貰ふとしよう。（ト思入。）ちよつと硯を貸して下され。

お遠　はい、茹玉子でございます。

常三　いえ、硯箱を貸して下され。

ト手眞似をする、お遠承知して、

お遠　はい〳〵、畏りました。

ト硯箱を持つて來て、常三郎紙入の小菊を出し手紙を書く、やはり右の合方になり上手よりおたけ島田髷、前掛、駒下駄にて出來り、思はず常三郎を見遣り、悔りなし側へ行かうとして、もしや人違ひではないかといふこなし、常三郎は一心に手紙を書いて居る。おたけよく〳〵見て、あたりへ思入あつてつか〳〵と側へより、

たけ　もし、常さんでござりましたか。

ト常三郎心付き、おたけを見て悄りなし、

常三　お丶、おたけ、

たけ　逢ひたうござんしたわいな。（ト縋り泣く、合方きつぱりとなり。）

常三　その逢ひたいはおぬしばかりか、文治殿が異見につき、その後逢はれぬを情ないと思ひし事が持病となり、うと〳〵眠れど目に殘るは只そなたの事のみで、片時忘れる暇はない。幸ひ今日は出入りの者と太郎稻荷へ出かけたも、實は逢ひたい〳〵と思ふばかりで來たれども、まさか内へ行かれもせず　是此通り委細を認め、届けて貰ふつもりであつた。

たけ　そりやわたしとて同じ事、文治さんのお内にてお別れ申したその後は　明暮れ胸に忘れねど、物堅いとゝさん故、友達衆に誘はれても、只の一日流しにも出た事はござんせぬが、思ひがけない今日爰で、あなたにお目に掛るのは、こんな嬉しい事はない、もし常さん、よう顔見せて下さんせいな。（ト常三郎に縋る。）

常三　その歎きは尤もだが、爰は人目が、

ト後ろへ思入。此前よりお遠後ろにて綴物をしながら居睡をしてゐる。是にて兩人安心なし、

たけ　幸ひ往來の人もなし、此婆さんも寢てゐれば、ゆつくり話して行くがよい。

たけ　かうしてあなたのお顏を見るも、是か見納めにならうやら、情ないと思ふのは、その内段々月が來て重い產でもした時は、もう此世では逢はれまいと、そればつかりが氣掛りぢやわいな。

常三　わしも此儘別れるが、どうも心に濟まぬから、假令勘當受けるとも、いつそこれから七兵衞どのの所へ行つて譯を話し、そなたと夫婦になりたいが、得心してくれようか。

トおたけ思入あつて、

たけ　いえ〳〵それは料簡違ひ、是からあなたをお連れ申せば、仲へはひつた文治殿や、とゝさまへ濟まぬわいな。

常三　そんなら行つては惡いと言やるか。

たけ　是が常の身分なら、わたしも思ひ切られねば、お連れ申して行きたけれど、人交りのならぬ身の上、思ひ止つて下さりませ。（ト淚ながらに言ふ。常三郎思入あつて、）

常三　たとへ親に勘當受けても、そなたと一つにならうといふに、それを來ては惡いといやるは、こりや外に男が出來、わしを見返る心ぢやな。

たけ　何でまあ滅相な、お連れ申して行かぬのは、あなたのお身を思ふ故。

常三　いや嘘ぢや、心變りがしたのであらう。

たけ　是程思ふ胸の內を、疑はしやんすはお情ない。こりやもういつそ、(ト心づき硯箱の小刀を取り、)

常三　さうぢや。(ト咽へ突立てようとする。常三郎留めて、)

たけ　あゝこれ、早まつた事してはならぬ。

常三　いえ、あなたの疑ひ晴れるやう、わたしや死んでしまひまする。

たけ　これ、危い、離せと言つたら、まあ離さないか。(ト無理にもぎ取る。)

常三　そんなら疑ひ晴れましたか。

たけ　お〻實の所はそなたの胸を、引いて見たのがこつちの誤り、どうぞ堪忍してくりやれ。

常三　それで安心しましたわいな。

たけ　お〻、わしも是で安心した。

ト常三郎汗をふく。題目太鼓を冠せし流行唄になり、上手より前幕の九郎藏、兵太、赤助の非人出て來て、兩人を見てちよつと囁き合ひ思入あつて、

九郎　やあ、近江屋の常三郎だな。

兵太　此間の緣切りから、

赤助　もう逢引きは、

三人　出來ねえ筈だが、

常三
たけ　え。（ト恟りなす。）

九郎　此野郎は、おたけッ子を、

三人　連出しに來やあがつたなあ。

常三　いえ連れ出した譯ではなく、爰で逢ひましたのでござりまする。

九郎　默りやあがれ、青二才め、そんな言譯に乘るやうな、おれ達だと思ふのか。

兵太　惣體手前は生ッ白い女の惚れさうな野郎だが、それが第一氣に食はねえ。

赤助　素人同士なら知らねえ事、繩張内の女に迄、突込まれてたまるものかえ。

九郎　よくも手前は此面でお竹ッ子を、

三人　連出しやあがつたな。

ト三人にて常三郎を蹴倒す。おたけ是をとめ、

たけ　まあ皆さん、待ちなさんせ。何もわたしを常さんが連出しに來た譯ではなく、互に爰で出くはし挨拶をしたばかりの事、何もそのやうに手荒い事を、しないでもようござんす。

九郎　ようござんすもねえものだ。ちやんがあれ程外へ出るなと、いつて置くのに斷りなく、

たけ　え。

九郎　何んで一人で、

三人　出かけたのだ。

たけ　さあ、それは、

兵太　手前も手前だ此後は、假令外で逢ひましても決して口は利かねえと、

赤助　立派に云つた此口を、うぬは忘れてしまつたのか。

ト赤助、常三郎の口をつれる。

常三　さあ、それは。

九郎　え丶面倒だ、二人共しよびいて行け。

兩人　おツ、合點だ。

トやはり流行唄にて題目太皷になり、三人常三郎を引立てようとするを、おたけ留める。是を突倒し、お遠さん〳〵に常三郎を毆り襟がみを取つて引摺り行く。是をおたけ留め乍ら、共々上手へはひる。は此騒ぎに目を覺し氣を揉む、爰へ下手より吉兵衛出來り、

吉兵　大きに遲くなりまして、嘸お待ち遠でございましたらう。(トあたりを見て、)若旦那は何處へおいでなさいました。

お遠　大變でございます〳〵。あなたのお連れの旦那さまを、今田圃の非人が來て、蹴つたり踏んだりした擧句に、とう〳〵小屋へ三人して擔いで行つてしまひました。

吉兵　え、それぢやあ若旦那を、乞食めらが。そいつあ大變だ。

トつか〳〵と花道へ行く、

お遠　あゝもし、こちらでございます。(ト吉兵衛舞臺へ戻る。)

吉兵　どゞ、どこでございますか。

お遠　あゝ、あちらでござります。

吉兵　よし承知だ。

トやはり題目太鼓流行唄にて、逸散に上手へ走りはひる。お遠心付き、

お遠　や、又茶代を取りそこなつたか。おゝい〳〵、(ト上手へこなしあつて、)中々早くて聞えない。さつきといひ又今度、二度迄茶代を取りそこなつたか、今日は如何なる惡日か、太郎さまも聞えませぬ。團八むごい胴慾な、市川一度此意趣を、返さいでおくべきか。

ト上手へこなしあつて、落ちある財布へ躓き取上げ見て、

おや〳〵、今の人が落して行つたか。（ト中を開き見て、）小錢まじりで七八百。（トあたりを見廻し押し頂き、）南無太郎稻荷太明神さま〳〵。

トやはり右鳴物にて此道具廻る。

（揚屋町大阪屋の場）――本舞臺一面木地の大格子、此内青簾、上手一間の入口、是に大阪屋と大紋を染拔きし柿の暖簾を掛け、下寄りに天水桶、たそや行燈、眞中に床几を出し、上下塀の張物、總て揚屋町大阪屋格子先の體。爰に喜助着流し駒下駄若い者の拵へ、用掛〇着流し三尺帶、用掛△同じ拵へ大阪屋の抱大淀、浪花江、住の江、岸の江、何れも女郎の裝にて立掛りゐる。此見得太皷入り角力甚句にて道具留る。

喜助　お手輕さまでお二人さま、お上りなすつて下さいまし。

大淀　よう、お上りと云つたらお上りよう、もしちよつとさあ。（ト〇を引張る。）

〇　上りていのは山々だが、昨夜すつかりすつてしまつて、今日は嚢中が怪しいから、只素見に出て來たのだ。

△　いつもおめへは見世つきが、がうせい能く見えるので、玉が出來ると噂に聞いたが。

○ 籬へ寄つて見世を張れば客が出來るに。
兩人 違えねえ。
大淀 おや好かねえ事を言ひなますよ。なぜ籬へ寄るといゝのだえ。
○ えゝ分らねえ女郎だぜ。正面だと眼がごまかせねえ。
大淀 えゝ大きにお世話だ。好かないおたんちんだよう――。
浪花 そんな惡口を利かないで、皆さん上つて下さんせ。
住の 毎晩々々格子へ來て、三日月さまではいけません。
岸の 今夜はきつと上げる積りで、待ち人をかけて置きました。
大淀 そんなら上んなましよ――。
喜助 女郎衆もあなた方のお噂を致しますから、是非今晩は願ひます。
○ 幾ら上りたくつても、白張の提灯で、文なしでは仕樣がねえ。
大淀 それはどうにか立引くから、まあ縁起に上つておくれ、わつちだけが何んだからさ。
△ 何だからさ、あとは何の事だ。
大淀 えゝ盆暗だよ、お茶の事さ。

△　そりやあお前の心柄、籠に居ねえのが悪いのだ。
大淀　まぜツけえさねえでお上りよ。
○　上りは上るが提灯はいゝかえ。
大淀　いゝからお上りといふに。
△　先兎も角も上り込まう。
喜助　有難うござりまする。お上んなさるよ。（ト奥にて子役の聲にて）
子役　いらつしやい――（ト神棚の鈴の音する。）
大淀　やう〳〵是で安心した。
○　なに安心したとは。
大淀　身上りが助かつたんですよ。
兩人　違えねえ。
　　トやはり右の鳴物にて、大淀、用掛○△をつれ暖簾口へはひる。
喜助　此頃のお客は、こすくなつて、實に引くのが大骨だ。
浪花　それに今上りなさんしたのは、近所の衆でござんすな。

佳の　いかな晩でも見世先へ來ない事はござんせぬが、
岸の　ほんにおみくじ判斷の、妙見さまと同じでござんす。
喜助　華魁方は今晩は皆さんお客さまはござりますが、せめて引込見世に居て、氣休め莨を呑まして下さい。
浪花　喜助どんは旦那思ひで、
佳の
岸の　ほんとうに感心だよ。
ト皆々煙草を呑みゐる。新内蘭蝶の能き文句になり花道より、前幕の小栗の馬吉着流し、吉原冠り、白足袋麻裏草履にて出來り、花道に留り、
馬吉　時候が大きに冷つくので宵から客が上ると見えて、廓も素見が少ないが、誰の氣も同じ事で水道尻のすいとんは、丼の足りねえ程鐵砲連が立てこんだが、腹は出來たしどこぞへ行つて、掛合ひ込んで今夜も寢込まう。
トやはり右の合方にて、舞臺へ來る。喜助馬吉の傍へ行き、
喜助　お手輕さまで、お遊びなすつて下さいまし。（ト馬吉の袖を引く。）
馬吉　おらあ是から行く所があつて、今夜はしまつて置いたから、こつちで遊んでは行かれねえ。

喜助　さやうでもござりませうが、よい女郎衆をお見立てなすつて、ちよつとお遊びなさいまし。

浪花　餘所ののろけを言はないで、ぢらさずと上つて下さんせ。

仕の　お店のお客が引けを打つと、直に歸りなさんすから。

岸の　座敷へお入れ申しますわいな。

馬吉　勤番ものとは違ふから、座敷などは入らねえが、行く所があるから上らぬといふに。

仕の　そんなに氣を揉ませないで、早く上んなさんせいな。

馬吉　それに第一戀の内は、おれ達には食過ぎる、やつぱり伏見町か西河岸が相應だ。

喜助　御常談をおつしやらずと、お人柄さまでございます。

女三　さあ、上りなさんせいな。（ト皆々馬吉を無理に引つぱる。）

馬吉　いけねえと云つたら、着物が切れるぜ。

喜助　切れましたら女郎衆が縫ひたがつてをりますから、どうぞまあ、

女三　上りなさんせいな。

馬吉　いけねえと云ふ事よ。

喜助　まあよろしいではござりませぬか。（ト捨科白にて無理に暖簾口へ押しつけ、）お上んなさるよ。

子役　いらつしやい――。

ト叉鈴の音する。馬吉出ようとするを皆々捨ぜりふにて無理に暖簾口へ入れる。此模樣太鼓入り角力甚句にて知らせなしに此道具廻る。

（同大阪屋座敷の場）――本舞臺三間後ろ一面はすに廊下を見たる遠見。上下一間障子屋體、眞中に莫大なる朱塗りの丸行燈を出し、下手二階の上り口、總て引付け座敷の體、やはり右鳴物にて道具留る。と下手より用掛○△あたりを見廻しながら出來り、ちよつと囁き合ひ一人づゝ上下の屋體を窺ふ。爰へ同じく下手より大淀住の江の女郎出來り、

大淀　わちきのお客は、何所へ行きなました。

住の　廊下とんびはなりませぬよ。

ト此聲に兩人心付き、そしらぬ振にて、

○　なんぼ一枚一本でも、三日月さまの意趣返しはひどいぜ。

△　一人で座敷に居る位なら、わざ〳〵遊びに來やあしねえ。

大淀　ひとりで居るもないものだ。座敷へ行つてもゐないくせに。

住の　そんなに方々歩きなさんすと、賄ひ衆に叱られますわいな。

○　假令藝者は呼ばねえでも、豆でも座敷へ寄越せばいゝに、初會に二人差向ひは、だれ込んで居られねえ。
△　おらあ歸る。何んでも歸る〳〵。
大淀　おや好かねえおたんちんだよ。歸る〳〵と口には言へど、やつぱりざまさうねえ、住の江さん大方催促だんべい。
住の　いゝから、部屋へ一緒に來なさんせ。
兩人　なあに、おれは歸る〳〵。
大淀　えゝきまり文句だ。
大淀兩人　おいでといふに。
ト用掛〇△の首へつかまり、無理に捻ぜりふにて下手へはひろ。流行唄になり、階子の口より馬吉草履をはいたまゝ出て來ろ、跡より喜助、浪花江岸の江是と一緒にお爪のやり手附添ひ出來り。
つめ　旦那、今晩はよくいらつしやいました。お馴染はどなたでござります。
喜助　お爪どん、あなたはお初會だそうだ。
馬吉　さう無暗にそつちで極めても、遊ばしてくれるかえ。

つめ　旦那、どうなすつたのでござります。遊ばせなくつて何といたしませう。
馬吉　さうかえ。きつと遊ばしてくれるかえ。
喜助　旦那はお堅いと見えて、よく御念をお押しなさいますが、
つめ　あなたのやうな様子のいゝお客は、滅多においでなさんせぬから、女郎衆がうは〳〵して居ります。
馬吉　それぢやあきつと遊ばせるの。
つめ　ちよつとお引付けを致しませう。（トおつめ立掛るを、）
馬吉　おい〳〵ちよつと待ちねえ、引付けをするその前に、友達が近所に居るから、直呼びにやつてくんねえ。
喜助　畏りました、どちらにおいでゞござりまする。
馬吉　なに、譯ねえ、直き中田圃だ。
喜助　へえ、中田圃のどちらさまでござりますか。
馬吉　つい、溜の脇の非人小屋だ。
皆々　え。（ト顔を見合せる。）

馬吉　何も不審な者ぢやあねえ、早く呼びにやつてくんねえ。
喜助　へい。（トもぢ〳〵してゐる。）
馬吉　小屋へ行つたら、小栗の馬が遊んでゐるから、皆に來いと一緒に連れて來てくんねえ。
　　トおつめ不審のこなしにて、
つめ　それぢやあもしや、
喜助
つめ　お前さんは。
馬吉　淺草田圃のおらア乞食だ。
皆々　えゝゝ、（ト皆々恟りする。此時馬吉草履を脱ぎ、）
馬吉　ついでに下足も下へやつてくれ。
　　ト此内おつめ、浪江花と住の江に囁く。兩人下手へはひる。喜助氣味の惡きこなしにて、揉み手をしながら、
喜助　お見それ申して濟みませぬが、お裝が替つてをりましたので、
つめ　つい見世で存じませぬで、うか〳〵二階へお連れ申しましたが、
喜助　田圃の衆でござりましては、お氣の毒さまながら、

兩人　どうもお客にいたしませぬ。（ト手を突いて言ふを冠せ、）
馬吉　まだ引も打たねえのに、寢惚けちやあいけねえぜ。よくものめ〳〵口を揃へてお見それ申したと言はれたものだ。
喜助
つめ　え。
馬吉　なぜ上らねえといふものを、無理無體に押上げたのだ。
兩人　さあ、それは。
馬吉　早く友達を呼んで來てくれ。
喜助　へい。（トもぢ〳〵する故、）
馬吉　え、、呼びに行きやあがらねえか。
ト有合ふ泥草履を喜助の前へ叩きつける。是を流行唄になり、階子の口より以前の九郎藏兵太、赤助上つて來り、
九郎　兄イ爰に居たのか、さつきから三人でどんなに方々尋ねたらう。
兵太　いつもの所はいふに及ばず、伏見町から西河岸と、心當りを捜してしまひ、
赤助　こいつあ今夜は廓ぢやあねえと、西河岸から廻つて出ると、はじけ豆の親仁の話に、

九郎　今夜大阪屋へ引張り込まれた、客があつたといふのを聞くと、何でもお前に似てゐるが、
兵太　内の沽券が町並だから、よもや乞食は客にしめえと、無駄と思つて化けこんで、
赤助　上つて見れば馬兄イ、うめへ所で、
三人　出ツくはしたな。（ト馬吉思入あつて、）
馬吉　所が乞食が大びらで、今夜は客になつたから、手前達を呼びにやらうと見世へ頼んで居るところだ。
九郎　よくまあ乞食を客にしたが、流石はおめへの腕前だ。
馬吉　そいつア大違へな話だ。雪踏を直す腕はあるが、爰へ上る腕はねえ、先方からおれを押上げたのだ。（ト此内喜助、おつめよろしく思入あつて、）
つめ　あなた方とも存じませぬで、どうも誠に濟みませぬが、どうぞ今夜は料簡なすつて、
兩人　此まゝ歸つて下さりませ。
九郎　はゝあ、それぢやあまだ誂へ物も引付けもしねえのか。
兵太　何をぐづ〳〵してゐるのだ、藝者と臺を出さねえか。
つめ　そこを御料簡なさんして、

喜助　お歸りなすつて下さりませ。
九郎　兄ィが厭だと云つたのを、見世で無理に上げたのなら、何のつけ〻に歸るものか。
赤助　早く食物を、
三人　出しやあがれ。
ト大きな聲をする。兩人困り、おつめ階子の口へ行つて、
つめ　千どん〳〵、ちよつと來て下さんせ。
ト流行唄になり、階子の口より序幕の千吉、若い者の拵へにて上つて來り、喜助兩人へ承知だといふ思入あつて、下手へ住ひ、
千吉　是は皆さん、よくいらつしやいました。只今女郎衆から委細を聞き、誠に申譯もない此始末、わたくしが見世に出て居れば、こんなとん〻〻は致しませぬが、此間田町から參りましたばかりの馴れぬ者故、こんな不手際を仕出かして定めしお腹も立ちませうが、主人に替つて千吉が、お詫言に來ましたから、今夜の所は勘辨して、お下りなすつて、下さいまし。
ト千吉兩手をつき詫びろ。
馬吉　お前達は、詫びれば事が濟むだらう。おれの方でも遊びさへすれば、直に事の濟む事だ。さうし

て見れば五分々々だ、何でもいゝから泊めてくんねえ。

千吉　そんならどうでも、勘辨は出來ねえといふのだね。

三人　當りめえよ。

千吉　勘辨出來ずば勝手にしろ。こつちに五分の負があるから、七重の膝を八重に折り、乞食に手を下げ頼むのだ、どんな引人が山出しでも、見世へ出して置くものは、滿更なものはねえ、乞食のくせに素人臭へ裝で來たから上げたのだ。只遊ばせろ〳〵とそんないやがらせを言ふよりも、一ぺい呑ましてくれろといふなら、小屋へ歸つて手めへ達が、呑む位な酒は只やる、謎では事が分からねえ。

トきつと言ふ、馬吉せゝら笑ひ、

馬吉　思召しは有難いが、お前達に水ツぽい酒を呑まして貰ふより、菰は着ねえが劒菱をたらふく呑んで居るこちとらだ。

九郎　じいやぶたの馳走なら、おれの方から奢つてやるが、大きな皿へちよつぴり盛つた、臺屋の肴と上げ底のお鉢の飯は乞食ぢやあ、

兵太　化けにやあ一生食はねえから、それを今夜は表向き食はして貰ふ約束で、兄イを尋ねてやう〳〵

來たのだ。

赤助　いゝきざに笑つてお手輕さまと揉み手で上げる玉ぢやあねえが、乞食を顯はし天下晴れ、遊びてへから上つたのだ。

馬吉　文句を云はずと白鳥の、酒と女を出さねえかえ。（トきつと千吉思入あつて、）

千吉　そんな脅しで驚くやうな、若いものと譯が違ふ。いゝなりは小粒でちいせへが肝ッ玉は大きい男だ。小栗の馬とか判官とか、兄イと云はれるこなた故、下から出て誤まりやあいゝかと思つて威張り散らし、稼業の邪魔をしやあがるが、料簡出來ずば勝手にしろ。乞食を客にするものかえ。

トよろしく思入。是にて三人むつとして、

赤助　生意氣な事を言やあがるな。

ト赤助、千吉を足で蹴る。

千吉　おゝ、手出しをしたな。さあ料簡が出來ねえぞ。

喜助
千吉　しよびき出せ〳〵。

ト千吉喜助、兵太と赤助を引立て下さうとする。是を馬吉、九郎藏割つてはひり、ごつちやの立廻りおつめはうろ〳〵する。爰へ階子の口より喜八着流し遊女屋亭主の拵へにて出來り此中へはひり、留

めながら、

喜八 これさ、騷々しい靜にしねえか。

千吉 旦那、うつちやつて置いておくんなせえ。

喜助 あんまりふざけた野郎だから。（ト又立懸るを喜八とめ、）

喜八 はて、世間へ聞えて見ツともねえ。止せといつたら止さねえか。

つめ もし千どん、旦那の言ふ事を聞きなさんせ。

千吉
喜助 それでもあんまり。

喜八 はて、止さねえかい。

ト是にて兩人無據跡へさがる。馬吉三人も上手へ住ふ。喜八皆々に向ひ、

是は皆さん、ようおいでなさいました。（ト挨拶をする。）

馬吉 むゝ、そんならお前は爰の亭主か。

喜八 左樣でござりまする。（ト是にて互に顏を見合せ、）

馬吉 や、お前は。

喜八 おゝ、さういふこなたは。

九郎　ほんに、いつぞや梅田の小屋で、

馬吉　別れてその後延命院の、

喜八　裏手で逢つた事があつたが、

馬吉　盡きねえ縁で又今夜、

喜八　思ひがけなく、

兩人　逢つたよなあ。

兵太　それぢやあ兄イは、

赤助　知つた人かえ。

馬吉　五年跡に近付きだ。（ト喜助、おつめ思入あつて）

つめ　そんなら旦那は、

喜助　あの衆と、

喜八　仔細あつてその以前、難波で逢つた事があるのだ。（ト千吉思ひ出し）

千吉　むゝ、そんなら天滿を逃げた時、

喜八　これ、餘計な口を利くには及ばぬ。

馬吉　初手からかうと知つてゐれば、此ごた〳〵はなかつたが、つまらねえ無駄骨を折つた。
喜八　こつちも知つて居た事なら、外の客の邪魔にもならぬが、濟んだ昔で仕方がない。
馬吉　五年振りで逢つたお前、昔し話もしてえから、爰で一ぺい呑ましてくんねえ。
喜八　おゝ呑ませるとも〳〵、かう分りやあ構やあしねえ。これ、喜助、誂らへ物を通してくれ。
喜助　へえ、それぢやあ乞食に、
つめ
兩人　御馳走を。
喜八　えゝ、默つて早く通して來い。
喜助　畏りました。
ト兩人不審のこなしにて、喜助は階子、おつめは下手へはひる。
喜八　知らねえ事とはいひながら、譬の燈臺元暗しで、
馬吉　つい目と鼻の田圃と吉原、
九郎　毎晩廓を素見すが、
兵太　一皮かぶつた雪踏直し、
赤助　詰つた鼻緒はかたさうな、

千吉　初會の客と白足袋の、

馬吉　こはぜを取りやあ知つた顏。

喜八　昔語りは引け過ぎに、

馬吉　ゆつくり爰で、（ト手拭を肩に掛けるを、道具替りの知せ）

兩人　話しやせう。（ト皆々宜しく流行唄にて道具廻る。）

（大阪屋内證の場）――本舞臺ずつと上手斜に三尺中敷居の延喜棚、此下木連格子の一枚開き、左右腰張りの茶壁、正面九尺中足の二重、腰高の塗骨障子を建切り、見世の裏を見たる心。此下二階大階子の横手、ずつと下手入口、暖簾を裏より見せ、總て內證の體よろしく、上手に序幕のおさき好みの鬘座蒲團の上に住ひ、塗板へ玉を付けて居る。下手に以前の浪花江內藝者の勘吉、急須へ茶を入れ、米市の按摩紙へ蒸菓子を載せ食つてゐる。やはり前の流行唄にて道具留る。

浪花　米市さん、大きに御苦勞でござんした。

米市　いえどういたしまして、いつでも御褒美を下さいますから、うかうか療治を致しました。

さき　今日は珍らしく居睡りをしなかつたね。

勘吉　お內儀さん、しない筈ですよ、民中さんが芝居の話を聲色交りで話したので、居睡り所ではあり

ませぬ。
さき　あの人は芝居が好きだから、なか〳〵話が面白い。それに花柳さんのお弟子になつて、踊りもよく踊るわいな。
米市　勘吉さんや浪花江さんは、芝居の話しがお氣に入つたらうが、わたしは甘味が口に入つた。
浪花　道理でいつものおしやべりが、默つてゐたと思ひましたわいなあ。
米市　いや默つては居られない、一つお聞き申したいのは、昨夜角玉へ療治に行つたら、薄雲さんのお客さまが、吉原のは大門で芝のは大門だとおつしやいましたが、是はどちらでございませう。
勘吉　今年の盆は姉さんに初めて日本橋を敎つたが、まだ芝の方は知らぬわいな。
浪花　昔から吉原のは、人が大門だといふから大方芝のは大門でありませう。
米市　左樣なら吉原が大門で芝のが大門、淺草が山門でおでんが五文、おもちやは六文でありますかね。
さき　又とめどもなく饒舌り出して、ちと靜かにしなさんせ。
ト勘吉茶を入れ、おさきの湯呑と煎茶茶碗へつぎ、銘々へ出して、
勘吉　米市さん、ちと喉をおしめし。
ト米市、茶を呑み、舌打ちをして、

米市　是はよいお茶加減でござります。
さき　おや、いやな茶人だね。
ト右の合方にて上手よりおつめ出來り、
つめ　もしお内儀さん、さつき二階でごたついた田圃の非人を旦那さんが、止めにはひつて顔を見ると知つた人でござんす故、今誂へ物をしてやつて、是からお酒が初まりますよ。
さき　なに、田圃の非人を旦那さんが。
ト おさきちつと考へる。爰へ下手暖簾の内より喜助出來り、
喜助　此間太郎様でお内儀さんがお金をやつた順禮の、親子連れがちよつとお禮に上りましたと、見世へ來てをります。
さき　すりや順禮さんが禮に來たかえ、それぢやあちよつと逢つてやりませう。
喜助　左樣なら、爰へ連れて參じます。（ト暖簾口へはひる。）
勘吉　あの時逢つた順禮の、娘は可愛い子でありました。
浪花　物貰ひをさせるより、お部屋へでも預ればようござんす。
つめ　さうしたなら花魁逹が、晝寐もせずにその子をば、相手にして騷ぎなさんせう。

さき　又おつめどんの世話の焼ける種だねえ。

ト流行唄になり、暖簾の内より喜助先に前幕の宗右衛門、おあいの手を引き出來ろ、

おゝ、よくおいで、まあこつちへ上りなさんせ。

宗右　はい、眞平御免なされませ。さ、ぞやを脱ぐがいゝ。（トおあいを介抱しながら下手へ住ひ、）疾よりお禮に上ります筈を、此頃逆上せで目がかすみ、ついのびくになりましたが、此間は親子の者へ大金をお惠み下され、有難う存じまする。

さき　まあ義理の堅い、あれしきに禮に來ずともよいものを、嘸手がなくて困りなさんしたらう。

宗右　いえもう眼病と申すものは、夕方から誠に惡うござりますから、蒸藥とも存じましたが、木賃宿は焚く炭から買立てるので面倒故、いつそ水でたでゝ見ようと存じまして、日に度々冷したせるか、今日は大きに樂になりました。

さき　それは何にしろようござんしたなあ。

宗吉　お內儀さんに此間の、ようお禮を言ふのだぞ。

あい　此間のお金にて、とゝさまが寐てをつても安心して居りましたは、小母さまの皆お陰、有難うござんすわいな。（ト兩手をつき禮を言ふ。）

つめ　まだ年は行かないが、順禮などをする子に似合はず、器量といひ物ごしといひ、よい衆の果は違つたものだね。
勘吉　少しの間此子を貸して、花魁衆のお部屋へ行つて、遊ばしてもようござんすかえ。
宗右　いえ、いたづらでござりますから、麁相を致すと濟みませぬ。
勘吉　よいから貸して下さんせ。
浪花　私共が附いて居るわいな。
さき　怪我をさせないやうに、氣をつけておやりよ。
勘吉　あい〳〵。
さき　又女郎衆が面白がつて無暗に物を喰べさして、お腹を損じるといけないから、おつめどん、附いて行つておくれ。
つめ　ほんにさうでござりますね。
勘吉　さあ、あの子、
つめ
兩人　來なさんせいな。
宗右　よく拜見して來るがよいぞ。

ト右の合方にておあひに三人附いて二階へ上る。宗右衛門思入あつて、
ついうかうかと夜にはひり、お忙しいのも心得ず、とんだお邪魔になりまして、お氣の毒さまでござりまする。
さき　忙しいといつた所が、見世の事にはわたし共は決して構ひはござんせぬ故、ゆつくり話して行きなさんせ。おまへ煙草をお上りかえ。
宗右　はい、是ばかりは止められませぬので、煙管を離した事はござりませぬ。
さき　やわらか過ぎるか知らないが、此煙草を呑みなさんせ。
ト煙草の小引出しを出す、
宗右　それは有難うござります。
ト二階の口より喜八出來り、宗右衛門を見て、
喜八　おさき、どこからお出でのお方だ。
さき　此人は太郎樣で、此間逢つた親子連の順禮さんでござんすわいな。
喜八　おゝ、話のあつた順禮殿か。よう尋ねて來なすつた。
ト宗右衛門目を拭きながら、

宗右　左樣なら、あなたさまがこちらの旦那でござりまするか。
喜八　内は女房のおさきの名前で、わしは爰の後見をして喜八といひます者さ。
宗右　此間はお内儀さまから、厚きお惠みを受けまして、大きに有難うござりまする。（ト禮を云ひながら喜八と顏見合せ）や、こなたは。
喜八　おゝ、さういふお前は。（ト宗右衞門きつと思入あつて）
宗右　いつぞや有馬の湯治場で、出合つた野村内藏之進。
喜八　しかもその時碁の相手に、馴染みになつた宗右衞門殿。
ト宗右衞門つか〳〵と喜八の傍へ寄らうとして、おさきへ思入あつて、
宗右　えゝ口惜しい、こなたはなあ。（トきつと思入）
喜八　さゝ尤もだ〳〵、いつか一度こなたに逢つたら、詫びをしようと心の内に、おれは忘れた事はねえが、是れには色々話もあれば、まあ氣を落着けて居なさるがいゝ。
宗右　わしも是迄艱難して、此姿に迄なり下りしは、是も誰故こなた故、諸國を廻るもどこぞで逢つて今の難儀を云はうばかり、よくもひどい目にあはしたな。
ト無念のこなし、此時二階よりおあい下りて來て、

あい　や、おまへはいつかの大泥坊。（ト大きく云ふを、）

喜八　あこれ、（トつか〳〵と下手へ行き暖簾の外へこなし、誂への合方になり、元の所へ來り、）誰とおぬしは間違へたか、夢にも知らぬおれをとらへ、何でさういふ事を言ふのだ。

あい　いえ〳〵そりや嘘でござんす。その時わたしが見覺えある、左の眉毛に一つの黑子。

喜八　や。

あい　何と嘘ではござんすまい。

喜八　はて、目かどの強い子供だなあ。

ト此前より階子の段へ以前の用掛〇△出て、下を窺ひゐて、此時喜八と顏見合せ、兩人二階へ上る。

喜八扨はといふこなし、おさき思入あつて、

さき　夫婦になつて今年で三年、深い樣子は知らねども、おまへは何で此人に今のやうな恨みを云はれその言譯も出來ぬのぢやぞいな。

喜八　夫婦の仲とて是ばかりは、今日の今迄云はなんだが、かう顯はれゝばもうこれまで。

さき　そんならこの子が言ふた通り。

ト喜八あたりへ思入あつて、小聲になり、

喜八　何を隱さう、大泥坊だ。

さきえ、、。（ト此時上手より千吉出來り、）

千吉　宗右衛門さん、わつちを覺えて居なさるだらう。（ト宗右衛門よく〳〵見て、）

宗右　お、、こなたはその折相ずりの、わしを化した若黨吾助、おのれも憎い奴だなあ。

千吉　さあ、その腹立の詫言も、兄貴と共々しようと思ひ、態々こなたに逢ひに出たのだ。

喜八　盜人ながら本心は、やつぱり同じ眞人間、腹も立たうが是迄の、一部始終を一通り、心を落着け聞いて下せへ。（ト合方替つて宗右衛門を宥め、）一人ならず娘御迄難儀を掛ける料簡は、さら〳〵こつちにないといふは、あれまで夜盜家尻切、又は押借强談で所々方々へおどり込めど、屋敷の外は大家でも決してはひつた事はねえが、天滿で名うての浪花屋は先づ十萬兩の身上と人の噂と子分が探り、屋敷境の高塀や土塀を越して大名の危い仕事をするよりも、千兩位の金高なら借ても障りになるまいと、有馬の湯治で足をつけ、首尾能く千兩手に入つて仲間の者へ手當をなし残りを路用に江戸へ下り、根が惡錢の泥水家業、運に叶つて小格子から今町竝の大阪屋、家作と抱への女郎では安く積つて五千兩、假令家作を書入れても千兩位の延金は耳を揃へて渡せるから、どうぞ穩便にして下せへ、それとも腹が癒ぬならば是から出所へ持出すとも、又は私を殺す

とも、三つの内でどれなりと心の濟むやうして下され。

トよろしく思入あつて言ふ。宗右衛門思入あつて、

宗右　こなたに千兩盜まれたその金策が出來兼ねて、所持の家藏家質に入れ、さあそれからといふものはする事なす事交喙鳥のはし、とう〳〵家内は散り〴〵ばら〳〵、わしは娘と二人して五年此方廻國の神や佛のお名前を、背負つてあるけど煩惱の恨みは消えぬ心の焔、爰の木の下辻堂と宿錢のないその時は、譬にもいふつらい旅、野宿をしたも幾度か、是も盜賊星右衛門、汝に逢つたら武者振りつき、刄物はなけれど喰ひ付いて此身の恨みを晴らさうと、思ふ折柄中田圃の稻荷の地内で持病が起り、既にあの世の人となるを御親切にお藥やら又お金迄下されし、厚き御恩のお内儀さまへ、對して拳の拍子拔け、武者ぶりつかうと思つたのも、浮世の義理でさうならぬは、實に悔しうござりますわい。（ト宗右衛門愁ひの思入、おあい介抱しながら、）

あい　此をぢさんは憎いけれど、とゝさんが御恩になつたをばさまへ濟まぬ故、あの恨みさへ、えゝ云へぬは悲しい事でござんすな。

トおあい宗右衛門に縋り泣く、おさきおあいを引寄せ、

さき　ても感心なその詞、わたしも是迄旦那の惡事露聊かも知らぬ故、何の恨みのある事と思ひの外に

聞いて恟り、是が跡先考へないお方であらば此場にてどういふ事にならうも知れぬ。それをわづかな恩義にからまれ、此子まで共々にぢつと辛抱しなさんすその切なさの胸の内、思ひやられて不便がいやまし、ほんに悲しう思ひますわいな。

トおさき泣く、星右衛門思入あつて、

星右　さあかう何もかもぶちまけて、此身の悪事を話すのも、和尚がよくいふ懺悔滅罪、善に返つた星右衛門が心に掛る雲も晴れ、こなたの自由にならうから、さあ存分になさるがいゝ。

宗右　流石頭と立てられて、多くの手下を遣ふ程、立派な覚悟の星右衛門殿、恩と義理とにからまれてどうする事も出來ませぬ。

あい　太郎様でお貰ひ申した、あのお金があればこそ、今日迄宿で養生して、爰迄來たのでござんすれば、あの御恩は忘れませぬわいな。

宗右　これ娘、お内儀さんは有難いのう。（トよろしく思入）

千太　宗右衛門さんといひ此子迄、揃ひも揃つた心立て、是迄知らずに盗をした心に恥ぢて面目なく、穴でもあればはひりたいやうだ。

ト千太天窓をかく、此時二階にて、

九郎　べらぼうめ、いつ迄待たして置きやあがるのだ。
兵太　亭主はどこへ行つたく。
赤助　さあ兄イ、內證へ行つて、
九郎
三人　すはり込まうぜ。（トわやく言ふ、此聲を皆々聞きつけ、）
星右　おれの惡事をとつこにとり、當ツこすりのいやがらせ。高が小屋者ちいさな料簡、惡事はまだまだ駈出しだなあ。
ト悠々とこなし、宗右衞門思入あつて、
宗右　かうしてこなたの居所が知れゝば、今夜に限つた事でもなし、又あした出直しませう。
星右　それでは心が濟まぬから、恨みを晴らして下さらずば、都合をしても千兩は、耳を揃へて渡すつもり、まあ歸らずに居て下せへ。
さき　わたしもちつと話もあれば、四疊半の離れへ行つて、待つて居て下さんせいな。
ト合方にて、二階より勘吉下りて來て、
勘吉　もし旦那さん、四人連れの非人さんが、待ち遠だから內證へ行つて、旦那に逢ふと申します故、爰へ來るかも知れませぬわいな。

千太　おゝ丁度いゝ、宗右衛門さんと二人を、離れへ案内して下せへ。
勘吉　あい〳〵。
星右　それぢやあ暫時奥の離れで。
宗右　詞に隨ひ待つて居ませう。
さき　どうぞさうして下さんせ。
勘吉　さあ、ござんせいなあ。
星右　もし、成る丈內へは穩便に。（ト思入）
宗右　承知して居ますわい。

ト流行唄になり、三人上手へはひろ。此唄にて二階より小栗の馬吉酒に醉ひしこなしにて、白鳥德利と茶呑茶碗を持ち、ひよろ〳〵しながら出來り。

馬吉　おい曉のお頭え、今夜は昔の話をしながら、呑み合はうといふ約束で、引付座敷で初めたのになぜ下へ行つたつきり來ねえのだ。二階のやつらは劔難がつて女といつては一人も來ず、色氣なしの四人一座、野郎ばかりのぐひ呑みは、あんまり出來た譯でもねえが、いつ迄おれを待たして置くのだ。

星右　さあ、今ちつと野暮用があつて、二階へ行くのが遅くなつたが、今行くから呑みながら、もうちつと待つてくんねえ。

馬吉　二階へ行くには及ばねえ、座敷よりは爰がいゝ、旦那には近付きだが、まだお内儀さんには初めて故、近付きのため盃を、違つた、此茶碗をちよつと受けておくんなさい。

トおさきへ茶碗を出す。

さき　有難うござんすが、わたしやちつともいけませぬから、せめてお酌をしませうわいな。（ト返す。）

馬吉　そんな事を云はねえで、いツぺい呑んでもいゝぢやあねえか。わつちは田圃の非人小屋で小栗の馬と云ふものだ。是を御縁に又度々話をしに來やすから、心安くお頼み申します。

さき　おや、さうでございますかえ。（ト仕方なく挨拶する。馬吉階子の下へ行き、）

馬吉　皆茲へ來て、お内儀さんに近付きになれ。（ト大きな聲する。二階にて、）

九郎三人　おいゝゝ。

トはやり唄にて九郎藏先に、三人やはり酒に醉ひよろゝゝしながら下りて來り、

九郎　お内儀さんには初めてだが、わつちは近所の中田圃で、往來中の行倒れや、首縊りの世話をしたり又は溜に死人が出來ると、小塚原へ持つて行く、狼の九郎藏といふ科人掛りの乞食でござい

ます
兵太　わしは家名の大阪生れ、流れ〳〵て江戸へ來て、犬の川端皮剝から水死佛に取付かれ、こんなに體がふくれたので、川施餓鬼の盆から改め、土左衞門の新太と言ひます。
赤助　わつちは瘡で久しい事、堀の内の御厄介、よだれ混りの題目に團扇太鼓と首ッ引きも、兩手が利益で達者になり、鐵砲籠に竹の箸きよろつく眼で朝ッぱらから、御町内を拾つてあるく紙屑買ひの瘡兼といひます。
九郎　兄イ共々此後とも、
兵太　どうぞ贔屓に、
三人　して下せい。(ト三人挨拶をする。)
馬吉　もしお内儀さん、出したものは引かれねえから、まあ一つ受けてくんねえ。(ト茶碗をさせどもおさき默つてゐる故、)口を酢くして是程言ふに、默つて茶碗を受けねえのは、乞食だからきたねえのかえ。
さき　いいえ、さういふ譯ではござんせぬが
馬吉　いゝ、やさうに違えねえ、上部は乞食できたなからうが、人の物を只取るやうな、盜人とはちつと

違ふぜ。ねえ旦那、さうぢやあねえかえ。(ト星右衛門へ思入。)

九郎　はゝあ、それぢやあ爰の旦那といふのは、

ト兵太刀を拔く眞似、赤助あやまる仕方をして、

兵太　い、
赤助　れこかえ。

馬吉　大阪三郷で隱れのねえ、曉星右衛門といふ大泥坊だ。

ト大きな聲をする。星右衛門おさき氣遣ひのこなしにて、

星右　これさ、内輪の者の前もあらア、成たけ靜かに言つてくれ。

馬吉　何もねえ事を言やあしめえし、云つたつていゝぢやあねえか。

九郎　言ふなと言つても持つた口、兄ィもおれもお饒舌だから、どうして言はずに居られるものか。

兵太　人は見かけに寄らねえものだ、

赤助　泥坊とは。

三人　思はれねえな。

馬吉　思はれるやうな泥坊なら、板の間ぐらゐでつかまるが、腕のいゝのは違つたものだ。

星右　これさ。もういゝ加減にしてくれ、どうせ今夜は、いやさ、今夜は客も出來てゐるし、耳になつて

は身の上だ。

九郎　おい兄イ、ちつと時代なせりふだが、こいつアお定まりの口留金だね。

馬吉　ついでにお手の筋が聞いてあきれらあ。

ト此内おさき延喜棚の下より手文庫を出し、二十五兩包みを四つ出し、星右衞門へ渡す。

星右　是は少しばかりだが、久しぶりで逢つた印に定めし氣には入るめえが、今夜の間に合せに取つてくんねえ。(ト馬吉の前へ置く、馬吉取つて見て、)

馬吉　口留金と云ひなさるのは、たつた百兩かい。

千太　百兩取つたら不足はあるめえ、默つて持つて歸るがいゝ。

馬吉　思召しは有難へが、まあよしにしませうよ。(ト向ふへ放り出す。)

星右　なに、百兩ぢやあ、

千太 星右　不足と言ふのか。(ト誂へ合方になり、)

馬吉　九州かけて幾人と手下を持つた頭分の、その曉の星下り、今ぢやあ顏も吉原で町並迄に押上げた當時日の出の大阪屋、箒星程こちとらが天窓を揃へて饒舌つても、光りの少ねえ日陰の小屋もの、惡事に掛けたらすつぽんと月程違ふ膽ッ玉、どういふ相場かしらねえが、むなぐら金の口留

めを、四つに割れば一と包、こなたの目から見なすつたら二十五兩の奴だらうが、雲の掛つたそりやあ目違ひ、こいつァ雨で流してしまひ、一番のそんでくんなせえ。

星右　それはこなたが言はずとも、二十五兩は相場違へと盆のあかるいおれだから、知つてはゐれど今夜の所、ちつと手先が廻らねえから、今もそつちで言ふ通り、是れから度々來ると言ふから是れで間に合はして置くがいゝ。

馬吉　お話の中だが、今が今逢つた時取らねえと、もし今夜にも手が廻り御用と一言掛つたら、幾ら貰ふ筋があつても跡の祭りで無駄な事だ。もし、お内儀さん、かういふ事は言ひ當てるねえ。

さき　そんな延喜を付けられては、御幣擔ぎの内だから、どんなに氣になるか知れないが、まあさういふ事はないにして、今度又來て下さんせ。

千太　親方やお内儀さんが、又今度と口へ出してお前に言やあ、證文張つたも同じ事だ。

馬吉　その證文も判のねえ反古同然に水掛論、是が子分か手下だとか恩を受けたおれなれば、義理立てをして歸らうが、あかの他人の小栗の馬吉、刎ねた野郎と言はれても乘りかけたらば動かねえ、渾名に取つた鬼鹿毛だ。それツぱかり貰つても、飼葉の錢にもなりやあしねえ。

ト胡坐を掻き四人上手へかたまり、白鳥の酒を呑み居る。下手より勘吉出來り、

勘吉　もしお内儀さん、さつきの順禮の子が歸りたがつて居りますから、用がありますなら、少しも早く逢つてやつて下さんせ。

さき　逢つて話がしたいから、直行つてやりませう。

星右　嘸待遠だらう、爰はおれが取持つから、早く行つてやるがいゝ。

さき　さあ、行きませうわいな。（ト立上る。）

馬吉　おい、又厭がつてお立ちかね。

さき　ちよつと行つて來ますから、皆さん眞平御免なさいまし。

ト流行唄になり、おさき勘吉上手へはひる。馬吉茶碗を持つたまゝ、跡を見送り居て思はず茶碗を落す。

赤助　こう兄イ、どうしたのだしつかりしねえか。

馬吉　内のお内儀さんはいゝ女だなあ。（ト見とれ居る。）

九郎　あれは、どこで盗んだらう。

兵太　默つてるねえか、掛合中だ。（千太思入あつて、）

千太　お前達にも氣の毒だが、今も爰で言ふ通り、ちつと懐がわるいから、四五日それで間に合はし

てくんねえ。

ト此内馬吉はおさきに心の殘ることなしあつて、

馬吉　さうお前が打明けて懷話をしなさるなら、おれも小栗の馬吉だ。他人附合もしたくねえから、こりやあちつとも貰ふめえよ。

九郎　おい〳〵常談を云つちやあいけねえぜ、今出來かゝつてゐるぢやあねえか。

馬吉　えゝ、默つて居ろ、胸にあらァ。

九郎　溜飮ならいゝが、肺氣がはやるぜ。

馬吉　承知してゐらあ、任して置け。（ト星右衞門不審のこなしにて、）

星右　今迄とやかう言つたこなたが、今度は金はいらねえとは。

馬吉　その替りに喜八さん、外に貰ひたいものがある。

星右　なに、外に貰ひたいとは。

馬吉　お前の女房をおれにくんねえ。

星右　えゝ。（ト是にて顏見合せ氣味合の思入、誂への合方になり、）そんならおぬしは、女房を。

馬吉　貰ひてへがうんとは言ふめえ、折合はねえのは目に見えて知つてはゐれど物事は、當つて碎ける

世の中に、女房をおれにくんなさるか。

星右　どうで命は、いや、どうでもこれは聞きにくい。

馬吉　呉れずばそれ迄、頼まねえが其替り悪事を殘らず、是からおれが訴へるぞ。

千太　なに、女房をくれずば訴へると。

馬吉　おゝ、それがおれの腹癒せだ。

千太　もう打つちやつては。

ト千太懷より懷劔を出し、馬吉に切り掛る。星右衞門手早く留め、

星右　これさ、何をするのだ。

千太　どうせ暴れゝば死ぬ體、幾人切つても下手人は、わつち一人で濟む事だ、親分放してくんねえ。

ト又立懸るを、

星右　そりやお手前が云はずとも、おれもやつぱり首のねえ兇状持だ、まあ待ちやれ。

千太　それでも、あんまり。

星右　えゝ、待てといつたら待たねえかい。

ト宥める。是を上手にておさき窺ひゐる。千太是非なく控へ、

千太　えゝ、癪にさはるなあ。
馬吉　さあ、おれの方の返事はどうした。
星右　さあ、それは。
馬吉　呉れるか呉れねえのか。
星右　さあ、
馬吉　さあ、
兩人　さあ〳〵。
馬吉　おい段々夜が更けるぜ、早くしねえ。（トきつと言ふ時、おさき前へ出て、）
さき　その挨拶はわたしがしますよ。
星右　おゝ、いつの間におぬしは來た。
馬吉　それぢやあ今の樣子をば、
さき　殘らず聞いて心が替り、わたしやおまへの女房になる氣さ。
星右　え、そんならおぬしは眞實に、
馬吉　女房になつてくれる氣か。

さき　おいなあ。
星右
千太　えゝゝ。（ト悄りなす。馬吉嬉しき思入にて）
馬吉　こいつお夢ぢやあねえか知らぬ。
九郎　夢なら早く。
三人　覺めろ〳〵。
馬吉　えゝ覺められてたまるものかえ。
九郎　こいつァ一番、
三人　すりそこなつた。（ト星右衛門むつとして）
星右　不斷に似合はぬその詞、
千太　おめへは氣でも違つたのか。
さき　さういふおまへが逆上てゐるよ。
星右
千太　どうしたと、（トしんみりした合方になり、）
さき　今日迄知らずに夫婦で居た、旦那の惡事を初めて聞いて、ふッつりいやになつた矢先へ、不束ものゝ、わたしをば女房にくれと實のある馬さんのお詞に、しみ〴〵惚れた横戀慕、たとへ賤しい小

屋者でも盗人家業と事替り、心にかざる錦繪の其張交ぜの鼠壁、ぞつと身にしむ秋風とともに差込む月の顔、縦屛風の隔なき前掛一つ細帯で樂に世帯を送るのが、元よりわたしの願ひ故、手鍋提げたりおひねりを崩して毎晩一升買ひ、米屋の使ひをするのが樂み、是からきつと見捨てずに可愛がつて下さんせ。(トよろしく思入。)

馬吉　その料簡が誠なら、今からさびた小屋住居。

九郎　三幅對の其替り、帝釋さまの一幅掛け、

兵太　薫香替り北風なら、窓から吹込む燒場の香り、

赤助　庭は摘み菜見晴らしは、六郷さまと溜の屋根。

馬吉　どんなに暢氣か知れやあしねえ。

さき　わたしはそれを望んでゐるのさ。

トおさきぢつとこなし、千太きつとなり

千太　是まで夫婦の間がらに、喧嘩を一つしねえのに、なんぼ惡事をした事が知れたといつてあんまり薄情、うぬも生かしては置かれねえ。(トまた立ち懸るを、)

犀右　是さ手前よりはおれの方が、腹を立てにやあならねえが、心の替つた女房に、兎やかう言つても

千太 それでもあんまりひどい仕方。

星右 えゝ、うつちやつておけといふに。(トおさき思入あつて、)おれの惡事を知つたので、末を考へ馬吉にその身を任せる料簡は、流石心のすわつた女、どうせ今夜の曉は榮華の夢も捨鐘に、覺めて涙の草枕、日向にしぼむ朝顏の花よりもろき命の瀨戶、是まで添つた女房を不便と思ひ助けたく、いやさ、助からねえのを承知して、未然を察した寐返りは、こつちも男一疋故、綺麗に暇をやらうから、今夜の内に出て行きやれ。

ト思入あつて帳箱より硯を取りよせ、離緣狀を認める。

さき あゝ、さう極つたら出て行くとも、ぐづ〳〵して居てもしひよつと、まき添へでも喰つた時は、お相伴は眞平だ。とはいふもの、是迄長々。(ト愁ひの思入あつて氣をかへ、)いえさ、長くわたしが名前人、あすから田圃へ人別を早く送つて下さんせ。

千太 乞食になつてよごれた體、送らなくつてどうするものだ。

九郎 どうせあした町內を、日勸進に廻つて行くから、ついでに人別を受取らう。

星右 さあ離緣狀を持つて行きやれ。

ト出す、おさき受取つてぢつとなり。

さき　そんならわたしは、もう再び、いや、二度と爰へは來るものかね。

ト思ひ切つて言ふ。馬吉思入あつて、

馬吉　方が付いたら更けねえうち、そろ〳〵神輿を上げようぜ。

九郎　兄イは神輿が上るだらうが、煙に卷かれたおら達は、

兵太　氣が重くなつて、

三人　腰がきれねえ。

馬吉　こぼすなえ、小屋へ行つて目鼻を附けらあ。

九郎　何だか手足を、

三人　もがれたやうだ。（ト三人力を落せしこなし、おさき思入あつて、）

さき　さ、早く表へ出かけよう。

馬吉　違えねえ、お相伴は下さらねえ。（ト是にて皆々下手へ來り。）それぢやあ旦那、去狀と一緒に今夜が直緣切

星右　二度と逢へりやあ悅びに、鰹節位は祝つて遣らう。

さき　もし、大阪屋の旦那、燒けぼッくいは折合はないよ。

千太　え、ぐづ〳〵言はずと行きやあがれ。

ト馬吉おさきを下手へ突きやる。

さき　ても、情ない。

馬吉　え。（ト星右衛門が見返る。）

さき　薄情なやつだねえ。（ト皆々暖簾口へ行き懸る、おさき表をのぞき、）何ぼしやあでも見世から出にくい

庭口から一丁目へ出ようよ。

馬吉　違えねえ、至極御尤もさまだ。（ト皆々花道へ行き、）是から田圃へ嫁入りは、太郎稻荷に緣のある

お先狐の行列に、

さき　毛竝をわけた巢籠りは、狸ばやしの三々九度、

九郎　牛を乘せ替へ馬兄イの、媒人役は此三人、

兵太　歸りに田町で夕川岸の、鰯とまぐろの土手を買込み、

赤助　酒は伊丹の一本生、

馬吉　へん、御祝言が聞いてあきれらあ。

ト新内の合方、按摩の笛になり、馬吉先に皆々花道へはひる。千太見送り、思入あつて、

千太　お前の詞に仕方なく、今迄は辛抱してゐたが、どうぞ是からやつてくんねえ。

星右　行くとは今の、乞食の所か。

千太　片ツ端から打つた切り、お前の罪を背負つて行くつもりだ。

星右　その志しは忝けないが、所詮今夜は退れられねえ。

千太　なに、退れぬとは。（ト星右衛門の傍へ寄るを、あたりへ思入あつて、）

星右　宵にちらりと目に掛つた、今夜の客のその内に、（ト囁き、）立派に是から名乗つて出て、上の御仕置受ける心。

千太　それでお前は姉御に迄、去状書いてやんなすつたか。こいつアうつかり出られねえ。

ト此前より上手へ宗右衛門、おあいを連れて窺ひ居る。

星右　それに付いても心掛りは、奥に待たせし宗右衛門殿、早く逢つて話しがしてへが、直弦へ呼んで来てくれ。

千太　承知仕りました。（ト上手へ行かうとする。）

宗右　いや、お出には及びませせぬ。（ト前へ出る。）

星右　おゝ、宗右衛門殿。

千太　そこに居たのか。

宗右　始終の樣子は次の間で、殘らず立聞きしましたが、その身の惡事を懺悔してお上のお手へ尋常に掛るといふはよい覺悟、流石は賊の頭株、惡に強きは善にも強しと今別るゝが見納めと、思へばどうやら悲しくなり、恨みのあるは忘れてしまひ、思はず涙をこぼしました。

星右　その樣に言はれると、ほと〳〵わしは面目ない。

宗右　只心得ぬは御內儀が、情深さに引替へて、どういふ心か知らねども、去狀取つて行つたのは、一向合點が行きませぬが、跡でこなたに渡してくれと預けて行かれた袱紗包み、是で樣子が分りませう。（ト宗右衛門包みを出す。）

星右　すりや、此包みを殘して行きしか。（ト中を開く、手紙と證文ある、）や、中には手紙と數通の證文。

宗右　仔細は手紙にありませう、早く讀んで見さつしやれ。

ト星右衛門手紙を開き見て、

星右「取急ぎ書殘しまゐらせ候私事兩親に別れ候後、不仕合せにて立行き難き所、不思議なる御緣にて御前さまと夫婦になり、次第に見世も繁昌なし、何不自由なく暮し候今日に到り、御身の惡事

を承り驚き入り候、とくにも承り候はゞ御異見の致しやうも御座候へども、差當りすべきやうなく此身を任せ候體に見せ、馬吉を連れ出し候間、御前樣は一度江戸表を御立退きなされ、御改心被成候樣願上まゐらせ候。まつた此家作年期證文千兩餘り御座候まゝ、宗右衞門さまへ千兩の替りに御返し可被下候。まだ〳〵申上げ度き事御座候へども書殘しまゐらせ候。あら〳〵かしく。」

(ト讀終り、)それぢやあさつきの愛想づかしも、おれを逃がさうばつかりか。

千太　さうとも知らず姉御をば、不實なものだと思つたが。

宗右　お情深いお方だけ、男も及ばぬ心立て。

あい　そのお手紙を書きながら、泣いてばつかり居なさんしたわいな。

星右　さあ、かういふ内も油斷はならねえ。(ト證文へ以前の百兩を添へ、)此有金百兩と、奉公人の年期證文家作を添へし一札も、殘らずこなたに渡しますから、此書置きを一緒になし、是をお上へ持つて出て、右の次第を申上げれば、お調べの上お上からこなたへ是を下さるから、お借り申した千兩と思つて取つて下さりませ。

宗右　どうして是は受取れぬ、もうかうなつた曉は、たがひに前世の約束と諦めて居る宗右衞門、その百兩を路用にして、早く爰を落ちるがよい。

星右　たとへ小栗が訴人せずとも、所詮今夜は遁れぬ喜八、今更卑怯に旅他國へ姿を隠す所存もない、折角女房が志し、千太手前も覺悟したら、宗右衞門さまを奉行所へ同道なして次第を言立て、一等罪を減じれば、直に手前は自訴致せ。

千太　おゝ承知しました。さあ宗右衞門さま、頭が覺悟をした上は、さあわしと一緒にござらつしやい。

ト宗右衞門と千太へ品々を渡す。

宗右　すりや、もうこなたは落ちられぬと言はつしやるか。さういふ事なら、詞にまかせ。

千太　是れから直に行くとしよう。

星右　さあ、手配のないその内に、（ト是れにて宗右衞門千太品々を懐中なし、おあいを連れて、）

宗右　思へば是れが一生の、

千太　地獄へ落ちる生別れ、

あい　可哀さうでござんすなあ。（ト三人行き兼ねる。）

星右　有難え、その一言が冥土へ土産。

ト跡言ひかけて愁ひのこなし、三人思ひ切つて、

宗右　さらばでござる。

ト早き合方にて下手へ行くを、千太囁き成程といふ思入あつて花道へはいる。跡合方ばつたりと消え本釣鐘を打込む、星右衞門立上り悠々と下手へ來り、立身にて向ふをぢつと見渡し、

星右　はて晴々とした、いゝ月だなあ。

ト よろしく思入、此前二階より以前の用掛〇、上手より用掛△、下手暖簾の内より役人眞田才助、羽織落差しの大小、役人の拵へにて三方より窺ひより、

才助
三人　御用。（ト打つて掛るを入替つて〇、△を留める。）

才助　やあ、手向ひ致すか。

星右　いえ、お手向ひは致しませぬ。

才助　なんと。

星右　是迄數年白浪の、その名も高き曉星右衞門、四國九州荒波のあるとあらゆる惡事の終り、此身に掛る天の網、のがれぬ所と覺悟致せば。

才助　おゝ、よい覺悟だ。それ。

ト星右衞門後ろへ手を廻し、覺悟のこなし、〇、△繩をかける。星右衞門思入あつて、

星右　今更言はずと知れた事だが、人の物を只取つて、其身の榮耀に遣ひ捨て、知れずに居やうと思ふ

は淺はか、お上のお仕置受ける氣で、疾から覺悟をして居りますから、お手向ひは致しませぬ。
その替り旦那さま、一つのお願ひがござりまする。

才助　なに、願ひとは。

星右　只今手下の千太郎が、宗右衛門と申す老人を、同道なして御奉行所へ、願ひ出ましてござります
が、先年大阪表にて右宗右衛門の金子千兩、盗み取りましてござりまするが、其金子故零落なし
親子が艱難辛苦致すも、皆私がなす業故、卽ち所持の家作を初め遊女の年期證文を、千兩の抵當
に返し遣はし、孝女をもつて浪花屋の再び家名の立ちますやう、お慈悲をお願ひ申しまする。

才助　篤と詮議をなせし上、願ひを叶へ遣はさん。

星右　是れさへお願ひ申しますれば、外に望みのなき喜八、いざお引き下されませう。

ト此時ばたくになり、上手より喜助、お爪、勘吉、源花江、住の江、岸の江出來り恟りなし、

皆々　こりや、旦那さまには。

ト星右衛門皆々をじつと見渡し、愁ひの思入あつて、

星右　おゝ、（ト立上るを木の頭）達者で居ろよ。

ト愁ひを隱すこなし。皆々はつと泣伏す。此模樣新内の合方、火の用心の聲にて、

ト狸ばやしにてつなぎ引返す。　ひやうし幕

七幕目　大切

千住田圃の場
同石地藏の場

（淨瑠璃）　文の千束の里近き　田の面へ落つる雁の聲　女夫同士意裏表　（淸元連中）

【役名】――笹川文治郎、非人小柴の馬吉、辻人形堀越才藏、同音八、同藤井芦十、近江屋常三郎、題目七兵衞、喜八女房おさき、七兵衞娵おたけ、やり手おつめ、鳶の者鶴太、同鳶藏、同蛸吉、大工吉藏、同熊八、捕手等。」

本舞臺一面の淺黄幕、柳の立木、日覆より同じく釣枝、流行唄の合方へ木魚を冠せ幕明く。

ト右の鳴物にて、花道より前幕の鳶の者鶴太、同鳶藏、同蛸吉、紺半纏、紺の腹掛股引、長提灯を持つて出來る。上の方より大工吉藏、熊八やつし裝、尻端折りにて同じく長提灯を持ち出來り、舞臺にて行合ふ。

鶴太　それへ來たのは、大工の吉公に熊公ぢやあねえか。

吉藏　おゝ、誰かと思つたら、頭の所の鶴兄ィに鳶兄ィか。

熊八　蛸吉さんが一緒ぢやあ、是れから小塚か大千住かえ。

鶴太　そんな面白い話ぢやあねえ、頭のお店の息子さんが、太郎樣から淺草へ今朝お參りに行つたぎり日が暮れても歸りなさらず。

鳶藏　一緒に行つた小間物屋の吉兵衞さんが途中ではぐれ、歸つて來たのでそれが知れ、慥かに先はそんじよそれと一本鎗で來たところ。

蛸吉　思つた先に居なさらず、向ふの娘も晝ッから行方が知れぬといふからは、てつきりこりやあ道行と思つて爰らを搜すのだ。

吉藏　頭のお店は大層あるが、一の出入は本町で、二とは下らね近江屋だが。

熊八　あすこの内の息子さんが、女にはまつたといふ事だが、あの息子の事ぢやねえか。

鶴太　こいつァ千住の氷川さまより、すつかりお前に當てられた。

鳶藏　さうして二人は今時分、何處へ行つた歸りがけだ。

蛸吉　西新井にやあ遲過ぎるし、小塚に居殘りでもしてゐたのか。

吉藏　どうして〳〵大違ひ、そんな意氣な話ぢやあねえ。おらが棟梁の出入場先き、

熊八　連雀町の質屋の隱居が、昨夜死んで今夜假葬、燒場からの歸りがけだ。
鶴太　因業質屋の隱居が死んだか。
鳶藏　そりやあ野暮な話しだな。
蛸吉　是れから直に歸るのか。
吉藏　今夜夜通し居る所だが、そこが名代の伊勢屋だから、酒も無けりやあ飯もなし。
熊八　あんまり酷い手當だから、少しまご〳〵してゐて、佛を捨てゝ歸つて來たのだ。
鶴太　直に是れから歸るなら、おら達と一緒に行かねえか。
鳶藏　店から手當を貰つたから、
蛸吉　何處ぞでいつ杯やるつもりだ。
吉藏　そいつァ何より有難い。
熊八　酒と聞いちやあ見逃がせねえ。
鶴太　それぢやあ是れから土手を廻り、
鳶藏　五十軒か田町へ行き、
蛸吉　夜明しへ行つて、一杯やらう。

吉藏　さう聞いては、ちつとも早く、
熊八　猪口の顏を見てえものだ。
ト上手へ行きかけ、大工の吉藏舞臺に落ちてゐる手紙を拾ひ、
吉藏　や、爰に口紅の文があつた。
熊八　小塚の女の文だらう。
鶴太　どんな事が書いてあるか。
虎藏　いゝあばいが惡くてひいこんで居るだらう。
蛸吉　いゝあつぱり、いつもの所作觸だんべい。
鶴太　まあ、何にしろ若旦那の、辻占に讀んで見よう。
皆々　それがいゝ〳〵。（ト鶴太開きみて、）
鶴太　「淨瑠璃名題――」（ト五人にて太夫連名役人替名を讀み、）大方こんな事だらうと思つた。
虎藏　しかし、是れせえ讀めば用はねえ。
蛸吉　ちつとも早く土手を廻り、
吉藏　手ごろの松の夜明しで、

熊八　いつ杯呑んで、
五人　歸るとせう。
ト右の鳴物にて五人上手へはひる。よき程に知せに付き淺黄幕を切つて落す。
（道行の場）——本舞臺一面の平舞臺、上の方樹木の張物にて見切り、下の方淨瑠璃臺、向ふ田の中に稻荷の宮、石の鳥居、幟大分建てあり、此向ふへ吉原西川岸を見たる灯入りの遠見、日覆より柳の釣枝。淨瑠璃臺に淸元連中居並び、宜しく時の鐘にて道具納る。と前彈なしに直に淨瑠璃になる。
〽霧深く立ちし浮名に世を忍ぶ、身はしよんぼりと小夜風に、引板の鳴子の音さへも、もしや追手と跡先へ心晩稻の田圃道、
ト本釣鐘合方にて、花道より前幕の近江屋常三郎、おたけ出來り、花道に留り、
〽身にしむ秋の霜寒く轟く胸に行先の、當も涙の長繩手、うしろに響く鐘の音に、振返り見る淺草の塔もかすかに田の中に、殘る稻荷の灯のかげを、よすがに二人辿り來て、
ト花道にて兩人振あつて、本舞臺へ來り合方になり、
常三　これお竹、うか〳〵爰迄來は來たが、そなたを一緒に連れて行つては、いつぞやあれ程事を分け添はれぬ義理を異見した文治はもとよりそなたの親七兵衞殿へ濟まぬから、是れから內へ歸つて

くりやれ。

たけ　そりやわたしよりお前さんが、お內へ歸つて下さりませ。文治さまのお計らひで親子の者が一生涯困らぬやうにして下すつた、お袋さまのお情を、無に致してお前さんを、わたしがお誘ひ申したやうで、どうもお內へ濟みませぬから、お歸りなされて下さりませ。

常三　二人一緒にをられぬ事は、文治が異見を言つたので、思ひ切つて居たけれど、かうしてそなたの顏を見ると、振捨ては歸りともない、そなたが歸れば仕方なく、思ひ切つて歸るけれど。

たけ　同じ事を言ふやうなれど、おまへさんがお歸りなされば、お名殘り惜しくも歸りますが、わたしが、先へは歸られませぬ。

常三　どういふ事で此樣に、浮世の義理は辨へれど、互ひに思切られぬとは、よく／＼深い二人が緣。

たけ　今更言ふも愚痴ながら、月の三日五節句に、お店へ上つてお顏を覺え、

〽しかも此春初午に、太郞樣にて思はずも、お目に掛つてお詞を、掛けし願ひが叶ふてか、田町へ拔ける近道を、敎へてくれとおつしやつたが小溝へかけし緣のはし。

〽凍りし道も影解の南に雲を運び來て、降出す雨を畔道に宿る小蔭も中田圃、傾く軒に咲き出し梅の薰りの慕はしさ、そなたの內へ立寄りて、

〽雨に濡れたるお羽織の、乾かぬ内に一としきり、
〽又降る雨に暫しとて、とむる間もなく雲晴れて、
〽つらき別れの春の宵、
ト兩人よろしく振あつて、
常三　末の遂げぬを知りながら、言交せしより度重なり、
たけ　阿漕ヶ浦の網ならで、引くに引かれぬ二人が仲、
常三　かういふ戀の身の末は、
たけ　多くは死ぬる覺悟はすれど、
常三　御苦勞掛けし其上に、
たけ　先立ちましては、不孝の上塗り、
常三　こりやどうしたら、
兩人　よからうぞいな。
〽初手は互ひに末々の考へもなく言交し、今となりては親達へ濟まぬ不孝と身をかこち、秋の哀れのいやまして、露に袂をしぼりける。

ト兩人よろしく思入あつて、手を取交し泣く事あつて、常三郎氣を取直し、

常三 どう考へ直しても、思案の外といひながら、末も遂げぬに言交し、そなたに迄も此樣に、苦勞させるも我誤り。

たけ 所詮添はれぬ二人が仲、どうぞわたしを思ひ切り、お歸りなされて下さりませ。さう致さねばお袋さまや、文治さまへ濟みませぬわいな。

常三 筋道立てゝそなたがいふを、聞入れぬも本意ならず、別れる心はさら〳〵なけれど、今の詞に隨ふて是れから内へ歸る程に、そで無いものと思ふてくれるな。

たけ なんでわたしが思ひませう、月日が經つてお腹の小兒、產み落しなばあなたと思ひ、生涯夫は持ちませぬ。

常三 そりや我とても同じ事、是れから内へ歸るとも、一生女房は持たぬこゝろ。

たけ さうおつしやらずとお歸りあらば、よい御新造をお貰ひなされ、お子を儲けてお袋さまの、お心休めが何より孝行。

常三 すりやそれ程迄に道を立て、そなたはわしを思ふてくれるか。

たけ その替りには百萬年、御壽命過ぎし其後は女房に持つて下さりませ、それ樂しみに此世では、再

び夫は持ちませぬわいな。

〽身にはつゞれを纏ふとも、心は清く色まさる木々の錦の紅葉時、始終小蔭に聞居たる文治は思はず横手を打ち、

ト兩人よろしく思入、此時後ろへ笹川文治出て、

文治　ても、感心な心立て、

常三　誰かと思へば、そなたは文治。

たけ　そんなら此場の樣子をば、

文治　若旦那のお行方捜し、此の界隈を尋ね歩き、遠目にそれと見留めたゆゑ、田圃傳ひに後ろへ廻り殘らず聞いてをりました。

常三　聞いたとあれば改めて、再び言ふには及ばねど、

たけ　是れからお内へお歸りなされば、頭はどうぞ御一緒に。

文治　おゝ、言ふ迄もないお供をするが、さて感心なのはお竹どの、貞女兩夫に見えずとかいふ其本分を失はず、生涯一人で暮すとは、はて天晴れな志し、然し文治が聞いた上は、決して一人で置きはせぬ。

常三　なに、お竹を一人で、
兩人　置かぬとは。
文治　まさか身分がら御本妻にはしにくいが、別家を拵へ妾にする氣。
たけ　人交りのならぬ身を、あなたの妾になさるといふは。
文治　お前は非人の子でない故。
たけ　え丶。（ト悄りする。）
常三　お竹が非人であらざるとは。
文治　今若旦那を捜しながら七兵衞殿の所へ行きしに、以前の身なら若旦那の御本妻にならずとも妾にお願ひ申さうと、言ふに其身の素性を聞くに、元は本所竪川にて天城屋といふ炭問屋、若氣の到りに吉原の大上總屋の女郎に馴染み、金に迫つて廓を抜け心中なさんとせし所を、追手の者に捕へられ、三日晒しの其上で、非人の手下へ下されし身は心中の仕損ひ、腹から非人にあらざれば足を洗へば元の素人、
常三　すりや、七兵衞殿は本所の、
たけ　元は炭屋でござんしたか。

ト此時下手より七兵衛出て、

七兵　疑はしくばそちも知つてる、肌身放さぬおれが守り、親の形見の臍の緒書。（ト守袋から臍の緒書を出し、皆々見て）其時心中仕損ひし、女郎と小屋で夫婦になり、産落したるそなた故、胤腹ともに素人なるぞ。

たけ　そんならわたしは、腹からの。

常三　非人にてはあらざるか。

文治　素人ゆゑに足を洗ひ、おれが妹に貰ひうけ、世間晴れてそなたは妾。

常三　こりやまあ夢に夢見るやうだ。

たけ　こんな嬉しい事はない。

七兵　是れと云ふのも頭のおかげ。

三人　えゝ有難うございます。（ト手を合せ拝む。）

文治　誠に目出度い、事だなあ。

〽思ひがけなく身に覆ふ、浮雲晴れて照り渡る月ぞ涼しく。

トきざひ三重にてよろしく此道具廻る。

（仕置場の場）――本舞臺眞中に莫大な石地藏、上手に頭目の石塔、大樹の松、日覆より同じく釣枝上下樹木の張物にて見切る。後ろ藪疊、燒場を見たる夜の遠見。總て千住仕置場の體よろしく、三重にて道具留る。

〽早や更渡る眞夜中に、文の千束の里へ行く、駕の聲さへ中空の十日の月もおちこちに、すがれし蟲の音も枯れて、哀れます穗のすゝき原、〽おさきは一人とつかはと跡へ心を引け過ぎの廓の灯影を見返りて、

ト凄味の淨瑠璃ありて、ばた〳〵になり、花道より黑ぬぬの四天、欅、鉢卷の捕手六人走り出來り、舞臺にて囁き合ひ、上下へ別れ忍ぶ。ばた〳〵にて以前のおさき舞臺へ來り、向ふを振返り見て、

さき　隙をうかがひ田圃傳ひ、首尾よく爰まで迯げて來たが、嬉しや追手のかゝらぬやうす。

ト　ほつと思入。此時下手よりおつめの遣り手出て、

つめ　や、お内儀さんぢやあござりませんか。

さき　おゝ、さういふのはおつめか。

つめ　よい所でお目にかゝりました。

さき　さうして、跡はどうなつたぞ。

つめ　お前さんの書置通り、家作と年季證文は宗右衛門殿の手に入るやう、千吉殿が一緒に附いて町奉行所へ出ましたから、お上のお慈悲で親子の衆へ、取られた金は戻りませう。

さき　して、内の旦那どのは。

つめ　遁れぬ所と覺悟なされ、繩にお掛りなされました。

さき　すりや先非を悔いて喜八殿は、繩にかゝつて行かしやんしたか。

トおさき泣く。

つめ　旦那さんばかりぢやない、千吉どんも親子の衆を町奉行所へ連れて行き、その身の科を白訴しました。

さき　思ひ掛けないそなたに逢ひ、内の樣子が殘らず知れた。知らぬ事とはいひながら、喜八殿と連れ添はずゝ、ともぐ\盗みをしたやうで世間へ顏が向けられねば、身は順禮と姿を替へ、是より諸國修行なさん。

つめ　それはあんまりな思切りやう、さうおつしやらずと一先内へ。

さき　再び廓へは歸らぬが、火の用心が心許ない。そなたは早く歸つてくりや。

つめ　成程これも一大事、さやうなれば私は。

さき　すこしも早く、

つめ　合點でござりまする。

ト時の鐘、ばた〳〵にておつめ下手へはひる。おさき跡を見送り、

さき　喜八殿が繩目にあひ、御仕置受けるも其身のなす業、天の咎めに是非もなし、只此上はお上のお慈悲で、宗右衛門殿へ金が戻り親孝行なあの子にて、再び家の立つのが悦び、かういふ内も追手が氣遣ひ、少しも早う江戸を立退き、さうぢや〳〵。

〽帶引きしめて行く先は、年も三十三軒家、身の厄除の西新井大師道へと志す、後ろに窺ふ馬吉が、

ト身繕ひをして上手へ行かうとする。上手藪疊を押分け、以前の馬吉出て、

馬吉　おさき待て。

さき　や、馬吉どのか。

馬吉　うぬ、逃げようとて逃がすものか。

〽行くをやらじと引戻す、折から近き火葬場の常念佛も物凄く、〽南無阿彌陀、

トおさき逃げようとするを馬吉引戻し、一寸立廻つて上手に馬吉、下手におさき下に居て兩人きつと

見得、一つ鉦誂へ凄き合方になり。

よくもうぬは生馬の此馬吉の目を拔いて、小屋からこつそり拔道傳ひ、時刻も丁度吉原の引けの廻りの鐵棒引き、お捨が知らせに追かけたが、土手せえ暗き雨上り、廓へ行つたか千住かと戀と無常の別れ道、氣のずにうかんで田中から、一本鎗に突當てた、所は小塚の御仕置場、地藏の顏も二度三度、手前に釣られた上からは、是れから七日題目の長い事は言はねえから、火屋の烟りの風次第、おれに靡いて寐りやあよし、いやだと云やあ縛り上げても、抱いて寐るから惡い犬に喰ひ付かれたと、往生をして抱かれて寐ろ。

さき　たとへ命を捨てればとて、おのれに此身を穢さうか。

馬吉　何を小癪な。（トきつとなる。又一つ鉦、念佛になる。）

〽南無阿彌陀々々。

トト馬吉おさき立廻り、此内以前の捕手六人ばら〳〵と出て、

捕手　ゆすりかたりの、

六人　馬吉、御用だ。

馬吉　なんと。

ト六人打つてかゝり、ちよつと立廻りて左右へ投げのけ、きつと見得、投節になり、

〽これ程思ふおれを捨て、跡を隠して逃げるとは、つれないこゝろと胸づくし、取る手を拂ひ右左機をとつて投節に、

ト六人を相手に立廻り、左右へ投げのけ、きつと見得し

〽死なざ止むまい茶碗酒、わたしや一生樽枕、〽酒を力に暁のおすをも知れぬ身の科を、知つて付け込む大阪屋、隠す内證の言譯に、初めて顔を三つ鐵輪、ぞつと素顔に迷ひ込み、錦の裏の非人小屋、おれが女房に貰つたからは、〽思ひ晴らさで置くべきと、言ふをさうはと組付く捕手、懐劍抜いて突きかゝる、手先狂ふて我と我、腹へ突込みどうとなり、

ト此淨瑠璃の内六人馬吉へ十手にて打つてかゝる。是れへおさきからみ、馬吉後ろの地藏を遣ひ面白き捕物の立廻りよろしくあつて、トゞ馬吉懐より匕首を出し、是れを抜いて立廻り、捕手一人後ろから羽がいじめに組付くを、馬吉後ろを突かうとして左右を突く、捕手身をかわす。馬吉あやまつて我手に脇腹へ突込みどうと下に居て、

捕手を突かうと思つた手が外れ、我と我手に此の深手。

さき それぞ是れまで人の物を、ゆすり取つたる悪事の報い。

馬吉　誠に天の御罰なるか。（ト此時上手へ前幕の役人眞田才助、捕手をつれ出て、）
才助　只今喜八は縛につき、同類千太も白首致し、今又惡黨馬吉が、我と我が手に脇腹突きしは、
○　惡事を懲らす、
六人　天の責。
才助　一度零落なしたれど、子の孝心の德により、再び千兩手に入る宗右衞門。
さき　それでは家名が立ちますか、えゝ有難い。
馬吉　是れを思へば世の中に、知れた事だが惡事は出來ねえ。
才助　先づは、惡人亡び、
さき　善人榮え。
馬吉　是れが末世のいゝ手本だ。
〽惡人亡ぶ所さへ、身を捨札の仕置場に、後の噂と、（ト馬吉改心なし、引廻す。此時頭取出て、）
頭取　先づ今日は是れぎり。
ト目出度打出し

延命院（終り）

鏡山錦楓葉

抑當狂言の發端は貞和年間足利の世は泰平に式日を祝ふ上巳の雛祭り飾る膳部に毒ありて野田と唐津が非業の最期是を見出せし功により立身なせし大月へ殿の上意の縁組も浦井が心濟ざるを察してお波曾平次が不義を名としてあの世の旅立ち散り行く花の春過て卯の花曇り胸晴れぬお貞が忍ぶ長局浮名を流す鴫川堤で伯父大六を殺したる惡事も兀し古位牌天の投網に左源太を目掛て打し安宅が手裏劔後の證據に鳴る鐘の法會の席に玉笹を盜みの科で政尾が折檻運命茲に筑摩川深き巧みに又助が忠義を憎むなぶり切り淚の時雨朱に染む紅葉に大炊が瓢酒足もよろめく猩々の謡をしるべに突掛ける槍を切られて鄕右衛門我身の銹に嚴しき拷問吉良中澤が白狀に確證を得し佐渡守小田が助言の裁判に悔悟なしたる藏人が憂を三上の獲牢に萬助お雛がなさけにて切腹なせし勸懲の結局

于時近江名所温

『加賀騷動』の書卸されたのは明治十二年十月、作者六十四歳の時、新富座に於てゞあつた。實錄に依つて脚色されたもので、作者のお家物中最も著名にして、傑出せるものゝ一として傳へられてゐる。故三木竹二氏は此の作に就いて次の如く評してゐる。「鏡山は規模の大なる通し狂言にて、加賀騷動に胚胎せり。全齣に就いても難ずべき處少きものなり。是も妙なるは大月邸及紅葉狩の場との二齣とす。大月の邸にて姦雄の藏人と豪宕の大炊との性情相映射する處描き出して眞に逼る、大炊が酒を乞ふに擬して談笑の中に諷刺を寓し、句々大月の心肝を刺すの狀、藏人が毫も怒氣を顯はさず、恭謙其の意を迎ふる體、これより農夫大六を呼出して樸直の諫をなさしむる段、いづれも妙なり。這般の布置對話の詩趣を含蓄せる、泰西大家の筆に讓らず」と。結末に添へた『湯島祭禮の場』は、書卸しの時、陰慘な大詰に對して添附された、大切淨瑠璃に過ぎないが、もとのまゝに差加へておいたのである。

書卸しの時の役割は市川團十郎（小田大炊、上野の鐘五郎）、尾上菊五郎（大月源藏後に藏人、若黨曾平次、根岸の松右衞門）、市川左團次（安宅鄕右衞門、中老政尾、湯島の三吉）、中村宗十郎（浦井主膳、左枝佐渡守、根津の八重藏）、岩井半四郎（多賀家の妾お貞、大月妻おてる、不忍の辨吉）、中村仲藏（鳥屋萬助、大月伯父大六、世話役千右衞門）、坂東家橘（久松三五郎、娘お浪）、市川小團次（浦井左源太）、市川市十郎（鳥居又助）、中村鶴藏（吉良助太郎、漁師太左衞門）、岩井小紫（中老玉笹）、市川團右衞門（中澤甚平、深見十藏）、澤村百之助（萬助娘おひな）、尾上梅五郎（膳番野田永太郎、高木淺右衞門）、大谷門藏（膳番民谷宗七郎、馬淵傳藏）、中村鶴助（唐津四郎兵衞、左枝主馬）、尾上菊之助（又助伜又市）等。——口繪にしたのは國周筆筑摩川乘切の綿繪であり、挿繪は同筆の紅葉狩と團十郎（小田大炊）の舞臺寫眞とである。

大正十四年四月　　　　校訂者





鏡山錦栬葉（加賀騒動――九幕）

序幕

江州白山社の場
多賀家御殿の場
蘇鐵の間加増の場

〔役名――多賀大領義則、大月源藏後に大月藏人、浦井主膳、膳番野田永太郎、毒味役唐澤四郎兵衞、中澤甚平、吉田助太郎、醍醐民、宗七郎、醫者横田謙齋、料理方根島新八、同宮原勘藏、諸士水野平十郎、同松井彌三郎、同名島瀧右衞門、同川村慶次、茶道雲才、同鈍才、多賀金次郎、同慶之助、仕丁、神主、禰宜。中老玉笹、奥女中、腰元、小姓、其他。〕

（白山明神鳥居先の場――本舞臺眞中に石の大鳥居、左右同じく玉垣、正面本社の遠見、所々に櫻の立木、上下櫻の林にて見切り、總て江州鏡山白山明神鳥居先の體、毛氈を掛けし床几三脚据ゑあり、爰に△○□◎の四人仕丁にて、竹箒、水打手桶など持ち立ちかゝり居る見得、大拍子にて幕明く。

△　これで掃除も出來たから、ちよつと一服やらう。

三人　それがいゝ／＼。（ト床几に掛ける。）

△　ときに此の頃では、やんごとなきお方樣が、時折當社へ御參詣があるので、掃除もあら方行き届き

綺麗になつて居るゆゑに、左のみ手間も取れぬので、思つたより早く出來た。
○その早く出來たのも、今日は當國の太守多賀家のお妾お菊さまのお持ち申した、大領樣の御次男金次郎樣の御參詣で、
□こちと等にまでお手當のお神酒が出たと聞いたから、一杯呑むのを樂しみで滅法掃除が早かつたが、人間は正直なものさなあ。
◎同じ世界の人間でも、御次男の金次郎樣は今年やう／＼七つだが、ちよつと御參詣遊ばすにも數多のお側が附添つて、言ふ目が出るとは羨しいことだなあ。
△あゝいふ所へ生れて來るのは、前世からのその身の福で、いはゞ持つて生れたのだ。それに引替へ同じお妾のお子でも、慶之助樣はお氣の毒だ。
○さうよ、お貞樣のお持ち申した慶之助樣は、一つお胤に違ひねえが、どういふことか御家來分、まことに御運のないことだ。
□その運で思ひ出したが、當時運のめつぽういゝのは、俄に立身出世をしたお侍の大月源藏樣だ。
◎違えねえ、あの源藏樣といふのは、元は鐵砲組のお足輕長次兵衛とかいふ人の、息子だといふことだ。

△　大月様の御高運はいふまでもねえことだが、いつたい智慧が勝れた人故、二人扶持から一足飛びに、今では五百五十石、何でも人は器量がなけりやあ、出世はできねえ。
◎　その内にも昔と違つて、今の世界は智慧がなけりやあ、年中人の下に附き、箒と手桶を持ち切りで、埃と一座の掃除役。
□　かうして見るとおら達は、人間の埃か知らんて。
◎　これさ、そんなに力を落すな。
△　是れでも今に運が向けば、
○　どんな出世をするかも知れねえ。
□　當にせずに待つて居よう。
◎　ト大拍子になり鳥居の内より、神主柿野鈴成に禰宜二人附きて出來り。
鈴成　こりやく、そち達は何をいたして居る、買手もないに油を賣らずと、早く燈籠の油掃除なといたしておけ。
四人　へいく。
鈴成　掃除が出來たら、部屋へ參つて休息いたせ。

△　へい、休息にまゐるで、
四人　ござりまする。（ト手桶等を持ち四人下手へはひる。）
鈴成　最早若殿御參詣の時刻なれば、
彌一　我々も此の所で、
同二　お出迎ひを、
三人　仕らん。
ト三人出迎ふ、誂へ出の鳴物になり、花道より多賀金次郎羽織袴一本差し、小性二人刀を持ち一人手箱を持ち、玉笹袿端折り中老のこしらへ、腰元四人、羽織袴大小の慶之助、上下大小の吉良助太郎附添ひ、奥女中四人、此の後に供廻り附添ひ出來り、花道へ留り皆々思入あつて、
金次　これ玉笹、屋敷の庭は蕾なれど、あれあの花は、よく咲いて居るではないか。
玉笹　仰せの通り御庭前の八重は未だ固けれど、いつか和らぐ境内の一重は殘らず咲き亂れ、雲と見まがふ此の風情、何と皆さん、見事に咲いたではござりませぬか。
腰一　ほんに見事な桃櫻、どちらをどうといやよひの、三日見ぬ間にこの滿開。
玉笹　でも、風情ある、

助太 眺めでは、
皆々 ござりませぬか。
鈴成 これはくヽ若殿を始め、何れもにはようこそ御參詣。
禰一 則ち神職をはじめとして、
同二 我々これまでお出迎ひ、
三人 仕ツてござりまする。
金次 おヽ神職の出迎ひ、過分々々くくく。
玉笹 何は兎もあれ、お床几まで、
助太 先づお越し、
皆々 遊ばされませう。
ト右鳴物にて皆々舞臺へ來り、上下の床几へ腰元八人かける、眞中の床几へ金次郎を玉笹介抱して掛けさせる、慶之助も同じ床几へ掛けようとするを助太郎留めて、
助太 あいや、あなたはこれへお掛けなされませ。(ト助太郎と共に次の床几へ掛けさせる。)
慶之 これ吉良、身はあの床几へ掛けては惡いかや。

助太　御存じなきゆゑ左樣仰せあるは、御尤もにはござりまするが、金次郎樣とてあなたとて同じお子樣に違ひなけれど、近頃申し上げ難きことながら、あなたは御家來分にござりますれば、それゆゑ御同席はなりませぬと、申し上げましてござりまする。

慶之　おゝ左樣か、何でわしは家來分になつたのぢや。

玉笹　その譯は慶之助樣斯樣にござりまする、御幼稚とは申しながら御發明なお生れゆゑ、お辨へもござりませうが、お菊さまもお貞さまも皆殿樣のお側女ゆゑお腹こそ替れ殿樣の同じお胤のお二方さま、決して分け隔てはござりませぬが、此の程殿樣よりの仰せ出しに金次郎さまは御次男にて、慶之助さまは御三男なれば御家來並との御沙汰ゆゑ、御同席をおさせ申しては附添ふ者の越度となれば、餘儀なくお隔て申しましたが、必ず惡しう思召しまするな。

助太　疾くよりあなたに申し上げる筈なれど、一つお屋敷に居られませねば、お二方の若樣が御一緒にお成り遊ばすことは年の內にも稀ゆゑに、もそつと御成人遊ばしてから申し上げんと今日まで、あなたにお聞かせ申さぬは、御家來並に遊ばせしをお子樣心にお恨みなされ、お氣でも閉るその時はと、お貞さまのお心を察し、實は申し兼て居りましたが、申さにやならぬ今日の仕儀、何と女中達、お氣の毒なことではござらぬか。

腰一　ほんに左様でござりまする、したが假令お上より御家來並との御沙汰あるとも、殿様のお胤に相違ござりませねば、

同二　自然と人も敬うて、御家中の子供衆同樣思召すお方は、お一人もござりますまいと存じまする。

金次　そんなら慶之助殿は家來分との沙汰があるので、供の者同樣に扱ふと申すのかや、

助太　御意にござりまする。

金次　假令父上の仰せでも正しう我とも兄弟ゆゑ、屋敷でなければ遠慮に及ばぬ、爰へ來て掛けられよ。

慶之　有難うはござりまするが、父上の仰せとあれば、もどきましては濟みませぬ。

助太　流石は才智の聞えある、お貞さまおの氣を受けつぎ、感心なことでござる。

玉笹　此の御様子で御成長をなされましたら末々は、あつぱれ金次郎樣のお力に、おなりなさるでござりませう。

助太　何さま栴檀は双葉より芳しの諺にて優り劣らぬお二方、假令主從隔つとも、こりや表向きのみのこと、お心に隔てなければそれが何より末の樂しみ、何は兎もあれ今日は、御家例として御武運長久祈念の爲めに上巳の御社參。

鈴成　最早祈念の時刻なれば、若樣には拜殿へお越しあつて、然るべう存じまする。

玉笹　測らず設けのお床几ゆゑ、御席を隔てしこの場の仕儀。
助太　これもお側に附添ふ、我々共が役目ゆゑ、失禮御容赦。
兩人　遊ばしませ。
金次　二人とも悪うは思はぬ、その斟酌には及ばぬぞ。
腰一　てもお優しい若殿さま。
同二　かういふお上へお附き申す、
同三　わたくしどもは冥加に叶ひ、
同四　仕合せなことでござります。
助太　餘事はさておき若樣には、
玉笹　神職方へ、少しもお早く。
金次　おゝ、皆參れ。
玉笹　先づお越し、
皆々　遊ばされませう。
ト唄になり鈴成等案内なし、金次郎先きに玉笹、腰元四人小姓附添ひ、鳥居の内へはひる。跡に皆々

思入あつて助太郎慶之助を眞中の床几へ掛けさせ

助太　慶之助様、嘸御殘念にござりませう。

慶之　いや〳〵、何も殘念には思はぬぞ。

助太　御殘念に思召さぬは御存じなきゆゑ御尤も、只今吉良が申すことようお聞き遊ばしませ。今を去ること八年以前、殿のお側に隨ひしお菊どのには鎌倉表の御愛妾、又お貞さまは御本國、お二人とも同年に御前のお胤をお宿しありしが、その翌年あなたには二月二日の御誕生、又金次郎さまも同じ月のしかも七日のお生れゆゑ、御同年のお二方さまは順を申せばあなたが御次男、金次郎さまは御三男、あちらこちらになるべきなれど、あなたはお國で御出生、金次郎さまは鎌倉にてお生れゆゑに足利家へ、出産屆けが先きになり、遂にはかゝる逆順にて御三男のお屆けせしと、お聞きなされたその時のお貞さまの御心中御推量申せしに、又候この度あなたをば御家來並との仰せ出し、あまりと申せば片落しの御沙汰と思ひ口惜しく、御存じないを知りながら只今のやうに申し上げてござりまする。

腰五　それと申すもお菊さまが、有ること無いこと樣々と、御前さまへ讒言して、

同六　御自分ばかりよいやうに、舌の劍で言ひ廻す、利發な辯に受けもよく、

同七　御家老中の御贔屓が、多くあるので此の頃では、おつしやり次第の上の御樣子。
同八　それゆゑ眞實の御次男を、御家來分になされましたも、深き企みのあること、
同五　あたくし共は、
四人　存じまする。
助太　禍ひは下より起るの譬へもあれば、想像にて迂濶なことは申されぬが、よしお菊さまが讒言なすとも、理非明白なる殿樣ゆゑ御採用遊ばす謂れなし、されば一圓合點が參らず、日々にお案じ申すのみぢやて。
腰七　さぞ御殘念にござりませうが、今暫くの其の間、
助太　御辛抱を、
五人　遊ばしませ。
慶之　いや〳〵、決して悔しうは思はぬぞ。
助太　すりやお附き申す我れ〳〵が、斯程までに思ひましても、あなたは悔しうござりませぬか。
慶之　我が爲を思ひくれるなら、家來同樣そち達も此の慶之助を朋輩ぢやと、思うて居ねば父上の仰せが反故になるであらうぞ。

助太　おゝ、ても感心な仰しやりやう、まことに恐れ入りました。

トばた〳〵になり、鳥居の内より以前の禰宜の一出來り、

禰一　はッ、只今御祈念始りますれば、慶之助さまにもお越しあるやう、若樣よりの仰せ付けにござりまする。

助太　すりや、金次郎さまよりお迎ひとな。

慶之　遲刻いたしては相濟まぬ、少しも早う、

助太　左樣ござらば、

五人　若殿さま。

慶之　いや、若殿とは誰がことなるぞ、我は家來の慶之助なるぞ。

助太　恐れ入つてござりまする。

慶之　どれ、參詣いたさう。

助太　去年の春まで乳房をば、お慕ひありしに引替へて、

腰五　ても、御利發な、

四人　慶之助さま。

助太　これでお年がお七ッとは。前代未聞な、（ト誇り塵を拂ふた道具替りの知らせ）、お子樣ぢやなあ。

ト感心の思入、慶之助早く行かうといふこなし、大拍子にて此の道具廻る。

（多賀家御殿の場）――本舞臺一面の廣間、正面梅の模樣の金襖、上下折廻し同じ襖、同じく大廣間をおろし、ずつと上下杉戸の見切り、總て多賀家御殿の體、爰に書院火鉢を据ゑ傍に民谷宗七郎上下一本さしにて控へ、上手に諸士名越瀧右衞門、川村慶次、下手に水野平十郎、松井彌三郎何れも上下一本さし、ずつと下手に雲才、鈍才、茶道にて控へ居る、調べにて道具留る。

瀧右　今日は上巳の佳節とあつてお奧にてはお雛祭の御祝儀、家中一同總出仕、各にも御苦勞千萬にござりまする。

平十　こは恐入つたる其の仰せ、抑　元旦の御祝儀を年の始めといたし、それより月々再三の總出仕はござれども、

慶次　端午、七夕は暑にをかされ、夏負けいたす手前などは、儀式のお席が思ひでござる。

彌三　又重陽は晩秋の陰月ゆゑに物淋しく、その外師走の御煤掃ひ、

宗七　終日寒さに閉ぢられて、生得多病の拙者などは、持前の疝癪募り甚だ困惑仕つれど、

雲才　花の盛りの三月三日、雛の節會は陽氣にて、殊に今日は日和もよく、

鈍才　非番なれどつくねんと、宅にも居られぬ花の頃、氣が浮き〳〵といたしまする。

瀧右　何さま流れの邊りにて曲水宴の戯れや、四方の眺めも長閑くて心も動く時候ゆゑ、ついうか〳〵と長の日を時刻も忘れて、いや、餘事の談話に身が入りしが、最早正午に程近し、して今日のお膳番は誰でござるな。

平十　今日のお膳番は、野田永太郎どの。

慶次　毒味役は唐澤四郎兵衛どのにござりまする。

宗七　御膳の刻限遲刻いたせば、お坊主衆ちよつと御膳所へ、

雲才
鈍才　畏まりました。

永太　あいや、おいでには及びませぬ。

四郎　只今持參、

兩人　仕つりまする。

ト本調子の合方になり、下手より永太郎上下一本ざしにて、帛紗を掛けし掛盤の膳を持ち、四郎兵衞同じく上下一本ざしにて二の膳を持ち出來り、下手へ控へ、

永太　民谷氏には配膳のお役、御苦勞千萬に存じまする。
四郎　常と替りし作節の御膳、いざ御檢分、
兩人　下さりませう。
平十　定めし今日の御料理は、
慶次　佳肴珍味を調進ゆゑ、
彌三　一品毎に嘸かし結構、
瀧右　見事な膳部でござりませうな。
永太　して御相役たる、
四郎　大月氏には、
宗七　相役大月源藏どのは、御前のお召しで有合さねば、某代つて檢分なさん。（ト宗七郎覆面をなし、膳を一順見て、）して、お毒味はいたされしか。
四郎　拙者鬼役仕ッてござりまする。
宗七　然らば直に御配膳のいたすでござらう。
大月　その御膳、暫くた待れよ。

宗七　あの聲は、

皆々　大月氏。

ト張扇の合方になり、上手より大月源藏上下一本ざしにて、刀を持ち出來り眞中に住ひこなしあつて、

大月　今日の總出仕、各方にも御苦勞千萬、先刻より蘇鐵の間にて御前の傍ら多忙ゆゑ、存じながらにお膳部の檢分遲刻いたせし段、何れも御容赦下されい。

宗七　これは／＼御挨拶恐れ入りまする、必ず左樣とお察し申し、只今拙者が下檢分を、貴殿を兼て仕つてござりまする。

大月　民谷氏が御念を入れられ、御檢分なされしとあるからは、再檢分にも及ばねど役目の表、拙者もこれにて檢分いたさう。

永太　念の爲めゆゑ大月氏、

四郎　いざ、御檢分下さりませ。

ト膳を直す、大月思入あつて一順見廻し、汁椀の蓋を明け、ぢつとこなしあつて、

大月　お坊主衆、謙齋どのは居らるゝか。

雲才　はツ、お次に控へ居られまする。

大月　これへお招ぎ下され。
鈍才　はッ。謙齋老々々、大月様のお召しでござる。（ト下手より謙齋坊主鬘十徳裝、醫者の打扮にて出て、）
謙齋　はゝはッ、御用でござりまするか。
大月　御膳の檢分御立合下されい。
謙齋　はッ、御免。（ト膳の側へ控へる。）
大月　それにつき、早速ながら先づこれを御檢分下されい。
謙齋　はッ、（ト汁椀の中を見て、）これは、たゞならぬ泡立でござりまする。
慶次　なに、泡立がござるとは。
瀧右　若しや、お椀に。
大月　これ、してお毒味はめされたか。
四郎　野田氏が見らるゝ前にて、毒味いたしてござりまする。
永太　則ち拙者、篤と見屆けましてござりまする。
宗七　別條なしと存ぜられましたが、何か粗相の見落しにてもござりましたか。
大月　されば、拙者には合點が參らぬ。こりや此の儘にては差上げられぬ。

謙齋　早々是れをお盛替なされませ。
永太　唐澤氏が鬼役なし、御配膳の民谷氏が検分濟みし、此のお膳部を、
四郎　盛替へよと仰せござるは、貴殿より、
宗七　我々一圓。
三人　合點が參らぬ。
謙齋　でも、たゞならぬ汁の泡立、
大月　早々椀を盛替へられよ。
永太　すりや、お膳部に毒ありと、
四郎　大月氏には思さるゝか。
大月　毒があるとは申さねど、身不肖ながら検分の役、念には念を入れねばならぬ、盛替へるが御不承知なら、今一度毒味めされよ、それが何より此の場の潔白。
四郎　鬼役毒味は手前の役目、何ヶ度にても仕つる。
永太　さはさりながら、大月氏、お次の間にてわれ〳〵が篤と検分いたせしを、お椀の泡立毒ありと言はぬばかりの御懸念ゆゑ、

四郎　再び手前が毒味いたし、何事もなき其の時は、
宗七　貴殿は如何、
三人　めさる丶な。
大月　左樣に手堅く言はれては源藏甚だ迷惑いたす。（ト當惑のこなしあつて氣を替へ、）是非がござらぬ、其の時こそは目違ひなれば、此の源藏を如何樣とも、御隨意にめされたがよい。
永太　然らば三人、
三人　御一緒に。
ト源藏始め皆々三人へ目を附けて居る、此の內弁へ汁をあけ、三人よろしく吸ふ。
大月　各吟味いたされしを、斯く再吟味いたすのも、殿御大切と思ふゆゑ、必す他意なきことなれば、只今申せしことゞもを、決して心にさへられず、共々忠勤お勵み下され。
トこれにて三人詰寄り、
永太　さ、大月氏、再度の毒味いたせしが、
四郎　別條なければ約せし通り、
宗七　我々共の隨意次第に、

永太　いよ〳〵貴殿は、

三人　ならるゝか。

大月　はて是非に及ばぬことでござる。（ト此の内三人思入あつて一時に苦しみ血を吐く。皆々びつくりなし、）

謙齋　さてこそ、大月氏の見咎めし如く、

慶次　膳部に毒が、

皆々　ありしよな。

大月　こりや雲才、一大事出來ゆゑお立會下されと、詰所へ參つてさう申せ。さゝ早く〳〵。

雲才　畏つてござりまする。
鈍才

ト立掛る。此の時上手より浦井主膳、上下大小少し更けたるこしらへにてつか〳〵と出來り、

主膳　あゝ、こりや〳〵、知らせには及ばぬ、お次にて委細樣子は承はつた。

大月　すりや浦井氏には、お次にて委細をお聞きなされしとか。

謙齋　されば、委しく申すにも及びませぬが、お目出度き上巳の佳節に、怪しからぬ儀が出來しました。

主膳　何さま毒氣に中りし體、さりながら常に忠勤怠りなき野田唐澤の兩人が毒味めされて別條なき、此お膳部に毒ありとて、再び三人毒味なせば、忽ちかゝる爲體、ふむ。（ト不審の思入あつてよろし

く仕ふ、」委細はあれにて承知せしが、何を申すも火急の椿事、して大月源藏どのには、如何いたして此のお膳部に、毒あることを認められしぞ。(ト大月へ思入、大月ぎつくりこなしあつて、)

大月　されば、お聞き下され。一順膳部へ目を通しお椀の蓋を取りし所、常に替りし色合に泡立あるゆゑ不審に存じ、これなる横田謙齋へ直に檢分させし所、全く毒氣これあると認めしゆゑに某も、毒あることを知つてござる。

謙齋　斯樣申せば謙齋が、何か廣言を吐きますやうにござりまするが、下世話にも申す餅屋は餅屋、一見見ても毒あることを察しまするが醫の職業、目で見ることが分らねば、上部で知れぬ腹中の病の療治は出來ませぬて。

主膳　すりや、謙齋が申し立てとな。(ト大月へ思入ある、大月も思入あつて、)

大月　察する所藩中に、惡事を企らむ者あつてか、何にもいたせ卽刻に、料理方を召捕られしよ。

謙齋　それ、各、根島宮原兩人を。

諸士
四人　心得申した。

甚平　あいや、其の者共は甚平が、直に繩掛け、只今それへ。

主膳　なに、中澤氏が召捕りしとか。

ト合方きつぱりとなり、下手より中澤甚平上下一本ざしにて料理方の根島新八、宮原勘藏の兩人へ繩を掛け、引立て出來り、

甚平　はツ、早速引立て參つてござる。

新八　吟味に吟味を仕り、調進なしたるお膳部に、

勘藏　如何いたして毒ありしか、不思議なことで、

兩人　ござりまする。

新八　かゝることになりましたは、第一番に我々へお疑ひは掛りませうが、元より上をお恨み申す譯もなければ勿體ない、毒害いたさう謂れはござりませぬ。

勘藏　今日妻子が樂々と手足を伸すも殿樣より、御扶持を頂戴いたせばこそ、御高恩ある上へ對し何者に頼まれたとて、斯樣な惡事を、

兩人　いたしませうや。

主膳　その申し口は尤もなれど、お手前達が調進せし膳部に過ちあるときは、則ち役目の越度ならずや、知らぬとばかり申しては、小祿たりとも御扶持を賜はり、今日妻子を安泰に養ひ居るは忝けないと、只今申せし詞とは、齟齬せし樣に思はるゝが、根島、宮原如何思ふや。

新八
勘藏　はゝはッ。
甚平　默して居るは怪しき兩人、此の上は各のお手を借り、立會の上拷問いたさう。
新八　假令拷問なさるゝとも毛頭我々存ぜぬこと、然し只今浦井樣が、役目の越度と仰せあるゆゑ、
勘藏　お疑ひの晴れるやう、各樣の面前にて、我々共も諸共に、お毒味いたして申し譯。
新八　何卒これなるお席にて、
勘藏　我々二人へお毒味を。
大月　あいや、其の儀は相成らぬ。同類三人拔き差しならず、毒に中つて相果つれば、叶はぬこと、其の方達も、覺悟いたす所存であらうが、斯程の事を企つには長たるもの、無くては叶はぬ、何者の企みなるか、其の本人の知れるまでは、容易に一命捨てさせられぬ。
新八　すりや、お毒味は、
兩人　叶ひませぬか。
大月　白狀さすまで、命は斷たぬぞ、
永太　一命捨つるは殘念ながら、これを御前へ差上げなば、お家の大事に及ぶところ、
四郎　殿に代りて相果つれば、今日の御難は免るれど、かゝる凶變ござつては、

宗七　油断ならざる家中の形勢、何者の仕業なるか。御両所、

永太
四郎　民谷氏、

二人　残念でござる〳〵。（ト無念の思入にて、三人宜しく苦み落入る。此の時九ツの時計鳴る。）

甚平　只今打ちしは正午のお時計、

主膳　最早の時刻にあたれども、斯かる變事で延引なせば、この趣きを申し上げん。

大月　御前にも嘸お待兼ね、只今至急に御膳の用意。新に申し附けますれば、御前よろしう。

主膳　然らば、中座御免下され。

大月　お構ひなくとも。御前へお早く。

主膳　左樣ござらば大月氏。

大月　浦井氏。

主膳　はて、審しきことぢやもぢやわえ。

ト合方きつぱりとなり、不審の思入にて上手へはひろ。跡に皆々こなしあつて、

甚平　して、それなる兩人は、

大月　疑ひ晴れるそれまでは、禁獄いたさせ然るべし。

新八　すりや、我々は、

勘藏　禁獄とな。

謙齋　死骸は如何なされまする。

大月　おろそかならぬ一大事、元老方と評議に及び兎も角も仕つらん。たゞ憎きはお家を覘ふ惡人共、篤と詮議を遂げたる上にて、根を斷つて葉を枯らさん。

甚平　その手續きは此の兩人。

大月　あいや、他へ聞えなばお家の瑕瑾、事穩便に、（ト膳を置き替へるを道具替りのしらせ、）祕すべし〳〵。

ト此の模樣早舞にて、よろしく道具廻る。

（多賀家奧殿の揚）――本舞臺四間通し常足の二重、塗框二重上手に九尺の床の間、是れへ古代の曲水を書きし軸を掛け、此の前に桃櫻を入れし大花瓶、是れに續き蘇鐵を書きたる金襖、平舞臺上下蹴込み面に白木の高欄、この向う左右とも櫻の盛りを見せし庭の書割、ずつと上下杉戸の見切、花道の揚幕へ杉戸を出し、舞臺花道とも薄縁を敷詰め、總て多賀家奧殿の體、二重に多大領羽織着流し殿のこしらへにて褥の上に住ひ、武運長久と記したる祈念の札を前に置き、後に以前の小姓二人刀を持ち控

へ居る。脇息、鼻紙臺などよろしく並べ、平舞臺下手に以前の主膳控へ居る、誂への合方にて道具留る。

大領　主膳よき所へ參つた、家例に依つて上巳の佳節に、白山明神へ予が代參として、金次郎を遣はせしが、只今歸邸いたしたれば、祈念を籠めし此の札を、神前へ供へてくりやれ。

主膳　畏つてござりまする、何さま御前には日頃より白山明神を御信仰遊ばされ、卽ち今日金次郎樣を御代參にお立て遊ばせしが、實に神國とは申しながら神の利益の著しきは、爭はれぬものでござりまする。

大領　はゝあ、何か其方思ひ當る事にてもあるや。

主膳　そは別儀にもござりませぬが、今日御前にはお命拾ひを、遊ばしましてござりまする。

大領　なに、予が命を拾ひしとは、如何な仔細ぢや。

主膳　先刻御膳を差上げんと、膳番毒味相濟みて、配膳の者立會の上檢分なせしお膳部に、毒氣ありて鬼役せし者兩三人、只今その席に於て相果てましてござりまする。

大領　むゝ、すりや予が膳部に毒を仕込みありしとか。

主膳　まことに危いことにござりました。

大領　そは容易ならぬことぢやが、してそれに毒ありと認めしは、誰なるぞ。

主膳　大月源藏にござりまする

大領　おゝ左樣か、彼は幼年より衆に勝れ宏才深智の器量者ゆゑ、予が傍にて目に掛けおきしが、意に叶はぬことを覺えず、されば屢々大功多く、今側役を勤めさするが、時折舌を卷かせ居るて、又今日も毒を見出し、予が危難を救ひしは、彼れが手柄と申すもの、主膳源藏はよい奴ぢやなう。

主膳　はツ、恐入つたる其の仰せ、源藏斯くと承はらば、大慶限りござりますまい。これと申すも信仰したまふ全く神の御加護ならん、まことに以て御前樣には、御高運にゐらせられまする。

大領　早速源藏を、これへと申せ。

主膳　はツ。（ト立掛る、此の時花道にて、

大月　あいや大月源藏、只今それへ。

ト合方きつぱりとなり、花道より源藏先きに、甚平以前の助太郎謙齋諸士四人附添ひて出で、皆々花道へ控へこなしあつて、

只今浦井主膳より、大概言上仕つりしが、測らざる儀出來いたし、御膳延引仕つり恐れ入りましてござりまする。

甚平　只今更にお膳部を、調進なして供へますれば、

助太　遲刻の段は幾重にも、お許しあつて今暫く、

謙齋　御猶豫願ひ、

皆々　奉ります。

大領　予も空腹にあらぬゆゑ、さのみ急くには及はぬぞ。何は兎もあれ大月始め、皆の者進め〳〵。

大月　御免下しおかれませう。

ト皆々舞臺へ來り、平舞臺へよろしく居並ぶ、大領思入あつて、

大領　扨大月、今にはじめぬことながら、よくぞ注意いたしくれた。今日の大功忘れはおかぬぞ。

大月　こは勿體なき其の仰せ、膳部の汁に毒ありと見極めましたは是にある、醫師謙齋が手柄の水上、淸きを以て調進せしを疑惑の生ずる謂れなけれど、念には念を入れねばならぬと心に留めて拙者めが、今日檢分いたせしところ、汁に不思議な泡立ちあるは心得難く存ぜしゆゑ、謙齋老に檢分させしに、正しく毒氣ある樣子と、申す詞に今一度調進あれと申せしを、配膳氏谷膳番野田、毒味役の唐澤四郎兵衛詞を揃へて申すには、只今檢分なせし上毒味いたせし此の膳部、毒氣のあらう謂れなしと、既に爭論に及びたれど一大事のことなるゆゑ、更に調進し直すか但し今一度毒味あるかと、詞詰めに是非なくも三人共毒味なし、立所に吐血して則ち氏谷、野田、唐澤死去いた

しましてござりまする。

大領　すりや毒味なして相果てしは、野田、唐澤、民谷なりしか、むゝ。まことに以て予が仕合せ、そちが心附かざればその膳部の毒に中り、予が最期いたす所ぢや、危ふいことでありしよな。

主膳　拙者などでは心附かぬが、才智勝れし大月氏、まことに感心いたしてござる。

大領　して、今日の膳部を料理いたせしものは如何せしぞ。

甚平　はッ、料理番根島新八並びに宮原勘藏始め、

助太　お膳部掛り一同に、直さま禁獄申し附けましてござりまする。

主膳　配膳毒味の者共も一味の内か存ぜぬが、家中のうちに悪計を企む輩のあるは必定、油斷のならぬことでござる。

大月　これより毎夜宿直をなし、其の悪計を企む者を日ならず見出し我が君の、お心易くいたし申さん。

大領　はて潔よきその詞、源藏過分に思ふぞ。

大月　はゝ、恐れ入り奉りまする。

大領　さいつ頃白山祭典の砌り、予が馬上にて參詣せしに、街の者共酒興の上にて狼籍いたせし事ありしが、臣下の者が一命賭け難なく歸邸いたす折、予が持病頻りと發し、合藥たる紫雪圓を服薬せ

んと思ひしに、用意の藥たしなきゆゑ當惑いたす其の折柄、早くも馳せ附け參りしは長玄といひし此の源藏、我が詞はなけれども、紫雪の壺を要害に携へしは、若年者には天晴機轉、その賞として五十石へ五百石加增申し附け、側小姓に取立て得させ、元服の祝ひ序に、長玄改め大月源藏と名乘らせしが、予が目に違はず流石は忠臣、その後數度の功あれど改め賞を與へざりしが、今日の大功は拔群の手柄ゆゑ、源藏そちに、五百石加增申し附くるぞ。

大月　はツ、させる功なき拙者めに、五百石の御加增とな。

甚平　何といづれも、お聞きありしか、以前は親子へ五十石の僅かな高も機轉の功にて、

助太　五百石の御加增賜はり、お側小姓に御出世とは、前代未聞と存ぜしに、

謙齋　又候今日拔群なる、大功を成されしゆゑ、

平十　お褒めのお詞頂戴あつて、五百石の御加增とは、

彌三　夢のやうなる御立身、斯うして見ると人間は、

慶次　才智のあると無いのとは、大した違ひなものでござる。

瀧右　五百五十石へ五百石、合せて千五十石とは、

甚平　お羨ましき。

七人　ことでござる。

大領　どうぢや源藏、悦ばしいか。（ト此の内源藏思入あつて、）

大月　はッ、忝なき仰せながら、此の御加增は、平に御免を蒙りたう存じまする。

甚平　なに、御加增を、

皆々　御辭退とな。

大月　御辭退申すその仔細は、斯樣でござりまする。家中一般御存じゆゑ改め申すに及ばねど、元拙者は身分も輕き足輕長次兵衛が悴にて、只今御前が仰せありし長玄と申す茶道上り、殿のお惠み蒙りて次第に立身出世なし今御近習を勤め、五百五十石頂戴いたすは、まことに分に過ぐるゆゑ蔭にて譏る者多し、猶この上に五百石御加增頂戴仕らば、人の譏りは如何ばかり、我君の御厚情は有難く頂戴仕りまするが、御加增の儀は幾重にも、御高免を願ひまする。

大領　何さま、その身足輕の悴たりし、其の古を忘却せず、加增の祿を辭退いたすは、近頃殊勝の至りながら、功ある者を賞せざれば、主たるもの、道立たず、卑賤に出し其の方ゆゑ同役共への遠慮とあれば、今日よりして官名を改め、大月（トちよつと考へ、）藏人と改名させ、用人格に登用すれば、辭退いたさず受けをせよ。

大月　はゝ、返す〴〵も冥加に餘る其の仰せ、有難うは存じまするが、然し餘り勿體なく、

主膳　あいや其の御辭退は却つて恐れ、君の御厚意速かにお受けめされて、有難き御恩を永世おもはれよ。

大月　ても餘りなる。

助太　はて貴殿の辭退は、只今も仰せありし以前の身を顧みてのことならんか、かゝるお惠みあるといふも、則ち臣下を勵ます御加增、

甚平　たゞ速かにお受けあらば、御身に一統あやかるやう、忠勤を勵み惡計企つ者ありとも、自と正路を守るに至らん。ぢやに依つて勵みの賞は賞、お受けあつて然るべし。

大月　ぢやと申して。

甚平　はて、強ひて御辭退めされなば、殿のお心をもどく所存か。

大月　ではござらねど、

甚平
助太　然らばこの場で、お受けめされ。

大月　はゝ、御厚意の段有難く、頂戴仕ッてござりまする。

大領　おゝそれにて予も滿足。こりや〳〵皆の者、大月を祝せ〳〵。

皆々　はツ。

甚平　大月殿には、五百石の御加增賜はるのみならず。

助太　藏人殿と改名あつて、

謙齋　今日よりは、

皆々　御用人格。

大月　何れもお悦び下され。

謙齋　大慶至極に、

皆々　存じまする。

大領　扨沛井、そちが進めに大月も加增異議なく受けしゆゑ予に於ても滿足ぢやて。それに附き、ちとそちに聞きたいのは、先年笠原武太夫が娘政尾を抱へ、馬術を催したことがありしな。

主膳　御意にござりまする。

大領　その折奧へ小姓に出で、又その後不快に依つて暇を取りし、そちの娘なみは當年何歲に相成るぞ。

主膳　はツ、當年二十一歲になりまする。

大領　どうぢや、當節は健かな。

主膳　有難きお尋ね、漸く此の頃達者になりましてござります。
大領　それは重疊ぢや、まだ何れへも嫁さぬか。
主膳　はツ、相應な縁これなきゆゑ、未だ宅に居ります。
大領　宅に居るとあれば猶重疊ぢや。こりや大月、そちは無妻ぢやな。
大月　はツ、御意にござります。
大領　少し年は違へども互ひに未だ縁なくば、これ主膳、そちが娘なみを大月へ遣せ、予が媒介いたしとらすが、何うぢや。
主膳　はツ。
甚平　まことにこれはよい釣合、大月氏にもお家柄の、浦井氏との御縁組、嘸大慶なことでござらう。
助太　又浦井氏にも當時御前のお覺え目出度く、大功あるとは申しながら、今日一時に五百石御加增賜はる大月氏と、
謙齋　御縁組をなさるゝは、お娘御のお仕合せ。
平十　殊更御前のお指圖なれば、
彌三　何れを兼ねる所もなく、

慶次　双方劣らぬ内裏雛、
瀧右　此の上もない、
七人　御縁でござる。
大領　大月、不足はあるまいな。
大月　はツ、重ね〴〵の身の仕合せ、大慶至極にござりまする。
大領　浦井、そちも嬉しく思ふであらうな。
主膳　はツ。
大領　但しは不承知なるか。
主膳　全くもつて、
大領　すりや、承知なるか。
主膳　はツ、委細承知仕りまする。（ト餘儀なく受けるこなし。）
大領　すりや、双方共に悦ばしいな。
主膳　はツ。
大領　予に於ても、（ト思入あつて立つた木の頭）悦ばしいぞよ。

ト兩人を見て大領につたり思入、大月はしめたといふこなし、主膳はほつと思案の思入皆々双方へお目出度う〳〵と口々に言ふ、此の模様太鼓入り能の囃子にてよろしく、

ひやうし　幕

二幕目

浦井主膳宅の場

〔役名〕＝小田大炊、浦井主膳、お波兄左源太、若黨曾平治實は乳母おさがの倅、吉良助太郎、名島瀧右衛門、川村慶次、若黨、中間。娘お波、乳母おさか、腰元おたみ、其他〕

（主膳宅の場）＝本舞臺三間常足の二重、上手九尺障子屋體、正面墨畫山水の襖、下手同じく九尺庇附玄關の上り口、この前式臺正面紗綾形の襖、これより上手の見切塗骨障子、例の所枝折戸四ツ目垣にて見切り、平舞臺の下手黑塀、この内より櫻の立木、總て主膳邸玄關より奧を見たる體、式臺の外に瀧右衛門、慶次羽織袴大小家中侍の打扮にて立掛り、式臺に半藏着附袴若黨裝にて手をつかへ居る。此の見得調べにて幕明く、

半藏　御用の趣き、お取次いたしませう。

瀧右　いや〳〵別に用事の向きではないが、御主人御在宅でござるなら、

慶次　今日上巳の佳節ゆゑ、御祝儀申し入れんと存じ、

瀧右　同伴いたして、

兩人　參つたのぢや。

半藏　未だ主人には御殿よりお退りにござりませぬが、若旦那には御在宅ゆゑ、先づあれへお上り下さりませ。

瀧右　然らばちよと御子息へ、我々兩人參つたと、

慶次　お取次の下されい。

半藏　はツ、畏つてござります。（ト正面の襖を明けてはひる。）

瀧右　いざ、川村氏。

慶次　先づ、お先きへ。

瀧右　御免下され。

ト合方調べになり、兩人玄關へ上る。これと一緒に奥より左源太、好みの鬘裃一本ざしにて出來り、下手見切りの障子を明け、

左源　これは御兩所には、ようこそ前入來。先づこれへ、お通り下され。

瀧右　いや、式日の御祝儀を申し上げるのみ、
慶次　お玄關にてよろしうござる。
左源　いや〳〵、餘りそこは端近ゆゑ、先づこちらへ。
瀧右
慶次　然らば御免下され。（卜兩人二重へ通り、）
瀧右　扨今日は上巳の佳節、御親父樣を始めとして、
慶次　御一統へ御祝儀申し、
兩人　入れまする。
左源　上巳の式日、御同慶に存じまする。（卜互ひに祝儀を述べ、）
瀧右　して御親父には御殿より、未だお退りにはござらぬとな。
左源　篤に歸邸いたす筈を、只今以て戻りませぬゆゑ、實は心配いたしてござる。
慶次　然らば未だ其許には、今日御殿の騷動を御存じござらぬよな。
左源　いや、其の儀は先刻隣家より、薄々話しに承はりしが、容易ならざることでござる。
慶次　お聞き及びとあるからは改め申すに及ばぬが、此の騷動の其の中にて仕合せなるは大月殿、お膳番より差上げたる毒を見出せし功により、御加增ありしと申す噂。實に羨ましいことでござる。

瀧右　それに引替へ不便なは、身の潔白を立てん爲め毒味いたして其の場にて、苦痛に堪へで死去したる三人のお料理方、お膳部掛りの女中方まで、皆それ〴〵に縄目を受け、嚴しき詮議に及ぶといふこと。

慶次　實に噂に聞きしばかりで、

兩人　驚き入つたことでござる。

左源　斯く泰平の世の中ゆゑ、互ひに心を許せしところ、上巳の佳節に御殿にて御前へ毒を差上げんと企みし者のあると申すは、油斷のならぬことでござる。

瀧右　これにつけても殘念なは、豫て朋友共と申し合せ、隅田の櫻を眺めながら瓢の酒の花筵、五百題の燒直し、又春燈の二度の勤めで、夕立やなど丶名句を認め、

慶次　花の節句の樂しみに、彼の芳原(吉原)の夜櫻へ趣く積りで居つたるも、上のお取込みに一家中、謹愼なして他出も出來ず、

瀧右　あつたら花を、

兩人　見そこなひまするて。

左源　家中同志とは事替り、お上の混雜一方ならず、據ろない儀でござる。

慶次　何はしかれ今兩三軒、祝儀を申し入れねばならぬ、
瀧右　御親父御歸宅あられなば、よしなに御傳言下されい。
左源　委細承知いたしてござる。（トこれにて兩人玄關より式臺へ下りる。左源太見送り、）左樣ござらば、御兩所には、
兩人　これにてお暇いたすでござる。（ト合方調べにて兩人下手へはひる。）
左源　今日上の騷動も、隣家の噂のみゆゑと、左程にも思はざりしが、今の二人が話しでは容易ならざる一儀なるが、まだ父上のお歸りなきは、こりや惡人共の御詮議を、共々なさると見えるわえ。

トぢつと思入、これより床の淨瑠璃になり、

〽春の日の空も長閑に山笑ふたとへも餘所に物思ひ、心の底の奧深き當家の主人浦井主膳、道は一筋忠孝の、教へを守る曾平治が、附き從ひて來りける。

トよき程に、花道より前幕の主膳麻上下大小にて思案のこなし、後より曾平治袴股立大小若黨裝にて、主膳の草履を持ち附添ひ出來り花道に留り、

主膳　只今道にて聞きたるは、ありや何時であらうの。
曾平　あれは八つの廻りにござりまする。

主膳　正午に退出いたす筈を、思ひの外暇どつたわえ。（ト風の音になり、日覆より櫻の花散る。）
曾平　まだ咲き揃ふたのみなるに、お庭の櫻がもう散りまする。
主膳　（思入あつて、）花の盛りは、短かいものぢやなう。
〽何か思案もあらし吹く、花の心の汲みかねて玄關先きに進み寄り、
ト主膳思案のこなし、曾平治心に懸々思入にて、兩人舞臺へ來り式臺の際にて、
曾平　お歸り。（ト呼ぶ、左源太式臺へ出迎ひて、）
左源　父上、お退りが殊の外、お遲うござりましたな。
主膳　定めし噂に聞いたであらうが、御殿に變事出來なし、それゆゑ遲刻いたしたわえ。
ト これにて玄關より二重へ通る、此の内奧よりお民下女の裝にて服臺へ羽織を載せしを持ち出來り、
お民　只今お退りにござりまするか。
主膳　娘は宅に居らざるか。
お民　はい、先程お隣の御新造さまより、初の節句のお雛樣を、お孃さまに御覽に入れるとお迎ひが參り、乳母のさがをお連れなされて、拜見においで遊ばしました。
主膳　おゝ、さがゞ同道いたせしとか。

お民　はい、左様にござりまする、

ト此の内主膳上下を取り、お民羽織を掛ける、曾平治は平舞臺上寄りに褥を敷く、左源太高坏にて茶を出す、主膳褥の上に住ひ、

主膳　最早そちに用事はない、次へ參つて控へ居よ。

お民　畏りました。

〽お次へ立つて行く跡に、主膳はあたり見廻して、

トお民奥へはひる、主膳思入あつて、

主膳　其の方達は今日の、御殿の樣子を承はりしか。

左源　先刻上巳の祝儀に參りし名島川村の兩人より、薄々噂は承はりしが、委しきことは存じませぬ。

曾平　わたくしとても供待にて、評議まち〳〵いたせども、下司のことゆゑこれごと申す慥な事を存じませぬが、

左源　如何なる譯でござりまするか、

曾平　お聞かせなされて下さりませ。

主膳　曾平治は他の下部と違ひ、乳母が悴に性質も忠なる者ゆゑ御殿の始末、只今是れにて聞かする間必ず他言いたすまいぞよ。

曾平　其のお詞ばかりでも、何の他言がいたされませう、必ずお案じ遊ばしますな。

主膳　それにて我も安堵せり、兩人近う。

曾平　はあゝ。

〔膝摺り寄すれば、浦井主膳、
ト兩人前へ進む、主膳思入あつて、

主膳　今日御殿でありし次第、こりや、よツく承はれよ。(ト床のメリヤスになり、)多賀家に於て忠臣と音に聞えし野田、唐澤お膳番の役目ゆゑ、お毒味なして調へたる其のお膳部に聊かにても毒のあらう筈なきを、當時檢分の役蒙る成上りの大月源藏、お汁の椀の蓋を取り、常に替りて泡立しは正しく内に毒氣ありと、申せしゆゑに掛りの者左樣な事はあるまじと申し張りたる其の所へ、豫て佞人と噂ある醫師謙齋進み出で、正しく汁に毒ありと一人が申せば其の尾に附き、彼等に附添ふ者共は皆口々に言觸し、それに立合ふ膳番、配膳、毒味役の三人も、只今お毒味いたせし品に毒氣のあらう謂れなし、こりや大月殿の檢分違ひと言ひし詞に憤り、兎にも角にも今一應毒味

いたすが潔白なりと、實に尤もなる大月が、詞に是非なく三人共再び毒味なすがいな、立所に吐血なし、苦痛にたえ兼ね虚空を摑み、忽ち變る面色に、何かは以てたまるべき、可惜家臣を三人共その場で變死いたさせしぞ。

左源　たゞ噂のみに承はり虚實の程も分らざりしが、委しきお話し承はり、其の場で死せし三人は不便なことはいたしましたが、其の意を得ざるは大月氏、お毒味濟みしお汁の内に、一人遮り毒氣ありと申し出せしも不思議の一つ。

倉平　深い樣子を知らぬ者でも、どうも合點の行きませぬは、見出せし二人は佞人と噂の高い大月、謙齋、こりやお調べをせり詰めたら、見出した者が慥に曲者。（ト大きく言ふを、）

主膳　こりや、靜かに申せ。（ト四邊へ思入あつて、）其の方とても左樣に思ふか、こりや理の當然のことなるが、それを殿には大月を御贔屓ゆゑに今日も、其の手柄を賞せられ、五百石の御加増に名も源藏を藏人と改め、跡お膳部掛りの者共は男女ともに縛められ、きびしき詮議仰せ付けられ、多人數困難いたす中を彼一人の立身出世、我羨むにはあらざれど數代續きし多賀の大領、總明叡智の聞えありしも斯かる依怙の振舞あつては、先君の尊靈へ濟まざる儀と、ほとんど心痛いたして居るわえ。

〽忠義にこりし武士が鐵石心の血の涙、聞く兩人も心を痛め、

ト主膳俯き愁ひの思入、此の内左源太曾平治、主膳の顏を見やり心遣ひの思入にて、

左源　父上の思召し承はつて某も、共に心痛いたしまする、其のせゐかして今日は、常と異なる御血色。

曾平　御心痛遊ばすが何よりお體の毒と申せば、御身に掛らぬことなれば餘り御心配なさらぬやう、お心易うなされませ。

〽樣子知らねば曾平治も共に諫める眞心を、不便と思ひ打ちうなづき、

ト曾平治心配なし力を附ける。主膳思入あつて、

主膳　悅びは共に悅び、又悲しみは共に悲しむ、其の方等の心底我に於ても滿足なるが、爰に一つの難儀あつて旣に面に出づる程、我が胸中を痛め居るわえ。

曾平　お顏の色の常ならぬをお案じ申すばかりにて、深い樣子は存じませぬが、此の曾平治に叶ひしことなら、假令身を粉にいたすとも、お手助けに相成る心底。

左源　其の思召しを父上樣、どうぞお話し、

左源
曾平　下さりませ。

主膳　さあ、其の一つの難儀と申すは、娘波が身の上ぢや。

左源　なに、妹が身分にかゝはることゝは、

曾平　如何なることでござりまするか。

〽様子いかにと兩人が案じる此方に乳母娘、蟲が知らすか戻り來て門にたゝずみ忍び足、主膳は二人に打ち向ひ、

ト曾平治左源太主膳へ思入、此の内下手黑塀の蔭よりお波文金高島田振袖屋敷娘のこしらへ、おさが乳母の裝にて附添ひ出來り、式臺の蔭にて窺ふ。主膳兩人に向ひ思入あつて、誂への合方になり、

主膳　只今も申す通り、夫の大月源藏は五百石御加增の上既に藏人とまで改名なし、殿樣殊の外なる御意に入り、彼未だ獨身にて妻を尋ね居ること早くも上のお耳に入り、この主膳を近く召され娘波を大月の妻に遣れとの直の仰せ、否と言はれぬ御前邊、據ろなくお受けはせしが、今大月と緣組まば家老中を始めとして一家中の謗りを受け、以前は家老も勤めたる浦井の家の則ち瑕瑾、まだそればかりか某は他家より養子に來りし身にて、斯樣のことをいたしては祖先へ對し濟まざる次第、祿に取つては此方より遙かに優りし大月ゆゑ不足は聊かあらねども、彼が親父と申すのは今御前のお胤をやどせし、お貞どのゝ實父たる筒井兵左衞門が組下の足輕、身分賤しき長次兵衞が悴

にて、茶道を勤め居つたる奴、屢ゝ勳功ありしゆゑ用人格まで昇進なせど、其の爲す所奸智にして一として好もしからず、それゆゑにこそ一家中心ある人々爪彈きして親まず、其の佞人に娘を嫁さば、あれ見よ主膳は慾に耽り、祿の高きに義心を失ひ、素性賤しき源藏へ娘を遣りしと言はれんこと鏡にかけて見るが如し、なれどもお直の仰せゆゑ否むに詮なくお受けはせしが、兎やせん角と先刻より心に問ひて心で答へ、心痛なせしが思はずも、面へ出でたるものならん。

〽兎やせん角と我が胸に餘る思案を打ち明せば、聞く兩人も實にもと思ひ、

ト主膳よろしく思入。此の內左源太、曾平治ぢつと思入あつて、

左源　御心中お明し下され實に驚き入つたる次第、仰せの通り妹を彼が許へ遣はさるれば、第一に人の羨み、且は誹りを受くるは必定、こりや御承引はなりますまい。

曾平　御緣邊は別なもので、假令あなたが御殿にて御承引遊ばすとも、お孃さまが大月さまへ嫁入する上は御不承知と仰せある其の時は、こりや御破談と申すもの。

左源　こりや曾平治の申す通り、此の儀ばかりは殿樣の仰せなりとて當人が、得心なければ整はず、

曾平　譬にも申す通り、木折で行かぬが戀とやら、

左源　父上の御所存は、お斷り遊ばすのはお心易うござりませうが、

曾平 左源　如何にござりまするな。

〽と問ひかくれば、

主膳　（思入あつて、）お直の仰せに餘儀なくも、承知の趣き申し上ぐれば、假令娘がいなむとも最早破談はいたされぬ。

左源　むゝ、すりや父上には妹を遣し、奸佞邪智と聞えある彼の大月と御縁邊を、

曾平　あなたはお結びなされまするか。

主膳　一旦お受けせし上は、何の變じてよいものぞ。

左源　すりや、あのいよ〳〵。

曾平 左源　御縁談を、

主膳　えゝ。くどいわえ。

曾平 左源　はツ。

〽はツとばかりに兩人が躊躇ふこなたに乳母娘、顏見合せて詞なし、

ト此の内左源太、曾平治途方に暮れしこなし、お波おさが顏見合せ、ちつと思入。主膳曾平治に向ひ、

主膳　こりや、彼女が隣家に居るとあれば、其の方參つて呼んで來やれ。

曾平　はッ、參ることは參りまするが、若しこの事をお聞きなさらばお孃さまにはどのくらゐ、膽をお潰し遊ばしまするか、それがおいとしうござりまして、どうも參りにくうござります。
主膳　（ちつと思入あつて、）そちでさへも其の樣に思ひ過しをいたすもの、亡き母親がをつたなら、
曾平　え。
主膳　いやなに、をつたら直に連れて參れ。
曾平　へい、參りは參りまするが、
主膳　さあ、少しも早く呼んで參れ。
曾平　へい。（トもぢ／＼して居るゆゑ、）
主膳　えゝ、呼んで參れと申すに。
曾平　へえい。
（ト主人の詞に是非なくも、お次へ立つて式臺の、歩みの板の捗どらぬ矢先へ見合す顏と顏、
ト此の內曾平治玄關へ來り、考へながら式臺へ下りる、これにてお波おさがと顏見合せ、
お波　あ、これ。
や、あなたは其處に。

〽あたり窺ひ〳〵て耳に口寄せ囁けば、こなたは頷き忍び足、人目厭ひて入りにける。

ト此の内お波静にせよといふこなし、曾平治奥へ心遣ひの思入、お波曾平治に囁き、おさが附いて三人下手へはひる。

主膳（思入あつて）〽こなたは門に氣も附かず、居り、何かのことに取り紛れ、未だ服も改めねば暫時休息いたすほどに、其の方はこれに居り、娘が戻らば知してくりやれ。

左源　委細承知仕つりました。（ト主膳立上り、）

主膳　娘が戻り來るとも、委細はそちより申すまいぞ。

左源　はツ、畏つてござりまる。

主膳　どりや、休息のいたさうか。

〽互ひに包む胸の内底意ら深き奥の間へ、別れてこそは入りにける、跡に左源太腕こまぬき、

ト主膳思入あつて奥へはひる、左源太跡を見送りぢつと思入、誂への合方になり、

左源　父の底意は汲み兼ぬれど、よもや妹を大月へお遣はしはあるまじとは、思へど知れぬ御胸中、斯くなる上は佞人の益々御家に蔓りて卽ち國の爲めならず、剰さへ忠臣と聞えし唐澤を始めとして、

三人共毒に死せしも正しく彼れが手段ならん。それといひこれといひ、思へば憎き源藏め、どうか思案を回らして、破談させねばならぬわえ。

〽思ひ詰めたる忠義心流石主膳が子息とて、天晴健氣ぞ頼もし、、折柄爰へ入來るは慾に心も勝男武士、道は一筋二心、岸に寄邊の柳樽、なびく釣臺輕薄の口は外さぬ橋渡し、宰領してぞ入來る。

ト此の内左源太思案の思入、よき程に花道より助太郎羽織袴大小にて先さに立ち、跡より紺看板の中間〇□の兩人油單を掛けし釣臺を擔ぎ出來り、花道に留り、

助太　浦井殿のお宅へ參らば、其の方達も不斷と違ひ、斯く結納を持參いたせば、萬端に心を用ひ、忌詞などはならぬぞよ。

兩人　畏つてござります。

助太　まだ申し置くことがある。定めてそち達へも澤山馳走が出ようから、餘り呑み過してみだらなことがあつてはならぬぞ。

兩人　よく氣を附けますでござります。

助太　おゝ、まだあつたわえ、其の折にお目錄を下されんが、必ず其の場で中などを明けて見ることは

相成らぬぞ。

兩人　畏りましてござります。

助太　その目錄は斯ういたせ、其の場で身共に預けるがよい、歸宅いたさばその方達へ、直さま渡し遣はすぞ。

兩人　それは大きに有難うござります。

助太　えゝ氣の早い奴ぢや、まだ禮を申すのは早いわえ。

〽一人うなづき胸算用、運ぶ歩みに數取りなし、玄關先きへたゝずみて、

ト助太郎先きに三人舞臺下手へ來り、

賴まう。

〽音なふ聲に心付き、（ト左源太思入あつて玄關へ來り）

左源　これは〳〵吉良氏には、ようこそ御入來。先づ〳〵、こちらへお通り下されい。

助太　左源太殿には久々にて、御面會いたしまする。その品これへ。

兩人　はツ、

〽吉良が差圖に中間共、釣臺より結納の品々揃へ差し出せば、

ト中間兩人勝男節、柳樽、目錄書など取揃へ玄關先きへ並べる。

左源　餘りそこは端近、先づ〳〵あれへ。

助太　然らば、御免下され。

〽御免あれと案内に連れ、奧の一間へ通りける。

ト左源太先きに助太郎附いて舞臺へ住ひ、合方になり、

左源　かねて御親父主膳殿よりお聞き及びもござらうが、某殿の内命蒙り、思ひ立つ日が吉日と諺に申すを用ひ、大月氏より結納の印を持參いたせしゆゑ幾久しく御受納あるやう、よろしくお取次の下されい。

〽うや〳〵しく目錄を子息が前に差出せば、見るも穢れと思へども假初ならぬ内命の、二字に心もせばめられ、胸押し鎭め手に取上げ、

ト助太郎目錄の卷物を出す、左源太心に障りしこなしあつて、氣を替へ目錄を受取り、

左源　御結納の御目錄、慥に受納いたしてござる。

助太　先づは拙者の役目も相濟み、これにて安堵いたしてござる。

左源　直お歸りでござるなら、お受取書を差上げるでござらう。

助太　あいや〳〵左樣にお急ぎには及び申さぬ、是れから後が當にいたせし、いやなに、あたりにお差合もござらねば、打ちくつろいで御酒一獻。

左源　え。

助太　いえなに、入懇を結びし上からは、猶更近しく伺ひますれば、幾久しく願ひまする。

左源　仰せまでもござりませぬ、一家中の其許なれば申さずとも水魚の交り、互ひに君のお爲を存じ、いて戰場と申す時は御馬前に於て身命を、なげうたねば相成りませぬ。

助太　あいや、これは又異なる仰せ、斯く目出度き折柄に戰場にて身命を抛つなど、申すのは、そりや忌詞でござりまする。

左源　御前邊にて輕薄なる詞を用ひ登用せられ、其の身の光榮願ふのはまことの武士の好まぬ所、只今忌詞と仰せあるが、御馬前にて一命果すが目出度きこと、心得まする。

〽案に相違の一言に、理の當然の詞詰め、そらさずこなたは褒めそやし、

ト左源太一々心に障ろこなしにてきつといふ、助太郎當惑の思入あつて氣を替へ、

助太　いや、流石は浦井の御子息だけ驚き入つたる今のお詞、斯くありてこそ武士の譽れ、是れと申すも日頃よりお躾がらが宜しきゆゑ、既に今般お妹御の御緣邊も相整ひ、大月氏へお輿入なされば

當家は卽ち御親子故、此後ともに御立身、よき掛け橋と申すもの、實にお羨しい儀でござる。

左源　いや勤功に依つて立身なさば、其のお悦びは忝なけれど、妹が嫁せし緣に依り、立身いたすなど、申すは、身共に於て望みにござらぬ。

助太　これはお若いにお似合ひなされず、それが所謂昔堅氣、當時は物事榮につき骨折らずして巨萬の金を儲ける工風が卽ち肝要、ちと粹にお成りなされえ。

〽おのが心に引較べ、直なる竹も横道へ引くに引かれぬ其の所へ、主人膳が立出でゝ。

ト此の內左源太氣に障るた椽へ居る、よき程に奧より主膳出來り、

主膳　先刻より一間にて、承はれば其許には、倅へ再應御教訓下され、某身に取り如何ばかりか、忝なう存ずる。

〽心ありげな挨拶に、こなたは拔からず威儀を改め、

ト主膳よき所へ住ふ、助太郎思入あつて、

助太　これは／＼御主人には恐れ入つたる其のお詞、お躾がらとは申しながら餘り堅固なお詞ゆゑ、ちとお心の解けるやう、御身の爲めを存じまして、當世流の立身を只今お勸め申してござる。

主膳　返す／＼も其許のお心添へ、又今日は內命にて大月氏の結納まで御宰領下さる段、千萬忝なう存

じまする。悴、料紙硯を持て。

左源　はツ。

〽はツと答へて次の間より、料紙硯を携へて、主膳が前に差出せば、目錄取つて讀下し、心に染まぬ受納書の筆も走らぬ白紙を汚す文字さへにじみ勝ち、こなたは追從輕薄顏、

ト此の内左源太奧より硯箱に奉書を添へ持來り主膳の前へ出す、此の内主膳目錄を讀み、受取りを認める、助太郎思入あつて、

助太　結納の受取などはほんの掟と申すものゆゑ、決して御丁寧には及びませぬ、それに外の者とは違ひ拙者内命を蒙りし上、大月殿より又候お賴み、此の以後とも手前に於ても再々參上仕つれば、何かの事御遠慮なく仰せられ下さらば、お取持のいたすでござる。返す〴〵も其許はお仕合せと申すもの、一家中にて口々に浦井殿はよい娘御を持たれたと、實に羨んで居りまするて、さてさて御高運なことでござる。

〽てう〳〵しく言ひ入るれど、主膳は少しも耳にも掛けず、

ト助太郎よろしくこなし、此の内主膳目錄の受取を書終り、

主膳　目錄の受納書、御一見あつてよろしくば、早速この場をお歸り下され。

〽ずつけり言はれて事ともせず。（ト助太郎思入あつて、）

助太　今日よりは言はず語らず御親類同様のことなれば、改めるなど、他人行儀はいらぬこと、然し斯様の目出度き場所にて歸れと申さるゝは忌詞、手前別に用事もなければ、せめて御酒など、いゑなに、後して上ると致しても、先づ今日はゆる〳〵と、上巳のことゆゑ御談話いたし打ちくつろぐ心でござる。

主膳　それはこちより願ふ所なれど、ちと今日は用事もあり、お話しさへもなりかねますれば、先づ今日はお歸り下され。

助太　いえ決して御心配には及ばぬゆゑ、手前へ下さる目錄さへ、いや、目錄の受取さへお貰ひ申せば役目は濟み、これにてお開きに仕つるが、浦井氏には、御失念の品はござらぬかな。

主膳　結納受取書の外、別に失念の品はござらぬ。

助太　まだ一品ござらうが、

主膳　して其の品は、何でござるな。

助太　さ、武士たる者が申し出すも、

主膳　そりや何でござる。

助太　さあ、それはな。

主膳　承はりませう。

助太　さあ、實は身共と供の者へ、お心附の目錄を頂戴いたしたうござりまする。

〽思ひ切つてぞ言ひにける、主膳は聲を荒らげて、

ト助太郎思ひきつて言ふ、主膳むつとせし思入にて、

主膳　やあ、以ての外なる其の仰せ、殿樣より内命蒙り結納持參いたせしと只今仰せありしは何ぞや、申さば貴殿は殿の名代、匹夫下賤の心に較べ目錄呉れとは何の囈言、主人の面へ泥を塗るなまくら武士の横道もの、受納書もつて此の所を、とつとゝ早くお歸りなされい。

〽はつたと睨め附け傍なる、受納書取つて打ち附くれば、吉良は驚き飛退り、

ト主膳受取を助太郎の前へ打ち附ける、助太郎びつくりして飛退き、

助太　いや、これは失禮、お氣に障らばお許し下され、早速歸宅仕つる、是れを持つて行きさへすれば身共の役は相濟みまする、御兩所共必ずお氣にさへられな。

〽受納書取つて懷中なし、玄關先きへこそ〳〵立出で、

ト受取を懷へ入れ、玄關へ出る、左源太送り出て、

左源　先づ、御ゆるりとなされい。

助太　いや、直お暇申す。

〽行かんとせしを、（ト下手へ行き掛けるを中間の○□助太郎の袂を捉へ）

○　もし旦那、お暇申すとおつしやるのは、

□　そりや、忌詞でござりませう。

助太　えゝもう、忌詞どころではないわえ。

○　へえゝ、それでは先程、

兩人　お約束の品は。

助太　さあ催促までして見たが、忠義一途なあの主膳、かたくな言うて折合ず、

○　すりや無駄骨でござりましたか。

助太　さあ彼方は忠義、此方は祝儀、わづか一字のことなれど、

兩人　え、

助太　祝儀と忠義の間違ひぢやわえ。

〽心殘して入りにける。（ト助太郎腕組をなし、中間兩人釣臺を擔ぎ、三人花道へはひる。）

〔跡に主膳は打ちうなづき、（ト主膳左源太に思入あつて、〕

主膳　忰、吉良は最早戻りしか。

左源　只今戻りましてござります。

主膳　追従武士の輕薄口、定めし彼れも大月より差圖を受けて參りしならん。はて、苦々しきことではある。

〔噂半へ隣家より乳母が附添ひ娘お波、小褄とり〳〵振袖の模樣も派手なおぼこ氣に結び目かたき緣さへ、知らぬ女雛のあで姿我が家へこそは立歸り、トよき程に下手より以前のおさがお波の手を引き來出り、玄關の結納を見やり、兩人不審の思入あつて、枝折戸より內へはひり、

お波　父樣、お歸りでござりましたか。

さが　先刻御隣家の左枝樣よりお迎ひが參りましたゆゑ、お雛さまを拜見にお連れ申して參りました。

主膳　それはよい事をいたしたわえ。隣家の雛は屋敷內でもいつちいつち見事と評判ゆゑ、こりや見物であらうわえ。

さが〔思入あつて、〕旦那樣、伺ひまするがお玄關に、柳樽や勝男節のござりまするは、あれは何れの

お目出度でござりまする。

主膳　あの品に附き、娘にも話さねばならぬことあつて、それで迎ひに遣はしたのぢや。

お波　なに、あの品についてわたくしへ、話さにやならぬとおつしやりまするは、

さが　どういふ譯で、

お波
さが　ござりまする。

〽主膳は威儀を改めて、（ト主膳思入あつて、）

主膳　餘の儀にもあらざるが、あれに飾りし結納は、そちが所へ參つたのぢや。

お波
さが　えゝ。（トびつくりなす、）

主膳　さあ其の驚きは尤もながら、父が心の切なさを、乳母も共々聞いてくりやれ。

〽浮む涙を押ししづめ。（ト床の合方になり、）

委細は兄へ話し置きしが、今日不意に殿様より直の仰せに其の方を、同家中なる大月へ嫁入させよとのお詞に、其の場でもどく事のならぬは、これが同じ身分なら娘に一應相談なし、其の上返答いたすとて期を延すこともあれど、何を申すも主君の仰せ、據ろなくお受けをなし心ならずも宅へ歸り、早速そちへ申し聞けんと思ふ所へ結納を、早くも持參いたせしなり。定めてそちが心

では話しもなさず取極めるは、そでない親と思ふであらうが、何を申すも主君の仰せ、まことに餘儀なき次第ゆゑ、これ娘、得心の上嫁してくりやれ。

〽餘儀なき譯を親の身で・我が子に賴む胸の內側で見る目のいぢらしく、兄も共々氣を勵し、

ト主膳不便だといふこなしあつてお波に賴む、左源太思入あつて、

左源 心に濟まぬ緣談を父上よりお勸めあるも、未だそちは委しきことを、存ぜざるゆゑ尤もなれど、今日測らず御殿にて容易ならざる變事あつて、多人數難儀いたせし中に、大月氏一人立身出世せしゆゑに、殿樣お直に媒ちせられ緣組みせよとの仰せ、斯く穩かならぬ時節ゆゑ、よしんば進まぬにもせよ、何か一つの手掛りのあらんことも測られず、さすれば親への孝は愚か、お家の爲め國の爲め、末代までもそちが忠義、其處をよう合點して父上のお詞を背かずに、此の緣談を承知しやれ。

さが 深い樣子は存じませねど、旦那さまやお兄いさまが事を分けての今のお詞、お厭は知れて居ることなれど、もう何日までも孃さまと申す譯にも行かぬお年、お身の固まることゆゑに御得心遊ばしたが、よろしからうと存じまする。

〽しんはなきより親と子が事を分けての一言に、お波はやう〳〵顏を上げ、

ト皆々お波に賴む、お波愁ひの思入あつて、

お波　勿體ない父樣やお兄い樣が事を分けて、おつしやつたこと遂に一度、〽背きませぬは幼きより、母樣に別れし身の、お兄い樣とお二人を便りに思ひこれ迄に、一方ならぬ養育うけ、〽手習學問縫針の、御恩は深き硯井の濁りに染まぬ白草紙、天神さまへ御願を掛け、まことの道に叶ふやうお願ひ申せし甲斐もなう、邪曲非道と噂ある、大月さまへ嫁入せいと、〽おつしやる詞がお情ないと跡は涙に暮れにける、聞く人々も道理とは思へどそれと言ひ兼ぬれば、態と詞をあらゝげて、

ト此の内お波愁ひのこなしにて主膳の膝へ縋り泣く、主膳も不便の思入あつて氣を替へきつとなり、

主膳　これまで父に逆はず、孝行なる其の方と存ぜしゆゑに賴みしが、そちは得心せぬと申すか。

お波　假令殿樣の仰せなりとも、こればつかりは父樣の、仰せを背きますわいな。

主膳　すりやこれ程に譯を申すに、どうあつても聞き入れぬか。

お波　父樣、どうぞ許して下さりませ。

〽どうぞ許して下さんせと、身を顫して忍び泣き、詮方盡きし父親は再び詞を和げて、

ト お波泣伏す、圭膳思案に盡きしこなしあつて、

圭膳 こりや波、これまでに事を分け嫁入せいと申すのに厭ぢやと申せば是非がない、もう勸めはいたさぬが、只今父が申すことをとつくりと承はれ。（ト誂への合方になり、）幼年よりして母に別れ乳母が手しほに育ちし其の方、今日まで何一つ背きしことのあらざるは、これは只今申さずとも一家中にて知る所、それゆゑにこそ、そちばかりか此の親までが譽れとなり既に上にも御存じあつてお媒まで遊ばして、大月氏へ嫁入させいと、有難き直のお詞、それを只今違變いたさば幼き時より今日まで孝心なる娘ぢやと褒めそやされしも水の泡、まゝ、それもそれまでにしたにせよ、一旦お受けいたせしを再び違約いたす時は、これ上を僞る道理、さすれば浦井の家に拘り、どう成行かんも測られず、とあつてそちが不得心と申せし上は父一人中に立入り如何にせん、これを申し解かんには、家の瑕瑾を覺悟するか。（トきつと思入）さなくばそちが一命斷ち、殿へ言譯致さんか、二つに一つ、生死の境、

お波 え。（トびつくりこなし、圭膳氣を替へ、）

圭膳 とさあ、申すより外思案はない、爰をよく〳〵考へて、勸めはせぬが父の心を、よう推量してく

りやれいの。

〽事を分けたる情の詞、何といらへも泣くばかり、こなたの二人も共々に、

ト主膳物和かに言諭す、お波はうつむき泣き居る、左源太おさが氣を揉むこなしあつて、

左源　こりや妹、あれ程までに父上が事を分けたるお諭しゆゑ、おゝと御返事いたすがよいぞ。

さが　若しあなたがお出でがないと、旦那さまのお身の上に拘はることゝおつしやりますゆゑ、

左源　それを厭ぢやと申す時は、そちの命に拘はるぞよ。

さが　さあ、ついお返事をなされませいな。

〽せり立てられて是非なくも、（トお波思入あつて、）

お波　父樣、お詞を用ひませぬ上からは、元より命は捨つる覺悟、お家の爲を思ひますゆゑ命をお取り下さりませ。

左源　すりやそれ程に大月を、そちは忌み嫌うてか。

お波　いえ、假令大月樣でなうても、外の所へも嫁入りは、わたしやいたしませぬわいな。

トこれにて主膳不審の思入あつて、

主膳　むゝ、すりや大月ならでも、緣組はせぬとか。

お波　あいなあ。
主膳　はて、心得ぬ其の詞、して〳〵それには何ぞ仔細が、
お波　さあ、その仔細は、
主膳　定めし何か仔細があらう。
お波　さあ、それは、
左源　これにて父へ申し上げよ。
お波　さあ、
主膳
左源　さあ、
四人　さあ〳〵〳〵。
主膳　とく〳〵此の場で、仔細を申せ。
お波　はあゝゝゝ。
〽はあゝとばかりに泣き伏して外に詞はなかりける。折から門に曾平治が内の様子を窺ふとも、知らぬおさがゞ急き立ちて、
トお波泣き伏す、此の時下手より曾平治出來り、枝折戸の外に窺ふ、おさが思入あつて、

さが　もしお孃さま仰しやりにくいことなれば、なぜわたくしに內證でおつしやつては下さりませぬ、小い時よりお側に附添ひ、お育て申した今となり、嫁入するのが厭ぢやというて仔細をお話しなされませぬと、此の乳母が越度になりまする。さあ、ちやんと仔細をおつしやりませいな。

ト きつとなつて、お波に詰寄る、お波ちつとこなしあつて、

お波　今まで隱して居りましたが、何を隱さうわたくしには、言交せし者がござりますゆゑ。

皆々　えゝゝゝ。

〽はつとばかりに打驚き顏見合せて詞なし、乳母は心も半狂亂、お波が前に詰寄りて、

ト 皆々びつくりなす、おさがきつとなりて、

さが　もしあなた樣はなア、言交せし者があるとは、そりや何事でござりまする。現在乳母のわたくしが片時お側を離れませぬに、さういふことのあらう筈なし、さあ、其の相手は何者でござります
る。

お波　さあ、

皆々　さあ〳〵〳〵。

〽さあ〳〵〳〵と手詰の詞、兎やせん角と娘氣の顏に紅葉の花吹雪、何時の間にか門口より

ト皆々お波に詰寄る、此の前より門口に窺ひ居たる曾平治思入あつて、

曾平　お孃さまの戀の相手は、此の曾平治にござりまする。

〽言ひつゝ庭より入來るを、皆々見るより二度びつくり、

ト曾平治枝折戸より内へ入り下手へ住ふ、皆々これを見てびつくりなし、

主膳　娘が不義の相手と申すは、曾平治汝であつたるか。

〽呆れ果てたるばかりなり、乳母は我が子に詰寄りて、

ト皆々ほつとこなし、おさが思入あつて、

さが　こりや悴、おのれはなあ〳〵、あらうことかあるまいことか、よくも親の目を忍び、お孃さまへ疵を附けたな、お主へ不忠の惡人め、さあどうするか見て居れやい。

〽と襟上摑んで引倒し打擲なさんと振り上げる、其の手を曾平治しつかと押へ、

トおさが曾平治の襟上を取り、打たうとする、其の手を押へ、

曾平　さあ其の腹立ちは尤もながら、こなたに折檻受くるより先づ第一に御主人より、御成敗を受けねばならぬは、何の役にも立たぬ者を若黨代りにお使ひ下さる、御恩を仇で返せし曾平治、假令體は八ツ裂きに弄り殺しに遊ばすとも、死ぬのは聊か厭ひませねば、お腹の癒るやう旦那樣、さあ

御存分に、（トおさがの手を振拂ひ、）遊ばしませ。（ト曾平治覺悟の思入、主膳思入あつて、）

主膳　主親の目を偸み、不義の掟を破りし奴、剰へ殿樣より仰せを受けし緣談も皆おのれより破談させ、思へば憎き下司下郎、娘と共に首級をあげ、言譯なさん覺悟なせ。

〽刀引提げ立掛れば、二人は覺悟にわるびれず、

ト主膳刀を提げ立掛る、お波曾平治思入あつて體をさし附け、

お波　不義をいたせし我が身の罪、さあ父樣、わたくしから、

曾平　お孃さまより曾平治を、犯せし科ゆゑわたくしより、

お波　いえ／＼どうぞわたくしを、

曾平　いえ／＼何でも、わたくしを、

主膳　おゝ二人とも、よい覺悟だ。

〽刀すらりと拔放し、死ぬを爭ふ兩人が樣子を篤と打見やり、扨は切なき我が心察して死ぬる覺悟なるか、兎にも角にも身のせつぱ打たねば上への言譯なく、主膳は心勵まして我が子を切らんと振上る、其の手に乳母は縋り附き、

ト曾平治お波合掌なして身を寄せる。主膳は刀を拔き兩人の覺悟の樣子を見てよろしく思入、左源太

は是非なきこなし、主膳思ひ切つてお波より切らうといふ思入にて、刀を振上げるを、おさがたまり
かね、其の手に縋り、

さが　そりや御尤もではござりまするが、悴は憎い奴ゆゑに我が子でも厭ひませねど、お情ないはお孃さま、今を盛りのこの花を、どうぞお慈悲に悴のみ、命をお取り下さりませ。

主膳　えゝ、此の場に及んで未練なことを、そこ放せ。

さが　そこをお慈悲に。

主膳　えゝ、放せといふに。

〽鶴の一聲是非なくも涙ながらに控ゆれば、又も刀を振上げて拜み打ちにうたんとせしが、子の恩愛に引かさるゝ千筋の絲に手も狂ひ、いつそ此方と又振上げ見れば不便や目前に、母の見る目のいぢらしく、振上げは上げたれど、手元狂ひてたぢ〳〵〳〵、又氣を勵まし切らんとせしが、兩眼閉ぢて唱名の聲も沈みて覺悟の體、主膳は見やり打ち頷き、

ト此の内おさが主膳の袖にすがるを振拂はれ、是非なく後へ下る、主膳刀を振上げお波を切らうとして切兼ることなし、又曾平治を切らうとしておさがに思入あつて切兼る、お波曾平治兩人は兩眼を閉ぢ合掌なし覺悟のこなし、主膳この體を見やり、思入あつて刀をしやんと鞘へ納める、皆々不審の思入にて、

左源　すりや父上には、兩人を、
さが　お助けなされて、
左源
さが　下さりまするか。（ト主膳ぢつと思入あつて、）
主膳　今一刀の其の下に討果さんと存ぜしが、よく考うれば兩人共不義の掟を破りし奴、人畜生と存ずるゆゑ、武士の刀にかくるも穢れ、命は助け遣はす間、曾平治汝は波を連れ何れへなりとも逐電いたせ。
曾平　この身に犯せし不義者の命をお助け下さりまするは、此の上もなきお慈悲ながら、今兩人が逐電いたさば、あなたはお上へ申譯が、
主膳　や、
曾平　さ、立ちますまいかと存じますゆゑ、元より覺悟いたせし曾平治、未練なことはいたしませぬゆゑ、
お波　あなたのお恥にならぬやう、此の場に於て兩人の、
曾平　命をお取り、
曾平
お波　下さりませ。（ト主膳は感心なしたる思入あつて氣を替へ、）

主膳　今そち達を切つたるとて、却つて刀の穢れゆゑ助けてやるも我が情、いやなに、何れへなりと勝手に立去れ。

曾平　すりや、どうあつても、此の場にて、

お波　命をお取り、

曾平
お波　下さりませぬか。

主膳　刀の穢れぢや、立去りをらう。

〽はつと睨め附け怒りの面、心は慈悲と恩愛に厚き情の助けたさ、側には共に氣をいらち落したいが山々なれど、それと言はれぬ心の切なさ、もうこれまでと兩人は顔見合せて一時に、ぐつと突込む氷の刄、見るに人々打ち驚き、

ト此の内主膳曾平治お波を叱りつけるこなしにて、落ちよといふ思入、左源太おさが共に氣を揉み居る、曾平治お波顔見合せ思入あつて、曾平治は刀を脇腹へ突込み、お波は懷中より短刀を出し、喉へ一時に突立てる、皆々びつくりなし、

主膳　やゝ、こりや兩人とも、

左源
主膳　自殺なせしか。

〽介抱なせば曾平治は、苦しき息をほつと吐き、

ト主膳曾平治に寄添ひ、左源太おさがお波の介抱なす、曾平治苦痛のこなしにて、

曾平　お慈悲深い旦那様が、落ちよとおつしやる思召しを背いて命を捨てまする、一伍一什を一通りお聞きなされて下さりませ。（ト竹笛入の合方になり。）今日御殿の騒動より降つて湧いたる御縁談、退引ならぬ御事と聞くにつけても曾平治は、母の縁にてこれまでにお世話になつた御恩返し、今この時と思へども足らぬ下郎の情なさ、せめて萬分が一なりと御恩を返す心根は、

〽百萬石の殿様へ仕へる主人のお心も、生れ賤しい曾平治が心も同じ忠孝の道は違はぬ我がおもひ、

操正しきお孃さまと不義をいたせし體になし、母に隱して言合せ其の不義者はわたくしと、名乘つて出て旦那様の、

〽御手に掛つて死ぬ時は、お上の恨みも受けたまはず、此の身の忠義も立つ道理、

仔細と申すは此の事ゆゑ、少しも早く首討つてお身の明りをお立て下され。

〽始めて明す本心を、聞くにお波も手負ながら、

ト曾平治苦しきこなしにてよろしく思入、お波思入あつて、

お波　最前お退りなされし時、大月殿へ縁組を殘念ぢやとおつしやつたを、門で竊に承はり、言交したる者ありと父樣を僞りしは、

〽濟ぬことゝは知りながら、お案じあるを子の身として、どうまあ見捨て居られませう。なれども不義の相手といふ其の證人に困りし所、この曾平治に助けられ言はず語らず二人とも、死ぬる覺悟でござりましたも、一つの孝を立てたいばつかり、先立つ不孝は、もし父樣、

〽お許しなされて下さりませと、跡は涙に暮れにける。

トお波よろしく思入、主膳感心せしこなしにて、

主膳　娘は元より曾平治も我が胸中を押しはかり、其の身に不義の汚名を受け死ぬる覺悟の志し感に絕えたることながら、親子の情に某が娘を惜しめば乳母は猶、只一人の倅ゆゑ、嘸や本意なきことならんと彼女が心を思ひ遣り、逐電せよと申せしは跡にて咎めを蒙むる所存、敏くも兩人それを察し自害なせしは天晴忠孝、これにて家名の瑕瑾にならず、家老中を始めとして有司の者の譏りを免れ、この主膳が潔白相立つ、忘れはおかぬ忝ないぞよ。

〽忝なやと頭を下げ、我が子と家來に禮をなし、落つる涙を押し拭ひ、

（トよろしく思入あつて）さはさりながら、此の趣きこれより上に訴へるに、二人が不義をなした

る證據、はて、何としたものであらう。

お波　御覽なされて下さりませ。

官平　その儀も先刻存じつき、お孃さまと取交せし體になしたる此の艶書、

〽言ひつゝ、手負ながら取出す二通の艶書、手早くも主膳は取つて押開き、讀むも涙の戀無常、さとる此方の軒續き、樣子を窺ふ小田大炊、内には斯くと認めし筆意に感じはたと手を打ち、

ト此の内官平治お波艶書を一通づゝ出す、主膳取り上げ讀む、この時下手より小田大炊白髮鬘羽織着流し大小にて出で、門口にたゝずみ内を窺ふ、主膳艶書を讀み終り、

主膳　殘る方なき此の艶書、是れあへあれば慥な證據、遲刻いたさぬ其の内に目附へ訴へ檢分受けん。

　　乳母、上下持て。

さが　はツ。

〽立たんとしたる門の口。（トおさが立ち掛る此の時門口にて、）

大炊　いや其の檢分は小田大炊、それへ參つていたすであらう。

〽言ひつゝ、枝折押し開き入來るは當家の老臣、曲れる腰も金鐵の直なる道に靜々と、正座へ通れば、主膳は敬ひ、

トこの内小田大炊枝折戸より入り、平舞臺上手へ住ふ、主膳下手へ來り、

主膳　存じがけなき御老公、斯く見苦しき場合にてまことに恐れ入つてござる。

〽詫び入れば、事ともせず、（ト主膳氣の毒なるこなし、大炊思入あつて、）

大炊　いや其の心配には及び申さぬ、上巳の祝儀申し入れんと來りし門にて最前より、家内の樣子窺ひ居つた。

主膳　すりや老公には、最前より、

左源　この場の樣子、

兩人　御存じとな。

大炊　いや娘御といひ曾平治といひ、流石賢者の聞えある其許のお躾がら、驚き入つたる心底に思はず身共も落涙いたした、生先長き兩人が果敢ない最期は不便ながら、親へ孝行、主へ忠義、人は斯くこそありたきもの、大炊感心いたせしぞ。

〽實に天晴な心底と、二人が最期を褒めそやせば、

曾平　一命捨てしを左程まで、大炊樣のお褒めに預かり、

お波　あの世にござる母樣へ、よいお土産でござります。

會平　いで此の上は、少しも早く、
お波　死出の三途を共々に、
會平　お供いたすでござります。
　　〽最期を急ぐ兩人を、大炊は不便と打見やり、
大炊　浦井殿へ賴みがござるが、聞屆けては下さるまいか。
主膳　如何なることか存ぜねど、身に叶ひしことならば、
大炊　ずんと叶ふことでござる、これなる二人は戀せずして不義の名を取り死するのが、如何にも不便に存ずるゆゑ、彼の世の緣を結んで遣りたい、此の大炊媒介いたすが聞屆けては下さるまいか。
主膳　こは忝なき其の仰せ、拙者も左樣存ぜしところ、
大炊　すりや御同意でござるとな。
主膳　如何にも、取上げ聟になすとても、恥かしからぬ彼れが心底、
大炊　御承知ならば此の趣き、二人へお聞かせ下されい。
　　〽言ふに主膳は手負に向ひ、（ト主膳兩人に向ひ、）
主膳　こりや兩人、有難き大炊樣の今の仰せを聞きたるか。

曾平　はッ、冥加に餘る其の仰せ、願うてもないことながら素性賤しき曾平治ゆゑ、お孃さまのお心には、

お波　いや假令其の身は賤しくとも、心は貴いこなたゆゑ何で否やを言はうぞいの。

左源　扨は妹も得心にて、あの世の縁を結ぶとか、

さが　悴、そなたはあやかり者、嘸嬉しいことであらう。

〽嬉し涙に暮れければ、

主膳　兩人得心なる上は、夫婦固めの盃させん。

曾平　すりや、此の場にてわたくし共へ、

お波　あの世をかけて、二世の、

兩人　縁を。

大炊　おゝ、大炊が媒介いたすぞよ。

曾平　えゝ、有難う、

曾平、お波
左源、さが　存じまする。

主膳　おゝ幸ひ娘が雛の手道具、あれにて夫婦妹脊の固めを、

〽立上りて傍なる一間の障子押明くれば、内に飾りし雛祭り見るも哀れと消入る思ひ、催す涙花曇り散りて行く身の祝言に、短かき命長柄の銚子、薄き蒔繪の盃にまなびも夜るの菊燈臺、二人が中へ取揃へ、人々威儀を改めて、

ト此の内主膳思入あつて立上り、上手の屋體の障子を引拔く。内に好みの雛飾りあること、主膳雛段に飾りある菊燈臺、銚子三つ組の杯などを一々取つて、左源太、おさゝへ思入、これにて兩人、平舞臺へ運ぶ、この内大炊は曾平治とお波の眞中、主膳は上手、左源太おさゝ下手へ住ふ。

大炊　目出度く祝言いたすであらう。

曾平
お波　ちえゝ、忝ない。

〽苦痛を忘れ兩人は膝摺り寄する折も折、軒端にかすむ鐘の音、

ト文句の切れ地藏經になり、此の内左源太櫻の花溜を島臺の心にて眞中へ置き、杯臺を大炊の前へ出す、大炊取上げ、左源太酌取りにて、これより曾平治お波と杯の式よろしくあつて、

大炊　宿世の緣とはいひながら、目出度い花の節句にも三々九度に引替へて謠にあらぬ地藏經、

主膳　蓮の臺に二十五の菩薩はあれに飾りたる、則ち雛が即心即佛、

左源　紫雲棚引く幕張りに、後に立てし金屛風、これぞ上品上生に、

さが　迦陵頻伽の音も澄みて、五人囃子も其の儘に、音樂佛に異ならず、
曾平　思へば人の一生は皆見るものが教へにて、今を盛りのこの花も明日は嵐に散りて行く、
お波　この身に深き罪科も、彌陀の利劍にあへなき最期、
曾平　思へば果敢ない、
皆々　身の上ぢやなあ。
〽親子手に手を取り交し、この世の別れ知死期時、見る人々も袖濡らし共に涙の飛鳥川、落ちて流れて寄る岸に水嵩まさるばかりなり。
ト此の内お波は主膳に、曾平治はおさがに縋り、大炊左源太も共に愁ひのこなしあつて、
大炊　遲刻いたさば何かの妨げ、長く苦痛をさせぬやう、不便ながらも兩人を、
曾平　いざ、首打つて、
お波 曾平　下さりませ。
主膳　おゝ承知いたした、悴介錯、
左源　はツ、
〽はツと答へて早襷、二人が後へ身構へれば合掌なして首差し延べ、覺悟はすれど斷末魔、

苦痛の息の四苦八苦、見るに忍びず兩人が心を鬼に討ちてんげり。

ト主膳左源太下緒を襷にかけ刀を拔き、主膳はお波左源太は曾平治の後へ廻り、えいと一時に打落す、これにて兩人の切首出る。

大炊　ほゝお、天晴感心討ちも討ちたり、討たれも討たれたり、主膳殿親子の胸中お察し申す。

主膳　たゞ此の上とも御前邊を、

左源　其許よしなにお執成し、

主膳
左源　偏に願ひ奉る。

大炊　其の儀は必ず心配あるな、萬事は身共が計ひ申さん。

主膳
左源　ちえゝ、忝ない、

大炊　いで此の上は、二人が首級御殿へ持參いたされよ。

主膳　はツ、幸ひ、

〽おゝ幸ひと打ちうなづき傍に有合ふ雛の箱、あくる二人の死顔も、これが別れと散果てし、名殘りを惜しむ花の雨、是非もなく〳〵入相の鐘も哀れな無常音。

ト本釣鐘主膳首桶に困りし思入にて、雛段の下より雛の箱を出し蓋を明け、二つの首を取上げ見て愁

ひい思入あつて、箱へ入れようとするをおさが主膳に縋り首を見て泣く、主膳尤もだといふ思入あつて箱の中へ入れる、おさが寄るを押へて箱の蓋をする、大炊思入あつて、

大炊 生者必滅會者定離、

左源 頓て未來は極樂の、

さが その門出に、

主膳 これより御殿へ、

大炊 ちつとも早く、

主膳 御免。

〽二つの首級携へて力なく〳〵立上り、愁ひを隱す武士の猛き心も恩愛の子ゆゑの闇にすごすごと、別れてこそは、

ト主膳首の入りし箱を抱へ、大炊に會釋なし下手へ行く、左源太おさがこれを見送る、この引張りの見得よろしく、時の鐘三重にて、

幕

三幕目

多賀家長局の場
同御殿奥庭の場

〔役名＝大月藏人、中老政尾、久松三五郎、忍び深見十藏。奥女中柏木、同明石、同關屋、同浮舟。多賀家の妾お貞、中老玉笹、其他。〕

（奥御殿長局の場）＝本舞臺正面折廻し上手一間奥深に床の間、これに源氏物語歌書の本箱、この脇に大花瓶に秋の七草を澤山挿したるを置く。これより下手腰張りの茶壁、この長押に黑塗の鞘に入りし長刀並に竹刀二本掛けてあり。上手一間の障子屋體、舞臺前に誂への丸行燈、下手へ寄せて部屋の入口、此の外にやはり一間塗框の杉戸出入り口、この所足附鐵網の行燈、板羽目の張物にて見切りたる廊下を見せ、總て多賀家奥御殿長局政尾部屋の體。此の模樣よろしく夜廻りの柏子木合方にて幕明く。と花道より柏木、明石、關屋、浮舟何れも片外し奥女中の打扮にて懷劔を差し、手雪洞を銘々に持出來り花道に留り、

柏木　何と皆さん、わたくし共が此のやうに時を切つて詰所から御殿の内を見廻るも、先頃殿樣のお膳部へ毒を仕込みしものありて、お膳番を始めとしてお料理方の末々まで、皆それ〴〵に嚴しいお仕置。

明石　その毒藥を仕込んだ者が、今に誰とも知れぬゆゑ、あれから此方奥向も一方ならぬお締りにて書夜共に忍び廻り、銘々容易に懷劍を離さぬやうにいたせとある、老女方よりわたくし共へ一人毎のお言渡し、

關屋　今泰平の御時世に敵方よりの廻し者が、我が君樣を亡き者にしようなどといふことは、決してあらう筈はなし、斯樣な企みをする者は、やはり御家中の内の者と、御家老方がお目を附けられ、

浮舟　女ながらも劍術の覺えあるので選み出され、この夜廻りを勤むるも御指南受けし御中老政尾樣の皆お蔭、斯ういふ時こそ御恩報じに怪しい奴を引捕へ、手柄に仕度いものでござんす。

柏木　ほんにあゝいふ強いお方が御殿においでなさるので、お弟子になつたわたし等まで肩身が廣うござります。

明石　同じ御殿の女中でも町から上つた者などは、覺えがないので後につき、よい氣味でござんすな。

關屋　それはさうと今打つたは正八つのお時計ゆゑ、政尾樣のお部屋へ行き、

浮舟　別條のないお屆けして、御交代を、

四人　願ひませう。（ト合方にて四人は舞臺へ來り、）

柏木　政尾樣、お目覺めで、

四人　ござりまするか。（ト此の時上手障子の内にて、）

政尾　先程より皆さんのおいでを待つて居りました、ト只今それへ參りまする。

ト合方きつばりとなり、上手障子の内より政尾片外し好みの被布、八丈の部屋着、中老のこしらへにて徒然草の本を持ち出來り、上手に住ひ、

柏木どのを始めとして、毎夜替らず御殿のお夜詰め、御苦勞に存じます。して何も替りはござりませぬか。

柏木　正四つのお時計を合圖といたしてわたくし共は、御錠口より奥境御寢所のお杉戶まで、

明石　持場々々の隅々隈々殘る所なく見廻りましたが、今宵は宵から空も曇り、

闘屋　一入淋しい秋雨の、たゞお雨戶を打つ音ばかり、

浮舟　外に怪しいこともなければ、お屆けがてら交代を、

柏木　お知せ申しに、

四人　參りました。

政尾　それは御苦勞でござりました、譬にもいふ秋の夜の長いにつけてお引から、枕に附けば眼はさえて持病の癇が起つたり、寐られぬまゝに兼好が徒然草を二三枚繰返して讀むその中に、正八つの

お時計を打つたと次から知せゆゑ、支度をしようと思ふ所へお前方のおいでにて、着替さへせぬ部屋着の失禮、どうぞ許して下さりませ。

柏木　政尾樣には何をおつしやる、失禮などゝは他人行儀、今お廊下で皆さんとお噂申してをりましたが、此の御殿にも多人數の朋輩衆はござんすけれど、皆御城下や鎌倉の町家に育ちしもの多く、踊や豊後の一節を申し立てに御奉公、

明石　お首尾をしたは遊藝ゆゑ、いざ鎌倉といふ時は後退りをして顫へるばかり、武藝を知らずばわたし共も祿盗人と言はれませうに、業前勝れしあなたのお側に朝夕お仕へ申したゆゑ、

關屋　劍術柔術は言ふも更なり、三十一文字さへお教へ受け、覺えた規模に此の度も非常の御警固仰せ付けられ、斯く夜廻りを勤むるも、是れ皆あなたのお蔭といふもの、

浮舟　申さば師弟の誼ゆゑ善いことでも惡いことでも、あなたの御意は背きませぬ、どうぞ此の上お見捨てなく、猶御教示をわたくし共へ、偏にお願ひ、

四人　申し上げまする。

政尾　おゝ頼もしい其のお詞、今改めて言ふではなけれど、わたしとても此のやうに身にも應ぜぬ中老役に立身したも、親々が、日頃教へし武藝の徳、秋の夜長の徒然草日暮し硯の海ならねども、深き

惠みの身の上話をまあ聞いて下さんせ。（ト合方になり、）元わたくしの父といふは御城下の天神前に久しく住ひし浪人にて、笠原武右衞門といひし者、劍術師範を業となし幽に其の日を送りしが、門弟多き其の內に、大月氏は幼少より手解きなせし弟子ゆゑに、我が子のやうに敎へしがそれが緣となり、恩義に報ふお心にや、當御殿へ召出されお姬樣を始めとして女中方に劍術指南、新參なれども中老役までお取立てに預かりしも、大月どのゝ御推擧ゆゑ、是れにつけても武家方へ御奉公を勤むるには、武藝を勵み一廉のお役に立つを心掛け、お前方も稽古に精出し、世間の人に後指をさゝれぬやうにしなさんすが、何より肝要でござりますぞ。

柏木　何時に變らぬ御親切な、政尾樣の御敎訓、

明石　疎かには聞きませぬ、これから一入精を出し、

關屋　武藝を勵み、わたくし共も、

浮舟　お上のお役に立ちますやう、

柏木　心懸けるで、

四人　ござりませう。

政尾　ほんに私としたことが、此の身の素性をお話し申し、餘計な暇を費やしました、これから先きは

柏木　夜明けまで政尾が代つて勤めるゆゑ、お前方は部屋へ行き、ゆつくり休息したがよい。

明石　お詞に随ひまして、わたくし共は部屋へ參り。最前頂戴いたしました御酒を開いて戴きませう。

柏木　柏木さんは御酒好きゆゑ、八つを打つたら戴きませうと、ほんに猫を見るやうに喉を鳴らしてお待ち兼ね、

關屋　丁度幸ひ宿から寄越したお煮染で、幕の内でもこしらへまして、

浮舟　贔屓役者の噂でも、いたしまして樂しみませう。

柏木　左樣なれば政尾さま、

明石　明朝お目に、

四人　掛りませう。

ト唄になり、四人は政尾へ挨拶をして下手杉戸の内へ入る、跡合方になり、政尾思入あつて、

政尾　今も今とて話しに出し恩義重なる大月さまは、身分も輕き足輕の元は悴であつたれど、武藝は元より世才に長け、當殿樣のお覺え目出度く、御家老方に續きし勢ひ、人に勝れし御器量を見込んでお賴み申さねばならぬ心の密事をば、先刻窃に申し送り、今宵八つの廻りが濟んだら、爰へ忍んでおいでの約束、時刻も過ぎしに今以て、おいでのなきは心がゝり、（ト思入。此の時時の鐘がすめ

て、雨車になり。）今聞えるは御城下の、大乘寺の八つの鐘、海に響きて吹送る風の便りかばらばらと窓に音する秋雨も彼のお方かと思ふのは、やつぱり心の迷ひなるか、あゝ、待つは久しいものぢやなあ。

ト是れをキツカケに誂へしんみりとした獨吟になり、政尾は此の內行燈の燈火を掻立て讀みかけの本を讀む、これと一緒に下手より大月藏人繼上下大小好みのこしらへにて四邊を窺ひながら出來り、部屋の口にて咳拂ひをする、これにて政尾は心附き入口へ來り、

政尾　大月樣か。

大月　政尾どの。

政尾　先づ〳〵これへお通りなされませ。（ト小聲にて言ふ、大月思入あつて、）

大月　然し女中の部屋へ入りては

政尾　いえ、御心配には及びませぬ、八つより先きのお夜詰は、わたくしが當番ゆゑ氣遣ふ者はござりませぬ。

大月　然らば許しやれ。（ト又獨吟二の句になり、大月は政尾の案內に連れて部屋の上手へ住ひ、思入あつて、）扨、公務に暇あらざるゆゑ、お約し申せし時刻を違へ、大き延引いたせしが、互ひに毎夜の宿直に

て寸暇を得ねば斯くの仕合せ、豫てお文に細々と認めありし文體にては、何か手前へ折入つてお頼みとある御身のお筆、心ならねば取敢へず爰まで忍びまゐりしが、今宵手前へお頼みの樣子は如何なる事なるか、疾く〳〵此の場でお話し下され。

ト思入にて言ふ　政尾は言兼し思入にて、

政尾　さあ、其のお頼みと申しまするは。

大月　如何なる仔細か、少しも早く、

政尾　さあ、其のお頼みは、

大月　さあ、何事でござるな。（ト詰寄る、政尾言ひ兼る思入にて、）

政尾　さあ、其のお頼みと申しまするは、わたくしではござりませぬ。

大月　なに、其許でござらぬとな。（トぢつと思入。）

政尾　あなた樣へ折入つて、お頼みなさる其のお方に、只今お逢はせ申しませう。

ト又獨吟になり、政尾は思入あつて立上り、上手の障子を明けると、内よりお貞裲衣裳妾好みのこしらへにて、政尾に手を取られ出來り耻しさうに大月を見る、大月もびつくりしてずつと立つて下手へ行かうとするを、政尾引留めるを大月振拂つて行くを、ぢつと留める、是れと一緒に獨吟いつぱい

に切れろ。
大月　すりや、お頼みの主といふは、
政尾　お貞樣でござりまする。
大月　むう。（ト思入。誂への合方になり、）
お貞　樣子言はねば物堅い大月どのゆゑ不審は尤も、此の場をお立ちなさるのは、更々無理にはあらねども、あなたへお頼み申さねばならぬ大事がござりまして、今宵竊に政尾が部屋へ、掟を破り忍びしも、打捨ておかれぬ此の身の安危。まあ〳〵お待ち下さりませ。
大月　我師と頼む笠原の娘政尾が頼みにより、拙者が掟を破りしが思ひ掛けなきお貞どの、何ゆゑ爰へお忍びありしぞ。
政尾　さあ、其の媒はこの政尾、假にもお奥の束ねをする中老役の身を以て、共に嚴しい掟を破るも、お上へ盡す忠節ゆゑ。
大月　何と言はるゝ。
政尾　たゞ何事も御遠慮なされず、心の丈を、いやさ、心の曇りの晴れるやう、大月樣へあなたから早くお話しなされませ。（トこれにてお貞思入あつて、大月と顏を見合せこなしあつて、）

お貞　今更改め言はずとも、大月どのにも御存じなれど、我が身は御家來野村が娘、お召仕となりてより君のお胤を身にやどし、慶之助様をお儲け申し、同じ年にお菊どのがお持ち申せし金次郎様、こちらは日數も五日先き御誕生ありしかど、お國元ゆゑ將軍家へお屆け遲く、それゆゑ正しく御二男でありながら御三男のお取扱ひ、それさへ悔しく思ひしに我が君さまの思召しにて、慶之助様には御三男のお名さへ取りて御家來分、昨日までは一ッ間で金次郎様と竝び立ち、御膳を共に召上りしも、今日は一間を隔てねばならぬ禮儀は家來の悲しさ、これといふのも殿様の御意に叶ひし御愛妾お菊の方が皆計ひと、思へば胸も張裂くれど、女子の愚痴と身を嗜み、決して人には語らねど、忠義深き大月どのゆゑ、日頃の恨みをお晴らし申すも、何卒あなたのお情にて元の通り御三男にお成りなされまするやう、慶之助様のお力に見掛けてお頼み申します、聞き屆けて下さりませ。

トお貞思入にていふ、此の内大月は始終思案の體にてちつと思入あつて、

大月　如何なることをばお頼みかと、拙者も心痛いたせしが、お持ち申せし御三男慶之助様のお身の上、お胸の内を包まずにお明しあつて某を力と頼むと仰せらるゝ御親子の情御尤も、其のお心にほだされて、いやさ、其のお心根が御不便ゆゑ、則ち今日よりお力に、藏人なるでござりませう。

お貞　そりや大月どのには、わらはの願ひを、
政尾　あの、お叶へ下さりまするか。
大月　如何にも、御荷擔いたしまするは、一方ならずお貞どのには舊恩のある某ゆゑ、命に替へてもお力に一骨折るでござりませう。
お貞　して又、わらはへ舊恩あるとは、
政尾　そりやどういふ譯でござりまする。
大月　御存じなくば此の場にて、舊恩のある大略をお話し申すでござりませう。（ト合方になり、）元某が父と申すは身分の輕き足輕にて、長次兵衛と申すもの、則ちお貞どの、御親父たる、野村氏のお組下、身貧な暮しに某を育みかねて居つたるを、常に組下に目を掛けられ慈悲專らの御親父ゆゑ、厚き御恩を下されしと常々父が物語り、何卒御恩報じたく心に忘れず今日まで思ひしことの甲斐あつて、今宵窃にお賴みを承はるも亡父の導き、深き御縁もござりますれば慶之助樣のお力となり、再度御世にお出し申す手段もござれば何事も、この藏人の方寸に收めてよろしく計らひ申さん。
お貞　御承知とあるからは、これでさつぱり此の胸の、曇りも晴れて一度は、虧けたる月も元々へ、

政尾　再びお家の三男にお成り遊ばすそれまでは、たゞ何事も穩密に。
大月　如何にも、壁に耳ある譬、殊に御殿は佞人讒者舌の劍の多ければ、萬一他人に覺られなば、互ひに及ぼす身の破滅、中々油斷はなりませぬ。
お貞　なに、油斷がならぬと、
政尾　おつしやりまするは。
大月　古來の掟を重んずる老臣方を始めとして、一家中の者共は此の大月が出世を嫉み、自滅をさせんと此の程より窃に目論む彼れ等が計策、お心得の爲めお二人へ内ノこれにてお話し申さん。（ト合方替つて大月思入あつて、）今もお話し申せし如く、某元は卑賤より殿のお覺え目出度して斯かる身分に登用され、千五百石の食祿を穢す出世は稀なりと老臣方の憎しみ受け、旣に先頃我が君よりのお許しあつて、同勤たる浦井主膳が娘お波を拙者が妻に申し受けんと、結納までも遣はせしに、娘は若黨曾平治と不義いたせしと言ひ拵へ、彼等二人の首を打ち屋敷へ送り、其の儘破談を請ひしも主膳が策と、窃に探索いたせしに果して拙者が賤しき素性を嫌ひしゆゑと申すこと、斯くまで我れを輕蔑なす浦井が心中憎みても猶餘りあり、たゞ此の上は我が君へ讒を構へて申しなさば、老臣たり共役替させ自滅さするは易けれど、急がば事を仕損じ勝ちと、胸に納めて時を待

ち、この返報を計らんと、心を碎いて居ります。

政尾　其のお噂も聞きましたが、如何に筋目が賤しきとて殿の上意を背きし上、可惜我が子を殺してもあなたと緣を組みたくないとは、思へば浦井はかたくな者、頑固とやらでござりませう。

お貞　それに引替へ我身などは、叶ふことなら大月どのと。

大月　え。（ト兩人顏見合せ、ちよつと思入あつてお貞氣を替へ、）

お貞　さあ、只何事も此の上は、我が身の願ひが叶ふやう、力となつて下さりませ。

ト媚きし思入、大月も思入あつて、

大月　それも拙者が胸に收め、時節を待つて計らひ申せば、御三男は愚なこと、御總領にもなられませう。

お貞　え、そりや御家臣の列に加はり、當時日蔭の慶之助樣を、

政尾　事によつたら御總領に、

大月　お成りなさるゝ其の手段は、他聞を憚る一大事、迂濶に口外なり難し、

お貞　どうか安心する爲めに、此の場に於てあなたの口から、

政尾　うつす心の鏡さへ、くもる此の場の忍び合ひ、

大月　互ひの胸を明し合ひ、
お貞　心の謎が解け合うても、
大月　憚り多き、
お貞　人目の關。
政尾　今宵も最早夜半過ぎお夜詰番はわたくしゆゑ、誰も參る氣遣ひなければ、其の御心配には及びませぬ。
大月　然らば暫時一間にて、
お貞　積る話しを。（ト大月の側へ寄るを政尾隔て、）
政尾　あもし。
大月　いざ、御密談いたすでござらう。
と眞面目に言ひ、唄になり兩人よろしく思入あつて上手障子の内へ入る、政尾これにてほつと思入あつて外を窺ふ、此の時雨車風の音になり、
政尾　雲間の星もいつしか隱れ雨持つ空にまたばら〳〵、あゝ、今宵はしつぽり、（ト以前の本を下へ置くを道具替りの知せ、）降りさうぢやなあ。

トよろしく思入、此の模樣時の鐘、合方雨車にて、此の道具廻る。

（御殿奥庭の場）――本舞臺正面奥深に御殿の前側を見せ、これに續いて庭の泉水築山の書割り畫心の遠見、上手へ寄せて二間通し高足の二重庇の軒口を見せ、雨戸を一面に閉切りたる御殿の床下を見せたる道具、この前石の手水鉢同じく鉢前の植込み、下手に柳の大樹、所々に秋草の下草、石燈籠柴垣上下は網代塀にて見切り、日覆より霞附の灯入りの月をおろし、總て多賀家奥御殿庭先き、夜の體よろしく、やはり雨車時の鐘合方にて此の道具納ると、下手より深見十藏黑の四天同じく頭巾一本ざし、忍びの裝にて出來り、四邊を窺ひ思入あつて、

十藏　宵の内から雨氣づき、降るかと思へば直に晴れ、譬にもいふ秋の空、然し斯うして忍び込むには屈竟のこの日和、彼のお方から賴まれた事をまんまと仕果せれば褒美にありつく仕事だが、流石は大家の奥御殿、先づ是れまでは忍び入つたが、名に負ふ根太は厚板に切拔くこともたやすからず、命を瀨戸に働いたら石に立つ矢の例もあり、殿の寢所はこの御殿、床下傳ひに忍び行き、たゞ一突きに、おゝ、さうぢや。

ト身ごしらへして行かうとする、此の時上手より三五郎袴股立大小赤合羽饅頭笠、足輕のこしらへに

て出來り、十藏の前へ立塞がる、十藏ぎつくり思入あつて行き掛けるを、三五郎刀の鐺を捉へ、たぢたぢと引戻し、ちよつと兩人立廻つてきつとなり、

三五　かゝる事もあらんとて、豫て夜廻りに姿を扮し、殿の警固の廻り先き闇はあやなし黒出立ち御殿を窺ふ怪しき曲者、最早脱れぬ尋常に、覺悟いたして繩にかゝれ。

十藏　えゝ猪口才な曲者呼はり、要害堅固と聞きながらそれを承知で奧庭まで忍び込みしは伊賀流の、忍びの術を得たる某、汝等ごときに易々と搦めとらるゝ者ぢやあねえわ。

三五　假令如何なる術ありとも忠義を頭に戴きて、鐵石心の我が手並、やはか遁してなるものか。

十藏　何を小癪な。

ト兩人ちよつと立廻り、トゞ十藏は口の内にて印を結ぶ、これにてドロ〳〵やうの風の音になり、月雲に隱れ舞臺は眞闇になる、三五郎は不審の思入、十藏は懷より一通の手紙を落し思入あつて、つか〳〵と花道へ行き、舞臺の三五郎を見て、

大箆棒め。

トにつたり思入あつて印を解く、これと一時に舞臺は元の通り明るくなり、十藏は悠々と花道へはひる。跡三五郎は向うを透し見て、

三五　やゝゝゝ、姿は見えねど聲あつて跡を晦まし何時の間にか、此の場を脱れ失せたるは、扨こそ彼れが詞の內に、伊賀流の忍びの術を得たると言ひしが、不思議や月は雲間に隱れ、目ざすも知れぬ眞の闇、あれぞ則ち忍びの術か、はて不思議なこともあるものぢやなあ。

ト向うを見て思入、この時ばたばたになり、下手より伴平同じく足輕にて、六尺棒に提灯を持ち急ぎ足にて出來り、三五郎を見て、

伴平　久松さま。

三五　そちや伴平か。（ト此の提灯の燈火にて以前十藏が落して行きし手紙を拾ひ、不審の思入にて、）灯りをこれへ。

伴平　はツ。（ト提灯を出す、三五郎は件の手紙の宛名を見て、）

三五　これぞ慥に曲者が、取落したる此の一書、（ト開いて讀み下し、）やゝゝゝ、こりや同藩の浦井が手蹟、

伴平　なに、浦井樣か、（ト伴平は思はず提灯を出す、三五郎件の手紙を隱し、）

三五　こりや決して他言を、（ト提灯の灯りを吹消すを道具替りの知せ、）いたすまいぞ。

ト手紙を巻き納め懷へ入れる、此の模樣時の鐘、烏笛にて此の道具廻る。

政尾　最早夜明けにござりますれば、人目にかゝらぬ其の中にお殘り惜しくもお二人さま、早うお歸りなされませ。

（長局の場）━━本舞臺元の長局の道具に戻る。と以前の政尾上手障子の内へ向ひ、と四邊を窺ひ言ふ、これにて障子の内より以前の大月、お貞、鬢のほつれを搔上げながら出來り、

大月　思はぬことにて夜明けまで手間取りしは拙者が不覺、政尾どのに心配かけ、何とも以て恐縮いたす、してお賴みの一條も、委細承知仕つれば、必ずお案じなされますな。

お貞　嬉しい仰せに何事も、胸のつかえを下しましたが、まだ此の外にお話しも、海山あれど夜明けゆゑ。

政尾　又もや後して、好い首尾に、

大月　ゆるりとお話し申すでござらう。（ト行き掛るをお貞刀の鐺を押へ思入あつて、）

お貞　必ず共に今の事を、あなたお忘れなされますな。（ト言ふ、大月はお貞の顏をぢつと見詰めて、）

大月　何の忘れてよいものぞ、萬事は拙者が、（トお貞の手を振拂ひ、氣を替へ、）胸にござればお案じあるな。

お貞　お嬉しう存じまする。（又寄添ふを政尾隔て、）

政尾　あもし、大月樣、
大月　お別れ申すでござりませう。
ト大月は思ひ切つて下手へ行く、お貞も同じく部屋の入口へ出る、政尾は始終素知らぬ顏にて態と本を讀んでゐる。此の模樣よろしく知せなしに舞臺半廻しになる、これと一時に小壁の附きたる一間二枚引違への障子、部屋入口の中仕切りを出し、此の外總て長局廊下を見せたる心になり、大月お貞は
ト、別れを惜しみたる思入にて行かうとして、向うを見てびつくりなし、
大月　南無三、向うへ玉笹めが。
お貞　見咎められては、互ひの身の上。
ト兩人あわてゝお貞は下手杉戸の内へ入る、大月は思入あつて袖にて顏を隱し下手へ入る、合方烏笛になり、花道より玉笹片外し中老の裝にて出來り、花道にてきつと向うを透し、不審の思入にて、
玉笹　今政尾どのゝ部屋よりして出しは正しく男女の人影、まだ東雲のほの暗く主は誰とも白紙の障子へうつりし二人の姿、掟嚴しき長局へ、はて合點の行かぬことではある。
ト思入あつて舞臺へ來りお貞が落したる簪を拾ひ取り、透し見て、扨はといふ思入にて、
正しく、これは。

ト大きく言ふ、これにて舞臺の政尾はびつくりして、そつと入口の障子をあけて外を窺ふ、玉笹は下手へ目を附け、

扨は、今のは。

政尾　え。

ト思はず兩人顏見合せ、政尾はびつしやり障子をしめるを木の頭、玉笹は以前の簪を懷へしつかり納める、政尾は南無三といふ思入、兩人氣味合のこなしよろしく烏笛合方にて、

ひやうし　幕

四幕目

六月新屋敷の場
鳰川堤闇討の場
同川下漁船の場

「役名＝大月藏人、小田大炊、安宅鄕右衞門、百姓大六、浦井左源太、左枝主馬、高木淺右衞門、野田八郎次、船頭網六、名島瀧右衞門、川村慶次、小道具屋金兵衞。大月妻お照、腰元お梅、同お菊等。」

（新屋敷玄關先の場）＝本舞臺上手へ寄せて二間の玄關、瓦庇式臺左右海鼠ぶちの杉戸、正面の鏡

白地大形の襖、上の方武者窓のある白壁裾通り板羽目、下の方一面の土塀、眞中よき所に屋根附きの門、扉を明け、此の内築山泉水などを見たる庭中の片遠見、塀の内より紅葉の梢を見せて舞臺前よき所に松の立木、總て鳰川新屋敷玄關先きの體。爰に野田八郎次袴裝一本ざし諸士の打扮にて草履をはき立掛り居る、下手に名島瀧右衞門、川村慶次羽織袴大小の侍にて同じく草履をはき立掛り居る、此の見得琴唄へ調べの鳴物を冠せ幕明く。

八郎　先づ庭中の御案内も豫て斯くの通り、御兩所さまへ麁茶なりとも差上げたく存じますれば、先づ先づ奥へお通り下さい。

瀧右　いえ、其の御配慮は忝ないが、華美を盡せしお庭内を拜見いたして立歸るさへ身の面目と存じまするに、お手當などに預つては、却つて痛み入りまする。

慶次　日頃御入懇の其許が御案内下さればこそ、斯く結構なる御庭内を隈なく拜見が出來ますれど、手蔓がなくては隅々まで拜見は出來ませぬ。

八郎　何れ近日座敷披露の宴會がござりますれば、其の節御沙汰をいたすでござらう。

瀧右　いやも申すまではござりませねど、當時多賀家の御家臣では、飛鳥を落す勢ひの御當家さまでござるゆゑ、それに縋つて我々も、大月樣のお引立てを蒙りませねばならぬ身の上。

慶次　それに引替へ片意地なる馬鹿者の浦井主膳、我が君樣のお媒介にて娘を當家の御主人へ縁附けよとの上意をもどき、如何なる仔細か若黨の曾平次といへるものと、不義して居ると婚儀を斷り、

瀧右　兩人共に首級を刎ね、其の緣邊を破談にせし報いは忽ち囘り來て、いつぞやお庭へ忍びし曲者久松氏が捕押へんといたされし折、落せし密書が證據となつて、浦井親子は先頃膳部へ毒藥を仕込みしことまで疑ひかゝり、緣者の方へ預けの身分。

慶次　左樣な惡事がござるゆゑ、忠義無類の藏人樣へ緣組なすを嫌ひしか、兎角當時は家柄などを自慢いたすは野暮の至り、氏や系圖を訊さうより富家を見込んで緣者となり、身の安全を計るのが肝腎要と申すもの。

八郎　御兩所樣の仰せの如く、それなればこそ浦井に引替へ、重役左枝主馬殿には、息女を當家へ緣附られ緣家とお成りなされしゆゑ、我が君樣のお覺え目出度く、毎日御實家へ當家より貰ひ物の裾分けばかりも、たやすいことではござりませぬ。

瀧右　我々共も別品の娘か妹を持つて居つたら、せめて當家の御主人の、おていかけにでも差上げて出世の手蔓にあり附きませうに。

慶次　瓜の蔓には茄子は生らぬ譬の如く、賴み少ないことでござる。

八郞　何は格別、御兩所樣には、お奧へお通りなされませ。
瀧右　いや今日は、用事もござれば、
慶次　これにてお暇いたすでござる。
八郞　然らば又の御入來を、お待ち申して居ります。
瀧右　左樣ござれば、八郞次どの、
慶次　御主人へよろしく願ひます。
ト右の合方にて兩人捨ゼリフにて、普請をほめながら花道へはひる、八郞次後を見送りて、
八郞　いや何の事はない、開張場で靈寶物でも見せるやうに、每日々々庭の內を案內しては喋べり立て、胡麻摺連に見せるのも、扨々うるさいことではある、どれ、今の內休息いたさう。
ト八郞次玄關の內へはひる、やはり右の合方にて花道より小田大炊更けたる鬘羽織着流し一本差しにて吸筒の瓢簞を持ち、雪駄にて出來り、花道にて舞臺を見て、
大炊　長玄坊主めも非番ゆゑ、今日は宅にて酒宴を開き、榮耀な眞似でもして居るであらう、どれ押掛けて厭がらせてやらう。（ト舞臺へ來り、）賴まう〳〵。
ト呼ぶ、奧にてどうれといふ聲して、以前の八郞次出來り、大炊を見て、

八郎　又老耄めが。

大炊　何ぢやと。

八郎　いえなに、大炊樣には今日も、ようこそ御入來なされました。

大炊　いや〳〵必ずよくは參らぬ、無心があつて惡くまゐつた、大月どのへ取次いで下せえ。

八郎　（これにて思入あつて、）折角の御入來でござりまするが、主人は今日は他出いたし歸宅の程ち相知れませねば、又お出直しを願ひまする。

大炊　むゝ、然らば大炊が參つたら、留守だと申せと言附りしか。

八郎　いえ左樣ではござりませぬ。

大炊　左樣でなくば其の方が、虛言を構へて逢はせぬのぢやな。

八郎　いえ〳〵、全くもちまして。

大炊　然らば留守だと、なぜ申した。

八郎　留守に相違がござりませぬから、左樣申し上げてござります。

大炊　いや〳〵、只今鴫川の堤の上から見渡したれば、奧に居つたは慥に大月、

八郎　やあ。（トぎつくりこなし。）

大炊　はて、老眼なれども小田大炊睨んだ眼に相違はない、隱すとおのれ爲にならぬぞ。

トきつと言ふ。これにて八郎次間の惡きこなしにて、

八郎　それは、何時の間に御歸宅ありしか、ちよつと伺つてまゐりませう。

トそこ〳〵に奥へはひる。大炊こちらへ來り、

大炊　あはゝゝゝ、正しく虚言と存じたゆゑ、鎌を引ッ掛けやつたれば、彼奴驚いて行きをつた。

ト爰へ奥より高本淺右衞門袴裴一本ざしの家來にて出來り、

淺右　これは〳〵大炊樣には、ようこそ御入來遊ばしました、只今主人裏門より歸宅いたしてございますれば、いざ先づお通り下さりませう。

大炊　むゝ、扨は裏門から歸つたのぢやな。

淺右　御意にござりまする。

大炊　以前と違ひ大月も、手廣な邸を拜領したゆゑ、主人が裏から立歸つたを、取次の者の知らぬも尤も。いや、大きくなつて目出度い〳〵。

淺右　さゝ御案内をいたしますれば、お奥へお通り下されませ。

大炊　いや此の大炊は貧窮者ゆゑ、斯樣な手廣な宅へ來て物好きしたる普請を見ると、癪に障つてなら

ぬから、奥へ通らず此の所で、大月どのに面會したい、早々これへ呼んで下せえ。

淺右　いえ、これでは餘り端近ゆゑ、こちらへお上り下さりませ。

大炊　はて、身共はこれが勝手ぢやと申すに。（トきつと言ふ、此の時後にて、）

大月　なに、小田の御前が御入來とな。（ト聲して大月羽織着流し一本さしにて奥より出來り、式臺へ下り下に居て、）これは〳〵大炊樣には、ようこその御尊來、そこは端近先づ〳〵奥へ、いざ御案内いたしませう。

大炊　これは藏どの、いつもながら壯健の體、祝着いたす。

大月　御前樣にも御勇健の體、恐悦至極に存じまする。（トこれより合方きつぱりとなり、）

大炊　扨改めて申さずともぢやが、御身の父は長次兵衞と云へる鐵砲組の足輕にて、僅か二人扶持を頂戴いたし、いやぢゝむさい男であつたが、それに引替へ其の悴は、お茶坊主から立身なし今の身分は老臣格、扨々大層なものになられた、殊更今般我が君より邸地までを拜領なし、此の鳰川の流れを取込み美を盡したる此の普請、鐵砲組の足輕の子に、斯樣な器量人が出るといふは、大炊ほとんと感心いたした。いや、あやかりものだ、自慢さつしやい。

トいやに褒めることよろしく、大月又かといふこなしにて、

大月　なには格別餘り端近、今日こそは御前樣に、お目利顋ふ品もあれば奥へお通り下さりませ。
大炊　いや〳〵奥へ通る時は、座敷の普請庭の物好き、何とか言つて褒めねばならぬ、此の大炊無骨者ゆゑ普請の好みや木口などを見ても分からず褒めるも面倒、やはりかやうな玄關先きにて心置きなく話すのが、遠慮がなうて至極よい。（ト式臺へ腰を掛け居るゆゑ、）
大月　然らば只今お褥を、持參いたすでござりませう。
大炊　いや〳〵それには決して及ばぬ、この大炊宅にをつても、褥などを敷いたことがない。
淺右　でも、御老體をいとひますれば。
大炊　はて、板子の下は地獄なりと、世話にいへる船で乘出し閑を樂しむ此の老人、式臺ぐらゐは何でもない。
大月　小田の御前はお手輕を、お好みなされる御氣質ゆゑ、お心任せにいたしておきやれ。
大炊　それと申すもありやうは、窮して居るゆゑ負惜しみに、手輕を旨といたして居るのぢや。
大月　して、今日の御尊來は、何等の御用にござりますな。
大炊　外でもない、無心に參つた。
淺右　扨は金子の、

大月　あこれ。（ト目まぜで押へ〳〵）そは何なりと拙者めの、身に應じたる儀でござれば、仰せ聞けられ下さりませう。

大炊　いや〳〵大した事ではない、相も變らずこの中へ、酒の無心がしたいのぢや
　　ト件の吸筒を出す。

大月　へえ〳〵、御酒の御無心でござりますか。

淺右　さて〳〵小な、いえなに、小さく見えましても瓢は隨分はひりますれば、一杯詰めて差上げませう。

大炊　いや、これでも一桝餘は入らう、毎度ながら、ついでくりやれ。

淺右　委細承知いたしました。（ト淺右衞門吸筒を持ち奧へはひる、大月思入あつて、）

大月　斯樣な儀を申し上げるも、近頃以て失禮ながら、拙者の身分相應なる御用もあらば御遠慮なく、仰せ聞けられ下さりませう。

大炊　いや其の詞忝ない、斯くいふ大炊も二十歲程齡の若き時分なれば、御身の厚意を幸ひに、金子を借受け破損いたした宅の手入れでもいたして見るが、最早耳順の坂を越し見得も飾りもいらぬ身分、好きな酒でも呑みながら日頃好める手漁に出て網でも打つが何より樂しみ、外に望みの

なき上は金子の無心は決していたさぬ、たゞ飲みたいと思ふ折に酒の一杯づゝも無心に參り、お身の顏を見る毎に昔の事を思ひ出し、長玄坊と申せしものが、斯くまで立派に相成りしかと、素性を話すが好き保養ぢや、酒屋で小買にいたす酒は、水が交つてうまうない、一本生ゆゑこつちの酒を、我が呑料と極めて置くのぢや。

大月 それぞいとよりお易き御無心、御意に叶ひし御酒なれば度々お運びも恐れ入れば、好いのを選み明日にも一樽献上いたしませう。

大炊 いや〳〵樽でおくられても、手狹な宅ゆゑ迷惑いたす、當家にあれば我が宅に樽であるのも同然ぢや、やはり時折り吸筒へ一杯づゝ貰ひにまゐり、御身に逢ふのが樂しみぢやて。

大月 さて〳〵困つた。

大炊 や、

大月 いえ、お手狹ゆゑにお困りとあらば、手前宅へおくでござりませう。

大炊 いや、好い酒の問屋が出來た。

ト懷中より摺火打を取出し煙草を呑み居る、矢張り琴唄の合方にて、花道より金兵衛羽織着流しの小道具屋にて、槍の穗先を入れし箱を風呂敷へ包みて持ち、雪駄にて出來り、舞臺へ來て此の體を見て、

金兵　これは小田の御前様には、御當家にいらせられましたか。

ト下手下に居る、大炊金兵衛を見て、

大炊　誰かと思へば道具屋金兵衛、何を賣附けに參つたのぢや。

金兵　御當家様でお誂への、研ぎものを持つて參りました。

大月　然らば先日頼み置きたる、槍の研ぎが出來せしか。

金兵　これへ持參いたしてござります。

大月　只今誰ぞ參るであらう、暫くそれに控へて居やれ。

金兵　畏りましてござります。

大炊　（是れを聞きて、）大月殿のお好みでは、定めて立派な槍であらう、大炊拜見いたしたい。

大月　いえ、さしたる品にはござりませねど、津田助廣の銘あるゆゑに此の程求めてござります。

大炊　津田ものなれば見事であらう。どれ、ちよつと拜見いたさう。

大月　それ金兵衛、御覧に入れよ。

金兵　どうか直段を聞かれぬやうに、いえなに、御覧に入れまする。

ト箱のまゝ大炊に渡す、大炊出して見ることあつて、

大炊　おゝ此の槍は先達て、見覺えのある助廣ぢやな。
金兵　へい、先頃御覽に入れましたが、御緣があつて御當家樣へ、願ひましてござりまする。
大炊　して此の槍は大月殿、いくらで此方求められたな。
金兵　そりやこそ危ない、いやなに、ぴか／＼光ります。
大月　五十金にて先達て、彼れより求めてござりまする。
大炊　むゝ、手前が先頃聞いた時は三十金だと申したが、もう二十金直が上つたか。
金兵　いえ、あの節は私が直段を申し違へましたが、五十金が缺けましては、賣れぬお槍でござりまする。
大炊　いや／＼それは呑込めぬ、道具屋仲間で小股すくひと噂をされる其の方が、何で言ひ違ひをするものか。こりや裕福なる當家ゆゑ、二十金直賣りをしたな。
金兵　いえ、左樣ではござりませぬ。（ト困る思入。）
大炊　いや／＼何も隱すに及ばぬ、高く賣るのは貴公の働き、直賣りをしても好い譯は僅か二人扶持を頂載せし長次兵衞といふ足輕の悴が、當時食祿三千石の老臣格に立身したれば二十や三十高く買ても後腹の病める氣遣ひなし、爰等で金を儲けねば儲ける所がないといふもの、それには家來の取次人に、賄賂も少しは出さねばなるまい。いや、これは失禮御免下せえ、あはゝゝゝゝ。

ト笑ふことよろしく、爰へ奥より淺右衛門以前の吸筒を持ち出來り、

淺右　これは、お待遠さまにござりました。

大月　何故斯樣に手間取りしぞ。

淺右　折惡しく樽底ゆゑ、新たに口を附けまして、好いのを詰めて參りました。

大炊　それは千萬忝ない、又樽底にならぬ内、折々貰ひに參るといたさう。

大月　何時なりとも御用の節は、仰せ聞けられ下さりませ。

淺右　して今日は御前樣には、何れへお越しなされまする。

大炊　相も替らず鳰川へ一汐打に出掛けるのぢや。

金兵　小田の御前は御遊漁が、何よりお好きと見えまする。

大炊　いや、これが一つの病ぢやて。

大月　然らば船までその御酒を、家來に持たせて遣はしませう。

大炊　いや〳〵左樣な手數をかけるは、此の大炊きつい嫌ひぢや、やはり年寄相應に一瓢の飲を腰につけ漁に參るが何より樂しみ、人は身分を顧みて、たかぶらぬこそまことの侍、兎角匹夫の成上りはたかぶりたがつてならぬものぢや。いや、これはしたり、大月殿御身のことではござらぬから、

必ず心に止めぬがよい。

大月　いえ、餘所ながらの御教訓、有難く心得まする。

大炊　さう聞いてくれゝば悅ばしい、然らば身共は、自由ながら頂き立ちにいたさう。

大月　端近ゆゑにお茶さへも差上げませぬ此の失禮、平に御容赦下さりませう。

ト皆々辭儀をなす、大炊吸筒を持ち立上り、

大炊　いや〳〵左樣な詫に及ばぬ、身共は當家へ參つても、やはり以前の長左坊に面會いたす心得なれば、我がまゝ無禮は互ひのこと、然らばこれにてお暇申す。

大月　又の御出でを相待ちまする。

大炊　いや、よい酒の問屋が出來たわえ。

ト謠への琴唄になり、大炊件の瓢簞を持ちしまゝ、悠々と花道へはひる、後三人これを見送り、

淺右　御前樣、嘸御無念にござりませう。（トきつといふ、大月金兵衛へ思入あつて、氣を替へ）

大月　いや無念には少しもない、我下賤より斯くまで出世なせしを、餘所ながら御異見下さる小田の御前、御厚意の程謝して居るのぢや。

金兵　承はれば大炊樣は多賀の御家のお主筋、小田家のお末と申すことにて、我儘御免のお客分、お役

もなければお賄ひも僅かと見えて御貧乏・位だふれの御前樣で年中遊んでおいでなされるが、よくまあ、あれであの年まで、通つたものでござりまする。

淺右 取り分けこちらの御前樣が、以前のお身を顧みて尊敬すればよいかと心得、弱身へ附入り惡口雜言、思へば憎きあの老耄。

大月 あゝ、これ、滅多なことは言はぬものぢや。(トぢつと押へる。)

金兵 してお誂への此のお槍は、これでよろしうござりまするか。(ト大月件の穗先を手に取上げ見て、)

大月 おゝ、これでよいから柄をすげて、早速持参いたしてくりやれ。

金兵 木枯らしがしてござりますれば、早速仕上げて明日にも、納めまするでござりませう。

淺右 今お次ぎにて聞いて居つたが、三十金の品とあれば、そちに如在はあるまいな。

金兵 いや、ありや大炊樣のお聞き違ひ、五十金では元直でござりまする。

大月 はて其の斷りには及ばぬから、早速仕上げて持参いたせ。

淺右 その節、如在はあるまいな。

金兵 いや、とんだ尻尾を、いえなに、これにてお暇いたしまする。

ト金兵衛は件の槍の箱を持ち花道へはひる。爰へ奥よりお照人柄のよき屋敷女房のこしらへにて出來り、

お照　わが夫へ申し上げまする、御新宅のお悦びとして、里の親父が只今參りましてはござりまするが、大炊樣のお差合に、裏御門よりお奥へ通り、お待ち申して居られまする。

大月　なに、主馬殿が御入來とな、幸ひ我等も閑暇ゆゑ、奥にて一獻催ほさん。

淺右　そのお相手は拙者めが、萬事持ち切りお取持ち、

お照　定めて左樣と存じますゆゑ、支度を申し附けました。

大月　よくぞ支度を申し附けしぞ。

淺右　然らば料理を取り急がせ、

お照　ても氣短かな高木どの、

大月　酒に目のなき男ぢやわえ。

ト唄になり大月先きにお照、淺右衞門附いて奥へはひる、これより床の淨瑠璃になり、

〽秋の日も七ツ下りか窶れたる裝も田舍の堅氣親仁、西へ傾く日影より薄き影さす門內へ苦
苦しくも立留り、

ト此の內花道より大六百姓の親仁やつし裝にて小風呂敷の包みを持ち、藁草履をはき出來り、花道に留り思入あつて、

大六　成程、これでは世間の人が惡くいふのも無理ではない、舊安寺村の狩人の忰が、如何に出世するとて滅法界な此の普請、こりやとつくりと才九郎に、異見をせねばならぬわえ。

〽呆れながらに其處此處と、見歩く體を玄關口、家來がそれと見咎めて、

ト此の内大六舞臺へ來り、あちこちと見廻して歩く、爰へ玄關の奥より以前の八郎次出て大六を見て、

八郎　やい〳〵〳〵、見苦しい下司親仁め、何をうろ〳〵いたして居るのだ。

大六　はい〳〵御免下さりませ、わしやあ田舍から來たから、屋敷の勝手は知りませんが、大月殿の屋敷とやらは、爰のお家でござりますか。

八郎　やあ大月殿とは無禮なやつ、恐れ多くも御當家は當時多賀家のお覺え目出度き大月樣の邸内なるわえ。

大六　その大月の主人どのに逢はねばならぬことがあつて、態々出掛けて參りました。御面倒ではござりませうが、どうぞ取次いで下さりませ。

八郎　やあ大月樣に逢ふなどゝは身の程知らぬ無禮な奴、扨はおのれは狂人だな、たわけたことを申さずと、見逃してやるから、早く通れ。

大六　はい〳〵それは有難い、どれ〳〵勝手に通りませう。

〽遠慮會釋も內證の緣者と知らぬ八郎次、呆れかへつて突き飛ばし、
ト大六式臺より上らうとするを、八郎次突き退け、

八郎　えゝ、通れといふは門外へ早く出ろと申すのだ、おのれの樣な下司親仁を、奧へ通してたまるものか。

大六　いえ下司親仁でござりませうとも、通つてもよい節があるから、態々尋ねて來ましたのだ、舊安寺村の大六が、出かけて來たと取次いで下さい。

八郎　やあ左樣な奴に大月樣が、何で自身にお逢ひなさらう、申し上げたき儀があるなら、なぜお臺所の口へ廻り、這ひ蹲つて願はぬのだ、お玄關より遠慮もなく通らうなどゝは無禮な奴、氣違ひ親仁め控へ居らう。

大六　いえ氣違ひぢやあござりません、舊安寺村の大六だと、取次がつしやれば分ることだ。

八郎　えゝ、わいらの樣な下司親仁の取次いたす身共でない、お臺所へ廻り居らぬか。

大六　それぢやあ、此方は大月どのゝ、家來衆ではござりませぬか。

八郎　やあ左樣な雜言聞く耳ない、勝手にそれにてほざいて居れ。

〽言ひ捨て奧へ入りにける、跡に大六呆れ果て、取次ぐものもあらざれば、

ト八郎次奥へはひる、大六思入あつて、

大六 なんぼ伯父でも、才九郎が斯ういふ立派な構へをした屋敷の主人になつて居れば、それと露に言つたなら耻であらうと遠慮して、たゞ大六と名を名乗り奥へ取次してくれと、頼めど家來は樣子を知らねば、こつちの身装が汚ないゆゑ匹夫下郎と見下して、氣違ひ親仁と思ふも尤も、こりや出直して庄屋どのから、借着でもして逢ひに來ませう。

〽是非も内縁主人には、伯父に當りし身ながらも姿耻らひ立ち出づる、外に聞ゆる童唄、

ト大六花道の方へ行く、

〽月はてる〳〵沛井は曇る、角の梅の木灯をとぼす、衣も織らしやれ小笠も縫やれ、茂る尾山はかはりやせぬ。（ト流行唄模樣よろしく、大六これへ聞耳を立て居て、）

ありや門外を小供等が唄うて通る流行唄、唄の心を舊安寺の方丈樣に聞いたので、現在甥の才九郎が増長したを戒めの唄といふことを始めて知り、爰へ來る道里の子が唄ふを聞くも忌はしく異見をしようと出て來たが、歸る矢先きへあの唄を聞くも天より此の伯父に、異見をしろといふ知せか、こりや臺所へ廻つても、逢うて行かねばならぬわえ。

〽立戻りしが氣おくれし、（ト大六思入あつて、）

いや／＼こんな裝をして、臺所へ行き取次を頼んだところが、今のやうに匹夫下郎と見下られ、取次をしてくれ手もあるまい、それよりいつそ出直して、借着でもして來るとしよう。

〽行きつ戻りつ門内に立ち惱みたる後の方、

ト大六花道の附際にてよろしくこなし、此の時玄關の奥にて、安宅郷右衞門の聲にて、

郷右　おいやそれなる御老人、暫くお待ち下されい。（ト呼ぶ。）

大六　誰やら、わしを呼んだやうだが。

〽見返る後へ立出る安宅はそれと覗ひて、

ト玄關の奥より郷右衞門袴裝一本ざし用人のこしらへにて出來り、式臺へ下り會釋のこなしにて、

郷右　承はれば其許は舊安寺村のお百姓大六さまと申すこと、豫て主人のお話しに承知いたせし伯父御さまと、存ぜぬ先きゆゑ取次の家來が粗忽、幾重にも御容赦願ひ奉つる。

〽いと丁寧に出迎へば大六心に打ち悦び、（ト大六こちらへ戻り。）

大六　さうしてわしの名を聞いて、呼戻さしやつたお前さまは。

郷右　拙者は當家の用役たる、安宅郷右衞門と申すもの、以後はお見知り下さりませう。

大六　成程、ちよつと見ましても又用人は用人だけ、何處やら立派な所がある、伯父と名乘らも面目な

いが、知つてござると聞いて見れは隱した所が駄目なこと、どうぞ主人の大月どのに取次をして逢はせて下さい。

鄕右　只今主人へ申し入れ、お逢はせ申すでござりますれば、先々奥へお通りなされい。

大六　いやも樣子を知らぬ田舍親仁、何處から通つてい丶ことか、何分指圖を賴みまする。

鄕右　あいや當家の主人の伯父君なれば、なに御遠慮が入りませうや、いざ〳〵これよりお通りなされい。

大六　それでは其處から通つても、大事ないと言はつしやるか。

鄕右　さあ御遠慮なしに、いざ〳〵これより、

大六　そんなら、そなた許さつしやりませ。

〽身を耻らひて玄關口、上る足さへ式臺に砂の型おく土ほぜり、それと知らねば八郎次出合頭に又見咎め、

ト此の内大六式臺へ上り草履をとつて泥をはたき、式臺の上へ置き、手拭にて足の砂を拂つて居る、爰へ奥より以前の八郎次出來り、此の體を見て、

八郎　や、こりや何ゆゑ安宅氏には、

郷右　あいや、御身知らずや、此の御仁は、わが主人の伯父御でござる。

八郎　え丶、そんなら、これが。(ト呆れし思入。)

大六　さつきは、いかい、(ト手鼻をかんで鼻を撫でるを道具替りの知らせ、)お世話でござつた。

トにつたりと笑ふ、郷右衛門は苦々しきこなし、此の模様琴唄の合方調べの鳴物にて道具廻る。

(廣書院の場)‖本舞臺一面の平舞臺上下折廻し白地大形の襖、正面上の方九尺の床の間、此の次地袋違ひ棚、この下手白地大形の張壁、舞臺花道共薄縁を敷詰め、花道揚幕の所杉戸の出入り、總て邸内廣書院の體、床の送りにて道具留る。

〽入りにける、奥の廣間も落成の、普請成就にあら玉の春にはあらで青疊、盛る榮花に天井の好みの板も廣々と華美を盡せし廊下口、案内に連れて大六が通る座敷の間數さへ算へ切れざる結構は、目を驚かすばかりにて四邊きよろ〳〵打通れば、安宅は上座へ敬ひて、

ト此の内よき程に花道より以前の郷右衛門先きに立ち、大六を連れて出來る、大六花道にて四邊を見廻し、びつくりせしこなしにて舞臺へ來る、郷右衛門大六を上手へ住はせ下座へ下り下に居て、

郷右　只今主人がこの席へ、御挨拶に出でますれば、暫時お控へ下さりませ。

大六　どうかよき樣に願ひまする。

鄕右　こりや腰元衆、何れにござる、お茶煙草盆をお出しなされい。

〽暫く御免と鄕右衞門目禮なして出て出く、後差し替りたる腰元が運ぶ茶菓子や煙草盆、折目正しき高蒔繪、目八分にぞ携へ出で、

ト此の內鄕右衞門は辭儀をなし、下手の襖の內へはひろ、よき程に下手よりお梅お菊の腰元高蒔繪の煙草盆、高坏の菓子、高茶臺の茶などを持つて出で、大六の前へよろしく並べ下手へ下りて手をつかへ、

お梅　お麁末にはござりますれど、

お菊　お客さまにはお茶、お菓子、

お梅　召上られて、

兩人　下さりませう。

〽敬まはれる程氣が詰り、（ト大六こなしあつて、）

大六　いや、わしやァ田舍者でござりますから、行儀作法は知りません、必ず構つて下さりますな。

お梅　只今是れへ御主人樣が、御挨拶においで遊ばしますれば、暫くお待ち下さりませ。

お菊　又御用でもござりますなら、お次に控へをりますればお手をお鳴らし下され、

お梅　お呼びなされて、

兩人　下さりませ。

大六　さあ〱次へ行かつしやつて、構はず用を達さつしやい、構はれぬのが勝手でござる。

お梅　左樣なれば仰せに任せ、

お菊　お次へ參るでござりませう。

〽樣子知らねば腰元が顏見合せて打ちほゝ笑み、お次へこそは立つて行く、跡に大六溜息つき、（ト腰元兩人下手へ入る。大六思入あつて、）

大六　こりや脂煙管で、煙草をのむのもどうやら勿體ないやうだ。

〽羅宇の脂より氣の詰る手作り煙草の面ぶせ、合はぬ緣者が尋ね來て、邪魔と思へど一間より大月藏人立ち出でゝ、それと見るより慇懃に、

ト此の內大六煙草を呑むことよろしく、よき程に上手の襖をあけ、以前の大月袴裝にて出來り、下手下に居て、

大月　一別以來伯父上には御面會もいたさゞりしが、以前に替らず御健勝の體、思ひがけなき御入來は大慶至極に存じまする。

大六　〽詞正しき挨拶も、見違へるほど身の出世、伯父は悦ぶ氣色なく、（ト大六思入あつて、）
今は大月藏人とて、立派な身分になつたさうだが、伯父の目からは昔に替らぬ、長次兵衛の悴才九郎、その氣で挨拶しますぞや。

大月　これはしたり伯父上には、改まりたる其のお詞、この身の運に叶ひまして今は斯樣な身分と相成り、立身出世をいたしましても、親なき後は伯父が親、などお斷りに及びませうや。それゆゑにこそいつぞやより舊安寺村へ使ひを立て、度々御招待いたせしかど、御意に叶はぬことあつてか御尊來がござりませぬゆゑ、餘儀なく音信不通に打ち過ぎ御疎遠と成り居りましたが、今日態々御入來は願うてもなき拙者の悦び、幸ひ只今親族の客來あつて酒宴を開き、聊か料理も調ひ居れば、御隔心なく御ゆるりと、打ちくつろいで古へのお話しなりと拙者めに、仰せ聞けられ下さりませ。

〽奸智の辯に言ひ廻せど、解けぬ心の堅氣親仁、（ト大六思入あつて、）

大六　何さま、いつぞや使ひを寄越し親切らしく言つてはくれたが、知つての通り此の伯父は、僅かな田地を人から預り小作をしてゐる水呑百姓、體の膏を絞らねば暮しの立たぬ身分ゆゑ體に暇は微塵もない、それゆゑ無沙汰に打ち過ぎたが、人の話しに聞いたより一倍まさる此の出世、伯父も大きに魂消たわえ。

大月　さゝお悦び下さりませ、させる功なき拙者めも十六歳のその昔お茶坊主にて召出され、運に叶ひて太守さまのお覺え目出度く立身なし、今は則ち三千石の御高祿をも頂戴いたし、御家老席に列なる拙者、かゝる邸宅を我が君より拜領いたす身分と相成り、この身が昇進いたすにつけ、亡き父母の懷しく、せめて一人の伯父上なりとお招ぎ申して親同樣御介抱をもいたしたく、先頃使ひを立てましたが、御尊來がござりませぬゆゑ、實はお恨み申してござる。

〽伯父の心を和らぐる手段に乘らぬ年の功、

大六　いや折角の志しだが、假令その日の糧に盡き、かつゑ死して果つるとも、こつちの内の世話になり介抱受ける心はない、おれは却つて此のやうに、出世したのが案じられる。

大月　なに、出世せしをお案じあるとは。

大六　こりや才九郎、まことに世になき兩親を今懷しく思ふなら、今見せるものがある。なぜ此の位牌を

〽永の年伯父の所へ預けておくぞ。

〽飾る詞も剝かゝる箔も斑な古位牌。（ト大六件の風呂敷包より誂への位牌を出して見せる。）

大月　やゝ、其の位牌は、（トびつくり思入。）

大六　法名釋妙立信士俗名大月長次兵衛と記しあるのはこなたの父、十七年の其の間伯父の所の佛檀に

親の位牌が居候、まこと亡父が懐しいと思ふ心があるならば、疾くにも手元へ取寄せて、追善供養もする筈を、これまで忌日年回にも顔出し一ツせぬこなた、それでも親が懐しいか。

大月 さあ、それは。

大六 餘人は知らず此の伯父は、富流那の辯の氣休めを、まことのこととは聞いて居ぬ、言はうやうない不孝者めが。

〽道に背きし行ひを押へられても胸の内、俄に企む早速の辯。

ト大月思入あつて氣を替へ、

大月 すりや伯父上には拙者めが、父の位牌をそれなりにお預け申して置きし故、不孝な奴との御立腹そは重々の御尤も、さはさりながら伯父上にも拙者が胸中一通り、何卒お汲分け下さりませう。(下これより誂への合方になり、)世の諺にもいへる如く、すまじきものは宮仕へと、匹夫下賤の腹より出で、斯く立身をいたせしは、中々容易なことにあらず、君の御心始めとして重役方の心を兼ね、下は中間小者にまで、心をおいて勤めませねば、下賤に出でし身を以て歴々方の次席へたりとも列なる出世はなり兼ぬれば、實に寢食を忘るゝ程心を碎き忠勤に聊か油斷をいたされませねば、勿體なしとは存じますれど冥府に於て親共の佛の目にて見る時は、我が胸中も明かならん、

兎にも角にも此の身さへ立身なせし其の上では親の家名を引起し、今の不孝は後年に至りてお詫びをせんものと、心に忘るゝ隙もなく既に先頃使ひを立て伯父上なりとお招き申し、父の位牌も改めて我が手元へ引取らんと御招請を申し入れしが、御意に叶はぬことあつてか御承引がござりませぬゆゑ、存じながらこの御無音、御立腹にはござりませうが、かゝる譯ゆゑ伯父上にも拙者が胸中御賢察偏に願ひ上げまする。（ト思入にて言ふ、大六も思入あつて、）

大六　成程それは匹夫からこんな立派な身分にまで、立身出世をする程だから、容易なことではあるまいが、それは昔の亂國に譽れを上げたお人のやうに、智慧や武勇の功を顯はし槍先きを以て出世をしたなら、譽れにもなり親の家名を引起したといふ廉もあれば、身寄りの者も悦ばしいが、それとこれとは雲泥萬里、そちの出世は道ならぬ奸智を以て君に諂ひ、地組のしてなき立身ゆゑ一ツ大地を踏み違ひ轉ぶ時には眞ツ逆さま、八萬奈落の底までも落ちるは目前のあたり、そこへ心が附き居らぬか。

大月　こりや伯父上のお詞とも近頃以て心得ず、忠義を磨き斯くまでに立身なせし拙者めを、君に諂ひ奸智を以て出世せしとはお情ない、次第によつては伯父上とて、こりや聞き捨てには相成りませぬ。

大六　やあ知るまいと思ひ居るか、おれは言はねど天知る地知る、此の頃多賀の御城下始め近在まで、小供等が唄うて歩く流行唄、そちの耳には入らぬか。（ト合方きつぱりなり、）今もこつちの門外を小供が唄うて通つたが「月はてる／＼浦井は曇る、角の梅の木灯をともす」と、誰が作りしか知らねども唄ふ唱歌はこの伯父も何のことやら氣も附ず、昨日菩提所舊安寺へそちの親父の十七年の逮夜に當れば方丈さまへ、お願ひ申して塔婆なりと建てお貰ひ申さうと、頼みに行つて四方八方の話しの内に方丈さまが、扨怪しからぬ唄が流行り、打ち捨ておけばこなたの身にも拘はることゆゑ今のうち、異見を加へさつしやれと、思ひも寄らぬお諭しに、どういふ譯と聞いて見れば、こなたの甥の大月どの、今多賀家にてお覺え目出度く、稀な出世をさつしやつたを妬む輩があると見え、月はてる／＼浦井は曇ると唄ふは正しく同家中の、浦井主膳といふお人が大月どの、讒言にて無實の罪に苦しむを、心ある侍は月の傾く時節を待ち燈火を照し居るといふ心を籠めし唄の末、角の梅の木灯をともすと唄ふは正しく角屋敷の、佐渡さまなりとの判斷を始めて聞いてびつくり仰天、これも亡父の長次兵衞が、草葉の蔭から此の伯父に異見を頼むと方丈さまに、言はせることかと心附き、態々異見に出掛けて來た。假令小供のざれ唄でも御城下はじめ在方まで流行るといふはこれ天命、伯父が異見に基いて向後その身の辭職して元の農家へ引込むか、但し諸

人の憎しみを受けても榮耀を盡したいか、返事次第でこの伯父も、料簡がある聞かせてくりやれ。

〳〵否と言ひなば刺違へ死する覺悟の懷へ、隱し持つたる鎌の刄も、研ぎすましてぞ躊躇ける。

ト此の内大六懷より手拭へ包みし鎌の刄を出し片側へ置いてぢつと詰寄る。大月この體を見てぎよつとせし思入あつて氣を替へ、

大月　は、ツ、斯くまで厚き伯父上のお情こもるお諭し、如何で違背がござりませうや、取分けまして今日は亡父の忌日の年回に當るは正に冥土より、父がこの世へ尋ね來て異見をいたしくれしかと思ひ當れば拙者めも、肝に銘じて有難く、其のお詞に隨ひまして明日にも君へお暇願ひ、在所へ引込み一生を送る所存に決しますれば、先づ今晩は伯父上にも御一泊をなされまして、麁末ながらも御酒一獻獻じたく存じますれば、打ちくつろいで御ゆるりと召上り下さりませう。

大六　いや〳〵それは却つて迷惑、厚い手當に與るより内へ歸つて樂々と、身分相應麥飯の茶漬を喰ふのが樂しみだ、達て馳走がしたいなら、心を入替へ在所へ歸り、伯父に安心させた上ゆつくり馳走をして下さい。

大月　左樣に仰せござりますを、無理にと申すも恐れあれば、然らば、御意に任せまする。

大六　そんならきつとこの伯父の、異見について辭職を願ひ、在所へ引込む心ぢやな。

大六　おゝさうしてくれゝば此の伯父も、安心するといふものぢや。

（ト件の位牌をとつて風呂敷に包むゆゑ、）

大月　はて、それなる父の位牌の前、なに僞りを申しませうや。

大六　それで少しは落着いた、然し在所へ引込むのが、遅いと又候出て來ますぞ。

大月　いえ、辭職願ひのお暇が、叶ひますれば早速に、在所へ退身いたしまする。

大月　何卒位牌はその儘に、置いてお歸り下さりませ。

大六　いや〳〵在所へ歸るまで、伯父が預りおかねばならぬ。

大月　左樣ござらば伯父上には、

大六　日の暮れぬうち歸るとしよう。（ト位牌を持ち立上ろ、大月下手へ向ひ、）

大月　誰ぞ居らぬか、お見送りをいたせ。（ト呼ぶ、下手にてはツと答へ、以前の淺右衛門出來り、）

淺右　いざ、御案内仕つりませう。

大六　勝手が知れねば、教へて下さい。

大月　然らば、何れ近日に、

大六　よき挨拶を待つて居ますぞ。

〽家來の手前かねの音も入相告ぐる灯ともしや、暮れるを厭ひ出で、行く、
ト淺右衞門先きに立ち、大六心の急くこなしにて煙草入を忘れしまゝ花道へはひる、大月是れを見送りぢつと思入、
〽跡見送りて大月が思案に吐息つぎの間の、襖押し明け鄕右衞門四邊窺ひ進み出で、
ト下手より以前の鄕右衞門出來り、下手に住ひ、

鄕右　御前樣、御賢慮如何にござりまする。

〽問ひかけられて大月は、態と是非なき體に見せ、（ト大月こなしあつて、）

大月　伯父の異見に言はれし如く、斯くまで世上で某の出世を妬み居るとあれば、此の身の運も早や是れまで、功成り名遂げて身退き、元の農家へ落つるとも末の安泰計るより外に思案はあらざるわえ。

鄕右　すりや豫てより拙者めに、お明かしありしお望みも、

大月　天知る地知る世の諺、思ひ止まらにや相成らぬ。

鄕右　あいや御前、そりやお詞とも覺えませぬ。（ト誂への合方になり、）そりや早かねてお望みの、大事を知られし證據にても、人手に渡り露顯と相成り、伯父御がそれを御存じにて、御異見にでもご

ざつたなら、他より漏れざる其の内に辭職を願ひ身を退き、御謹愼をなさるといふ場合もないとは申されませぬが、お次に於て承はれば、寺の坊主が童唄を當て推量の諭しから、正直一途の伯父御さまが、扨はさうかと思ひ詰め態々異見にござつたは、取るに足らざる世間の噂、それぞあなたの御出世を妬む輩が流言なし、策を設けしたわれ唄、左樣なことは古へより往々ある習ひと聞き及べば、何の恐るゝことあらん、それを恐れて故なくも辭職の願ひお出しあらば、却つて諸人に疑惑を受け一大事にも及びませうかと、憚りながら存じますれば、今一應の御賢慮を偏に仰ぎ奉つる。

〽右の肱と賴みたる安宅の心探り得て、大月喜悦の眉を顰め、

ト大月あたりを見廻し、小聲になり、

大月　こりや鄕右衞門、して其の方の所存では、如何いたして夫の伯父の憂ひを避くる心なるや。

鄕右　そりや拙者めが申しませうより、御前の御賢慮仰ぐ所、大事の前の小事ゆゑ思ひきらずば相成りますまい。

大月　むゝ、そりや其の方も思ひ切る氣か。（ト思入よろしく、）

鄕右　達者に見ゆれど老の足、跡を追掛け參りなば、

大月　何れ歸りは鳰川の、堤傳ひの夕まぐれ、

鄕右　丁度今宵は宵闇に、思ひきるのも人知れず、

大月　むゝ、然らば伯父に安堵させよ。

鄕右　承知いたしてござりまする。

〽折から目に附く煙草入。（ト大月は大六の忘れし煙草入を見て、）

大月　おゝ幸ひ伯父が取り急ぎ、忘れて行きし此の一品、

鄕右　お屆け申すはよき手掛り、

大月　遠く參らぬ其の內に、

鄕右　跡追ひ附いて、お渡し申さん。

〽それとあらはに言はねども、以心傳心主從がほつれを綴る煙草入請取りてこそ、

ト此の內大月、鄕右衞門へ煙草入を渡しながら、氣味合の思入あつて、

御免。

〽いそぎ行く。（ト鄕右衞門は逸散に花道へ入る。）

〽深き樣子は白地形、襖あらはに明け象ねる親子は一間立ち出で、、

ト此の内上手襖をあけ左枝主馬更けたる鬘、羽織袴大小にて出る、これへ以前のお照附添ひ出て、

お照　最早夕景にござりますれば、お暇申すと父上が、御挨拶に参りました。

大月　これは〳〵、（こなたは大事を聞かれしかと、心ならねば引留め、）（ト大月思入あつて、）舅君には折角の御入來なるに、よしなき客が參りしゆゑ、ろく〳〵お構ひ申しませず、失禮の段御免下さりませ。

主馬　いや〳〵左樣な御配慮では、却つて我等痛み入る、娘が酌にて先刻より數獻頂戴いたしたれば、最早お暇仕つる。

大月　いえ折角の御入來ゆゑ、是非に拙者がお相をいたし、今一盞差し上げたければ、何卒お席へお歸りあるやう。こりや〳〵女房ども、どういふものぢや、なぜお引留め申さぬぞ。

お照　定めて左樣と存じまするゆゑ、達てお留め申しますれど、夕景なればとおつしやりまして、お席をお立ちでござります。

大月　いや〳〵夕景なればとて、御遠方といふではなし、送らす者はいくらも居る、然らば御酒はお勸め申さず、お話しなりと伺ひたければ、今暫くの御着座を曲げてお願ひ申しまする。

主馬　左ほどまでに言はるゝなら、これにてお茶を頂戴いたさう。

大月　何卒左樣に願ひまする、それ、お茶をこれへ持參いたせ。

お照　はあ、。

〽妻は心得立つて行く、後に大月それとなく探る心の裏問ひに、

トお照は上手へはひる、大月思入あつて、

大月　いやも舅君の御入來を樂しみをりし甲斐もなく、差合あつてろく〳〵に、お構ひ申し上げませぬが我が立身を妬みしものが家中に多くある樣子、必ず油斷をいたすなと親切に知らせてくれし客來あつて、思はずも失禮いたしてござりまする。

主馬　何樣左樣な儀もあらん、こりや申さずとも知れし事ぢやが、酒興の戯れお聞き下され。（ト合方きつばりとなり、）先づ物事と申すものは、盈れば虧くる習ひにて、餘り十分になりまするると障りが出來てよろしくない。其許の身に譬へていはゞ、大月といふ名月も夫の望月の望み通り、十分盈ちたる上にては虧けねばならぬ憂ひあり、されば下弦の片割れより上弦に見る三日月を君子は尊敬いたすとやら、我等に於ても十分に醉の迴らぬ其の内に、七八分にてお暇いたせば、必ず共に大月氏、心にあせり滿月に成られぬ方が好くござるぞ。

〽月によそへし教訓も、樣子を知るや殊勝氣に、（ト大月思入あつて、）

大月　仰せの如く高木は風に折らるゝ譬ゆゑ、愼しむ心で居りますれど、募り易きは驕奢の餘り斯く十二分の普請をいたし、今日に至りましては餘り身分に過ぎたる儀と、後悔いたして居りまする。

主馬　いや其の心でさへ居らるれば、假令如何ほど身に過ぎし普請ぐらゐをいたされても心配めさることはござらぬ、只よしなき田地を潰し、

大月　や、

主馬　いやさ、田地は國の寶ゆゑ、邸宅などにはせぬがよい。

大月　只今となり拙者めも、それのみ後悔いたして居りまする。

〽折から妻が茶の給仕、不手前ながらと差出せば、

ト上手よりお照紫の帛紗へ黑樂の茶碗を載せ持つて出で、主馬の前へ出す、主馬呑むことよろしくあつて、

主馬　こりや、結構な服加減ぢや。

大月　御意に叶はゞ今一服、

お照　差上げるでござりませう。

主馬　いや、これも内輪にいたしておかう。

ト茶碗を下へ置く、此の留り花道より以前の八郎次出來り、舞臺下手下に居て、

八郎　はゝ、左枝樣のお迎ひが、只今おいでにござりまする。

主馬　迎ひとあらば丁度よい、是れにてお暇いたすでござらう。

大月　餘り風情ござりませねど、仰せに任せ又の御入來を、

お照　お待ち申すでござりませう。

主馬　こりや七八分と思ひしが、いつか十分過したやうぢや。(ト立上る。)

大月　それ、玄關までお見送りをいたせ。

お照　はあゝ。(ト立たうとするを、)

主馬　あいや、御家來衆がお出であれば、其の見送りには及ばぬぞ。

お照　でも、わが夫の申し附けゆゑ。

主馬　はて、其の申し附けも後でとつくり、いや、最早とつぷり暮れるであらう。

大月　然らば、仰せに任せ、

お照　これにて御免を蒙りまする。

主馬　終日馳走に相成り申した。

〽家來が案内老の身の醉も廻りし廣書院、廊下傳ひに立歸る。

ト八郎次先きに主馬花道へはひる、大月心にかゝる思入あつて、

大月　こりや女房、只今そちに舅殿が、樣子あり氣な詞の端、仰せおかれし事でもあつてか。

お照　はい、先刻これへお見えなされし、あなたの伯父御のお話しを、襖の蔭にて聞きしゆゑ。

大月　扨は樣子を。（ト思入あつて氣を替へ）して〳〵、何と仰せありしぞ。

お照　さあ、實に尤もなる伯父御のお詞、聞かぬ分にて立歸れば、跡にてとつくり御異見を申すがよいと言附けて、戻られましてござりまする。

〽疵持つ足に大月は、妻の心を探らんと、（ト大月思入あつて、）

大月　こりや女房、そちや某にあのやうなる賤しき伯父があると知つては、定めし愛想が盡きたであらうな。

お照　いえ〳〵何で勿體ない左樣なことがござりませう、假令身裝は賤しうても心に錦を着てござる伯父御樣ゆゑわたくしは、あなたが元の農家へ交はり御逼塞をなされましても、舅と思ひ伯父御樣を大事にかけねばなりませぬ。

大月　すりや、鄕右衛門が申せし事をも、

お照　はい、殘らずお聞き申しました。

大月　それでは出世の望みも止め、辭職願ひをせずばなるまい。

お照　して何ゆゑに郷右衛門に、伯父御の跡を追つかけさせ、あなたはお遣りなされました。

大月　あれは失念なされたる、お煙草入を屆ける爲めぢや。

お照　それもどうやら御樣子が。

大月　はて、最早望みを、（ト立上るを道具替りの知らせ）思ひ切るのぢや。

〽心ならずも、

ト床の三重、時計の音にて兩人氣味合のこなしよろしく、此の道具廻る。

（鴫川堤闇討の場）――本舞臺一面中足の二重、後へ下げて八枚飾り、前面棧欄伏せの土手、柵の杭、舞臺前一面の浪板、浪布を敷詰め、二重の上の方屋根のある石の地藏、前に線香立ての石、左右に納め幟など大分に立てあり、下の方に柳の立木、後一面在體夜るの遠見、總て鴫川堤川端の體、浪の音にて道具留る。と木魚入りの合方になり、花道より以前の大六出來り、花道に留り、

大六　達者自慢で不斷から九里や十里の道を歩くは、隣りへ行くも同然とちつとも苦にはせなんだが、

年ほど怖いものはなく僅か七里の舊安寺村から、此の鳰川まで出て來たので歸りは足が棒になり杖でも欲しくなるといふは、これもやつぱり年のせゐだ。向うへ行つて地藏の前でどれ一休みして行かう。（ト右の鳴物にて舞臺へ來り有合ふ捨石へ腰を掛け。）いや草臥れたも尤もか、まさか田舎に居るやうに屋敷へ行つて胡坐もかゝれず、長い間坐つて居たので痺れが切れる足は痛む、あんなこつ／＼した疊の上へ產れて始めて坐つて見たが、これを思へば侍ほど世に窮屈なものはない、煙草もおち／＼呑めやあしない。（ト腰を探り見て。）さあしまつた、煙草入がない、扨はあすこへ忘れて來たか、これも矢つ張り年のせゐだ。

ト此の時ばた／＼になり、花道より以前の鄉右衛門看流し尻端折り、大小跣足にて足早に出來り、花道にて舞臺を透し見て、

鄉右　それに居らるゝは、大六どのか。（ト大六この聲を聞き、花道を見て。）

大六　なに、わしの名を呼ばつしやるは。

鄉右　おゝ、大六どのでござつたか。（ト舞臺へ來り。）やう／＼のことで追ツ附きました。

ト大六鄉右衛門をよく／＼見て、

大六　おゝ、さう言はつしやるお前さんは、さつきお世話になつたお人だ。

鄕右　いかにも屋敷でお目に掛りし、安宅鄕右衞門と申すもの。
大六　さうして、何でわしの跡を、こなたは追うてござらしやつた。
鄕右　お忘れものがござつたゆゑ、お屆け申しに參つてござる。
大六　そんなら若しや煙草入を、持つて來ては下さらぬか。
鄕右　お察しの通り煙草入を、お渡し申しに參つてござる。
大六　やれ〳〵それは有難い、よく持つて來て下さつた。（ト鄕右衞門懷より以前の煙草入を出し、）
鄕右　慥にそちらへお渡し申す。
大六　はい〳〵慥に受取りました、こんな穢ない煙草入でも、無いと不自由でござりますから、今も困つて居りましたに、態々お持ち下さるとは、成程武士は武士だけに、物堅い所があるわえ。
ト摺火打を出し煙草を呑み居る、鄕右衞門あたりへ思入あつて、
鄕右　いやなに大六どの、とてものことにお宅まで身共が送つて進ぜるから、日はとつぷり暮れたれどゆつくり休んで行かつしやい。
大六　いや、其の思召しは有難いが年は取つてもわしやあ百姓、五里や十里の夜道を歩くは、何とも思つて居ませぬから、其のお送りには及びませぬ。

鄕右　いや左樣でもござらうが、主人に送れと申し附かり此の儘屋敷へ歸つては、身共の役目が相濟まねば、是非ともお送り申さにやならぬ。

大六　さういふ譯なら送つた積りで、時刻を延して歸らつしやい、わしやあ是れまで夜道を歩き人に送つて貰つたことがないから、獨りで氣儘に歩くが勝手、却つてこなたに送られては窮屈で困ります、さあ〳〵早く歸らつしやい。

鄕右　いや送られるが窮屈なら、お身は勝手に歩かつしやい、身共は主人の言付けゆゑ途中に別條なきやうに、後からついて見え隱れ、こなたの宅まで送らにやならぬ。

トくどく言ふゆゑ、大六扨はといふこなしあつて、

大六　それ程までに言はつしやるなら、後から附いてござるもいゝが、送り狼同樣に轉ぶを待つてござりはせぬか。

鄕右　なんと。（ト誂への合方になり、）

大六　伯父の歸りが案じられ、あとから家來を追掛けさせ、送らす心の甥ならば、わしも態々田舍から異見に出ては來ぬが、小供の時から惡賢く親の目にさへ餘りし性根、おのれが榮耀な眞似をすれば人はのめつて死なうとも何の構はう筈はない、それとも伯父の異見につき惡い心を改めて、わ

しを案じる料簡なら、中間にでも言附けて提灯持ちに相應な小者が跡から來さうなもの、田舍親仁に歷々の屋敷の法は知らねども、送る家來に事をかき川人だとか言はつしやる、こなたに態々送らすとは胸に一物なければならぬ、疑ひかけし此の伯父の、詞に無理はござるまいがな。

トきつと言ふ、これにて鄕右衞門思入あつて、

鄕右　さう悟られたら何もかも明して言つて聞かせるから、あまり時代な言草だが、冥土の土產に聞いて行け。

大六　そんなら、やつぱり、この伯父を。

鄕右　おゝ、察しの通り、殺しに來たのだ。

大六　えゝゝゝゝ。（トびつくり思入、これより木魚入りの合方になり。）

鄕右　田舍堅氣に侍の心を知らぬ馬鹿親仁、殺すといふも殺生だが、打捨ておかば伯父甥の緣は脫れぬ土ほぜり、臭味の脫けぬ泥䭈で淸き主人の田地まで荒す心と見たゆゑに、案山子にあらぬ弓取りの腰に帶せし大小は伊達にはさゝぬ直燒刄、曲る刄金の銹鏉より遙かに切れる剛刀で、命の苅込みいたさうから、田から行くとも畦道を廻つて彼の世へ行かうとも勝手な方へ志し、其の身の年貢を納めてしまへ。

大六　そんならおのれが大月の、懐刀で媚び諂ふ鈍刀武士の相摺りめか、年は取つても此の大六、めつたに切られてたまるものか。

郷右　やゝ、小癪なるよまひごと、身不肖ながら一流の奥儀を極めた我が一刀、受けられるなら受けて見よ。

大六　えゝ、ふざけたことをぬかし居るな。

ト波の音になり、大六郷右衞門へ武者ぶり附くを郷右衞門附け廻して拔打ちに大六を切下げる、大六たぢ／＼となり下手へどうとなる、郷右衞門上手にてきつと見得、これより誂への合方になり、大六は懐より以前の鎌の刄を出し、よろぼひながら立掛るを、郷右衞門よろしくあしらひ又一刀浴せる、大六叶はず上手の石地藏の廻りを逃廻り、幟などを遣ひ立廻りあつて、トゞ郷右衞門大六を切倒し乘掛つて止めを刺し、ほつと思入あつて、

郷右　思ひの外に手強き老耄、人目に掛らぬ其の内に。

ト死骸の着物にて糊紅を拭ひ刀を納め、大六を前の切穴へ打込む、これにて浪の花立つ、此の時郷右衞門の足へ以前の風呂敷包さはるゆゑ、手に取上げ開き見て、

こりや最前の古位牌、これがあるゆゑ主人の氣後れ、親仁と共に水葬禮だ。（ト同じく位牌を川へ打

込む、此の時花道にて人音するゆゑびつくりして、）南無三、誰やら來る樣子。

ト四邊を探り、落し物を心附け居る。合方きつぱりとなり花道より浦井左源太着流し大小草履にて、手丸子持筋の提灯を持ち出來る、此の内郷右衛門は手拭にて頰冠りをなし、舞臺下手にて互ひに避け合ひ、郷右衛門は花道の方へ脫れ行く。左源太これを見送り思入あつて、

左源　今のは慥に。

トこの聲を聞き、郷右衛門小柄を拔いて手裏劍に打つ、左源太提灯にて受け留め、きつとなるを道具替りの知せ、郷右衛門は逸散に花道へ入る、左源太は提灯へ立ちし小柄を拔き取り改め見る、此の模樣浪の音早き合方にて、道具廻る。

（川下網船の場）――本舞臺同じく中足の二重、土手續きの川下の體。後一面在體夜の遠見、二重の上下掛稻にて見切り舞臺前に浪板、浪布を敷詰め、眞中に誂へ丸物の網船、爰に以前の大炊好みの打扮にて投網を打つて居る、傍に網六腰簑の船頭にて、櫂をつかひ立掛り居る、此の見得、浪の音にて道具留る。

網六　もし御前樣、もうかれこれ上汐へ廻りますから、一服やつて洲の方へ打廻すといたしませう。

大炊　上汐になつては洲の廻りを打廻すもよからうが、何にいたせ肝腎の酒がなうては心細い、貴公大儀ながら求めて來てくりやれ。

網六　御酒は先刻御持參の、吸筒の中にあるぢやございませんか。

大炊　いや／＼あれは酒ではない、有りやうは水を入れて來たのぢや。

網六　へえゝ、それぢやお水でござりまするか、わつしやァ又酒だと思つて樂しみにして居りましたがそいつお大きに買ひ冠りました。（ト大炊懷中より金を出し、）

大炊　序に何ぞ見つくろつて、煮染を少々求めてくりやれ。（ト網六金を受取り、）

網六　へい／＼よろしうござります、さうして御酒はどの位買つて參つたらようござりませう。

大炊　半桝ばかりあればよいから、極くよいのを買うてくりやれ。

網六　五合位ぢやこつちの口へ。

大炊　何ぢやと。

網六　いえ、あつちの德利へ入れて參りませう。

ト網六船より土手へ上り上手へはひる、大炊跡を見送り船の内より以前の吸筒を出し、

大炊　酒の無心にかこつけて、三日に揚げず大月方へ憎まれ口を利きに參るも彼か樣子を探らん爲め、

底意知れざる其の内は貰ひし酒も水同然、滅多に是れは呑まれぬわえ。（ト合方きつぱりとなり、大炊件の吸筒の酒を川へあけることよろしくあつて、）酒の來る内今一網、なんぞ獲物がしたいものぢや。（ト投網を捌き打つことよろしくあつて引上げる、此の時以前の位牌網にかゝつて上るゆゑ、大炊手に取上げ見て、）渡世柄とて網六が見切りを附けし川邊へ、打込む網に獲物はなく、二十日の闇の星影にきらめく箔の古位牌、はて異なものがかゝつたものぢや。（ト此の時月の上りし心にて東西の窓蓋をあけ明るくなる、大炊件の位牌をよく／＼見て、）幸ひの上汐時、東へ昇る月明り、夜目とはいへど明らかに讀み得る文字は釋妙玄、俗名大月長次兵衛と漆を以て記しあるは。（トちよつと考へ、）む、こりやこれ正しく大月の父なるもの、位牌ならん。はて、如何して此の川の流れへ打込みあつたるか。

ト合點の行かぬ思入。爰へ上手より以前の網六五合徳利と竹の皮包みを提げて出來り、船へ飛入り、

網六　御前樣、行つて參りました。

大炊　おゝ、思ひの外早かつた。さうして、何ぞ煮染があつたか。

網六　いえ、相變らず刻み鯣と、蓮の煮たのでござります。

大炊　おゝ蓮根とは好もしい、早速いつぱい呑ましてくりやれ。

網六　へい／＼畏まりました。（ト筒茶碗を出し、件の徳利の酒を酌をする、大炊一口呑み、）

大炊　こりや待ち詫びて居つたゆゑか、甘露の味がいたすわえ。
ト酒を呑んでゐる、綱六件の位牌へ目を附け、
綱六　御前樣、そりや位牌ぢやございませんか。
大炊　おゝさ、酒の來るうち一網打つたら、斯樣な位牌がかゝつたのぢや。
綱六　いや、何だか不氣味な掛りものだ。
ト此の時浪の音烈しく、上手より大六の吹替の死骸流れ來て、船へ當りし心、大炊思入あつて、
大炊　綱六、どうやら客のやうぢやぞ。
綱六　なに、客人が當りました。
ト氣味惡きこなし。大炊立上り有合ふ櫂にて件の死骸を打返し、月明りにてよく〳〵見て、
大炊　こりや生々しき、數ケ所の疵。（ト綱六これを見て、）
綱六　なるほど、なまだ、なまいだ〳〵。（トぶる〳〵と顫へて居る、大炊思入あつて、）
大炊　これで樣子が、（ト件の死骸を川へ突遣るを道具替りの知せ）はて、いたましい。
トぢつとこなし、綱六は顫へ居る、此の模樣浪の音にて道具廻る。

（大月邸廣間の場）――本舞臺三方襖しにて、元の大月の廣間へ戻る、所々に雪洞附きの燭臺を點し、上手に以前の大月住ひ、下手に淺右衞門控へ居る、此の見得合方にて道具留る、

淺右　御前樣には今晩は、まだお目覺めにござりまするか。

大月　ちと密々にて、鄕右衞門に用談あれば此所へ、參るやうに申してくりやれ。

淺右　はゝツ、委細承知仕つりまする。（ト淺右衞門下手へはひる。大月思入あつて、）

大月　大事の前の小事ゆゑ、止むを得ずして鄕右衞門に申し含めて遣つたが、先刻歸邸いたしながら否やを我れに言はざるは心掛りな今宵の仕儀、早く樣子が聞きたいものぢや。

ト爰へ下手より以前の鄕右衞門袴裝にて出來り下手に住ひ、

鄕右　御前樣、火急のお召しは拙者めに、何ぞ御用にござりまするか。

大月　深夜に及び是れへ呼びしは、先刻そちに申し附けし、失念ものゝ煙草入慥に屆けてくれたるか。

鄕右　仰せに任せ、鴝川堤に於て後追ッ附き、慥に、お屆け、（ト思入あつて、）申しました。

大月　すりや、あの、首尾よく。（ト思入。）

鄕右　はゝツ、お心安く思されませう。（ト氣味合の思入よろしく、大月につたりとこなしあつて、）

大月　いやそれに附き先刻は心附ずに居つたるが、今宵は多分鴝川へ大炊殿には手漁に出て居らるゝ筈

に承はりしが、三日にあけず我が方へ酒の無心に參るといひ、何かにつけて我が腹を探る樣子は間者に等しく、油斷ならざる望みの大敵、鳰川緣にて手漁をなす、船など見受けはせざりしか。

鄕右　何さま左樣承はれば鳰川堤の川下にて漁船一艘見受けしなれど、夫の煙草入を屆けましたは遙か隔たる川上ゆゑ、知れよう道理かつてなし、まつた望みの大敵とお心掛りにござりますなら、我が槍術の極意を以て彼のお方の他出を窺ひ、仕止めまするに何の手間暇、必ずお案じなされますな。

大月　然し相手は老體なれども、名に負ふ名家の末葉にて、武術勝れし一個の達人、容易なことでは討たれまい。

鄕右　いえ、どれ程の達人なりとも闇夜の礫は防ぎ難し、不意を窺ひ仕止めまするに、何の恐るゝことやあらん。

大月　然らばそちに賴みおけば、時節を計り仕止めくれよ。

鄕右　幸ひこの程お求めの、津田助廣の槍先きにて、首尾よく仕止め御覽に入れん。

大月　まことにそちは我が爲めの、兩の肱と賴みし腹心。

鄕右　それも主君と賴みしあなたの、御器量を見拔きしゆゑ。

大月　頓て成就の時來らば、

郷右　よしなに君のお引立て。

大月　その儀はかねて約せし如くぢや。

ト兩人密談のこなしよろしく。此の留りばたばたになり、下手より以前の淺右衛門走り出來り、

淺右　はッ、御前樣へ申し上げます、夜陰に及びとんだ者が、舞込みましてござりまする。

大月　そは何者が參りしか。

郷右　それにて早く言上めされ。

淺右　出掛けに御酒を御無心あつて、今日漁に行かれたる大炊樣が歸りがけとて、づかづか入つておいでにござりまする。

大月　なに、大炊殿が參りしとな。

郷右　夜陰の儀ゆゑ御主人は、最早お臥りなされしと、なぜお斷りを言はつしやらぬ。

淺右　いえ拙者も蟲が好きませぬゆゑ、其の通りを申しましたが、お臥りならば御寢所へ參りお枕元にて面會すると、遂に奥へはお通りなされぬお方の癖にづかづかと、這入つておいでゞござります
る。

大月　いや、さりとは困つた御仁ぢや。

鄕右　拙者がよしなに計らひませう。（ト立たうとする、此の時下手にて、）

八郎　あゝもし、おあぶなうござりまする。（ト聲する、）

淺右　最早これへおいでゞござりまする。

ト皆々下手を見て呆れし思入、合方きつぱりとなり、下手より以前の大炊、吸筒を腰に附けしまゝ酒に醉ひたるこなしにて、八郎次の肩へつかまり、ひよろ／＼しながら出來り、

大炊　いや、隱しても知つて居る、主人に面會せぬうちは、金輪奈落歸らぬ／＼。

ト此の體を見て、大月是非なくこちらへ來り、

大月　これは小田の御前樣には、只今御漁のお歸りにござりまするか。（ト大炊思入あつて、）

大炊　いよウ、大月どの起きて居られたか、先刻のお禮旁深夜も厭はず立寄りましたが、臥つて居らるゝと御家來衆が申されしとは事かはり、差支へなく出迎はれたは、流石多賀家のお覺え目出度き臣たるもの、心掛け、大炊ほとんと感服いたした、悴と思つて遠慮はいたさぬ、打ちくつろいで話して參るぞ。

ト舞臺よき所へどつかと住ふ、これにて皆々呆れしこなしにて、

郷右　小田の御前には御酩酊にて、こりや御歩行がなりかねませう。
淺右　お乘物など申しつけ、
八郎　お宅へお送り、
三人　申しませう。
大炊　いや／＼駕籠はよして下さい、貧窮もの、小田大炊、これまで駕籠に乘りつけねば、乘物など、いはれると却つて身共が閉口いたす、左樣な沙汰は止めた／＼。
大月　然らばお相手いたしますれば、これにて御酒を今一獻召上られ下さりませ。
大炊　いや酒と聞いては日のない親仁、悴と思ふ御身の持成し、何事おいても呑まねばならぬが、今宵ばかりはもう呑めぬ、酒は明日までお預けといたす。
大月　小田の御前は御大酒なりと家中でお噂いたしまするに、僅か瓢に一杯位で斯く御酩酊をなされまするとは、こりや御卑怯かと存じられます。
大炊　いや先刻の酒ばかりを呑んで居れば惡醉はせぬが、實はあれから船中にて呑み足りぬゆゑ、地酒を一桝買ひにやつてつぎ足したので、良い酒と惡い酒とごつちやになつて頭へのぼり、腹の中にて混亂いたす、もう／＼酒は呑めぬ／＼。

鄕右　然らばお宅へお歸り遊ばし、御寢なりまするがお身のお爲め、
淺右　夜も深更に及びますれば、
八郎　御歸宅あつて御養生を、
鄕右　成されまするやう、
三人　願ひまする。（トこれにて大炊顏を上げ、）
大炊　おゝ、こりや御家來衆が兩三人傅役をして居つたるか、あゝ丁寧に扱はれては、大炊甚だ迷惑いたす、當家の主人は悴も同然、歸る時には勝手に歸れば、銘々隨意に寐て貰ひたい。
鄕右　でも御前樣、
三人　御一人を、
大炊　はて、ちと內々にて藏人に手渡ししたい品もあれば、家來は次へ參るがよいぞ。
淺右　左樣ござれば、われ〳〵は、
八郎　お次へ御遠慮、
兩人　いたしまする。
大月　何事なりと御意に任せ、勝手に休息いたすがよいぞ。

淺右　然らば御免を、

兩人　蒙りまする。（ト淺右衛門八郎次辭儀をなし下手へ入ろ、鄕右衛門四邊へ思入あつて、）

鄕右　して內々にて御前樣が、主人へお渡しなされたいとは、

大月　如何なる品でござりまするな。

大炊　いや外でもないが、小田大炊今晚不思議な獲物をせしゆゑ、貰ひし酒の謝禮かた〴〵態々持參いたしたのぢや。

大月　して其の獲物と、

淺右
鄕右　仰せあるは。

大炊　餘の品でもない、此の位牌ぢや。（ト懷より以前の位牌を出して見せろ。）

淺右
鄕右　や、その品は。（トぎつくり思入。）

大炊　何と不思議な獲物であらうが。（トきつぱり言つて氣を替へ、）など、眞面目に申すもの〻、何がどうやら夢だ〳〵。（ト大月の膝を枕に寐てしまふこなし、鄕右衛門扨はといふこなしあつて、）

鄕右　それ知られたら、（ト刀の柄に手を掛けきつとなろを、大月目顏で押へ、）

大月　あこれ、お枕などには及ばぬぞ。

鄕右　でも此の儘に、捨て置いては、

大月　はて、容易にお風をめすやうな、御前樣ではあらざるぞ。

　　　トよろしく思入にて呑込ませる、これにて鄕右衞門は是非なく控へる、大炊頭を上げ四邊を見廻し、

大炊　いや、こりや我が宅と思ひの外、大月どの丶宅であつたか。これは失禮、いや、たわい〳〵。

　　　ト起き直つて打伏し居る、大月思入あつて、

大月　こりや誰そ居らぬか、お水を持て。

　　　ト呼ぶ、これにて上手襖の內にて、はツと答へて以前のお照盆の上へ銀の茶碗を載せ持つて出來り、

お照　大炊さまには殊の外御酩酊の御樣子ゆゑ、お冷をお上り遊ばしませ。御前さま〳〵

　　　と搖起す、これにて大炊顏をあげ、お照を見て

大炊　お丶大月どの丶お內室か、いや、何時に替らぬあでやか〳〵。こりや年寄りの冷水ぢやが、其の美しい顏を見ては、賞翫せずばなるまいわえ。

大月　御意に叶はゞ何ケ度でも、

お照　おかはり仰せ、

三人　附けられませ。

大炊　いや、醉覺めの水、
ト茶碗を取らうとして思入あつて態と茶碗を打返す。これにて三人びつくり飛退く、大炊も心附いて、しやんと居直るを木の頭。
こりや、とんだ麁相をいたした。
ト頭を押へろ、大月郷右衛門は大炊の樣子を窺ふ、お照は帛紗にて水を拭く、この模樣時計の音、靜なる琴唄の合方にてよろしく、
ひやうし幕

五幕目

大乘寺法會の場

〔役名――大月藏人、鳥屋萬助、住僧空月和尙、浪人星合軍八、馬淵傳藏、同荒尾多九郎、所化雲念、同珍念、同妙念、同鈍念。多賀家の妾お貞の方、中老政尾、中老玉笹、奧女中柏木、同明石、同關屋、同浮舟、腰元竹川、同若葉、同常夏、同初音、萬助娘おひな。〕

（大乘寺門前の場）――本舞臺上の方二間常足の二重石の蹴込み、此の上瓦屋根寺の門、扉を開きあり大乘寺といふ額、下の方一面に練塀、所々に楓の立木、平舞臺に毛氈を掛けし床几を並べ、總て江州大

乗寺門前の體（てい）、爰に墨の衣の所化四人立掛り居る、此の模様磬の入りし寺の鳴物にて幕開く。

珍念　これ雲念坊昨夜から今朝へかけ此の頃にない大忙し、本堂庫裡の掃除から長老樣の內證の御用で、門前の花屋の婆あの所へお百度を踏んだ。

雲念　それも其の筈だ、今日は御領主多賀家の御法事、いつたい殿樣がお在國なら御參詣がある所、當時鎌倉へ御在勤中、

妙念　それゆゑ今朝御家老の佐渡守樣が御名代、お奧向きではお部屋樣のお貞さまと中老方が追附爰へ御參詣とのこと、

鈍念　又お表よりは當時豪氣な勢ひで、輕い役から出世をなされた飛ぶ鳥落す大月樣が、諸士方の代參を御兼務とのお先觸れ、

珍念　何でも當時は器量が肝腎、いや器量といへばお妾のお貞さまは、古の小町も及ばぬ別品だが、殿樣のお留守中一人で寐かすは惜しいものだ。

雲念　それにつけても世の中に大名といふものは、同じ人間でも果報もの、お貞さまの其の上に又鎌倉にはお菊さまといつて、是れも豪氣な別品さんで、しかも御次男を生んだとやら、

妙念　一人ならず二人三人、何ぼ外に御用がなくとも、扨々おうらやましうござるなう。

鈍念　これ、いくら嫉んで惡くいつても譬にいふ天道樣へ石投げ、それよりお布施を貰つてお部屋樣のお顏を見ながら、
珍念　分らぬ經でも讀んだ上、精進物にありついて、
雲念　般若湯のお相伴、
妙念　今夜はひつそり脱出して、
鈍念　女人濟度と出掛けよう。（ト此の時花道の揚幕にて、）
呼ビ　御參詣。（ト呼ぶ、皆々心附き、）
珍念　噂をすれば影とやら、もうお部屋樣のおいでと見える。
雲念　その由を長老樣へ、
妙念　少しも早く、
四人　お知せ申さう。（と四人は門の内へはひる。又花道の揚幕にて、）
呼ビ　御參詣。

ト呼ぶ、誂へ出の鳴物になり、花道よりお貞好みの鬘、裲妾のこしらへ、政尾片外し裲中老の裝、玉笹同じく裲中老の裝、この後より竹川、若菜、常夏、初音腰元のこしらへ柏木、明石、關屋、浮

舟、何れも片外し奥女中のこしらへ、若黨二人絹羽織袴股立の打扮にて白木の臺に載せし布施物と秋草を挿したる花筒を持ち附添ひ出來る、これと一緒に門の内より住持空月緋の衣五條の袈裟水晶の珠數を持ち、後より以前の所化四人附いて出迎ふ、皆々は花道に留り、

お貞　秋來れば樹々の梢も紅葉して、何れとわかぬ花筵、錦いろどる法の道、

政尾　湖水にうつる山々もまだ白妙にあらねども、秋の名殘りか雁金の、

玉笹　田の面にかへる浮御堂、棹さす舟もかすかにて、

竹川　滋賀唐崎の一ツ松、今朝は時雨も見えねども、

若菜　あらしを瀬田に吹き送る、三上に續き青々と、

常夏　粟津にかすむ雲はれて、

初音　一葉は浮む橋姫や、

柏木　亂るゝ蘆の穂に出で、

明石　角は女の大禁物、

關屋　げぢ〳〵ならぬ百足山、

浮舟　かたいはこち〳〵石山寺、

お貞　最中の月も近江路に、由縁の色の紫や、
政尾　式部が筆のあやどりは、
お貞　はて風情ある、
皆々　眺めぢやなあ。
空月　これは〳〵お部屋樣をはじめとして、御中老方の御參詣、路次のお勞れ見えさせられず、御機嫌の體を拜し愚僧も祝着、何は然れ設けのお席へ、先づお通り、
所化四人　下さりませう。
政尾　お住持の仰せに任せ、お部屋樣には、あれなる設けへ、
お貞　左樣なれば、共々に、
玉笹　先づお通り、
皆々　遊ばされませう。（ト右の鳴物にてお貞の方先に皆々舞臺へ來り、床几に掛け、和尚辭儀をなし、）
空月　今日は何れも方の御參詣に、折よくも此頃になき快晴にて、最早小春に近きゆゑか空も長閑に春めきて、好き季候にござりまする。
政尾　仰せの如く今日は矢走の船の眞帆片帆、湖水も霞む春景色は、秋のやうには思はれませぬ。

玉笹　御境内の櫻なども、返り咲きをいたせしと申すことでござりますな。

空月　年々十月初めには彼岸櫻が咲きまするが、今年は季候の早きゆゑか最早咲き出しましてござります。

お貞　御法會濟みなば御境内の、返り咲きせし彼岸櫻を、眺めて戻りますわいの。

竹川　それがよろしうござります、當大乘寺は見晴しよく、

若菜　御堂の上から御城下や在方までも悉く、

常夏　あらかた一目に見えまして、

初音　浮畫のやうでござります。

柏木　こちらはそれより奧山で、

明石　落葉ふみわけ蕈狩を、

闕屋　いたしたならば一入の、

浮舟　おなぐさみかと存じまする。

政尾　何は兎もあれ今日は、御先代樣の大事な御法會、玉笹どのには布施物を、

玉笹　心得ました。（ト若黨が持ちし布施を載せし白木の臺を取りて、）お住持樣には布施物を、お受取り下さ

りませ。（ト出す、空月和尚受取りて頂き、）

空月　これは〳〵御丁寧なるお布施物、先例に任せ御法會萬端相勤めるでござりませう。何は兎もあれ拙僧は讀經の支度もござれば、これにて御免蒙ります。

政尾　お部屋樣にも暫くこれで、御休息なされますれば、御住持樣には御遠慮なく、

空月　左樣なれば御ゆるりと、後刻御案内いたしまする。

ト空月和尚は皆々へ一禮して布施物を所化に持たせ、所化四人と一緒に門内へはひる。合方になり政尾を思入あつて、

政尾　實に月日には關守なくと諺にも申す通り、先殿樣の御年囘、待たぬことは早いものにて早や七囘のこの御法會、數ならぬわたくし共までお經にあふは冥加なこと、お表よりは大月樣最前客殿へお入りとあれば、（ト思入あつて、）お部屋樣がお心籠められし御庭前の數多の秋草、御苦勞ながら玉笹どの、一足お先きへ持參なし、御靈前へ其のお花をお供へなされて下さりませ。

ト政尾若黨の持ちし花筒を玉笹へ渡す、玉笹受取りて、

玉笹　左樣なればお花筒を、お先きへ持參なし、御靈前へお供へ申すでござりませう。

政尾　竹川どのを始め、西側のお前方は玉笹どのと御一緒に。

竹川　政尾さまのお詞ゆゑ、
若菜　わたくし共もとも〴〵に、
玉笹　お花をお供へ申しませう。
　　ト玉笹先きに四人の腰元件の花筒を持ち、お貞の方に一禮して門の内へはひる。政尾は玉笹の後を見送り思入あつて、
政尾　何かに附けて邪魔になる玉笹めを先きへ遣りしも、他聞を憚るお話しあれば、お前方にも左右へ分れ、爰へ誰も來ぬやうに。
柏木　畏りましてござりまする、仰せに任せわたくし共は、
明石　地内の紅葉を見る體で、
關屋　右と左りへ立別れ、
浮舟　どれ、張番を、
四人　いたしませう。（ト四人は二人宛上下へ別れてはひる。政尾お貞の方の側へ寄り、合方になり、）
政尾　此の程は四邊の人目に、御殿でお目に掛りまするもよそ〴〵しく、落ちついてお話しもいたしませぬが、彼のお方へ密々に、何ぞ御用はござりませぬか。

お貞　ほんにわらはも此の程よりお前に逢うて種々と相談しようと思ひしが、心のせゐか御殿でも薄々密事を知つた樣子に、他聞を厭ひ逢はざりしが、幸ひ今日の御法事に落合ふことゝ聞く嬉しさ指折り算へて居ましたわいなあ。

政尾　わたくしとても其の通り、何時ぞや部屋にて彼のお方とあなたを忍ばせお逢はせ申し、夜明けてお別れなされし時、思ひがけなき玉笹が、遠目にそれと見た樣子。

お貞　疑ふせゐかそれよりは玉笹はじめ腰元共まで、何かにつけて怪しい素振り、隱すことほど穗にあらはれ、尾花が脅す落人の例も今は我が身の上。

政尾　それゆゑ再びわたくしの部屋へお招ぎ申すのは石を抱いて淵の譬へ、何でも今度は所を替へお逢ひなさるが專要なれど、先づよき折のあるまでは深く包むがおためかと存じまする。して彼のお方へお文でもお屆けなさる思召しなら、そつと政尾が取次いでお手渡しをいたしませう。

お貞　斯うも心が合ふものか、今日逢つたらば賴まうと人目を忍び細々と、昨夜認めおいたる此の文、（ト四邊へ思入あつて懷より一通の文を出し、）よい首尾あらば彼のお方へお屆け申して下さりませ。

政尾　それは何より易いこと、日頃武藝の指南をいたし色氣のないが政尾の一德、假令男子と差向ひで話しをしたとて誰一人怪しむ者はござりませねば、早くお屆け申しませう。

お貞　いつに替らぬお前の親切、何とお禮を言うてよいやら。

政尾　はて、何のお禮に及びませう、大月樣のお世話になれば御恩送りにいたす心、其の御心配には及びませぬ。

ト政尾は思入あつて件の文を箱迫の中へ入れる、此の內上手門の內へ玉笹出てこれを見てうなづく、花道の揚幕にて、

軍八　うぬ、了簡がならねえぞ〳〵。（トわや〳〵言ふ、これにて玉笹は門の內へはひる。）

お貞　や、あの人聲は、何事なるか。

政尾　狼藉者と存ぜられます。（トばた〳〵になり以前の奧女中出來り、）

柏木　憶に喧嘩の樣子ゆゑ、

明石　お部屋樣には、

四人　一先づかしこへ。

政尾　お怪我があつては濟まぬゆゑ、共々御守護を。

四人　畏りました。

軍八
三人　うしやあがれ〳〵。

ト本行の禪の勤めになり、お貞の方に四人附いて門の內へはひる。政尾は床几に掛けて居る。ばたばたになり花道より、鳥屋萬助白髮鬘羽織着流しにて、誂への鶯の入りし鳥籠を抱へ、これを星合軍八、馬淵傳藏、荒尾多九郎、何れも着流し大小浪人のこしらへにて胸倉を取り出來り、直に舞臺へ來る、萬助は軍八が捉へし手を振拂ひ、顫へながら思入あつて、

萬助　これはまあ何れも樣、御無禮なことをなされまするな。年寄つた此の親仁を、こりやまあ何となされまする。

軍八　何とするも凄じい、これが細道やまた新道なら又勘辨もしようけれど、多賀城外の往來中、眞ツ晝間に我々へ突當つた素町人め、

傳藏　何ぼ燒が廻つても此の大小は見えるであらう、かれこれ申さば刀の手前、其のそツ首をぶち落すぞ。

多九　それが厭なら犬突這か韓信のやうに股を潛り、それ相應な詫をして、降伏謝罪するがいゝ。

萬助　そりやもう詫びろとおつしやるならどの樣にもお詫びをいたしませうが、突當つたはあなた方、殊にぷん〳〵鼻を貫く樽柿のやうな御酒機嫌、ひよろつく足から私の寄る方へおいでなされ、ちよつと肩がさはつたばかり、何ぼ大小たばさんだお侍でも、御無體かとわたくしは存じまする。

軍八　えゝ、いけ強情な老耄親仁、とやかう吐かせば眞ッ二つだぞ。
多九　さあ、首を伸してそれへ出ろ。
ト軍八多九郎は始終酒に醉ひたる思入にて、萬助を捉へ前へ引出し刀の柄へ手を掛ける、傳藏は思入あつて此の中へ入り、
傳藏　あゝこれ〳〵、まあ〳〵御兩所お待ち下され。これさ親仁、どうしたものだ、僕は同じ仲間だがあゝ言出しては一寸も引かぬ氣性のお二人ゆゑ、長いものには卷かれろだ、假令こつちで突當つた覺えがなくとも事を曲げて、お詫びをすれば濟むことだ、年甲斐もなく強情を張らずに早くお二人へ、平あやまりにお詫びをしやれ。
萬助　それぢやと申してわたくしから、突當つた覺えもないに。
軍八　えゝまだ〳〵強情を張りやあがるか、そつちは二つの目玉だが、こつちは三人六つの目玉、
多九　影法師とも十二の目、窪んだのと飛出した、しかも替つた我々兩人、
軍八　知らぬと申さば、いつそのことに。（ト又立掛るを傳藏留めて、）
傳藏　これは又御短慮千萬、假令この場で親仁めを眞ッ二つになされたところが、さのみお手柄にもならぬこと、それゆゑ拙者は最前より說得いたしてお二人のお顏の立つやう取計らへば、まあ〳〵

暫くお待ち下され。これは〳〵、困つたものだ、何を言ふにも相手は生醉、今も說得いたした通り、それ、わたくしだとあやまつてしまへ〳〵。（ト手眞似にてあやまれと言ふ、萬助呑み込み）

萬助　折角あなたの御挨拶、みす〳〵それではなけれども、（ト思入あつて氣を替へ）へい〳〵、左樣なら、わたくしはあなた方へ突當りました、どうぞ御勘辨なされて下さりませ。

ト詫びろ、軍八多九郎は傳藏と顏見合せ、しめたといふ思入あつて、

軍八　それ見たことか、そつちから突當つたに違ひはあるまい、いよ〳〵以て其方から、我々二人へ突當つたな。

多九　堪忍しろと詫びるなら取つたところがしなび首、如何にも勘辨してやらうが、然したゞでは了簡ならぬ。

傳藏　まあ〳〵御兩所靜かになされ、身共が親仁を說得なし只今詫びをいたしたからは、かれも中々苦勞人、そこらに如在はあるまいて。

萬助　そんなら、御勘辨なし下さるには。

軍八　おゝ、それは言はずと知れたことだ、挨拶金を我々へ、

多九　並べて詫びをするがいゝ。

萬助　え、、、、、。（トびつくりする、傳藏中へはひり、）

傳藏　これさ〳〵どうしたものだ、じたいそなたが命の瀨戶、首がころりと落ちる所、中さば首代七兩二分、つけた替りに我々へ出して詫びるが理の當然、少しも無理はない裁きだ。

軍八　然し親仁を斯う見たところが、一兩といふ纏つた金を持つては居らぬ樣子、

多九　金の替りに其の籠の、鶯でも貰つておかう。

ト萬助が持つたる鳥籠を引つたくろ、萬助はびつくりして其の手を拂ひ、

萬助　あゝ滅相なことおつしやりませ、此の鶯は一兩や二兩で賣れる鳥ではなく、しかも其の名を三光といつて世にも稀な鶯ゆゑ、今日多賀家の若殿樣が百兩といふ大金でお買上げになるお約束、これをあなたに取られましては、假令親仁のこの首がつげましても仕方がない、こればつかりは何れも樣御免なされて下さりませ。（ト萬助よろしく詫びる、軍八多九郎頭を振り、）

軍八　いや問ふに落ちず語るに落ちるで、百兩といふ鶯なら、

傳藏　捨賣りにしても二三十兩、こりや好いものを持つて居た、

多九　その鶯をこつちへ渡せ、厭だとぬかすと命がねえぞ。

軍八　さあ、きり〳〵と、

三人　渡しやあがれ。

ト件の鳴物にて三人は萬助を突倒し件の鳥籠を引ったくる。萬助はこれを支へる立廻り、トゞ三人は萬助を散々に踏躙る、この前より以前の政尾後に出かゝり窺ひ居て、不便だといふ思入にて、此の時三人の中へはひり萬助を圍ひ、

政尾　最前よりのあらましは後で聞いて居りましたが、見れば老年のこれなる町人、如何なる麁相をいたしましたか、あなた方には御酒機嫌、もう好い加減に御勘辨をなされておやりなされませ。

ト是にて三人は顏を見合せうなづいて、

軍八　見れば立派な奥女中、無禮をいたした此の親仁を、成敗いたす其の所へ割つて入つたお扱ひ、

傳藏　それ相應な挨拶を、我々共へした上で、共に詫びれば知らぬこと、

多九　素手で兎やかう言はれるは、いらざるお世話出過ぎた仕方、

軍八　默つて見物、

三人　して居なせえ。（トきつといふ、政尾は思入あつて、）

政尾　いゝや見ては居られませぬ、知らぬ者でもあることか、これなる鳥屋は屋敷へ出入の、萬助と申すものゆゑに見兼ねてお留め申したが、たつて了簡ならぬとあらば元より事は好まねど、女なが

ちゝ私は武家奉公をいたしますれば　主人の耻になりますゆゑ、いざお相手になりませう。

卜きつと言ふ、これにて三人もきつとなり、

軍八　高が女の事ゆゑに、耳にも留めず默つて居たが、

傳藏　武藝自慢か我々の、相手をすると言ふからは、

多九　武士の意地づく了間ならぬ。

政尾　御了間がならぬとあれば、

軍八　喧嘩を買つて横合から、

傳藏　この場で勝負を、

多九　いたす心か。

政尾　お相手いたすでござりませう。

三人　何を小癪な。

卜早き合方になり、三人は政尾へ打つて掛る、政尾はちよつと立廻つて左右へ投げ退けきつと見得、これより音樂の入りし誂への鳴物になり、三人は刀を抜いて切つて掛る、政尾これを扇にてあしらひよろしく立廻る、此の内萬助は始終氣を揉むこなし、政尾は懷の箱迫を落す、此の時上手より以前の玉

笹親ひ出て、件の箱迫を拾ひ取り思入あつてはひる、萬助はうろ〳〵して逃げようとする機に抱へたる件の鳥籠を落す、この途端鳥籠を多九郎眞ッ二つに切る、これにて籠の中より鶯指金にて逃げ去る、萬助びつくりして、

萬助　やゝゝゝ、大切の鶯が、

政尾　なに、鶯が、

萬助　跡追つかけて。

ト萬助は鶯の跡を追つかけて上手へはひる。又立廻つて政尾は捥ぎ取りし刀にて峰打ちになし、刀を投げやる、これにて三人ははふ〳〵に刀を拾ひ無念の思入にて花道へ逃げてはひる、政尾は思入あつて、

政尾　口程にもない浪人共女一人に打ち叩かれ、後をも見ずに迯げて行つたは取るに足らざる生兵法、とはいふものゝ御法會ゆゑ、迯げて行つたは手前の仕合せ。（ト衣紋を直して懐へ手を入れびつくりなし、）やゝこりや箱迫を取落せしか、但しは彼等に盗まれしか。（ト當惑の思入にて、）何にもせよ大切なお文を中へ入れておいたが、はて困つたことをいたしたなあ、それとも誰ぞ拾ひしか、御堂へ參つて尋ね見ん、むゝさうぢや〳〵。

ト合方にて政尾思入あつて上手へはひる。ばた〳〵になり花道よりお雛島田鬘世話娘好みのこしらへ

にて出來り、花道にて、

お雛　今父さんは大乘寺の總門内で大勢の浪人者に取卷かれ、難儀をして居なさんすと知らせてくれた子供があるゆゑ、取る物も取りあへず爰まで急いで馳けて來たが、何處においでか、早う父さんの御無事な顏を見度いものぢやなあ。（ト言ひながら舞臺へ來る、これと一緒に上手より以前の萬助うろうろして出來り、思はずお雛と顏見合せびつくりして、）やゝゝゝ、お前は父さん。

萬助　そちや娘か。

お雛　今しがた友達衆がお前が打たれてござんすと、知せに驚きそのまゝに、急いで爰へ參りましたが、何處もお怪我はござんせぬかえ。

萬助　さあ、どこも怪我はせぬが、相手は血氣の浪人で、づぶ六醉つて向うから突當つたにいろ〳〵と無理難題の其の上に、これ此の通り臑や臂に少しの疵は受けたれど大したことは何處もない。

お雛　大したお怪我はござんせぬか、それ聞いて落着きました、あゝ嬉しや〳〵。

ト　お雛悦ぶ、萬助はこれを見てぢつと思入あつて、

萬助　その嬉しいに引替へて、こつちは悲しい今日の災難、いつそ今の侍に切られて死んだらよかつたらう。

お雛　え丶滅相なこと言はしやんすな、切られて死んでよいものかいなあ。
萬助　さあ、死んだがよいとおれが言つたは、大事の鶯を迯したゆゑ。
お雛　え丶何と言はしやんす。
萬助　今の騷ぎで此の樣に籠を切られて鶯は、何處へか飛んで行つてしまつた。
お雛　え丶丶丶。（ト合方になり、萬助は以前の鳥籠を持ち思入あつて、）
萬助　今更言つても返らぬが、そなたと二人この年月仕慣れた業の小鳥生業、今年で丁度三十年この御城下に居るお蔭、御領主さまの御用まで勤めるやうになつたれど、元より身貧な暮し故籠のひご、より細元手に變つた小鳥の仕入れも出來ず、悔んで居つたる幸先へ去年かへした鶯は、諺にいふ鳶が鷹、これがすら〳〵育つたら大金になる代物と大事に掛けて三光といふ名を附けておいたところ、誰あらう多賀樣の若殿樣のお目に留り、百兩といふ直まで出來、今日その鶯を納めようと籠を抱へて來る途中、酒の上とて浪人が無理難題の滅多打ち、折よく後においでなされた多賀家の中老政尾樣がその浪人を散々に懲してやつて下すつたが、迯げる機に蹴躓き轉んだところを浪人が悔し紛れか鳥籠を、二ツに切つたばつかりで其の鶯を逃してしまうた、折角俺が拾ひ運あれが費れたら樂にならうと、思つた事も鵙となり、語るも悲しい此の身の不運。これ娘、おりや口

惜しうてならぬわいやい。（ト萬助愁ひの思入にて言ふ。）

お雛　お、御尤もでござんす、噬悔しうござんせうがそれも定まる約束ごと、今更いつても詮ないこと。悪い後は善いといへば、あれに優つた良い鶯が又その内に出來ませうから、それを樂しんでござんせいなあ。

萬助　とはいへ、これから何時出來るかそれを待つても居られぬ譯、先づ差當り家主から米屋薪屋の借錢も、あれが賣れたら返さうと、言譯したも水となり、

お雛　又鶯を逃したというても見ない事なれば、實のことゝは思ふまい。

萬助　さすれば居慣れたあの家も、借の抵當にやらねばならず、

お雛　斯ういふ時に同胞が、あつたら力にならうのに、

萬助　兄もなければ弟もなく、木から落ちたる親子二人、

お雛　仕樣模樣もござりませねば、わたしが苦界へ沈みませう。

萬助　そちを女郎にするくらゐなら、こんな苦勞をしはせぬわ。

お雛　それでも金の都合が出來ねば、

萬助　死ぬと覺悟を極めて居るぞよ。

お雛　父さん、

萬助　娘、世にも因果な、

兩人　ことぢやなあ。

ト兩人手を取交し愁ひの思入。此の内上手へ大月藏人上下大小にて以前の政尾と一緒に出で、これを聞き不便だといふ思入にて、

大月　こりや萬助、歎くには及ばぬぞ。（トこれにて兩人びつくりして、）

萬助　やゝ、思ひがけない大月樣、

お雛　さうしてあなたは、

萬助 お雛　何時の間に。

大月　最前よりこれへ參り、二人が歎き逐一聞いた。

萬助　親子が愚痴をお耳に入れ、面目次第もござりませぬ。

大月　聞くも哀れな身の上に我も思はず落涙したが、よしや價は百兩の高金になる鶯でも人の命には替え難し、必ず共に短氣なことを、いたさぬがよろしいぞや。（ト政尾前へ出で、）

政尾　いや最前は浪人共が無禮なことを言ひ掛けて、そなたが難儀いたすゆゑ、見るに忍びず支へに出

て彼等を懲らす其の機、浪人共が籠を切り其の鶯を逃してしまひ、よしないことをしましたわいの。

萬助 いえ〳〵あなたがあの時にお出でなされぬことならば、浪人共に打擲され、まだ其の上に鶯を持て行かれますところ、盜まれるより逃した方が結句よろしうござりまする。

お雛 左樣ならあなた樣が、お助けなされて下さりましたか。

萬助 厚いお世話になつたから、ようお禮を申し上げてくりやれ。

お雛 何とお禮を申しませうやら、えゝ有難うござります。

政尾 娘御にまで其のやうに厚く禮を言はれては此の政尾が面目ない、百兩になる鶯を、災難とはいへ逃してしまひ、氣の毒でならぬわいの。(下氣の毒なる思入。)

大月 いや、其の御心配もさることながら、あれなる鳥屋萬助は三十年來御城下に住居をいたして飼鳥の御用を勤むる出入のもの、彼れが難儀を見捨てるも本意ならねば某が、今逃せしといふ高價の鶯、只今求めて遣はさう。

萬助 其の思召しは有難うござりまするが、お求め下さる鶯が、ござりますれば親子とも、

お雛 斯うした難儀はいたしませぬ。

大月　いやその鶯を逃せしも、承知で身共が求めるのぢや。
萬助　え、そんなら無いのを、
萬助
お雛　御承知で。（ト合方になり、大月思入あつて、）
大月　そち達二人がこの場の難儀を見兼ねて見共が寸志の情、殊に又今日は先君の御年囘、當院にての大法會、求めし鳥を其の儘に籠を開いて逃せしは時に取つての放生會、まつた二人が一命を救ふも則ち御追善、その代金の百兩は、幸ひ求むる刀あつて持參いたせば後とも言はず、只今そちへ遣はさん。（ト懷中より百兩包みを出し萬助へやる、萬助お雛は嬉しき思入あつて、）
萬助　左樣なれば、この百兩を、あのわたくしへ下さりまするか。
お雛　思ひがけない此のお惠み。
萬助　こりやまあ、夢ではないか知らぬ。
萬助
お雛　えゝ、有難うござりまする。（ト萬助お雛は百兩を押頂きいそ〳〵悦ぶ、政尾は感心の思入にて、）
政尾　流石は殿のお眼鏡にて、常なき御出世なされたる大器量ある大月樣、親子の者をお助けありしは、千羽の鳥を放すより遙かに勝る御追福、萬助そなたも嬉しからうの。
萬助　いやもう嬉しい段ではござりませぬ、親子二人が命の親、殊に最前あなた樣にも危い場所のお救

ひ受け、

お雛　何とお禮を申しませうやら、有難涙に暮れまする。（ト宜しく兩人へ禮を言ふ、此内萬助思案の體にて、）

萬助　あゝ有難いゝゝ有難いが、百兩といふ大金を惠んでお貰ひ申したが、何ぼ上下の隔てがあるおれは賤しい町人でも、この儘一生お返し申さずおくのもどうやら心懸り、といつて御返濟の先づ差當り當てもないが、こりやどうしたらよからうなあ。

お雛　父さん、それはよい思案がござんすぞえ。

萬助　なに、思案があるとは。（トこれにてお雛思入あつて、）

お雛　百兩といふ大金ゆゑ、所詮お返し申します當といふてはござんせぬが、役に立たねどわたくしが大月さまへ無給にて御奉公でもいたしたなら、千分が一の御恩返し、父さんどうぞ此の事をお願ひ申して下さんせぬか。

萬助　おゝよくそこへ氣が附いた、譬にもいふ三兒に淺瀨、六十になる此の萬助もさつぱりそこへは氣が附かなんだ。いやなに大月樣、今お聞き遊ばす通り娘が望みの御奉公、不束者でござりまするがせめてあなたへ御恩報じ、無給で下女にお手許でお使ひなされて下さりますやう、お願ひ申し上げまする。（ト兩人よろしく賴む、大月は此の内お雛へ目を附けることあつて、）

大月　惠みし金の恩義に感じ無給で奉公いたしたいとは、年端も行かぬに健氣な願ひ、してそちが娘は何と申す。
萬助　へい、鳥屋の娘でござりますから、名は雛と申しまする。
大月　して、當年何歳ぢや。
お雛　はい、十八になりまする。
大月　町家に育てど利發な生れ、器量といひ年頃まで丁度望みの、
お雛　え。（トこれにて大月氣を替へ、）
大月　いやさ、望みとあらばいつ何時でも、身共が屋敷へ連れて參れ、身が手許にて召使はん。
萬助　すりやお聞き屆け下さりまして、娘をお召使ひ下さりまするか。
お雛　そりやまあ有難いことでござりまする。
萬助　何れ此の頃支度を調へ、娘を連れて上りませう。
お雛　この上ともに不束者、お目掛けられて下さりませ。（ト時の鐘。）
萬助　今鳴る鐘は、ありやもう九つ、思はぬことで暇取つたれば、
お雛　又も障りのない内に、

萬助　少しも早うお暇いたさう。左樣なれば、
政尾　よう氣を附けて行つたがよいぞや。
大月　白晝なれど大金を、所持なし居れば油斷はならぬ。
萬助
お雛　御機嫌よろしう。
萬助　何から何まで、
萬助
お雛　え丶有難うございまする。

ト唄になり、萬助先きにお雛兩人へ禮を言ひ、いそ〳〵悅んで後を見返り〳〵花道へはひる。跡兩人見送り思入あつて、

大月　町人ながら萬助は正直一途の者なれば、恩を着せておいたらば必ず後日の役に立たん。して政尾どのには某に、何か密用でござるかな。
政尾　最前これにて、かの君より、（ト文のことを言はうとして言ひ兼ねる思入）
大月　む丶、かの君とは、お貞どのより、言傳でもあつたるか。
政尾　さあ、外のことでもござりませぬが、先達てわたくしの部屋にてお逢ひなされたきり、好き首尾なくて今日までお逢ひなされぬお貞さま、今日のおいでを樂しみに先刻からお待兼ね、御法會濟

まば離れ座敷へ、お伴ひ申しますからお逢ひなされて下さりませ。

大月　折角のことながらあの折廊下で玉笹が二人の姿を見た樣子、今日とても御法會へ同じやうに參つて居れば、又もや彼女に其の樣子を見らるゝ時は互ひの身の上、それゆゑお目に掛られぬと、左樣申して下されい。

政尾　畏りましてござりますが、今日のお逢ひを指折りてお待ちなされしお貞さま、嘸本意なく思召しませうが、成程あなたのおつしやる通り、誰知るまいと存じましたが、玉笹どのが話しましたか、薄々人も知つた樣子。

大月　それゆゑ迂濶にかの君に、餘所ではお目にかゝられぬ。（ト政尾以前の文の心に懸る思入にて、）

政尾　これに附けても案じられるは、さつき失ふ大事のお文。

大月　え。

政尾　いえ、迂濶にならぬ大事といふは、あの玉笹が鎌倉から殿樣御歸國なされし時、口利口に讒言をいたしませうかと存じまして、それが氣遣ひでなりませぬ。

大月　假令讒言いたさうとも言解く手段はいくらもある、それ等の邊を思ふゆゑ、近々某鎌倉へお迎ひとして參る所存。

政尾　すりやあなたには鎌倉へ、

大月　君の御機嫌伺ひと、言ふは名のみに、一つの計策。

政尾　その御計策とおつしやりますは、

大月　お供をなして歸る途中で、

政尾　若しや、君をば、

大月　これ。

ト押へろを道具替りの知らせ、藏人扇を顔に當てゝ政尾に囁く、此模様よろしく合方へ磬を打ち込み、此の道具廻る。

（大乘寺客殿の場）――本舞臺一面の平舞臺上手へ寄せて九尺塗框一段高き大床の間、是れに唐畫山水の大幅、此の前へ臺附獅子の香爐の置物、これより下矢張り山水の畫襖、上下折廻し塗框蓮の畫の杉戸出入り、日覆より大欄間をおろし下手に仙人を畫きし大衝立、總て大乘寺客殿の體よろしく、爰に以前の玉笹、政尾の落せし箱迫より文を出し見て居る。と合方にて、玉笹思入あつて、

玉笹　此の程早く明番から歸る廊下の薄暗がり、左右へ別るゝ男女の人影主は誰とも東雲に、政尾どの

の部屋の前で思はず拾ひし簪の紋に扨はと思ひしゆゑ、樣子窺ふその折柄ちらりと見ればお貞さまが政尾どのへ渡せし文、どうか見たいと思ふ矢先き狼藉者を支へるとて、文を入れたる箱迫を取落したを幸ひに、そつと拾うて今見れば、名前はなけれど草壁流媚めく文の賴みの文句、（ト思入あつて、）滅多なことは言はれぬけれど、これで樣子が知れたわいな。（ト奧にて、）

政尾　お貞さまへ只今參ると、さう申して下さりませ。

玉笹　あの聲は政尾どの、これを見られぬ其の內に、小蔭へ隱れて、おゝさうぢや。

ト合方にて玉笹衝立の蔭へ隱れる、上手杉戶より以前の政尾出來り四邊へ思入あつて、

政尾　お貞さまより大月さまへ屆ける文を落せしゆゑ、口を押へて默つて居たが、御殿の者に拾はれゝば名前はなけれど草壁流、ひよつとあれより露顯なさばお二人さまのお身の大事、どうぞ拾うた其の人を早う知りたいものぢやわいな。

ト よろしく思入、衝立の蔭より玉笹窺ひながら下手へ出で、

玉笹　政尾どの、何をお落しなされました。

政尾　誰かと思へば玉笹どの、最前當寺の御門前で狼藉者の亂暴を、見るに忍びず懲らせし折、箱迫を落しました。

玉笹　その落したとおつしやるのは、若しやこれではござりませぬか。

ト件の箱迫を出す。政尾これを見てぎつくり思入。双方ちよつと氣味合のこなしあつて、政尾氣を替へ、

政尾　如何にもわたしの落したのは、その箱迫でござりますが、さうして何處でお拾ひなされました。

玉笹　あい、これは最前、いえ、只今爰で拾ひました。

政尾　それはまあ御親切によう拾つて下さりました。（ト政尾は件の箱迫を受取りちよつと中を改め、文を開いて見たらうといふこなしあつて、中の文を取出し、）いや玉笹どの、お前これを讀みなさんしたか。

玉笹　え、（ト思入あつて氣を替へ、）これはしたり政尾どの、假令私が拾ひしものでも、何で人さまの箱迫のみだりに中を見ませうぞ。

政尾　すりやきつと見なさらぬか。

玉笹　中をあけては見ませぬわいな。

政尾　いや見ぬとは言はさぬ、

玉笹　そりや又何ゆゑ。

政尾　この箱迫の其の中に、蜘蹰の品がござりますぞえ。

玉笹　して蜘蹰の品といふは、

政尾　肝腎の金がない、いやさ、金が紛失しましたわいな。

玉笹　え、、、、（ト玉笹びつくり思入、誂への合方になり、政尾きつとなつて、）

政尾　一つ御殿の朋輩の勤めも同じ中老役、縫の模樣の箱迫に光る金絲の常綺羅で互ひに小菊の數を重ね、不斷は厚い誼ゆゑ、これまで遂に何事も隱しあうたこともなく、奥の束ねはしつかりと此の胴締の銀金物、拾つた時に金入から外へこかした五十兩、上部は錦の時代切蟲も殺さぬ顏をおしだが、心は曲る扇ひだ、まだしも他人に聞かれぬがお前の運の小町紅、化生の者と胸の内を鏡に掛けて照されたら、お細工物の切れ〳〵に果は其の身の耻晒し、盗んだことは他言せぬから、きり〳〵金を返しなさんせ。（トこれにて玉笹むつとして、）

玉笹　こりや政尾どの聞どころ、今拾うたる箱迫の中にあつたる一通の文は覺えの草壁流、開いて見たら一大事と思つたゆゑに封も解かず、お前に其のまゝ返して上げたは、事を好まぬ私の寸志、それをお前は忝ないと思はず金を盗んだと言掛けをしなさるとは、恩を仇にて返すのか、てもまあ麁相な政尾どの、酒でも呑んで醉はしやんしたか。

政尾　言掛りとは何の事、お前が拾つた箱迫に入れて置いた五十兩、無いから無いと疑ふも人手に渡らぬ拾ひもの。さあ有體に盗んだと、爰で白狀しなさんせ。

玉笹　いえ〳〵それは言掛り、何といつても知らぬがまこと、決して覺えはござりませぬ。

トきつと言ふ、此の時上手より以前の腰元四人奥女中四人殘らず出來り、皆々上下へ並よく居並ぶ。

柏木　樣子は奥で聞きましたが、何と皆さん、人は見掛けに寄らぬもの、蟲も殺さぬ玉笹さんが、他人の物を盗まうとは、ほんに夢にも知らなんだ。

明石　やれ中老のお局のと不斷肩で風を切つても、とんだ手證を捉へられ政尾樣に大きな目で睨まれてはもう往生。

關屋　ほんに藥罐に茹蛸同樣、手も足も出ぬ意氣地なし、泥坊さんとはわたし等も、さつぱりこれまで知らなんだ。

浮舟　見れば見るほど綺麗な顏に、似合はぬ肝のづう〳〵しさ。

柏木　日頃は上見ぬ大鳥でも、他人の物をたゞとつては。

明石　今に御殿を放し鳥。

關屋　重い葛籠でちう〳〵と。

浮舟　やがてお宿へ梵天國。

柏木　ほんに笑止ぢや、

四人　ござんせぬか。（ト口々に言ふ、腰元等は氣の毒だといふ思入あつて、）

竹川　これはしたり皆さん方、そりや滅らず口が過ぎるぞえ、餘人は知らず日頃から物堅い玉笹さま、

若菜　盗みをするの何のといふ、そんなさもしいお方では、ないが證據のこの濡衣、殊に爰は御菩提所、佛の庭で彼れ是れと言ひ爭うては上への恐れ、

常夏　假令どのやうにおつしやつても、玉笹さまに限りては、正直ものと不斷の噂、

初音　それを咎めやかう爭ふのは、ほんにお眼鏡違ひとやら、

竹川　たゞ何事も政尾さま、

若菜　私共へ今日の所は、

竹川　お任せなされて、

腰元
皆々　下さりませいなあ。

政尾　日頃御殿で中のよい玉笹どのゆゑ其のやうに、お前方はおかばひだが、口を利くなら箱迫の中のお金を盗まぬと、慥な證據を見せた上この場の面ばれするがよい、假令どのやう口を添へても、其の黑白の知れぬうちは任せることはできませぬわいなあ。

柏木　こりや政尾さまのおつしやる通り、

明石　盗まぬ知らぬと百萬だら、
關屋　口で言つても無駄なこと、
浮舟　日本晴れのするやうに、
政尾　さあ、證據があらば見せなさんせ。
腰元　さあ、それは。
皆々　さあ、
奥女　さあ、
皆々　さあ、
腰元　さあ、
皆々　さあ〳〵。
政尾　證據なければ疑ひ解けぬ、玉笹どのはやつぱり盗人、いやさ大盗人でござるぞよ。
トきつぱり言ふ。これにて、
玉笹　ちえゝ。（ト口惜しき思入にて泣伏す。政尾は立上り玉笹の側へ來て、）
政尾　不束ながら女中方の、束ねをいたす中老政尾、以後の見せしめ、かう〳〵。
ト政尾思入あつて扇にて玉笹を散々に打つ、玉笹は無念の思入にて其の手を捉へ、きつとなる、腰元どもびつくりして、

腰元
皆々　こりや、玉笹さまを。

政尾　おゝ盗人だから折檻した、此の政尾に打たれたが口惜しいと思ふなら、盗んだ金を返しなさんせ。さあ玉笹どの、いやさ盗人どの、よも言分はあるまいがの。

ト政尾きつと見得、玉笹はぢつと俯向き無念のこなしあつて氣を替へ、

玉笹　身に降りかゝる此の災難、假令この身に耻辱を受け、打ち折檻に遭ふとても今日は大事の御場所柄、言ひ度いことも胸にはあれど、たゞ何事も上への恐れ、ぢつと怺へて居りまする。

ト思入にて言ふ、政尾せゝら笑ひ、

政尾　引かれものゝ小唄とやらで、今更御場所を言立てゝおのれがしがを隠すのは卑怯未練な玉笹どの、斯程耻辱を與へても盗んだ金を出さぬのは、てもまあしぶとい心ぢやなあ。

柏木　ほんに大事な命より、金が欲しいか此のやうに、満座の中で耻面かゝされ、

明石　いくら言つても泉水おてうづ、いけしやァ〳〵なお顔附き、

關屋　言譯くらい身の罪に、

浮舟　默つて居るも負惜しみ、

柏木　何と皆さん、玉笹どのが眞赤になつて怒つた所は、日枝樣のお前立ち、

明石　しかも手長のや、え、ん、ぼ、う、

關屋　さ、る、とは〳〵、

浮舟　お氣の毒、

柏木　笑止なことでは、

四人　ござんせぬか。

政尾　そのお手長の猿利口、不斷の氣質も金ゆゑに眼が眩んでか手出しもならず、默つてござるや、え、ん、どの、政尾が以後の見せしめに打つた扇の扱ひが御意に入らずば何時でも、要をするゑて仕返しにわたしが部屋へ尋ねてござんせ。其の時骨もばら〳〵に成るか成らぬは互ひの心、またの出合を待つて居るぞえ。

ト唄になり、政尾先きに奥女中四人よい氣味だといふこなしあつて、玉笹を尻目に掛け、捨ぜりふにて皆々上手へはひる、跡合方になり、腰元四人は玉笹を介抱して、

竹川　最前からわたくしどもは口惜しうてなりませぬが、何を言うても中老の、相手は名におふ政尾どの、

若菜　それに列なる四人の者は、日頃一味の意地惡仲間、少しのことを種にして、

常夏　盗みをしたとの無理難題、あなたに限つて人さまの物を盗むのなんのといふ、

初音　そんなさもしいお心の、ないのは知れて居りますれど、

竹川　此の疑ひを晴します、何ぞ證據は、

皆々　ござりませぬか。（ト左右より玉笹へせまる、玉笹思入あつて、）

玉笹　いつにかはらぬ御親切、必ず徒には聞きませぬ、疑ひ受けし身の言譯證據もあれど何事も、今日は御法會の折なれば胸に收めて何事も言はぬが言ふにいや勝る。（ト思入あつて氣を替へ、）ほんに追附け御燒香の時刻になれば皆さんは、爰に構はず御本堂へ早う行つて下さりませ、私も直にお後から顏を直して參ります。

竹川　そりやもう行けとおつしやるなら、參りませうが此のまゝに、

若菜　あなたをお一人お殘し申すは、どうやら心掛りゆゑ、

玉笹　わたしを案じて下さんすは有難うはござりまするが、時刻がうつればお上へ恐れ、早うお席へお出でなさんせ。（トこれにて四人是非なき思入にて、）

竹川　左樣なれば玉笹さま、

若菜　お先きへ參るで、

四人　ござります。（ト唄になり、皆々心を殘して上手へはひる。）

玉笹　いつぞや夜詰めの退出がけ政尾が部屋の入口で、我が手に入りし簪の紋は覺えの杜若、慥にそれと思ひしゆゑ、最前政尾が落せし箱迫、お貞どの丶文があるゆゑ、そつと拾うて開封なし見れば拾ひし簪と割符を合す文の文句、深くも包む企てをこの玉笹に知られじと疑ふ心に惡名附け、恨みを返せし憎き政尾、今にぞ思ひ、（ト膝を立てるを道具替りの知せ、）知らしてくれん。

と無念の思入よろしく、時の鐘合方にて道具廻る。

（門前の場）＝本舞臺元の門前の道具、本行の禪の勤めにて留る。と門の内より以前の奥女中四人出來り四邊へ思入、後より政尾出來り、

政尾　皆の衆。

四人　政尾さま。

政尾　これ。（ト本釣鐘、合方になり、四邊へ思入あつて、）最前落した箱迫を人もあらうに玉笹に拾はれた上見られたからは、包みし事の破れ口と思うたゆゑに箱迫に、あつた金を見失ひしと、耻をかゝせてやつたれば、鏡山の狂言なら自害でもするとこなれど、日頃意氣地のない氣性、命を捨てずお

暇願ひ、大方宿へ下るであらう。
柏木　あの玉笹が暇を取り、もう跡に、
明石　御殿を下れば、
關屋　あなたへ逆ふものはなし、
浮舟　私共まで肩身が廣く、
柏木　こんな嬉しい、
四人　ことはない。
政尾　やがて此の身の願ひが叶へば、お前方は中老役、
柏木　さうなる時は政尾さまは、
明石　言はずと知れた、
四人　お局さま。（ト此の時後へ以前の多九郎、尻端折り拔身にて窺ひ出て、）
多九　うぬ、さつきの返報。（ト切つてかゝるを立廻つて、）
政尾　おゝ、こなたは亂暴なせし浪人、以後の見せしめ。
多九　何を。（ト振解いて切り込む、政尾突廻してあてる。）

政尾　あゝ取るに足らざる、（ト多九郎をぽんと投げるを木の頭、）侍ぢやなあ。

ト本釣鐘、誂への合方にてよろしく、　ひやうし　幕

六幕目　筑摩川乗切の場

［役名］═多賀大領、大月藏人、安宅郷右衞門、久松三五郎、鳥居又助、左枝主馬、中澤甚平、吉良助太郎、高木淺右衞門、野田八郎次、水野平十郎、松井彌三郎、名島瀨右衞門、川村慶次、川役人千藏、又助倅又市、其他。］

（筑摩川河原の場）═本舞臺一面の平舞臺後木曾山の高嶺を見たる筑摩川の書割、裾通りへ蛇籠を並べ、上下芦原、よき所に松の立木、總て河原の模樣よろしく。上手川役人羽織踏込裝にて立掛り、下手に川越の雲助六人立掛り居る、この見得水の音、馬士唄にて幕明く、

雲一　川役人さんがおら達に、

同二　急に言渡しがあると言ふから、

同三　頭立つた者を呼び集め、

同四　六人揃つてめえりましたが、
同五　改まつて言渡しとは、
同六　どんな言ひ附けで、
六人　ござります。
役人　いや其の言渡しは外でもないが、貴様たちも聞いたであらうが、今年は多賀のお殿様が中仙道をお下りで、いよ〳〵今日のお中食後、この筑摩川をお越しださうだが、生憎此の間からの雨續きで川が廣がり、あの通りの水勢だから川に間違ひでもないやうに、氣を附けて貰ひたいのだ。
雲一　そりやあ年中斯うやつて川越人足をして居れば、假令どんな水勢でも旅人に怪我はさせません。
同二　又殿様を渡す時には、大蓮臺へ駕籠を載せ、こつちの仲間が總掛りで水を切るから大丈夫、
同三　さうしていつも東海道をお下りになるお大名が、どういふ譯で今年に限り、
同四　中仙道を下らつしやつて、此の木曾路を通らつしやるか、
同五　これには譯がありさうだが、何ぞいはれでもありますなら、
同六　こつちの心得にもなりますから、どうか話して、
六人　聞かせて下さい。

役人　いや別に譯のあることでもないが、今年は春から降り勝ちで兎角川留めの多い年ゆゑ、東海道を
下る時は大井川だの天龍だのと川留めの憂ひがあるから、里數はよつぽど廻りでも無事を計つて
中仙道から信濃路をお下りになるのだ。

雲一　さう聞いて見ると此の川も、並の賃錢ぢやあ越されぬ譯だ。

同二　かういふ川幅になつて居るから、二割增しはお定まりだが、

同三　相手が多賀の、大々名では、五割增しにもして貰ひ、

同四　久し振りにて酸い酒の、一杯づゝも呑まにやあならぬ。

同五　晩には酒の一升も、運上がはりに上げますから、

同六　どうか掛りの役人衆へ、旨く賴んで、

六人　おくんなせえ。

役人　いや相當の賃錢なら、願つてもやらうけれど、あこぎなことでは川役所へ後日のしぶが來ること
ゆゑ、おれの計らひにもなりにくい。

雲一　何にしろこちとらも、

同二　長い錢にありつく仕事だ、

同三　立場へ行つて久し振りで、
同四　何も縁起の前祝ひだ、
同五　氣附けに一杯やつておかう。
同六　それがい〻〳〵。
役人　これ〳〵酒は後にしろ、醉ひでもすると間違ひの種だ。
雲一　なに、間違ひは、
皆々　しやあしません。
役人　いや、よく呑みたがる奴等ではある。

ト川役人は上手、人足六人は下手へはひろ。跡馬士唄きつぼりとなり、花道より郷右衛門野牛纒野羽織紐附の股引、切緒の草鞋大小にて一文字の笠を持ち出來ろ、續いて淺右衛門八郎次同じく旅裝にて出ろ、跡より鳥居又助紺看板一本ざし、脚絆草鞋中間の裝にて饅頭笠を持ち、又市奴髮同じ中間裝にて又助に手を引かれ出來り、皆々花道に留り、

郷右　最早向うが河原と見えるが、まだ殿樣のおいでには餘程間もあらうから、あれへ參つて休息いたさう。

淺右　何さまそれがよくござる、幸ひ四邊に人目もなければ、
八郎　かの御密談をなさるには、最屈竟と申すもの。
又市　これおとつさん、向うの川は何といふ川だえ。
又助　あれが信州筑摩川といふ、水瀬の早い大川だ。
又市　どうしてあれを越すのだえ。
又助　おれが肩車をして越してやるから、案じずともいゝ。
鄕右　いや、川越共に申しつけ、間違ひのないやう越させてやるぞ。
又助　それは有難いことでござりまする。
淺右　何は格別河原へ參り、
八郎　かの一條を今の内、
鄕右　何さま彼れに談じて見ませう。

ト右の唄にて皆々舞臺へ來り、侍三人有合ふ捨石へ腰を掛ける、又助後の川を見て、

又助　成程これは噂の通り、近年にない滿水だ。
淺右　然し河童と呼ばれるほど、水に得手たる其の方などは、

八郎　假令如何ほど滿水でも、恐れることはあるまいな。

又助　いえ、生兵法は大疵の元で、侮りまするると押流され、却つて危ふい目に遭ひます。

ト此の內鄉右衞門摺火打を出し、煙草を呑み居て、

鄉右　こりや又助、その危ふい目を浦和の宿で我が主人に救はれしこと、そちは忘れはいたすまいな。

トこれより誂への合方になり、

又助　是れは又替つたお尋ね、何であの節の大恩を忘れてよいものでござりませうか、それでなくとも鎌倉で綱船渡世をして居る時分、大月さまの御贔屓受けお漁の時は相かはらずお供をいたした此の又助、それと申すも其の以前お國表の鳥居本で生れましたる私ゆゑ、以前のよしみを思召され御贔屓受けし其の上に、浦和の宿での命の御恩、決して忘れはいたしません。

淺右　扨はお國の鳥居本で、生れしゆゑに其の方は、

八郎　所の名をば姓となし、鳥居又助と申すのか。

又助　いや名前は立派でござりますが、お國に居つた時分から金箔附の貧乏人、其の日に困つて居る所へ是れが弟を產んだ時血が納らず女房が死に、仕樣模樣も泣かるゝ水子、乳のあるのを幸ひに腰越村の從弟同士同じ漁師の太左衞門へ、預けて稼ぎのその爲めに世帶を仕舞つて木更津から常陸

を廻り彷徨ひ歩いて居りましたが、僅かな路用も遣ひ果し喰ふや喰はずで親子二人、浦和の宿まで參りましたが、生甲斐のない身の上に首を縊つて死なうとしたを、大月樣に助けられ、役にも立たぬ忰にまで斯樣なお仕着を下さりまして、生れ故鄕へ歸るがよいとお供の中へお加へ下され斯うして是れまで參りましたは、どの位嬉しいか、知れたものではござりませぬ。

又市　あの時に旦那さまがお助け下さりませなんだら、父さんもわたくしも斯うして生きては居られませぬ、命の親の旦那さま、御恩は決して忘れませぬ。

又助　おゝ、さうだ〳〵必ず御恩を忘れまいぞ。（ト鄕右衞門思入あつて、）

鄕右　すりやそれほどにそち達は、主人の恩義を思ひ居るか。

又助　いやもう酒を呑んではだらしのない此の又助ではござりますが、御恩は寐た間も忘れませず、大月さまのお爲めなら命なりとも厭ひますまいと、有難く思つて居ります。

淺右　すりや御主人の爲なれば、

八郎　命も入らぬと申すのか。

又助　へい一旦受けた御恩返し、お望みならば命でも、上げる心で居りまする。

トこれを聞いて侍三人顏見合せ思入あつて、

鄕右　こりや又助、その心底を聞く上は、ちと折入つて御主人が其の方に賴みがあるが、何と仕果せてはくれまいか。
又助　へい、仕果せろとおつしやいますが、水の中での働きより外に何にも知らぬわたくし、此の身に叶つたことならば、何なりといたしませう。
鄕右　おゝ其の水練を見込みにて、大月樣が其の方にお賴みなさる儀があるのぢや。
又助　この身に出來ますことならば、決して厭とは申しませぬ。
淺右　そのお賴みを仕果せなば、直に取立て侍分、
八郎　我々同樣大小たばさみ、立派な身分に、
兩人　なれることぢや。
又助　して、お賴みとおつしやりますは、どんなことでござりまする。
鄕右　只今申して聞かすであらうが、容易ならざる一大事、とてもの事に其の前方、違變いたさぬ誓ひが見たい。
又助　そりやもうどんな誓ひでも立てゝ、御覽に入れませうが、誓紙とやらを書きますにも、無筆のことゆゑ書けませぬ。

郷右　いや／＼、何も誓紙などを認めるには及ばぬこと、誓ひはそれなる悴又市、人質代りに預かりおかん。

又助　いえ、そんなことなら造作もないこと、さあ／＼悴少しの間だ、あなたのお側へ行つて居やれ。

ト又市を郷右衛門の方へ連れて行くゆゑ、

又市　さうして何ぞするのかえ。

郷右　いやそちの親父が得心するまで、人質代りに預りおくのぢや。

淺右 八郎　さあ／＼、これへ參れ／＼。（ト又市を下手へ連れて來る、又助思入あつて、）

又助　して、お賴みとおつしやりますは。

郷右　又助、近う。

又助　へい。（ト側へ行く、これにて郷右衛門又助へ囁くことあつて、）

郷右　斯くの次第ぢや。（ト又助思入あつて、）

又助　あの、殿樣を。（ト大きく言ふゆゑ、）

郷右　あこれ。（ト押へ四邊へ思入あつて、）よもや違變はあるまいな。（トこれにて又助思入あつて）

又助　さあ、其の御返事は。（ト言ひ兼ねて居る、是れにて淺右衛門一腰を拔き又市に差し附け、）

淺右　違變に及ばゝこの人質を。（トきつとこなし。）
又助　あゝもし、お待ち下さりませ。
鄕右　然らば賴みを承知いたすか。
又助　さあ、それは、
八郞淺右　悴を殺すか。
又助　さあ、
三人侍　さあ、
四人　さあ〳〵〳〵。
鄕右　又助返事は、如何なるぞ。
トきつと言ふ、又助はぢつと思入、又市は八郞次に捉へられて居ながら、
又市　これおとつさん、わしは死んでも仕方がないが、御恩になつたお人のお賴み、聞いてあげて下さりませ。
又助　えゝ、手前は何も知らぬけれど、賴みを聞けば御領主を。（と言ひかけるを、）
鄕右　あこれ。（ト押へる。又助氣を替へて、）

又助　いえ、頼みを聞けば大月様に、御恩返しが出來ますから、承知しましてござりまする。

　　ト是非なき思入。

鄕右　然らば首尾よくいたしてくれるか。

又助　へい、悴が命を誓ひに立て、首尾よく遣るでござりませう。

淺右　得心なれば此の方とて、

八郎　無益の殺生仕度くもない。（ト八郎次刀を鞘に納める。又助又市へ思入あつて、）

又助　これ悴、仕方がないと口では言へど、死にたいことはあるまいな。

又市　浦和の宿で旦那樣に、折角助かる命ゆゑ、死にたいことはござりませぬ。

又助　おゝ尤もだ、さうであらう。（ト欝いでゐる、鄕右衛門思入あつて差添を鞘ごとぬいて、）

鄕右　こりや又助、これへ來やれ。

又助　へい、何ぞ御用でござりますか。

鄕右　こと十分に仕果すやう、我が差添を貸して遣はす。

又助　そんならそれを、わたくしに。

鄕右　おゝ、これにて首尾よくいたしてくれ。（ト又助に渡す。）

又助　これさへあれば赤錆の、錆びた刀は入りません。
鄕右　不用とあるなら邪魔なれば、身共が暫時預りおかう。
　　　トこれにて又助以前の刀を、件の差添と腰へ差しかへ、
又助　そんならこれをお腰ふさげに。（ト出す。）
鄕右　おゝ、慥に身共が預つた。（ト腰へ差す、又市此の樣子を見て案じるこなしにて、）
又市　これおとつさん、さうしてあなたのお賴みは、どんなことをしますのだえ。
又助　いや、手前が聞くには及ばぬことだ。（トやはり萎れて居るゆゑ、鄕右衛門思入あつて、）
鄕右　まだ此の外に又助に、密々談ずる儀もあれば、悴を連れて御兩所は一足先きへお出で下さい。
淺右　然らば我々兩人は、
八郞　川役所にてお待ち申さん。
又助　そんなら悴と、御兩所樣は。
淺右　おゝ、我々しかと、
兩人　預かつた。
又市　おとつさん、先きへ行きます。

又助　おゝ、おとなしくして待つて居やれ。（ト愁ひのこなし）

淺右　左樣ござらば、

兩人　安宅氏。

鄕右　さゝ、お構ひなくおいで下され。

ト馬士唄、水の音になり、淺右衞門八郎次は又市を連れて上手へはひる。又助又市の後を見送り囁、て居るゆゑ、鄕右衞門思入あつて、

こりや又助、然らばあれなる川添の蘆間の茂みへ隱れ居て、いよ／＼水馬と極まらば、水を潛りつ水中にて、たゞ一突にいたしてくりやれ。

又助　そりやもう、餓鬼の自分から河童と人に言はれるほど、水を潛るに得手なわたくし、管一本ありさへすれば、水の底にて息をつぎ一日位は隱れて居ますが、萬一水馬の模樣がかはり蓮臺越しとなりましては、こつちの目當が違ひますが、それは宜しうございますか。

鄕右　はてそれは御主人大月樣が、殿のお側に附添ひ居て忠義ごかしの諫めをいれ、水馬で越さねばならざるやう取り計らふが反間苦肉、模樣の變る氣遣ひなし。

又助　さういふ手段がござりますなら、こつちもきつと仕果せて、御恩返しをいたしませう。

又助　これさへあれば赤鰯の、錆びた刀は入りません。
郷右　不用とあるなら邪魔なれば、身共が暫時預りおかう。
　　トこれにて又助以前の刀を、件の差添と腰へ差しかへ、
又助　そんならこれをお腰ふさげに。（ト出す。）
郷右　おゝ、慥に身共が預つた。（ト腰へ差す、又市此の樣子を見て案じるこなしにて、）
又市　これおとつさん、さうしてあなたのお頼みは、どんなことをしますのだえ。
又助　いや、手前が聞くには及ばぬことだ。（トやはり萎れて居るゆゑ、郷右衛門思入あつて、）
郷右　まだ此の外に又助に、密々談ずる儀もあれば、忰を連れて御兩所は一足先きへお出で下さい。
淺右　然らば我々兩人は、
八郎　川役所にてお待ち申さん。
又助　そんなら忰と、御兩所樣は。
淺右　おゝ、我々しかと、
兩人　預かつた。
又市　おとつさん、先きへ行きます。

又助 おゝ、おとなしくして待つて居やれ。（ト愁ひのこなし、）

淺右 左樣ござらば、

兩人 安宅氏。

郷右 さゝお構ひなくおいで下されぃ。

ト馬士唄、水の音になり、淺右衞門八郎次は又市を連れて上手へはひる。又助又市の後を見送り欝いで居るゆゑ、郷右衞門思入あつて、

こりや又助、然らばあれなる川添の蘆間の茂みへ隱れ居て、いよ〳〵水馬と極まらば、水を潛りつ水中にて、たゞ一突にいたしてくりやれ。

又助 そりやもう、餓鬼の自分から河童と人に言はれるほど、水を潛るに得手なわたくし、管一本ありさへすれば、水の底にて息をつぎ一日位は隱れて居ますが、萬一水馬の模樣がかはり蓮臺越しとなりましては、こつちの目當が違ひますが、それは宜しうござりますか。

郷右 はてそれは御主人大月樣が、殿のお側に附添ひ居て忠義ごかしの諫めをいれ、水馬で越さねばならざるやう取り計らふが反間苦肉、模樣の變る氣遣ひなし。

又助 さういふ手段がござりますなら、こつちもきつと仕果せて、御恩返しをいたしませう。

鄉右　首尾よくいたせしその上では、知れざるやうに陸へ上り、晩の泊りへこつそり來やれ。
又助　何れ晩程吉左右を、お知せ申すでござりませう。
鄉右　然らば必ず油斷なきやう、
又助　承知いたしてござりまする。
鄉右　若し仕損じなば、悴が命を、
又助　あゝもし、それゆゑきつと仕果せまする。
鄉右　はて小氣味の好い奴ではある。(ト右の唄にて鄉右衞門上手へはひる。又助これを見送り思入あつて、)
又助　いや、大方こんな事であらうと、此の間から思つて居たが、死なうと思つて居た所を助けてくれた其の上に厚い手當の取扱ひ、重々恩を被せた上賴みを聞けと悴まで人質代りに取られては、假令故鄉の御領主樣でも、こいつあ厭とは言はれぬわえ。(ト此の時花道の揚幕にて、)
大勢　下に居ろ〳〵。(ト聲する、又助向うを見てびつくりなし、)
又助　やあ、もう先供がやつて來たか、どれ身支度に取掛らうか。

ト思入あつて後の芦原の蔭へ忍ぶ、跡誂への行列三重になり、花道より野伴天、大小、紐附の股引、切緒の草鞋にて一文字笠を冠りし徒士供「下に〳〵」を言ひながら出來り、舞臺を通り上手へ入る、よ

き程に多賀大領、ぶつさき羽織、野袴、大小、草履にて裏金の騎射笠を冠り出來ろ、續いて大月藏人野牛經、羽織、大小、紐附、股引、切緒の草鞋にて騎射笠を冠りて附添ひ、其の跡より久松三五郎、左枝主馬、中澤甚平、吉良太郎等何れも大小旅裝にて出ろ、其の跡より水野平十郎、松井源三郎、名島瀧右衛門、川村慶次野牛經、野羽織、大小のこしらへにて一文字の笠を冠り出ろ、づッと跡より中間大勢紺看板、一本ざし、脚絆草鞋、饅頭笠にて革床几、合羽籠などを擔ぎ出來り、此の人數皆々花道へ並ぶ。

大領 旅すれば憂きを信濃と申せども、月の名所も數多くうつる田毎や更科の山の端照す夜半の景、つきぬ眺めの興添へて、寢覺の里の風色は、實に千金にも代へがたく、憂きを忘るゝ程なりし。

大月 實に我が君の御諚の如く、木曾路と聞けば驛路も山また山へ列なりて難所ばかりと思ひきや、登る嶮岨に興ありてうすひといへど濃い紅葉、色增す山の風景は又一入と存ぜられ、暫し休らふ峠茶屋、

三五 弓手に錦の梢あれば、馬手には清き谷川の流れとおぼしき白旗あり、

主馬 是れぞ由來の清水かと、その源を尋ぬれば信濃源氏の夢の跡、

甚平 茂る尾花に古の、榮華もかくやあらし吹く、

助太 峯の御嶽を拜さんと遠く望めば足下に、

平十　谷の懸橋いしぶみの、
彌三　命のからむ蔦葛、
瀧右　古蹟をあとに信濃路も、
慶次　はや近づきし筑摩川、
大領　はて、風情ある、
皆々　この眺め。（トよろしくこなしあつて、）
大月　只今河原の役所より御案内を申し上ぐれば、君にはあれなる河原まで、いざ〳〵お越し、
皆々　遊ばされませう。
大領　おゝ、左樣いたさう。

ト謠への鳴物にて此の人數皆々舞臺へ來り、中間大勢革床几を直す、これにて眞中に大領、上手に大月、下手に三五郎、主馬、甚平、助太郎此外中間四人後へ並び何れも床几へ掛ける、大月思入あつて、

大月　はツ、我が君へ申し上げます、この程よりの霖雨にて名におふ木曾の山々より、一時に押出す雨後の滿水、既に渡りも止るべき水勢烈しき急流なれば、所詮水馬のお催しは覺束なく存じますれば、人夫を雇ひ水を堰かせ、君にはお駕籠に召させられ、大蓮臺にてお越しあるやう、只管願ひ

奉る。

ト是れを聞き大領むつとせしこなしにて、

大領　すりや滿水の急流ゆゑ、水馬を催し義則がこの筑摩川を打越すは、覺束ないと申すのぢやな。

大月　はゝツ、君へ對し拙者如きが憚り多きことながら、いとも危ふく心得ますゆゑ一期の大事と恐れながら、お止め申してござりまする。

大領　いや、かばかりの滿水を多賀の大領義則が水馬で越せざることあらんや、いらぬ止め立て控へてよからう。

大月　すりや拙者めがお諫めを、御採用はござりませぬか。

大領　むゝ、かねて今般鎌倉表を出立いたす砌より、木曾路を下れば筑摩川にて水馬の試み致さんと、それのみ樂しみ居つたのぢや。（トきつと言ふ、これにて大月旨いといふこなしあつて、）

大月　それぞこつちの。

大領　やあ。

大月　いえ、それぞ匹夫の勇にして、斯く大國をしろしめさるゝ、我が君樣の御存慮とも、覺えぬ儀かと、恐れながら存じまする。

大領　なに、義則を匹夫の勇とは。（トこれより誂への合方になり、）

大月　臣たる身として主君へ對し失禮至極の一言ながら、幾千萬にも替へ難き君の御身と存じます故、止むを得ずして匹夫の勇と申上ぐるその仔細は、假令鎌倉御發駕の折、思立ちたる儀なりとも、機に臨み變に應じ進退懸引き遊ばさるゝが、我が君のお心掛けかと存じまする。御諚の如く斯ばかりなる大河の儀ゆゑ水中にて、凶變とてもござりますまいが、萬一もしもの事あらば、あれ見よ多賀の大領は、我意に募りて旅中に於て、無益の水馬をいたせしゆゑ、非業の最期を遂げしなど、世人の誹謗を受けましては、君のお側に人なきやうにて、不忠の至りにござりまするゆゑ、差出がましきことながら、お供の列に加はりましたる身の面目と心得まして、御異見申し上げまする。

大領　やあ、予が日頃より目を掛けて取立てくるれば好いかと心得、無禮至極なその諫言、左程これなる筑摩川が恐ろしく思ふならば、汝一人旅宿へ歸り、虚病をつかつて逗留いたせ。目通り叶はぬ、臆病侍。匹夫といふ事は汝がことぢや、とつとゝ旅宿へ下り居らう。

トきつと言ふ。これにて大月、大領に恐れしこなしにて、床几を放れ下手へ來り下に居て、

大月　假令御不興蒙りまして差控への儀を承はるとも、たゞ我が君の御安危が案じられて相成りませぬ。

トはツとひれふす、みな〳〵此の體を見て思入あつて、

三五　はゝツ、我が君へ申し上げまする、出でゝ再び返らざる日頃の御氣質存じながら、押してお諫め申せしは、こりや藏人が粗忽の至り、御尤もなるお怒りながら、

主馬　又退いて考へますれば、君のお爲めを存じまして、失禮をも顧ませずお諫め申せし彼れが心底。

甚平　我々とても此の急流、君御馬上にてお越しあるは、いとも危ふく存じますれば、お勸め申す場合にあらず、

助太　御大切なる御身ゆゑ、お爲を思はゞ只管にお諫め申すが臣下の道、假令別條なきとても、

平十　水勢穩かなる時は、お慰みにも相成りませうが、

彌三　斯く滿水の急流を、好んでお越し遊ばしまするは、

瀧右　宜しからずと存じますゆゑ、

慶次　臣等一同只管に、

三五　この儀はお留め、

皆々　申し上げまする。

大領　すりやそち達も藏人に、同意いたして斯ばかりの、川を越ゆるを恐るゝか。

三五　あいや、全くさにあらねど、
主馬　君のお爲めを、
皆々　存じますゆゑ。
大領　やあ、爲めを思はゞ義則の、詞に附いて水馬いたせ。
三五　すりや、御諫言申す時は、
主馬　我々共が一命惜しみ、
甚平　大河に恐怖いたすかと、
助太　君の御疑念、
皆々　ござりまするか。
大領　おゝ、自國と違ひ他領にて、義則心臆したりと、誹謗されんは殘念至極、
三五　すりや、それゆゑに我が君には、
主馬　是非とも水馬を、
皆々　遊ばしまするか。（トこれより合方きつぱりとなり。）
大領　そりやはや、主が案じくれるは臣たる者の忠義なれど、治にゐて亂を忘れざるがこれ武士の心掛

け、我も乘得し駿足なくば、鎌倉表を發足の折、かゝる望みは立たざるが、夫の宇治川の大河を渡りし佐々木梶原兩人が、祕藏なせしと聞き及ぶ、池月磨墨の名馬にもをさ〳〵劣らぬ駿足を、かねて寵愛いたし居れば、斯かる早瀨の滿水を乘得て試しおかざれば、いで戰場と申す時、ものゝ役には相立つまじ、それゆゑ今般引かせたる奧州黑の魁にて、見事水馬をいたして見ん。我を警護の心あらば、各自馬上で乘入つて、向ふの岸まで乘ッ切り見よ。（卜是れを聞き大月顏を上げ、）

大月　御不興受けし身を以て、再度のお諫め恐れながら、それぞ太守と仰がれたまふ我が君樣の御賢慮にも似合しからぬ思し立ち、そりやはや、乘馬は池月や夫の磨墨に勝るとも、水勢矢を射る此の急流宇治川などゝは同じからず、まことに危ふき大事ゆゑ再三再四お諫め申し、假令御不興を蒙りませうとも、拙者の詞お用ひあるやう、只管願ひ奉つる。

大領　やあ又しても其の諫め、壯年よりして此の義則一旦思ひ立つたること貫ずして留めぬ性來、大河の滿水早瀨の急流、汝が言はずとも存じ居るわえ、口を噤んで控へて居らう。

大月　すりや、どうあつても我が君樣には、危ふき水馬を遊ばしまするか。

大領　やあ、諄いわえ。（トきつと言ふ、三五郎前へ出て、）

三五　こりや〳〵大月控へめされい、押して申すは宜しからぬぞ。（卜是にて大月はッと控へる、三五郎大領

の方へ向ひ、）はゝツ、斯く御決定ある上は最早お留め申し上げねど、お爲めを思ひ斯くまでにお諫め申す藏人に、差控への儀を申しつくるは、餘り不便と存じますれば、

主馬　君に失禮申し上げし、彼れが粗忽は幾重にも、我々がお詫び仕れば、

甚平　その御立腹は滿水たる、此の筑摩川の急流へ、

助太　お流し遊ばし此の儘に彼れが罪科を御免の御沙汰、

平十　我々共に至るまで、

彌三　只管お詫び仕つれば、

瀧右　何卒御許容下さるやう、

慶次　お供に列る者一同、

三五　偏に願ひ、

皆々　奉つる。（ト是れにて大領思入あつて、）

大領　然らば皆の執成しゆゑ、此の儘供に召連るれば、馬上で殘らず供いたせ。

三五　はゝツ、君の爲めには一命を、

主馬　輕んじまするが武士の本分、

甚平　善悪共に身を惜しまず、

助太　水馬のお供、

四人　仕つらん。

大領　おゝ、予もそれ聞いて滿足なるぞ。（ト悦ぶこなし、大月うまくいつたといふこなしあつて、）

大月　斯くも首尾よく、（ト思はず言つて氣を替へ、）いや、御前の首尾の直りしも、各方の御厚情、

三五　然らば、御身も諸共に、

主馬　水馬のお供を、

四人　いたされよ。

大月　有難く心得まする。（ト辭儀をなす。大領床几を離れ向うへむかひ、）

大領　誰そあるか、乘馬を引け。（ト呼ぶ、これにて花道揚幕の内にて、）

大勢　はあゝ。（ト聲して馬の嘶き轡の音すること、大領これを聞き、）

大領　はて、勇ましく、（トにつたり笑ふを道具替りの知せ、）嘶きをるわえ。

ト皆々引つぱりよろしく、水の音にて此の道具まはる。

（乘切りの場）――本舞臺一面の平舞臺上下蘆原の茂み、正面一面浪手摺程の張物、これへ河原の書割よろしく、此の上へ左右遠見の蘆原同じく蛇籠などを並べ、この後筑摩川の急流を見せたる大河の遠見、舞臺前よき所に、松の立木、總て後の道具遠見の誂へよろしく、水の音にて道具留る。

と鳴物打ち下げ大薩摩になる。

唄〽それ木曾山の南面に落合ふ水の筑摩川、頃しも秋の習ひにて續く霖雨もやゝ晴れて雨後の川水彌增り、名にし大井の滿水も、斯くやと思ふ川の面、矢よりも早き急流は目覺しくもまた恐ろしゝ、（トこれより水の音をあしらひ、）

〽さても我慢の大領が、臣下の諫め小賢しと水馬の試し魁の名馬に鞭を當てたまふ、樣子得たりと又助が忍ぶ蘆原押分けて、立出る影にきらめきし刄の光り鋭くも、ざんぶと川へ入る間もなく、

ト此の內よき程に上手の遠見の蘆原より、又助の吹替へ子役の又助素裸にて窺ひ出で、下手を見てよろしくこなしあつて、一腰を拔き口に啣へ後の川へ飛込む、

〽君の勇氣に劣らじと警護の臣が馬面揃へ、乘り入る大河遠淺を、上手の方へ半丁餘り昇るとすれど水勢の力に押され一同に、戻りては又大石の助けに依りて踏み止まり、渡る人馬も

戰場の修羅の街に異ならず、危ふかりける次第なり。

ト、此の內始終誂への鳴物をあしらひ、下手の方より以前の大領、大月、三五郎、圭馬、甚平、助太郎の吹替への子役何れも騎射笠を冠り馬を遣ひながら出で、遠見の川を渡り水に押し流さるゝこと度々あつて、トゞ上手へはひる。此の留り本釣鐘を打込み凄みの合方、雀笛になり、舞臺前下手の蘆原の內より指金の雲雀大分に群り飛び去る。よき程に蘆原を押し分け以前の鄕右衞門出で、四邊を窺ひ思入あつて、

鄕右 はて心得ぬ、我が主人と言合せ、情をかけて又助めを此の信濃路まで連來り、祕する大事も小忰の人質取つて言含め、いやと言はせぬ詞詰め、水に得手たる早業も主人が流るゝ辯舌にて、まんまと君をあほり立て、馬に一泡吹かせしは十分深みへはまりしと思ひの外にさはなくして、再び三たび水勢に押し流されしも辛うじて向ふの岸まで乘切りしは、こりや又助が水中にて仕損じたりと覺えたり。はて殘念な。（ト思はず大きく言つて口を押へるを道具替りの知せ、）ことではある。

ト小聲にていふ、此の模樣水の音にて道具廻る。

（筑摩川向う岸の場）――本舞臺一面常足の二重八枚飾り、前面河原の蹴込み後木曾山を遠く見たる在

體の書割、上下植込みの張物にて見切り、舞臺前に蛇籠浪板などよろしく並べ、二重の上手に菰包の長持その外荷物など大分に積重れあり、下手よき所に松の立木、これに飾附きの黒毛の馬一匹繫ぎあり、總て筑摩川向う岸の體、爰に以前の大領河より上りしこしらへにて眞中に床几にかゝり、上手に三五郎、甚平、下手に主馬、助太郎何れも川より上りしこしらへにて同じく床几に掛り居る、後に供廻りの人數大勢よろしく居並び、此の見得水の音在鄉唄の合方にて道具留る。

三五　はゝッ、君の御馬術勝れしゆゑ、
主馬　かく滿水なる筑摩川、
甚平　易々こなたへ打越したまひ、
助太　臣等の悅びこれに過ぎず、
三五　一同恐悅、
皆々　申し上げまする。
大領　して藏人は何れにある、これに見えぬが如何せしぞ。
三五　はッ、水馬のお供は仕りましたれど、
主馬　君へ失禮申し上げ、

甚平　御不興うけし身分なりと、
助太　自ら御遠慮仕つり、
平十　遙あなたの川下にて、
彌三　お供の中に差控へ、
瀧右　君の御馬術蔭ながら、
慶次　感悅いたして、
皆々　をりまする。
大領　いや其の差控へに及ばぬことぢや、藏人をこれへと申せ。
瀧右　はッ、（ト前へ出て、下の方へ向ひ。）それに控へし大月氏、お召しでござる、急いでこれへ。
大月　（下手にて。）はッ、（ト答へて出來り二重下手に平伏し。）はゝッ、斯く御馬術に勝れたまひ、御武運目出度き我が君へ拙者が粗忽の御諫言申し上げしはこれ重罪、如何なるお咎め受けませうとも、聊か厭ひはござりませぬ。（トよろしくこなし。）
大領　いや、其の詫びには及ばぬことぢや、苦しうない進め／＼。
大月　はッ、お咎めはござりませぬとな。

大領　はて、いかで咎めを申し附けん、其の方こそは我が爲めの、守り神とも思ふぞよ。

大月　え丶、何と御意遊ばしまする。（ト合方きつぱりとなり、）

大領　我れ幼年より癇癖強く、強ひて諫を入れらるれば正路のことでも採用いたさず、是れまで我意を
貫きしが、今日こそは此の義則よしなき事と悟りたり、それと申すも其の方が、先刻我を諫めく
れしを用ひずして、水馬を催し臣等と共に筑摩川へ無二無三に乘り入りしが、始めの程はわれ人
共に何これしきの急流を打越し得ざる事あらじと、水に逆らひ半町餘り上手の方へ昇りしが、逆
卷く水は矢を射る如く岩をも流す水勢ゆゑ、深みへ至りて押し流され、駒の蹄の立たざれば三度
までも覺悟極めし時ありしが、前後左右を警護なす臣下のもの丶助けを得て、辛くも岸へ乘りつ
きしは、水馬の前に其の方が我れを諫めしことあるゆゑ、心に聊か油斷なく進退堅固にいたせし
ゆゑぢや、咎めどころか其の方は、命の親とも思ひ居るぞよ。

ト息切れのせし思入にて、よろしく言ふ。

大月　はゝツ、こは勿體なき御懇の御意、全く君の御馬術が勝れしゆゑに此の大河を、打越したまふ御
高運、

三五　その御馬術に劣らじと、勇氣を勵まし我々も、

左馬　一命捨つる覺悟にて、逆卷く水を渡りしゆゑ、

甚平　九死を出で、一生を、得たるも正に身の面目、

助太　これなる岸へ乘り着けしは、全く君の御武德に、

三五　あやかりまして、

五人　ござりまする。

大領　いや／＼左樣な譯ならず、諺にいふ危きに近寄らざる君子の道、されば是れなる五人の外に水馬をなさゞる者どもは、蓮臺に乘り易々と後より川を打渡り、其の身に疲れも見えざるなり。毛にも角にも義則が我意に募るは今日限り、以來は諫めを用ゆる間藏人はじめ皆の者、無益の心勞いたさせしは、予があやまりぢや許してくれよ。

大月　はゝッ、思ひよらざる其の御諚、

三五　一同恐れ、

皆々　入りまする。（ト大領思入あつて、）

大領　こりや藏人、予を諫めたる功に依り、今日よりして五百石そちに加增を申し付くるぞ。

大月　なに、拙者めに、

皆々　御加增とな。

大領　おゝ、加增は其の方ばかりでない、一同加增を、

皆々　え ゝ。（トびつくりなす、大領床几を離れ立ち上るを木の頭）

大領　申し附くるぞ。

トよろしく思入、大月は遣り損ひしといふこなし、皆々、はツと平伏なす。此の模樣水の音カケリにて、

ひやうし幕

七幕目

鏡山紅葉狩の場
大月下屋敷の場

〔役名——大月藏人、小田大炊、左枝左渡守、安宅鄉右衞門、久松三五郎、鳥居又助、深見十藏、高木淺右衞門、野田八郎次。大月妻お照、同妾お雛、又助伜又市、其他。〕

（鏡山鏡葉狩の場）——本舞臺四間常足の二重草土手の蹴込み、上下芝山の張物にて見切り、此の前所々に紅葉の立木、日覆より同じく釣枝、後上手斜に山へ登る三段、此の脇山の張物、下手は遠山に紅

葉を見たる遠見、總て江州鏡山紅葉盛りの體、爰に中間○、△、□紺看板一本ざしにて毛氈、提重、燗銅壺を提げ立掛り居る、木樵唄、かすめて山おろしにて幕明く。

○ これ權平、榮耀は餅の皮といふが、おらが旦那の左枝樣もお內で御酒を上つたら、御不自由がなくてよからうのに、兎角淋しい所がお好きだ。

△ 御家老方や御用人衆は片舍田が面白いか、蟲を聞くの鹿を聞くのと、人も行かねえ原中や古寺などへおいでなされ。

□ 詩を作るの歌を詠むのと、大きな聲もなさらずに、互ひに額を突合せ考へ顏をしてござるが、あれが樂みになるか知らぬ。

○ 今日もこの鏡山の紅葉の盛りを見物するから、先きへ參つてよき場所を見立ておけとおつしやつたが、何と此處等がよからうか。

△ 丁度後へ夕日を受け、向うへ山を見晴らして申分のない所だ、場所は此處らと極めるがよい。

□ 第一此處は地面が平で、おまけに綺麗なこの芝原、毛氈を敷くに都合がいゝ。

○ どうで今夜は月がいゝから、お歸りは夜になるだらう。

△ 追々風は寒くなるのに、酒も呑まずにまじ〳〵と、

□　この芝原に蹲んでゐて、供待をするは難儀なことだ。

○　爰等は大月さまなどは、下から上つたお人だから、御酒代でも下さるが、

△　內の旦那は懷子、世間知らずの御家老だから、

□　そんな所へは氣が附かねえ、人は下から出にやあいかねえ。（ト三人向うを見て、）

○　うつかり惡くは言はれねえ、旦那樣がおいでなされた。

△　どれ、毛氈を敷いて、

三人　お待ち申さう。

ト誂への合方になり、中間三人舞臺へ毛氈を敷く、此の內花道より佐渡守羽織袴大小家老のこしらへ、絹羽織袴股立大小若黨の二人附添ひ出來る、後より小田大炊白髮鬘羽織着流し大小、吸筒の瓢を提げて出來り、花道にて、

大炊　卒爾ながらそれへござるは、左枝氏ではござらぬか。

佐渡　いや、どなたかと存ぜしに、小田の御老公でござりましたか。

大炊　日も西山へ傾きしに此の鏡山へ登られしは、今を盛りのもみぢ葉を御見物でござるかな。

佐渡　如何にもお察しありし如く、昨今時雨に十分の楓葉色を發せしと、申す噂に寸暇を得、遊覽に參

つてござる。して、御老公にも御同樣にござりまするか。

大炊　不風流な手前ながら老の心を養ふ爲め、晝夜側を離さゞる我が愛妾の瓢を連れ、紅葉を見に參つてござる。

佐渡　手前も俄に思ひ立ち同勤の者を誘ひたれど、折惡しく繁務にて斷りが參りしゆゑ、據ろなく只一人、幸ひの折なれば、御請待いたしたうござりまする。

大炊　それは手前も願ふ所。定めて老職のことなれば、提重を御持參でござらうな。

佐渡　先刻家來に申し附け、先きへ持參いたさせました。

大炊　然らば御同伴いたすでござらう。

佐渡　いざ御老公、

大炊　先づ〳〵お先きへ。（下右の合力にて、佐渡守先きに大炊、若黨附添ひ、平舞臺へ來り。）

若一　これ、御遊覽の御場所はこれか。

若二　はッ、如何ござりませう。

若一　丁度爰は平地にて、向うに障る山もなく、

若二　日當りがよい此の邊は、まことに紅葉の眞ッ盛り、

若一　これにてよろしう、
兩人　ござりませうか。(ト佐渡守四邊を見て、)
佐渡　夕日を斜めに紅葉へ受け、これは至極の見晴しぢや。(ト佐渡守毛氈の上へあがり、)いざ御老公には此の邊へ。(ト上手を差圖する。)
大炊　然らば許しめされ。(ト上手へ來り、)此處は向うを見晴して、紅葉見の太夫棧敷ぢや。
佐渡　丁度只今夕日を受け、一入見事でござりまする。(ト兩人よろしく住ひ、大炊四邊を見て、)
大炊　あゝ見事々々、此の程降つた時雨から一きは紅葉も色を增し、染めも殘さず散りも始めず、まことに今が眞ッ盛り、此の上もない見所だが、花にせよ紅葉にせよ風雅人はいざ知らず、我等如き不風雅者は、たゞ見るばかりでは風情がござらぬ、お持たせの提重を、お開きあつては如何でござるな。
佐渡　手前は深く過さぬゆゑ、ほとんど失念いたしたり。こりや作平、それなる提重をこれへ持て。
若一　はッ、畏つてござりまする。
佐渡　酒の燗を早くつけやれ。
若二　はッ。

ト合方になり、若黨の一は提重の蓋を明け、佐渡守の前へ出す、佐渡守小重箱の箸を蓋の上へ並べる、若黨の二は燗銅壺で徳利の燗をつけて出す、此の内佐渡守大炊捨ゼリフよろしくあつて、佐渡守小杯を取り上げ、

佐渡　いざ、御老公、(ト杯をさす。)

大炊　いや今日の御亭主なれば、先づ〳〵貴殿より、

佐渡　然らば御免蒙ります。(ト若黨の徳利を取り酌をする、佐渡守呑んで鼻紙で杯の緣を拭ひ、)いざ、一獻お過し下され。

大炊　これは〳〵忝い。(ト杯をとる若黨の二酌をなす、)あゝこぼれる〳〵、とはいふものゝ、酒好きは滿滿とつがれる方がよい。(ト大炊呑みほし、)これは頗る銘酒でござる、今一盞頂戴いたさう。(ト又呑んで、)あゝずんと好い呑み口ぢや、手前が持參の酒などゝは、まことに雲泥の相違でござる、何れでお求めなされましたな。

佐渡　これは加州より到來せし、彼の地の名產菊酒でござりまする。

大炊　扨は加州の菊酒なるか、いや結構な味でござる、まことにこれは百藥の長、(ト大炊思入あつて扇を構へ、)〽藥の名をも菊の水、杯もうかび出て、友に逢ふぞ嬉しき、

ト大炊狸々の謠をうたふ、佐渡守ぢつと聞いてゐて、

佐渡　いつもながらのお見事、恐れ入りました。

大炊　よい年をして馬鹿々々しいと笑ふものもござらうが、遊藝とは申せども謠曲は身の養ひにて、音聲を發する上、指す手引く手の舞などは座食をこなすよき運動、貴殿のやうに物事に感ずる性の御仁には、身の養生になりまする。

佐渡　されば、手前も先達て身體虚弱を補はんと、公の御指南受けたれど、職務に寸暇を得ざるゆゑ、つい等閑に打過ぎましたが、今もお謠ひなされたる猩々の亂れをば、御指南受けたいものでござる。

大炊　それはいと易きことながら、猩々の指南は、酒を呑まねば出來ませぬ。

佐渡　左樣ござらば今一盞。

大炊　いや、何杯でも頂戴いたす。

若一　どれ、お酌いたしませう。（ト酌をする。）

大炊　もつと滿々つがつしやい。

若一　はツ。（ト大炊これを呑みながら、）

大炊　只今所望めされたる猩々は、元祝言にて短き能ではあるけれど、亂れは大事の祕曲にして、我も師匠在世より口傳を受けし亂れの舞、又と申さず此の席で、直に御傳授申すでござらう。

佐渡　すりや、此の席で猩々の亂れを御傳授下さるとか、それは忝ない儀でござります。

大炊　然し大事の祕曲ゆゑ、他聞他見を憚れば、暫時の間家來衆を、遠ざけて下されい。

佐渡　委細承知仕る。こりや作平、只今これにて小田樣より、他聞を憚る猩々の亂れの御傳授受くる間、其の方共は左右に別れ、濫りに人の參らぬやう、心を附けて張番いたせ。

兩人　はツ、畏つてござりまする。（ト中間に向ひ、）

若一　旦那樣の仰せをば、定めてそこで聞いたであらうが、他聞を憚る御傳授ゆゑ、

若二　我々共と諸共に、その方達も張番いたせ。

佐渡　傳授濟みなば手を打たん、それを合圖にこれへ參れ。

皆々　はツ、畏つてござりまする。

ト合方きつぱりとなり、上手へ若黨の一と〇、下手へ若黨の二と□△はひる。

大炊　今一獻頂載いたさうか。

佐渡　左樣に御遠慮なされずと、數獻お過し下されい。

大炊　麓に於て吸筒の半を空しくいたしたれば、下地の醉を引出し、眞の猩々になる時は遂には杳ち廻りかね、御傳授申すことがならぬ。

佐渡　然らば、御老公のお心任せ。（卜大炊呑みほし、）

大炊　あゝ、よき程醉を發しました。

佐渡　して猩々の祕曲の亂れは、

大炊　只今御傳授申すでござる。（卜大炊立上り、）

謠〽客人も御覽ずらん、月星は隈もなし、

卜謠をうたひながら上下を見廻し、元の座に住ひ思入あつて、

今日紅葉狩を名といたされ、人家隔てし鏡山にて猩々の舞のお問合せは、夫の曲舞の亂れより、國家の亂れでござらうがな。

佐渡　如何にも公の仰せの如し、それゆゑ當時多賀家に於て、師と賴むべき御老公の、祕密の御傳授受け度きゆゑ。

大炊　なか〳〵以て老衰いたし物の用には立たざれど、諺に言ふ年の功、二十年先きへ生れしだけ少しはお役に立つこともあらうか。何はともあれ老職のお賴みゆゑ、亂れの一段、お尋ねあらばお答

へ申さん。

佐渡　御承知下され佐渡千萬忝けなうござりまする、早速お問ひ申し度きは、先年中より國鎌倉家中穏ならざるを、公には如何なるお見込みなるか、承はりたうござります。

大炊　國鎌倉の穏かならぬは、大炊が申すまでもなし、その原因は誰も知る、茶坊主上りの長玄坊を重くお用ひなさるゝゆゑ。

佐渡　むう。（ト誂へ笙の入りし合方になり、兩人思入あつて、）

大炊　聰明叡智の君ながら、奸智に長けし大月を如何いたして御存じなきか、尤も忠義を表となし專ら慈善を施して貧に迫りし者共を、救助なすゆゑ内實の惡意を知らぬ小人ども、頻りに彼れが德を擧げ阿り諂ふもの多し、これ人望を得る策略にて油斷ならざる大月藏人、されば恩を受けたる者は朝暮入込み隨身なす、又恩を受けざる者共は彼れが非常の立身を快からず思ふゆゑ、家中の者も二別れに、國鎌倉とも穏ならず、此の大月を廢さずば、穏かには至るまじ。

佐渡　御老公の仰せの如く元の起りは大月長玄、事新らしく申さずとも御存じのことながら、彼れは十歳未滿より才智衆に勝れ、一を教ゆれば萬を悟り成人の後は一廉の上のお役に立つべき者と、人皆器量を賞讃なし末頼もしく存じたり、されば茶道に出しより、直に殿のお目に止り、年を重ね

て立身なし、今三千五百石の高祿を得る身となれり、これ强ち我が君のお眼違ひといふにあらず、上のお役に立つときは高祿も猶低しとせん、今日彼れが職務に於ては批を打つべき所なし、たゞ憎むべきはお覺えよきまゝ、身分も輕き足輕の長次兵衛が倅たる以前を忘れて驕奢に募り、老臣共を蔑しろに權威をふるふ自儘の行ひ、行く／＼如何なる隱謀を企てんも測られず、老職共打寄りて或は蟲聞き鹿聞きなどゝ、城下を離れて密談なせど區々にして決定せず、それゆゑ今日紅葉見を名として御請待いたせしは、御老公の御意見を伺はんと存ぜしゆゑ。

大炊　六十路の坂を早越えて追々老屈いたせども、未だ眼鏡を用ひざる大きな目玉で藏人が隱謀あること疾より見拔き、彼れが驕奢に一本生の酒を求めておくを手蔓に、酒の無心に屢ゝ參り家内の樣子を窺ひ居り、一つの惡事を見出せしは、この程雨後に獲物をせんと船を雇ひて鳴川へ投網を打ちに參つたが、如何せしにや不漁にて雜魚一尾網にかゝらず、好める道も倦き果てゝ此の一網にて歸らんと茂る柳の川淀へ、ざぶりと打つて引上げたる網に掛りし一つの位牌、はて何者の位牌なるかと水の光りに透し見る、折しも風に雲晴れて皎々たる月の光りに瞳を定めてよく見れば、法名釋妙玄信士、俗名大月長次兵衛、これぞ正しく藏人が父なるものゝ位牌ゆゑ、不審に思ふ其の所へ、又もや岸へ流れ來る朱に染みたる老人の死骸は彼れが伯父大六、此の者不斷釣を好み鳴

川堤で折々出逢ひ詞を交す老人ゆゑ、如何いたして此のやうな非業の最期いたせしかと、思ふにその日大六に途中で出逢ひ尋ねしに、大月方へ行くと言ひしを思ひ出して歸り足、藏人方へ立寄りて獲物と號して其の位牌を差出せし時藏人と、側に居合す郷右衛門が、顔を見合せ驚く様子、扨は二人が仕業なりと推量なせしに相違なきも、位牌を拾ひし所より我を窃に狙ふよし、現在伯父を害すほどの悪逆極まる大月藏人、この儘打ち捨て置く時は終には君を弑す程の、大事をなさんも測られず、御評議あつて片時も早く、彼れが成敗然るべし。

佐渡　今御老公の一話にて某思ひあたれるは、抑も彼れが忠義の手初め、未だ源藏と言ひし頃、しかも三月上巳の節句料理方にて調進なせし二汁五菜のお膳部を、檢分の役目にて膳部に毒あることを見出し、扨、膳番毒味役に再び毒味いたさせしに、二人共に毒にふれ、其の場に於て果敢なき落命、これに依つて料理方其の他關係の者どもは或は死罪或は追放、これ大月が忠義なりとて其の節五百石加増あり名も藏人と改めて、追々立身出世なせしを心得難く思ひしが、今日彼れが振舞を篤と思慮なし見る時は、膳部へ毒を仕込みおきそれを見出し毒味いたさせ、我が忠節をあらはしてそれを出世の掛橋に、臣下の内に君を弑する奸賊ありと讒言なし、君に嫌疑の念を起させ重役共を失ふ企み、其の後御殿の床下へ忍び入つたる曲者が落したる密書により、浦井主膳へ疑ひ

掛り、御詮議中親類預け、これらも彼れが遠計ならんと察せしゆゑ、我君へ諷諫なせどお用ひなきは、御愛妾お貞の方が君へ讒言いたすよし、扨憎むべきことでござる。

大炊　定めて左樣なこともござらう、窃に樣子を窺へば劍術指南を言立てに今中老を勤め居る政尾は男子に勝りし者、元大月が師と頼みし笠原武右衞門が娘にて、彼れが推擧せし者ゆゑ、お貞どのと密通の媒せしと申す風說、然し虛實は分らねど、そも大月が企みの根ざしは、お貞どのが持たれたる三男に當る慶之助殿、當時家臣の取扱ひを元へ復して折あらば當多賀家の世繼ぎとなし、其の身執權の權を取らん大望なりと推量いたす。

佐渡　手前も左樣存ずれど奸智勝れし大月ゆゑ、迂濶に事を發し難く、しかといたした證據をば取り得るまでと思ひしかど、彼れが惡事も追々に發見いたせば此の儘に最早打捨ておき難し、如何いたして詮議なさんや、公の御思案承はりたし。

大炊　大望企つ主幹なれど所詮藏人を詮議なすとも、容易に服罪いたすまじ、彼れが企みに同意の者を窃に召捕り拷問なし、一伍一什を白狀いたさせ、確證を得た其の上で、詰問いたさば藏人も脫れぬ所と覺悟なし、多分は服罪いたすでござらう。

佐渡　惠みを受けて荷擔せし小人共を拷問なさば、白狀いたすに疑ひなし、其の者共の口書を證據に詰

問に及びし上、假令服罪いたさずとも彼が罪狀顯はるれば、追々徒黨より悔悟なし謝罪を願ふ者あらん。」

大炊　さすれば穩ならざりし、國鎌倉とも惡人滅び、

佐渡　善人榮えて一家中、和親を結ぶ時到らん、

大炊　その時こそは猿樂の、催しなして治世を壽ぎ、

佐渡　かの猩々を祝言に、

富炊　國家の亂れも夢となり、

佐渡　盡きぬ泉に異ならず、

大炊　多賀の御家は萬々歳、

佐渡　幸先き祝うて、

大炊　一指し舞はれよ。（トこれにて佐渡守羽織を脱ぎ扇を持ちて立上り」）

佐渡　〽蘆の葉の笛を吹き、波の鼓をどうと打ち、聲澄み渡る浦風の、秋の調べや殘るらん。

ト佐渡守扇をさし舞ふ、大炊は掛聲をなし手拍子を小さく打ち、謠の切れにて大きく打つ、これにて以前の供廻り出て、

若一　最早お能の御傳授は、

若二　相濟みましてござりまするか。

佐渡　〽いまだ合圖もいたさぬに、

若一　只今お手が、

兩人　鳴りましたゆゑ。

大炊　今打つた鼓の拍子を、合圖と思ひ違へしか、は、、、、。（ト時の鐘、）秋の日の暮れやすく、今の間に暗うなつた。

佐渡　はたと失念いたしたが、今宵は脫れぬ所川ござれば、

大炊　御用繁の左枝氏、お構ひなくと、お先きへ〳〵。

佐渡　して、御老公には。

大炊　今宵は幸ひ滿月ゆゑ、月下の紅葉を見物ながら、跡より歸宅いたすでござらう。

佐渡　然らば、これにてお別れ申さん。

大炊　又々明日貴邸へ參り、

佐渡　殘る所の御指南を。

大炊　及ばずながらいたすでござる。

佐渡　返す〴〵も猩々の、

大炊　亂れは、國家の、

佐渡　むゝ、（ト兩人氣味合の思入あつて、）お先きへ御免を蒙りまする。

ト謡へこだまの入りし合方にて、佐渡守先きに若黨二人、中間三人は提重燗銅壺毛氈を持ち、花道へはひる、大炊跡を見送り、

大炊　猩々の亂れの傳授で、肝腎の酒を忘れた。遠慮はせぬが老職の前では酒が旨くない、どれ〳〵ゆつくり一杯吞まうか。（ト木の根へ腰を掛け、袂から塗物の猪口を出し吸筒の酒をついで吞み、）あゝ甘露甘露、よい心持になつた。今宵は空に一點の雲なく霽れて皎々たる月に名殘りの蟲の聲、心耳を澄ますよい風情。これを肴にもう一杯なみ〳〵と下さらうか。（ト手酌で吞み、）どれ、ぶら〳〵と山越しに瓢を友に歸宅いたさう。（ト立上り思入あつて、）今まで鳴きし野末の蟲が一時に聲を止めしは、（ト合點の行かぬ思入にて、）いや、啼き續けでは聲が嗄れよう、草の露でも吸ふであらう。

ト大炊思入あつて上手の三段を上りはひる。時の鐘凄みの合方になり、下手の薄原を押し分け鄕右衞門袴股立、大小、紺の手拭にて頰冠りをなし、謡への槍を持ち出來り、四邊を窺ひ、

鄕右　かねて主人が大望の妨げになる小田大炊、鴇川堤で大六を殺したことを察したゆゑ、此の間から附狙へど討つべき時のあらざれば思はず延引いたしたが、今日夕暮から鏡山へ紅葉の盛りを見に行くと、聞いたを幸ひ間道傳ひ、先へ廻つて茂みへ隱れ、此處へ來るのを待つて居たが、佐渡守が來合せて能の傳授といふは僞り、密談なせし樣子だが家臣の者が左右に別れ、張番なして居るゆゑに側へ近寄ること叶はず、生殘りたる藪蚊に喰はれ待ちに待つた甲斐あつて、別れて一人山越なし歸るを追つかけたゞ一突き、手練勝れし大炊でも酒に醉つたる上からは、本望遂ぐるは疑ひなし。（ト槍を扱いて、）あら心地よき、（ト槍を突くを道具替りの知せ。）ことだなあ。

ト小脇に槍を搔いこみ、上手をきつと見込む見得、山おろし合方にて此の道具廻る。

（山中月夜の場）——本舞臺一面の平舞臺、上下山の張物、松紅葉の立木、日覆より同じく松楓の釣枝、向う山より湖水を見たる遠見、誂へ灯入りの滿月、山おろし合方にて道具留る。と本釣鐘誂への合方かすめて山おろしになり、花道より以前の大炊吸筒をぶら〳〵と提げ、酒に醉ひたる思入にて出來り、花道にて、

大炊　猪口へつぐも面倒ゆゑ、吸筒から口うつしに殘らず吞んでしまつたら大そうに酩酊した、常は冷

たい夜寒の風も、醉つた顏には好い心持、あゝ下戸の知らざる味ひだなあ。（ト瓢簞を叩きながら、）

〽よもつきじ〳〵、萬代までの竹の葉の酒、吸めども盡きず呑めどもかはらぬ秋の夜の盃、

ト大炊謠うたひながら舞臺へ來る、此の内花道より以前の鄕右衞門槍を附けて出來り、大炊を突き兼る思入。よき程に鄕右衞門むゝと突掛ける、大炊身を躱し後を振返り見る、鄕右門俯伏になり、隱れる、大炊又行きかけるゆゑ鄕右衞門突きかける、大炊立廻つて突放す、鄕右衞門びつくり思入、大炊は悠々と、

〽影も傾ぶく入江に枯れ立つ足元はよろ〳〵と、

ト大炊酒に醉つたる思入にてよろ〳〵する、鄕右衞門この虛に附入り突掛ける、大炊立廻つて槍の柄を捉へる、鄕右衞門槍を引かうとして引けぬ思入、大炊はこれに構はず、

〽醉ひにふしたる枕の夢の、覺むると思へば泉はそのまゝ、

ト此の内大炊槍を持ちしまゝ引摺り行く、鄕右衞門はぎよつとする、よき程に突放す。鄕右衞門直に取直し突掛けるを、大炊拔打ちに槍の柄を切る。鄕右衞門南無三といふ思入、ばた〳〵にて殘りし槍の柄を持ち、逸散に花道へはひる。

〽つきせぬ宿こそ、

ト槍を取上げ、月にすかし見て、むゝと思入、これを木の頭。

〽目出たけれ。

ト謠をうたひながら向うを見込む、本釣鐘誂への合方にてよろしく、

と道具陸廻しにて直に木を直し、引返す。

ひやうし　幕

（大月下屋敷の場）――本舞臺四間中足の二重、本庇本綠附、正面上手床の間續いて瓦燈口太皷張りの襖、下手銀張りの地袋戸棚、上の方後へ下げて中窓の障子屋體、よき所に數寄屋行燈、下の方後へ下げて大和葺屋根附の枝折門、此の左右屋根附の土塀、よき所に石燈籠松の立木、四ッ目垣いつもの所枝折戸、總て大月別莊の體。爰に又市紺看板裝にて錢緡を持つて泣いて居る。○△紺看板中間裝にて立掛り居る、合方にて幕明く。

○　これ〳〵又市、何をそんなに手前は泣くのだ。

又市　わたしを捨て、父さんが、何處へか行つてしまつたゆゑ、悲しくてなりませぬ。

○　そりやお悲しいのは尤もだが、旦那の所へ歸れない、何か譯があるのだらう。

△いくら手前が泣いたとて、親父が歸るものぢやあなし、もういゝ加減に默るがいゝ。
又市　どうぞお前方から旦那樣へ、お願ひなすつて伊勢參りに、わしを遣つて下さりませ。
○何處へ行つたか知れねえ親仁、伊勢參りに行つたとて、逢はれる譯でもなからう。
△それとも何ぞ手蔓でもあつて、伊勢へ行きたいのか。
又市　いえ〳〵手蔓はござりませぬが、伊勢參りの姿になり、所々方々を尋ねましたら、逢はれることがありませうかと、伊勢參りにわたしや出たうござります。
○これがたゞの奉公人なら、願つてやるまいものでもねえが、手前は親仁の人質だから、所詮お許しはありやあしねえ。
△その內旦那へ折を見て、淺右衞門さまから願つてやるから、それまで泣かずに辛抱しろ。
又市　どうぞお願ひ申しまする。
○これが親仁の又助も筑摩川から見えなくなつたが、こんな可愛い子をおいて、何處へ影を隱したらう。
△どういふ譯か知らねえが、よく〳〵旦那へ顏向けの、ならねえことがあると見える。
ト合方になり、奧よりお雛島田髱振袖姿のこしらへ、紙包の菓子を持ち出來り、

お雛　おゝ又市こゝに居やつたか、お臺所に見えぬゆゑ、何處へ行つたかと思うたわいの。
又市　行方の知れぬ父さんに、どうか逢はれまするやうお庭内の秋葉樣へ、お百度をあげて居りましたが何ぞ御用でござりますか。
お雛　何も用はないけれど、そなたにお菓子をやらうと思うて。（ト包みを出す。）
又市　それは有難うござりまする。
お雛　淺右衞門どのか八郎次どのゝ目にかゝつたら叱られようから、何時ものやうに臺所で睡らぬやうにして居やいの。
又市　このお菓子を喰べまして、お引けまで起きて居りませう。
○　ほんにこつちのお家ぐらゐ、良い御主人はありやあしない、旦那さまはつひに一度小言をおつしやつたこともなく、
△　御新造さまがお慈悲深いに、目の寄る所へ玉とやら、お雛さまがお優しいから奉公人は仕合せた。
○　たゞやかましいのは鄕右衞門さま、それに續いて淺右衞門どの。
△　八郎次どのゝ口喧しさ、あんなうるせえ人はねえ。
お雛　假にもお上のお噂を、家來の身にてしては濟まぬ。もう好い加減にしなさんせいな。

○いや、思入れ言つてござりまするが、決して悪くは申しませぬ。

△お褒め申したのでござりまする。

お雛　何であらうと旦那さまが、今にこれへいらつしやれば、お耳に入らぬその内に、お前方はその子を連れて、

○へいへい畏りましてござりまする、旦那さまのおいでとあらば、お臺所へ參りまして、

△小僧が貰つたお菓子をはしけ、茶釜の茶でも呑みませう。

又市　左様なればお雛さま、

お雛　又何か遣りませう。

又市　有難うござりまする。(ト合方にて又市先きに○△附いて下手へはひる。)

お雛　悦びあれば悲しみと、大乘寺で父さまが難儀に逢うたを、お救ひなされて下された、御恩返しにお屋敷へ御奉公に上りし所、御新造さまのお勸めで旦那さまの妾となり、冥加に餘ることながら繁々こちらへおいでゆゑ、御承知なれど女子の情、御新造さまがわたくしを嘸やお恨みなされませう。あゝ一つよければ又二つ、心苦しいことぢやなあ。

トぢつと思入、奥より大月羽織着流しにて出來り、

大月　そこに居るのは、お雛か。
お雛　旦那さまでござりますか。（トはッと思入）
大月　おぬしが部屋に見えねゆゑ、捜してこれへ參つたのぢや。
お雛　何ぞ御用でござりますか。
大月　別に用もないけれど、おぬしが顏が見たいからぢや。
お雛　又そのやうな御常談を、おつしやりましてわたくしを、あなたはお弄りなされまするか。
大月　何で身共が弄らうぞ。
お雛　いえ〳〵、お弄りなされますわいな。
大月　そりや又何ゆゑ。
お雛　さあ、此の廣い御家中で、一といつて二のない程な、よい御量器の御新造さまを、お持ちなされておいでなさるに、十人並に劣りし者の顏が見たいとおつしやりますは、お弄りなさるのでござりますわいな。
大月　成程、妻は當家中で一二といはるゝ器量ぢやが、年來見倦きて見たうない、古いものより新らしい、おぬしの顏が見たいのぢや。

お雛　そのやうなことおつしやりますと、御新造さまへ告げますぞえ。

大月　おゝ何とでも申すがよい、女子は少し悋氣をするが男の方では嬉しいものぢやが、とんと妻はそんなことなく張合のない女子ゆゑ、つい本宅に居る氣がなくこちらへのみ參るのぢや、滿更憎うもあるまいな。（ト背中を叩く、）

お雛　不束なわたくしを、左樣におつしやりますのはお嬉しうござりまするが、繁々おいでなされますると、御新造さまへわたくしが、申し譯がござりませぬ。

大月　妻が承知でおぬしをば妾になした上からは、其の遠慮には及ばぬから、さう堅くろしう離れて居らずと、もそつと側へ寄つてくりやれ。

お雛　まだ宵でござりますから、誰ぞ此處へ參ると、耻かしうござりますわいな。

大月　誰がこゝへ參らうとも、おぬしは妾のことなれば、見られたとてもだいじない。

お雛　それぢやというて。

大月　はてまあ、側へ寄りやれと申すに。

ト お雛を引き寄せようとするを、振拂ふ。此の時大月懐より紫服紗に包みし金を落す。お雛取上げ、

お雛　何かこゝへ落ちましたわいな。
大月　おゝ、それは金子ぢや。
お雛　えゝ、お金でござりまするか。（ト大月の前へ出す。）
大月　おぬしが親萬助へ、貢いでやらうと持參したのぢや。
お雛　すりや此の金子を、親共へ。
大月　些少ながら百兩ある、親仁が來た時渡してくりやれ。（トお雛ちつと思入あつて、）
お雛　有難うはござりますが、これはお返し申しまする。（ト金包を大月の前へ出す。）
大月　この金子を、返すといふは。
お雛　先達ての御恩も返さず、又もやお貰ひ申しては、どうも心が濟みませぬ。
大月　妾といへば召使ひ、主人が遣はすこの金子、なぜ其の方は受けぬのぢや。
お雛　その金子より私は、旦那さまへ折入つて、お貰ひ申したいものがござります。
大月　折入つて貰ひたいとは、何がそちは望みなるぞ。
お雛　はい、どうか此の身のお暇を、お貰ひ申したうござります。
大月　暇をくれとは、そりや何ゆゑ。（ト誂へ上方唄の合方になり、お雛思入あつて、）

お雛　いつぞや大乘寺の門前で、浪人衆に父さんが手籠めに遭ひし其の上に、百兩といふ鶯を入れたる籠を切られたゆゑ、雲井はるかに飛去りて頼みと思ふ元手を失ひ、日頃一途な父さんゆゑ身でも投げて死なさんせうかと、案じ煩らふ其の所へ旦那さまがおいでなされ、その鶯は御法會に丁度幸ひ放生會、價はそちへ遣はすと直に百兩お惠み下され、有難涙にくれましてせめてのこと御恩報じに、御奉公に上りましたは、水仕の業をいたす心、御新造さまがお情深く行儀作法も知らぬ者をお手廻りにてお遣ひ下され、まだ其の上にお許しにて、旦那さまのお情を受けますやうになりまして、親共までへ月々にお惠みなされて下さりまするは、冥加に餘る身の仕合せ、殊更に父御新造さまが我が身を娘かなんぞのやうに、これも着よあれも挿せと、お召物からお頭のものまで多く下さりまして、遂に一度御悋氣らしいことをおつしやることもなく、勿體なうてなりませぬ故、御新造さまへ對しましてお暇お願ひ申しまする。（下よろしく思入にて言ふ、大月思入あつて、）

大月　女の情を汲み分けて、左樣申すは尤もなれど、元その方は妻が進めて妾になせしことなれば、決して憎しと思ふまいから、其の義理立てには及ぶまいぞ。

お雛　ではございませうが御新造さまの、お心の内をお察し申せば、お暇願はにやなりませぬ。若しこの事を旦那さまがお聞き届け下さりませずば、死ぬる覺悟でございまするが、左樣いたさば親共

が跡で難儀をいたしませう、爰を不便と思召して、どうぞお暇下さりませ。（ト大月思入あつて、）

大月　さ程に苦心いたすなら、如何にも願ひは聞届けたが、最早今宵も亥の刻前、明日親父を呼びにやり、目出度く暇を遣はすぞ。

お雛　すりやお暇を下さりますとか、え丶有難う存じまする。（ト泣伏す。）

大月　凡そ通常妾の情はその本妻の權を奪ひ、蔑にするものなれど、さはなく妻へ義理を立て、暇を取らんと我れに迫るは天晴見上げしそちが心底、この百兩を褒美に遣はす。

お雛　お暇願ひしその上に、これを頂戴いたしては、此の身に罰があたります。

大月　それではこれを納めぬか。

お雛　どうも心が濟みませねば。

大月　はて、義理堅い奴ぢやなあ。

ト此の内うすき風の音になり、下手より深見十藏、五十日鬘着流し、大小さんすゐなろ浪人のこしらへにて出來り、門口に窺ひ居て、

十藏　お邪魔になるなら其の金子、わしがお貰ひ申しませう。（ト前へ出る。）

大月　や、さう言ふそちは。

十藏　郷右衛門殿が口入で貴殿の賴みといふことゆゑ、我が伊賀流の術を以て御庭内へ忍び込んだ、拙者は深見十藏でござる。
大月　思ひ掛けない深見十藏、夜中これへは何しに參つた。
十藏　御無心に參りました。
大月　何と申す。（ト誂への合方になり、）
十藏　いつぞや百兩御褒美にお貰ひ申した金を土産に故郷の伊賀へ歸りましたが、さて惡錢は身に附かず、酒と女郎に入揚げて破れ扇で謠をうたひ、門へ立つより仕方のない尾羽打ちからせし素浪人その手の內の一門一家百の錢から借盡し、五十に近い身の上で出來たことでもござらぬが、喰くに困つて參つた十藏、その御不用の百兩を、お惠みなされて下さりませ。
大月　其の日に困るとござるなら、武士は相見互ゆゑ合力せまいものでもないが、案內もなく此の庭先へ、どこからこなたござつたぞ。
十藏　それは名におふ伊賀流の、忍びの術を得たる拙者、門から入つて參りました。
大月　すりや伊賀流の忍びの術で、この庭先きへござつたか。
十藏　どんな所でも忍ぶが得手、それゆゑ貴殿のお賴みで、いつぞや御殿の床下へ。

大月　あ、これ。

十藏　これは滅多に言はれぬことだ。（ト此の時奥より侍、袴裝にて出來り、）

侍　はツ、申し上げます、只今久松三五郎樣が、おいでなされてござります。

大月　お、、久松殿がござつたとか、あ、惡い所へ。

侍　え。

大月　いや、折惡く客來あれば、今にお目に掛ると申せ。

侍　はツ。（ト侍奥へはひろ。）

大月　これ雛、手前が參る其の間、久松氏はお茶が好きぢや、一服立て、上げてくりやれ。

お雛　畏りました。（ト立ち兼れる思入。）

大月　苦しうない、參れ。

お雛　はツ。（ト合方になり、心を殘して奥へはひろ。）

十藏　お客來とあるからは、長居をしたらお邪魔でござらう、早くお惠み下さりませ。

大月　只今合力いたすであらう。（ト大月十兩紙に包みて、）些少ながら。（ト出すを十藏取り上げ、）

十藏　早速の御合力、千萬忝なうござる。（ト開いて見て、）こりや十兩でござりまするか。

大月　如何にも、十兩進上申す。

十藏　お志しは忝ないが十兩ばかりは端た金、酒の足しにもならぬから、是れはお返し申します。

ト紙に捻つて返す。

大月　すりや、十兩では不足と申すか。

十藏　何ぼ南瓜に等しき首でも、端た金では安からう。

大月　何と申す。

十藏　容易に人の入れねえ御寢所近い奥庭へ、忍び込んだを見咎められ、跡へ證據に浦井が謀書を落して首尾よく逃げ延びたが、捕へられたら此の首が落ちる仕事を己にさせ、十兩ばかりの端た金で歸れといふは大望の、企てをする心にもさりとは似合ぬけちなこと、百兩ならば貰はうが十や二十の金は入らねえ。（ト紙入から密書を出し。）貴殿の賴みの此の一通、これを家老へ持つて出たら直に惡事の破れとなり、大事の身分に拘りませう。百兩ぐらゐはくれてもよからう、綺麗に合力して下せい。

大月　むゝ。

ト大月きつとなる。此の前上手屋體の障子をあけ、三五郎袴大小にて窺ひ居る。大月四邊を憚る心に

て上手を見返り、三五郎と顏見合せぎつくり思入。三五郎はぴつしやり障子をしめる。大月是非なき思入にて、

十藏　どうしてこれが返されませう、これから二三日愉快をして、又無くなれば是れを證據に惠みを受ける大事の一通、千兩ならば返さうが、百や二百ぢや返されぬ、これはおれが命の綱だ。

ト大月思入あつて、以前の金と一つになし、

大月　それ、改めて受取りやれ。（ト出す、十藏取り上げ見て、）

十藏　耳を揃へて小判で百兩、慥にお貰ひ申しました。

大月　此の後再びござつても、もう合力はいたさぬぞ。

十藏　貴殿が合力なされずば、出る所へ出て貰ひます、さう思つて居て下さりませ。どれ、お暇いたさうか。

大月　して、其の方は何れへ參る。

十藏　當時無宿にどこといふ、住居定めぬ深見十藏、何れ是れから遊里へ參り、又この金を使つたらお尋ね申して參りませう。

大月　おゝ。（ト切つてしまはうといふ思入あつて氣を替へ、）然らば十藏、

十藏　大月さま、（ト立上り、）其の内お目に掛りませう。

ト時の鐘合方、十藏花道へはひる、大月あとを見送り、

大月　はてさて憎き深見十藏、まさかの時は一方の役に立つべき者と思ひ、かゝる所存と知らずして大事を彼に頼みしは此の藏人が一世の過り。命を斷つて後難を防がんものと思ひしも、折も折とて久松が一間に居るので見脱したが、先づ差當り密事をば心知れざる久松に、聞かれしうへは身の大事、手段を以て大望の味方に附けねば安心ならぬ。

トぢつと思入、合方きつぱりとなり、奥よりお雛出來り、

お雛　今のお人は歸られましたか。

大月　おゝ、合方受けて歸つたが、久松氏には奥にござるか。

お雛　お客來ゆゑ後方參ると、おつしやいまして今しがた、お歸りなされてゞござりまする。

大月　すりや、後刻といふて歸られしか。（ト大月心に掛る思入。）

お雛　久松さまがお歸りなされると、間もなくお後へ御新造さまが、おいでなされましてござりまする。

大月　何か火急な用でもあつて參つたかは存ぜぬが、差掛りたる内用あれば、暫しの間我が居間で待つ

て居よと申してくりやれ。

お雛　畏りましてござりまする。

大月　折角そちに遣はさうと、思つた金子も今の者へ、合力に遣はしたればそちには明日遣はすぞ

お雛　いえ／＼、それには及びませぬ。

大月　はて、些細なことぢや、遠慮いたすな。

お雛　はあゝ。（ト合方になりお雛思入あつて奥へはひる。跡時の鐘、床の淨瑠璃になる。）

〽晴れわたる空も一吹き小夜風に、月影覆ふ運び雲、木の葉の音も村雨と思ふ軒端の秋の暮、

大月　（思入あつて、）隱すことほど顯れ易く、中老政尾が媒介にてお貞どのと密會せしも、測らず廊下で玉笹に二人の姿を認められ、噂となりしを氣遣ひしが、今又これへ十藏が金の無心に來たゆゑに、其の夜出會ひし久松に、浦井を罪に落したる我が陰謀を知られたからは、打捨ておかれぬ身の大事、何にいたせ片腕と賴む安宅鄉右衛門、小田大炊を仕留めに行つたが、首尾よく本望遂げたるか、今宵の一擧が運定め、早く吉報を聞きたいものだ。

〽千草に殘る蟲の音も、若しやそれかと藏人が、見やる向うへ息せきと立歸りたる鄉右衛門、四邊うかゞひ近寄るを、

ト思入て合方風の音になり、花道より前幕の鄕右衞門槍の柄を持ち走り出來り、花道にて振返り、向うを見てつか〳〵と舞臺へ來り、下手より窺ふ。藏人これを見て、

藏人　そこへ來たは、誰だ。

鄕右　旦那樣、只今歸りました。

大月　おゝ鄕右衞門か、待兼ねしぞ。

鄕右　大きに遲刻いたしました。（ト二重の側へ來る、藏人前へ出て、）

大月　して、首尾はどうであつた。

鄕右　仕損じました。

大月　え、仕損ぜしか。

鄕右　殘念至極でござりまする。（ト鄕右衞門悔しき思入。）

大月　槍術にては當家でも、五指に算へらるゝ其の方なるが、如何いたして仕損ぜしか。

鄕右　鏡山の紅葉見に酒氣十分の小田大炊、足もひよろ〳〵山道を音聲高く猩々の謠をうたつて來りしゆゑ、たゞ一突きに仕留めんと差足なして後より突かんとなせど身體に、油斷なければ隙がなく、半丁餘り覘ふうち木の根に躓きよろめくを、爰ぞと思ひ突きかゝれば身を開いてはねのけられ、

南無三寶と無二無三突くを左右へ拂ひのけ、老人ながら進退は壯者も及ばぬ手練の早業、彼れに槍先き切折られ取り得ることも叶はねば、是非なく大炊を討洩らし、立ち歸つてござりまする。

大月　む、すりや突掛けし槍の柄を、小田大炊に切られしか。

鄕右　御覽の如く槍の柄を、切折られてござりまする。（ト槍の柄を大月に見せる。）

大月　はてさて、遺憾なことぢやなあ。

鄕右　今日こそ邪魔な狸親仁、仕留めんものと思ひの外、不覺を取りし鄕右衞門、面目次第もござりませぬ。

大月　槍術勝れし其の方の手に餘る程にては、所詮容易に討取り難し、手段を替へずばなるまいわえ。

鄕右　これに附けても又助が先頃首尾よく仕果せれば、法會の膳部へ毒を仕込み、小田大炊を始めとして鏖しになさんもの。

大月　河童と異名の又助ゆゑ、假令はげしき水勢でも、流されることはあるまいが。

鄕右　變心いたさぬ人質に、我が子を預けおきたれば、

大月　親子の情に惹かされて、

鄕右　是非とも來ねばならぬ筈。

大月　これもおの折仕損ぜしゆゑ。

郷右　面目なくて參らぬか。

大月　如何いたせしことなるか。

〽主從眉を打ちひそめ、暫し詞も中庭へ情淺右衞門八郎次が、肱も鳥居又助を宙に引立て出來り、

ト大月郷右衞門思入、ばた〳〵になり花道より淺右衞門八郎次袴大小にて、紺看板裝の六幕目の又助を引立て出來り、花道にて、

又助　逃げも隱れもいたしませぬから、此の手を離して下さりませ。

淺右　いや〳〵放さぬ〳〵、汝が行方を先達から、草を分けて尋ねて居るのだ。

八郎　今日測らずもわれ〳〵の、目に掛つたが百年目、旦那の所へ一緒に參れ。

又助　はい、何處へなりとも參ります、決して逃げはいたしませぬ。

淺右　うぬ、逃げるとて逃がすものか。

八郎　さあ、きり〳〵とうしやあがれ。

〽呼はる聲もあらけなく、襟上とつて引きすゑれば、

ト淺右衛門八郎次、又助を引きつれ來て舞臺下手へ引きすゑる、鄕右衛門見て、

鄕右　こりや淺右衛門八郎次には、騷がしい、何事ぢや。

淺右　筑摩川で逐電しました、

八郎　又助めに逢ひましたから、

兩人　引摺つて參りました。

大月　なに、又助を召連れしとか、

鄕右　よく引摺つてござつたな。

又助　旦那さま、申し譯がござりませぬ。

鄕右　あれ程身共が賴んだことを、何處へ聞いたか流してしまひ、申し譯がないなど〻、それで手前は濟まうと思ふか。

淺右　一癖あると思ひの外、

八郎　見掛けによらぬうつけた奴だ。

〽口々わめく聲を聞き、臺所より又市が、走り出て縋り附き、

トばたばたになり、下手より以前の又市出來り、

又市 や、父さまか、逢ひたかつたわいの。（トすがり附く。）
又助 お、悴又市、達者でをつたか。
又市 筑摩川で別れたきり、尋ねて來て下さらぬゆゑ、わたしを捨て、行かしやつたかと、毎日泣いて居りました。
又助 尋ねたいにも來られぬ譯ゆゑ、おれも手前の身を案じ、どうして居るかと一晩でも、夢に見ないことはない。

〽我が子を抱いて又助が涙に暮れるを鄕右衛門、何の容赦もあらけなく又市取つて引き放し、

ト又助又市を引寄せ泣くを、鄕右衛門又市の襟上を取つて引放し、又助の胸倉を取り、

鄕右 これ又助、此處へ出ろ。（ト前へ引出し。）おのれは〳〵見損なつたぞ、管さへあれば一日でも息をついて水底に沈んで居らる丶水練を旦那さまも御存じゆゑ、浦和の宿で命を助け、親子二人を惠んでやつたも此の一大事を頼まん爲め、委細を話せば口賢く御恩報じにいたしますと安請合ひに請合つて、これなる悴を人質に預けてしつかり約束したから、水勢早き筑摩川も河童と異名の又助ゆゑ仕果せること疑ひなしと、跡に殘つて川岸から今や遲しと待つたるところ、
淺右 四五日續く霖雨に逆巻く水の筑摩川、馬術勝れし我が君が一鞭打つて乘入れたもふ、名馬も四足

の立たざれば、二三間も川下へ水にせかれて流るゝゆゑ、

八郎　爰ぞと思つて我々は岸の蛇籠に突立ち上り、今か〳〵と目も放さず片唾を呑んで見て居つたが、何の怪しきこともなく、

鄕右　やす〳〵向うの岸へ乘附け河原に於て御休息、危き大河を打越せし祝ひに附添ふ旦那を始め、お供一同褒美の御加增、五百石や千石の僅かな事にかへられぬ、又とあらざる好き時節、水練長けし其の方が、何ゆゑ殿を討漏らせしぞ。

〽持つたる胸先き突放せば、あれ危ないと又市が、縋るを小脇へかいやりて、

ト鄕右衞門又助をこづいて突放すを、又市見てつか〳〵と來り又助の介抱をする。又助思入あつて、

又助　いえ、討漏らしはいたしませぬ。

大月　なに、討漏らさぬとは。

又助　元よりわしは殿樣を、討たぬ心でござりまする。

皆々　何と申す。

〽弓手馬手より詰め寄れば、又助は顏打ちまもり。（ト又助大月をぢつと見て、）

又助　もし旦那樣、あなたは智慧も人並に勝れしお方でありながら、討てぬ道理が分りませぬか。

大月　なに、討てぬ道理が、

皆々　分らぬとは。（ト床の合方になり、）

又助　愚鈍なわしが申さずとも分つたことでござりますに、なぜ御合點が參りませぬか。改め言ふにも及ばぬが、元わしは江州鳥居本の生れにて若い折に鎌倉の腰越へ來て網船渡世、お國からのお馴染にて旦那樣が鎌倉にお詰めの年はお出入ゆゑ、お漁の折はお供をいたし厚いお惠み受けましたが、女房に死なれてそれからは引き續いて間が惡く、世帯をしまつて忰を連れ木更津から常陸の方をさまよひ歩くその内に、路用も盡きて浦和の宿で首でも縊つて死なうかと、思ふ折柄旦那樣に、命を助けてお貰ひ申し、荒布のやうなぼろつこを紺看板に脫替へてお供に加はり故郷へ歸る途中の筑摩川、旦那樣のお賴みとて鄕右衞門さまがわしへの言附け、否と言はれず請合うたが假令一合殿樣の御扶持はお貰ひ申さねど、御領分に生れますれば申さば御家來同然ゆゑ、如何に命を助けられ、我が身に御恩があればとて、主人も同じ御領主樣を、どうしてまあわしが殺されませう。

鄕右　それは言はずと知れたこと、なぜ討たれぬなら討たれぬと、初手から身共へ言はぬのだ。

又助　さあわしが討てぬと斷つたら、又外の水練を得た者にお賴みあつて、御領主樣のお身の上に凶事

がつては濟まぬゆゑ、こりや請合うて殺さぬが何より丈夫と心を定め、郷右衛門樣へ人質と忰をあげて請合つたは、御領主樣を助けん爲め、又二つには旦那樣、よもやあなたに其のやうな惡いお心はござりますまい、大方これなる郷右衛門樣のお勸めでがなござらうが、昔が今にお主を殺し榮えし例のござりませぬは、天道樣がお許しないゆゑ、此の又助が討たぬのを幸ひにして旦那樣、思ひ止つて下さりませ。

〽愚なれども又助が正路を守る心より道理を盡して諫むれど、素より逆意の企てに欺かれしを憤り、庭に下り立ちはつたと蹴倒し、

ト又助よろしく思入あつて言ふ、此の内大月始め皆々口惜しき思入にて、大月庭下駄をはき平舞臺へ下り、又助を蹴倒しきつとなつて、

大月　いつぞや浦和の縄手にて貧に迫つて親子共死する覺悟と聞いたゆゑ、不便と思つて命を助け厚き惠みを遣はせし目途は汝が勝れし水練、殿御歸國の其の刻日頃馬術に長じたまへば、水勢早き筑摩川も馬上で打越したまふは必定、その時窃に水中へ忍ばせおいて事をなさんと、我が計策圖に當り、雨後にはげしき滿水を事ともなさず打越したまへば、けふぞ御運も筑摩川水底深き我が大望、正に成就の時至れりと悦び居りし甲斐もなく、思はぬ加增をたまはりしは合點行かずと思ひ

しが、さては汝が忠義立てに殿を無難に助けしか。返すぐ〳〵も大恩を仇で返せし憎き又助、身を八つ裂きにいたすとも、うぬあきたらぬ奴なるぞ。

〽情を表に衆人を手懐く大月藏人も、怺へ兼ねて怒りを發し足下にかけて踏躙れば、あれ父さまをと又市が、留めるを手荒く突倒し、

ト大月よろしく思入あつて又助を踏み附け、口惜しき思入。又市つか〳〵と行くを衛右衛門襟上を取り、ひどく突倒し、

郷右　かゝる性根の者とも知らず、大事をおのれに明したは此の郷右衛門が何より過り、旦那様への申し譯に命を取るからさう思へ。

又助　御領主様をお助け申せば、死ぬは元より覺悟の前、さあ命を取つて下さりませ。

郷右　覺悟であらうがあるまいが、恩を仇にて返した又助、何で助けておくものだ、多賀のお家で一二といはるゝ才智勝れた旦那様を欺き、この郷右衛門やこれなる二人を、よくも日外筑摩川で僞つたな、その返報は殺してやるが、たゞ殺しては腹が癒ぬ。

〽胸ぐら取つて引倒し、大地へ摺り附け突放せば、

ト郷右衛門又助を惨くする、又市寄らうとするを淺右衛門八郎次引きすゑる。

淺右　郷右衛門どのばかりでなく、此の淺右衛門八郞次も共に頼んだ一大事、河童と異名の其の方でも水勢早き筑摩川、仕遂げぬことなら是非もないが、

八郞　船頭風情の又助に欺かれたが腹が立つ。うぬ、どうするか見やがれ。

〽蹴るやら踏むやら滅多打ち、見るに忍びず又市が二人が中へ割つて入り、

ト淺右衛門八郞次又助を引倒しむごくする、又市は又助をかばひ二人を留め、

又市　あゝもし待つて下さりませ、父さんがどのやうな惡い事をしましたか、わしがお詫びをしますから、どうぞ堪忍して下さりませ。

淺右　どうして堪忍がなるものか、手前の親父は我々が、頼んだことを仕遂げぬゆゑ、

八郞　蹴たり踏んだりした揚句に、爰で殺してしまふのだ。

又市　え、そんなら父さんを、殺すのでござりますか。（ト大月に向ひ、）もし旦那さま、どうぞ助けて下さりませ。

〽今とゝさまに死なれますと、跡に殘りしわたくしが、力に頼む人もなく、人の軒端に夜を明し、

〽雨に打たれ風に吹かれ、果ては其の日の食に盡き、是非もなく〳〵淵川へ身を投げ死なね

ばなりませぬ。

この身を不便と思召し、

〽どうぞ助けて下されと、涙に暮れて歎きける。（下此の内又市よろしくこなしあつて、）

大月　年端も行かぬ其の方が歎くは如何にも不便だが、これなる父の又助は命を助けし大恩ある此の大月が大望の妨げなせし者ゆゑに、いくらそちが歎いても助けることはならぬから、此の世の別れにとつくりと、暇乞でもいたすがよい。

又市　さういふ科がござりまして、どうでも殺さにやなりませずば、わたしを殺して父さんをどうぞ助けて下さりませ、もし、拜みます〳〵、もし鄕右衛門さまお二人さま、わたしを殺して下さりませ。

鄕右　おゝ、それ程われが死にたくば、親父と一緒に殺してやらう、餓鬼とはいへど年よりかゝませた生れが其の身の不運、生しておけばこの場の樣子、必ず喋るに疑ひなし、後の憂ひを思ひなば爰で殺すが寐覺がいゝ。

淺右　安宅氏のいはるゝ通り、一人殺すも二人殺すも、殺す罪は同じこと、

八郎　倅も一緒に此の場にて、殺してやつたら又助も、後へ心が殘るまい。

又助　すりや科もない悴まで、こなた衆は殺す氣か。

鄕右　おゝ大罪犯したその者は、黨類たやすが天下の法だ。

又助　さういふ無慈悲な心では、悴が命を助けてくれと、賴んだとても助けまい、黃泉の障りのないのが優し、さあ、早く殺して下さりませ。

鄕右　どうして〳〵、めつたにわれを殺すものか、弄り殺しにいたさねば我々どもの腹が癒ぬ。

又助　さあ、お前方を騙したゆゑ腹も立たうがあの折に、わしが賴みを仕遂げぬのは、道に缺けたことゆゑに。

鄕右　道に缺けたと思ふなら、なぜ其の時に請合つた。

〽鐵扇取つて打ちすゆれば、額破れて流るゝ血汐、

ト鄕右衞門鐵扇で又助を打つ、又助額へ油紅を附ける。

又市　あゝもし、父さんを打たずとも、わたしを殺して下さりませ。

淺右　おゝ手前も今に殺してやるから、

八郞　そこで見物して居やれ。

又市　さういはずと、わたしを先きへ。

鄕右　えゝ喧しい小びつちよめ、左程に先きへ死にたくば、どれ鄕右衛門が鐵扇で一打に殺してやらう。

〜へ襟上取つて宙に引立て、鐵扇とつてりう／＼と打つを見るより又助が、飛び掛らんと立掛るを、髻を摑んで兩人が身動きさせねば齒がみをなし、

ト此の内鄕右衛門又市の襟上を取り鐵扇で打つ、又助留めようとするを、淺右衛門八郞次引き据ゑる。

又助　とても殺すくらゐなら、そんな酷いことをせずに、一思ひに首を切り、殺してやつて下さりませ。

鄕右　いゝや、此奴に科はなけれど、汝にみじめを見せてやるのだ。

又市　あゝ痛い／＼、痛くつてなりませぬ。

鄕右　おゝ痛からう／＼、われがこんなに痛い目するも、みんな親仁がさせるのだぞ、さあ痛いか／＼。

ト鐵扇で打つ。

又市　おゝ痛い／＼、早く殺して下さりませ。

又助　それは何にも知らぬもの、責めさいなむならわしをさいなみ、悴に長く苦痛をさせず、殺してやつて下さりませ。

鄕右　遲かれ早かれ殺すから、其處で見物して居やれ。

大月　いや、其の方共が欺かれ腹の立つのも尤もだが、かゝる匹夫を賴みにせしは、この藏人の過ちゆ

ゑ、もういゝ加減に殺してしまへ。

郷右　その御意ならば一思ひに、餓鬼から先きへ殺してくれう。

〽力を極めて郷右衛門がはつしと打てば果敢なくも、蕾のまゝに又市が夜半の嵐に散り行けば、

ト郷右衛門又市を強く打つ、これにてよろしく苦しみ落入る。

はて、脆い奴だなあ。(ト手を放す。又市ばつたり倒るゝ。)

又助　やゝ、こりやもう悴は。

淺右八郎　息は絶えたわ。(トこれにて又助きつとなり、)

又助　さりとは無慈悲ないたし方、此の身はともあれ科もない悴を酷く殺すとは、言はうやうなき極重惡人、これで企みが成就せうか、我が恨みでも遠からず包む惡事も露顯なし、今に汝等も此の如く、責にあふのを待つて居れ。

大月　かねて企つ大望の幸先き挫く憎き又助、我が手に掛けて殺してくれん。

又助　おゝ、どうで助からぬ我が命、何處からなりと切らつしやい。

大月　むゝ、よい覺悟だ。

〽庭へ下立つ藏人が一腰拔けば鄕右衞門、心得たりと手水鉢の水をそゝげば皎々と、さやけき秋の月よりも光り鋭き氷の刄、さあ來いうぬと淺右衞門八郞次が左右より、肱を取つて引き据れば、覺悟はすれど又助が齒の根も合はぬ胴顫ひ、憎き匹夫と目の先へ突出す白刄で打ち敲けば、

ト大月庭へ下り刀を拔く、鄕右衞門蹲ひの手水鉢の水を刀へかける、又助これを見て顫へるを、淺右衞門八郞次手を取つて引立てる、大月目先きへ刀を突出し、又助の顏を敲く。

又助　どうぞ一思ひに、殺して下せえ。

淺右　どうして〳〵殺すものか。

八郞　弄り殺して、

兩人　腹を癒るのだ。

大月　憎き奴ではあるけれど、かゝる者を相手になすも、大人氣なきことなれば、

兩人　すりや、此の儘に、

大月　今息の根を留めてくれう。

〽たゞ一打と振上ぐれば、もうこれまでと恨めしげに見上げる又助藏人が、えいと一聲首打

ち落し、刀の糊紅を押し拭へば、

ト大月刀を振上げる、又助きつと大月を見る、淺右衞門八郎次腕を後へ廻し首を出す、大月えいと打落す、誂への切首出る、鄕右衞門刀へ水を掛け、大月鼻紙で糊紅を拭ふ。

〽此の場の樣子を物蔭に、窺ひ居たる久松が、

ト此の以前下手より以前の三五郎腰へ風呂敷包みを結ひ附け窺ひ居て、此の時下手へ出で、

三五　大月氏、御無念が晴れましたか。

大月　や、貴殿は久松、

皆々　三五郎殿。（ト皆々はツと思入。）

三五　筑摩川にて大殿を失はんと計られしも、これなる鳥居又助が忠義立てにて事ならず、嘸御無念でござらうな。

大月　む丶。

〽ずつけり言はれて主従が互ひに目と目見合せて、扨は大事を知られしか、生けておかれぬ久松と急き立つ淺右衞門八郎次が拔く手も見せず切掛くるを、其の身を開いてしつかと留め、

ト此の内皆々思入、鄕右衞門切つてしまへといふこなし、淺右衞門八郎次うなづき、三五郎に切つて

かゝる、ちよつと立廻つて兩人を止め、

三五　其の御疑念には及び申さぬ、今日よりして久松三五郎、大月氏の大望へ一味合體なす心

淺右　何を。（と又立廻つて、）

八郎

三五　疾くより此の事申し出でんと存ぜしかども時を得ず、徒に時日を移せしが、豫て左枝佐渡守に、職務によつて遺恨あれば、貴殿に隨ひ老臣を滅亡させん我が望み、安宅をはじめ兩人共よしなに推擧いたしくれよ。

大月　斯く大望を知られし上は、今更包み隱さねど測り難きは人心、

鄕右　一味合體めさるなら、これにて誓ひを立てられよ、さなきに於ては身の大事、

淺右　假令親友なればとて、

八郎　貴殿の一命斷たねばならぬ。

三五　御尤もなる其の一言、違變いたさぬ誓言には、拙者持參の品がござる、御家來衆にもお下にござつて、其の一刀をお納め下さい。

鄕右　して誓言の其の品は、

三五　則ちこれでござりまする。

〽腰に附けたる風呂敷の、包み開けば深見が首級、人々これはと打ち驚き、

ト此の内三五郎腰に附けたる風呂敷包を出して開く、内に深見十藏の切首あり皆々見ておどろく。

最前當家へ參りし折、かの伊賀流の忍術行ふ深見十藏といへるもの、彼は先頃宿直の折お庭に於て出逢ひし曲者、大月氏が依賴せし密書を枷に强ねだり、憎き奴ゆゑ跡をつけ御城下はなれし松原にて有無を問はずに打つて捨て、證據になるべき密書は元より合力ありし百兩の金子も共に奪ひ返し、これを進上仕るが、貴殿の大義へ一味のしるし、これにて御疑念お晴し下され。

〽證據の密書百兩の、金子取出し差出せば、

ト三五郎懷より密書と百兩包を出し、大月の前へ出す、

大月　ほゝお、何よりの御賜、貴殿の芳志忝なし、先刻密事を聞かれしゆゑ手段を以て我が味方に招かんと存ぜしところ、深見が首級證據の密書金子を添へて誓ひを立て、我が大望へ一味ありしは此の上もなき身の悅び、まことに安堵いたしてござる。

鄕右　かねて主人も久松氏の勝れし才智を賞讃なし、折がならば味方にと存ぜられたることなれば、嘸滿足に思召されん。

大月　實に萬卒は得易く一將は得難し、貴殿を一味に加うる上は、龍に翼を得たる如し。

淺石　大慶至極に、
兩人　存じまする。
〽主從勇み立つたる所へ一間を駈け出る妻お照、仔細は何か白鞘の刄物にお雛が縋り附き、
トばた／＼になり奥よりお照家中重役の妻のこしらへ、白鞘の短刀を持ち出來るを、以前のお雛留め
ながら出來り、
お雛　これ御新造さま、あなたは何をなされまする。
お照　どうぞ留めずにくりやいの。
〽止むる手をば振拂ひ、喉へぐさと突立つれば、
トお照お雛を振拂ひ、短刀を喉へ突立てる。
お雛　やゝ、こりや御自害をなされましたか。
大月　なに、妻が自害をいたせしと。
三五　何ゆゑあつてのことなるか。
淺石　思ひ切つたる、
八郎　この御自害。

大月　こりや如何なる仔細あつてのことぢや。（ト　お照俯向きゐる。）

鄕右　察するところお雛どのを、旦那さまが御寵愛とて、御悋氣ゆゑでござりませう。

お雛　かゝることもあらうかと、最前無理にお暇をお願ひ申しましたのに、

大月　早まつたことをいたしたな。

お照　えゝ情ないそのお疑ひ、不束ながらわたくしも左枝主馬が娘ゆゑ、悋氣で自害はいたしませぬ。

三五　これには何か仔細がござらう。

大月　何ゆゑ自害を、

鄕右
三人　なされましたぞ。

お照　命を捨てし其の仔細は、旦那樣のお心にお覺えがござりませう。

大月　何と申す。（ト　竹笛入りの合方になり、）

お照　いつぞや窃に私が御異見申せし其の事は、よもやお忘れなされますまい。

大月　むゝ。（ト　ちつと思入。）

お照　最前からの此の場の御樣子襖越しに承はれば、ます〳〵募るお心立て所詮お聞入れない事と、覺悟をいたしましたゆゑ、離緣をお願ひ申さうと存じましたが妻からして、夫へ暇を願ふのは本意

ならぬことゆゑに、自害いたして果てまする。我身を不便と思召さば、お心改め下さりませ。

〽あたり憚りあらはには、言はぬ心を藏人も、不便と妻をいたはりて、

ト大月お照を介抱なし、

大月 そちが切なる志し必ず惡くは聞かざれど、お貞どのゝ賴みにて御三男を世に出さんと、義に依つてなす此の企て、犬死なすは不便なれど、思ひ止まることならねば、情なき夫とわれを恨み、早く往生得脫いたせ。

お照 すりや、どうあつても我が夫には、思ひ止まりたまはらぬか。

大月 是非なきことゝあきらめよ。

お照 はあゝ、お情ないことぢやなあ。

〽言ふ息さへも四苦八苦、夫の顏を恨めしげに見るが此の世の別れにて、果敢なく息は絕えにける。

ト お照よろしく思入あつて落入る。皆々愁ひの思入。

お雛 深い樣子は存じませぬが、お命お捨てなされましたる、御新造さまの思召し。（ト思入。）

鄕右 果敢ない御最期なされたは、おいとしくござれども、

淺右　大事の前の、いはゞ小事、
八郎　お取上げにはならざるぞ。
お雛　はあゝ。(ト お雛死骸に取附き泣伏す、ばたばたになり、下手より袴裝の侍出來り。)
侍　はッ、申し上げます。
鄕右　何事だ。
侍　只今御殿より急お召しでござります。
大月　承知いたした。
侍　はッ、(ト下手へはひる。皆々思入。)
鄕右　夜中俄のお召しとは、
淺右　氣遣ふ儀では、
淺右
八郎　ござりませぬか。
大月　いや、大方圍碁のお相手ならん。
鄕右　今宵大炊を一突きと、思ひの外に先手後手、
淺右　その死石が生きたからは、

八郎　佐渡守めが黑白分け、
鄕右　もしや四烏にかゝることでも。
大月　氣遣ひいたすな、妙手は胸に、
鄕右　すりや旦那樣には、
大月　出仕いたさん。（ト羽織を脫ぐを木の頭）上下持て。
お雛　はツ。
　　ト時の鐘、合方、皆々思入よろしく、下手にて九ツでござぃと、六尺棒で叩く音をキザミ、
ひやうし　幕

八幕目

多賀家詮議の場

〔役名――大月藏人、小田大炊、左枝佐渡守、安宅鄕右衞門、久松三五郎、浦井左源太、左枝主馬、中澤甚平、吉良助太郎、高木淺右衞門、坂川長兵衞、久貝十平、野田八郎次、醫者橫田謙齋、其他〕

（多賀家詮議の場）――本舞臺四間通し高二重八枚飾り、本庇上の方廻り緣側、上下後へ下げて一間障子屋體、正面白洲階子向ぅ紗綾形の襖、總て多賀家吟味所の體。平舞臺上手に坂川長兵衞、久貝十平、

黒羽織袴股立一本ざしにて革床几に掛り、下手に高木淺右衞門、野田八郎次、紋附の着流しにて繩に掛け、袴股立の足輕四人後に控へ、長兵衞半紙綴の口書を持ち居る、此の見得時の太鼓にて幕明く。

長兵　こりや、淺右衞門八郎次、只今其方兩人が申し立てに相違はないな。

十平　一々次第を書留めたれば、後で相違があつては濟まぬぞ。

淺右　決して相違にござりませぬ、とても密謀露顯なし斯く捕はれとなりし上は、痛い目するだけ身の損ゆゑ、決して隱しはいたしませぬ。

八郎　これまで主人藏人より命を受けたる惡事の數々、只今申し上げし通り、毛頭僞りはござりませぬ。

長兵　よく神妙に白狀いたした、其の代り其の方共は、所刑の節は一等を減じ、

十平　御輕罪に相成るやう、我々共より重役方へ、其の趣きを願うてやるぞ。

淺右　それは千萬忝けない、各方のお執成しで死罪の御沙汰を一等減じ、

八郎　どうかころりと此の首が、落ちぬやうに願ひます。

長兵　然し兩人とも、惜しむほどの首でもないが、

十平　とてものことにころりと落し、すげ替へた方がよさゝうだ。

淺右　これがすげ替へられるものならば、立派な首にすげ替へて、

八郎　もう一遍仙臺で、女に思ひ附かれませうに、

長兵　生死にかゝる御場所にて、仙臺などの惚氣を申す、さりとはたはけた奴でござる。

十平　これは一等減じるより、增した方がようござらう。

八郎　それは御容赦下されい。

淺右　して、我々同樣に一味荷擔いたせし者は、皆召捕りになりましたか。

長右　おゝ、お表にては中澤甚平、吉良助太郎を始めとして名島齋右衞門、川村慶次、又大月の懷刀醫師謙齋も召捕られしぞ。

十平　お奧では勇力で其の名も高い中老政尾、彼女に隨ふ柏木、竹川、七八人も召捕られたが、中に一人しぶとき政尾、いつかな白狀いたし居らぬ。

淺右　女の癖によせばよいのに、惡事が露顯した上は包み隱すは無駄なこと。

八郎　早く白狀すればよいが、なか／＼肚の据つた女、めつたに白狀いたすまい。（ト八つの時計鳴る。）

長兵　今打ちしは八つのお時計、今日これにてお調べは、御老職の出頭たる左枝佐渡守樣。

十平　御差添へは當家にて、お客分の小田大炊樣、謀叛人棟梁大月藏人お立會にて御詮議あるよし。

淺右　すりや、佐渡守樣と大炊樣が、

八郎　主人の詮議をなさるとか、
長兵　最早八ツを打ちたれば、
十平　これへ御出席、
兩人　なされませう。

ト合方小鼓のあしらひにて、奥より左枝佐渡守上下脇差にて刀を持ち出來る、後より侍二人袴裴にて硯箱と手箱を持ち附添ひ出來る、長兵衞十平床几をはなれ、下に居て辭儀をなす、佐渡守眞中へ住ひ、侍後へ控へる。

長兵　左枝樣には臨時のお役目、
十平　御苦勞千萬に、
兩人　存じまする。（ト辭儀をなす。）
佐渡　其の方達も今朝より、荷擔の者の下調べ、役目の勤勞大儀でござる。
長兵　はッ、
十兵
佐渡　してそれなる藏人が家來高木淺右衞門、野田八郎次、密事の白狀いたせしか。
長兵　兩人とも有體に、

十平　白狀いたしましてござりまする。

佐渡　おゝ、よく白狀いたせしぞ。

長兵　則ち彼等が申し口を、書取りましてござります。

ト半紙の口書を取り出す、佐渡守是れを開き見る。

淺右　拙者共は速に、これにて白狀いたせしゆゑ。

八郎　どうぞお慈悲に此の首を、お助けなされて下さりませ。

長兵　こりや、其の儀は後で我々より、お願ひ申してやらうから。

十平　口出しいたさず、控へて居れ。

淺右　ではござりませうが、

兩人　御家老樣へ。

長兵　やあ、お直に申すは、

兩人　失禮なるぞ。（トきつと言ふ。）

淺右
八郎　はあゝ。（ト控へる。佐渡守書取りを見て。）

佐渡　彼等兩人が白狀によつて、斯く確證を得る上は、豫て大月藏人が肱と賴む安宅鄕右衛門、これへ

呼び出し詮議なさん。

長兵　はツ。それ、郷右衛門を呼び出しやれ。

○足輕　はツ、（ト下手へ向ひ、）それに控へし安宅郷右右門、急いでこれへ引立てめされ。（ト下手にて、）

□　はあゝ。

ト時の太鼓になり、下手より郷右衛門着流しにて繩に掛り、足輕兩人袴股立にて繩を取り出來る。下手にて郷右衛門、佐渡守を見てきつと思入あつて舞臺下手へ來る。

鄕右　えゝ、靜かにしろ。下に居らう。（ト大きくいふ、）

ト悠々と舞臺眞中より下手に居る、足輕左右に控へる、郷右衛門は佐渡守を尻目に掛け俯く。

長兵　はツ、仰せに任せ安宅郷右衛門、引据ゑまして、

三人　ござりまする。（ト佐渡守郷右衛門を見て、）

佐渡　大月藏人が家來安宅郷右衛門。

郷右　はツ。（ト合方きつぱりとなり、）

佐渡　其の方事は藏人が日夜内外の用を足すよし、定めて主人がなすことは何事によらず存じ居らうな。

郷右　はツ。
佐渡　今某が其の方に、尋ね問ふべきことあれば、逐一それにて答いたせ。
郷右　何事かは存じませぬが、元來拙者は愚鈍にて四五歳なる小兒も同然、見聞なせしことなどは傍より直に失念いたせば、確とお答へは出來ませぬ。
佐渡　其の方が主人大月藏人、豫て謀叛の聞えあつて今般その詮議に及ぶ、日夜内外の用を足す其の方なれば、此の企てに荷擔なせしはいふまでもなし。何等の事より藏人は此の企てをなしたるか、その原因を包み隱さず、それにて申せ。
郷右　只今申し上げし通り、拙者愚鈍の生れにて物の用に足らざるゆゑ、主人何事も申し聞けねば、お尋ねなさるゝ趣きは、一向に存じませぬ。
佐渡　存ぜぬとあらば存ぜぬにして、然らば其の方が存ぜしことより承はらん、先頃鳰川堤にて舊安寺村の百姓大六、則ち藏人の伯父たる者を、其の方殺害なしたであらうな。
郷右　御老職のお尋ねは何事かと存ぜしに、鳰川堤で主人の伯父大六を殺せしなどゝは、思ひがけなきお疑ひ、左樣なことは存じませぬ。
佐渡　いや存ぜぬとは申させぬぞ、其の夜大六を討ちたることは、確といたした證據があるぞ。

鄕右　して其の證據と、おつしやりまするは。(ト此の時奥にて、)

大炊　その證據は身共なるぞ。

ト合方になり奥より大炊、上下脇差、淺黃の帛紗に包みし槍と刀を一緒に持ち出來り。

鄕右　證據は誰と存ぜしに、小田の御前であつたるか。(トぎよつと思入。)

佐渡　これは／＼小田公には、今日詮議のお立會、御苦勞千萬にござりまする。

大炊　いや佐州殿にも御苦勞至極、(ト大炊上手へ住ひ、)只今これにて御詮議ある、それなる安宅鄕右衛門は奸賊大月が片腕にて、なか／＼容易ならざる者、性來愚鈍などゝいふは人を馬鹿にいたしたこと、其の舊安寺村の大六を殺害なせしこと事柄は某よく存じ居る、其の夜鳴川の川下にて漁りいたして居つたる所、網に掛りし一ツの位牌、雲間を漏れし月影に透して見ればあり／＼と、俗名大月長次兵衛と記してあるは大月が、紛ふかたなき親の位牌、合點行かずと思ふ折柄、流れ寄つたるその死骸は、不斷釣にて面を知る、舊安寺村の大六、面部をかけて數ケ所の疵は。

ト鄕右衛門へ思入。

鄕右　え、(トぎつくり思入。)

大炊　鄕右衛門、汝が討つたであらう。

郷右　御老公まで拙者めを思ひ掛けなきお疑ひ、左樣の事は郷右衞門、更に覺えござりませぬ。
大炊　何覺えなきことがあらうぞ、其の夜身共獲物を送ると僞つて、位牌を持參いたせし折、何故あつて驚きしぞ。
郷右　むゝ、（ト思入あつて、）獲物を持參いたせしとおつしやるゆゑに其の魚は、鯉か鯔かと存ぜしに思ひ設けぬ位牌ゆゑ、驚きましてござりまする。
大炊　すりや、それゆゑに驚きしか。
長兵　こりや淺右衞門八郞次、先刻白狀いたせし通り、
十平　今一應申し上げい。
淺右　はッ、只今申し上げまする。其の日伯父大六が主人の驕奢を戒めに親の位牌を持參なし、不孝を言立て異見なし、聞入れざれば刺違へ、死ぬる覺悟と見ましたゆゑ、
八郞　體よく其の場を言ひくるめ、郷右衞門に跡を附けさせ、鳰川堤で大六を殺させましてござりまする。
郷右　やい〳〵、わい等は何を申す。かつて覺えもないことを、鳰川堤へ參つたなどゝ、此の郷右衞門風邪にて一切他出いたさぬわ。

佐渡　すりや、風邪にて他出せぬとか。

鄕右　へい、引籠つて居りました。

佐渡　その夜鳰川堤にて、そちに出逢ひし者あるが、それでも他出せぬと申すか。

鄕右　む丶、して出逢ひしものとは。

ト合方きつぱりとなり、奥より左源太上下一本ざし刀を持ち出來り、

左源　誰でもない、身共なるぞ。

鄕右　や、こなたは、（トびつくり思入。）

左源　浦井主膳が悴左源太、藏人が伯父大六を汝が闇殺なせし折、所用あつて初夜過ぎに通り掛りし鳰川堤、見咎められじと驚きて我を目掛けて打ちたる手裏劍、衣服の紋と同斷なる劍酸漿の紋所は、汝が小柄であらうがな。（ト左源太懐より帛紗に包みし誂への小柄を出して見せる。）

鄕右　いや、劍酸漿はいくらもある紋、この鄕右衞門に限らうや。

左源　いや其方に限る證據あり、此の小刀が細きゆゑ紙を卷いて小柄へさしたる、反は手紙の切端にて、安宅鄕右衞門と記しあるが、これでも汝は知らぬと申すか。

ト小刀に卷きし手紙の端を見せる。

郷右　證據といへど其の手紙は、我が書にあらぬ他人の書、假令名前はあらうとも、こなたが書いたか知れぬ手紙、それが證據になるものか。

左源　かゝる慥な證據あつても、汝は知らぬと言張るか。

郷右　元より覺えのない事なれば、何處が何處まで拙者は知らぬ。（ト佐渡守思入あつて、）

佐渡　然らばそれは差しおいて、我が君本國御入府に水害多きを厭はせたまひ、木曾路を御通行ありし折、街道一の急流たる筑摩川の流れにて鳥居又助とやら申す、水錬得たるものを語らひ窃に水底へ忍ばせおき、我が君馬上でお越しあるを水中に於て弑せよと、又助とやらに申し附けしは、郷右衛門汝であらうがな。

郷右　又もや左樣な御難題、又助とやらを語らひて恐れ多くも我が君を、弑さんなどゝは以の外、左樣なことは存じませぬ。

佐渡　これにも慥な證據があるが、汝存ぜぬと申し張るか。

郷右　して、その證據と仰せらるゝは。

長兵　其の證據は昨日まで、汝と同勤いたしたる、

十平　高木淺右衛門・野田八郎次。

郷右　證據々々とおつしやるのは、此の兩人でござりますか。

淺右　如何にも、其の折我々兩人、汝が尾に附き又助へ共々密事を賴んだのだ。しかもこなたが差添を渡してやつたを忘れはしまい。

八郎　後日の出世を賴みにして惡事に荷擔の我々ども、現在側で見て居たからは、汝に知らぬと言はせぬ證人。

郷右　外の者なら存ぜぬが、臆病未練の彼等兩人、おのが命を助からんと筑摩川の深きに似ず、淺き企みに口から出任せ、跡方もなき事を申し、さりとは卑怯未練な奴だ。

淺右　現在側で共々に、

八郎　賴みし者が證據に立つを、

長兵　跡方もなき事などゝ、

十平　さて〳〵しぶとい、

四人　奴でござる。

佐渡　武士の情と存ずるゆゑ詞を以て問ひ糺すに、直なる證據も言曲げて存ぜぬ知らぬと申すからは、拷問なして白狀させん。（トきつと言ふ。）

大炊　如何にも、手酷き拷問せずば、所詮白状はいたすまい、然し此の程鏡山でこの大炊を一突と、槍を以て狙ひしを、よもや知らぬとは申すまいな。

郷右　いえ、一向に存じませぬ。

大炊　面は包んで居つたれど、木の間の月にあり〳〵と、認めおいたる郷右衛門、其の節身共が切折つたこの槍までも知らぬと申すか。

郷右　鎌倉ならば御成街道武器を商ふ道具屋で、大方お求めなされたらう、それを拙者が存じませうか。

大炊　なに、存ぜぬことがあらう、酒の無心に大月が宅へ參つた其の折に、而も道具屋金兵衛が五十金にて大月へ、賣つたる槍の津田助廣。

郷右　む、。

大炊　達てと申さば金兵衛を、これへ呼び出し證據に立てうか。

郷右　さあ、それは。

大炊　か、る慥な證據あつても、汝は存ぜぬ知らぬといふか。

郷右　先刻申し上げし通り、性來愚鈍な生れゆゑ傍らより直に忘れますれば、諄くも申すが存じませぬ。

と淺黃の帛紗に包みし、前幕で切りし槍の穗先を見せる、郷右衛門思入あつて、

大炊　すりや、どうあつても知らぬと申すか。

鄉右　金兵衞方より我主人が求めましたか求めませぬか、愚鈍ゆゑに存じませぬが津田助廣の其の槍で、たゞ一突きと、（ト突損じたが悔しいといふ思入あつて、）あなたをば、狙つた覺えはござりませぬ。

大炊　えゝ、おのれは〳〵しぶといゝ奴、かゝる慥な證據あつても、知らぬと申し切るからは、拷問なして白狀させん。

佐渡　所詮拷問いたさずば、白狀はいたすまい。

大炊　それ、鄉右衞門を、打ち据ゑさつせえ。

長兵
十平　畏つてござりまする。

大炊　思へば憎き奴だなあ。

ト大炊腹の立つ思入。長兵衞十平立掛る。足輕誂への竹の合せし棒を出す、長兵衞十平これを持ち、鄉右衞門の左右に立ち、

長兵　これ鄉右衞門、主人藏人はいふに及ばず、汝の惡事をこれにをる二人の者が白狀なし、所詮及ばぬことだのに、それを存ぜぬ知らぬと言ふは、痛い目せぬゆゑ、強情張るのか。

十平　今我々が打ち据ゑて白状すればそれまでだが、言はねばこの上石を抱かすぞ、そんな苦痛を仕ようより早く白状してしまへ。

鄉右　石を抱くはまだなこと、水責め火責めに遭つた上背中を二つに斷割られ、まさか鉛も入れまいが、ひりつく鹽を詰められて、死ぬ苦しみを仕ようとも、知らぬことが言はれようか。

長兵　まだ〳〵そんなことを申すか、いでや體へこたへるやう、

十平　打つて〳〵打ち据ゑくれん。

鄉右　さあ、きり〳〵と打たつせえ。

長兵　おゝ、打たないでどうするものだ。（ト兩人鄉右衞門を左右より相打ちになし、）

長十　さあ、白状いたせ〳〵。（ト散々に打つ。）

長兵　これでも白状、

兩人　いたさぬか。（ト打ち据ゑる。鄉右衞門苦痛を怺へる思入、左源太此の內思入あつて、）

左源　父が疑ひ受けたるも、正しく藏人鄉右衞門、彼等が巧みに相違なければ、何卒拙者に拷問を仰せ附けられ下さるべし。

大炊　おゝ、拷問いたす役目ならねど、御身が心中推察いたせば、大炊が許す、打たつせへ。

左源　は〻、早速に御許容受け有難う存じまする、お許し受けし上からは、いで一拷問いたしてくれう（ト左源太平舞臺へ下り摘み股立を取り、件の竹杖を取り鄕右衛門の上手に立ち、）こりや鄕右衛門、御老公のお許し受け、浦井左源太拷問なすぞ。

鄕右　もとより知らぬことなれば、言はぬと臍を極めた鄕右衛門、いくらなりとも拷問さつせえ、何白狀をするものだ。

左源　所が身共が言はして見せう。（ト左源太、鄕右衛門を打ち、）さあ、白狀いたせく。

ト手酷く打つ、鄕右衛門苦しさを怺へる思入、淺右衛門八郎次これを見て顫へながら、

淺右　これく鄕右衛門、よい加減に白狀しろ、側で見てさへがたくと肝にこたへて齒の根が合はぬ、いくらこなたが強情張つても、斯くいふ淺右衛門、これなる八郎次、其の外一味の者共が皆白狀をしたからは、所詮目串は拔けはしねえ。

八郎　それゆゑ我々兩人は、及ばぬことを早く知り、痛い目せぬうち言つてしまつた、これが目先きの見えるのだ、總身へ智慧が廻らぬと大男は言はれるが、白狀したは身共が智慧だ。

淺右　こなたは首尾よく言ひ脫けて助かる心であらうけれど、主人に續く其の身の大罪、

八郎　とても脫れられねえから、早く白狀してしまはつせえ。

ト兩人ぶる〳〵顫へながら言ふ、鄕右衞門はつたと兩人を睨み附け、

鄕右　これが遠島か追放になる體なら白狀するが、重くて獄門輕くて死罪、どうで首を切られる罪科、この儘はずにぶち殺されゝば首が落ちずに死ぬだけ儲け、皮は破れ肉は爛れ骨は微塵に碎けるとも、言はぬといつたら言やあしねえ。汝等が心に引き較べ痛い目せぬうち白狀しろとは、見下げ果てた意氣地なしめ。さあ、浦井殿打たねえか、おれが體にこたへるやう、力を入れて打たつせえ。（ト左源太を見てせゝら笑ふ。）

左源　思へば憎きその雜言、今一拷問してくれん。（ト悔しき思入にて立掛る。）

佐渡　浦井殿、先づ待たれよ。

左源　なぜお止めなされまする。

佐渡　我思ふ仔細もあれば、先づ其の儘に。

左源　ぢやと申して。

佐渡　はて、控へめされといふに。

左源　はッ。（ト左源太竹杖をおき下に居る。）

大炊　して、左枝殿の思召しは。

佐渡　何樣只今拷問なすとも所詮白狀いたすまじ、先づ其の儘に暫時の間、掛りの者にも休息させん。

大炊　すりや、今日は此のまゝに。

佐渡　いや、後刻詮議を仕らん。先づ鄕右衞門は假牢へ。

長兵　畏つてござります、してこれなる兩人は、

佐渡　假牢外へ繫ぎおけ。

長兵
十平　はツ。

鄕右　それでは暫く休息か、許しが出たら假牢で、足を伸ばして樂をせうか。

足輕　鄕右衞門立ちませえ。

鄕右　むゝ。（ト痺れの切れし思入にて立兼ねる。）

足輕　きり〳〵立たう。（ト大きく言ふ。鄕右衞門ずつと立つて、）

鄕右　えゝ、やかましい。

ト時の太鼓になり、鄕右衞門先きに足輕繩を取り、長兵衞、十平跡より淺右衞門、八郎次同じく足輕繩を取り、皆々上手へはひる。此の內左源太も二重下手へ住ふ。

大炊　さて〳〵しぶとい奴でござるな。

佐渡　白狀なせば一命のあらざることを存じ居るゆゑ、何樣拷問いたすとも死を決して白狀いたさず、そわゆゑ暫く猶豫いたし、大月藏人をこれへ呼出し詮議いたさうと存じまする。これとてもしいれいものゆゑ容易に白狀はいたすまじ。然し叶はぬことを察し、彼が白狀に及びなば、鄕右衛門は責めずして必ず白狀いたすでござらう。

大炊　如何にも、これは好い御思案、藏人をこれへ召連れ參れ。

侍　はッ。

トばた〳〵になり、侍緣側より下手障子屋體へはひる。跡大炊、佐渡守うなづき合ふ。誂への合方になり、下手障子屋體より大月藏人上下無刀にて、袴一本ざしの侍四人にて警固して出來り、正面の緣側よき所へ住ふ、侍は橫の緣側へ並ぶ、大月無言にて辭儀をなす。大炊思入あつて、

大炊　こりや大月藏人。

大月　はッ。(ト辭儀なする。)

大炊　今日これへ呼出せしは、老職左枝佐渡守並に斯くいふ小田大炊、其の方身分の事につき問合すことあり、もそつとこれへ進まれよ。

大月　はッ、(ト前へすり出で、)如何なることのお尋ねなるか、心得難きは拙者めを、何故警固めさる、

ぞ。

佐渡　容易ならざることあつて、其の方に詮議あるゆゑ。

大月　容易ならざる御詮議とは、まことに心安からず、其のお尋ねは何事なるぞ。

佐渡　仔細は改め申さずとも、其の方胸に覺えあらうが。

大月　拙者が胸に、覺えありとは。

佐渡　かねて隱謀の企てあつて國家を騷がす大月藏人、隱すことほど漏れ易く、一味の者より露顯に及べば、これにて逐一白狀いたせ。（卜大月思入あつて、）

大月　こは心得ぬその仰せ、拙者陰謀企てしなど、は、かつて此の身に覺えござらぬ。

佐渡　いや覺えないとは言はさぬぞ、汝が右の腕と賴む安宅鄕右衞門を始めとして、奧女中政尾、中野甚平、吉良助太郎、凡そ汝が陰謀に荷擔なしたる者共は、今朝より過半召捕り、詮議に及びし上からは、脫れぬ所と覺悟なし、尋常に白狀いたせ。

大月　はて、思ひよらざるそのお尋ね、餘人であるか當家の出頭老職左枝佐渡守殿、御同席はお客分たる小田大炊御老公、御嫌疑受けし其の次第、仰せ聞けられ下さるべし。

佐渡　その身に覺えないと申さば一通り申し聞かせん。（卜訛への合方になり、）汝が惡計數ヶ條ある內、先

づ第一に云ふべきは過ぎし年上巳の節句に二汁五菜のお膳部に毒氣ありと申し立て、配膳、膳番、毒味役三人の者毒味なし、立所に毒氣に觸れ吐血なして相果つる、これ汝が手柄となりて五百石の加增をたまはる、その內實は奧醫師なる横田謙齋を語らひて窃に毒を仕込みしよし、一味の者の白狀にて、汝の仕業と知つたるが、いよ／＼それに相違ないか。

大月　今御不審を蒙りし、三月節句のお膳部に毒あることを推察せしは、抑〻其茶道にて長玄といひし頃より、一方ならぬお取立に君恩厚きを朝暮忘れず、さればお膳部の檢分も疎かにいたさゞれば、聊かお汁の泡立ちしも心得がたく存ぜしゆゑ、醫師謙齋に檢分させ再び毒味いたさせて危き君の御壽恙なきは、拙者の功とて有難くも、五百石御加增を賜はりたり、その昇進を羨みてかかることをば言ひ出せしか、定めて是れには確とした、證據ありてのことでござるか。

佐渡　如何にも慥な證據あり、その頃心ある者は汝が仕業を怪しみしが、今般惡事露顯に及び荷擔の者を詮議なし、しかも其の確證を得たり。それ、醫師謙齋をこれへ呼び出せ。

足輕　はツ。（トばた／＼にて下手へ入り、）立たう。（ト聲して、合方になり、下手より横田謙齋着流しにて繩にかゝり、足輕引立て出來り、）醫師横田謙齋、召連れましてござりまする。

ト大月これを見てぎつくり思入。

佐渡　こりや醫師謙齋、先刻其の方も申せしが、上巳の膳部に毒ありしは、大月藏人が仕業ぢやな。

謙齋　はツ、仰せの如くお汁の中へ蓋を取る時大月殿が、手品を遣つて毒を入れ、それを愚老が檢分なし、椀中毒のある由を申しましてござります。中々以て愚老などが一目見たばかりで、毒がござるかござらぬかどういたして知れませう、其の目利の出來ぬのは年中手柄をせしことなく、產れ附いたる中低に、遂に一度この鼻を、高くいたしたことがござらぬ。

佐渡　さあ、目利に賴みし謙齋が白狀によつて毒藥は、汝が巧みと知れたるぞ、何と確證であらうがな。

大月　いえ、確證とは何事ぞ、只今謙齋が申せしは跡方もなき僞りにて、某彼に左樣なことを賴みし覺えかつてござらぬ。

謙齋　なに無いことがござらうぞ、愚老を書齋へ窃に招き、當座の褒美に惠まれし十兩金に目がくれて、賴まれたではござらぬか。

大月　然らば汝に賴みしといふ、何ぞ證據があつてのことか。

謙齋　さあ、それは。

大月　手前が賴みし密書でも、あつて申し出でたるか。

謙齋　さあ。

大月　僞り表裏の横田謙齋、汝が申すばかりでは、證據には相成らぬ。

謙齋　むゝ、又へこまされたか。（ト謙齋顔を上げて思入、大月佐渡守に向ひ、）

大月　憚りながら謙齋が今申せしは虚言ゆゑ、確證には相成りませぬぞ。

トきつと言ふ。佐渡守思入あつて、

佐渡　横田謙齋が申すこと證據にならずばならぬまで。して又その後御寢所近き御庭前へ、伊賀流の忍びの術を行ひし深見十藏を忍ばせ、わざと久松三五郎に見咎めさせ、逃げ行く時に落したる密書の名前より、浦井主膳が疑ひ受け親類預け、是れその頃浦井が娘を、妻にくれざる遺恨により、忍びの者を入れたるは汝が施す密計なりと、これ又荷擔の者よりして白狀に及びしぞ。

大月　左樣なことを何者が御老職へ申せしか、拙者主君の御贔屓蒙り數度御加增ありしを、浦井はそれを嫉く思ひ、遂に主君をいたく恨み刺客を用ひしものならん。頼みの密書を取落せしは不忠を罰する天の責め、それを緣邊のことに繕ひて拙者が巧みし密計などゝは、浦井に等しく藏人が出世を嫉む者のさかしら、傍痛きことでござる。

ト此の時上手障子屋體より、三五郎上下脇差、刀を持ち出來り、

三五　いや、何者でもない、その事を老職方へ申せしは、汝へ一味の久松三五郎。

大月　やゝ、（トびつくりなし、）むゝ、すりや其の方が根なしごとを、老職方へ申し出せしか。
三五　假令忍びの術を得るとも、其の邸内へ忍び入るに後日の證據になるべき一書を懷中なして居らう筈なし。これ奸計に相違なしと老職方に申し上げ、態と企みに陥つたる體にもてなし、浦井氏には御詮議中親類預け、まつた機密を探らんと汝が宅へ入込みしに、此の程深見十藏が忍び入つたる密事を枷に、金子を強請り歸りしを、あとを附けて首級を打ち賴みの密書を取戾し、それを功に一味なし、汝が陰謀知つたる上は、最早大月脱れぬぞ。
大月　こは夢にも知らざること、我が陰謀の企てへ一味なせしなんどゝは何を證據に申せしぞ、元より深見十藏といふ浪士に近附あらざれば、それを賴まん謂れなし、何ゆゑ左樣な虛言を申すぞ。
三五　やあ虛言とは何事ぞ、汝の心許させんと深見十藏が首を刎ね、取返したる賴みの密書、後日の證據にならうと思ひ寫し取つたるこの密書。（ト懷より密書の寫した出し、）これでも知らぬと言ひ居るか。
左源　かゝる慥な證據あつては、最早脱れぬ大月藏人、
三五　さあ尋常に白狀いたせ。
大月　元より存ぜぬことなれど、今其の方が證據といふ深見十藏とやらが所持せし密書は、この藏人が

自筆なるか。

三五 如何にも、自筆を寫せし密書、

大月 それは誰が寫せしぞ。

三五 則ち拙者が寫してござる。

大月 むゝはゝゝゝ、我が密書なりと申すには自筆ならでは證據にならず、おのが勝手に認めしを此の藏人が密書なりと、それを證據にいたすなどゝは、さりとは淺慮千萬な。むゝはゝゝゝ、

（ト大月よろしく笑ひ、）あまり笑止に思はぬ高聲、失敬御免下さりませう。

ト大炊佐渡守へ辭儀をなす。三五郎、左源太口惜しき思入、大炊思入あつて、

大炊 自筆ならざる密書ゆゑ證據にならぬと申すも一理、これは暫く差しおいて、身共が汝に問ふことあり、當家主人の最屓に依つて茶道上りの長玄坊、月々立身出世なし既に三千五百石の不相應なる高祿たまはり、遂に日々驕者に募り老職とても及ばざる汝が振舞見るに忍びず、舊安寺村伯父大六親仁長次兵衞か位牌をもつて深く異見なしたるを、承知なしたる體にもてなし、歸るを追掛け郷右衞門に鳰川堤で殺害させ、死骸を川へ投ぜしは、汝が申し附けであらうな。

ト大月顏を上げ、大炊をぢつと見て、

大月　御老公のお尋ねながら些とお目違ひかと存じまする。唯今公の仰せの如く、身に不相應なる高祿を有難くも頂戴なし老職方の次席に列なり、愚昧ながら若年輩に心得違ひある時は教諭いたす人月藏人、父なき時は父に等しき伯父大六を殺害せよと、今日天理に缺けたることを、いかで拙者が申し附けん。斯ほど非道の者なりとお認めに相成りしは、藏人身に取り如何はかりか殘念至極にござりまする。（ト口惜しき思入にてうつむき、涙を拭ふ。）

大炊　この大炊、老眼ゆゑ見損ぜしかは存ぜぬが、其の夜某鴫川にて漁る網にかゝりし位牌、續いて流れ來りし死骸に心得がたく思ふゆゑ、獲物なりと持參なし汝が動靜うかゞひしに、郡右衞門と顏見合せ恐怖の體に扨こそと、疾より推察いたせしに、汝が家來淺右衞門、八郎次が白狀にて事明白に分りしを、それを殘念至極なりと、よくも空涙をこぼせしぞ。

大月　その淺右衞門、八郎次は近年抱へし家來にて、取るに足らざる者共なれば、拷問の苦を遁れんと左樣なことも申せしならん、三日たりとも扶持せられし、主人へ無實の罪を負はする、浮薄の彼等が申すこと、必ず證には相成りませぬ。

大炊　彼等は主人の非道をあぐる、浮薄の者と汝は申すが、これ其の主人を學ぶゆゑだぞ。

大月　とは又何ゆゑ。

大炊　親なき後は親に等しと口では申せど其の方も、やはり同様浮薄の徒なり、伯父大六が死せし後、など懇ろにその跡を、汝弔らひいたさぬぞ。

大月　さ、それは。

大炊　釣にて懇意を結びしゆゑ、布施物もつて菩提所へ参りし折に承はりしが、一向参詣なさゞるよし、爰を以て見る時は伯父を伯父と思はぬゆゑ、汝が殺害いたせしと小田大炊は認めしぞ。

ト大炊きつと言ふ、大月詰りし思入。

左源　しかも其の夜鴫川堤で郷右衛門に出逢ひし時、後難恐れて某へ打ちたる小柄は覺えの紋附、郷右衛門が殺害せしこと、これにて慥に知れたるぞ。

大月　左程證據がござるなら、殺害なせし郷右衛門を、なぜ御詮議はなされぬぞ。

左源　いふまでもなく郷右衛門は、先刻御詮議あつたるぞ。

大月　して白狀に及びましたか。

左源　さあ、それは。

大月　存ぜぬことゆゑ郷右衛門も、よも白狀はいたすまじ、拙者に於ても存ぜぬと、申すより外ござりませぬ。（ト大炊憎き奴といふ思入あつて、）

大炊　いやどういへばかういふと、事を曲げて言ひ解くが、眼前證據は此の一事を我知つたると思ふゆゑ、鏡山にて鄉右衛門が槍をもつて仕留めんと附狙ひしことあつたが、これ等は某一人にて些細なことゆゑ汝に問はぬ。いざ、左枝氏には藏人へ、後の箇條をお問ひなされい。

佐渡　委細承知いたしてござる。こりや藏人、又もや汝へ佐渡守が尋ね問ふべき箇條あり。いつぞや中老政尾が部屋にて、夜半過ぎにお貞どのと密會なせしことあらうな。

大月　思ひ設けぬそのお尋ね、尤も政尾は外ならぬ我が劍術の師と賴みし笠原武右衛門が娘ゆゑ、武藝の上にて時折に面會いたすことあれど、お貞どのと深更に密會いたせしなど、いふは、跡方もなきことながら、これにも證據ござりましてか。

佐渡　證據といふは密會せし、其の明け方に中老玉笹、夜詰の引けに廊下にて二人が姿を慥に認め、後日の證據になるべき品を、其の場で拾ひ取りたるぞ。

大月　むう、して其の證據の品といふは、

佐渡　杜若の紋附きし、お貞どの、所持の簪

大月　え。

佐渡　政尾が部屋の入口に、落ち散りあるを拾ひ取り、窃に上へ差上げたるぞ。

大月　むゝ、（トぎつくり思入）その釋はお貞どのが取落したる品にもせよ、それを以て某へ不義の汚名を負はせしは、思へば憎き中老玉笹。（トきつと思入。）

謙齋　いやお詞の中ながら、政尾どの、部屋に於て密會された其の事は、玉笹どのが言はずとも、御殿中の評判で、誰知らぬものはない。

大月　それと申すも玉笹が、根もなきことに枝葉を添へ申し觸らせしゆゑにこそ、何卒中老玉笹を、これへお呼出し下さりませ。

三五　玉笹どのは此の程より、不快に依つて宿へ下り、養生叶はず相果てたり。

大月　すりや、玉笹には死去なせしか。

佐渡　老女方へ送りたるいまわの際の一通に、道ならざりし事柄を、委しく記しあつたるぞ。

大月　何やうの事を認めあるとも、遺恨あつてのことなれば、それは證にはなりませぬ。

左源　遺恨あつて認めしとは、いかなる譯でござるぞ。

大月　それぞ先頃大乘寺にて大法會のありし折、浪士共が亂暴せしを中老政尾が鎭めし折、取落したる箱迫を竊に玉笹拾ひ取り、中にあつたる金子をば掠め取りしを恥しめられ、病氣と號して引きたるが、死ぬるいまわの意趣返しに政尾を罪に落さんと、下世話に申す行きがけの駄賃とやらで書

いたる文、さて〳〵憎き奴なるぞ。

佐渡　これは政尾を詮議なし、白狀させし其の上にて汝も共に服罪させん。猶この上に數ヶ條あれど跡は後日の詮議となし、先づ其の方に尋ぬるは、當年參勤交代のお暇たまはり、鎌倉より君には木曾路を御通行、街道一の筑摩川も豫て馬上でお越しある御諚を承知いたし居つて、鳥井又助とやら申す水練得たる者を語らひ、君を弑し奉つらんと水底へ忍ばせ置き、御癇癖の起るやう態と御諫言申せしゆゑ、止むる袖を振拂ひ、馬上で川へ乘入りたまふ。

三五　實に其の時は我々も共に馬上で御供なし、君の前後を取圍めど水勢早く馬蹄立たねば乘切りがたく、此處にて水に溺れたまはゞ共に冥土の御供なさんと、我れ人共にえい〳〵聲で一生懸命馬を追ひ、事なく岸へ乘り附けたまふ。

佐渡　君には又助が領主を思ふ誠忠にて、危き難をのがれたまふ、これ其の方が奸計にて、今日露顯に及びしは、君の御罰と悔悟して速かに白狀いたせ。

大月　こは何者が左樣なことを、我が奸計と申せしか、拙者毛頭覺えはござらぬ。

トきつと言ふ。此の時下手へ甚平、助太郎着流し繩にかゝり、足輕これを持ち出來り、

甚平　やあ、覺えないとは、

助太 甚平　言はさぬぞ。（ト下手下に居る。）

大月　誰かと思へば臆病者の、中澤甚平、吉良助太郎、何しにこれへ出たるぞ。

甚平　あまりといへばしぶといゆゑ、怺へかねて是れへ出た、惡と知りつゝ我々がこれまで荷擔いたせしは、一味なさねば讒言され身の失錯となるゆゑに、餘儀なくこれまで隨つた。

助太　存ぜぬ所か我が君を筑摩川で失はんと、かねて鳥井又助を浦和の宿より同道なし、巧みも深き水中へ忍ばせおいて事をなさんと、計りしことは忘れまい。

甚平　最前よりの此の御詮議、あれにて聞いて居りましたが、あまりといへば卑怯千萬、身分も輕き毛坊主から、御家老次席に經上つて、榮耀榮華のしたいがい。

助太　是れみな君の御恩なるに弑さんとせし天の罰、爰等が年の明け時と覺悟をなして潔よく、罪に服してしまひなせい。

大月　やあ謀叛なりとは誰がこと、君より三千五百石高祿たまはる大月藏人、何が不足で謀叛を企て、其の身を滅すことをなさんや、元より鳥居又助といふ匹夫を賴みし覺えもなければ、君を弑すなんどゝは、藏人覺えなきことなるぞ。

トきつと言ふ、此の時上手屋體より左枝主馬、上下一本ざし刀を持ち緣側傳ひに上手へ來り、

主馬　こりや藏人、

大月　や、こなたは。（ト主馬、大月に詰め寄る。）

主馬　よくも／＼其のやうな僞りが言はれたことだ。惡事を賴みし又助が君を討たぬは天晴誠忠、それを汝が弄り切り、あまりといへば非道なこと、夫を見限り照が自殺、娘一人捨てたるも、我愚にて佞辯に欺かれしが口惜しい、今々思へば同勤の浦井氏が羨しい、これまで企みし隱謀も天の罰する時なりと、覺悟いたして白狀いたせ。

三五　この期に及んで罪を隱し、

左源　存ぜぬ知らぬと申さうより、

甚平　一味は殘らず召捕られ、

助太　白狀をせし上からは、

主馬　最早脫れぬ大月藏人、

三五　さあ、尋常に白狀なすか。

左源　但し白狀いたさぬか。

甚平　さあ。

助太　さあ、
六人　さあ〳〵、
三五　疾く〳〵此の場で、
五人　服罪いたせ。（ト皆々きつと言ふ。大月思入あつて、）
大月　えゝかしましい、靜かにいたせ、假令何やう申さうとも、身に覺えなき賊名を、受けるは武士の恥辱なるぞ。
三五　すりや何やうに、
五人　申すとも。
大月　存ぜぬ知らぬと申すより、多に詞はござらぬぞ。

トきつと言ふ、皆々呆れし思入。佐渡守思入あつて、

佐渡　こりや藏人、かねて語らふ一味の者は、安宅郷右衛門、中老政尾、この兩人は白狀せぬが、跡は殘らず白狀せしゆゑ、汝が謀叛の企ては明白に分りし上犯せし罪には一々慥なる證據あれど、汝が白狀なさゞるうちは一同處刑に行ひ難し、爰に於て止むを得ず拷問をなさねばならぬ、答を受くるは武士の恥ぢやぞ。

大月　拷問受くるも本意にあらず、武士の恥辱にござれども、覺えなき身に賊名を受くるも殘念至極ゆゑ、仰せに隨ひ此の場にて、拷問受けるでござりませう。

佐渡　むゝ、すりやどうあつても白狀せず、汝は拷問受くる氣か。

大月　元より覺悟にござります。

三五　この拷問は我々へ、仰せ付られ下さるべし。

左源　骨をひしいで藏人に、白狀さすで。

兩人　ござりませう。

佐渡　おゝ、願ひに任すぞ。

兩人　はツ。

佐渡　拷問受くる所存なら、最早同席叶はぬぞ。

大月　はツ。

佐渡　大月藏人、下れ。

大月　はツ。

佐渡　下り居らう。（トきつと言ふ。）

大月　はあゝ。
ト辭儀をする。跳への合方になり、藏人肩衣を取り捨て大炊へ辭儀をなし、靜々と白洲階子へ下りかける。此の内大炊は俯向き居て、この時思入あつて、

大炊　大月待つた。
大月　まだお尋ねがござりまするか。
大炊　これまで口を噤んで居つたが、小田大炊其の方へ、申し聞かすことがある。
大月　すりや、拙者めに。
大炊　如何にも。（ト大月後へ戻り、）
大月　御免下しおかれませう。（ト元の所へ住ふ。大炊思入あつて、）
大炊　最前より此の場の詮議これにて逐一承はつたが、正しく謀叛を企てながら存ぜぬ知らぬと申すのは、白狀なしてもなさいでも所詮命のなきを知つて、家來郷右衞門と申し合せ、證據のあるも證據とせず詞を巧みに言破り、今拷問を受けるのは白狀なさず死する所存か、さりとは卑怯未練なるぞ。
大月　なに、某を未練とは。

大炊　なぜ速かに自狀なし、上の御處刑受けざるぞ、

大月　何と仰せらるゝ。（ト誂への合方になり、）

大炊　元其の方の父といふは鐵砲組の足輕にて、長次兵衛と申せし者、御狩の折に手柄をなし遂に其の方も召出され、君のお覺え目出度く一時に立身出世なし、既に三千五百石の非常の高祿たまはりて家老衆にも勝りたる善美を盡せし鳰川の流れを取込む住居の結構、これ誰のお蔭なるぞ。尤も衆に勝れたる大器量とはいひながら、主人義則公のお取立てゆゑ、その大恩を蒙りしはよも忘却はいたすまいが、驕奢に耽りて謀叛を企て天理に背きし行ひなし、惡事露顯を恐れてか、筑摩川にて刺客を用ひ主を討たんとなしたる大惡、下賤なれども又助とやら領主を重んじ討たざるは天晴見上げし彼が心底、十が九ッ仕損ずるこの一事を仕損ぜしは汝を天の憎む故なり、如何で本望達せんや、爰によく目を着けよ、斯る惡事をなす者とも殿には年頃知りたまはず、お取立に預りし大恩を思ひなば、後悔なして速に其の身の罪を白狀なすべし、こりや物の譬なれど昔が今に戰場には勝たれぬ戰と知りながら、降伏なすを恥辱と思ひ落城なすまで戰はゞ、可惜士卒の人命を幾千人と失はん、これ將たるものゝ心得にて、所詮叶はぬと認めなば速かに降伏なし、人命救ふが天の道、汝も正にその如く一味の者が白狀なし、一々確證ある上は脫れぬ所と覺悟なし、此

の場に於て白狀せよ。汝が罪に服さぬ内は黨せし者も一同に長く牢舍をさせねばならぬ。日頃書籍に心を委ね聖賢の道を人に諭し識者といはるゝ其の方が、何とてかゝる謀叛を企て奸賊の名を蒙りて一命捨つることとなるか、そちの器量を顧みれば落涙なすほど殘念なるぞ。（ト大炊ちつと思入あつて涙を拭ひ、）詮議の役の佐渡守や又差添のこの大炊に、決して白狀なすと思はず、多年の御恩を蒙りし義則公へ白狀せよ。（ト大月うつむき居る。）衆に勝れし器量を惜しみ善にもせよ惡にもせよ、潔よく名を殘させ度く、かほど大炊が申せども返答なきは拷問受けて、白狀なさぬ所存なるか。

ト大炊よろしく思入にていふ。大月ちつと思入あつて、

大月　さあそれは。

大炊　大恩思うて白狀なすか。

大月　さあ、

大炊　拷問受けるか。

大月　さあ、

大炊　白狀なすか。

大月　さあ、

大炊　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

大炊　藏人返事は如何なるぞ。（ト大月思入あつて、）

大月　火水の責はまだなこと、身を八裂きにさかるゝとも拷問にては身の惡事、白狀せじと覺悟せしも、小田老公のお詞に只今先非悔悟なし、高恩蒙る我が君へ、白狀いたすでござります。

大炊　すりや、主君の高恩を、

佐渡　忘却なさず、

皆々　白狀なすとか。

大月　只今惡事の一伍一什これにて申し上げまする。（ト横笛の入りし誂への合方になり、大月思入あつて、）抑々大月長玄とて茶道を勤めし其の砌り、御寶藏のお蟲干に竊に毒藥砒霜石を盜み取りしが惡事の初め、折がなあらば試みんと年頃隱し置きたるを、先頃上巳の膳部に仕込み掛りの者を三人まで毒殺なせしが出世の緣にて、其の折殿の御媒介にて浦井が娘を我が妻に遣せとある主命を、もどきて娘に自殺させしは心惡き仕方ゆゑ、お庭へ忍びの者を入れ浦井が賴みし密書を落させ罪を

負はせて遺恨を晴らし、それより追々立身なし佐渡守殿を始めとし、家老中を失ひて、おのれ執權の權をとらんと窃に企つ大望へ、荷擔なしたる中老政尾が、賴みによつて其の部屋にて、お貞どのに密會せしはたゞ慶之助殿の御身分をお賴みありしまでのこと、密通せしとの噂あれどそれは決してなき事なり。又拙者が驕奢に募りしを異見なしたる伯父大六、出世の邪魔ゆゑ鳰川堤で鄕右衞門に殺害させ、誰知るまいと思ひの外御老公が御存じゆゑ、惡事露顯も遠からず訴へられぬ其の先きにと、筑摩川にて我君を失はんと計りしも、鶍となりて加增をたまはり心も穩かならざるゆゑ、先づ御老公を仕留めんと、鏡山にて鄕右衞門が附狙ひしも不覺を取り、身の弱り目へ附込みし浪士深見十藏が歸りを待つて頭を刎ね、密書と共に持參なし味方に加はる久松が老職方の廻し者とて、斯くまで露顯なしたるを、死すとも白狀いたすまじと思ひ詰めし我愚、御老公の御說諭にて悔悟いたせば勿體なや、長玄坊と言はれたる茶道の頃よりお取立てにて、遂に三千五百石の高祿たまはる身となりし君の大恩忘却なし、主を討たんとなしたる積惡天罰爰に歸する上は、いざ重罪に行ひ下されい。（ト大月よろしく思入にて言ふ。）

大炊　ほゝお、惡に強きは善にもと、よくも白狀なしたるぞ。

佐渡　これと申すも御老公の全く御說諭厚きゆゑ、流石根づよき藏人も道理に感じ先非を悔い、遂に白狀

いたせしなり、今日爰に御老公のおいでが無くば罪に服さず、月日を重ぬるその時は當家の瑕瑾に相成るべきを、斯く落着に及び、大慶至極にござりまする。

大炊　これにつけても君の爲め、惡人共の手に掛り非業に死したる又助親子、近頃不便なことでござるが、跡は如何なされしぞ。

佐渡　彼れが末子、鎌倉の腰越村に漁師をなす太左衛門方に預けありしを、探索なしてこれを取立て、父又助が功に依り、厚く扶持なしおきました。

大炊　それにて惡人罰を蒙り、善人再び世に榮え、

佐渡　賞罰正しく相成れば、多賀のお家は平穩なり。

大炊　我に於ても悦ばしい。（ト皆々思入あつて、）

三五　死すとも白狀いたすまじと、

左源　膽を固めし藏人も、

主馬　先非を悔いて白狀なし、

甚平　罪に服せし上からは、

助太　ほんに、一味に黨せし我れ〳〵、

謙齋　追放くらゐになりたいものだ。

ト ばた〱になり、上手より以前の鄕右衛門、おとより長兵衛、十平繩を取り出來り、

鄕右　大炊公のお諭しにて主人白狀なしたる上は、如何なる手酷き拷問でも、死ぬまで口を開くまじと覺悟いたして居りましたが、お手數掛くるも無益ゆゑ、手前も白狀いたしまする。

佐渡　すりや其の方も白狀なすか。

鄕右　先刻お尋ねありし趣き一々身に覺えござれば、主人諸共某を磔なりと獄門なりと、勝手に行ひ下さるべし。

大炊　おゝ鄕右衛門も白狀したか、それでこそまことの武士だ、天晴々々。

大月　（思入あつて、）斯く服罪なせし上は、これに居るは恐れあり。

ト平舞臺へ下りる、これにて鄕右衛門と入替り下に居て、

いざ繩をお掛け下され。

佐渡　それ、繩打て。

長兵
十平　はツ、畏ツてござりまする。

ト大月へ本繩をかける、大炊佐渡守これを見て、先づよしといふ思入あつて、

大炊　佐渡守殿、
佐渡　御老公、
大炊　うまくまゐつた。
佐渡　まことに公の御計略圖に當つて、二人が白狀
大月　や。
鄕右　
佐渡　君にも嘸かし御滿足
大月　何と。
鄕右　
佐渡　藏人汝が功を賞し、これまで三千五百石の無役の高祿與へしは、我が君が深き思召し
大月　合點の行かぬ其の詞
鄕右　して〳〵深き、
兩人　思召しとは。
佐渡　其の方茶道長立より後源藏といひし頃まで、忠勤厚く勵みしゆゑ、勳功に依つて御加增たまはり、追々立身出世なし遂には其の身の驕奢に耽り、謀叛の兆しあることを早くも君には察したまひ、お貞どの丶色香を以て汝が心底探りしに、御眼鏡違はず企てなすゆゑ態と立身出世させしは、愁

に耽りて荷擔なす不忠の者を見出さん爲め、汝を始め人非人へ御高祿を下されしは、國家に害なす賊臣を殘らず見出して追放なさば跡は忠義の臣下のみ、さすれば多賀家は平穩なりと遠く計りし御心中、此のほどお明しありしゆゑ、汝を始め荷擔の者一時に召捕り詮議なすも、これ皆君のお差圖なれど、汝は容易に白狀すまじと種々詰問なせし上、甘言を以て白狀させしは、小田老公の御年功、何と膽が潰れしならん。

トきつと言ふ、大月、鄕右衞門無念の思入にて、

大月　小田大炊が落淚にて、白狀せまじと決心せしも、

鄕右　狸親仁が計略に、白狀せしは、

兩人　殘念至極。

大炊　これ皆汝が積惡を、今日天の罰する所、今更悔むは未練なるぞ。

兩人　むゝ。（ト大炊をきつと見る、ばたばたになり奧より袴裝の侍出で、）

侍　はツ、申し上げます。只今中老政尾、白狀いたしてござりまする。

大炊　おゝ、政尾も白狀いたせしか、

三五　これにてまことに惡人滅び、

左源　善入榮えて、

主馬　お國は平穩、

佐渡　多賀の御家は、

立役皆々　萬代不易。

甚平　つまらぬ者は、

甚平助太　われ／＼共。（ト此の內大月、鄉右衞門顏を見合せ思入あつて、）

大月　思へば、

兩人　無念、（ト大月鄉右衞門ずつと立つて白洲の階子へ踏みかけるを、）

佐渡　無禮者めが、（トきつと言ふ。大月は長兵衞に、鄉右衞門は十平に繩を引附けられる。）

大月鄉右　ちえゝ。（トびつたり下に居て無念の思入、大炊これを見て、）

大炊　はて、よい氣味で、（ト衣紋をくつろげるを木の頭、）あつたよな、はゝゝゝゝ。

ト大きく笑ふ。大月、鄉右衞門はきつと見上げる、皆々引張りよろしく、太撥の時の太鼓にて、

ひやうし　幕

九幕目大切

江州三上山の場
湯島天神祭の場

〔役名═大月藏人、島屋萬助、萬助娘お雛、其他。〕

（關門見張所の場）═本舞臺一面の平舞臺上の方に九尺の番小屋、板庇丸木の柱などよろしく、後一面柵矢來の張物、下の方藪疊、上下山組の張物にて見切り、總て江州三上山の半腹關門見張所の體。爰に菖蒲革の足輕○△□◎の四人床几に掛り焚火にあたり居る、下手にお雛島田髷やつし裝田舍娘のこしらへにて、藁草履をはき風呂敷包と德利を持ち控へ居る、この見得山おろしにて幕明く、

○　狐狸と思つたゆゑ、叱りつけては見たものゝ、

△　段々樣子を見るところ、怪しいものでもない樣子、

□　いかなる譯で娘一人、此の山奧へ參つたか、

◎　次第によれば麓まで送つてやるまいものでもない、

四人　それにて譯を、申し上げろ。（ト合力になり。）

お雛　はい、わたくしは三上村の作左衞門と申しまする、百姓の娘でござりまするが、田原村の親類に佛事があつて呼ばれて行き、母さんへの土産物をかうして重へ詰めまして、お酒まで貰ひました

を提げて、父さんと二人連れ此の麓までまゐりましたが、どうしたことやら父さんに道からはぐれて、山道へ踏み迷うて入りましたが、嘸父さんもわたくしを案じて居るでござりませう、段々考へ見ますれば油で揚げた雁擬がこの重箱にござりますゆゑ、狐がそれを取りませうと化したことと見えまするが、お前さま方が御親切に送つて下さるお心なら、お酒も土産もお禮にお上げしませうわいな。

ト件の德利と包みを差出す。

○　いやそれは折角の志しだが、我々四人は大切なる見張りの番をいたし居れば、

△　酒は一切呑むことならず、夜更になつても睡られぬといふ、まことに辛い身の上ぢや。

お雛　さうして見張りの御番とは、何のお固めでござりまする。

□　定めて噂は聞いて居ようが、多賀のお家の謀叛人を、此の山奥へ禁獄させ、

◎　出口々々の張番いたすは、徒黨の輩が囚人を、助けに來ようも知れぬゆゑだ。

お雛　さういふ譯ならお役目が、濟んだ後にて御ゆるりと、召上つて下さりませ。送つてお貰ひ申しまして、僅かなお禮もいたしませんでは、此方の心が濟みませぬ。

ト　これにて四人顏見合せ、酒の呑みたきこなしあつて、

○　さて三人へ相談だが、折角娘の志しを受けぬといふも本意でないから、こりや預つて置いては
どうぢや。

△　いや預つておく時は、徳利や重の明殻から、露顯になるまいものでもない。

□　それより爰で娘の酌で、一杯づゝ馳走になり、四人のものが口を拭き、

◎　默つて居れば後腹痛めず、酒の匂ひも此の寒さの、風に當れば直に醒めます。

お雛　さあ〳〵お好きとござりますなら、お內證にて一杯づゝお上りなされて下さりませ。

○　いや實は酒と聞いたので、

△　腹の蟲めが承知いたさず、

□　ぐう〳〵啼くので怺えられず、

◎　我慢を仕兼ねて居りました。

お雛　どれ、お酌をいたしませうわいな。

トこれより浮いた合方になり、有合ふ莚を敷き四人筒茶碗を出し、お雛徳利の酒を銘々についで、四人一口呑んで、

○　あゝ、好い酒だ。

四人　甘露々々。（ト お雛包みを解き、重箱を出し、）

お雛　精進物ではござりますが、お摘みなすつて下さりませ。

○　イヨウ、こりや椎茸に雁擬、

△　こちらにあるのが島田湯葉、

□　附木が一枚附いて居たので、

◎　こりや狐めが恐れたと見える。（ト 四人肴を喰ひながら、酒を呑むことよろしくあつて、）

お雛　こりやお氣の毒でござりますが、もうおつもりになりましたわいなあ。

○　いやあ、さてはとう〳〵たひらけたか。

△　久し振にて呑んだのに、

□　娘が酌にて強ひつけられ、

◎　こりや思ひの外呑み過した。

お雛　お蔭樣で入物が、輕くなりましてござります。（ト 重箱を元の通りに包む。）

○　さて、それでは此の娘は、手前が送つてやるといたさう。

△　然らばお手前、

三人　御苦勞ながら、

お雛　此御迷惑でござりませう。

○　迷惑どころか役得だ。（ト立たうとしてひよろ〳〵と倒れ、居睡りするゆゑ、）

△　これはしたり、どうしたものぢや、それでは手前が送つてやらう。（ト立たうとして同じく睡る。）

□　えゝ、三杯か四杯の酒に睡るといふがあるものか。（ト立たうとして睡る。）

◎　いや、斯うも意氣地のないものか、睡るといふは情ない。

ト立たうとして、やはり睡り、トヾ四人とも莚の上へ寐てしまふゆゑ、

お雛　もし皆さん、どうなされました、そんなにお睡うござりますか、もうし〳〵。（ト搖起す、）

四人　あゝ、睡いから堪忍してくれ〳〵。（ト寐てしまふ、お雛思入あつて、）

お雛　ても、爭はれぬものぢやなあ。

トぢつとこなし、此の時本釣鐘を打込み誂へ凄味の合方になり、お雛四邊へこなしあつて懷より呼子の笛を出して吹く。これにて花道より萬助顏へ痣をこしらへ淺黃頭巾牛纒股引、鳥さしのこしらへにて長竿を持ち出來り、

萬助　娘、うまく行つたか。

お雛　あい、此の通り寐てしまひました。（ト萬助焚火の明りにて四人を見て、）

萬助　眠り藥を酒に仕込む時は、忽ちに睡氣がさして寐ると聞いたが、斯うも利目があるものか。

お雛　見咎められぬ其の內に、少しも早く矢來の內へ。

萬助　とても序に四人のものが、目の覺めぬうち谷底へ、蹴込んでおいて仕事にかゝらう。

お雛　あゝもし、それではあんまり酷いわいなあ。

萬助　はて、何をするのも旦那の爲めだ。

ト寐てゐる四人を下手へ引摺り來り藪蔭へ打込む、此の時後にて謠の聲聞える故お雛びつくりして、

お雛　やゝ、あの謠は。

萬助　おゝあれぞ話しに聞いて居る、大月さまのお聲であらう。

お雛　幸ひお聲をしるべにして。

萬助　闇に紛れて矢來のうちへ。

お雛　そんなら父さん。

萬助　さあ、娘來い。

ト山おろしにて萬助お雛を連れて上手山組の蔭へはひる。これにて知せに付き番小屋と藪疊を左右へ

引いて取り、一面の柵矢來胴折れに疊んで日覆へ引揚げる。

（絶頂牢獄の場）――本舞臺五間の常足の二重十枚飾り山組の蹴込み、上下杉林後一面山の端へ切拔きの月を見せたる山中山の釣張り切出しの夜の遠見、二重の上手へ寄せて見上げる程の二間の岩組、此の上に誂へ四尺四方の籠牢、正面よき所に御器口の穴、下手のつまに、錠の下りたる開き締切りあり、平舞臺下の方一面の薄原、舞臺前へ杉の梢を見せ、總て絶頂籠牢の模樣よろしく、山おろしにて道具納ろ。ト鳴物打ち上げ、床の淨瑠璃になる。

謠ガヽリ〽實にや慈童が菊の葉に齡を保つ谷の水、〽それは枕を越えし科、是れは奸惡並びなき慾に眼も藏人が配所の月も三上なる、山の嶮岨へたゞ一人捨てられし身の罪深く、四尺四方に迫りたる獄舍の内より梢もる月をながめてかこちごと。

ト此の内本釣鐘を打込み、上手の籠牢の口より大月藏人、好みの鬘黑の紋附の着附にて顏を出し、

大月　あゝ我ながら主罰の、報いに苦しむことどもちやなあ。（ト谺の入りし床の合方になり、）惡事を白狀いたしてより片時も早く死を遂げて、此の世の恥辱を脱れんと、思へど五尺の體さへ四尺四方に狹められ、針の莚も同然なる尖りの上に跨がれば、睡ることさへなかなかに、晝夜わかたぬ此の

苦しみ、思へばいつぞや伯父大六、異見を加へてくれし時故郷へ退身いたしなば、此の苦しみもあるまじきに、ほこる驕奢に限りなく運に乘じて家國まで覆へさんと企みしゆゑ、斯かる汚名の苦しみは豫て覺悟のことながら、

〽せめて末期は武士らしく、切腹させて下さらば、

卑賤に出で丶重役まで昇進なせし身の面目、とさあ申すは矢張り得手勝手、今更悔んで返らねば谷の水音猿の聲、梢を漏れてさす月を我が友として皺枯の、謠曲なりと謠はうか。

〽食を斷じて音力も、衰へし身に嗄れし聲を知邊に親と子が、辿る難所も厭ひなく、立寄る月の影くらく探る道さへ不知案内、

ト此の内大月は牢の内へはひり、謠の聲になる。よき程に下手より以前の萬助お雛を連れて出來り、二重へ上り上手の岩の上へ登らうとして、登れぬこなしあつて、

お雛　もし父さん、慥にあれと思へども、何處から登ることぢややら、樣子がさつぱり分らぬわいなあ。

萬助　どこぞに登る道があらうが、夜の事ゆゑおれにも分らぬ、幸ひ是れなる餌さし竿、これへ結んで入れて見よう。

〽かねて用意の小刀を、竿に結ぶも不都合と、黐の粘りを引き扱き、

ト萬助腰に附けたる袋の内より誂への小刀を出し、竿の先きの黐を指へ唾をつけて扱くことあつて、手拔を引き裂き、件の小刀を結びつけることよろしく、

お雛　父さん、ちよつと前方にお聞き申して見ようぢやないか。

萬助　え丶聞かいでもあの内に、何で餘人が居るものか。

〽竿さし入れる御器口も、中に受取る手ごたへに、しすましたりと兩人が身を潜めてぞ窺ひ居る、こなたは合點行かざれば又も穴より顏差出し、

ト此の内萬助正面の牢の口へ竿の先きを差込む、中にて藏人小柄を取ること、萬助竿を引いて先きを探り見て思入あつて、お雛と兩人下手の下に居て窺ふ、牢の口より大月顏を出し四邊を見廻し思入あつて、

大月　はて心得ぬ、固めの者の其の外は杣山樵のみにて人跡絶え、鳥も通はぬ嶮岨なるに、如何なる者が此の山へ忍び來つて獄中へ、小柄を差入れくれたるか、天罰主罰一度に報い、世に捨てられし我なれど、未だ天運盡きざるは、はて訝しき事どもなり。

〽いふ聲とくと聞き濟し、（ト萬助思入あつて、）

萬助　もし旦那さま、それにてお早く御本意を、

お雛　お遂げなされて下さりませ。

大月　や、さういふ聲は誰なるぞ。

萬助　長の御恩を蒙りました、鳥屋の親仁萬助めと、

お雛　娘のひなでござりまする。

大月　おゝ、さういふ聲は覺えある、鳥屋の親子であつたるか。

萬助　日頃の御恩を報じたく、

お雛　これまで忍んで、

兩人　參りました。

大月　おゝ、よくぞ忍んで來てくれしぞ。

ト嬉しきあまり首差し延べ、（ト床の合方きつぱりとなり、）

〽月はあれども木隱れて、さだかに顏は見えされどかゝる難所の固めの中、忍びおほせて來てくれしは、なか／＼容易なことならず、我も再びそち逹に此の世で詞を交すなどゝは、今の今まで思はざりしに、僅かの恩義を厚く思ひ生耻晒す某の心を察し此の小柄、與へくれしはこれ正に尊き聖の引導より、得難き品と忝なく、自害いたして本意を遂げ、禮はあの世で致すであらう。

〽聲音もやせて梢よりおろす嵐にとられじと、親子は詞聞き取りて、

ト双方よろしくこなしあつて、

萬助　えゝ、お情ない旦那さま、今更言つても返りませぬが、なぜあれまでに御出世をなされましたら御謀叛などは、思ひとまつて御安泰を、お計りなされては下さりませぬ。慾に限りのないものか多賀のお家を覆へさんと、よしない企みをなされしゆゑ、遂には天の御罰にて忽ち惡事の露顯となり、鳥も通はぬ此の山にて籆牢とやらのお苦しみ、話しに聞くさへ怖しく、どうぞいたして一日も早く苦痛をお助け申し、自害をおさせ申さうと、思へど固め嚴重なる關門所々にござりますゆゑ、容易いことでは入込まれず、後日の難を避ける爲め、顔へ痣までこしらへまして鳥さしとなり、此の中から山へ立入り番人衆と、馴染になつてやう〳〵と、望みを達してござりまする。

お雛　茂る木の間に月影も隱れてそれとさだかにはお顔を見上ることもならず、上と下とに隔たるゆゑ夜目にろく〳〵分らねど、お聲の樣子も嗄れてこの中からのお苦しみ、さこそとお察し申しまする。お傷しくは存じまするが少しも早く御自害を、遊ばしまして御苦痛をお脱れなされて下さりませ、假令未來へいらつしやつても主從三世と申しますれば、一旦お情受けたるわたくし、後から彼の世へ參りまして、お宮仕へをいたしますれば、御不便お掛け下さりませ。

〽とは言ひながらお情を受けし御恩に一日も、此の世におきたく思ふのが、人の習ひと知りながら、
少しも早くと御自害を、お勸め申す心の内、お察しなされて下さりませ。
〽何の因果と娘氣の後言ひさして泣き沈む、健氣な樣子見下して、
ト此の内お雛よろしくこなし、大月思入あつて、
大月　おゝ其の詞悦ばしいぞよ、倦きもあかれもせぬ中を我が女房に義理を立て、暇を取りしそちゆゑに、此の世の縁は薄くとも未來は一蓮托生と盡きぬ因みを樂しみ居れば、かゝる惡事を企みたる我に愛想がつきざれば、此の世で父に孝を盡し百萬年を過ぎし後、あとから彼の世へ來てくりやれ。さゝ、何時まで居つても名殘りは盡きぬ、人目に掛らば身の大事、片時も早く逃げ延びよ。
萬助　おつしやる通り鵜の目鷹の目、長居をしても居られねば、お暇申すでござりませうが、
お雛　せめてそれなるお側へ行き、お顏をとつくり見ました上、立歸りたうござりまするが、それまで登る足掛りの、道はいづれでござりまするか、
萬助　お教へなされて、
兩人　下さりませ。

大月　さあ、其の登る道は、
〽側へ来らばなまなかに、盡きぬ名殘りと思ふにぞ、（ト大月思入あつて、）
いや其の道は嶮岨にて、なか〱側へは登り難し、怪我でもしては相成らねば、やはり其のまゝ
歸るがよいぞ。
萬助　そんならそれへ、登りまして、
お雛　逢ひますことは、
兩人　かなひませぬか。
大月　益なきことぢや、早く行きやれ。
萬助　あゝ、お名殘り惜しい、
兩人　ことぢやなあ。
〽名殘惜しやと伸上り、見れば見おろす月影も曇る涙の暇乞、いそぐ戻りと死を急ぐ心は同じ悲歎の別れ、
ト此の内萬助お雛は上手の岩の所へ来り、岩へ縋り上を見上げろ。大月は牢の穴より顔を出し下を見おろす、三人よろしく愁ひのこなしあつて、

大月　あら勿體なき主君の罰、僅な恩義を掛けてすら、世に捨てられし某を斯くまで慕ひくるゝのに、

萬助　如何なる天魔が魅入りしか、御發明にてありながら、大恩受けしお主の家を、覆へす氣になるといふは、

お雛　それもやつぱり御荷擔の、政尾の局や安宅どのが、勸めしゆゑに引くに引かれず、お募りなされし企みごと。

大月　此の世の苦痛は脱れても、彼の世へ行けば又地獄、

萬助　脱れ難なき苦しみを、見るも現在眼の前に、

お雛　見上ぐるお顏はお體が、ありとはいへど見えもせず、

大月　實に梟木に掛りし如く、

萬助　三尺高く木の空へ、

お雛　晒す仕置に見まがふは、

大月　はて、恐ろしき、

三人　ものぢやなあ。

〽淺ましさよと兩人が見上ぐる涙大月も、悔み涙の一時に落ちて流るゝ谷川や、雨に水増す

如くなり。

ト三人よろしく泣落す、此の留りかすめて法螺の音、ドン／＼と打込むゆゑ、皆々聞耳を立て、

大月 やゝ、俄に打ち立つあの太鼓は、

萬助 扨は早くも手が廻り、

お雛 これへ寄せ來る合圖なるか、

大月 さゝ、討手來らぬ其の内に、片時も早く迯げ延びよ。

萬助 とは云へ、固めが附きましては、

お雛 所詮出ることかなひますまい。

大月 それなる尾花の茂みへ隱れ、暫し樣子を窺ひ居よ。

萬助 左樣いたすで、

兩人 ござりませう。

〽茂る尾花に兩人が姿を隱す間もなく、固みの番士馳せ來り、

ト此の内大月は牢の中兩人は下手芒原の影へ忍ぶ。ドン／＼ばた／＼になり、花道より野牛纒紐附股引、切緒の草鞋大小の役人四人、十手を持ち出來り、直に舞臺へ來て、

一　いやなに各、固め嚴しき關門に見張りのもの丶居らざるは、何とも以て合點行かず、
二　それのみならず、藪陰に落ち散る德利と小風呂敷、煮染の重など隱しありしは、
三　察する所我々が、見廻る間の隙を窺ひ、番人共をたぶらかし、
四　この山奧へ忍び入る曲者ありと覺えたり、大事の罪人心許なし、
一　中を見屆け、其の上にて、
二　手分けをなして取調べん。
三　何はさておき絕頂へ、
四　登つて樣子を、
四人　窺ひ見ん。
〽勝手覺えし裏道の嶮岨も厭ひあらし吹く、峯へ難なく攀ぢ登り、窺ふ中には苦痛の體、
ト此の內四人は上手の岩の後へ入り、裏手より登りし心にて簺牢の左右より二人づ丶上り牢の中を窺
ふ、此の時中にて苦しむ聲聞えるゆゑ、
一　や丶、さてこそ怪しき唸り聲、
二　それ、錠前をお明けなされい。

三　心得申した。

〽合點行かずと鍵取出し、手早く明ける戸前より、朱に染みたる大月が腹かつさばきよろぼひ出で、

ト此の内一人腰の革袋より鍵を取出し、牢の下手の錠を明け戸前をあけろ。内より以前の大月小柄にて腹を切り、糊紅になりよろぼひ出る、番士四人この體を見て、

一　やゝ、こりや大月には、

四人　自殺をせしか。

〽殺しはやらじと左右より組附く四人を大月が心得たりと捻返し、爭ふ機に二人の番士、崕より下へ眞つ逆さま、殘る二人を相手となし、手負ながらにぐつと引附け、

ト此の内大月件の小刀を口に啣へ四人を相手によろしく立廻る、此の内二人は誤つて後の崕へ落ちる、跡一人を膝に引敷き、一人を捻ぢあげ、啣へし小刀を逆手に取り大月きつとなり、

大月　あら有難や今宵こそ、本意を遂げし此の切腹、邪魔なきうちに迯げ延びよ。

ト此の時下手の芒原の蔭より、以前の萬助お雛出て、

萬助　そんなら、此の間に、

お雛　少しも早く。

番士三人　あれをやつては。

ト振解いて下へおりようとするを、大月よろしく立廻つてぐつと引き附ける、此の時仕掛にて大月の腹ばつくり明いて血汐流れる。

〽こけつ轉びつ、

ト萬助お雛逸散に花道へはひる。大月は番士兩人と立廻りながら後の籰牢に行當る、仕掛にて牢格子開き、大月と番士二人の體を消す、あと山おろし烈しく、此の道具居所にて替る。

（返し）

湯島天神祭の場

（淨瑠璃）天神の寶前に、梅鉢の幕張　中宵宮五人客俠（淸元連中）

［役名――男達上野の鐘五郎實は三遊亭圓朝、同湯島の三吉實は柳亭燕枝、同根津の八重藏實は竹本和國太夫、同根岸の松右衞門實は田邊南龍、同不忍の辨吉實は桂文治、手古舞吉五郎、同米吉、同作太郎、同眼八、同加七、同紅藏。手古舞藝者小百、同小むら、世話役鶴屋千右衞門、其他。］

（湯島天神祭禮の場）――本舞臺一面の平舞臺正面鏡山といふ印の積樽の張物、「鏡山百駄湯島御若衆

中樣、數寄屋町藝者中」といふビラを掛け、左右に御祭禮湯島宮本といふ高張提灯を立て、上のかた白地に梅鉢の紋附し幕張り、此後本社の横を見せ、下の方棧敷と見たる淨瑠璃臺、伊豫簾毛氈を掛け、軒口に梅鉢の紋附の提灯、日覆より紅白梅の花、枠へ天滿宮祭禮といふ灯入りの大提灯を下し、總て湯島天神祭禮の體、屋臺囃子にてよろしく道具納まる。

ト屋臺囃子打上げ、知せに附き、下手の伊豫簾をあげる。

〽東京に北野をうつす神の庭、天滿宮も年古く名にし太田の創立に、昔の江戸を只一目見晴しもよき湯島臺、

ト屋臺囃子になり、花道より吉五郎、米吉、作太郎、眼八、加七、紅藏揃ひの半纒、紺の腹掛股引三尺帶突かけ草履手古舞のこしらへ、誂への獅子頭を吉五郎、米吉かつぎ、作太郎、眼八、加七獅子のあほりを持ち、紅藏獅子の尾を持ち出來り、花道へ留る。

〽けふぞ祭に町々の氏子を廻る獅子頭、目立つ揃ひの半纒は土地に名うての小頭や、役場へ出たら一寸も後へは引かぬ道具持ち、五分もすかない股引の盲長屋は近けれど、目先きの見えし鳶の者、勇み勇んで來りける。

ト花道にて皆々振あつて舞臺へ來る。

吉五　こう、後の手合はどうしたらう、ごうぎにおくれてしまつたぢやあねえか。
米吉　數寄屋町へ廻つたから、何處か當込みへ入つたらう。
作太　正覺坊が音頭取りだから、加島で呑んで居るかも知れねえ。
眼八　あんまり後がおくれたから、爰で待合せて行かうぢやあねえか。
加七　さつきから喉が渇いて、木遣もろくによべやあしねえ。
紅藏　まあゆつくりと茶でも呑んで、後の來るのを待合はさう。（ト獅子を床几の上へ載せ皆々腰を掛る。）
作太　いや湯島の祭も年々出來るが、今年ぐらゐ張込んだことはねえ。
眼八　何といつたつて神田と違ひ、狹え場所で山車が十本、
加七　踊屋臺が五本に、地走りは三本出來る。
紅藏　おいらは此のごろ上から來たから、土地の勝手は分らぬが、五人男は立派だな。
吉五　そりやあ言はずとも立派な筈だ、當時東京で指折の、睦連の隊長だ。
米吉　先づ噺家で圓朝に、續いて燕枝柱文治、釋の方でのん〳〵の南龍、
作太　そこへ久し振りで歸つて來た、狂言淨瑠璃の利國太夫だ。
眼八　なぜおいらと同じやうに、目尻が下つた年さんが出ねえか。

加七　中村屋であつた時には、彼の人が立女形だつた。

紅藏　あの衆達は役者は跣足だ、上方から來た市十郎より、よつぽど小手が利いて居るな。

吉五　何にしろ今度の祭は五人男が眞打で、おいら達はいはゞ前座だ。

米吉　よく言ふ合の楔だから、ちよつと何ぞ短く遣つて、邪魔にならねえ内引つ込まうぜ。

作太　その事〳〵、少しも早く會所へ行つて、こつちの好きな酒にしてえ。

眼八　醉つた擧句はお定まりの、三人上戸のぶう〳〵喧嘩、

加七　腹も立つたり泣いたりするが、他人といふぢやあなし、

紅藏　一つ組子の兄弟分、仕舞は笑ふ仲直り、

作太　いや酒と聞いたら喉がぐびつく、ちつとも早く若手の二人で、

眼八　爰等の藝者を迷はせる、意氣なことを遣んねえな。

吉五　どうして〳〵踊りは御免だ、爰は一番年役に、

米吉　お前達の方でやんねえ。

眼八　やるのは造作もねえけれど、邪魔がられるのはどつとしねえ。

加七　こりやァ不斷色をする、罪滅しにやるがいゝ。

紅藏　とてものことに東京の、木遣でやつてくんなせえ。

吉五　えゝ、多勢に無勢仕方がねえ。

米吉　それぢやあ木遣を、

兩人　遣ツつけようか。（ト牡丹た畫きし扇を持ち前へ出る。）

キヤリ〽やあ、やんれ引け〳〵、よい聲かけてえんやらさ、やつと引留め座敷から敷いた蒲團をなぐりかけ、何でもこつちを向かしやんせ、ヨイ〳〵よいやナ、よい中同士の小いさかいなら痴話と口舌はなんでもかんでも今夜もせい、東雲の明けの鐘ごんと鳴るので仲直りすンました、ヨイ〳〵よんやナ、そうよがしめかけ中たづな、〽えんや〳〵これはあれはさのえ、エンヤリヨウ。

ト此の内御輿太鼓を運せ、吉五郎米吉で掛りよき所より六人一緒になり、よろしく振あつて納まる。

此の留り花道揚幕の内にて、ちよん〳〵と木を打ち、これをきつかけに祇園囃子になり、花道より小百、小むら若衆鬘肌脱ぎ逢附木綿緒の草鞋、手古舞のこしらへにて鐵棒を引き出來り花道よき所へ留ろ、あとより千右衛門紋附の着附派手な袴草履にて大きな紐附きの拍子木を持ち出來り花道へ留り。

〽對の出立も人の目に逢附裝ひの手古舞は、ぞつと素顔の若衆髷三筋にかへて鐵棒を引くや轟

者と拍子木を、打ち連れ立ちし世話役は肌脱ぎの緋がうつろひて赤いは酒の數寄屋町、その德利の袴腰、よれつもつれつ來りける、

ト三人振あつて舞臺へ來る。

吉五　おゝ、そこへ來たは鶴屋のちやんか。

米吉　五人男はもう來るかえ。

千右　今切通しの上へ來たが贔屓の多い藝人だから、門並の所望ゆゑ、柝を打つのも草臥れたからおらあ先きへ拔けて來た。

小百　これは皆さん、お早うございましたね。

小村　昨夜は堪忍して下さいましよ。

吉五　お前達よりおれ達の方で、昨夜の詫びをしにやならねえ。

米吉　何であんなにおらあ醉つたか、昨夜のことは何にも知らねえ。

佐太　なに、知らねえことがあるものか、小百さんと小むらさんと、下座敷で呑んで居たくせに。

眼八　そこは目尻は下つて居ても、二人の素振をちらりと見たから、色をする身は相身互ひ、ずつと察して拔けあとを、おれが端唄でごまかして居た。

紅藏　さういふことはこつちは知らず、眼八が無暗に勸めるから茶碗で四五杯やつたので、今日は頭痛でこてえられねえ。

加七　手前は酒を呑むからいゝが、おらあ少しもいけねえから無暗に肴を荒したので、既にころゝになる所だつた。

作太　これといふのも小百さんと、小むらさんが惡いからだ。

小百　何でわたし等が惡いのだえ。

佐太　お前達がこの二人を、引張つて行つたからだ。

小村　なに、そりやあわたしの方が引張られたのですよ。

千右　何にしろ意氣な話しだが、色をするなら若い内だ、思入れたんとするがいゝ。

吉五　鶴屋のちやんも、若い時は、

米吉　たんと色をしなすつたらうね。

千右　おゝ、しなくつてどうするものだ、若い時は豪氣にした。

作太　どうして〳〵若い時どころか、今でも藝者を色にして、

眼八　いくら假名讀新聞で、叩かれたかしれやしねえ。

加七　然し外の借金や、身代限りと譯が違ひ、

紅藏　色事筋で責められりやあ、どなられても憎くはねえ。

千右　人は色氣と慾氣が去りやあ死ぬより外に仕樣はねえ、斯うして生きて居るからは、そんな話しは早く聞きてえ。

吉五　いくら聞きてえといつたとて、

米吉　爰で惚けられもしめえ。

作太　こりやあ小百さんと小むらさんが、

眼八　屯で調べられると思つて。

小百　屯などで調べられる、

小村　そんな藝者とは違ひますよ。

眼八　こりやあ、おれが悪かつた。

千右　さあ〳〵早く聞かしてくんねえ。

小百　それぢやあどうでも、

兩人　話すのかえ。（トこれより口説になり）

クドキ〽そもや二人が此のやうにあつくなりしは過ぎし夏、此のお祭の寄合に派手な浮名を鳥八十から、抜けて歸りを待合で汗に鳴海の染浴衣、それから絶えて久しぶり、〽ほんに昨夜はよい首尾に言譯闇き小座敷に、吸殼で見る顔と顔、嬉しい中ぢやないかいな。

ト小百は吉五郎、小むらは米吉を引出し口説の振、よき程より、御輿太鼓を冠せ作太郎、眼八、加七三人獅子を持ち上げ、紅藏獅子の尾を持ち、口説の邪魔にはひりよろしくをかしみにて振納まる。

千右　二人の惚けで涎を垂らし、うつかり話しを聞いて居たが、もう五人男が爰へ來た。

吉五　ほんに向うへ、

六人　來やしたねえ。（ト千右衛門花道へ向ひ柏子木を打つ、これを切つかけに、）

〽神田から續く湯島の祭禮に、競ふ姿も御愛樹の梅の浪花の男達、〽五ツ連れだつ雁金の昔を忍ぶ上野山、

トこれへ大拍子を冠せ、よき程に花道より不忍の辨吉若衆髪派手なる對の衣裳杦の下駄にて出來り、揚幕の前でちよつと見得をなし、文句一杯に花道へ留る。

〽山王臺の名も高く、鐘の音響く不忍の、

ト花道より根津の八重藏同じこしらへにて出で、見得をなして花道へ留る。

〽池水清く濁りには染まぬきほひの頭分。

ト花道より上野の鐘五郎同じこしらへにて出で、見得をなして花道へ留る。

〽達引ならばどこまでも、後へは引かぬ根岸川、

ト花道より湯島の三吉同じこしらへにて出で、見得をなして花道へ留る。

〽淺い深いは客と間夫、相手嫌はぬ根津の里、

ト花道より根岸の松右衛門同じこしらへにて出で、見得をなし花道へ來り、

〽その地廻りか地走りの、趣向もよしや出立ち榮え、

ト五人ちよつと振りあつてきつと見得、摺鉦入り誂への合方になり。

辨吉 梅の社の神垣へ今日參詣に連立し五人男のまツ魁、名も雁金の額際、まだ前髪も其の儘に若衆だてらとお叱りも、返り三橋へ上方から出て松源の達引に、紛れた猪口の遣り取りより危ない命の遣り取りも及ばぬ腕に忍川、腹の立つのもどん〳〵の水に流して池際へ植ゑた柳の風次第、元より力も中島に四人の衆を後立、數に加はる不忍辨吉。

八重 產れ故鄕の上方を水道の水ですつぱりと、洗つた氣でも生ぬるい藪鶯の京育ち、斯ういふ出會も初音の里、お先き眞闇やみの夜も友を便りの螢澤、何れも樣のお光りを頭に受けて身の飾り、秋

の錦の山紅葉顏も眞赤に醉つたらば、名に大八幡の藪力不斷の猫も虎となり、鬼でも相手に清水町團子坂ぢやあねえけれど、誰が丸めに來ようとも、きかぬきほいの根津の八重藏。

鐘五　春は櫻に八重一重こぞつて爰へ淸水に花見る人の長刀、腕が自慢の天狗杉、日長の原をぶらぶらとがらつく下駄に詩を吟じ、月落ち烏の憎まれ口、往來に邪魔な浪人も今は昔に袴腰、大小捨てて雁鍋で茶碗で廻す車坂、氣儘な酒も横合から狼籍なさば忍ばれず、擂鉢山より天窓の鉢落花微塵に打碎くも、異名に取つた雷に鳴響いたる上野の鐘五郎。

三吉　神田產れに產神がら旋毛は左りへ曲つても、身の行ひはまつすぐに關八州の觸頭、妻戀稻荷が隣りゆゑ以前は狐で鳥居數越した惡戲も蟲のせゐ、すつぱり封じて堅氣になり極印附の遊び人を思ひ切つたる切通し、麴漬より耳口ながら蓼喰ふ蟲も數寄屋町、下谷を切つて人中で口を利くのも親分と御贔屓樣のお蔭ゆゑ、祈らずとても守るといふ神を力の湯島の三吉。

松右　さてどんじりに控へたは、鶯春亭の會へ出て人に知られた小萬年靑、小さな形だが腹ッぷくれ、田端の布袋のまをし子で寺島種に氣が早く人先きへ出る走り芋、嘴靑い時分から日々に喧嘩を諏訪の臺、それが簔輪の疵となり、音無川も大根時泥に汚れた惡い名も鶯坂の玉の湯で、洗ひ落して絹ごしの氣も和らかに笹の雪、今は達師の一本生土地に蔓る根岸の松右衞門。

辨吉　今日天神の祭禮に、
八重　幕張りなせし梅鉢の、
鐘五　紋に人數も相生の、
三吉　千歳を祝ふ雪の松、
松右　梅も櫻も返り花に、
鐘五　花を飾つて、
五人　行かうかえ。

〽いざと神輿を舁きあげて練込む宮の鳥居先、〽時も小春に境内へ返り咲きせし梅櫻、並ぶ姿も花々しく、目覺しかりける次第なり。

ト五人よろしく舞臺へ來り、皆々立掛り振あつて、千右衛門段切へ木を打ち、

鐘五　先づ今日はこれぎり。

ト目出度く打出し。

加賀騒動（終り）

前太平記を抜萃して歌舞伎に脚色狂言綺語三佛乗の因みに寄る滿仲公が菩提心に剃髮染衣の出家になさんと中山寺へ登せたる公達美丈が無賴の悪行政道正しく斬よとある君命重く仲光が如何はせんと困じたる意を察して幸壽が生害世にも稀なる忠臣孝子母橋立は恩愛の絆に引れ悲歎の愁傷思ひは同じ操御前が絶えぬ涙に盲目と成しもこゝに開きし大法會の席につらなる滿政滿季源信僧都が媒介に源賢阿闍梨が親子の再會事跡はいまも浪花江の多田にのこりし小童寺院

二代源氏誉身換

「仲光」明治十七年四月、作者六十九歳の時、新富座に書卸された。語りにある通り「前太平記」に據つた、所謂活歷劇中の一つで、新歌舞伎十八番の一つである。「家作りの如きも丸木の柱に檜皮葺といふ古代のさまを寫し着附衣裳道具類も其時代の物を摸したる所謂活歷物」と年代記は誌し、又團十郎の仲光に就きては、「美丈丸の首討てと命ぜられ悄々と我家へ歸り郎黨宗治に命じて供をさせ敎訓して落してやる時思はず淚を催したり。後幸壽丸の覺悟と發明に感じムヽとむせかへり烏帽子を落し兩手を無造作に顏へ當てヽの大泣き何とも言ひ樣なく見物一統目を泣きはらし中には聲を上げて泣いてゐたのも見受けたり、後の大法會の場にて何もせず側の者に狂言を預けトヾ滿仲より一トさし舞へと言はれ、仲光よろしく舞ふ事あり中途にて木を入れず舞ひながら幕を引かせる、見物は煙にまかれて手を拍ち悦ぶとは扨々人を馬鹿にしたものなれど、皆が褒める迄に賣込んだ團州先生も不思議な俳優なる哉」とある。

書卸しの時の役割は、市川團十郎(丹波守藤原仲光)、市川左團次(攝津守源滿仲)、助高屋高助(仲光妻橋立)、中村仲藏(橫川の源信僧都)坂東家橘(橫川の源賢阿闍梨)、市川八百藏(和泉次郎信行)、大谷門藏(仲光の臣小太郎宗治)、市川林橘(多田の公達美丈丸)、市川金太郎(仲光の嫡子幸壽丸)、河原崎國太郎(滿仲の御臺操御前)、市川團右衞門(河內兵部知貫)等であつた。——挿繪にしたのは國周筆の錦繪である。

大正十四年四月　　　　　　校訂者



新歌舞伎
十八番之内
二代源氏誉身換
藤原仲光
市川團十郎
豊原
国周筆

二代源氏譽身換（仲光――二幕）

中幕の口　多田滿仲館の場
仲光邸身換の場
中幕の切　菩提院對面の場

【役名――丹波守藤原仲光、攝津守滿仲、横川の源賢阿闍梨實は多田の美丈丸、河内兵部知貫、和泉次郎信行、小太郎宗治、幼年の美丈丸、源信僧都、仲光嫡子幸壽丸。御臺操御前、仲光妻橋立、侍女其他。】

（多田の館の場）――本舞臺四間常足の二重白木造りの屋體、襷欄間、上下一間の附屋體、翠簾を下し、中より下黒塗狐格子に正面革紐の引手附きし好の襖、緞子模樣の縁張り、中の畫に好みあり、總て多田の館の體。爰に家臣六人、何れも烏帽子素袍にて住ひ、此の見得管絃にて幕明く、

一　我君滿仲公には、御壯年より勅命蒙り國家の爲に合戰ありて、人命斷つこと數千に及び、其の罪條大いなりとて、しきりに佛門に歸依したまひ、

二　御遁世をお願ひありしが、御許容なくてやう〳〵に御退隱の御沙汰あつて、卽ち京地守護のお役は、御猶子たる滿成公へ萬事をゆだねたまひしが、

三 御病身ゆゑ御次男の頼光公へ替らせたまひ、我君多年のお望み通り公事勤番をお譲りあつて、是なる攝州多田の莊へ、御館をしつらへ御退隱。

四 まことに申すも恐れあれど、功成り名遂げて身退くは天の道なる教へに洩れず、後五百歳の末迄も武士たる者の龜鑑なり。

五 されば天慶の將門初めよしなき謀叛企て、一命捨てし者共の追善の爲め衆僧を招き、一七日の御供養ありしは、

六 此上もなき御善根にて、修羅の街に苦艱を受くる惡靈成佛得脱なし、功徳によつて六十餘州平穩にして天下泰平。

一 是と申すも頼光公の御武勇君に劣りたまはず、草木も靡く源家の功績、然るに我君御遁世のお願ひ御許容なきゆゑに、せめて菩提の爲にとて、

二 即ちお家の御四男たる美丈君を程近き中山寺に登せ給ひ、當時博學知識と聞えし善觀老を師と頼み、

三 先達てより彼の寺に御留學なされしに、兎角にお遊びのみにして、お學問を更になさらず、

四 初手は山林の竹木を、短刀にて切斷ありしも、後には追々募らせ給ひ、

五　田家に於て農人等が無禮を咎め切捨てに、なされしこともまゝあるよし。

六　それ故寺僧も持てあまし、いかゞはせんと打寄りて、評議まち／＼なる折柄、

一　惡事千里の世の譬へ、早くも此事上聞に達し、

二　打捨ておかれぬ大事なりとて、中山寺より若君を、お呼び戻しに相成つて、

三　先づお學問をお試しありしに、君のお尋ね一つとして御返答のあらざるゆゑ、

四　以ての外なる御氣色にて御懲らしめの爲なるか、仲光殿へ御預け、

五　それより窃に中山初め、其の近村を御詮議ありしに、

六　農民共を切捨てられし、御不行跡を聞しめされ、

一　打捨ておかれぬ大事なりとて、仲光殿の急お召し。

二　お怒り益々強ければ、いかなる仰せあることか、

三　心ならざる、

六人　ことでござる。

ト管絃にて、上手より河内知貫烏帽子素袍、小さ刀にて出來り、

知貫　先刻君の仰せを受け、仲光殿へお使者に參りし、信行殿には歸館なきか。

一　仰せの如く信行殿には、いまだ御歸館、
六人　致されませぬ。
知貫　今天下泰平にして、外に御用のあらざる時節、信行殿をお使者として仲光殿の急お召は、是外ならずお預けありし、美丈君の御事ならん。
二　承はれば若君にも、御後悔遊ばして、
二　しきりにお詫をめさるよし、
知貫　何やうお詫をめさるとも、お聞入れはよもあるまじ。是と申すも中山寺の善觀老がゆるがせゆゑ。假令源家の御公達とて、弟子となせば我子も同然嚴しく御教諭あればよきに、お心まかせに致せしに情が却つて害となり、今更言つて返らぬことだ。それに附けても仲光殿は、何とて遲刻致さるゝか。
二　今一應かの邸へ、
二　再度の使者を遣はさん。
　　ト花道にて、
信行　あいや、再度の御使者に及ばず、信行歸館致してござる。

ト中の舞になり、花道より、信行烏帽子素袍小さ刀にて出來る。

知貫　信行殿には御歸館ありしか、先刻より相待ち申す。

一　疾く〳〵是へ。

六人　お通りめされ。

信行　何れも、御免下されい。

ト右の鳴物にて、信行舞臺へ來り、下手へ住ふ。

知貫　して、仲光殿はいかゞありしぞ。

信行　我君よりお召の趣逐一申入れしに、仲光殿も若君の御身の上と推察致され、いたく心痛めさる る體にて、時刻移さず出仕致せば、暫時の間御前體よしなに執成し下されと、拙者へお賴みなさ れてござる。

知貫　すりや跡より出仕致さるゝとか、其趣を我君へ、片時も早く仰せられよ。

信行　委細承知仕る。

一　お役目御苦勞。

六人　千萬にござる。

信行　いづれも後刻。

ト管絃にて、信行上手へはひる。直にばた〳〵にて、花道より烏帽子半素袍の侍出來り、花道にて、

侍　はツ、申上げます。

知貫　何事なるぞ。

侍　丹波守仲光殿、出仕致されてござります。

知貫　おゝ、承知致した。

侍　はツ。

トばた〳〵にて侍引返してはひる。直に中の舞になり、花道より仲光好みの烏帽子、素袍、小さ刀にて出來り、花道へ留る。

知貫　仲光殿には臨時のお召、御出仕御苦勞至極にござる。

仲光　君命によつて取敢ず、仲光出仕致してござる。

知貫　先刻よりお待兼ね、疾く〳〵是へ、

六人　お通りめされ。

仲光　御免。

ト右の鳴物にて、仲光舞臺へ來り、眞中へ住ふ。

知貫　扨仲光殿には我君より、美丈丸君をお預りにて、御心配お察し申す。

仲光　御學問とてはなされずして、御不行跡の御所行に君のお怒り強き故、此程より某が再應お詫致せども、更に君にはお聞入れなく思ひ斷たせたまへる御氣色、又御臺所は御四男にて御血の餘りに一方ならず御いつくしみ深くして、よしなに頼むと某方へ女房達が日毎のお使ひ、拙者も一子ある身故御親子の御愛情御推察申し上げ、先づ力の及ぶだけお詫を致す所存、然るに只今火急のお召しは、他なし此一條と存ぜらるゝ。御前に於て各にも、共にお執成お頼み申す。

知貫　貴殿のお頼みこれなくとも、拙者に於ても御主人故、お執成しは致すでござるが、お聞屆けあればよいが。

一　お覺え目出度き仲光殿が、再三のお詫とあらば、

二　かならず御許容、

六人　あるでござらう。

知貫　いや必らず御許容あらうとは、それは座なりの輕薄詞、天下の手本になる事故、許し難しと仰せあれば、お覺え目出度き其許でも、よも御赦免はござるまじ。

仲光　すりや我君の御許容なしと、貴殿はお認めなされしとか。
知貫　依怙なき君の御性質、下萬民の見せしめなれば、多分御採用はござるまいと、拙者は推察仕る。
一　御許容の有無わからぬ内に、
二　何とて先を、
六人　枯らしめさるぞ。
知貫　叶はぬことを叶ふやうに、申すは浮世の諂ひ武士、世事輕薄は嫌ひでござる。
仲光　はて、潔白なことでござる。
ト奥より信行出來り、
信行　仲光殿　御出仕ありしか。
仲光　先刻は御苦勞千萬。
信行　只今御出座でござりまする。
仲光　すりや、我君の御出座とな。
信行　各方にも、心得られよ。
皆々　ハア、。

ト音樂になり、正面の襖を左右へ明け、奥より滿仲好みの烏帽子直垂にて出來り、二疊臺へ住ふ。後ろに茶筌袴裝の小姓二人、帛紗にて太刀を持ちて控へ、皆々辭儀をする。

滿仲　仲光、出仕致せしか。

仲光　はツ、火急のお召に取敢ず、出仕仕ツてござりまする。

滿仲　今其方を招きしは、別儀にてはあらざるぞ。此程より預けおきし、息男美丈丸がことなるぞ。

仲光　はツ、愚臣に於ても火急のお召は、さこそと推察仕つる。

ト音樂きつぱりとなり。

滿仲　事新らしく申さずとも、其方も承知なれど、予が若年の昔より數度合戰なしたるは、一つは勅諚のもだし難く、一つは國家靜謐の爲め、更に私のことならねど多くの人命斷ちたるを、今年經ちてかへりみれば其罪業最恐ろしく、出家なして非命に死したる泉下の鬼たる亡靈を、弔はんと思ひ立ち、數度奏聞に及びしかど遁世の儀は許し難し、老年ゆゑに隣國へ退隱せよと有難き勅諚を蒙りて、猶子滿成多病によつて、次男賴光若年なれど麾を取る器量あれば、禁裏守護を彼にゆだね、攝州多田へ退隱なし、其後又もや出家の儀を押して奏問なしたるに、今四海靜謐にて干戈を動かす者なければ、汝出家遁世なし棟梁なくば心ゆるみ、我意鬪諍の基とならん、賴光いまだ若

冠にして人服せず、年三十に至る迄暫く思ひ止まるべしと最有難き勅諚なり、滿仲が身に取りては面目あることながら、予が望みは叶はぬ故、四男なる美丈丸を菩提の爲に出家させんと、中山寺の善觀を師と頼みて遣はせしに、更に學問の功なきは是ぞ正しく善觀が滿仲が子たるをもつて、師の寵愛度に過ぎて嚴かならざるゆゑならん、後々出家となるべき身にて學問修行なさゞるは、これ美丈丸が怠りゆゑ、目通りを遠ざけ、汝が許へ預けしぞ。

仲光　君意に觸れたる若君を愚臣へお預けありしを幸ひ、御不行跡に附き日々夜々お諫めを入れたるに、元より叡智にましませば御改心の色顯れ、以後は薪水の行を勤め學問修行なすほどに、愚臣へお詫いたしくれと再三再四の御頼み、最早今後此樣な御振舞のこれなき事は、仲光證に立ちますれば、何卒今度のお咎めは御宥免下さりまするやう。

知貫　御座につらなる臣下の者も、

信行　共々お願ひ、

皆々　申上げまする。

滿仲　此程より仲光初め臣下の者が歎願なせど、予が聞屆け難きといふは、善觀老がいましめを更に用ひず學を嫌ひ、窃に後園へ拔出て竹木を切り小鳥を打ち、あられぬ振舞なすのみか、田畑を踏み

荒し農民これを咎むれば、怒りてそれらに疵を負はせ、又は商家の兒女をとらへ双の手を切落し、言語に絶えたる彼がふるまひ。

仲光　左樣なことのありしことは、仲光かつて存ぜざるが、誰が我君へ申上げしか。

信行　拙者共におきましても、左樣な街說うけたまはらず、蛇足を添うる者共が、尾に尾を附けて申せしならん。

一　何者が斯樣な儀を我君へ、

六人　申上げしか。

知貫　いや誰でもござらぬ某が、内命受けて田家へ立越え、事明白に探索なし、逐一言上致してござる。

信行　はて、言はでものことなるを。

知貫　善惡共に有體に申すが浮世にへつらはぬ、まことの武士のなす所、されば君より探索を拙者へ仰せ附けられたり。

滿仲　かゝる振舞なすといへども、諸民に於ては國司たる予が息男なるゆゑに、問注所へも訴へず、窃に葬儀を取行ふ、善觀老も是を聞き末覺束なき所行なれば、圓項黑衣の身になさんと一日同宿集合なし、得度を勸めたりけるに我武門の家に生れ、出家遁世思ひもよらず、今にもあれ朝敵あら

ば一方を預かり、敵徒を切つて名を萬天に上げんと思ふ。そち達是を試みよと佩刀抜いて切掛けしを、やう〳〵にして抱き留め、教化をもつて度すべからずと善觀よりの告により、汝へ彼を預けしなり、猶又再三探索なせしに、殺害されし親たる者いたく美丈を恨むよし、是尤もなる事どもなり、彼師父の命に悖り學業を勤めざるは生れ附いての下愚にして、是非もなきことなるが、その年いまだ三五にしてかゝる惡行なすとは、前代未聞の無頼の曲者、生しおかば後終に家の名をも下すべし、双葉の内に刈らずんば、やがて斧を用ゆるに至らん、これによつて美丈丸に其方罪條を申聞せ、今日彼が首を討ち、後刻持參致すべし。

トきつと言ふ、仲光初め立役皆々はツと思入。

仲光　すりや今日若君を、愚臣に打てと仰せあるか。

信行　思ひまうけぬ君の御諚、おどろき入つて、

六人　ござりまする。

知貫　爰が依怙なき御政道、斯あらんと存ぜし故、拙者は座なりのことは申さぬ。（ト仲光思入あつて、）

仲光　君命もだくは恐れ入れど、此程より我君にも御過りを御悔悟あつて、御謹愼にござりますれば、只管穩便の儀をもつて御猶豫下しおかれますやう、偏に願ひ上げまする。

満仲　主を思ふ汝が心底左いふは甚だ尤もなれど、彼愚にして教へに悖り、物を學び得ざるによつて、命を斷たんといふにあらず、我意にまかせて無罪の者を、殺害するに及びては聊も許し難し、もしゆるがせに致しおかばこれより國家の大法破れ、違亂のはしになるべきなり、されば願ひは聞届けぬぞ。

仲光　又々君命返すこと臣下の道にあらざれど、强ひて申上げまするは、仲光身不肖なりといへども、多年君に昵近し、是迄ついに身の願ひ一事も申上げしことなし、此度の願ひ御許容あらば、生前の望み爰に足り、向後假令小事たりとも願ひは一切申上げまじ、既に先刻御沙汰を得て出仕の折も若君が、最哀れげに某のしばし袖を控へ給ひ、いかなる天魔の所爲なるかあられぬ振舞なしたる事、千度百度悔るともかつて返らぬことなれど、今より心を改めて出家堅固に得道なせば、父上の御前よきやうに、くれぐ〵汝計ひてよと涙を流して詫び給ふを、見るさへいとゞ痛はしく、愚臣も共に袖を濡らし御館へ出仕致してござる、今の願ひを御許容あれば、一命に換へお志しを矯め直し申すべし、もしそれにても若君のお心正しくなりたまはずば、先づ某が首をめされ然して後にいかやうとも、お心まかせにはからひたまへ、今度は抂げて御許容あるやう、伏して願ひ奉る。

滿仲　こりや仲光、忠義を以て君に仕うるは臣たるの道といふこと、其方もほゞ存じ居らん、然るに只今事を設け非義を以て嘆願なすは、これ臣たるの道にあらず、それ日月は一人の爲に其光りをくらまさず、明君は一人の爲に其法を枉げずといふ、我とても父子の恩愛いかでか無からん、されども彼が首を討つは一人の爲に國家の法を、亂さゞるの所以なり、此儘彼を助けおかば滿仲は愛におぼれ、罪なき物を殺害なして良民の巨害となる其一子を助けしと、普く天下の衆人に嘲りを受けん時、汝が今の詞をもつて、其人口が防がるべきか。

仲光　さあ、それは。

滿仲　命に隨ひ、美丈を討つか。

仲光　さあ、それは。

滿仲　非義をもつて申張るか。

仲光　さあ。

滿仲　虎は生れて三日にして牛を喰ふ氣ありといふ、彼いまだ幼年にして人を殺すことを好む、成長の後叛逆を企てんも測られず、五指は我身の内なれど、腐らば切つて捨つるにしかず、一子を切るは天下の爲め、重ねて嘆願致すべからず。

ト満仲きつと言ふ。仲光是非なき思入あつて、

仲光　は、恐れ入つたる其御諚、諸人の龜鑑に御愛子のお命を斷つ御心底、承はりて仲光が、二言と申上げ難ければ、最早再び我君へ、御嘆願は申すまじ。

知貫　御壯年の頃よりして邪非道をなしたまはず、仁愛深く人倫の道を道と立てたまへば、おのづと天下の人々が、徳をしたひて降參なし、

信行　當時武家の棟梁とあほがれたまふも外ならず、御いたはしくも御公達を、諸人の爲に討たせたまふ、御潔白なる御計らひ、

一　かゝることをば若君の、御手にかゝりて相果てし、

二　農民共の親族が、承はりしことならば、

三　君に邪のなきを感じ、恨みに思ふ、

六人　者あるまじ。

滿仲　仲光汝も我意を察し、立歸りなば速に首を討つて持參せよ。

仲光　委細承知仕る、最早お詫は仕つらぬが、天下の龜鑑になしたまふ是非なき次第を申上げ、篤とお覺悟おさせ申し、御首級をたまはり度く、お慈悲を以て明日迄、御猶豫願ひ奉る。

滿仲　いや一日延ぶれば一日だけ、予が天下の笑ひとなれば、一日はおろか一刻も、斯なる上は猶豫ならぬ。
仲光　すりや、再應申上げても。
滿仲　決して猶豫致さねば、立歸りなば即刻に、美丈丸が首を討て。
仲光　かしこまつてござりまする。
知貫　最早日ざしは未下り、仲光殿にはとく〳〵此場を、
仲光　いかにも、退出仕つらん。
信行　御いたはしくは候へど、
知貫　君の仰せ嚴かなれば、
仲光　これより私邸へ立歸り、
滿仲　再度の使者を受けぬやう。
仲光　かしこまつてござりまする。（ト管絃になり、仲光是非なき思入にて花道へはひる。）
知貫　君命もだし難ければ、お請をなして立歸れど、
信行　正しく主君の御公達、容易に刃は當てられまじ。

一　忠臣無二の仲光殿、
二　如何めさる、
六人　ことなるか。
滿仲　我意を用ひず猶豫なさば、又候再度の使者を立てん。
信行　その時こそは某が、
知貫　いゝや、拙者が參るでござる。
滿仲　おゝ遲刻致さば其時は、兩人の内申附けん。
信行知貫　はッ、かしこまつてござります。（ト滿仲思入あつて、）
滿仲　菩提の爲に出家になさんと、思ひ立ちし望みも達せず、却つて恥辱を與へしは、にツくき所行と思へども、
知貫信行　え、
滿仲　おろか者ゆゑ、（トほろりとして涙を拭ふを、道具替りの知せ、）不便なるわ。
ト滿仲愁ひの思入、信行初め六人同じこなし、管絃にてよろしく道具廻る。

(仲光屋敷の場)＝本舞臺四間中足の二重正面好みの緣張の襖、誂へ板葺の屋根、此上に太き木の枝を載せ、本緣附長き延板の踏段、上の方一間開き戶、下の方跡へ下げて網代垣の塀、此前好みの四つ目垣樹木などあしらひ、總て仲光邸宅の體。爰に近習三人○△□烏帽子半素袍にて扣へ居る、此の見得合方しらべにて道具留る。

○只今多田の御館より信行殿がお使者にて、君より俄のお召しは、これ外ならず此程より、當家へ上よりお預りの、美丈丸さまの御事ならん。

△噂を聞けば御父君一方ならぬお怒りにて、御主人初め諸侯方、しば〳〵お詫申せども、いッかな御免これなきよし。

□いかなる仰せか測られぬが、惡きことをなしたりとて、しきりに先非をお悔みあれば、傍で見る目もおいたはしく、御無事の御沙汰であればよいが。

○お案じ申すは今朝より、烏啼の惡しきといひ、幸壽さまが御秘藏の松の小枝の折れたるは、もしや凶事の知せならんか。

△兎にも角にも御館より、主君のお歸りあらざれば、凶事か吉事か相わからぬ。

□最早八つも過ぎたれば、お歸りとても程はあるまじ、何卒吉事なればよいが。

□　どうやら凶事でありさうだ。

トやはり右の鳴物にて、奥より宗治烏帽子素袍にて出來り、

宗治　こりや各々には高聲に、お上のお噂致しめさるな。

○　や、思ひがけない宗治殿、貴殿が後にござるとも、

△　われ〳〵一向存ぜざれば、お上のお噂致してござるが、

□　是とても惡氣にあらず、お預りの若君さまを、御いたはしく思ふゆゑ。

宗治　今奧樣は幸壽さまと、御庭内の稻荷の宮へ若君樣のお身の上凶事のなきやう願ひのお千度、又若君樣も仲光はまだ歸らぬかとお案じなされど、元より當家へお預けありしは、後日にかゝる事なきやう、脅しの爲の御懲しめ、最早程なくお許しあらん、必らずともに忌はしきお噂は愼まれよ。

○　これに懲りて此以後は、きつとつゝしみ、

三人　申すでござる。（ト花道にて、）

呼ビ　お歸り。（ト呼ぶ。）

宗治　それ、我君のお歸りなるぞ。

○　どれ、お出迎ひ、

皆々　仕つらん。

トこれをきつかけに、床の淨瑠璃になる。

上るり〽君命請けて仲光は居所のあゆみの未の刻、半は過ぎし日の影も傾く御運の末なるかと、思案に暮れて佇みしが、胸に浮みし一策に打ちうなづきて立歸り、

ト花道より以前の仲光思案の思入にて出來り、花道にとまり、我子を身換りにせんといふ、思入あつて、舞臺へ來る。

宗治　いまだ御下城あるまじと、思ひの外なるお早き御歸館。

○　恐悅申し、

三人　上げまする。

仲光　火急のお召にとりあへず、多田の御舘へ出仕なし、君命受けて歸りしぞ。

〽いふ聲聞いて一間より、待詫びたまふ若君が、傍近く進みより、

ト奥より美丈丸、振袖小袴若君のこしらへにて出來り、

美丈　仲光、歸りしか。

仲光　只今歸邸致しました。

美丈　最前より其方を、今か〱と待詫びしぞ。
仲光　待たるゝ身より待つ身の譬へ、嘸お待久しうありつらん。
美丈　して御前の首尾は、いかゞなりしぞ。
仲光　唯今申上げまする。宗治一人是へ殘り、餘の者は次へ参れ。
三人　はッ、かしこまつてござりまする。
〽主の詞に三人は、はッとばかりに立つて行く、（ト近習三人下手へはひろ。宗治思入あつて、）
宗治　お人拂ひに相成りしは、凶事か吉事か存じませぬが、他聞を憚りたまふのは、
美丈　正しく凶事と思はるゝが、して父上の御氣色は。
仲光　今日御前の御様子は、
美丈　案じることではあらざるか。
〽案じ煩ふ若君の、御顔見るより仲光は、御いたはしやと吐息をつき、暫し詞もなかりしが、
態と面を和らげて、（ト仲光宜しく思入あつて、）
仲光　さまでお案じあるに及ばず、某ほどよく申上げ、お怒り強き我君の、御心休め申してござる。
美丈　すりや父上のお怒りを、其方申し安めしとか。

仲光　某富簍那の辯を以て、種々お詫を致せしゆゑ、御勘氣御免はなけれども、先づ御別條はござりませぬ。

美丈　それは何より嬉しきこと、是皆そなたの蔭なるぞ。

宗治　只今拙者が申せし如く、思ひがけなき吉事にて御別條これなきとは、大慶な儀にござりまする。

美丈　父上お怒り解けしと聞き、我身も安心致したり。

〽悦びたまへば仲光は、あたりを見かへり、聲ひそめ、（ト仲光思入あつて、合方になり、）

仲光　先づ御怒りは解けたれど、御改心これなくては御勘氣はゆりませぬが、是より御心入替へて佛門に入り晝夜とも、普く諸經に眼をさらし、善知識になりたまふ御所存がござりまするか。

美丈　此度の罪をお許しあらば、きつと心を入替へて、佛門修行致すであらう。

仲光　其のお詞に僞りなく、確と御改心なされまするか。

美丈　是に懲りぬことはない、お許しあらば片時も早く中山寺へ立歸り、師の坊へお詫をなし、晝夜佛門修行をなさん。

仲光　中山寺は爰よりして程近く候へば、此度は師をば改めて比叡山の横川なる、源信僧都は三塔にて一といつて二なき碩德、又御主君とも師資の御中、前々よりの因みもあれば、是より横川に赴き

て、佛門修行なしたまへ、既に今日御怒り強くなか〳〵御許容あらざるゆゑ、仲光再三命に換へ種々御詫を致せしかど、いまだ御勘氣ゆるされず、左はあれど若君が御心入替眞實に、出家堅固になしたまはゞ、其時こそは御親子の御對面あるは必定、今某が申せし事、ゆめ〳〵忘れたまうべからず。

〽眞實面に現れて諭す詞に若君も、共に涙にむせびたまひ、（ト美丈丸涙を拭ひ、）

美丈　そなたの意見に心を改め、是より後は怠らず師の教へを堅く守り、日夜佛學を修行なし、御勘氣お許し蒙むるやう、修行致せば心易く、萬事をよきに計ひくれよ。

仲光　其の御心底を承はり、愚臣が悦び是に過ぎず、直に源信僧都方へ某御供いたしたけれど、是より道も遠ければ凡往返五六日の日數かゝれば其間、出仕を缺きて猶も又御憤りに觸れもやせんこれなる家臣宗治を、御供としてお送り申さん。

美丈　其方が參らずとも、物に馴れたる宗治が、送りくれゝば苦しからず。

仲光　こりや宗治、近う參れ。

宗治　はッ、（ト前へ出る。）

仲光　只今是にて其方が承はりし如くなれば、是より横川へ御供なし、源信僧都へ委細を語り、御勘

氣の御身の上ゆゑ他へは若君なるを憚り、此仲光が親戚なる身内の者の體に言ひなし、佛門修行怠りなく、厚く御教示下さるやう、仲光伏してお願ひ申すと、よく〳〵僧都へ賴みくれよ。

宗治　委細かしこまつてござりまする、是より横川へ御供なし、僧都へ直の對面願ひ、仰せの趣き逐一に申上げるでござりまする。

仲光　しかし途中其服にては、人目に立ちて惡しかりなん、此程倅幸壽丸へ着させんと仕立てたる小袖あるは是幸ひ、それを召換へ編笠を深く召されて御出であれ。

美丈　殘る方なく途中迄、心を用ふるそなたの眞心、生涯忘れは致さぬぞ。

仲光　此仲光が取計らひかたじけなしと思召さば、善知識となり給ひて、御勘氣御免あるやうに、御修行願ひ上げまする。

宗治　然らば是へ幸壽樣の、おめしを持參致しませうか。

仲光　共方人目に立たぬやう、ひそかに衣服を持參せよ。

宗治　かしこまつてござりまする。

〽はツと答へて入りにける。（ト宗治奧へはひる。）

仲光　源信僧都は高齡なれど、いまだ老衰したまはず、日夜の勤行おこたりなきよし、定めて教示も嚴

かなるべし、以前の御心入替へて佛道修行遊ばされよ。

美丈　今日父の仰せにより切腹をもなすことかと、思ひをりしにそなたの蔭にて、出家となるは身の幸ひ、善知識といはるゝやうに、佛道修行なすであらう。

仲光　さすれば御勘氣御免あらん、其の御再會を仲光は、今より樂しみ居ります。

〽折から宗治服臺に衣服を載せて持參なし。（ト奥より宗治服臺へ誂への衣服を載せ持出で、）

宗治　はッ仰せにまかせ人目を忍び、幸壽さまのお召替を持參いたしてござります。

仲光　障りのなき内若君には、とく〳〵是を召替られよ。

宗治　いで、御介添仕らん。

〽いで介添と宗治が、袴の紐をとく〳〵と、心せはしく着せまゐらせ、衣服の丈も同じ年形も似合に揃ふ行、小袴の紐結ひしまへば、

ト宗治美丈丸に衣服を着せかへよろしくあつて、

仲光　召替られしなば片時も早く、横川へ御供致すべし。

宗治　かしこまつてござります。

美丈　是迄厚く朝夕に、心を用ひしそなたの妻、又なぐさめられし幸壽丸に一目逢つて禮を述べたい。

仲光　其儀は跡にて某より、二人に申し聞かせますれば、障りのなき内僧都方へ。

宗治　いざ、御供仕つらん。

美丈　然らばよしなに傳へてくれよ。（ト立上る、仲光思入あつて、）

仲光　表門は人目あれば、裏門より窃に御供いたせ。

宗治　はツ。

仲光　左樣ござれば美丈丸樣、

美丈　仲光さらば、

〽さらばとばかり立出しが、名殘惜しげに立ちかへるを、宗治心得せり立て、裏門さして急ぎ行く、

ト美丈丸涙ながらに行きかけ、ちよつと立ちかへるを宗治せり立て、下手へはひる。仲光跡を見送り、

仲光　先づ若君を落し參らせ、是にて跡は心易し、此上は仲光が胸に浮みし一計にて、君のお怒りをなだめ申さん。

〽心に思案なす折から、奏者の侍立出て、

トばた／＼になり、花道より烏帽子半素袍の侍はしり出來り、

侍　はツ申上げます、先刻當家へ御入來ありし信行殿が又候や、御入來なされてござりまする。

仲光　是へと申せ。

侍　はツ、（トばた〳〵にて引返してはひる。）

〽程もあらせず次郎信行、嚴命うけて再度の使者、板緣近く步み來て、

ト此内花道より以前の信行出來り、

信行　仲光殿、それにござられしか。

仲光　信行殿には再度の御使者、御苦勞至極、先づ〳〵是へ。

信行　然らば御免下されい。

〽會釋をなして座へ通れば、

と信行二重上手へ住ふ。

仲光　してお使者の趣きは、

信行　使者の趣き餘の儀にあらず、先刻よりして我君がいまだ仲光參らぬかと、數度御催促あつたれど某よしなに申しなだめ、お執成し致せども、側より兵部が我君へ薪に油を添へるが如く遲刻致すは油斷ならずと、佞辯をもつて讒するゆゑ、其方參つて催促なし疾く〳〵首を討たせよと以て

の外の御怒り、所詮脱れぬことなれば、是非なきこと、お覺悟あつて、早く御首上げられよ。

仲光　委細承知仕つる、先刻より君命の嚴かなることを若君へ、申上げてやう／＼只今、お覺悟を致させたり。御生害をお勸め申し則刻御首級持參致せば、御前よしなにお頼み申す。

信行　仰せの趣き承知致す、立歸らば御前體お執成し申すでござる。それに附けても貴殿には、脱れ難なきことを察し、御痛はしくも若君を討ち奉る御所存なるか。

仲光　主命もだし難ければ、正しく主人を打つ切なさ、御推量下されい。

信行　切なき貴殿の御心中、某しお察し申してござる。（ト信行立上る。）

仲光　左樣ござらば信行どの。

信行　遲刻なきやう。

〽言ふも現在若君の命を我が縮むるかと、落つる涙を振拂ひ打ちしほれてぞ立歸る。

ト信行よろしく愁ひの思入にて、花道へはひる。

〽跡には一人默然と吐息つく／＼次の間より、幸壽丸は若君の影見えざればそこ爰を、尋ねあぐみて出來り、父を見るより手を支へ、

ト仲光よろしく思入。よきほどに奥より幸壽丸若衆鬘後ろ茶筅一本差しにて出來り思入あつて、

幸壽　父上には、唯今お歸り遊ばしましたか。
仲光　おゝ幸壽丸か、して唯今まで何をいたしてをつた。
幸壽　若君樣のお身の上に御別條これなきやう、母上樣と諸共に春日明神を庭内より、遙拜いたしてをりました。若君樣がお見えなされぬが、どれへおいでなされましたか。
仲光　おゝその若君は、最早此の世にござらぬぞ。
幸壽　えゝ。
〽思ひがけなき一言に、幸壽丸はうちおどろき、
此世においでなされませぬとは、いかゞなされましたるぞ。
仲光　豫てそちも存ぜし如く、中山寺に御修行中、よからぬ御所業ありしゆゑ、我君深く怒らせたまひ首討てとある嚴命に、我さまぐ\に詞を盡しお詫せしかど御許容なく、御痛はしくは存ぜしかど、君命もだし難ければ、是非なく御首討つたるぞ。
〽聲をひそめて言聞すれば、年にまさりし器量ある幸壽丸は聞きあへず、
幸壽　すりや若君の御しるしを父上お討ちなされしとか、なぜ其事をわたくしへ、おつしやつては下さりませぬぞ。

仲光　御同年にて其方は、幼年よりしてお相手なし、申さば竹馬の友ゆゑに申聞けんと思ひしが、歎きに沈むを見るが切なく、それ故そちに告げざりしぞ。

〽言ひも果てぬに幸壽丸涙を浮め恨めしげに、父が顔を打ちまもり、

ト幸壽丸よろしく思入あつて、

幸壽　こは父上にあるまじき御計らひをなされしぞ、假令若君何樣の惡き御所業したまふとも、臣として君を弑す其惡名は千歳の年を經るとも滅する時なし、情なき事したまひたり、わたくし早くこれを知らば御命に替らんもの、なぜ知らしては下さりませぬ、今更返らぬことながら父上は汚名をとり、又若君はお命失ひ、悔しいことを致しました。

〽悲歎の涙にくれければ、仲光幸壽が心中を思ひはかればいとゞ猶せき來る涙を呑込みて、

ト幸壽丸愁ひの思入、仲光も思入あつて側へより、

仲光　ホヽヲ主を思ひ親を思ふ天晴なる汝が心底、父も感心致せしぞ、それに附いてそちに問ふは、今死せしといふ若君が、世に恙なく在しまさば、汝お命に替ると申すか。

幸壽　それは申す迄もなく君の爲父の爲、戰場に出て死を爭ひ溝瀆野徑に尸を晒すも、只これ忠と孝故のみ、今若君の御命を助くる時は又父上も、不忠の名を取りたまはぬとあるならば、二つの恩義に

わたくしのいかで此身を惜しみませう、親たる身にて父上には我子の心を御存じなきか、なぜ知らしては下さりませぬ。

仲光　ホヽヲ、健氣なそちが心底知りし上からは、包むまことをあかし聞かせん。

幸壽　なんとおつしやりまする。

仲光　今若君を討ちしといふは、そちが心を試さん爲め、作り設けし僞りなるぞ。

幸壽　えヽ、すりや、恙なく渡らせたまふか。（ト合方きつぱりとなり、）

仲光　最前多田の御館にて嚴命受けて是非なくも、討たねばならぬことに至れど、今其方が申せし如く假令嚴命なればとて討つに討たれぬ臣下の身、如何はせんととつおいつ歸る途中で計らずも、汝をもつて若君の御身替りに立てんと思ひ、やう／＼とゞろく胸納る。されば先刻家の子なる宗治に御供させ横川の源信僧都の許へ、竊に落し參らせたり、然るに又もや御館より生害遲刻致せしとて使者をもつて責め給ふ、進退爰に谷れば思ひよつたる汝をば御身替りと思へども、いまだ若年のことなれば取亂さんもはかられず、さればわざと若君を討ちしと僞り申せしは、心を試し見たるなり、流石は武家に生れしとて感じ入つたる汝が心底、など身替りになさゞるとは、よくぞ立派に申せしぞ。

幸壽　疾くよりもしも若君の御身の上に及ぶ時は、御身替りに立つ所存、かねて覺悟を致せし幸壽、今若君のお役にたつは、武門の家に生れたる其甲斐のある身の仕合せ、悦ばしう存じまする。

仲光　すりや、御身替りは豫てより、そちは覺悟致せしとか。

幸壽　幼年故に父上には取亂さうかとわたくしを、疑ひたまうてお試しありしか、かねての覺悟は斯の通り、

〽既に佩及抜かんとなす、父は其の手を押しとゞめ、

ト幸壽丸差添を抜かうとするを、仲光其手を留め、

仲光　ホヽヲ、よくぞ申せしぞ、大丈夫なる其方の斯く心底を見る上は、何をか疑ひ何をか憂へん、しかりといへども親となり子となる因緣淺からず、殊にはいまだ幼年なるに人に勝れし器量ゆゑ、名殘惜しきは一倍なり、そちも言ひおくことあらば、何なりと申し殘せ。

幸壽　君の爲め父の爲め、御身替りに立つわたくし、跡に心が殘りませねば、言ひおくことはござりませぬ。

仲光　然ればこれが今生の、暇乞ゆゑ其方も、母に一目逢うたがよい。

〽言へば幸壽も今生の別れに一目母上に、見えたけれど女性のこと、最期の障りにならうか

と、（と幸壽丸よろしく思入あつて、）

幸壽　いかにも此世のお別れに、今お目にかゝらねば定めし跡で母上の、情なきものと歎きたまはん、御痛はしくは存じますれど、餘所ながらお暇乞に、

（見もし見られもしたけれど、御氣丈にてはあるけれど、女性のこと故取亂し、歎き給ふものならば、折角覺悟致せしも親子のきづなにおくれやせん、兎角する間に此事が我君さまへ洩るゝ時は、心盡しも水となり、悔いて返らぬことならん。

（せめて一筆書殘し、跡の回向を母上へ、頼まんものと思へども、時刻遲れしことならば、又もやお使者が參るべし、跡にて此事母上へ、

（お傳へなされて下されと、逢はぬ心ぞ健氣なる。（ト此內幸壽丸よろしく思入）

仲光　すりや其方は母に逢はず、此儘死する心なるか。

幸壽　お目に掛らば母上へお歎き掛けねばならぬゆゑ、それゆゑお目にかゝりませぬ。

仲光　母の歎きを思ひやり、逢はぬといふは感心なり。

（包みの衣服取出し、（ト仲光以前の美丈丸の衣服を出し、）

最前そちが衣服をば若君に着せ參らせ、窃に横川へ落せし故是に殘りし此の衣服、これを着替へ

て自殺なさば、跡にて誰ぞ若君と思ふは同じ年齢ゆゑ、これぞ一つの計略なり。

幸壽　左樣ならば此の衣服を、

仲光　人目にかゝらぬ其内に、

幸壽　着替まするでござりまする。

〽折から又も侍立ちいで、（ト ばた〳〵になり烏帽子半素袍の侍出來り、直に舞臺へ來て、）

侍　はッ、申し上げます。

仲光　何事なるぞ。

侍　先刻お出の信行殿より、御狀が參つてござりまする。（ト立文を出す、仲光開き見て、）

仲光　內意のお知せ忝なし、只今出仕つかまつると、使者の者へ申し傳へよ。

侍　はッ。

〽玄關さして急ぎ行く、

ト侍急ぎ花道へはひる。此內衝立の蔭にて、幸壽丸衣服を着替へ出來り、

幸壽　只今參りしお使は。

仲光　信行殿より內意の知せ、遲刻せしとて我君には以ての外のお怒りにて、御催促ゆゑ若君の御首早

く討ち奉つれと、火急の知せある上は、最早猶豫なり難し。

幸壽　左樣ござらば又候や、再度の御使者來らぬ內、

仲光　名殘りは盡きねど、生害いたせ。

幸壽　はッ。

〽はッとは言へど切腹の支度もなさでためらへば、

ト幸壽丸小首を傾け、思案の思入、仲光是を見て、

仲光　やあ此期に及び猶豫なすは、そちは未練が起りしか。

幸壽　猶豫致すは未練にあらず、せめて名殘に母上へ、辭世の一首を殘さん爲め。

仲光　して〳〵辭世を讀み得しか。

幸壽　拙き腰折、書殘さん。

〽料紙箱より短册とり出し書く磨る墨も薄き緣、けふを限りの命毛に辭世の一首書き殘し、

ト幸壽丸料紙硯箱を持來り、料紙箱より短册を出し、硯箱をあけ筆を取つて辭世の歌を書き、

父上、御覽下され。（ト出す、仲光取上げ見て、）

仲光　「君が爲命にかはる後の世の、やみぢをてらせ山の端の月」、お、てには整ふ此の辭世、末期の際

に動ぜずして筆も淀まず假名文字の、見事なるには感心せしぞ、いまだ三五の年なるに文武の道を學び得し、そちを殺すもお主の爲、はて是非もなきことなるぞ。

〽器量勝れし我子をば、惜しむ名殘におくれじと、（ト仲光愁ひの思入）

幸壽　最早是にて今生に思ひ殘すことなければ、使者の來ぬ内生害なさん。

〽心靜かに肌くつろげ差添拔いて弓手の脇腹、がばと突立て引廻せば、流石の仲光これを見て眼くらみて醉へるが如く、暫し歎きに沈みしが、きつと心を取直し手負の側へさしよつて、

ト此内幸壽丸小袖の肌を脫ぎ、差添を拔き、紙にて卷き脇腹へ突立て引廻す、仲光よろしく思入あつて、

仲光　天晴見事な、最期なるぞ。

幸壽　父上、

仲光　悴、（ト本釣鐘を打込み、兩人愁ひの思入よろしくあつて、幸壽丸仲光の顏を見て、）

幸壽　もう父上のお顏が見えねば、御介錯下され。

仲光　言ふにや及ぶ。

〽太刀拔放し振上げて切らんとなせど恩愛に、刄なまりて切兼しが、苦痛をさすも不便ぞと

泪ながらに氣をはげまし、えいとばかりに打ちおろせば、首は前にぞ落ちにける。

ト此内仲光刀を拔き切らうとして切兼ねる思入よろしく、幸壽丸よろしく苦しみ首を延ばし、切つてくれといふ思入、仲光是非なく刀を振上げエイと切り、是にて誂への切首出る、仲光はツと思入

〽暫し泪にくれたりしが、斯ては果てじと氣をはげまし、首を美丈が衣服に包む折柄奧へ出來る、妻は樣子のいぶかしく、間の襖を押明けて見ればむざんや血に染し、美丈丸が亡骸に打ちおどろきて走り寄り、

ト此内仲光幸壽丸の袖を切りこれへ首を包む、よきほどに奧より、妻橋立下髮打掛奧方のこしらへにて出來り、これを見て美丈丸と思ひびつくりなして前へ出て、

橋立　やゝ、こりや若君には御自殺ありて、御しるしを討ちたまひしか。

仲光　いかにも、先刻我君より御首討てとの嚴命ゆゑ、種々申しなだめたれどお怒り強くお聞入なく、それゆゑ是非なく若君へ御諚の趣申上げ、御生害をお勸め申し、御しるしをあげたるぞ。

橋立　此程よりの御詫も、我君さまにはおゆるしなく左樣の仰せでござりましたか、これとても若君の御所業が惡き故、今更申してかへらねど、見るもはかなき此御最期、せめて此世のお名殘に、お顏を見せて下さりませ。

仲光　すりや、お顔を見度いと申すか。

橋立　一目拜したうござりまする。

〽妻が賴みに仲光は、兎やせん角とためらひしが、包み難きことなれば、せめて名殘を惜しませんと、（ト仲光思入あつて、）

仲光　只今そちが望みにまかせ、若君の首見する程に、かならずともにおどろくまいぞ。

橋立　同じ年の幸壽丸、子を持つ親の心は一つ、御臺さまのお歎きはさこそと思ひやられまする。

〽我身の事と知らずして淚拭ひてさし寄れば仲光衣服を取りのけて、さし出す首は幸壽丸ーと目見るより打ちおどろき、

ト此內仲光思入あつて袖を開き、誂への切首を見せる、橋立見てびつくりなし、

やゝ、これは。

〽ひとみを定め、よく〳〵見て、（ト橋立首をとつくと見て、）

思ひがけない此首は、幸壽丸ぢやござりませぬか。

仲光　こりや音高し、ひそかに致せ。

橋立　いかなることにて悴をば、あなたはお討ちなされしぞ。

仲光 （ト膝突かけて詰寄れば、仲光まぶたしばたゝき、（ト橋立きつとなつて詰寄る、仲光思入あつて、）委細の譯を其方に申聞けんと思ひしかど、再度のお使者に猶豫ならず、是非なく幸壽を若君の、御身替りに討つたるぞ。

橋立 すりや若君のお身替りに、はあゝ。（ト橋立泣く。）

仲光 既に先刻御前より嚴命うけて歸る途中、幸壽丸をお身替りに致さんものと心を定め、歸邸致して事を設け、彼が心底試し見たるに、親子とて心は一つ、御身替りに立てくれと、申せしゆゑに討つたるぞ。

橋立 すりや幸壽丸がお身替りに、致しくれと申しましたか。

仲光 主に替るは臣下の役、武門の習ひと心得て、實に天晴なることなりしぞ。

橋立 かゝることにて死すならば、決して留めは致しませぬに、なぜ息のある其内に、一目逢はして下さりませぬ。

仲光 其儀はそちがいふ迄もなく、今生の別れ故、幸壽丸に只一と目暇乞を致せよと勸めしかども、母上に末期の際に御目にかゝり、名殘に心後れやせん、跡にてよしなに告げくれといふも實にもと存ぜし故、そちに告げず斯は爲したり、是とても主君の爲め世間を憚る密事なれば、此事かまへ

て洩らすまじ。

〽事を分けたる夫の詞に、妻は詞を改めて、（ト橋立思入あつて、死骸の側へより、）

橋立　さりとはうたてき殿の御心、つれなき幸壽が振舞よな、お主の替りに立つことを母の身として留めようぞ、せめて此世の名殘ゆゑ變らぬ姿を見るならば、今の歎きはあるまじきに、父上の御手にかゝりながら、母に暇は告げざるぞ。

〽同じ親にてあるものを、なぜ此母を隔てしぞ、恨めしの我子やな、

あまたある子でさへも、何れおろそかあらざるは人の親の常なるに、ましてや我は此の年頃、

〽神や佛に祈誓して、たま〳〵儲けし撫子の、花の姿の美しく、

よろづの道にかしこくて、おとなしやかに生育てば、

〽我身の老と成行くも、知らずいつしか成長して、

父の家名を相續なし、君に仕へてあつぱれの人となるを見んものと思ひし甲斐も情なや、弓矢の道はさることながら、思へばはかない我身の上。

〽空しき骸を押し動かし、絕入るばかり泣きふせしは、理りせめて哀れなり。

（ト橋立死骸に取りすがり、よろしく愁ひの思入、

仲光　その恨みは尤もなれど、元より世界へ憚る密事、幸壽丸もよく心得、母は兎もあれ侍女端女御身替りとさとられなば、捨てし命の仇とならん、御歎きを見んよりも事の洩れぬ其内に、すこしも早く討てよといふけなげな詞にはげまされ、そちにもしらせず斯はなしたり、必ず惡しく思ふまいぞ。

〽言諭されてやうやくに、母は涙を押拭ひ、

橋立　兎にも角にも君の爲め父の爲めに死したるは、世にも稀なる志し、母も嬉しう思ひます、覺悟は豫て極めても、その期に及び若年ゆゑ、惡びれしことはなかりしか。

仲光　いや、惡びれしこと更になく、年は行かねど最後の前に、辭世の一首を書殘し、大人も及ばぬ彼が振舞。

橋立　すりや、辭世の一首を殘しましたか。

仲光　その辭世は、これなるぞ。

〽短冊取つてさし出せば、涙ながらに取上げて、（ト仲光以前の短冊を出す、橋立取上げ見て、）

橋立　「君が爲め命に替る後の世の、やみぢをてらせ山の端の月、」見るも涙の種なるが、ても感心なことぢやなあ。

仲光　それをそなたへ形見に殘し、たゞ亡き跡の弔ひ頼むと言ひしのみにして、形の如くに見事な切腹、そちも褒めてやつてくりやれ。

橋立　扨はその期に及びても、惡びれもせず切腹せしとか、あつぱれ出かした、よくせしぞ。

〽天晴なりと母親が、褒めるのも又淚なり、折から來る再度の使者、

ト橋立宜しく思入、ばた〳〵になり花道より以前の侍先に、跡より信行出來り、直に舞臺へ來て、

侍　はツ、又もやお使者でござりまする。（ト言ひすて、下手へはひる。）

仲光　信行殿には又候や、お使者の役目御苦勞千萬、

信行　あまりの遲刻に御機嫌惡しく、仲光事ハ仕果せずば、其方參つて首討てと以ての外の御氣色ゆゑ急ぎ御首討ちめされし。

仲光　只今是非なく若君へ、御生害をお勸め申し、御介錯致してござる。

信行　すりや御首を討たれしとか。

仲光　取亂したる此場の體、御推察下されし。

信行　君命お非なく討たれたる貴殿の心中お察し申す、片時も早く此趣き拙者は御前へ申し上げん、跡より續いて御持參あれし。

〽さらばとばかり信行は、御舘をさして急ぎ行く。
ト ばた〳〵早舞にて、信行逸散に花道へ走りはひる。

仲光　いで某も此首級、君の御前へ持參なさん。
〽首級をたづさへ立上れば、（ト仲光衣服に包みし首をかゝへ立上るを、橋立留めて、）

橋立　最早御持參なされますするか、此世の名殘に今一度、その首見せて下さりませ。

仲光　君命受けて討つたる首、實驗濟まねば見せられぬ。

橋立　それは武門の表向、内證は我子のことなれば。

仲光　見せぬは無慈悲のことなれど、見せなば歎きを増すばかり。

橋立　假令歎きはませばとて、

仲光　えゝ、未練者めが。（ト行くを橋立引きとめ、）

橋立　すりや、何樣に申しても、

仲光　ならぬと申すに。
〽詞するどく言ひ放し、留むる袖を振拂ひ、哀れをよそに出て行く、
ト 仲光きつと思入あつて、橋立留めるを振拂ひ、花道へはひる。

〽妻は夫を留めかね、跡見送りて涙を拭ひ、（ト橋立よろしく思入あつて、）

橋立　今は世になき亡骸に、千萬悔いても返らぬこと、思ひ直せどまだ年も三五の春を迎へしのみ、よくぞ死ぬる覺悟をして若君さまの替りに立ちしぞ、跡は母がねんごろに七日々々に弔ひなせば、心殘さず成佛せよ、そなたの健氣な心に恥ぢ歎くまじとは思へども、思ひ斷たれぬ親子の恩愛、いかなる因果で此やうな、悲しい思ひをなすことぞ、ても情ないことぢやなあ。

〽晴れぬ思ひに袖絞る、又も涙に、

ト橋立愁ひの思入、時の鐘三重にて、此道具廻る。

（多田の館の場）――本舞臺幕明きの多田の御殿、眞中に滿仲上手に知貫下手に信行今歸りし思入、左右に大名六人居並び、此見得早舞にて道具留る。

滿仲　仲光美丈丸を討つたること、其方見屆け參りしとか。

信行　御最期の場へ赴きて、たしかに某見屆けて立歸つてござります。

知貫　して又何故仲光殿には、御前へ持參致さぬぞ。

信行　跡より直に持參あらん、拙者は君のお待兼ゆゑ此儀御注進申さんと、門前より馬を飛ばし先へ參

つてござります。

滿仲　予が待兼ねし心を察し、先へ注進なしたるは、心利きたるはからひなるぞ。

信行　はツ、有難う存じまする。

一　上意を守りて討ちしとあれば、

二　仲光殿には程もなく、

三　御しるしを持參なし、

四　御實檢に、

六人　供へ申さん。

ト中の舞になり、花道より仲光包みし首を抱へ出來り、

仲光　遲刻致して再三のお使者を蒙り、何とも以て恐れ入つてござりまする。

知貫　先刻よりしてお待兼ね、

信行　とく〳〵これへ、

六人　お進みなされ。

仲光　はツ。（トやはり中の舞にて舞臺へ來り、よき所へ住ひ、辭儀をなす。）

滿仲　先刻汝へ此の役目申附けて予はこれに、持參致すを相待ちをつたが、何故猶豫致せしぞ。

仲光　御年いまだ十五歳、申さば蕾の花なる若君、あまりのことに御いたはしく、仲光刄を當兼ねて、思はず遲刻致せしは、御宥免下さりませう。

滿仲　我意に悖らず討つたる上は、遲刻の罪は許しくれん。

仲光　はゝ、有難く存じ奉る。

知貫　いざ、その首級を我君へ、

信行　御實檢に供へられよ。

仲光　上意にまかせ是非なくも、斯くは計らひ申してござる。

〽包みの儘に御前へ出し、御實檢ありし時、御怒りあらば一命を捨つる覺悟に仲光は、樣子いかにと窺ひ居る、滿仲包を見かへりて、

ト仲光首の包みを前へ出し、いかゞあるかと案じる思入、滿仲包みを見て

滿仲　我申し附けし詞を用ひて、いしくも仲光仕果せたり、是にて天下の政道立ち、下萬民の者共がそしりを脱れて滿足なるぞ。

知貫　恩愛深き御親子の、きづなを斷つて我君には、

信行　依怙なき天下の御政道、恐れ入つて、

皆々　ござりまする。

仲光　いざゝ御實檢下さりませう。

滿仲　むゝ。（ト思入）

〽今仲光が討つたる首實檢なさば親子の情、もし恩愛に亂れやせんと、態と見向もしたまはず、

ト此内滿仲ぢつと思案の思入、仲光は實檢なすかと滿仲を見詰め居る。

忠臣無二の仲光が、討ちしとあらば此儘に、實檢なすに及ばぬぞ。

仲光　すりや、御實檢はなされませぬか。

滿仲　むゝ。

〽問へどもなんのお答へなく、浮む涙を見せたまはぬ君が心を推量り、並居る上下の諸侍皆袂をぞ絞りける。

ト滿仲愁ひを隱す思入よろしく、皆々差しうつむき同じく愁ひの思入

〽仲光は我君の實檢なきに安堵なし、吐息をついて御前に向ひ、（ト仲光安堵せし思入あつて、）

仲光　嚴命なれど臣として君を弑し奉りしは、あまりに恐れ多ければ、せめては跡の御供養を仕つり度く存ずれば、討ち奉りし若君の御首級を仲光へ、下しおかれまするやう、偏に願ひ奉る。

〽思ひ入つて申上ぐれば、滿仲朝臣も仲光が、望みを叶ひ得させんと、

滿仲　その儀は汝が望みにまかせん、兎も角もはからふべし。

仲光　すりや御許容下さりますとか、はゝ有難く存じ奉る。

知貫　君の仰せをそむかずして、

信行　お役目仕果せられし上は、

仲光　御しるし給はりし、拙者はお暇仕つらん。

滿仲　おゝ、隨意にいたせ。

仲光　はッ。

〽首級を賜はり悅びの、淚を拂ひしりぞきて、（ト仲光首の包みを持ち下手へ來り、）

左樣ござれば、仰せに任せ、

滿仲　仲光大儀、

仲光　はツ。

ト時の太鼓を打込み仲光花道へ行き舞臺へ向ひ辭儀をなす、滿仲立上り見送る、此見得時の太鼓にて、

幕

ト幕外にて、仲光立ち上り、包みを見て愁ひの思入あつて氣を替へ、愁ひ三重時の太鼓にて、仲光花道へはひる。知せに附き跡シヤギリ、

（返し。中幕の切、多田の院の場）――本舞臺眞中五間通しの常足上段の間、正面銀地極彩色の襖、前面一面緣付の翠簾をおろし、上下畫心に同じく襖の出入り、日覆より大欄間をおろし、舞臺一面高麗緣の薄緣を敷詰め、總て鷹尾山法華三昧寺多田の院客殿の體。爰に下髮の侍女紅梅、小櫻等八人居並び、笙篳篥の入りし音樂にて幕明く。

紅梅　何と皆さん、人の身ははかないものとは申しながら、取分けまして此度の御猶子さまのおかくれは、おいたはしいことぢやござりませんか。

小櫻　ほんに左樣でござりまする、三年以前に御末子の美丈丸さまには御放逸にて、はかない御最期お遂げ遊ばし、

若葉　又候今年御猶子たる滿成さまの御病死に、お上のお歎きいかばかりと、言はん方なき御愁傷、

あやめ　待たぬ月日の立易く、早今日が七七日の御追悼とてお上にも、此の多田の院へ御佛參、

桔梗　御導師として都なる、横川より惠心院の僧都さまがお越しになり。

白菊　その外僧侶伶人のかた〴〵迄を、お召寄せにて今朝よりの御讀經、

紅葉　笛や太鼓で音樂を、お奏しなさるゝ音もすみて、極樂淨土は是なるかと、

初扇　常に蓮葉なわたくし共さへ、有難涙にくれまして、聽聞致してござりますが、

紅梅　お席に列なる知貫さまは、迷惑さうなお顏付、

小櫻　肥つておいでのそれゆゑか、痺のきれた御樣子にて、

若葉　膝をもぢ〳〵崩しかけては、あたりを見ては住ひなほし、

あや　長いお經と言はぬばかりに、あくびを呑み〳〵おいでありしは、

桔梗　笑止なことで、

皆々　ござりました。

　　ト皆々笑つて居る、爰へ上手の襖を明け、知貫烏帽子素袍小さ刀にて出來り、

知貫　やあ、寄るとさはるとつべこべとかしましい女中達、最早御法會事終れば、お目の不自由な御臺さまには、何かと御用も是あらん、お側へ行つてをられぬか。

桔梗　あなたは兵部知貫さま。

白菊　どれ、左樣ならわたくし共は、

紅葉　御臺樣のお側へ行き、

皆々　御用を伺ふでござりませう。

　　ト侍女八人上手へはひろ、跡に知貫思入あつて、

知貫　過ぎし天慶四年の夏都を立つて筑紫潟、君の御陣で先手を爭ひ、伊豫の掾純友を征伐致すその砌り、あの仲光めに先をとられ恥辱を受けしその無念、晴らさんものと此年月、心を碎く折に幸ひ、美丈丸君を仲光が討ちし麁忽へ附入つて、君へ讒言なせし上白滅させんと計れども、我君はじめ御臺迄兎角火宅を脱れんと、佛門に入る思し立にて、彼が麁忽を恨み給はず、わが鬱憤の晴らせぬは、はてさて殘念至極のことぢや。

　　ト爰へ下手の襖をあけ、信行同じく烏帽子素袍小さ刀にて出來り、

信行　知貫どの、これに居られしか。（ト知貫びつくりなし。）

知貫　御身は次郎信行どの、扨は樣子を。（ト思入あつて氣をかへ、）いやさ、もはや御用は相濟みましたか。

ト是にて信行よろしく住ひ、

信行　されば、御法會終れば警固の役目は相濟みますれど、承はれば其許には、日頃よりして仲光殿を不忠なりと御誹謗めされ、蔭にて嘲りをらるゝよし、それは大きな僻事にて、三年以前に我君へ仲光殿が幾度となくお詫願ひをなされしかど、罪なき下民の子供等を無慙にお害しなされたる御放逸なる美丈丸君、其儘にしておく時は天下の御法が立たざると、君の嚴命是非なくも御しるしをおげたるは、一殺多生の理をもつて不義を誅する法令なれば、仲光殿が不忠なりと嘲ける程の儀にあらず、それを彼是言はるゝは、いかなる遺恨がござるか知らねど、其意を得ずと存じまする。

知貫　やあ、御身には仲光と日頃親しくめさるゝゆゑ、不忠をおかばひなさるゝが、拙者があの節我君より美丈丸君を預りなば、一命に換へお詫をなし、若しお聞濟なき時は、何れへなりとお落し申し、切腹なして我君へ申譯の仕つる。

信行　然らば此後仲光殿不忠の汚名が晴れし節は、斯迄嘲る其許ゆゑ、よも其儘にてはをられまじ、いかゞめされて詫びられるぞ。

知貫　はて知れたこと、其節はわが二つとなき一命を、捨てもいさゝか惜しみ申さぬ。

信行　確と左樣でござるよな。
知貫　いらぬ馬鹿念、知れたことだわ。
信行　今にぞ思ひ、
知貫　や、
信行　いや、しかと覺えておいでなされい。（ト此時正面の翠簾の内にて）
呼ビ　我君の御出座。（ト呼ぶ。）
知貫　なに、我君の、
兩人　御出座とな。（ト是より床の淨瑠璃になり。）
淨瑠璃〽翠簾洩る風に名香の薫りも高き大導師、僧都と共に客殿へ出座まします名將は、武門の譽れ水清き清和の流れ源や、文にも滿つる滿仲公、あまたの臣下附添うてあたりを拂ふばかりなり。
ト此内よき程に音樂の鳴物きつぱりとなり、正面の翠簾を卷上げる、上手に滿仲烏帽子直垂のこしらへにて中啓を持ち住ひ、後ろに稚兒二人太刀を持ち附添ひ、其外近臣四人よろしく居並び、下手に横川の源信緋の衣錦の袈裟にて水晶の珠數を持ち住ひ、よろしく納る。知貫、信行平舞臺-下へ別れて住ひ、

知貫　今日の御法會も、滯りなく事終り、

信行　御導師樣にも遠路の御入來、

知貫　御苦勞至極に、

皆々　存じまする。

〽勞をいたはる挨拶に、導師もそれと會釋なし、

源信　御丁寧なる御挨拶、近頃恐れ入つてござる。我師良源年來師資の御契り淺からねば、因みにより て貧道源信、今日是なる多田の院へお招ぎにあづかること、導師の面目是に過ぎず、御懇ろなる 御法會も滯りなく事終り、先づは御安堵にいらせられん。

滿仲　こは過分なる御仰せ、我不幸にして猶子を先立て、聊供養の法會を營み、貴僧を招待なせしとこ ろ、御老體の御厭ひなく、今朝よりの御讀經殊更伶人樂を奏し、鳳笙龍笛の調べにつれ二柱の香 の座中へ薫じ、凡家の塵を拂ひしは、實に淨品に生を得て佛果を果たる心地ぞする。猶此末共發 心の道に入度き我志願、尊き導師の法を說かれ、御教化の程願はしゝ。

源信　滿仲公には豫てより御發心の御志願ありと、ほのかに拙僧承まはる、扨も老少不定とて假の浮世 の有樣を佛は火宅と說かれたり、おくれ先立つ慣はしも是非なきことに候へど、取分老いて子を

先立て逆縁の苦を重ぬるは、枝なき朽木に譬へあれば、滿仲公にも御臺にも其御愁傷さこそと思はる。それに附けて拙僧が、申入度きことのあり、御聞濟み下されうや。

滿仲　改りたる其仰せ、いかなる儀なるか多年來、師資の契りの深かりし、良源殿とも思ふ其許、我一身に叶ひたるお頼みなれば何事も、承諾なさぬことはあらじ。それにて發言致されよ。

源信　餘の儀にても候はぬが、先つ年我徒弟とせし源賢と申す者、年まだ若く候へど、螢雪の勤怠りなく、わづか三年の修行といへど難行苦行の功積みて、今は横川におきましても、その德學の進みしは彼が右に出るものなく、堅固な阿闍梨にござれども、薄命にして父母に捨てられ孤獨の僧に候へば、あはれ今日御追悼の滿成殿の精靈が再び此世に還られしと思召れて御親子の、因みをお結び下さらば、彼が幸福拙僧にも是に過ぎたる喜悦なし、此の儀御承引下されうや。

〽思ひまうけぬ源信が、頼みの次第聞終り、（ト滿仲思入あつて、）

滿仲　改りたるお頼みはいかなる儀かと思ひきや、望む所の御媒介、知らるゝ如く我等には頼光といへる次男ありて、都の守護を致しをれど猶子滿成世を去りて、先に末子の美丈丸は放逸の所業をなし鬼籍の數に入りし上は、まことや佛家のいへる如く枝なき朽木に候へど、治世と違ひ亂國の世に產れ出で武にかたずみ、文學もなき其上に闇愚無才の身をもつて、かゝる碩學大德なる聖を以

て子と呼びなし、父と呼ばれて今生の一世の因みを結ばんは、心苦しく覺ゆるなり。

知貫　あいや其儀は恐れながら御遠慮過ぎると申すもの、文學なしと仰せあれど、文武兼備の我君さま歌道に於ては都にも、多くはあらぬ御上達、闇愚無才のお身なりと卑下し給ふはその意を得ず。

信行　いや文武兼備の君とはいへど、碩學のお嫡子さまを、お儲けあるは容易ならざる事どもゆゑ、御辭退あるもさる事ながら、兎にも角にも御導師たる源信僧都の御媒介、お否みあるはよろしからず、御承引なし下さりませう。

〽臣下の意見に良將も、實にもと御心付せ給ひ、（ト思入あつて、）

滿仲　導師の媒介忝けなし、いまだ身内の者共の意見は聞ず候へども、我に於ては其養子、望む所に候へば、承諾致して候なり。

〽承引く由を聞きすまし、源信僧都も打悦び、（ト源信思入あつて、）

源信　師資の契りの淺からぬ良源のよしみを思はれ、早速御承引下されしは歡喜雀躍に堪へざるなり、然らば只今此席へ、源賢阿闍梨を連參れば、三年此方修行なし、やつれしさまを御覽下され。

滿仲　我に於てもその容貌、いかなる僧か見まほしゝ。

知貫　源信僧都の仰せにも、横川に於て碩學の右へ出るものゝ、あらざるとは、

信行　世にも稀なる大知識、いかなる阿闍梨か愚僧等も、拜顔仕つりたく存じまする。
源信　只今是へ連參れば、何卒お逢ひ下されい。
〽立たんとなせば次の間にて、（ト下手の襖の內にて、）
仲光　あいや、御老體のおいでに及ばぬ、源賢阿闍梨は仲光が、御案內を致すでござりまする。
〽常に似氣なくはれやかに、衣服を飾る仲光の蔭にしづ〳〵あか染みし衣の儘に源賢が、頭を下げてひれ伏せば、邪智の知貫それと見て、
ト此內下手の襖をあけ、仲光烏帽子素袍小さ刀にて出ろ、跡より源賢阿闍梨坊主かつら麻の衣麁末なろ袈裟をかけ、やつれしこしらへにて頭を下げし儘出來り、仲光の蔭へ平伏する。仲光もよろしくこなしあつて下手へ平伏なす、知貫此體を見てよろしくあつて、
知貫　扨は不忠を償はんと、源信僧都の勞を助け、仲光殿には御養子の御案內をしめされしか。
信行　餘事は扨おき碩學なる、源賢阿闍梨を誘はれ、御出仕ありしは御苦勞至極、
知貫　いざ〳〵是へ、
兩人　お進みなされい。
〽仲光前へ進み出で、（トよろしくあつて、）

仲光　不忠のお詫と知貫殿の御遠察の段恐入れど、豫て源信老師より拙者へ御内意ありしゆゑ、御養子さまを誘ひて、今や御沙汰が是あるかと、お次に控へ先刻より御樣子窺ひをつたる所、先づは我君御承引の仰せ出され、いかばかりか大慶至極と存じまして、さし出ながらも御養子を、御案内の仕つりましてござりまする。

〽ものに差出ぬ仲光が、勇み進んで言上す、源信も威儀を改め、（ト思入あつて、）

源信　只今君へ申上げし源賢阿闍梨と申す僧は、即ちあれにござりまする。

〽こなたもはるかに見やり給ひ、（ト滿仲こなしあつて、）

滿仲　すりやあれなるが横川に於て、碩學の聞えある源賢阿闍梨でござるよな。

〽流石骨肉同胞に遠目ながらも御愛子に似た面ざしの僧なりと、しばし見詰めて居給へば、

ト滿仲よろしくこなし、源信思入あつて、

源信　あれなる僧を太守には、お目覺えがござりまするか。（ト合方きつぱりとなり、）

滿仲　されば遠目とは申しながら、其容貌は三年以前最期を遂げし美丈丸に、少しもたがふ所なし、されども彼は今年迄此世に居ても十八歲、見うけし所あれなる僧は、早壯年の人物にて、生若輩の美丈丸とは爰に大いな相違あり。

知貫　仰せの如く拙者めも、美丈丸君に御相貌よくも似たりと存じますれど、御存命にて在するともいまだ二十歳に滿たざる御年、殊に天性御美男にていとうるはしき若君なりしが、源賢阿闍梨といはるゝは色黑くして肉も落ち、三十前後の御年配、御年齡が相違と申し美丈丸さまが只今迄、此世にましますいわれなし、俗に他人の空似とやら、ハテ似た御仁もあるものなり。

信行　然し君には御親子の、因をお結び遊ばしまする是なる阿闍梨が若君に、似させられたる御相貌にて、嘸御滿悦にござりませう。

滿仲　イヤ滿足には思へども、あれなる僧の年齡が今十年程若かりせば、世になき美丈が再生なし、我面前へ出でしかと、そゞろに往事を思ひいで、懷舊の情に迫りしなり。

（實に御親子の愛着は、貴賤の差別仲光もさこそあらめとひれ伏せば、源信につこと打笑て、

ト此内皆々よろしくこなしあつて、

源信　扨は君には年齡が、相違せしゆゑあれなる僧を、お嫡子なりと思召さぬか。

滿仲　なに、嫡子と思はぬかとは。

源信　今は何をかお隱し申さん、あれへ誘ひ參りたる、源賢阿闍梨は御嫡子美丈丸殿でござるなり。

滿仲　なんと言はるゝ。（トびつくりなす、知貫も驚くこなし、誂への合方になり、）

源信　其お驚きは實に理り、御縱逸なる御所業に御勘氣あつて仲光へ、三年以前に預け給ひ下民へ對し其儘にお差おきに相なつては、御法令が立たざるとて、御刑罰の嚴命下り、是非なく是なる仲光が生害をお勸め申し、首級をあげて君前へ持參なしたはお身代りに立つたるもの、首級にして、まことは窃に家の子なる小太郎宗治といへるものに、美丈丸殿をいざなはせ、拙僧方へ送りしゆゑ、剃髮染衣をお勸め申し、今日迄も佛門の御修行あつて御存命、何卒御勘氣御免あつて、御親子の御對面を願はしう存じまする。

〽仔細を聞いて悅びの御眉開く父君に、兵部は呆れ閉口す。（ト滿仲知貫よろしくこなしあつて、）

滿仲　こりや仲光、それに相違はあらざるか。

〽仰せに仲光頭を上げ、（ト合方きつばりとなり、）

仲光　ハヽツ、只今僧都の仰せの如く、嚴命なりとは申しながら正に主君の御愛子を、臣たる身にてむざんにも、刄を當て御首級上げ兼ましてござりますゆゑ、君の御諚に悖りしは不忠なりとは存じますれど、お命助け腹心の郞等一人差添へて、窃に横川の惠心院へ落し參らせ、僧都を賴み御弟子となして今日迄、御放逸をなし給ひし殺生戒の御罪惡消滅の爲め御修行を遊ばせし故、斯の如くおやつれありしを其儘に、御尊覽に入れませうと、御いざなひ申しましてござりまする。

滿仲　して其節は何者を身代りに立て首級をあげ、我面前へ持參せしぞ、我もあの節愛着の情に迫りて落涙なさば、汝に未練と思はれんも恥かしく存ぜしゆゑ、實檢なさで願ひに任せ首級は其儘汝に遣はし、荼毘の煙りとなしたる後假の營み致せしが、今々思へばあの節に實檢なさば身代りに立てたるものもそれと知れ、三年が間仲光を不忠と嘲る者もなく、恨みし者もなかりしに、知らで過せし我不覺、さゝ身代りに立つたるは、何ものなるか申し聞せよ。

〽御座を進み仲光へ、尋ね給へば雙眼に、うかむ泪をおしとゞめ、（ト仲光思入あつて、）

仲光　はゝッ、恐れ多き其お尋ね、御愛子さまの御一命お助け申すは寸忠ながら、君命に悖りしは則ち不忠の此仲光、もし御實檢ありし節贋首なりと仰せあらば、其場を去らず切腹なし申譯の仕つらんと、覺悟致して我君の御前へ出でしも幸壽丸が、けなげな心底佛神の御冥助による所か、御實檢も遊ばされず、此仲光へ其儘に御しるしを賜はりしは、正に愚息の功しにて、御身代りに立ちましたる其身の規模とや申すべし。

滿仲　扨は汝の一子たる、幸壽丸を立てたるか。

仲光　即ち其年御同齡にて雪と墨にはござりますれど、聊か面ざし似たるを幸ひ、彼の首級を討ちまして、お役に立たせてござりまする。

滿仲　すりや、一人の嫡子をもつて、

〽はツとばかりに誠忠の底意を感じ死を悼み、歎息してぞおはしける。次郎信行爰なりと、

ト此内滿仲よろしくこなし、信行思入あつて、

信行　お聞きありしか知貫どの、是ではよもや其許には、よも安穩ではをられますまい。

知貫　いや〳〵、拙者あの節に君命うけて其首級實檢なさばそれと知れ、仲光殿を不忠なりとあしく申しも致さぬが、忠義を思ふ所存より、思はぬ粗言を申してござる。

〽面目なげに控ゆれば、源信詞を改めて、（ト合方きつばりとなり、）

源信　元より聰明叡智なる御性質故我方へ、參られしより御悔悟あつて忽ち染衣のお身となられ、難行苦行の功積り、源賢阿闍梨となられしかど、御勘氣御免なき内に是へいざなひ候は近頃麁忽に似たれども、御修行勤仕のありさまを見せ參らせん其爲めに、扨こそ御猶子滿成どのゝ替りになるべき御養子ありと、方便をもち此お席へ、呼出しお逢ひを願ひしなり、希くば太守にも先に縱逸無慚なる御所業ありし罪惡は仲光父子が忠義にめで、過を源賢が修學に償ひ、御許容あつて御親子の御對面なし下さらば、野僧の悦び是に過ぎず。御承引なし下さるべし。

〽詞すゞしくとう〳〵と道理を說いて執成せば、太守も感涙おし拭ひ、

滿仲　は、ッ、御懇切なる御仰せ、扨も愚息の其爲に斯迄賢慮を勞し給ひ、勘氣の赦免を願はるゝは實に恐れ多きことにこそ。又仲光が忠膽はいへば更なり幸壽丸が、義心の程は稀にして程嬰杵臼が故事もなどか是には及ぶまじ。然らば末子美丈丸は縱逸の罪輕からねば、法令によつて既に誅し、今改めて碩學の聖をもつて末子となし、親子の對面致し申さん。

仲光　すりや、御親子の御對面を、御許容に相成りしとや。

源信　それにて野僧の望みも足り、

仲光　愚臣に於ても身の本懷、

知貫　お席につらなるわれ〳〵も、

信行　是に過ぎたる悅びなし。

仲光　有難く存じ、

皆々　奉る。

〽僧都が悅び仲光もそゞろ涙に感佩し、皆一同にひれ伏したり、（トみな〳〵よろしくこなし、）

〽かくと早くも次の間へ、もれ聞えてや操御前、御悅びのあまりより襖押明け出たまふを、

侍女が左右にすがり留め、

ト此内上手の襖をあけ、御臺は襠裝にて走り出るを、幕明きの侍女四人出てよろしく留め、

紅梅　御許容ありしとお聞き遊ばし、お心はやるはお道理ながら、

小櫻　我君さまのお詞を、伺ひし上御ゆるりと、御對面を遊ばしませ。

若葉　殊にお目さへ御不自由にて、お怪我があつては一大事、先づ〳〵お下にゐらせられませう。

〽言ひさとされて流石にも、はやる心を取直し、（ト操御前よろしく下に居て、）

操　これはわらはとしたことが、あまりのことの嬉しさに、君の御前もかへりみず、無禮はお許し下さりませ。

〽恥かしさよとひれ伏せば、太守はさこそと打笑みて、（トよろしくこなしあつて、）

滿仲　扨は御臺も今日の、此の悦びを洩聞きしか。（ト替つた合方になり、）

操　女房共の知せにより、夢ではなきかと疑ふ程飛立つやうにござりますれど、四年此方泣きあかし、雙眼共に見えざれば死せしと思ふ美丈丸が、いかなる僧になりすまし、此座へ參つてをることか、見るに見られぬ盲目の悲しみあれど悦びの、是に過ぎたることもなし、せめて御前へ願ひし上手探りにだも美丈丸に、對面したく存じまして、御沙汰も待たず此席へ走り出ました無作法は、お許しなされて下さりませ。

滿仲　是と申すも仲光の類ひ稀なる忠義といひ、源信僧都の御丹精、そちよりも猶お禮を申せ。

操　仰せの如く仲光が忠義と申し御導師の源信僧都の御丹精、お禮は詞に述べ難し、分けて詫びねばならぬのは、誠忠義の仲光と神ならぬ身の知らざれば、情なき者と内實は恨んで居たが恥かしや、わらはゝ猶子滿成や末の男子の美女丸を失ふとても都には、家の世繼の賴光が守護職をして存命ゆゑ、歎きの中に賴みあり、仲光事は次男もなくたつて一人のいとし子を、身代りに立て四年越し不忠と呼ばれそしりを受け、ぢつと辛抱しやつたは、わらはにまして百倍の其悲しみは思ひやる、嘸や幸壽の母親も歎きかなしみ此樣に、泣きつぶす程雙眼に淚の絕間がなかりしならん、恨みし罪はこりや仲光、どうぞ許してくりやいなう。

〽聲の聞えし方さして、詫入り給ふ御風情、勿體なしと氣をはげまし、

ト雙方よろしくこなしあつて、

仲光　あいや其儀は改めてお詫あるには及ばぬこと、元より武門の家にては君のお爲に御馬前にて、一命捨つるは身の本懷、臣たる者が我君の御身替りにたちまするは望む所の儀でござれば、若年なれど幸壽丸は父に勝りし果報者、それと御存じござりませねば、御臺さまには仲光をお恨みありしも實に理り、されば再び若君の此世にいでさせ給ふ節、仲光父子が心底もいつかは知るゝ期も

あらんと、それのみ祈りをりしかど、只殘念に心得しは麁忽に附入り日頃よりふくみし遺恨を晴らさんと、仲光こそは不忠不義假令君命なればとて、正に主君の若君を討ち奉つるは人非人、なぜあの節に若君を落し參らせ御主君へ、申譯には切腹なし、相果てざりしか未練者、我に若君お預けあらば一命に換へ助けしにと、世上へふれて惡ざまに讒言なせし者ある由、それもやう〳〵堪へ忍び、三年が間不忠と呼ばれ、憂き年月を過せしも、今ぞ汚名が晴れてござる。

〽兵部へ當て仲光が、述懐なせば信行もさこそと見やる知貫は、赤面なして控へ居る。

ト此内仲光知貫信行よろしくこなし、

源信　餘事は差おき御父君の御勘氣御免になる上は、源賢阿闍梨も是へ進まれ、改めて對面あられよ。

操　して〳〵美丈丸はいづれにをるや、母に近付き其様子を、採らせてくりやいなう。

源賢　はゝツ御痛はしき其有樣、御勘氣御免になればとて、不孝の罪の輕からず、いかでお側へ參られませうや。

源信　いや御遠慮には及ぶまじ、是へ進んで御母堂の、今度の御不幸悼まれよ。

〽藥師のさとしに源賢も、おづ〳〵前へ進みいで、（ト源賢前へ出て、）

源賢　父君お許し下さりませ。母君愚僧が大罪は、御容赦なされて下さりませ。

〔言ふ聲しるべにさぐり寄り、（ト操御前源賢の方へ進み寄り、よろしくあつて、）

操　おゝ美丈丸かなつかしや、よくぞ此世に居てくれしぞ。

源賢　母君お許し下さりませ、わづか三年の間にも其御苦勞の見えまするは、お頭さへも半白に、御顔の瘦せし上、あいろわからぬ御眼病、是も愚僧のなせる業。

操　いや、そちばかりの業ではない、三年此方泣きあかし目を煩ひし其上に、又も先日滿成が、病死なしたる愁傷の重なる歎きに双眼共、皆目見えぬ盲目となり、不自由な身とはなつたのぢや。

源賢　其兄君は御病死ゆゑ是非ないことにござりますれど、愚僧は放逸無慙にして、父君の仰せにそむき出家を嫌ひ、殺生を好みし故に御勘氣の、身となるのみか仲光の一子幸壽丸に死を遂げさせ、父は勿論母君に永のお歎きかけたるは、不孝の上の此上なし、是ぞ五逆の大罪にて、九つの世は替るともいかで罪の滅すべき、御罰の程も勿體なし。

操　目に見えねども、音聲迄以前に替る樣子といひ、麻の衣を身に纏ひ綿布の衣服剃髮のつむりはさこそあるべきが、顔のやつれは探りても手先に知れる頬の瘦、今物蔭にて知貫の詞の樣子に聞取りしも、三十路前後の年配にて、顔の色さへいと黒く、美丈丸とは思はれずと、言ひしも理りそなたにも、いかい苦勞をしたことぞ。

〽撫でつ探りつ其末は泣くより外ぞなかりける、果しなければ滿仲公、わざと御臺をはげまして、

ト此内源賢操よろしくこなし、滿仲思入あつて、

滿仲　やあ果しなき其繰言、對面濟みなば御臺には、元の席に直られよ。それ女房共、心得しか。

四人　はッ。

〽君命出でゝ是非もなく、侍女が誘ひ元の座へ、御臺を直し附添へば、源賢も又座を下り、威儀改めて控ゆれば、

ト此内双方よろしくあつて、

滿仲　あいや源賢阿闍梨とやら、今日是なる源信僧都の御媒介下されしゆゑ、三年以前に父にそむき縱逸の擧動をなせし不行跡なる末子に換へ、御身を改め養子となし、親子の對面致すなり、是佛門の功積りしといへど、僅の間に聖となりしは全く僧都の御丹精、附いては仲光親子の者が誠忠に依る所なり、申す迄もあらざれど、其の身の五體は源信僧都、又仲光幸壽のものと思ひ、一生はおろか後世迄も、膽に留めて忝なしと、必ず徒に思ふまじ。

〽それと言はねど難行の苦心は見ゆる面影の、變りてわづか三年の星霜經しも碩學に、滿つ

れば老の位も備はり、源賢父を拝謝なし、

ト滿仲源賢よろしくこなしあつて、

源賢　はヽツ御諚の如く拙僧も、美丈丸と言ひし前の世には、父君の意にそむき中山寺へ參りても出家を嫌ひ狼籍なし、民屋商家の童等を或は打据ゑ殺害なし、放逸日々に增長せし故、父の御勘氣蒙りて御成敗に相成りしも、爰に忠臣仲光の一子幸壽のかばねをかり、再び此世へ生を得て前世の罪を償はんと、やゝ發心の念起り源信僧都の敎へに付き、修學の道へ分入つて學習なしたる甲斐ありて、わづか三年の修行にて父の御前で改めて御免の御沙汰を伺ふこと、正に幸壽が功成りて身の幸ひとなりつるも、源信尊師と仲光が忠義の蔭と有難く、拝謝致してござりまする。

源信　よくぞ言はれし源賢どの、幸壽丸こそ再生の大恩人とや賞すべし。

滿仲　我もあの節幸壽丸が首級なりしを知らざれば、久しく見えぬはいかゞせしぞと、父仲光に問ひし折、所勞といつて又候や詞にごりてみまかりしと、答への齟齬を致せしも、愁傷ゆゑと察しやり不便なことをせしことゝ、子を先立てし身にたくらべ、悲歎にくれしことありしが、思ひきや美丈丸の身代りに立ち死せしとは不便といふも餘りあり、せめて幸壽が菩提の爲め最期の節の樣子を聞き、源信僧都の御導師にて、法會を營み遣はしたし、仲光それにて申し述べよ。

〽いと有難き御上意に、懷中探り仲光が、辭世の一首取りいだし、
ト仲光懷中より誂への短冊を出し、
仲光　其お尋ねに預りまして、御覽に入れるも子におぼれ、女々しきながら最期の節、彼が認め殘しました、手爾葉拙なき辭世の一首、御一覽なし下さりませう。
操　すりや幸壽丸が其節に、辭世を認め殘せしとな。
滿仲　いかなる一首か、これへ持て。
源賢　はツ、
〽捧ぐる短冊源賢が、父の前にと取次げば、滿仲御手にふれ給ひ、（トよろしくあつて、）
滿仲「君が爲いのちにかはる後の世の、やみぢをてらせ山の端の月、」
源信　はて適れなるその讀みぶり、
源賢　わづか十五の若年にて、最期の際に至りても、
信行　心動せず腰折の、一首を認め殘せしは、
知貫　跡にて父の仲光どのが添削ありしものなるか、あまり手爾葉が出來過ぎ申した。
滿仲　いや、添削をなさゞること、彼の手跡に我知つたり。はて適れなる此の水莖。

操　定めてかゝる辭世迄、殘すほどでは尋常に、最期を遂げしことならん。

信行　追悼なれば仲光どの、そのあらましを此席にて、仰せ聞けられ下されよ。

ト是より横笛の入りし床の合方になり、

仲光　さればにござる、其刻嚴命受けて歸る途中、幸壽丸を御身代りに立てんと決心なしたる故、歸邸の上にて其事を申聞けんと思ひしが、いまだ小兒に等しき悴、彼が心底いかゞやと態と若君を討つたりと、事を設けて僞りしに、など御身代りに立てぬとて我に恨みを申せしゆゑ、實は横川へ落し參らせ、汝をもつて御身代りに立つる父の所存なるが、得心なすかと申せしに、君に代つて臣下の者が一命捨つるは本懷なり、悅ばしきことなれば疾く首打つて給はれと、其潔き詞にめで、母なる者へ今生の名殘をさせんと申せしに、女性のことゆゑ母人に最後の名殘致しなば、却つて不孝の歎きをかけん、跡にてよしなに傳へくれよと暇乞をも致さずに、それなる辭世を書殘し、心亂れず某が猶豫をはげまし諸肌ぬぎ、刄を腹へ突立てゝ、形の如くの切腹に介錯なして首級を上げ、君の御前へ取急ぎ持參致してござります。

〽ありし次第を物語り、鼻打かみてひれ伏せば、（ト仲光よろしくこなし、）

操　テモ適れなるその最期、母も跡にて其由を聞きたる節はどの樣ぞ、身に覺えあるわらはゆゑ、人

事なりとは思はれず。
源賢　我はそれには引きかへて、たゞ縱逸に增長なし、かゝる忠孝なるものを身代りとせし罪深し、せめて幸壽が菩提の爲いづれの地へか一宇を建て、忠孝山小童寺と寺號を唱へ末世まで、幸壽の美名を殘させん。
滿仲　おゝそれこそはよき追善、まつた仲光一人の愛子をうしなひ忠臣の、後なからんも不本意なれば忌日に當る滿茂が、わすれがたみの松景子三歲にして孤兒となりしをもつて仲光の、養子になしたく存ずるが、家名を嗣かする心なきや。
仲光　はゝッ、思ひがけなき御仰せ、いかで御辭退申すべき、冥加至極にござりまする。
滿仲　得心なれば多田の莊、波豆川の鄕百余町の、美田を割つて與ふべし。
知貫　やゝ、まだ其上に所領迄。
信行　是と申すも忠義の功し、
仲光　重ね〴〵の御賜物、有難く存じ奉りまする。
〽時しも奧に伶人の、奏す舞樂も萬秋樂、
ト此時下座の音樂になり、

操　法會は疾に終りしに、
紅葉　御本堂にて、
四人　あの音樂。
滿仲　扨は今日召寄せし伶人共が仲光の、此幸福を祝せしか。
源信　まことに今日ぞ埋もれし、忠孝の名の輝きて、
源賢　末世の鏡水面に、黄金の砂うつるが瀨、
信行　ほまれを揚ぐる旗指山、
操　打寄る浪の鼓が瀧。
仲光　其名所も多田川に、たゞ〳〵祈る君の御武運。
滿仲　然らば仲光盃なさん。
仲光　すりやお盃を、此お席で。
滿仲　一家のかためを致すであらう。
仲光　何から何まで。
知貫　思へば〳〵。（ト息込むを）

仲光　有難く存じ、

ト知貫を見返り、につたり笑ふを木のかしら、

奉りまする。

ト平伏する、滿仲もにつたり思入、此もやう右の音樂にて、皆々引張りよろしく、

ひやうし　幕

仲　光（終リ）

一河の流の主従に
浪士洲崎と女房が忠義にこゝろ
筑紫琴其爪音も高田の里
處女撫子が敷島の言譯
一樹の影の雨宿に
勇士豊島が討死の紀念にのこす
觀世音其靈驗に姿見の橋
太田道灌が戰場の物語

飮の德惠の山吹

『太田道灌』は明治二十年三月、作者七十二歳の時、新富座に書卸された。これも活歴の一つであつたが、たゞ錦繪のやうに、美しい舞臺であつたといふにとゞまり、後復演せられたことのないものである。田村成義氏編の「續歌舞伎年代記」に次のやうなことがある。「中幕に左團次が勤むる太田持資の射小手に緋無地の精好を用ひしに或る好古家の曰く、道灌が賤の女に山吹の枝を出されて恥をかき夫から和歌の稽古を始めたと云ふは勿論俗說ならんが假りにあつたとして考へても三十歳以上なるべし、然るに緋無地の射小手は十四五歳より二十歳位迄を止りとするもの故穩當なるまじと繪卷物古畫等を引證して左團次に示しければ、優は早速地紋に模樣あるものに取替へ、又冠る笠も相違の處がありとて十日程前よりあやゐ笠に改めたりと。」これで見ても、當時の考證に對する態度も察せられるし、活歴物といへば、好古家の研究穿鑿の的となつたことが想像される。

書卸しの時の役割は、市川左團次(太田道灌)、市川小團次(百姓畑作實は洲崎七郎貞能)、澤村源之助(賤の女おむら實は豐島の息女撫子)、市川升若(畑作女房お秋實は七郎妻小澤)、市川荒次郎(安達三郎景家)、大谷門藏(治部少輔重賴)等であつた。——挿繪にしたのは、國周筆の錦繪である。

大正十四年四月　　　　校　訂　者



歌徳恵山吹（太田道灌――一幕）

高田里賤家の場
同道灌物語の場
（竹本連中）

〔役名――太田道灌持資、百姓畑作實は洲崎七郎貞能、治部少輔重頼、安達三郎景家。賤の女おむら實は豊島の息女撫子、畑作女房おさわ實は七郎妻小澤、其他。〕

（高田里賤家の場）――本舞臺一面の平舞臺上の方に松の大樹、下の方に栗丸太の木戸、竹簀戸、上下竹の折掛垣、是れへ山吹をあしらひ、日覆より松の釣枝。總て高田の里賤家の體。爰に○△□の百姓三人象股引、草鞋、農業の拵へにて鍬の柄へ腰をかけ、摺火打で煙草を喫み居る。此見得、臼挽唄へ題目太鼓を冠せ幕明く。

○　あの太鼓は雑司ヶ谷へ、千ヶ寺參りが行くのか知らぬ。

△　此頃はめつきりと暖かになつたせゐか、法華の本場の房州から、大層人が出るやうだ。

□　今朝一組十四五人、叩き立て通りました。

○今朝といへば四ツ頃迄は、晴渡つた天氣であつたが、晝から風が東風に變り、大分雲をあけて來たが、後には一降りかゝるであらう。

△田をすき返すに水がなく、何所の村でも困つて居るから、降るならみつしり二日ばかり、大雨が降ればよい。

□爰らは土地が低いから、少し雨が降りつゞくと、直に地水が押出すから、たんと降つて貰ひたくない。

○とはいふものゝ、水車で用水から汲込むのも、隨分骨の折れた話だ。

△よく云ふ五風十雨とやらで、十日目頃に一降りづゝ雨が降つてくれねばいかぬ。

□何にしろ、降らぬ内麥畑へ肥しをやり、早く湯へでもはひりませう。

○晩に内へござらつしやい、地酒を二人に進ぜませう。

△それは何より忝い。酒と聞いては目のないわしら。

□飲まぬ先からもう鼻へ、ぷん〱匂ひがするやうだ。

○いや、意地のきたない手合だな。

ト臼挽唄になり、下手木戸の内より百姓畑作やつし裝、脚袢草鞋、百性の拵へ、鍬の先へ簑笠を結附

けて、これを擔ぎ出來り、三人を見て、

畑作　そこにござるは村の衆、息つぎの煙草でござるか。

○　おゝ、さういふは畑作どの、お前は是れから野良へ行くのか。

畑作　晝前用があつたので、今から畑へ出かけます。

△　見れば鍬へ簑笠を結附けてござるのは。

□　後には降ると見られたのか。

畑作　雲行が悪いから、八つ下りには降らうかと、天文を考へまして、蓑笠を持つて行きます。

○　それが轉ばぬ先の杖、さう用心をさつしやれば、何事も大丈夫だ。

△　こなたは高田の此里へ、近頃越してござつたから、委しいことは知らないが。

□　十五六の美しいあの娘ッ子は、妹かそれとも若い時の子か。

畑作　察しの通りあの娘は、わしが末の妹で二人の親に早く別れ、七つの年から十年此方、わしが育てましたのだ。

○　爰ら近所に珍らしい爪はづれゆゑ、庄屋殿が嫁に欲しいと言はれたが、なんと妹をやつてはどうだ。

△　息子殿は生れだち、利口な上に此村で、一と云はるゝ好い男、
□　庄屋殿と縁を組めば、新參者も古參同樣、肩身が廣くないますぜ。
畑作　それは何より有難いが、あの妹は小さい折、親類内へ遣るつもりで、親父が約束しましたから、わしが自由になりませぬ。
○　假令約束があらうとも、お娘の出世になる事ゆゑ、
△　先方を斷つて、庄屋殿へやらつしやい。
□　わしらも是れが整へば、酒がたらふく飲めますわ。
畑作　妹が出世になりますとも、親の詞は背かれませぬ。
○　はて、正直な畑作殿、今時こんな、
三人　人はない。（ト畑作空を見て、）
畑作　いや大そう空が曇つて來ました、降らぬ内に一仕事、畑をうなつて來ますから、御免なされて下さりませ。
△　わしらも長く休息しました。
□　早く野良へ行きませう。

畑作 左様なれば、皆の衆。

○ 晩に話にござらつしやい。

畑作 有難うござります。（ト鍬を擔ぎ）どれ、行きませうか。

ト臼挽唄になり、畑作は花道三人は上手へはひる。時の鐘、床の淨瑠璃になる。

〽治に居て亂を忘れずと、遊獵を名に近鄕の山林田畑巡廻なす、太田道灌持資が從者を連れて狩くらに、携ふ弓の弦卷や、茂る矢竹の目白臺。

ト此内小皷をあしらひ、花道より太田道灌惣髮捧茶筅の鬘射小手、達附、むかばき、馬手ざし、附太刀狩座の拵へ、騎射笠を冠り、弓を携へ出來り、治部少輔重賴ぶつさき羽織、達附、大小、草鞋、安達三郎景家同じ拵へ、從者四人達附、大小、草鞋にて附添ひ出來り、花道へ留り、

道灌 今朝空も晴れ渡り、春の日影の長閑ゆゑ、此近鄕を巡見かたぐ、小鳥狩に赴きしが、巳の刻過ぎより打曇り、俄に替る雨催ひ、

重賴 折角君の御遊獵も、今にも降らん此の空合。

景家 幸ひ向ふの大樹の松、枝葉も茂りをる樣子。

從一 暫くあれなる木の許にて、

從二　御休息遊ばさば、

從三　其間に雲も晴渡り、

從四　元の日和になり申さん。

道灌　何さま邊りに山吹の花の盛りは一興なり、あれへ參つて休息なさん。

〽戸墳へ渡る姿見の小橋に近く青柳の糸の春雨降り出し、高田の里の松蔭に道灌暫し休らひ給ひ、

ト此内雨車になり、道灌先に皆々思入あつて本舞臺へ來り、道灌松の下へ彳み、

重頼　遙かに望む秩父山、いまだ雲切れいたしをれば、

景家　夕暮れまでは降るまじと、思ひの外にふり出し、

從一　御遊興をさまたげ、

從二　殘念至極に、

四人　ござりまする。

道灌　急には雨も止むまじ、疾々雨具の用意いたせ。

景家　はッ、畏つてござりまする。

〽はッと心得供なせし、安達三郎こなたなる、竹の折戸へ立寄つて、
ト景家下手の門へ來りて、
此家の内へ案内申す。
〽案内なせば立出る乙女は花の紅に緣の髪を結下げて、古にし衣は纏へども、由緒ある者の身の末と言はでも知れし爪はづれ、
ト此内下手木戸より、賤の女おむら結び下の鬘、好みのやつし裝、草履にて出來り、下手に控へ、
むら　何の御用にござりまする。
景家　今日主人遊獵に此近鄕を狩り給ひしが、俄の雨に難儀いたす。雨具を借用申したし。
むら　雨具の御用にござりまするか。
景家　いかにも。
むら　はツ。
〽はつとばかりにや、暫し、乙女は思案の體なりしが、垣根に咲きし山吹を一枝手折りこなたなる、安達が前へさし出せば、心ならずも手にとりて、
トおむらちつと思入あつて、垣根の山吹を一枝折り、景家の前へ出す。景家手に取りて合點の行かぬ

思入。

景家　雨具の用を申附けしに有無をも言はず山吹を一枝手折つて出せしは如何なる譯か合點が行かぬ。

むら　御覽の通りの賤家ゆゑ、お恥しうござります。

〽跡言ひさして恥らへば、

トおむらさしうつむく、景家思入あつて、

景家　啞かと思へば口も利き返事をせぬはわからぬ奴、但しは武士を嘲弄いたすか。

〽目に角立つれば老臣の、治部の少輔重賴が、（ト景家きつとなるを、重賴思入あつて、）

重賴　いや安達殿、お待ちなされ。

景家　なに、待てとお止めなされしは。

重賴　今山吹の一枝を、乙女が貴殿へ出せしは、則ち雨具の返事でござる。

景家　此の一枝が返事とは。

重賴　此家に雨具がなきといふ、申譯でござりませう。

景家　むゝ、左樣でござるか。これ乙女、然らば雨具がないといふ、此の一枝は言譯か。

むら　お恥しうぞんじまする。

〽雨を帶びたる海棠の風情に乙女は賤ケ家へ、會釋こぼして入りにける。

トおむらよろしく思入あつて、木戸の內へはひる。

〽智勇兼備と稱されて、武には長ぜし道灌も、文には淺く山吹の乙女が心悟り得ず。

ト道灌合點の行かぬ思入にて、

道灌　今の乙女が山吹のその一枝を出せしは、いかなることかと存ぜしに、重賴心を察し得て、雨具がなきかと申せしは、定めて仔細のあることならん。仔細を我に語り聞かせよ。

〽仰せにはッと跪き、（ト重賴思入あつて、）

重賴　乙女は和歌を嗜み居るか、此山吹を申譯に、一枝手折つて出せしは、古歌の心にござりまする。

道灌　なに、古歌の心と申すのは、

景家　いかなることか我君へ、

從一　疾く〳〵申し、

四人　あげられよ。

重賴　それぞ則古き歌に、「七重八重花は咲けども山吹の、實の一つだになきぞ悲しき」と、花は咲けども山吹は實を結ばざるものゆゑに、雨具の蓑に准へて、みのゝ一つだになきといふ申譯にござり

ます
〽古歌の心を說諭せば、道灌はたと小膝を打ち、乙女が才智に感じ入り、
ト道灌よろしく思入あつて、
道灌　あら面目なき事なるかな。我亂世に人となり、壯年よりして武を勵み、文に疎く、殊更に和歌の道を心得ざるゆゑ、乙女が心悟り得ず、今日重賴供なさずば、末世へ恥辱を殘すであらう。さるにても今の乙女はいかなる者の娘なるか。いと奥床しき事なるぞ。
重賴　仰せの如くその身には、古びし衣を着せども、詞の賤しからざるは、由緒あるもと存ぜられます。
景家　我々共が存ぜざる、和歌を以て答へしは、
從一　以前は姫とも云はれし身か、
從二　素性を問ひたきものでござる。
〽道灌空を打仰ぎ、（ト思入あつて、）
道灌　未だ雨もやまざれば此家を借りて休息なし、元何者にありつるか、事に准へて問ひ糺さん。
重賴　すりや我君には賤ケ家にて、御休息遊ばしまするか。

道灌　その方参つて宿りを求めよ。
重頼　畏つてござりまする。
〽主命受けて重頼が、簀戸押明けて入りにける。（ト重頼辞儀をなし、下手門の内へはひろ。）
〽跡見送りて道灌が。
道灌　鄙に稀なる爪はづれ、正しく乙女はよしあるもの、いかなる者の胤なるか素性を早く知りたいものぢや。
〽宿り求むる重頼が返事を松の木の許に、暫し休らひ、
ト道灌思入、時の鐘三重にて此道具廻る。

（道灌物語の場）――本舞臺三間の間四枚飾り、常足の二重、正面暖簾口、上手張交の襖。下手鼠壁、是れへ琴立掛けあり、上の方跡へ下げて障子屋體、下の方葺下しの下家、繩簾、三尺鼠壁ひしぎ竹の羽目、二重下手に圍爐裏、是に鑵子掛けあり、傍に茶棚、これに茶道具載せあり、此前におむら住ひ、畑作女房お澤結び下の鬘、やつし裝、世話女房の拵へにて二重の端に住ひ、平舞臺下手に重頼立掛り居る。此見得三重にて道具留る。

〽軒端いぶせき賤ケ家の、椽ばな近く進み寄り、案内乞へば女房が立出で、

お澤　見受けますれば御武家樣、何の御用でござりまする。

重賴　今日主人小鳥狩に此近鄕へいらせられ、思ひがけなき村雨に、ほとんと難儀いたすゆゑ、雨具の無心申せしが、みの一つだになきといふ、乙女がみやびの斷りに、松の木蔭に休らひ給へど、小止むけしきもあらざれば、雨具を持參いたす迄、當家を借用いたしたし。

お澤　それはお易き事なれど、御覽の通りの佗住居、壁は落ち疊は破れ、全く見苦しうござりますれば

重賴　いや〳〵それは苦しからず、暫しの內の御休息、決して心配いたさるゝな。

お澤　それさへお厭ひなされませずば、いつ迄なりと此家にて、御休息なされませ。

重賴　然らば借用いたすでござる。

〽言ふ聲もれて外面より、道灌先に入來る從者、それと見るより上座へ花莚敷いて敬へば、草鞋の紐もとく〳〵と、設けの席へ坐し給ふ。

ト此內下手より道灌先に、景家四人附き出來り、お澤花莚を上手へ敷き、道灌緣へ腰を掛ける。景家草鞋を解き、道灌花莚の上に住ふ。重賴、景家は草鞋をぬぎ左右へ住ふ。四人は上手本舞臺へ居並ぶ。

〽女房は下座に手をつかへ、（お澤下手に手をつき、）

お澤　見上げますれば御大身樣、かゝるいぶせきあばら家へ、暫しの內とは申しながら、御休息遊ばし

ますするは恐れ多うござりまする。

道灌　俄に降り出す村雨に、宿りを求むる家もなく、餘儀なく無心を申せしぞ。暫らく爰を貸してくれよ。

お澤　お受け申すも勿體ない、冥加に餘る其お詞。

〽高位を敬ひ辭儀なせば、乙女は爐邊に湯を試み、茶筅そうじもしとやかに、手前優しく茶を立て、昔床しき緋袱紗に、茶碗を載せて差し出せば、

ト此内おむら下手爐の前にて茶を立て、緋袱紗に載せ、道灌の前へ出し辭儀をなし、

むら　不束な手前ながら、召上つて下さりませ。

道灌　こは何よりの馳走なり。

〽茶碗をとりて道灌が、禮儀正しく喫み終り、（ト道灌茶碗をとり、よろしく呑む。）是れは至極の服加減、乙女が手前感心いたす。

〽道灌邊りを見返りて、壁に立てたる琴に目を附け、

見ればあれに琴があるが、かゝる邊鄙の賤ケ家に、似合はしからぬみやびな品、これなる乙女が學ぶのか。

お澤　お目立ちまする上からは、何をお隠し申しませう。まだ十代のその折にさるお屋敷に私が御奉公をいたしましたが、姫さまのお相手に琴を學びましたゆゑ、これなる妹へ教へますので、琴を所持して居ります。

道灌　薄茶の手前が勝れし上は、琴の調べもさこそあらん、雨の晴れ間を待つ間、是れにて一曲所望いたす。

むら　思ひもよらぬその御所望、賤が拙き調べをば、何とてお聞に入れられませう。これはお許し下さりませ。

重頼　能ある鷹は爪を隱すと、卑下なす心ぞ奥床し。

景家　雨の調度の參る迄、是非とも君へお聞きに入れよ。

むら　それぢやと申して。

從一　辭退は返つて、

四人　失禮なるぞ。

お澤　折角のお望みゆゑ、仰せに隨ひお聞きに入れや。

むら　左樣なれば恥かしながら。

〽かたへの琴を取出し、調べやさしき十三の調子合せて掻き鳴らし、

ト此内お澤琴をとつて、おむらの前へ直す。おむら爪をはめ、調子を合せる。

景家　用意がよくば、とく〱、

四人　調べよ。

むら　はツ。（トこれより誂へ獨吟の琴唄になる。）

琴唄〽世の中に水の流れと人の身は、浮沈みあるはかなさよ。〽花の盛りに愛られし、櫻も風に散行けば、誰か見かへる人もなく、〽物憂き秋に散り殘る、照葉もいつか落葉して、袖に時雨や雪霜を凌ぐも春の日の影に、花咲く時を待ちやしつらん。

道灌　ほゝお、唱歌といひ調べといひ、都人も及びなき乙女が箏曲感心なるぞ。

むら　身に餘りしその仰せ、有難う存じまする。

〽琴かい遣りて控へれば道灌は打うなづき、

トおむら琴を彈きしまふ。

道灌　乙女に褒美を遣したいが、路次の事故合紋に、火打袋を遣し置く、明日にも屋敷へ持参せよ。褒美の品を遣はさん。

〽火打袋を重頼へ、渡し給へば取次ぎて、
ト道灌火打袋を出し重頼へ渡す、重頼受けとりて、

重頼　君より下さる褒美の合紋、有難く頂戴せよ。（トおむらに渡す。）

むら　拙き調べが御意に叶ひ、思ひがけなき此御褒美。
〽冥加にあまる賜物を、姉も共々悦びける。（トおむらお澤悦ぶ思入。）
〽雲の晴間に畑作が、歸る我家に大身の客人あるはいぶかしと、暫し門邊に窺ひ居る。
ト下手より以前の畑作出で、思入あつて竹垣の蔭に窺ひ居る。

お澤　伺ひまするも憚りあれど、拙き琴が御意に叶ひ、姉へ下さる御褒美の火打袋の合紋を、持参いたす御屋敷は、何れいづくでお名前は、何と仰せられまする。
〽恐る〳〵伺へば、安達三郎進み出て、

景家　其方どもは知らざるか、君は當國千代田の城主、太田道灌持資公。
〽聞くに兩人恂りなし、（トお澤おむら恂りなし、）

お澤　さては當國千代田の御城主、

むら　太田道灌殿なりしか。

〽さてこそ敵と立掛る、乙女を暫しと止むる女房、門に窺ふ畑作が、内へかけ入り引止め、

トおむら立掛るを、お澤留める、畑作つか〳〵と出ておむらを止め、

畑作　あこれ、御大身の御方へ、無禮があつては濟まざるぞ。

むら　それぢやと云ふて、

畑作　はて、せく所ではあらざるぞ。

〽目顔で知らせ止むれば、重頼こなたへ打向ひ、

ト畑作おむらをぢつと留める、重頼思入あつて、

重頼　左言ふは此家の主人なるか。

畑作　仰せの如く當家の主人、畑作と申しまする農民でござりまする。

重頼　見受けし所其方が、人品骨格すぐれしは、農民なりと申せども、以前は武士であらうがな。

畑作　いえ、私は生れ立より田家に育ちし者でござる。

〽言はせも果てず、氣早やの安達、

景家　やあ、包み隱すは怪しき奴、武士か武士にあらざるか、此三郎が試しくれん。

〽小腕とつて引立つるを振拂つて身を沈め、武士も及ばぬさそくの早業、寄りつく事もならざ

れば無念ながらもためらふ安達、重賴さこそと推察なし、

ト景家畑作を引附けて、ちよつと立廻り、振拂つてきつとなる。重賴是れを見て膝を打ち、

重賴　かゝる手練のある上は、農民ならぬたしかな證據、武士に相違あるまいな。

〽星を指されて是非なくも、

畑作　かくお目立ちまする上からは、今は何をか包み申さん、世に落ちぶれし武士の、なれの果でござりまする。

重賴　して、それなるは妻なるか。

畑作　いかにも、妻にござりまする。

重賴　して又乙女は娘なるか。

畑作　いえ、娘にはござりませぬ。拙者が扶助を蒙むりし主人の息女にござりまする。

〽主人と聞いて道灌が、心に思ふよしありて、（ト道灌思入あつて、）

道灌　最前雨具の斷りに、古歌に准へて山吹の枝を出せし才智と云ひ、琴の調べの妙なるは、姫と言はれし身の果ならん。雨の宿りも他生の緣、仕儀によらば道灌が力となりて得させんほどに、世にある時の姓名を、包み隱さず名乘るべし。

〽仁愛厚き道灌が、詞にあるじは戸棚より、一腰携へ座を占めて、
ト畑作戸棚より一腰を出し、元の所へ住ひ思入あつて、
畑作　智仁勇の三徳を、兼備の噂ある道灌公の御厚情に、世にありし時の姓名を唯今これにて申上げん。
重頼　すりや姓名を名乗るとか。
畑作　その前方に道灌公へ、一つの願ひがござりまする。
景家　なに我君へ願ひとは。
畑作　御約束の御褒美替り、拙者の望みがござりますが、お聞き届け下さりまするか。
道灌　身に叶ひし事ならば、聞届けてつかはさん。してその方が望みと申すは。
畑作　道灌殿の御首級を、お貰ひ申したうござりまする。
皆々　や、
畑作　御聞届け下さりませ。（トきつと言ふ）
〽容易ならざる一言に、
景家　怪しき奴と思つたが、さてこそ曲者、油断すな。
四人　心得ました。

〽従者が前後を取圍めば、道灌自若として、（ト四人畑作を取卷く、道灌思入あつて、）

道灌　望みとあらば我首級、遣はすまいものにもあらず、何者なるか世にありし其姓名を名乘るべし。

畑作　今は何をか包み申さん、かく申す某は當國豐島の住人なりしが、豐島彦五郎重員が家臣洲崎七郎員能、まつたこれなるは主人の息女、

むら　撫子と申しまする。

お澤　又私は七郎が妻、小澤と申しまするもの。

道灌　さては先年石濱の合戰の折、討死ありし豐島殿の家族なりしか、思ひがけなき此對面、能くも無事にてあつたるぞ。

〽いふに七郎詰寄つて、

七郎　今更申すも涙の種、我は其折不快にて、殘念ながら領地に止まり、大事の御供仕らず、既に主人は石濱にて、討死ありしと承り、殉死なさんと存ぜしが、それなる妻に止められ、主人の形見姫君の御供なして一先づ落のび、守育てるが死に勝る忠義なりとの異見に基き、夜半にまぎれて領地を立退き、

小澤　常陸にわらはが知邊ありて、それを便りて此年月、夫婦が艱難辛苦なし、御養育申せしも、御主

の恨みを晴らさんため。

七郎　道灌公に近づかんと、窃に當地へ立越えて、かく農民と姿をやつし、日夜神佛祈りたる、

小澤　その甲斐ありて今日測らず、此家へ入來は天の助け、

撫子　正しく父の敵ゆゑ、

七郎　此場において尋常に、

小澤　お討たれなされて、

皆々　下さりませ。

〽用意の懷劍くつろげて、道灌目掛けて詰めよれば、安達はいつたと眼を怒らし。

ト此前小澤戸棚より懷劍を出し、撫子に渡し、兩人詰寄るを景家隔て、

景家　やあ、主人に向つて敵呼はり、豊島五郎重員は、扇ケ谷に背きしゆゑ、討亡ぼせしは武門の習ひ手向ひなさば。

四人　ゆるさぬぞ。

〽刀の柄へ手を掛くれば、（ト景家四人立掛る。）

道灌　やれ待て、安達早まるな。

景家　御意ではあれど、無禮な奴。

重頼　ではござらうが主君の御諚。

景家　でも、

重頼　はて、お待ちなされと申すに。

景家　むウ、（ト景家控へる。）

〽道灌は打ちうなづき、

道灌　我を敵とねらふも尤も、左はさりながら豊島殿を、此道灌が討つたるは、定正公の嚴命なり、息女をはじめ御身などが、恨む心の晴るゝやう、討ちたる次第を語り聞かさん。

七郎　すりや合戰の趣きを、お物語り下さるとか。

道灌　最期の折の遺言あれば、それをも息女に傳へたし。

撫子　なに、父上の御遺言とは、

小澤　いかなる事か此場にて、

撫子　お聞かせなされて、

兩人　下さりませ。

道灌　如何にも語り聞かすであらう。

〽扇をとつて坐を構へ、（ト道灌よろしく扇を持ち、眞中へ住ひ、）

豐島殿には故あつて、定正公に背きしゆゑ討亡せと、嚴命下り、否み難く即刻に、七百餘人の士卒を引き、打つて出でしは文明六年。

〽暮れ行く秋の中端にして、川霧深く立籠むる、角田川原に程近き、待乳の山に陣取れば、豐島殿にも千餘騎の、人數を引いて草深き、山谷を越えて生茂る。

〽淺茅ヶ原へ押出し、翌を約して石濱の月を便りに對面なす、秋の夜長も東雲を、告ぐる烏と諸共に、登る朝日の神明宮。

〽神樂にあらで陣太鼓、打出す音にまつさきがけ、寄せ來る敵にこなたにも、今戸をさして八幡の、

山の樹木を小楯に取り、

〽今や遲しと松竝木、大門通りに數合の合戰、さしも尊き總泉寺も、修羅の街となる鐘を、

打ちたて、

〽切りたて、

亂軍の、

〽梢に紅葉うつろひて、野邊は血潮の唐紅、重員殿には唯一騎、負色立ちしを殘念と、切つて廻るを我舍弟、室田源八それと見て、

〽打つて掛れば二三合渡り合ひしが太刀投げすて、むんづと組んで挑みしが。痛手に何なく組敷かれ、

撫子　すりや父上にはその時に、室田に討たれ給ひしか。

〽撫子初め主從が、無念面にあらはれゝば、道灌扇をとり直し、

ト此内道灌物語の振よろしく、撫子、七郎、小澤思入、道灌こなしあつて、

道灌　既に危ふく見えたるゆゑ、やれ待て室田、早まるなと、舍弟を止め某が、手負をいたはり抱き起せば、

〽我運命も今日限り、早首取れと言はれしゆゑ、元より貴殿に某が恨みあつての軍ならず、扇ケ谷の嚴命に、是非なく討手に向ひしなり、今朝よりの戰に、見れば數ヶ所の深手ゆゑ、申置くことござるなら、我に傳へて切腹あれと、最期を進め申せしかば。

〽元御所方へ隨ふて、扇ヶ谷へ背きしゆゑ、今日此所で一命を、捨つるは自業自得なり、更々悔むところなし、最期に望んで未練なりと思はれんは面目なけれど、撫子といふ一人の娘、領地へ殘し置きたるが、是れのみ心掛りなり。

〽と流石勇士も恩愛の、涙の雫袖濡る丶、鎧脫ぎ捨て厨子取出し、

此尊像は家の重寶、閻浮檀金の觀世音、これを娘に讓りたし。

〽賴みといふは是れのみと、言ふも苦しき肩息に。

氣遣ひあるな道灌が、行方を尋ね尊像は、息女に渡し申さんと、言へば莞爾と打笑ひ、

〽腹一文字に搔き切つて、淺茅ヶ原の露霜と、消えし最期のありさまは、かくの通りと物語れば聞く人々は涙にくれ、むせび入りしが員能が、

ト此內道灌よろしく物語のこなし、三人愁ひの思入。

七郎 今も拙者が申せし如く、御最期の折領地に居り、委しき事を知らざれば、かく情ある君とも存ぜず、主人を討ちしは道灌殿、やがて恨みを返さんと、是れなる姬を誘うて、妻諸共に故鄕を立退き誓し常陸に世を忍び、

小澤 覘ふ敵は武藏の領主、近寄るためにはる〴〵としるべを便りて此地へ來り、高田の里の侘住居。

撫子　今日計らずも降り出せし、
〽雨の宿りに附けねらふ敵に廻りあうたのは亡き父上のあの世から、導き給ふと思ひしに、
かく情ある御方を、
お恨み申せし身の科は、
〽お許しなされて下されと、言ふを七郎引きとつて、（ト撫子よろしくこなし。）
七郎　それは今更返らぬこと、申譯は後々にて道灌公へ委しくなさん、先づ差當る主人の形見、觀世音の尊像は、君の御館にござりまするか。
道灌　頼みを受けし撫子殿に、何時廻り逢はんも知れねば、常に懐中いたしをるゆゑ、只今息女に渡し申さん。
〽袱紗包みを取出し、渡せば共に七郎が、厨子を頂き開き見て、
ト道灌懐より袱紗包みの厨子を出し、撫子へ渡す。撫子七郎へ渡す。七郎開き見て、
七郎　紛ふ方なき御家の重寶、閻浮檀金の觀世音。
撫子　再び戻らせ給ふのも、道灌樣の御情。
小澤　御禮は詞に盡されず。

三人　有難うございまする。
〽尊像共に伏拜み、悦び合ふぞ道理なる。（ト三人尊像を頂き悦ぶ思入。）
道灌　重賴近う。
〽道灌心にうなづきて、
重賴　はッ。
〽近く招きて囁けば、はつと心得懷中より、袱紗包みを取出し、
ト道灌重賴に囁く。重賴心得、懷中より袱紗包みを出し、
最前お渡し申したる、火打袋の引かえに、此一品をお渡し申す。（ト小澤へ渡す。）
小澤　すりや合紋と引替えに、これを下さりまするとか。
〽心得難く員能へ、渡せば包みを探り見て、
ト小澤包みを七郎へ渡す。七郎思入あつて、
七郎　これは多くの、正しく黃金。
小澤　かゝる御惠み受けましては。
道灌　いや豐島殿の御家族なら、詞交すも管領の定正公へ恐れあり、俄の雨に軒端をば借りし此家は

見知らぬ賤ヶ家、

七郎　え。

道灌　最前雨具の斷りに古歌に准へて山吹の枝を出せし才智を感じ、褒美の品に山吹の花に對して贈れる黄金。

七郎　すりや、此黄金を褒美として、

小澤　お惠みなされて下さりますか。

重賴　主人が厚き志し、

景家　とく〳〵受納いたされい。

三人　はッ有難う存じまする。

〽花もの言はぬ山吹の、あつき惠みに主從が、ありがた涙にくれにける。

ト三人嬉しき思入、本釣鐘を打こみ、

重賴　最早黄昏近ければ、御立あつて、

皆々　然るべし。

道灌　いかにも、歸館いたすであらう。

〽席を離れて道灌が、（ト道灌立上りて、）
幸ひ空の雨雲も、

七郎　敵とねらふ主從が、

小澤　胸の曇りも晴渡り、

撫子　西へ傾く日の影も、

重頼　高田の里の夕映に、

景家　明す素性も山吹の、

道灌　言はず語らず、

七郎　やがて目出度く、

道灌　再會なさん。

〽再會約し立出づれば、名殘りを惜しみ主從が、跡を見送る黄昏に社頭の太皷勇ましく。

ト此内道灌皆々草鞋を穿き、花道へ行く、舞臺にては三人見送る。時の太皷を打込み、道灌ふりかへり、

さらば。

〽館ハこそは。

ト三重時の太鼓にて、道灌先に皆々花道へはひる。これと一緒によろしく。

幕

太田道灌（終り）

（附録）主なる興行年表

延命院

年時	座名	名題	日當	馬吉	星右衛門	柳全	宗右衛門	幸十郎	おころ	おさき
明治十一年十一月	新富座	日月星享和政談（じつげつせいきやうわせいだん）	尾上菊五郎	尾上菊五郎	市川團十郎	中村仲藏	中村仲藏	市川團十郎	岩井半四郎	岩井半四郎
明治二十四年一月	壽座	享和文談延明錄（きやうわぶんだんえんめいろく）	坂東家橘	坂東家橘	市川九藏	中村傳五郎	中村傳五郎	市川鬼丸	中村梅太郎	中村梅太郎
大正五年九月	市村座	享和政談延命袋（きやうわせいだんえんめいぶくろ）	尾上菊五郎	尾上菊五郎	中村吉右衛門	尾上松助	中村東藏	中村東藏	尾上菊次郎	尾上菊次郎

加賀騷動

年時	座名	名題	大炊	藏人	安宅	政尾	お貞	萬助	大六	佐渡守	主膳
明治十二年十月	新富座	鏡山錦栬葉（かゞみやまにしきのもみぢば）	市川團十郎	尾上菊五郎	市川左團次	市川左團次	岩井半四郎	中村仲藏	中村仲藏	中村宗十郎	中村宗十郎

年時	座名	名題	(役1)	(役2)	(役3)	(役4)	(役5)	(役6)	(役7)	(役8)	(役9)
明治十八年二月	大坂戎座	百萬石實入金澤(ひやくまんごくみいりのかなざは)	中村雀右衛門	坂東壽三郎	市川猿之助	嵐三五郎	實川蘆鴈	中村芝之助	姉川仲藏	實川延三郎	實川延三郎
明治十八年二月	中島座	百萬石實入金澤(ひやくまんごくみいりのかなざは)	中村時藏	片岡我當	片岡市藏	岩井紫若	坂東しうか	片岡市藏	嵐冠十郎	中村壽三郎	中村壽三郎
明治二十二年五月	千歳座	鏡山若葉楓(かゞみやまわかばのもみぢば)	市川團十郎	尾上菊五郎	市川左團次	市川左團次	澤村源之助	中村壽三郎	尾上松助	市川權十郎	—
明治二十五年二月	春木座	鏡山錦楓葉(かゞみやまにしきのもみぢば)	市川八百藏	中村芝藏	中村駒之助	中村駒之助	中村富十郎	市川宗三郎	中村勘五郎	中村雀右衛門	市川猿之助
明治二十九年六月	市村座	鏡山若葉楓(かゞみやまわかばのもみぢば)	市川壽美藏	市川八百藏	市川猿之助	三桝稻丸	市川女寅	片岡市藏	片岡市藏	市川猿藏	三桝稻丸
明治卅二年十一月	歌舞伎座	鏡山千草錦(かゞみやまちぐさのにしき)	市川團十郎	尾上菊五郎	市川八百藏	市川八百藏	尾上榮三郎	—	尾上松助	尾上菊五郎	—
大正三年十月	歌舞伎座	鏡山千草錦(かゞみやまちぐさのにしき)	片岡仁左衛門	市村羽左衛門	市川八百藏	市川八百藏	中村歌右衛門	中村歌六	市川段四郎	中村歌右衛門	—

仲光

年時	座名	名題/役割	仲光	満仲	橋立	美丈丸
明治十七年四月	新富座	二代源氏譽身換(にだいげんじほまれのみがはり)	市川團十郎	市川左團次	助高屋高助	坂東家橘
明治卅三年四月	歌舞伎座	仲光(なかみつ)	市川團十郎	市川八百藏	坂東秀調	
大正三年九月	本郷座	仲光(なかみつ)	市川八百藏	市川左團次	坂東秀調	堀越福三郎

(「太田道灌」には再演なし)

大正十四年六月　八日印刷
大正十四年六月十一日發行

『默阿彌全集第十四卷』　非賣品

補修　河竹糸女

校訂
編纂者　河竹繁俊

發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田利彦

印刷者　東京市牛込區榎町七番地　竹內喜太郎

印刷所　東京市牛込區榎町七番地　日清印刷株式會社

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂

著作權者印

河竹藏版

上演、轉載等の場合は藏版者の許諾を得られ度候。



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03056 2540